Japanese Hadith Shahih Muslim

ハディース　サヒーフ　ムスリム　第3巻

アッサラーム　アライクム

　世界のムスリムが最も信頼する**ハディース**のひとつ**「サヒーフ　ムスリム」**が日本人イスラーム学徒の手により和訳され、1987 年、日本サウディアラビア協会から出版された。その後 2001 年に同協会のご厚意により、当・日本ムスリム協会で再版する機会が与えられた。このハディース集は本邦初のアラビア語原典からの翻訳であることから、特に日本人のムスリムたち、イスラーム研究者たちの間で活用されてきた。この度、広くより多くの人たちに利用してもらうために日本ムスリム協会のホームページ上で一般公開することとした。
　預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の言行録集であるハディースはアッラーの言葉を記した聖典「クルアーン」に次ぐ大切な書として、ムスリムにとっては生き方の指針となり、生活の規範となっているものである。したがってムスリムにとってはイスラームを理解し実行するために、また非ムスリムにとってはイスラームをより深く知るための文献として必須なものである。
　今日、世界に約 14 億のムスリムがいると言われ、イスラームは世界の政治、経済にも大きな影響を与えつつある。この公開ホームページを活用していただき、日本においてもイスラームへの理解と関心をより一層深めていただければと願っている。

2009 年 11 月 20 日
イスラーム暦ズルヒッジャ月
日本ムスリム協会会長　徳増公明

1.″ハディース″について

本書は、**イマーム・ムスリム・ビン・アル・バッジャージ**の著作**「サヒーフ　ムスリム」**（**ムスリム正伝集**)の日本語訳(全三巻)である。本書は、イスラームの預言者ムハンマドに関するハディース(伝承)、すなわち、預言者の言葉、行為、また、黙認事項などの豊富な採録集であり、預言者の日常を詳細に記録したこれらのハディースを通じ、信徒らはイスラームの基本条項のみならず、預言者と共に生きた当時の教友ら(サハーバ)の生活の仕様に至るまで知り得る内容となっている。

イスラーム以前から、アラブ部族間では先祖伝来の生活慣習を″スンナ″と称して遵奉する傾向があったが、イスラーム以降には、預言者ムハンマドの言動が全信徒の日常生活や信仰の有り様を示す規範とみなされ、いわば、新しい″スンナ″としての位置を占めることになった。そして、この預言者のスンナに関する知識は、クルアーンの教義同様、全信徒の共有すべき知識、つまり、ハディースとして相互に伝達され遵守されるに至った。

周知のように、クルアーンにおける啓示は信仰のみならず、信徒の生活全般にわたる広範な教説を含むものであるが、その具体的指導は預言者のスンナによって補足される必要があった。たとえば、礼拝や巡礼に関する言葉はクルアーンの中に何度も繰り返されているが、それらに伴う細かい規則についての言及はみられないので、信徒は預言者のスンナに倣って実際の形式を学ばねばならなかったのである。

このように、預言者在世の頃からハディースは信徒の実生活上不可欠な知識であったわけで、そのため預言者自身も″相互にスンナを伝達し合うように″と教友らに指示されたといわれる。ただ、預言者在命中には、不明な問題が生じた時、人々は直接預言者に問いただすことができたので、ハディースは記憶や私的な記録として断片的に保存されただけで、組織的にまとめられることはなかった。預言者没後の四大カリフ時代以降、急速にイスラーム世界が拡大発展するに伴った幾多の新しい問題や状況に対処していく関係上、初めて権威ある参考指標としてのハディースに対する全般的知識の必要性が痛感されるようになったのである。そのため、遠く征服地や新開地などに分散した教友らをたずねて預言者に関するハディースを聴聞収集する者たちが現われだした。当時、マディーナは元より、マッカ、クーファ、バスラなどには比較的多くの教友やハディースに詳しい人々が居住していたこともあって、これらの町にはハディース学習を志す多くの学徒が参集したといわれる。ハディース聴聞のため遠隔地まで苦労を重ねて旅した人々の逸話は数多く知られている。これらの篤実な学徒の研鑽や″旅″を契機として幾多の貴重なハディースは保存され、また、各地方の信徒にも広く伝播されることになったのである。

ともあれ、イスラーム世界各地に流伝するハディースの組織的編纂が試みられるのは、8 世紀以降のことであり、散逸したとはいえヒジャーズのアブドル・マーリク(767 没)、クーフアのスフヤーン・サウリー(777 没)などにより、先駆的な小ハディース集が編纂されたことが知られている。

現存する初期の重要なハディース集は、イマーム・マーリク(795 没)による『ムワッタア集』であるが、内容はハディースを題目毎に整理し、法律事典的要素を備えた体裁となっている。なお、このように題目毎に分類して編纂する方式はムサンナフ型と呼ばれ、後代のハディース編纂様式の主流となったものであるが、このムサンナフ形式に対し、ハディースを最初の伝承者の名の下に一括して記述する形式をとるものもあり、ムス

ナド型と呼ばれている。ムスナド型の著名なハディース集には、イマーム・アフマド・ビン・ハンバル(855 没)による**「ムスナド集」**がある。

後代、正伝の名を冠せられた六書は、いずれもムサンナフ形式を採るもので、小項目や簡単な説明が編者自身によって付されたものもあり、いずれも参照に便利な体裁になっている。なお六書、すなわち、六正伝集とは、ブハーリー(870 没)、ムスリム(875 没)の両″サヒーフ集″に加えてイブン・マージャ(886 没)、アブー・ダウード(888,9 没)、ティルミズィー(892 没)、ナサーイー(915 没)らの四『スンナ集』の総称である。

ハディース編纂は、これら六書に終わったわけではなく、その後も数世紀にわたって継続的に行われ、バイハキー(1063 没)、スニーティー(1505 没)などによる著名な集録も編まれている。また、イスナード(伝承者経路)を最初の語り手以外は全部省略し、マトン(本文)のみを記述する簡単な形式のハディース集も編纂されている。

ブハーリーやムスリムの両″サヒーフ集″は、内容の多様さ、また、採録に当っての真偽批判基準の厳格さによって、もっとも信頼できるハディース集としての声価を得たものであるが、この真偽についての検討はイスナードとマトンの両面から為されるのが通常であった。イスナード、すわち、伝承者の経路についての検討とは″A は B より聞き、B は C より伝えられた″という形式で、正しく最初の語り手に遡源できるかどうかについての調査を意味するが、この場合、各伝承者の知的能力、信頼度、年齢、居住地域、更には、本文を伝える伝承者経路の数も吟味された。マトンすなわち、伝承本文の検討においては、イスラームの教義に反していないか、特定の党派への偏向はみられないか、歴史事実に即しているか、などと共にアラビア語表現上の品性までも詮索されている。これらの検討を受けたハディースは全て、サヒーフ(確実なもの)、ハサン(妥当性をもつもの)、ダイーフ(典拠薄弱なもの)など三段階に分類された。ブハーリーやムスリムは、彼らなりの判定基準で、確実なハディースのみを採録したとの見解から″サヒーフ集″の名を冠したのである。

ハディースが法学上ではクルアーンに含まれる規定を補足する権威ある源泉であり、イスラーム初期の歴史研究上重要な文献となっていることは再言するまでもないが、信徒にとってはなによりもこれらの存在は、信仰への理解と預言者像への親近感を促進する大きな要素となっている。

2.著者ムスリムについて

「サヒーフ　ムスリム」の著者イマーム・ムスリムは正確には、アブー・アル・フサイン・ムスリム・ビン・アル・バッジャージ・アル・クシャイリー・アン・ナイサーブーリー(817/21～875)と呼ばれる。イランのナイサーブール(ニーシャープール)で生まれ、死後もその郊外のナスラーバードに埋葬された。四大カリフ時代、枢要な地位を占めた先祖をもつ名家の出身とも伝えられるが、詳しくはわかっていない。15 才頃よりハディース学習を志し、広くアラビア、エジプト、シリア、イラクなどを旅行してイスハーク・ビン・ラフワィヒ、アフマド・ビン・ハンバル、クタイブ・ビン・サイードなど当時の秀れた伝承学者に学んだ。イマーム・ブハーリーとも親交があり、終生、ブハーリーのハディースに関する学識を尊敬してやまなかったといわれる。

なお、イマーム・ムスリムは生涯に約 30 万のハディースを収集したと伝えられる。そのうちサヒーフ集に収められたハディースの総数は、話題別に分類した場合、3,000 余であるが、伝承者経路(イスナード)の数で計算した場合には、この 2 倍以上の数量に達するといわれる。このサヒーフ集以外にも、彼の著作や論稿は 20

数種もあり、その大半はハディースに関連したものである。なおまた、彼には多くの弟子がおり、なかにはアブー・ハーテム・ラーズィー、ムーサー・ビン・ハールーン、それに『スンナ集』の編者ティルミズィーら著名人の名がみられる。

イマーム・ムスリムのサヒーフ集の特色はイマーム・ブハーリーの収録と異なり、大題目以外には、小題目、解説の類が一切付されてない点である。現在ほとんどのテキストに大題目区分として"キターブ(…書)"、内容を説明した小題目区分としての"バーブ"がみられるが、この小題目区分は後代の注釈者の筆によるもので、イマーム・ムスリム自身が付記したわけではない。第二の特色としては、イスナードおよびマトンの記述が厳密で、人物名や表現用語上の差異に関してこまごまとした指摘がみられる点が挙げられる。
本文は、信仰、礼拝、婚姻、商取引、遺産、戦争、神学、終末、注釈論など、今回我々のテキストとした**「サヒーフ　ムスリム」**では、56 書(キターブ)に分けられ多様な内容となっている。
なお、このサヒーフ集の注釈書としては、イマーム・アン・ナワウィー(1277 没)による『シャルフ　サヒーフ　ムスリム』が有名である。

3.翻訳について

本書のアラビア語テキストとしては、エジプトの碩学ムハンマド・フアード・アブドル・バーキー校訂の「Sahih Muslim Lil-Imami Abil-Hussain Muslim」(カイロ 1955 年刊初版本)を訳出原本とし、かつイマーム・アン・ナワウィーの注釈付『Sahih Muslim bi-Sharhi An-Nawawi』(カイロ 1929 年刊)にあるハディース本文を併用した。テキスト前部には、ハディース全般に関する解題や説話の紹介が記されているが、本書ではそれらは省略され、訳出は、"信仰の書(キタ.ーブル・イマーン)"以降より始められた。

訳出に関しては、以下の諸点についても予め断っておきたい。

a)第一巻の翻訳は 3 名が分担し、人物名や地名など頻出度の多い事項の表記に関しては統一を図った。文体やいちいちの用語法は訳者それぞれのスタイルに一任された。

b)イスナード(伝承者経路)に現れる人物名を逐一列記するのは煩雑すぎるため、最初の語り手以外は省略された。この方式は、Muhammad Al-Husain Al-Baghawi(1122 没)の**「Masabih As-Sunna」**およびこれに若干の変更を加えて、1336 年頃改題、再版された『Mishkat Al-Masabih』やイマーム・アン・ナワウィー(前出)による「Riyad As-Salihin」に倣ったものである。

c)預言者、アッラーのみ使い、ムハンマドといった呼称には必ず"アッラーの加護と平安を!(サッラッラーフ アライヒ　ワ　サッラマ!)"という祈願の言葉を付すのが伝統的慣習であるが、頻度があまりに多すぎるため、訳出は省略せざるを得なかった。教友らに関する祈願についても同様である。

d)マトン(本文)表現用語の差異については、前述したように、極めて厳密な指摘がみられるが、訳語上の限界もあり、訳者それぞれの判断によって簡略化されたり、補足説明が加えられた場合がある。

e)前述したように、テキストの小題目(バーブ)は著者イマーム・ムスリム自身の筆によるものではなく、後代の注釈者らによって書き加えられたものである。それ故、これも訳者の判断で内容中心に簡略化されたところがある。

f)会話体の多いハディースでは、内容を変更しない限り、必ずしも直訳形式をとらぬ場合があった。また、理解を容易にするため、テキストにない状況説明を付加したところもある。

9)訳出に当っては、前述したイマーム・アン・ナワウィーの注釈書「**Sharh As-Sahih Muslim**」およびAbdul-Hamid Siddiqi による英訳「**Sahih Muslim**」(Lahore 1973)を参照した。なお、クルアーンについては「**聖クルアーン**」(日本ムスリム協会昭和 58 年版)を参考にした。

h)テキスト全体は、三分冊で出版されるが、第一巻においては"信仰の書"、"斎戒の書"および"ハイドの書"を磯崎定基、"礼拝の書"および"モスクと礼拝場所の書"の大半を飯森嘉助、残りの"礼拝の機会を失した時の償い"以降"旅行者の礼拝の書"までを小笠原良治が担当した。

クルアーンの日本語訳がすでに数種も存在する現今、イスラーム理解を一層深めるためには、権威あるハディース集の翻訳紹介が急務であるとの見解から、イマーム・ムスリムの"サヒーフ集"がその対象に選ばれたのであるが、訳業が実際に進められだしたのは 1984 年の夏頃からであった。爾来、非力を嘆じながらも、本業の傍ら、担当者はそれぞれ翻訳に苦心してきたのであるが、語学や表現上の未熟さ故に思わぬ誤りを犯しているかとも省みている。ささやかな我々の努力による本書が日本におけるイスラーム理解にいささかなりとも貢献できることを願うと共に、将来、これを轍としてより一層完全なハディース翻訳書が数多く紹介されることを心より期待したい。

なお、この翻訳は、日本サウディアラビア協会の浜田明夫氏、富塚俊夫氏、武藤英臣氏らの推(車篇に免)と全面的な協力によって進められた。また、和久井生一氏には翻訳文体の全般的調整をお願いした。ここに記して感謝申し上げたい。

1987 年 1 月

これまで、ハディース学、イスラーム法学基礎論、イスラーム法学におけるハディースとスンナの意味を見てきましたが、これらの議論を纏めたのが以下の表です。

学問間のハディースとスンナの比較		
	学問	定義
ハディース	ハディース学	（1）預言者ムハンマドに帰属する、あるいは （2）教友に帰属する、もしくは （3）後続世代（タービイー）に帰属する ①発言、②行為、③承認、④形容
スンナ	イスラーム法学基礎論	（1）預言者ムハンマドに帰属する ①発言、②行為、③承認
スンナ	イスラーム法学	推奨行為
※ハディース学におけるハディースはハディース・クドゥスィー、ハディース・マルフーウ、ハディース・マウクーフ、ハディース・マクトゥーウを含む。 出典：筆者作成		

ハディースは発言者毎に以下のとおり区分されます。

発言者別のハディースの区分	
発言者	区分
アッラー	ハディース・クドゥスィー
預言者ムハンマド	ハディース・マルフーウ 単にハディースと言われた場合には、一般的にはハディース・マルフーウが意図されている。
教友	ハディース・マウクーフ
後続世代	ハディース・マクトゥーウ
出典：筆者作成	

ハディースとスンナという言葉の使い方は一見すると複雑ですが、各学問毎の意味の違いを見てゆけば明晰に理解されうると思います。

（K. S. ）

統治の書

人々はクライシュに追従する。そしてカリフの地位はクライシュの特権である

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「人々はこの問題（注）においてはクライシュに追従する。

すなわち、クライシュ外のムスリムはクライシュのムスリムの規則に従い、クライシュ外の不信者はクライシュの不信者の規則に従う」と申された。

（注）カリフの地位、またはそれに関する事柄を意図する

ハンマーム・ビン・ムナッビフはアブー・フライラを根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「人々はこの問題においてはクライシュに追従する。

すなわち、クライシュ外のムスリムはクライシュのムスリムの規則に従い、クライシュ外の不信者はクライシュの不信者の規則に従う」と申された（注）。

（注）これについてクライシュの人々は、彼等がジャーヒリーヤ時代からアラブの指導者的立場にあり、聖域を管轄し、かつ、アッラーの家（カアバ神殿）の管理者としての地位を保ち続けて来たからであるとしている

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者は「人々は善においても悪においても（注）クライシュに追従する」と申された。

（注）善とはイスラームであり、悪はジャーヒリーヤを意図する

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「カリフの地位は、（たとえこの世に人間がただ）二人だけになったとしても、クライシュのものとして存続する」と申された。

ジャービル・ビン・サムラは伝えている

私は父と一緒に預言者の所に行き、その御方が「まことに、この問題は（その地位にふさわしい資格を有する）12 人のカリフ（注）が（クライシュ）から立つまでは終らないであろう」と申されるのを聞いた。

それからその御方は何か低いお声で私に言われた。
私は父に「み使いは何を申されたのですか」と尋ねた。
父は「『それらすべてはクライシュから出る』と申されたのだ」と言った。

（注）12 人のカリフに関する確論はないが、彼等がイスラームの栄光を象徴する人々であるということは確かなようである。
また、それらの中には四人の正統カリフが入ることは間違いない。
その他の八人については良く分らないが次の人々の名が上げられている。
ムアーウィヤ（661-680）、アブドル・マリク（685-705）、ワリード（705-715）、スライマーン（715-717）、ウマル・ビン・アブトル・アズィーズ（717-720）、ヤジード二世（720-724）、ヒシャーム（724-743）、ワリード二世（743-744）

ジャービル・ビン・サムラは伝えている

私は預言者が「人々の問題は、12 人の有資格者が統治する間は（順調に）推移し続けるであろう」と申されるのを聞いた。
それからその御方は私に低い声で何か言われた。
私は父に「み使いは何を申されたのですか」と尋ねた。
父は「『その人々はすべてクライシュから出る』と言われたのだ」と答えた。

前述のハディースは**ジャービル・ビン・サムラ**を拠り所として他の伝承者経路でも伝えられている。
しかしそれには「人々の問題は推移し続けるであろう」という言葉は述べられてはいない。

ジャービル・ビン・サムラは伝えている

私はアッラーのみ使いが「イスラームは 12 人のカリフまでは強力なものとして存続するであろう」と申されるのを聞いた。
それからその御方は何か私が理解出来なかった言葉を言われた。
私は父に「何を申されたのですか」と尋ねた。
父は「『それらの人々はすべてクライシュから出る』と言われたのだ」と答えた。

ジャービル・ビン・サムラは伝えている

預言者は「この問題は 12 人のカリフまでは強力なものとして存続するであろう」と申された。
それからその御方は何か言われたが、私は理解出来なかった。
それで私は父に「み使いは何を申されたのですか」と尋ねた。
父は「『彼等のすべてはクライシュから出る』と申されたのだ」と答えた。

ジャービル・ビン・サムラは伝えている

私は父と一緒にアッラーのみ使いの所に行った。

その時み使いは「この宗教は 12 人のカリフまでは強力かつ光輝あるものとして存続するであろう」と申された。

それから何か申されたが人々の声に遮られて聞きとれなかった。

私は父に「み使いは何を申されたのですか」と尋ねた。

父は「『彼等のすべてはクライシュから出る』と言われたのだ」と答えた。

アーミル・ビン・サアド・ビン・アブー・ワッカースは伝えている

私はジャービル・ビン・サムラに、彼がアッラーのみ使いから聞いたことを私に告げるよう手紙に書いて召使いのナーフィウに持たせてやった。

すると彼は返事を寄越し（その中で）「私はアル・アスラミーが（姦通罪で）投石の刑に処せられた金曜の夕べ、

アッラーのみ使いが『イスラームはその時（最後の審判の日）が来るまで存続するであろう。

または、あなた方の上に 12 人のカリフが（順次）立つであろう。

彼等のすべてはクライシュから出る』と申され、

更に『ムスリムの小隊がペルシア皇帝キスラー（ホスロー）の白い宮殿、あるいは彼の一族の宮殿を攻略するであろう』と言われ、

また『最後の審判の日の直前には数々の嘘つきどもが現れる故、それらの者への警戒を怠ってはならぬ』とも言われ、

そしてまた『アッラーがあなた方の誰かに恩恵を授けて下された時は、先ずその者自身とその家族がそれに浴すがよい』と言われ、

そして（最後に）『私はあなた方より一足先に楽園の清流の辺（ほと）りに行っているであろう』と申されるのを聞いた」と告げた。

イブン・サムラ・アダウィーは伝えている

私はアッラーのみ使いからお聞きした（と言って、前述と同様のことを述べている）

後継カリフの指名とそれの放棄に関して

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

私は父（第二代カリフであるウマル・ビン・ハッターブ）が凶刃に倒れた時その場に居合わせた。
人々は父を称賛し「アッラーがあなたに恩恵をお垂れになりますように」と祈った。
父は「私は（アッラーのお怒りを）恐れると共に（その御方の御慈悲にも）希望を抱いている」（注）と言った。
人々は「あなたの後継者を御指名下さい」と言った。
すると父は「私は死してまでも生ある時と同じようにあなた方の問題で苦しむのか。
私は（カリフの地位に関しては）私がそれによって利を得るのでもなく、また罪の責務を負うのでもなく、ただその職責のみを立派に果したいといかに願っていたことか。
それでもし私が私の後継者を指名したとすれば、それは私より立派な人物（初代カリフであるアブー・バクルを意図する）が後継者を指名した（のに倣うことになる）
そしてもし私が（後継者指名を行わず）あなた方を後にして逝けば、それは私より立派な御方アッラーのみ使い（の行われたことに倣うことになる）」と言った。
アブドッラーは「私は父がアッラーのみ使いについて述べた時、彼は後継者指名は行わないというのを理解した」と言った。

（注）この言葉はかつて預言者が「信仰は畏怖と希望のはざまにある」と信仰について述べた言葉から来たものである

イブン・ウマルは伝えている

私はハフサ（注）の所に入って行った。
すると彼女は「あなたはあなたのお父さんが後継者指名はなさらないというのを知っていますか」と言った。
私は「父がそれを行わない筈はない」と言った。
彼女は「でも彼の意志はそうなのです」と言った。
そこで私は「私は誓って、父にその問題について話しましょう」と言った。
それから私は翌朝まで沈黙を守り、父には何も話さなかった。
（この問題を口にするのは）恰も私の右手で山岳を運ぶが如き重苦しさを感じたからである。
だが意を決して彼の所に行き側に寄った。
すると父は私に人々の様子を尋ねた。
私はそれに答えた。
そして「私は人々の言葉を聞きました。

それをあなたに是非話したいのです。
彼等はあなたが後継者指名はなさらないと主張しておりますが、かりに、あなたが任命したラクダあるいは羊の牧童が家畜を放置したままあなたの所に戻って来てしまったら、その家畜は必ず散逸してしまうのは御存知でありましょう。
人々に対する心づかいはより重大な事柄です」と言った。
（死の床にあったカリフは）私の言葉にうなづき、暫くの間沈黙していたが、やがて私の方を向き「至高偉大なるアッラーはその御方の宗教を安泰にされるであろう。
それでもし私が後継者指名をしないとすれば、それはアッラーのみ使いが御指名されなかったからである。
またもし後継者を指名するとすれば、それはアブー・バクルが行ったそれに倣ったことになる」と言った。
私は「アッラーに誓って、私は父がアッラーのみ使いとアブー・バクルについて述べた時、父は、アッラーのみ使いに比肩される者は一人も無いとして、（この御方の行為に倣って）後継者指名は行わないのだということを理解した」と言った。

（注）ハフサはウマルの娘でイブン・ウマルの兄弟である

統治者の地位を請い求めてはならない

アブドル・ラフマーン・ビン・サムラは伝えている

アッラーのみ使いは「アブドル・ラフマーンよ、統治者の地位は請い求めてはならぬ。

それを請い求めた末、かりにそれを手にしたとしても、支援の手もなく孤独にされるであろう。

だが、もしそれを請わずして手中にしたとすれば、それに対する支援の手がのべられるであろう」と申された。

前述と同様のハディースは他の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・ムーサーは伝えている

私は私の従兄弟二人と一緒に預言者の所に入って行った。

その時、その二人の中の一人が「アッラーのみ使いよ、至高偉大なるアッラーがあなたに保護を託された大地の中の一地域の統治者にわれわれを御指名下さい」と言った。

他の一人もこれと同様のことを言った。

するとその御方は「アッラーに誓い、われわれはそのような地位を請う者は一人たりとその役職には任命せぬ。

またそれを切望する者も同様である」と申された。

アブー・ムーサーは伝えている

私はアシュアリー部族の者二人を左右に伴って預言者の所に行った。

その二人は共に預言者がスィワーク（歯を磨く芳香のある木切れ）で歯を磨いておられた時（一地域の統治者としての）役職を求めた。

するとその御方は「君は何を言っているのか、アブー・ムーサーよ、または、アブドッラー・ビン・カイスよ」と言われた。

私は「真理に基づいてあなたをお使わしになられた御方に誓って申します。

彼等は胸中にあったことを私には明かしませんでした。

私は彼等がその役職を求めようなどとは思いもよりませんでした」と言った。

そして彼（伝承者）は（このハディースを思い出して述べる時は）「私は、すぼめられたその御方の口にあったスィワークを見ているかのようである」と言った。

その時み使いは「それは絶対にならぬ。

または、われわれはそのようなことを望む者は公職には採用しない。

だがアブー・ムーサーよ、または、アブドッラー・ビン・カイスよ、君は行くがよい」と申されて、私をイエメンの総督として遣わされた。

そしてその御方はムアーズ・ビン・ジャバルを私のために追随させて下さった。

ムアーズが私の所に来た時、私は「こちらに来たまえ」と言って彼に客用のクッションを与えた。
その時そこに捕虜のように手足をしばられた男がいた。
ムアーズは「これは何者ですか」と尋ねた。
私は「彼はユダヤ教徒であったがイスラームに帰依した。
だが再び元の宗教、つまり忌まわしい宗教に戻り、ユダヤ教徒になったのだ」と言った。
ムアーズは「私はアッラーとその御使者の御決定に従って、彼が殺されるまでは座らぬ」と言った。
私は「よろしい。座れ」と言った。
それでも彼は「私はアッラーとその御使者の御決定に従って彼が殺されるまでは座らぬ」と言い、この言葉を三回繰り返えした。
それで私はその者の処刑を命じ彼は殺された。
その後私等二人は夜の礼拝について話し合った。
その対話の中でムアーズは「私は夜、休んでいる間に起きて礼拝を挙行する。
どうか私が起きて礼拝することで得られるのと同じ報酬が私の眠りにもありますように」と言った。

資格を欠く者が統治者の地位につくことは好ましくない

アブー・ザッルは伝えている

私は「アッラーのみ使いよ、私を公職にお就け下さいませんか」と言った。

するとそのお方は手で私の肩をお打ちになって「アブー・ザッルよ、君は（その役職に就くには）弱体である。

そのような地位は信頼に基づくもので極めて重いものである。

その地位に就くことがふさわしい者で、なおかつ、そこに有る義務を果した者以外は、審判の日、それは屈辱と後悔の因である」と申された。

アブー・ザッルは伝えている

アッラーのみ使いは「アブー・ザッルよ、私は君が（要職を遂行する者としては）弱体に見える。

まこと、私は私自身に対して好むものは君に対しても好む。

だが君はたとえ二人に対してであっても（いかに少数でも）支配者の地位に就いてはならないし、孤児の財産の責任も引き受けてはならぬ」と申された。

公正な指導者の美徳、不正の懲罰、人々への徳行の勧め、そして苛政を敷くことの禁止について

アブドッラー・ビン・アムルは伝えている

アッラーのみ使いは「公正な指導者達は至高偉大にして慈悲深いアッラーのお近くに在る輝いた一際高い箇所に座を与えられるであろう。
（公正な指導者たちは）彼等の統治においても家族関係の事柄においても、またすべて彼等が責任をもって行う問題においては公正な者達なのである」と申された。

アブドル・ラフマーン・ビン・シュマーサは伝えている

私は少し尋ねることがあってアーイシャの所に行った。
彼女は私に「あなたはどちらからお越しですか」と言った。
私は「エジプトから来た者です」と言った。
すると彼女は「あなた方の統治者はあなた方に対するこの遠征でどのように振る舞いましたか」と言った。
私は「われわれは彼等を少しも憎むようなことはありませんでした。
その方はもし仲間のラクダが死んだりしますとその者に別のラクダを与えますし、われわれの誰かが奴隷を失いますとその者には奴隷を与えます。
そしてまた誰かが困窮しておりますとその者に必要な物を与えます」と言った。
すると彼女は「確かに、私の兄弟ムハンマド・ビン・アブー・バクルには特別の待遇が与えられましたが、それとて私がアッラーのみ使いからお聞きしたことをあなたに話すのを妨げるものではございません。
その御方は私のこの家で『おおアッラー、私のイスラーム共同体の問題を少しなりと預る者がムスリム達に苛酷であったなら（審判の日）その者に厳しく対処して下さい。
そして私のイスラーム共同体の問題を少しなりと預った者で人々を親切に扱った者には良き御配慮を御願い申し上げげます』とお祈りになっておられました」と言った。

前述のハディースは、他の伝承者経路でも伝えられている。

イブン・ウマルは伝えている

預言者は「あなた方は皆保護者である。
あなた方は皆、各自が保護しているものに対して責任を負っている。
カリフは人々の保護者であり彼の庇護下にある者達の責任者である。
男子は彼の家族の保護者であり家族の責任者である。
主婦は家庭で彼女の夫や子供達の保護者であり、彼等の責任者である。
下僕は主人の財産の保護者でありそれの責任者である。

こうして、あなた方は皆保護者であり、各自は信じて託されたものの責任者であることに心せよ」と申された。

前述のハディースは数経路の伝承者経路で伝えられている。

前述と同様のハディースはイブン・ウマルを根拠として伝えられているがその一つに、**ズフリー**は「私は彼（イブン・ウマル）が『男子は父親の財産の保護者であり、彼の被保護者の責任者である』と言ったと思う」と伝えているものがある。

前述と同じ意味のハディースはアブドッラー・ビン・ウマルを根拠として別伝承経路でも伝えられている。

ハサンは伝えている

ウバイドッラー・ビン・ジヤードは、死の病に伏していたマアキル・ビン・ヤサール・ムザニーを訪ねた。
マアキルは「私は今、君にアッラーのみ使いからお聞きした話をしよう。
だが、もし私がもっと生きられることが分っていたなら、君にこの話をすることもなかったであろう（注）。
アッラーのみ使いは『アッラーから統治者としてある人々に対する責任を託された者が、それらの人々に不実の行為をしたまま死んだ時は、アッラーが彼に対して天国への道を閉ざすであろう』と申されるのを聞いた」と言った。

（注）マアキルはこの話をすることについて彼自身のことを案じていたと思われるふしがある。
例えばこのハディースの内容に間違いがあることを恐れたのかも知れない

ハサンを根拠として別の伝承者経路を経て伝えられたものには言葉に若干の相違がある。
（すなわち）イブン・ジヤードは重症のマアキル・ビン・ヤサールの所に入って行った。
この後のハディースは前述と同様だが、次に、イブン・ジヤードは「どうして君はこのハディースを今日までこの私に話さなかったのか」と言った。
するとマアキルは「確かに私は君には話さなかった。
または、私は君に話そうとはしなかった」と言った。
という付加がある。

アブー・マリーフは伝えている

ウバイドッラー・ビン・ジヤードは病に伏していたマアキル・ビン・ヤサールの所に行った。
その時マアキルは彼に「もし私に死が近いのでなかったら話しはしなかったであろうハデ

ィースを今君に話そう。
私はアッラーのみ使いが『ムスリム達の問題を掌握している統治者が人々のために努力もせず、不誠実な統治を行うならば、その人々と共に天国の楽園には入れぬ』と申されるのを聞いた」と言った。

アブー・アスワドは伝えている
私の父は私に「マアキル・ビン・ヤサールは病気になった。
そこにウバイドッラー・ビン・ジヤードが見舞いに訪れた」と話した。
（この後の謡はハサンがマアキルからの話として伝えているものと同様である）

ハサンは伝えている
アッラーのみ使いの教友の一人アーイズ・ビン・アムルはウバイドッラー・ビン・ジヤードを尋ねた。
彼はアーイズに「おお、わが息子よ（注 1）、私はアッラーのみ使いが『最悪の統治者は苛政を敷く者である。
君はそのような者達の一人とならぬよう注意せよ』と申されたのを聞いた」と言った。
それからウバイドッラーは（横柄に）「座りたまえ、君はムハンマドの教友達の中のくずの一人だ（注 2）」と言った。
アーイズは「教友達の中に藁くずのような者があったのですか。
くずはそれらの人々の後に出たのであり、それら人々以外にあったのです」と言った。

（注 1）アラブは他人の子供でも「わが息子よ」のように呼ぶことがおうおうにしてあるが、それには親愛、称賛、譴責、蔑視等の意を含んでいる。
このハディースの場合は蔑視と考えられる

（注 2）この言葉はウバイドッラーが発した全くの暴言である。
教友達は皆立派な人々であったとアラブは言う

公の財貨の横領は大罪である

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは或日(説教に)お立ちになった。

そして横領についてお述べになり、それはゆゆしき問題であり大罪であると明言されてから(次のように)お述べになった。

「復活の日、私が、あなた方の誰かが(次のような姿で)やって来るのを見るような行為をしてはならない。

それは、その者が首にうなり声を上げげたラクダにしがみつかれ『アッラーのみ使いよ、助けて下さい』と言っているが、私は『君に対してはどうすることも出来ない。

私は既に(そのようなことにならないよう)君に伝えてある』と言う(ようなことである)

そしてまた復活の日、私が、あなた方の誰かが(次のような姿で)やって来るのを見るような行為をしてはならない。

それは、その者が首に口から泡を吹く馬にしがみつかれ、彼は『アッラーのみ使いよ、助けて下さい』と言っているが、私は『君に対してはどうすることも出来ない。私は既に(そのようなことにならないよう)君に伝えてあると言う。

また復活の日、私があなた方の誰かを(次のような姿で)やって来るのを見るような行為をしてはならない。

それは彼が首にメーメーと鳴きたてる雌羊にしがみつかれ『アッラーのみ使いよ、助けて下さい』と言っているが私は『君に対してはどうすることも出来ない。私は既に(そのようなことにならないよう)君に伝えてある』と言う。

更に、復活の日、私が、あなた方の誰かが(次のような姿で)やって来るのを見るような行為をしてはならない。

それは彼が首に叫び声を上げげた人物にしがみつかれ、彼は『アッラーのみ使いよ、助けて下さい』と言っているが、私は『君に対してはどうすることも出来ない。私は既に(そのようなことにならないよう)伝えてある』と言う。

また、復活の日、私が、あなた方の誰かが(次のような姿で)やって来るのを見るような行為をしてはならない。

それは、彼が首にはたはたと音を立てた衣服に巻きつかれ『アッラーのみ使いよ、助けて下さい』と言っているが、私は『君に対してはどうすることも出来ない。

私は既に(そのようなことにならないよう)伝えてある』と言う。

そして、復活の日、私が、あなた方の誰かが(次のような姿で)やって来るのを見るような行為をしてはならない。

それは、彼の首が、金塊や銀塊の重さで回らず、彼は『アッラーのみ使いよ、助けて下さい』と言っているが、私は『君に対してはどうすることも出来ない。私は既に（そのようなことにならないよう）伝えてある』と言う（が如きことである）。

前述のようなハディースは拠り所を一にして、いくつかの伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・フライラを拠り所として同様のものが他にも伝えられているが、それらには言葉に若干の相違がある。

アブー・フライラの前述のものと同様なハディースは他の伝承者経路でも伝えられている。

公職にある者は贈り物を受けることを禁止される

アブー・フマイド・サーイディーは伝えている

アッラーのみ使いはイブン・ロトビーヤというアサド族の男を公職に採用した。

（アムルとイブン・アブー・ウマルはそれはサダカの徴収係としてであると言った）

彼が（集めたサダカを持って）帰った時「これはあなた方のもので、こちらは私に贈られたものだ」と言った。

その時アッラーのみ使いはミンバルの上にお立ちになり、アッラーを讃美され称揚されてから「私が派遣した役人が『これはあなた方のためのもの、これは私に贈られたもの』などと言うとはまた何たることか。

その者は、その者に贈り物があるかどうかが分るように彼の父の家、あるいは母の家に止まって見るがよい(注)。

ムハンマドの命がその御手の中にある御方に誓い、あなた方の中、サダカの中より少しでもかすめ取った者は、復活の日、首にうなり声を上げたラクダにかじりつかれ、あるいは鳴き声を上げた雌牛にかじりつかれ、またはメーメーと鳴き立てる雌羊にかじりつかれてやって来るのだ」と申された。

それからその御方はわれわれがその御方の両協の白い部分が見える程に両手をお上げになり「おおアッラー、私は確かに告げました」と二回申された。

(注)例の男がもしその役職に就いていなかったら彼への贈り物は無かったであろう。

その贈り物は彼を愛するが故ではなく彼の地位に対する賄賂なのである。

なお「彼の父の家、あるいは母の家に止まる」と言うのは“仕事の無いこと”を意味する

アブー・フマイド・サーイディーは伝えている

アッラーのみ使いはイブン・ロトビーヤというアズド族（注）の男をサダカの徴収係に任命した。

彼は集めたものを持って来て、それを預言者に差し出した。

そして「この財貨はあなたのもので、これは私に与えられた贈り物です」と言った。

すると項言者は「君に贈り物があるかどうかを知るように、君の父や母の家に止まって見るがよい」と申され、説教のためにお立ちになった。

残余のハディースは前述と同様である。

（注）前のハディースでは“アサド族の”となっていたが、これには“アズド族”のとなっている

アブー・フマイド・サーイディーは伝えている

アッラーのみ使いはイブン・ロトビーヤというアズド族の男をスライム族からのサダカの徴収係に任命した。

彼が(項言者の所に)帰った時、み使いは彼に清算をお求めになった。

彼は「これはあなた方の財貨で、これは(私への)贈り物です」と言った。

アッラーのみ使いは「もし君が正直な者であるなら、君に贈り物があるまで君の父の家、母の家に止まって見よ」と申され、われわれに説教された。

み使いはアッラーを讃美され称揚されてから「時に、私はあなた方の中の一人をアッラーが私に委ねられた事柄の中、一つの（責任ある）任務に就けた。

彼は帰って来ると『これはあなた方の財貨で、これは私に与えられた贈り物である』と言う。

もし彼が正直な者であるなら、彼の父、また、母の家に止まって見るがよい。

アッラーに誓い、あなた方の中で正当な権利なく（公けの財貨の中から)少しでもかすめ取った者は、復活の日、その責任を負ってアッラーの御前に立つのである。

私にはその者が、うなり声を上げたラクダ、あるいは鳴き声を上げた雌牛、またはメーメーと鳴き立てる雌羊にかじりつかれてアッラーの御前に立つのが分っているのだ」と申された。

それからその御方は両脇の白さが見える程両手を上げられ「おおアッラー、私は確かに告げました」と申された。

伝承者は「私は両眼でそれを見、両耳でそれを聞いた」と言った。

前述のハディースは言葉に若干の相違をもって、別の伝承者経路でも伝えられている。
その中で、イブン・ヌマイルのハディースには「アッラー、私の命をその両手にされている御方に誓い、誰一人として（公の財貨の中から)少しの物でも(不当に)取ってはならないのだ、ということを君は知らねばならぬ」とある。
スフヤーンは彼のハディースの中で「私の目は見、私の両耳は聞いた。
（諸君）ザイド・ビン・サービトに尋ねて見よ。
彼はその時私と共にいた」と述べている。

ウルワ・ビン・ズバイルは伝えている

アッラーのみ使いは一人の男をサダカの徴収係に任命した。

彼は非常に多くの物を持って帰って来た。

そして「これはあなた方のもの、これは私に贈られたもの」と言い始めた。

残余のハディースは前述のものと同じであるが（次のような付加がある）

ウルワは「私はアブー・フマイド・サーイディーに『君はそれをアッラーのみ使いから聞いたのですか』と言った。

すると彼は『その御方の口から私の耳へ』と言った」と述べた。

アディーユ・ビン・アミーラ・キンディーは伝えている

私はアッラーのみ使いが「あなた方の中、われわれが一つの仕事に就けた者で針一本、あるいはそれより小さな物でもわれわれに隠したなら横領である。
それについては復活の日、責任をとらねばならない」と申されるのを聞いた。
伝承者は続けて言った。
するとアンサールの中の皮膚の黒い男が立ってみ使いの所に行った。
私はじっと彼を見ていたと思う。
彼は「アッラーのみ使いよ、私をあなたの仕事から降して下さい」と言った。
み使いが「どうしてか」と申されると「私はあなたの今の御言葉を聞いたからです」と言った。
その御方は「私は今（もう一度）それを言う。
あなた方の中でわれわれが一つの仕事に就けた者は、大小にかかわらず差し出し、それらの中から正当に与えられたものを取得し、取ることを禁じられている物は(絶対に)取ってはならないのである」と申された。

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

アディーユ・ビン・アミーラ・キンディーは「私はアッラーのみ使いが（前述のハディースと同様の）話をされるのを聞いた」と言った。

統治者に対する服従は、アッラーの御命令に背かないかぎり、義務と負わされたものである

イブン・ジュライジュは伝えている

「あなた方信仰する者よ、アッラーに従え、また使徒とあなた方の中の権能をもつ考に従え」（クルアーン第 4 章 59 節）という一節がアブドッラー・ビン・フザーファ・ビン・カイス・ビン・アディーユ・サフミーに関して啓示された。
彼は預言者が軍隊の指揮官として派遣した者であった。
伝承者は「これはヤアラー・ビン・ムスリムが私に告げたものであるが、彼はサイード・ビン・ジュバイルから、またサイードはイブン・アッバースから伝えられた」と言った。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「私に服従した者それすなわちアッラーに服従した者である。
私に反抗した者それすなわちアッラーに反抗した者である。
（私に任命された）指揮官に服従した者、それは私に服従した者である。
その指揮官に反抗した者、それは私に反抗した者である」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「私に服従した者それすなわちアッラーに服従した者である。
私に反抗した者それすなわちアッラーに反抗した者である。
私の指揮官に服従した者、それは私に服従した者である。
その指揮官に反抗した者、それは私に反抗した者である」と申された。

前述のハデイースはアブー・フライラを根拠とし、他の伝承者経路でも伝えられている。

前述のハディースはアブー・フライラを根拠とし、数系列の伝承者経路で伝えられている。

ハンマーム・ビン・ムナッビフは前述同様なハディースをアブー・フライラを根拠として伝えている。

アブー・フライラを根拠として伝えられたハディースの中には言葉に若干の相違を示しているものがある。
それは、“み使いは「指揮官に服従した者」と申されたが「私の指揮官」とは申されなかった”（というような相違）である。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなたは、あなたが逆境にあっても順境にあっても、満足している場合でも不満足な場合でも、そしてまた、たとえ誰かがあなたより好遇されていたとしても支配者の言には耳を傾け、それに従う義務がある」と申された。

アブー・ザッルは伝えている

私の親友(預言者のこと)は私に(指揮命令する地位にある者に対しては)たとえ彼が不具の奴隷であったとしても、耳を傾け、そして従うよう忠告された。

前述のハディースの“不具の奴隷”という言葉は、他のハディースでは“不具のエチオピア人奴隷”となっている。

アブー・イムラーンは同じ伝承者系列でこのハディースを伝えているが、彼は、“不具の奴隷”と言っている。

ヤヒヤー・ビン・フサインは伝えている

私は私の祖母が(次のように)話すのを聞いた。

彼女は預言者が告別の巡礼で行われた説教でそれを聞いたのである。

その時み使いは「もし奴隷があなた方の上司として任命され、クルアーンに則ってあなた方をリードしたならば、あなた方は(彼の命令)に耳を傾け、そして従え」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。
その中では「エチオピアの奴隷」と言っている。

前述のハディースの中には“その御方は「不具のエチオピア人奴隷」と申された”と伝えられているのもある。

前述のハディースで別伝承経路を経て伝えられている中には“不具のエチオピア人”という言葉は述べられず、“彼女(ヤヒヤー・ビン・フサインの祖母)はアッラーのみ使いがミナーで、あるいはアラファートで(この言葉を申されたのを聞いた)”という言葉が付加されているものがある。

ヤヒヤー・ビン・フサインは彼の祖母を根拠として伝えている

私は祖母が(次のように)話すのを聞いた。私はアッラーのみ使いと共に告別の巡礼を行いました。

その時み使いはたくさんの事柄を申されました。

それからその御方は「クルアーンに則ってあなた方をリードする黒い(私……伝承者……

は彼女がそう言ったと思う）不具の奴隷が、あなた方の上司として任命されたとしてもあなた方は彼の言うことを聞き、そして従え」と申されるのを聞きました。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「ムスリムたる者、アッラーの御命令に背くことを命じられるのでないかぎりは、好むと好まざるとにかかわらず(上司）言に耳を貸し、そして従わねばならぬ。もしアッラーの御命令に背くことを命じられたなら、それに耳を貸すことも従うこともあってはならぬ」と申された。

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

アブー・アブドル・ラフマーンはアリーから聞いたとして（次のように）伝えている

アッラーのみ使いは一人の男を一部隊の指揮官として任命してそれを派遣した。
その指揮官は火を燃やし(部下に)「火に入れ」と言った。
人々の中には命令に従ってそれに入ることを決意した者もあった。
その時、他の人々は「われわれは（イスラームに帰依したゆえ）火に入らなくてよいのだ」と言った。
このことがアッラーのみ使いのお耳に達した。
するとその御方はそれに入ることを決意した人達に「もしあなた方がそれに入っていたら、あなた方は審判の日までずっとその中にいたであろう」と申された。
そしてその他の人々には（彼等の行為を）愛でた後
「アッラーの御意志に反することにおいては絶対に服従してはならぬ。服従は正しい事柄においてのみあるのだ」と申された。

アリーは伝えている

アッラーのみ使いは一団の軍勢を派遣され、その指揮官としてアンサールの男を任命した。
そして人々には彼の言に耳を貸し、従うようお命じになった。
時に、部下達はあることでその指揮官を怒らせてしまった。
彼は「薪を集めよ」と言った。
部下達はそれを集めて来た。
彼は「それを燃やせ」と言った。
彼等はそれに火をつけた。
その後彼は「アッラーのみ使いは諸君に私の言葉を聞き従うようお命じにならなかったか」と言った。
彼等は「はい（そのように）申されました」と言った。

すると彼は「それでは火に入れ」と命令した。
その時彼等は互いに顔を見合わせた。
そして「われわれは火から逃れるためにアッラーのみ使いに救済を求めたのだ」と言った。
その考えは皆同じであった。
やがて指揮官の怒りも治まって火は消された。
彼等が帰った時、その出来事を預言者に話した。
するとその御方は「もしあなた方がそれに入っていたら、その中からはずっと出られなかったであろう。
服従は正しいことにおいてのみあるのだ」と申された。

前述と同様のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

ウバーダ・ビン・ワリードは彼の祖父が伝えた話を、彼の父から聞いたとして伝えている
われわれは、われわれが逆境にあっても順境にあっても、満足している場合でも不満足な場合でも、そしてまた統治者の利己や偏重があっても彼の言には耳を傾けて服従し、統御する立場の者と争うことはしない。
そしてアッラーの問題においては、われわれがどのような立場に在ろうとも、人の非難などは恐れることなく、真実を述べるということでアッラーのみ使いに忠誠のお誓いを申し上げた。

これと同様なハディースは別伝承者路にても伝えられている。

前述のようなハディースは他の伝承者経路でも伝えられている。

ジュナーダ・ビン・アブー・ウマイヤは伝えている
われわれはウバーダ・ビン・サーミトが病に伏している時、彼を訪問した。
そこでわれわれは「アッラーがあなたの病気をお治し下さいますように」と祈った後「アッラーが(われわれの)ためになるよう下された話について語って下さい。
あなたはそれをアッラーのみ使いから聞いているでしょう」と言った。
すると彼は（次のような）話をした。
アッラーのみ使いはわれわれを招かれた。
そこでわれわれはその御方に忠誠の誓いをした。
その時、その御方がわれわれに誓わせた事柄は、われわれが満足している場合も、不満足の場合も、そして逆境にあっても順境にあっても、またたとえ利己や偏重があったとしても、統治者の言には耳を傾けて服従し、統御する立場の者とは争わないということである。

そしてその御方は「だが、あなた方が知っているイスラームの規則の中で確かに否認されていることを（統治者の行為に）見た時は別である」と申された。

心にやましさなく公正に振まう統治者には仁大な報酬がある

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「まこと、統治者は盾である。

人々は彼の背後で戦い、彼によって(暴力や侵略者から)保護される。

それでもし彼が至高偉大なるアッラーを畏れて命令を下し、公正に物事を行えば彼への報酬がある。

だがもし彼がそのようなことなくして命令したなら(その結果は)彼の身の上に及んでくるであろう」と申された。

最初に忠誠を誓われたカリフこそ真のカリフである

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「イスラエルの民は預言者達によって統御されて来た。

それで、一人の預言者が亡くなると次の預言者が後を継いだ。

だが私の後に項言者はない。

やがてカリフ達が存在することになろうが、それは多数にのぼるであろう」と申された。

教友達は「(われわれが複数のカリフを戴いた場合)あなたはわれわれに何をお命じになりますか」と言った。

み使いは「最初に忠誠を誓われたカリフこそ真のカリフであり、その者達にこそ彼等の権利を与えよ。

まこと、アッラーはお任せになった事柄に関し、それを任せられた者達に(直々)お問いになるであろう」と申された。

前述同様のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは「私が亡くなった後、利已・偏重やあなた方が好まない多くの問題が起ってくるであろう」と申された。

人々は「アッラーのみ使いよ、われわれの中でそれに直面した者(があったとしたらその者)にあなたはどのようなことをお命じになりますか」と言った。

み使いは「あなた方は(統治者に服従して)あなた方の義務を果し、あなた方が受けるべきものはアッラーに祈願せよ」と申された。

アブドル・ラフマーン・ビン・アブド・ラッビ・カアバは伝えている

私がマスジドに入ると、カアバ神殿の影にアブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースが座っており、彼の周囲には人々が集っていた。

私も彼等の所に行き、その人の話を聞くために座った。

(その時彼は次のような話をした)

われわれはアッラーのみ使いと旅をし、ある場所で休息した。

われわれのある者はテントを張り、ある者は射撃の競争を始め、ある者は乗用動物の世話をした。

その時、み使いのアザーン詠唱者が礼拝のためのアザーンを行った。

われわれはみ使いの所に集合した。

その時み使いは「私以前の預言者は彼が人々のためになると知っている善事に彼の民族を導くことと、人々のためにはならないと分っていることを警告する義務を負っていた。

時に、あなた方のこの共同体はその歴史の最初においては平和でこと無く推移したが、末期に至ると不幸やあなた方が否認する諸々の問題に遭遇するであろう。
（すなわち）騒乱が次々に起り、それが起るたびにその規模は前に増して激しいものとなる。
騒乱が起ると信者は『これは私を破滅させるものである』と言う。
それが過ぎるとまた次の騒乱がやって来る。
すると信者は『これこそは（私の終焉である）これこそは(私の終焉である)』と言う。
それで、火から救われて楽園に入れられることを望む考は、アッラーを信じ、最後の審判日を信じて死を迎えねばならぬし、人々に対しては彼自身が望んでいるようなことをして上げねばならない。
そして、カリフに忠誠を誓った者は約束を履行し誠意を尽し、出来るかぎり彼に服従せよ。
それでもし別の者が(カリフの地位を）争うために現れたら、あなた方は後に現れた者の首を打て」と申された。
私（伝承者）は彼（アブドッラー・ビン・アムル）に近づき「あなたはあなた御自身がアッラーのみ使いからそれを聞いたとアッラーに誓えますか」と言った。
彼は彼の両手で己の両耳と胸を指し示し「私の両耳がそれを聞き、私の心がそれを記憶している」と言った。
私は彼に「しかしながら、あなたの従兄弟ムアーウィヤはわれわれの財産をわれわれの間で無益に消費し、あまつさえわれわれ自身を殺すようなことを命じています（注）。
時にアッラーは**「信仰する者よ、あなた方の財産を不正にあなた方の間で浪費してはならない。**
またあなた方自身を殺し（たり害し）てはならない。
まことにアッラーはあなた方に慈悲深くあられる」（クルアーン第 4 章 29 節)と申されております」と言った。
すると彼はしばらく沈黙していたがややあって「彼がアッラーの御意志に叶ったことをしているかぎりにおいては彼に従え。
それで彼がアッラーの御意志に反したことをしている場合は彼に従ってはならぬ」と言った。

（注）これはアリー（四代正統カリフ）とムアーウィヤとの闘争を意味している。
すなわちアリーとムアーウィヤの立場を見た場合、アリーはムアーウィヤに先んじて忠誠の誓いを得ているわけであるから、このハディースによればムアーウィヤには正当性はない。
従ってムアーウィヤがアリーとの戦のために用意する軍備の費用は無益の出費というわけである

前述同様なハディースはいくつかの伝承者経路でも伝えられている。

アブドル・ラフマーン・ビン・アブド・ラッビ・カアバ・サーイディーは伝えている

私は一団のグループをカアバ神殿の側で見た。

（残余のハディースは前述と同様である）

統治者の圧制や利己主義に耐えること

ウサイド・ビン・フダイルは伝えている

アンサールの男がアッラーのみ使いをわきへお連れして「あなたが某を（政府の要職に）お就けになったように、私にもそのようにして下さいませんか」と言った。

み使いは「あなた方は私の後に必ず特恵を得るであろう。

従ってあなた方が楽園の清流のほとりで私に再会するまで忍耐せよ」と申された。

前述のハデイースは同一人物を根拠として他の伝承者経路でも伝えられている。

シュウバ（中途伝承者の一人）はこのハディースを伝えているが、それには「その男がアッラーのみ使いをわきへお連れした」とは伝えていない。

統治者達がたとえ人々の権利を禁じても彼等に従うこと

アルカマ・ビン・ワーイル・ハドラミーは彼の父を根拠として伝えている

サラマ・ビン・ヤジード・ジュアフィーはアッラーのみ使いに「預言者よ、もしわれわれの上に自分達の権利のみ主張し、われわれの権利は認めない統治者が立ったとしたら、あなたはわれわれに何をお命じになりますか」と尋ねた。

しかし、その御方は何もお答えにはならなかった。

それで彼は再び、または三度同じことを尋ねた。

その時、アシュアス・ビン・カイスが彼をわきに連れて行き「彼等の言うことを聞き従うのだ。彼等には彼等が行ったことに対する報いがあり、あなた方にはあなた方が耐え忍んだ報酬がある」と言った。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

その中では「その時、アシュアス・ビン・カイスが彼を引いた。

そして『彼等の言うことを聞き従うのだ。

彼等には彼等が行ったことに対する報いがあり、あなた方にはあなた方が耐え忍んだ報酬がある』と言った」と述べている。

騒乱時はもちろん、いかなる状況においても、イスラーム社会に忠実であり、それに背いたり、離脱してはならないこと

フザイファ・ビン・ヤマーンは伝えている

人々はアッラーのみ使いに良き世の中について尋ねていた。
時に私は悪しき世に私が居合わせることを懸念してそれについて御尋ねした。
私は「アッラーのみ使いよ、われわれはこれまで不幸と無明の時代（ジャーヒリーヤ時代）におりました。
そこにアッラーがこの良き世（イスラームの時代）をもたらされました。
この良き世の後には悪しき世があるのでしょうか」と言った。
み使いは「ある」と申された。
そこで私は「その悪しき世の後にはいくらかは良き世が戻るのでしょうか」と言った。
み使いは「戻る。だがその時には不健全なものが存在する」と申された。
私は「その不健全なものは何でしょう」と言った。
その御方は「ある人々は私の慣行ではないものに従って行き、私の導いた道から外れて（人々を）導く。
君はそれらの者達の中に君が否認するような（悪しき人物を）知るであろう」と申された。
私は「それで、その良き世の後、また悪しき世が来るのでしょうか」と言った。
その御方は「ある。地獄の門の側で招く者があるが（その時である）彼等に応ずる者は、彼等がその者を地獄に投げ込むであろう（注）」と申された。
私は「アッラーのみ使いよ、その者達はどのような人々か話して下さい」と言った。
み使いは「よろしい。
彼等はわれわれと同じ血を受け継いだ者で、また同じ言語を話す者達である」と申された。
私は「アッラーのみ使いよ、もし私がその時生きていたら、あなたは私にどのようにせよと言われますか」と言った。
み使いは「君はムスリム達の主流グループで、そのイマーム（指導者）につかねばならぬ」と申された。
私は「もし彼等にグループもなくイマームもいなかったら…」と言った。
すると「（やがて起るであろう）諸々の団体の全てから離れよ。
たとえ君が木の根を食い続けて死に至ったとしても」と申された。

（注）これは人々に悪事をそそのかし堕落せしめる者達の例を引いたのである。
その誘惑に負けてしまった者は結果として地獄に落ちる

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられているが、それによると**フザイファ・ビン・ヤマーン**は（次のように）伝えている

私は「アッラーのみ使いよ、われわれには悪い時代（ジャーヒリーヤ時代）がありました。
そこにアッラーが良きもの（イスラーム）をお与え下さいました。
今われわれはその恩恵に浴しております。
それで、この良き世の後に悪しき世が来るのでしょうか」と言った。
み使いは「来る」と申された。
私は「その悪しき世の後に、良き世が来るでしょうか」と言った。
み使いは「来る」と申された。
私は「その良き世の後に悪しき世が来るのでしょうか」と言った。
み使いは「来る」と申された。
私は「どのような状態で…」と言った。
その御方は「私が亡くなった後、私の導き方で（人々を）導かず、私の慣行に従わないイマーム達が出現するであろう。
それらの人々の中には人間の姿をし、悪魔の心をした者達が出て来るであろう」と申された。
私は「アッラーのみ使いよ、もし私がその時生きていたら、私はどうすれば良いでしょう」と言った。
み使いは「君はその統治者の言を聞き従うのです。
たとえ背を打たれ財産を奪われたとしても、あなたは（その者の）言を聞き従わねばならない（注）と申された。

（注）もし善良な人々に力があるなら圧制者を追放し、正義のリーダーを擁立することも出来る。
しかしその力がなければ耐え忍ぶのである。
命令に背くことは騒乱を招き、ひいては社会生活から堕落を生み、圧制以上に悪しきものとなるとされる

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「（統治者の命に）背き、イスラーム社会から離脱して死せる者は、ジャーヒリーヤ時代の死と（変わらない）死に方をしたのである。
また無分別に、ただ部族連帯意識に燃え、そして同胞のために（人々を）結集し、あるいはそれの支援のために戦って死せる者の死はジャーヒリーヤ時代の死に方をしたのである。
また、私の共同体を襲って善良な者、邪な者の区別なく殺害し、信仰篤い人にも何の配慮もなく、安全を保証されている（注）人への約束も果さない者は、私の共同体の一員ではないし、私も彼と関係はない」と申された。

（注）アハル・ル・ズィンマと言われる人のこと。
彼等は、イスラーム世界に住む非ムスリムであるが、人頭税や土地税等を収めて生命・財産の安全を保証してもらっている人々である

前述のハディースはアブー・フライラを拠り所として、別の伝承者経路でも伝えられているが、それには言葉に若干の相違がある。

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「統治者の命に背きイスラーム社会から離脱して死せる者はジャーヒリーヤ時代の（死と変わらない）死に方をしたのである。
また無分別に、ただ部族連帯意識に燃え、そのために戦って死せる者はわが共同体の一員ではない。
またわが共同体から離脱してその共同体を襲い、善良な者邪な者の区別なく殺害し、信仰篤い人にも配慮せず、安全を保証されている人への約束も果さない者は私と関係ない者である」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられいる。

イブン・アッバースは伝えている
アッラーのみ使いは「統治者に何か意にそわぬことを見ても忍耐せよ。
たとえ 1 わたり（親指と小指を広げた程の幅）であっても、イスラーム社会から離脱して死せる者はジャーヒリーヤ時代の死と変わらない死に方をしたのであるから」と申された。

イブン・アッバースは伝えている
アッラーのみ使いは「統治者に何か忌まわしいと思うことがある者も忍耐し、背いてはならぬ。
1 わたりでも、支配権より出て死せる者は誰でもジャーヒリーヤ時代の死に方をしたに他ならないのだ」と申された。

ジュンダブ・ビン・アブドッラー・バジャリーは伝えている
アッラーのみ使いは「部族連帯意識を煽り、またはそれを支持して無分別な集団の下で戦って殺された者は、ジャーヒリーヤ時代の殺され方をしたのである」と申された。

ナーフィウは伝えている
アブドッラー・ビン・ウマルがアブドッラー・ビン・ムティーウを訪問したのはハッラ（注）でヤジード・ビン・ムアーウィヤの時代、（マディーナの人々に非道な行為がなされた）頃であっ

た。
彼（アブドッラー・ビン・ムティーウ）は「アブー・アブドル・ラフフマーン（イブン・ウマルの別称）にクッションをお出しせよ」と言った。
すると彼は「私は無駄話をしに来たのではない。
私は君にアッラーのみ使いからお聞きした話をするために来たのです。
み使いは『（統治者への）服従の約束を破る者は、審判の日、アッラーの御前に立った時、弁解の余地は全くない。
また（統治者に対し）忠誠の誓いの義務を果すことなく死せる者は、ジャーヒリーヤ時代の死に方をしたのである』と申された」と言った。

（注）アブドッラー・ビン・ムティーウはヤジード（680-683）への忠誠の誓いを拒んだ者の一人であり、ハッラ（マディーナ近郊）での戦にはクライシュの指揮官でもあった。
ハッラの戦はヤジードが彼に対する反軍征服とマディーナの人々から忠誠の誓いを得る目的で派遣したムスリム・ビン・ウクバト・ムッリーの軍と、アブドッラー・ビン・ムティーウの率いるクライシュ軍、それに組するアブドッラー・ビン・ハンザラの率いる軍との戦いであった
イブン・ウマルは預言者から聞いたとして前述同様のハディースを伝えている。

前述同様なハディースは他の伝承者経路でも伝えられている。

ムスリム達の結束を乱す者に対する裁定

アルファジャは伝えている

私はアッラーのみ使いが「近き将来、騒乱その他様々な災禍が起るであろう。
それで、この共同体が結束している時、それを分裂させようとする者は、それがどのような者であっても剣で打て」と申されるのを聞いた。
前述のハディースで他の伝承者経路で伝えられたものには「彼を殺せ」と述べられている。

前述同様なハディースで別伝承者経路で伝わるものの中には次のように伝えているものもある（すなわち）
私（アルファジャ）はアッラーのみ使いが「あなた方が一人の人物の統率の下に結束している時、あなた方の団結を乱し分裂させようとしてやって来る者は、殺してしまえ」と申されるのを聞いた。

二人のカリフに忠誠の誓いをさせられた時

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは「二人のカリフに忠誠の誓いをさせられた時は、後からそれをさせた方を殺せ」と申された。

統治者達が聖法に反した行為に及んだ場合はそれを否定しなければならないが、彼等が礼拝を続けるかぎり戦を起してはならない

ウンム・サラマは伝えている

アッラーのみ使いは「将来、幾人かの統治者が立つであろう。
あなた方は（彼等の所業のあるものは）良いとみなし、またあるものは否認するであろう。
それで、彼等の悪いおこないを見た者が（それを止めさせようと努めたとしても）非難されることではない。
また彼等の悪いおこないを否認しながら、それを阻止出来ないとしてもアッラーのお怒りにふれることはない。
しかし、彼等の悪いおこないを是認し、それに従って行く者は破滅するであろう」と申された。
人々は「われわれは彼等と戦ってはならないのでしょうか」と言った。
その御方は「彼等が礼拝を続けるかぎり（戦っては）ならぬ」と申された。

このハディースは預言者の妻ウンム・サラマを根拠として、別の伝承者経路でも伝えられそれには次のようにある

み使いは「幾人かの統治者があなた方の上に任命されるであろう。
それであなた方は（彼等の所業のあるものは）良いとみなし、またあるものは否認するであろう。
それで彼等の（悪いおこないを見た者がそれを）憎んだとしても（アッラーの）お咎めはない。
また彼等の悪いおこないを非難したとしても（アッラーのお怒りに）ふれることはない。
しかし、彼等の悪いおこないを是認しそれに従って行く者は（破滅するであろう）と申された。
人々は「アッラーのみ使いよ、われわれは彼等と戦ってはならないのでしょうか」と言った。
その御方は「ならぬ。彼等が礼拝を続ける限り」と申された。
前述のハディースはウンム・サラマを根拠として別の伝承者経路でも伝えられているが、それには「彼等の（悪いおこないを見た者がそれを）非難したとしても差支えない。
また彼等の悪いおこないを憎んだとしても（アッラーは）お咎めにはならない」と述べられている。

ウンム・サラマを根拠とするこの種のハディースで、別の伝承者経路を経て伝えられたものの中には「しかし、彼等の悪いおこないを是認し、それに従って行く者は（破滅するであろう）」というみ使いの言葉が述べられていないのがある。

最良の統治者と最悪の統治者

アウフ・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方の最も良き統治者は、あなた方は彼等を愛し、彼等もあなた方を愛する。
そしてまた、彼等はあなた方のために祈り、あなた方も彼等のために祈る、そのような人達である。
一方、あなた方にとって最も悪い統治者は、あなた方は彼等を憎悪し、彼等もあなた方を憎み、あなた方は彼等を呪い、彼等もあなた方を呪う、そのような者達である」と申された。
その時、「アッラーのみ使いよ、われわれは剣を取って彼等と闘ってはならないのでしょうか」という問があった。
その御方は「ならぬ。
彼等があなた方の間で礼拝を行う限りにおいては。
それでもしあなた方があなた方の統治者から、嫌悪するような何かを見たなら、その者の行為を憎め、そして背いてはならぬ」と申された。

アウフ・ビン・マーリク・アシュジャイーは伝えている

私はアッラーのみ使いが「あなた方の最も良き統治者は、あなた方は彼等を愛し、彼等もあなた方を愛し、彼等はあなた方のために祈リ、あなた方は彼等のために祈るような人達である。
一方、あなた方にとって最も悪い統治者は、あなた方は彼等を憎悪し、彼等はあなた方を憎み、あなた方は彼等を呪い、彼等もあなた方を呪うような者達である」と申されるのを聞いた。
その時、そこに居た人々が「アッラーのみ使いよ、（そのような場合）われわれは彼等と闘ってはならないのでしょうか」と言った。
み使いは「ならぬ。
彼等があなた方の間で礼拝を行う限りにおいては。
よく聞け、人が統治者として戴いた者に、アッラーに対して反抗するような何かを見たなら、彼のアッラーへの反抗そのものを憎め、そして彼に背いてはならぬ」と申された。
イブン・ジャービルはルザイク（伝承者の一人）が彼にこのハディースを話した時、ルザイクに「アブー・ミクダーム（ルザイクの別称）よ、君はそれをムスリム・ビン・カラザから聞いたのですか。
それとも彼がそれを君に述べたのですか。
また彼（ムスリム）はアウフからそれを聞いたのでしょうか。
（もしそうなら）彼はアッラーのみ使いからこのハディースをお聞きしたと言うのでしょうか」と尋ねた。

この時ルザイクは正座してキブラに向い「アッラー以外いかなる神もない、そのアッラーに誓い、私はムスリム・ビン・カラザが『私はアウフ・ビン・マーリクがアッラーのみ使いよりお聞きした』と言っているのを聞いたのだ」と言った。
前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

司令官は戦闘に際し部下から誓約を得るのは好ましいことである。
そして、アッラーが満足される、木の下での忠破の誓約についての説明

ジャービルは伝えている

フダイビーヤ（注）の日、われわれの軍勢は 1400 人であった。
われわれはその御方に忠誠の誓約をした。
この時ウマルはサムラと呼ばれている木の下でその御方の手を取って忠誠の誓約をした。
伝承者は「われわれはその御方に（マッカ軍と遭遇した時）その闘から逃げないという誓約をしたのであり、死ぬまで闘うという誓約をしたのではなかった」と言った。

（注）628 年 3 月ムハンマドは最初のマッカ巡礼を企て、それは実行には至らなかったが、マッカの聖域のはずれのフダイビーヤでクライシュ部族との盟約が結ばれ、翌年改めてマッカ巡礼を行うこと、向う 10 年間の休戦、遊牧部族にムハンマドおよびクライシュ部族の双方と自由に同盟を結ばせることなどが約束された。（前嶋信次編・西アジア史）

前述のハデイースはジャービルを根拠として別の伝承者経路でも伝えられている。
それには次のような部分がある（すなわち）彼（ジャービル）は「われわれはアッラーのみ使いに、死についての誓約をしたのではなく（闘いから）逃げないという誓約をしたのだ」と言った。

アブー・ズバイルは伝えている

彼（アブー・ズバイル）はジャービルが「フダイビーヤの日の人数はどれ程でしたか」という質問を受けているのを聞いていた。
ジャービルは「われわれは 1400 名であった。
その時われわれはその御方に忠誠の誓約をした。
そしてウマルは木の下で座っており手を握っていた。
その木はサムラの木であった。我々はその御方に忠誠の誓約をした。
だがジャッド・ビン・カイス・アンサーリーだけは彼のらくだの腹の下に隠れていた。

アブー・ズバイルは伝えている

私はジャービルが「預言者はズー・ル・フライファ（地名）で忠誠の誓約を受けておられましたか」と質問されているのを聞いた。
彼（ジャービル）は「いや（そこでは受けなかった）
だがみ使いはそこで礼拝を挙行された。
み使いはフダイビーヤにある木の傍以外にはいかなる木の傍でも忠誠の誓約はお受けにはならなかった」と言った。

またジャービル・ビン・アブドッラーは『預言者はフダイビーヤにある井戸について（水の出が良くなるよう）祈った』と言うのを聞いた。

ジャービルは伝えている

フダイビーヤの日、われわれの軍勢は 1400 名であった。
預言者はわれわれに「本日、あなた方はこの大地に生を受けている人々の中で至福の人々である」と申された。
ジャービルは「もし私が視力を失っていなかったら、その木の場所を諸君に示したのに」と言った。

サーリム・ビン・アブー・ジャアドは伝えている

私はジャービル・ビン・アブドッラーにその木の（下で忠誠の誓約をした）教友達の人数について尋ねた。
彼は「たとえわれわれが十万の人数でも（その井戸水はそれらの人々の渇を癒やすのに）十分に足りた。
だがわれわれの人数は 1500 名であった」と言った（注）。

（注）教友達がフダイビーヤに着いた時そこに井戸を見出したが、それはしみ出る程のもので、彼等の人数をうるおすには十分ではなかった。
だが預言者がその井戸について祈願すると水量が増加したという。
これは預言者の行った奇蹟の一つとされている

ジャービルは伝えている

たとえわれわれが 10 万の人数でも（その井戸の水は）十分に足りた。
だが、われわれの人数は 1500 名であった。

サーリム・ビン・アブー・ジャアドは伝えている

私はジャービルに「あの時何人居られたのですか」と聞いた。
ジャービルは「1400 名であった」と言った。

アブドッラー・ビン・アブー・アウファーは伝えている

その木の下で忠誠の誓約をした教友は 1300 名であった。
その中でアスラム族の人々がムハージル(移住者)の 8 分の一を占めていた。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

マアキル・ビン・ヤサールは伝えている

私はその木の日、そこに居合わせたことを覚えている。

預言者は人々から忠誠の誓約をお受けになっていた。

私は木の小枝をその御方の頭上に掲げていた。（その日）われわれの人数は 1400 であった。

彼は「われわれはその御方に死のための誓約をしたのではなかった。

だが、（戦闘で）逃げないという誓約をしたのである」と言った。

前述のハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

サイード・ビン・ムサイヤブは伝えている

彼（サイード）は「私の父はその木の傍でアッラーのみ使いに忠誠の誓約をした人達の一人であった」と言った。

彼の父は「その翌年のこと、巡礼のためにその道を行った時、その木の在る場所がわれわれには分らなかった。

それで、もしそれがあなた方に明瞭なら、あなた方は確かに賢明な方達である」と言った。

またサイード・ビン・ムサイヤブは彼の父からの話として（次のように）伝えている。

人々はその木の（傍で忠誠の誓約をした）年、アッラーのみ使いのお側にいた。

そして彼の父は「だが人々はその翌年にその場所を忘れてしまった」と言った。

サイード・ビン・ムサイヤブは彼の父からの話として伝えている

私（サイードの父）は確かにその木を見た。

だがその後、そこに来て見たがその在りかが分らなかった。

ヤジード・ビン・アブー・ウバイド（サラマ・ビン・アクワウのマウラー）は伝えている

私はサラマに「あなた方はフダイビーヤの日、何に関してアッラーのみ使いに忠誠の誓約をされたのですか」と言った。

彼は「（戦って）死すことについてである」と言った。

前述のようなハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アブドッラー・ビン・ザイドは伝えている

ある者が彼の所に来て「イブン・ハンザラ（注）は己のため人々に誓約させている」と言った。

アブドッラーは「何のために」と尋ねた。
するとその男は「（彼に従って）死すためです」と答えた。
アブドッラーは「私はアッラーのみ使いに（忠誠の誓約をした後では）何人にもそれはせぬ」と言った。

（注）彼の正式名はアブドッラー・ビン・ハンザラといい、マディーナの近郊・ハッラの戦いではアンサール（マディーナで預者を助けた人々）の指揮官であった。
彼はこの日の戦いで戦死した

ムハージル（移住者）が故郷に住む目的で再びその地に帰ることは禁止されている

サラマ・ビン・アクワウは伝えている

彼はハッジャージュを訪れて「やあ、アクワウの息子よ、君は背教者となり、（移住後）再び元の地に戻り、ベドウィーンと共に砂漠に住んだのか」と言った。
彼は「いいえ、そうではないのです。
だが、アッラーのみ使いが砂漠に行くことをお許しになったのです」と言った（注）。

（注）マッカ征服前は移住者がその地を離れ、許可なくして故郷に帰ってしまうのは背教者とも見做され大罪であった。
それは預言者に協力し、イスラームを支えて行くためであった。
サラマの場合はどのような事情かは明らかではないが、彼は預言者の許可を得て砂漠に戻ったのである

マッカ征服の後はイスラームと聖戦と善行のために誓約する。また“マッカ征服の後にヒジュラ（移住）はない”という言葉の説明

ムジャーシウ・ビン・マスウード・スラミーは伝えている

私は預言者の所にヒジュラの誓約をするために行った（注）。
するとその御方は「ヒジュラは（マッカ征服以前に）それを行わねばならなかった人々の代で既に終ったのだ。
しかし君は今、イスラームのため聖戦のためそして善行のために誓約を行うがよい」と申された。

（注）ヒジュラを行った者にはアッラーから莫大な報酬があるとされたからである

ムジャーシウ・ビン・マスウード・スラミーは伝えている

マッカ征服後、私は兄弟のアブー・マアバドをアッラーのみ使いの所に連れて行った。
そして「アッラーのみ使いよ、彼にヒジュラの誓約をさせて下さい」と言った。
み使いは「ヒジュラは（マッカ征服以前に）それを行わねばならなかった人々の代で既に終ったのだ」と申された。
私は「それではどのようなことであなたに誓約をすれば（アッラーの報酬があるのですか）」と言った。
その御方は「イスラームと聖戦それに善行である」と申された。
アブー・ウスマーンは「私はアブー・マアバドに会った。
それで彼にムジャーシウの言葉を話したら、彼は『その通りである』と言った」と述べた。

前述のハディースは別伝承経路でも伝えられている。
しかしそれにはアブー・マアバドの名前は述べられていない。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いはマッカ征服の日「今やヒジュラはない。
ただ聖戦と善意の決意のみである。
それであなた方が聖戦に参加するよう求められたらそれに参加せよ」と申された。

前述のようなハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いはヒジュラについて質問されました。
するとその御方は「マッカ征服の後はヒジュラは終った。

今や聖戦と決意である。

それであなた方が聖戦に参加するよう求められたら、それに参加せよ」と申されました。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

一人の遊牧民がアッラーのみ使いにヒジュラについて尋ねた。

その御方は「ヒジュラのことか、その問題はまことに厳しいものである（注）。

ところで君はラクダを所有しているか」と言われた。

彼は「はい持っております」と言った。

その御方は「君はそれについて支払うべきサダカを果しているか」と言われた。

彼は「はい」と言った。

み使いは「（たとえヒジュラが出来なくとも）君が住む所はどこでも善行を続けよ。

アッラーは君の行為を少しもお見のがしなく（それに対する報酬をお与え下さる）」と申された。

（注）ここでのヒジュラの意は、家族や故郷を離れてマディーナで預言者と共に過すことである。

預言者の言葉はその男がそれには耐えられないと考えてのものである

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられているが、それには次のような付加がある。

アッラーのみ使いは「君はそれらの家畜に水を与えた日、ミルクを搾って（施しとして分け与えているか）」と申された。

女性達の忠誠の誓いの仕方について

預言者の妻**アーイシャ**は伝えている

彼女は「女性の信者達が（マディーナに）移住してアッラーのみ使いの所にまいりますと、至高偉大なるアッラーの（次のような）御言葉で忠誠の誓いが行われました。

（すなわち）**「預言者よ、あなたの許へ女の信者がやって来て、あなたに対して"アッラーの外は何ものも同位に崇めません。盗みもしません。姦通もしません"と忠誠を誓うなら」**からこの節(クルアーン 60 章 12 節)の終りまでです」と言った。

アーイシャはまた「女性の信者の中でこの（節で述べられている）ことを認めた者は、それの是認自体が（彼女達にとっては）合法的な誓約となりました」と言った。

彼女達がみ使いに忠誠の誓いをした時、アッラーのみ使いは彼女達に「去ってよい。

私は確かにあなた方の誓約を得た」と申されました。

でも、アッラーに誓って、アッラーのみ使いは決して女性の手には触れませんでした。

彼女達の誓約は言葉で行われたのです。

アッラーに誓って、み使いは女性達から、いと高くおわしますアッラーがその御方にお命じになったもののみによって誓約をお取りになったのです。

み使いのお手は決して女性の手にはお触れになりませんでした。

そしてその御方は彼女達に「私は、確かにあなた方の誓約を得た」と言葉で申されておられました。

ウルワは伝えている

アーイシャは彼(ウルワ)に女性達の忠誠の誓いについて（次のように）話した。

アッラーのみ使いは決して女性の手にお触れになることなく誓約をお取りになりました。

その御方がその誓約をお取りになりますと「去ってよい。

私は確かにあなた方の誓約を得た」と申されました。

出来る事柄において、リーダーの言葉は聞き従う誓約をすること

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

われわれはアッラーのみ使いに(その方のお言葉を)聞き従う誓約をしておりました。
み使いはわれわれに「あなた方の出来得る事柄において」と申された。

成年の年齢について

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはウフドの戦の日、私が（年齢的に参戦出来るかどうか）じっと御覧になった。
その時私は 14 才であった。
結局私の参戦はお許しにはならなかった。
ハンダクの戦の時私は 15 才であった。
その御方は私をじっと御覧になり参戦をお許しになった。
ナーフィウは「私はウマル・ビン・アブドル・アズィーズがカリフの時、彼の所に行ってその話をした。
すると彼は『まこと、それは成年と未成年との境である』と言った。
そして彼は各地方の長官達に「15 才に達した者には生活手当を与えること、それ以下の者は子供として扱うこと」と書いて送った（注）。

（注）往時は現在の国防省に相当する所で、戦役に従事出来る年齢に達した者かどうかを判断し、参戦出来る者には国庫より規定された額に従って手当が支給された
前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられているが、それには言葉に若干の相違がある。
（それは）“私は 14 才であった。
その御方は私を（参戦するには）幼いとお考えになった”である。

クルアーンが敵の手に帰することが懸念された場合は、それを所持して不信者達の地へ行くことは禁止される

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは敵地にクルアーンを所持して行くことを禁じられた。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはクルアーンが敵の手に渡るのを懸念されて、それを敵地に所持して行くことを禁じられた。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「クルアーンを所持して旅をしてはならぬ。私はそれが敵の手中に帰することを懸念するのだ」と申された。

アイユーブ（途中伝承者）は「敵がそれを手中にし、彼等がそれについて（意見を異にして）あなた方と争う」と言った。

前述のハディースで別の伝承者経路で伝えられたものには、み使いの言葉として「私は、まことに懸念する」という表現が付加されている。

また別のものでは「敵がそれらを手にすることを懸念して」というみ使いの言葉が述べられている。

競馬とその調教について

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはアル・ハフヤーウ（マディーナの一地点）から、調教された馬の競走を行うことをお許しになったが、その決勝点は（5ないし6マイル離れた）サニーヤト・ル・ワダーウであった。

また調教されてない馬の競走もあったが、それはサニーヤト・ル・ワダーウから（1マイルの地点にある）ルザイク族のモスクまでであった。

イブン・ウマルはそのレースに参加した一人であった。

前述のハディースは多くの別の伝承者経路でも伝えられているが、それらには次のような言葉の付加がある。

アブドッラー（イブン・ウマル）は「私はトップを切って走った。

その時、私の馬は私を乗せてモスク（の門、あるいは塀に相当する程（注））ジャンプした」と言った。

（注）このハディースより往時のモスクの塀の高さが推定出来る。つまり往時のそれは、現在の競馬の障害レースで飛び越す位か、それよりやや高い程度のものであったと思われる

馬の前髪には、復活の日まで、徳が結びつけられている

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「額に毛の垂れ下った馬には、復活の日まで（常に）徳が存在する」と申された。

前記と同じハディースは多くの別伝承者経路でも伝えられている。

ジャリール・ビン・アブドッラーは伝えている

私はアッラーのみ使いが「アッラーの御報酬や戦利品のような徳が、復活の日まで、馬の前髪には結びつけられている」と申されながら、指で馬の前髪を編んでおられた。

前述のようなハディースは異った伝承者経路でも伝えられている。

前述と同様のハディースで別伝承者経路のもので（次のように）伝えている。
アッラーのみ使いは「アッラーの御報酬や戦利品のような徳が、復活の日まで、馬の前髪に結びつけられている」と申された。

ウルワ・バーリキーは伝えている

アッラーのみ使いは「徳が馬の前髪には結びつけられている」と申された。
すると「アッラーのみ使いよ、それはどういうことですか」と質問があった。
み使いは「アッラーの御報酬や戦利品が、復活の日までそれにはある」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路で伝えられているが、それはウルワ・バーリキーの代りにウルワ・ビン・ジャアドを根拠としている。

ウルワ・バーリキーを根拠として伝えられたものの中には「アッラーの御報酬と戦利品」という言葉が述べられていないものもある。

前述同様なハディースの根拠をウルワ・ビン・ジャアド（という名前で）伝えているもので別伝承のものには「アッラーの御報酬と戦利品」という言葉は述べられていないものもある。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは「馬の前髪には祝福がある」と申された。
前述のようなハディースはアナスを根拠として別の伝承者経路でも伝えられている。

嫌われる馬について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いはシカールの馬（次のハディースで説明されている）をお嫌いになっていた。

前述のハディースはスフヤーンを根拠としても伝えられたが、アブドル・ラッザークがシカールの馬について説明を加えている。

その馬は右の後足と左の前足の下部が白い馬、あるいは右の前足と左の後足の下部が白い馬である。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

聖戦やアッラーの道のために砕身することの徳

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーはその御方の存在を信じ、その御方の使者を信頼し、アッラーの道のための戦いに行く者に対しては（恩典の）保証をされている。
また、その御方は殉教者には天国を、無事帰還する者には報酬を、あるいは報酬と戦利品を持って故郷に戻ることを保証されている。
ムハンマドの命を手中にされている御方に誓い、アッラーの道で負傷した者は審判の日、その者が傷を負った時点での血に染った生々しい姿でやって来るが、彼は麝香の芳香を放っている。
また、ムハンマドの命を手中にされている御方に誓い、もし（遠征に行けない）ムスリム達を苦しませるのでなかったら、私は全ての遠征に赴き、（マディーナに）残っていることはなかったであろう。
しかしながら私には（ムスリム達全ての）乗る乗り物はないし、彼等とて全てがそれを用意することは出来ない。
私が不在のマディーナに残る人々はこれには耐えられぬ故（私は時にはマディーナに残っているのである）ムハンマドの命を手中にされている御方に誓い、まことに、私はアッラーの道のために戦って死し、そしてまた戦って死し、そしてなお戦って死すことを望んでいるのだ」と申された。

前述同様なハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーは一途に、アッラーの道のために故郷を出て、そしてその御方のお言葉を信じて戦う者には（次のような）保証をされている。
（すなわち）殉教者には楽園の門をお開きになること、その他の者には報酬または戦利品を持って故郷に帰還させて下さることである」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーはその御方の道のために負傷した者については熟知しておられる。
それで人がアッラーの道のために負傷すれば、その者は審判の日その傷から血を多量に流した姿で来る。
その色は鮮血の色だがその匂いは麝香の香である」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーの道でムスリムが負った傷の一つ一つは、審判の日にはその傷を負って血を流していた時の状態のままに現われるのだ。

その色は鮮血の色だが、その匂いは麝香の香である」と申された。

また、アッラーのみ使いは「ムハマンドの命を手中にされている御方に誓い、私が信者達を苦しめるのでなかったとすれば、アッラーの道のために遠征する者達の背後に止まっていることはなかったであろう。

しかしながら私は（全ての信考のための）乗り物を所有してはいなかったし、彼等とて（その全てが）それらを用意出来て私に従って来られるというものではない。

それに、彼等は私が不在の（マディーナ）にただじっと手をこまねいていることを喜ばないのだ」と申された。

アブー・フライラは伝えている

私はアッラーのみ使いが「もし私が信者達を苦しませるのでなかったなら背後には止まってはいない」と申されるのを聞いた。

残余のハディースは前述と同様であるが、言葉に若干の変更がある。

（すなわち）「私の命を手中にされている御方に誓い、まことに、私はアッラーの道において死すことを願う。

それから私は蘇る」と述べられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「もし私が私の共同体を苦しませるのでなかったら、私はいかなる遠征にも赴いて（マディーナに）残っていることは望まなかったであろう」と申された。

残余のハディースは前述と同様である。

アブー・フライラを拠り所として、別の伝承者経路を経たものには（次のように）伝えられている。

アッラーのみ使いは「アッラーはその御方の道のため、聖戦に参加する者に（恩典の）保証をして下さる」

そして更に「私は至高偉大なるアッラーの道のため遠征する戦士の背後に止まってはいなかった」と申された。

至高偉大なるアッラーの道における殉教の徳

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは「死後、アッラーの御許で恩典を与えられた者は、たとえこの世とそれに存在する全てを与えられるとしても、再びこの世に帰ることを望む者は一人も無いであろう。

だが殉教者は別である。

彼は殉教の恩典として受けるものがあまりにも素晴らしい故、再びこの世に戻って殉教することを望むであろう」と申された。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは「天国に入った者は、たとえ彼が地上にあるものをことごとく与えられたとしても、再びこの世に戻ることを望む者は一人も無いであろう。

だが殉教者はそうではない。

彼は彼が与えられた偉大な名誉のために幾度もこの世に戻って殉教することを望むであろう」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「至高偉大なるアッラーの道の聖戦に匹敵する行為は何でしょう」と問われた。

み使いは「あなた方には、それは出来ないことである」と申された。

すると人々は再三繰り返して尋ねたがその都度「あなた方には、それは出来ないことである」と申された。

だが三度目に「アッラーの道において聖戦に参加せる者に比肩し得る者は、アッラーのお言葉に服従し、断食をし、礼拝を行う者である。

しかもその断食と礼拝は戦士がいと高くおわしますアッラーの道の聖戦から帰るまで、たゆまず熱心に行わねばならない」と申された。

前述のハディースは三種の別伝承者経路でも伝えられている。

ヌアマーン・ビン・バシールは伝えている

私はアッラーのみ使いのミンバルの側に座っていた。

その時一人の男が「私はイスラームに帰依した後、巡礼者達に水を提供すること（が非常に重要と考え、それ）以外のいかなる仕事にも関心がない」と言った。

すると別の男が「私はイスラームに帰依した後は聖なるマスジドを管理すること（こそ重要と考え、それ）以外のいかなる仕事にも関心がない」と言った。

するとまた別の男が「アッラーの道のための聖戦こそ、あなた方が言ったこと以上に徳のある行為だ」と言った。
その時ウマルが「アッラーのみ使いのミンバルの近くで声を張り上げてはならぬ」と彼等を叱責した。
時に、その日は金曜日であった。
礼拝が終った時、私はアッラーのみ使いの所に行き彼等の考えの相違についてみ使いの御意見をお伺いした。
その時、至高偉大なるアッラーは**「あなた方は巡礼者に水を飲ませたり、また聖なるマスジドを管理する者と、アッラーと終末の日を信じ、アッラーの道のために奮闘努力する者とを同等にするのか。**
アッラーの御許では、両者は同等ではない。
アッラーは不義の民を導かれない」（クルアーン第 9 章 19 節）の啓示を下されたのであった。

前述のハディースはヌウマーン・ビン・バシールを根拠とし、別の伝承者経路でも伝えられている。

アッラーの道のため朝に夕べに（聖戦に）赴くことの徳

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーの道のため朝に夕べに（聖戦に）赴くことは、この世やそこに存在するもの全てに優る（報酬がある）」と申された。

サフル・ビン・サアド・サーイディーは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーの道のため、アッラーの下僕が（聖戦に）赴くことは、この世やそこに存在するもの全てに優る（報酬がある）」と申された。

サフル・ビン・サアド・サーイディーは伝えている

預言者は「アッラーの道のため朝に夕べに（聖戦に）赴くことは、この世やそこに存在するもの全てに優る（報酬がある）」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「もし私の共同体の中のある人々が(聖戦の艱難辛苦を負うことが)ないとすれば」と申された。

アブー・フライラはこのハディースを続け、その中で、アッラーのみ使いは「アッラーの道のため夕べに、あるいは朝に（聖戦に）赴くことはこの世やそこに存在するもの全てに優る（報酬がある）」と申された、と述べている。

アブー・アイユーブは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーの道のため朝に夕べに（聖戦に）赴くことは、その上に太陽が昇りそして沈むところのもの（すべて）に優る（報酬がある）」と申された。

前述のようなハディースはアブー・アイユーブを根拠とし、同一の言葉によって別の伝承者経路でも伝えられている。

アッラーの道のため朝に夕べに（聖戦に）赴くことの徳

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーの道のため朝に夕べに（聖戦に）赴くことは、この世やそこに存在するもの全てに優る（報酬がある）」と申された。

サフル・ビン・サアド・サーイディーは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーの道のため、アッラーの下僕が（聖戦に）赴くことは、この世やそこに存在するもの全てに優る（報酬がある）」と申された。

サフル・ビン・サアド・サーイディーは伝えている

預言者は「アッラーの道のため朝に夕べに（聖戦に）赴くことは、この世やそこに存在するもの全てに優る（報酬がある）」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「もし私の共同体の中のある人々が(聖戦の艱難辛苦を負うことが)ないとすれば」と申された。

アブー・フライラはこのハディースを続け、その中で、アッラーのみ使いは「アッラーの道のため夕べに、あるいは朝に（聖戦に）赴くことはこの世やそこに存在するもの全てに優る（報酬がある）」と申された、と述べている。

アブー・アイユーブは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーの道のため朝に夕べに（聖戦に）赴くことは、その上に太陽が昇りそして沈むところのもの（すべて）に優る（報酬がある）」と申された。

前述のようなハディースはアブー・アイユーブを根拠とし、同一の言葉によって別の伝承者経路でも伝えられている。

アッラーの道において死せる者は、人と人の間の負債を除いて、全て許される

アブー・カターダは伝えている

　アッラーのみ使いは人々の間にお立ちになり「アッラーのための聖戦とアッラーを信じることは最も価値ある行為である」と申された。
　すると一人の男が立って「アッラーのみ使いよ、もし私がアッラーの道で殉職したら私の罪は消えるのでしょうか」と言った。
　するとみ使いは「その通りである。
　ただし、君が忍耐強く誠実で、敵に後を見せることなく戦ってアッラーの道で殉職すればである」と申された。
　それからアッラーのみ使いは「今、君はどのように申したのか」と言われた。
　その男は「もし私がアッラーの道で殉教したら私の罪は消えるのでしょうか（と申し上げたのです）」と言った。
　アッラーのみ使いは「その通りである。
　ただし、君が忍耐強く誠実で、敵に後を見せることなく戦った場合である。
　しかし（人と人との間における）負債は別である。
　天使ガブリエルが私にそのように申された」と言われた。

前述のハディースはアブー・カターダを根拠とし、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・カターダは次のように伝えている

　預言者がミンバルに座っておられた時、一人の男が来て「もし私が剣で打ったらどうなのでしょう」と言った。
　残余のハディースは前述と同様である。

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースは伝えている

　アッラーのみ使いは「殉教者は（人と人との間における）負債を除き、全ての罪は許される」と申された。
　前述同様なハディースは別伝承者経路でも伝えられているが、言葉に若干の相違がある。
　（すなわち）預言者は「アッラーの道においての死は（人と人との間における）負慣を除き、全てのことを許す」と申された。

天国における殉教者の魂について、また彼等が主の御許で生き返り生活の糧を与えられることについて

マスルークは伝えている

われわれはアブドッラー（ビン・マスウード）に「**アッラーの道のために殺害された者を死んだと思ってはならない。**

いや彼等は主の御許で扶養されて生きている」（クルアーン第 3 章 169 節）について尋ねた。

すると彼は（次のように)述べた。

「それについてわれわれは（アッラーのみ使いに）お尋ねした。

するとその御方は『殉教者達の魂は主の玉座に懸けられたシャンデリアの中に巣をいとなむ緑の鳥達の体内に住む。

彼等は天国の中の、彼等の好む場所で食べてそのシャンデリアに戻って休む。

いつぞや、主は彼等を御覧になり“なんじ等、何か欲しいものがあるか”と申された。

彼等は“これ以上何をわれわれが望みましょうか、われわれは天国の好む場所にて食べております”と申し上げた。

その時主は彼等にその問を三度発せられた。

彼等は、彼等が主の問にお答えするまで主が同じ問を発し続けられることを知り“主よ、われわれがもう一度あなたの道のために殉教出来ますよう、われわれの魂を元の肉体にお戻し下さるようお願い申し上げます”と申し上げた。

主は彼等が十分に満ち足りていることをお知りになり、彼等の傍から去られた』と申された」

聖戦に参加することと緩急に備えること

アブー・サイード・フドリーは伝えている

ある男が預言者の所に来て「最良の人とはどのような人物でしょうか」と言った。

み使いは「自身の財産や生命を投げうってアッラーの道のために戦う者である」と申された。

その男は「それに次ぐ者はどのような者ですか」と尋ねた。

その御方は「峡谷にて（人々から遠ざかっての意）アッラーを己の主として崇拝し、人々には悪しきことをせぬ者である」と申された。

このようなハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

それによれば**アブー・サイード・フドリー**は（次のように）伝えている

ある男が「アッラーのみ使いよ、最良の人とはどのような人物でしょうか」と言った。

み使いは「アッラーの道のため、自己の財産や生命を投げうって戦う信者である」と申された。

男は「それに次ぐ者はどのような者ですか」と言った。

その御方は「峡谷にて、遠く人々から離れて主を崇拝し、悪しきことを致さぬ者である」と申された。

このハディースは言葉に若干の相違をもって、別伝承者経路でも伝えられている。
（それによれば）み使いは「ある峡谷にいる者」と申された。
（そして次の問の答の中で）「それに次ぐ者は（これこれの）者」とは申されなかった。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「最良の人生を送る者、それはアッラーの道のための戦に備えて馬の手綱を握り、一度悲鳴を、あるいは助けを呼ぶ声を聞いた時は、死を決して馬の背にうちまたがり、飛ぶが如くに目的の地に馳せ参ずる者である。

（次は）小群の羊を伴い、深山に、あるいは漢谷に住んで常に礼拝を挙行し、ザカートを行い、彼に死が訪れるまで主を崇拝する者、このような人物を除き他に良き者はない」と申された。

このようなハディース二種が別の伝承者経路でも伝えられている。

その両者間には言葉に若干の相違があるが、それらは無視されてよいものである。

一人が他の一人を殺害する状況にある二人が天国に入ることの説明

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーは二人の男を御覧になって微笑まれる。
その二人の中の一人は他の一人を殺害するが、その両者は天国に入るのである」と申された。
すると人々は「アッラーのみ使いよ、それはどういうことですか」と言った。
み使いは「その者（殺される者）は至高偉大なるアッラーの道において戦って殉教する。
それからアッラーはその殺害者をお許しになり、彼はイスラームに帰依し、そして至高偉大なるアッラーの道において戦い、そして殉教するからである（注）」と申された。

（注）二人の男とは一人はムスリムで他はカーフィル（不信者）である。
ムスリムはアッラーの道でこの不信者と戦って殺されて天国に入る。
それから不信者もアッラーのお導きでイスラームに帰依し、アッラーの道で戦って殉教し、そして天国に入れられるのである

このハディースは別の伝承者経路でも伝えられてる。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーは二人の男を御覧になって微笑まれる。
その二人の中の一人は他の一人を殺害するが、その両者は天国に入るのである」と申された。
人々は「アッラーのみ使いよ、それはどういうことでしょう」と言った。
み使いは一人は（アッラーの道のために）殺される者で天国に入る。
それからアッラーは別の一人をお許しになって彼をイスラームにお導きになる。
こうして彼はアッラーの道のために戦って殉教するからである」と申された。

不信者を殺害し、それからイスラームに帰依する者について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「不信者とそれの殺害者（イスラームに帰依する者）が地獄で共に集うことは絶対にない」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「一人が他の一人に危害を負わせるような状態の二人ではあっても、彼等が地獄で共に集うようなことは決してない」と申された。
すると「アッラーのみ使いよ、それはどのような者達ですか」と問う声があった。
み使いは「不信者を殺害した信者で（たとえその者が深き罪を負うていても）その後はひたすら正道を歩み続ける（者—イスラームのために最善を尽くす者—である）」と申された。

アッラーの道のために行うサダカの恩典と、それに倍加する報酬に関して

アブー・マスウード・アンサーリーは伝えている

ある男が端綱のついた雌らくだを引いて来た。
そして「これをアッラーの道のために(提供致します)」と言った。
アッラーのみ使いは「それによってあなたは審判の日、すべてに端綱がつけられた七百頭の雌らくだが与えられる」と申された。
これに類似するハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アッラーの道のために赴く者への装備を用意する者と、戦士の家族に善行をなす者の徳に関して

アブー・マスウード・アンサーリーは伝えている

ある男が預言者の所に来て「私の乗用動物が死んでしまいました。

それで私にその代りのものをお与え下さい」と言った。

その御方は「それは私には無い」と申された。

すると一人の男が「アッラーのみ使いよ、私が彼にその乗物を用意出来る者をお世話致しましょう」と言った。

するとアッラーのみ使いは「善きことに手引きした者は、（実際に）それを行った者と同等の報酬がある」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アスラム族の若者が「アッラーのみ使いよ、私は（アッラーの道のための）戦いに参加したいのですが、私にはそれへの装備がありません」と言った。

み使いは「某の所に行くがよい。彼は（聖戦のための）準備をしていたが病気になってしまった」と言われた。

そこでその若老はその男の所に行き「アッラーのみ使いがあなたに挨拶の御言葉を賜りました。

そしてその御方は、あなたが用意された装備を私に与えるよう、申されております」と言った。

その男は（彼の妻に）「彼に私が用意したものを与えよ。

一物たりとも与え惜しんではならぬ。

アッラーに誓い、彼に対し一物たりとも与え惜しんではならぬ。

そうしてこそお前にアッラーの祝福がある」と言った。

ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニーは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーの道のための戦に赴く者のために装備を整えた者は、遠征した（者と同様の報酬を得る）。

また聖戦に赴いた者の家族に良くする者、その者も遠征した者と同様である」と申された。

ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニーは伝えている

預言者は「（アッラーの道のための）戦に赴く者のために装備を整えた者は遠征したと同様の者である。

また聖戦に赴いた者のためにその家族を世話する者も遠征したと同様の者である」と申された。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いはフザイル部族の中のラフヤーン族に対して軍隊を派遣された時「男子各二名の中（一人は後方に残し）他の一人は出陣させよ。

だが報酬は両者で均等に分けられる」と申された。

このハディースは**アブー・サイード**・フドリーを根拠とし、異った伝承者経路で伝えられている。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは軍隊をラフヤーン族に派遣された時「男子各二名の中、一人は出陣させよ」と申され、

次に指揮官に「出陣せる者の後に残ってその家族や財産を大切に守る者は、出陣せる者と報酬を二等分する」と申された。

アッラーの道のために砕身する人々の妻達の神聖さと、後方に残ってその妻達との間で裏切り行為をなす罪の重大さについて

スライマーン・ビン・ブライダは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「聖戦に赴いた人々の妻達の神聖さは（それに参加せず）後方に残った者達の母の神聖さと同じようなものである。

アッラーの道のために砕身する男の家族の世話のために残り、そしてその家庭で（それがいかなる事柄であろうと）裏切り行為をなす者は、審判の日、その戦士の前に必ず立たされる。

（裏切り者は）その戦士が（その功績によってどのようなものでも）望むものを得る（のをただ見ているだけである）これについて諸君はどう考えるか」と申された。

このハディースは同一の人物を根拠として別の伝承者経路でも伝えられている。

このハディースは言葉に僅少の相違をもって、**アルカマ・ビン・マルサド**を経由しても伝えられている。

（すなわち）“聖戦に砕身せる者は「汝の功績により汝が好むものを取るがよい」と言われる。

それからアッラーのみ使いはわれわれの方を向かれて「あなた方は（これについて）どう考えるか」と申された”

アッラーの道のために砕身する人々の妻達の神聖さと、後方に残ってその妻達との間で裏切り行為をなす罪の重大さについて

スライマーン・ビン・ブライダは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「聖戦に赴いた人々の妻達の神聖さは（それに参加せず）後方に残った者達の母の神聖さと同じようなものである。

アッラーの道のために砕身する男の家族の世話のために残り、そしてその家庭で（それがいかなる事柄であろうと）裏切り行為をなす者は、審判の日、その戦士の前に必ず立たされる。

（裏切り者は）その戦士が（その功績によってどのようなものでも）望むものを得る（のをただ見ているだけである）これについて諸君はどう考えるか」と申された。

このハディースは同一の人物を根拠として別の伝承者経路でも伝えられている。

このハディースは言葉に僅少の相違をもって、**アルカマ・ビン・マルサド**を経由しても伝えられている。

（すなわち）“聖戦に砕身せる者は「汝の功績により汝が好むものを取るがよい」と言われる。

それからアッラーのみ使いはわれわれの方を向かれて「あなた方は（これについて）どう考えるか」と申された”

殉教者には天国が約束されている

ジャービルは伝えている

ある男が「アッラーのみ使いよ、私が戦死したら、何処に行くのでしょうか」と言った。

み使いは「天国である」と申された。

すると彼は手にしていたなつめ椰子の実を投げ捨てて戦い、そして戦死した。

スワイドのハディースには“男はこれをウフドの戦の時、預言者に言った”と述べられている。

バラーウは伝えている

アンサールの一部族であるナビート族の男が来て「私はアッラー以外にいかなる神もないこと、そしてあなたがアッラーの下僕であり、かつその御方のみ使いであることを証言致します」と言った。

それから彼は前線に出て戦い、戦死した。

その時預言者は「彼が行ったのは小さきことであったが、その報酬は大である」と申された。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは、アブー・スフヤーンのキャラバンがどうしているかを偵察するため、ブサイサという男を送った。

彼は私とアッラーのみ使い以外誰もいない家に帰って来た。

（伝承者は「私はその時、預言者の妻達の中どなたも居なかったのかどうかについての説明は記憶にない」と言った）

彼（ブサイサ）はみ使いにキャラバンについての報告をした。

するとみ使いは(急いで)外に出て（人々）にお話しになった。

そして「われわれには頼みがある。

それは乗用動物の用意のある者はわれわれと行動を共にして欲しいということである」と申された。

すると男達はマディーナの近くの小高い場所に放牧してあった乗用動物を引いて来る許可を求めた。

だがみ使いは「いや、今、乗物の用意がある者のみでよい」と申された。

そしてアッラーのみ使いとその教友達は急いで出発され、多神教徒達の先廻りをしてバドル（マディーナの南西にある村落）にお着きになった。

そこへ多神教徒達がやって来た。

み使いは「諸君の中で誰一人として私の指図のない軽率な行動は、決してしてはならぬ」と申された。

多神教徒達は近づいた。
その時アッラーのみ使いは「今、天国に入るために立ち上れ。
その広さは天と地に匹敵する」と申された。
ウマイル・ビン・フマーム・アンサーリーは「アッラーのみ使いよ、天国の広さは天と地に匹敵するのですか」と言った。
み使いは「その通りである」と申された。
彼は「バフ・バフ（注）」と言った。
するとみ使いは「どうして君は（そのように興奮して）バフ・バフと言うのか」と申された。
彼は「いえ何でもございません。
アッラーのみ使いよ、しかしそれは私が天国の人々の一員となれる希望からでございます」と言った。
み使いは「そう、確かに君はその人々の一人である」と申された。
その時彼は鞄からなつめ椰子の実を取り出して食べ始めた。
そして「私がこのなつめ椰子の実全部を食べ終らない中は天国に入れないというのはもどかしいことだ」と言って、持っていたその実を投げ捨て、敵と戦い、戦死を遂げてしまった。

（注）バフ・バフというのは賞賛や感動を表わす時に発する感嘆詞

アブー・バクル・ビン・アブドッラー・ビン・カイスは伝えている

私の父が敵と対時していた時、アッラーのみ使いは「天国の門は剣の影の下にある（注）」と申された。
その時ぼろをまとった男が立って「アブー・ムーサー（アブドッラー・ビン・カイス）よ、君はアッラーのみ使いがその言葉を言われたのを聞いたか」と言った。
彼は「確かに聞いた」と言った。
するとその男は仲間の所に行き「私は諸君に(別れの)挨拶を送る」と言った後、剣の鞘を折って投げ捨ててしまった。
そして抜身の剣をもって敵に向い、戦って死を遂げた。

（注）アッラーの道のために戦って死を遂げることは天国への道につながるということ

アナス・ビン・マーリクは伝えている

ある人々が預言者の所に来て「われわれにクルアーンとスンナ（聖慣習）を教える人達をわれわれと一緒に派遣して下さい」と言った。
それでその御方は 70 名のアンサールをその人々の所に派遣した。
派遣された人々はクッラーウ（クルアーンを誦む人々）と呼ばれ、その中には私の母方の

おじハラームも入っていた。
その人達は常にクルアーンを誦み、夜は互いにその意味を研究し学んでいた。
そして昼は水を運んで来てマスジドに置き、薪を集めてそれを売り、その代価でマスジドに集る貧しい人々や身寄りのない人々に食物を買い与えていた。
預言者はそのクッラーウを例の人々の所に送ったのである。
すると彼等は（裏切って）目的の地に着く前にそのクッラーウを襲い殺害した。
その人々は（息たえだえに）「おおアッラー、われわれの預言者に“われわれはあなたにお目通りし、あなたに満足し、あなたはわれわれに満足されました”とお伝え下さい」と言った。
なお伝承者は次のようなことも話した。
一人の男がおじのハラームの所に来て、後から槍で突き、彼を串刺しにした。
その時、ハラームは「カアバの主に誓い、私は勝利したのだ」と言った。
アッラーのみ使いは教友達に「あなた方の同胞は殺害された。
そして彼等は『おおアッラー、われわれはあなたにお目通り致しました。
そしてあなたに満足し、あなたはわれわれに満足されました、とわれわれの預言者にお伝え下さい』と言い残して」と申された。

アナスは伝えている
私が名前を頂戴した私の（父方の）おじはバドルの戦ではアッラーのみ使いとは一緒ではなかった。
彼はそのことを苦にして「私はアッラーのみ使いが戦われた最初の戦には参加しなかった。
それでもしアッラーが次の機会にアッラ−のみ使いと一緒に戦う機会をお与え下さったなら、その時アッラーは私がどんな働きをするか御覧になるであろう」と言った。
彼はこのことについては（それがアッラーとの約束ごとであるので）それ以上のことを口にするのを恐れていた。
それから彼はウフドの戦でアッラーのみ使いと一緒に戦った。
その日彼はサアド・ビン・ムアーズが後退するのに出合った。
アナスは彼に「アブー・アムル（サアドの別称）よ、君はどちらに行かれるのか」と言った。
そしてなおアナスは「ああ、私は天国の香気がウフド山のたもとより出て来るのが分る」と言った。
こうして私のおじアナスは突進し、敵と戦って戦死した。
伝承者は「彼の体には剣や槍そして矢で負った傷が 80 箇所以上もあった」と伝えている。
なお彼の兄弟で私のおばであるルバイイウ・ビント・ナドルは「私は私のきょうだいの（体の傷があまりにもひどくて）彼の指先を見てはじめて彼だと分りました」と言った。
この時「**アッラーと結んだ約束に忠実であった人々が（多くいたのである）。**
ある人はその誓いを果し、またある者は（なお）待っている。

彼等は少しも(その信念を)変えなかった」（クルアーン第 33 章 23 節）の啓示があった。
伝承者は「この啓示は彼（アナス・ビン・ナドル）のため、そして彼の友人達のために下ったと人々は考えている」と言った。

アッラーの御言葉（イスラーム）が最も高められるために戦う者こそ、アッラーの道のために戦う者である

アブー・ムーサー・アシュアリーは伝えている

ベドウィーンの男が預言者の所に来て「アッラーのみ使いよ、戦利品を得るために戦う者、己の名を残すために戦う者、あるいは自己の地位や力を示すために戦う者の中、どの者がアッラーの道のために戦う者でしょう」と言った。

アッラーのみ使いは「アッラーの御言葉が最も高められるために戦う者こそ、アッラーの道において戦う者である」と申された。

アブー・ムーサーは伝えている

アッラーのみ使いは「己の武勇を示すために戦う者、一門の名誉のために戦う者、そして単なる見えのために戦う者の中、どの者がアッラーの道のために戦う者でしょうか」と尋ねられた。

アッラーのみ使いは「アッラーの御言葉が最も高められるために戦う者こそ、アッラーの道のために戦う者である」と申された。

このハディースは同一の人物を根拠として、別の伝承者経路でも伝えられている。
（それによると）われわれはアッラーのみ使いの所に来て「アッラーのみ使いよ、われわれの中で武勇を示すために戦う者」（という所に相違があるが）残余のハディースは同一である。

アブー・ムーサー・アシュアリーは伝えている

ある男が至高偉大なるアッラーの道における戦に関して尋ねた。
そして「怒りから戦う者、一門の名誉のために戦う者については」と言った。
その御方は男が立っていたので、お顔をお上げになり「アッラーの御言葉が最も高められるために戦う者こそ、アッラーの道において戦う者である」と申された。

見えや虚栄のために戦うものは火獄に落ちる

スライマーン・ビン・ヤサールは伝えている

人々はアブー・フライラの周囲から散って行った。

その時シリアから来たナーテルは彼（アブー・フライラ）に「先生、どうかあなたがアッラーのみ使いからお聞きした話をわれわれに聞かせて下さい」と言った。

彼は「よろしい、私はアッラーのみ使いが（次のように）言われるのを聞いた」と言った。

それは（以下の通りである）

審判の日、最初に審判を受けるのは殉教者として死せる者である。

彼は（審判の席に）連れてこられる。

アッラーは彼にその御方がお与えになった恩恵を一つ一つお述べになると彼はそれを認める。

その後アッラーは「（これらの恩恵に報いるための）汝の行為は何であったか」とお問いになる。

彼は「私は主のために戦って殉教致しました」と言う。

アッラーは「偽りを申せ。

汝は勇者と言われるために戦ったのではないか。

現にそのように言われていたであろう」と申される。

そして彼への命が下り、彼は顔を下方にして引きずられ火獄に投げ入れられる。

それから学問を修めてそれを教え、クルアーンを誦んだ男が連れて来られる。

アッラーは彼にその御方がお与えになった恩恵を一つ一つお述べになると彼はそれを認める。

その後アッラーは「（これら恩恵に報いるための）汝の行為は何であったか」とお問いになる。

彼は「私は学問を修めてそれを教え、主のためにクルアーンを誦みました」と言う。

アッラーは「偽りを申せ。

汝は学者と言われるために学問をした。

そして汝がクルアーンを誦んだのはカーリウ（クルアーンを誦む人）と言われるためであった。

現にそのように言われていたであろう」と申される。

それから彼への命が下り、彼は顔を下にして引きずられ火獄に投げ入れられる。

それからアッラーが富裕にさせ給いて、あらゆる種類の財貨をお与えになった男が連れて来られる。

アッラーは彼にその御方がお与えになった恩恵を一つ一つお述べになり、彼はそれを認める。

その後アッラーは「（これらの恩恵に報いるための）汝の行為は何であったか」とお問いになる。
彼は「私は主がお望みになる道においては余す所なく主のために財貨を費して参りました」と言った。
アッラーは「偽りを申せ。
汝は寛大な者と言われるためにそのようにした。
現にそのように言われていたであろう」と申される。
それから彼への命が下り、彼は顔を下にして引きずられ火獄に投げ入れられる。
このハディースは別の伝承者経路でも伝えられてる。

アッラーの道のために戦い、戦利品を得て帰る者と全くそれを得ずに帰る者に対する報酬の量

アブドッラー・ビン・アムルは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーの道において戦う軍隊で戦利品を得て帰還する者達は、後世において得る報酬の三分の二（注）を予め得てしまう。
彼等に残るのは三分の一である。
（一方）戦利品を得られなかった者達は（後世にて）完全な報酬を得る」と申された。

（注）無事の帰還と戦利品の二つを意味する

アブドッラー・ビン・アムルは伝えている

アッラーのみ使いは「（アッラーの道のために）遠征する軍隊の大小を問わず、それに参加し戦利品を得て無事帰還すれば、彼等は既に報酬の三分の二を予め得てしまったことになる。
また遠征する軍隊の大小を問わずそれに参加し、戦利品も無く苦闘し傷ついて帰る者達には（後世にて）完全な報酬が与えられるであろう」と申された（注）。

（注）聖戦に参加して苦しみ、あるいは命を落した者は、戦利品を得て無事帰還する者より報酬は多いことになる

（アッラーの道のための）行為は自ら決意し実行されてこそこの価価がある

ウマル・ビン・ハッターブは伝えている

アッラーのみ使いは「人の行為は自ら決意し実行されてこそ真の価値がある。
人は決意して行ったものについてのみ報酬を得る。
アッラーやそのみ使いのために移住した者のそれは、唯、アッラーとそのみ使いのためになされたのである。
この世の利益を得るため、またはある女性と結婚するための移住は、その目的のために移住が行われたのであり（前者のような報酬は望むべくもない）。
このハディースは別伝承者経路でも伝えられている。
それらの中の一つには「私はウマルが預言者から聞いたとして、ミンバルでその話をしているのを聞いた」と述べられている。

アッラーの道において殉教を望むのは好ましいことである

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは「真実、殉教を望んだ者は、たとえそれが達成されなかったとしても、それに対する報酬が与えられるであろう」と申された。

サフル・ビン・アブー・ウマーマは祖父の話として彼の父が話したものを（次のように）伝えている

アッラーのみ使いは「真心より、アッラーに殉教を願った者は、たとえその者がベッドの上で亡くなったとしても、アッラーはその者を殉教者の列に加え給うであろう」と申された。

アブー・ターヒルのハディースには「真心より」の言葉は述べられてはいない。

アッラーの道のための戦いにも参加せず、いかなる決意も表明せずに死せる者に対する非難

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーの道のための戦にも参加せず、それに対するいかなる決意も表明せずに死せる者の死は偽善的な死である」と申された。

途中伝承者の一人は“それはアッラーのみ使いの時代に関する事柄であったと、われわれは思う”と述べている。

病気その他余儀ない事情で聖戦に参加出来なかった者の報酬

ジャービルは伝えている

われわれはある遠征を預言者と共にした。

その時、その御方は「マディーナにはあなた方が遠くに侵攻した時も峡谷を越える時も、常に心を一にする人々がいる。

彼等は病気のために参加出来なかったのだ」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路で伝えられているが、ワキーウ（途中伝承者の一人）によって伝えられたハディースにはみ使いの言葉として「彼等は（聖戦のための）報酬をあなた方と分け合う」というのがある。

聖戦のため、船で遠征することの徳

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは常にミルハーン（預言者の養母の姉妹、またはその御方の父のおばとも言われる女性）の娘ウンム・ハラームを訪問したが、彼女はその御方に食事を提供していたのであった。

時にウンム・ハラームはウバーダ・ビン・サーミトの妻であった。

み使いがある日、彼女の所に行くと（例によって）彼女はその御方に食事を提供した。

それから彼女はその御方の頭髪に触れるために座った（注）。

するとアッラーのみ使いは眠られた。

ややあって、その御方は笑いながらお起きになった。

私は「アッラーのみ使い様、何がおかしいのですか」と申しました。

その御方は「アッラーの道のための遠征に、私の共同体の人々が玉座にある王侯、あるいは玉座にある王侯の如くに（この二つの表現のどちらを言われたのか確信はないが）堂々と洋上を航海するのを見たのである」と申されました。

彼女は「私は、アッラーのみ使い様、私を戦士達の一員に加えて下さるよう、アッラーにお祈り下さい、と申しました」と言った。

するとみ使いは彼女のために祈リ、再び横になって眠られた。

それからまたややあって、み使いは（再び）笑いながらお起きになった。

彼女は「私は、アッラーのみ使い様、何がおかしいのですか、と申しました」と言った。

み使いは「アッラーの道のために戦う私の共同体の人々を見たのだ」と言われ、最初に申された言葉を繰り返された。

彼女は「私は、アッラーのみ使い様、私を戦士達の一員に加えて下さるよう、アッラーにお祈り下さい、と申しました」と言った。

み使いは「あなたは先頭に立って進む戦士達の一人である」と申された。

こうしてミルハーンの娘ウンム・ハラームはムアーウィヤの時代に（夫と共に遠征のため）航海した。

そして陸に上り、動物（らば）に乗って進んで行く際にそれから落ちて亡くなった。

（注）髪を整えられることを心地よく思う人達があるが、預言者もそうされることを好んだのかも知れない

アナスのおば（彼の母の姉妹）**ウンム・ハラーム**は伝えている

預言者は或日、私達の所にお出になりうたたねされました。

そしてその御方は笑いながらお起きになりました。

私は「アッラーのみ使い様、何がおかしいのですか。

是非お話し下さい」と申しました。
み使いは「私は私の共同体の人々が玉座にある王侯のように堂々と洋上を航海するのを見たのだ」と申されました。
私は「私が彼等の一員となれますよう、アッラーにお祈り下さい」と言いました。
み使いは「まこと、あなたは彼等の一員である」と申されました。
それからその御方は再び眠られ、また笑いながらお起きになりました。
それで私はその御方に尋ねますと先と同じようにお答えになりました。
私は「私が彼等の一員となれますよう、アッラーにお祈り下さい」と申しました。
その御方は「あなたは先頭に立って進む兵士達の一人である」と申されました。
アナスは（次のようにも）言った。
ウバーダ・ビン・サーミトは彼女と結婚した。
彼が遠征の航海に出た時、彼女を同伴した。
帰りに（陸路を進む時）彼女にはらばが用意された。
彼女がらばに乗っている間にそれから落ち、首の骨を折って（亡くなった）。

ミルハーンの娘**ウンム・ハラーム**は伝えている
アッラーのみ使いは或日、私の近くで休まれました。
ややあって微笑されながらお起きになりました。
私は「アッラーのみ使い様、何がおかしいのですか」と申しました。
するとその御方は「私は、私の共同体の人々が（アッラーの道の戦のために）緑の海原を航海するのを見たのだ」と申されました。
それから伝承者は前述のようなハディースを述べた。

アナス・ビン・マーリクから聞いたとして**アブドッラー・ビン・アブドル・ラフマーン**は（次のように）伝えている
アッラーのみ使いは、アナスの母方の姉妹であるミルハーンの娘の所にお出でになった。
そして彼女の所で横になって休まれた。

この後のハディースは前述のものと同様である。

至高偉大なるアッラーの道において、前線の警備に当たる兵士の徳

サルマーンは伝えている

私はアッラーのみ使いが「昼夜を問わず（背後にある者を守るため）警備に当ることは、一月断食をし、毎夜礼拝に立つことより価値がある。

そしてもしその者が（義務の遂行中に）亡くなれば、彼が果して来た行為に対して報酬があり、また彼には（アッラーの許で）永遠の糧が与えられる。

そして彼は墳墓の責め苦に合うこともない」と申された。

前述のハディースはサルマーン・ハイルを根拠と、別の伝承者経路でも伝えられている。

殉教者に関して

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「人が道を歩いている間に、その道の上に茨の木を見つけたらそれをわきにどけよ。

アッラーはその行為を愛で給いて彼の罪をお許し下さる」と申された。

また、アッラーのみ使いは「殉教者には 5 類型がある。

疫病で亡くなる者、激しい下痢が因で亡くなる者、溺死する者、破壊物の下敷になって亡くなる者、そして至高偉大なるアッラーの道での殉教者である」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方の間ではどのような者を殉教者と考えているか」と申された。

人々は「アッラーのみ使いよ、それはアッラーの道において殺された者です」と言った。

み使いは「（もしそれだけが殉教者であるとすれば）わが共同体の殉教者の数はまことに少数である」と申された。

彼等は「それではそれはどのような人々なのですか」と言った。

その御方は「アッラーの道において（戦いそして）殺された者は殉教者である。

アッラーの道において死せる者は殉教者である。

疫病で死せる者も殉教である」と申された。

イブン・ミクサムは「私は、アッラーのみ使いが『溺死せる者は殉教者である』と申されたという、あなたのお父さんの言葉が真実であるということを証明する」と言った。

スハイルは伝えている

ウバイドッラー・ビン・ミクサムは「私は（アッラーのみ使いの）『溺死せる者は殉教者である』（という言葉を付加した）あなたの兄弟（正しくは、あなたの父、であると言われる）の言葉が真実であるということを証明する」と言った。

このハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。
その中でスハイルは「ウバイドッラー・ビン・ミクサムはアブー・サーリフより聞いたとしてこの話を私にした。
その中で彼は『溺死せる者は殉教者である』（というみ使いの言葉を）付加した」と言った。

スィーリーンの娘**ハフサ**は伝えている

アナス・ビン・マーリクは私に「ヤヒヤー・ビン・アブー・アムラは何が原因で亡くなったのですか」と言った。

私は「疫病が原因です」と言った。

すると彼は「アッラーのみ使いは『ムスリムが疫病で亡くなれば殉教である』と申された」と言った。
このようなハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

弓術を修め、それを他に奨励することの徳、また、それを放棄した者への非難

ウクバ・ビン・アーミルは伝えている

アッラーのみ使いがミンバルで「あなた方は人々のため、可能なだけ力を備えておくよう心掛けよ。

力は弓術にてつけられるのを知るがよい。

力は弓術にてつけられるのを知るがよい」と申された。

ウクバ・ビン・アーミルは伝えている

私はアッラーのみ使いが「あなた方には広大な大地が開放されるであろう。

そしてアッラーは（あなた方の敵に対し）あなた方が満足するような御配慮を給わるであろう。

しかしあなた方は誰一人として弓術の修業を放棄してはならぬ」と申されるのを聞いた。

このハディースはウクバ・ビン・アーミルを根拠として、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブドル・ラフマーン・ビン・シャマーサは伝えている

フカイム・ラハミーはウクバ・ビン・アーミルに「あなたは二つの事柄の中いずれを選ぶべきか迷っている。

あなたはお年寄りでそれを行うのが困難なのだ」と言った。

ウクバは「もしそれがアッラーのみ使いからお聞きした言葉でないならば、私はそのことに悩むこともなかったのに」と言った。

ハーリスは「私はイブン・シャマーサに『それは何ですか』と尋ねた」と言った。

彼は「それはアッラーのみ使いの『弓術を修めた者で、後にそれを放棄した者はわれわれの仲間ではない。

あるいは（アッラーのみ使いに）背く者である』という言葉である」と言った。

「私の共同体の一グループは真理の擁護者として存続するであろう。これらの人々に敵対する者も彼等に危害を及ぼすことは出来ない」というみ使いの言葉について

サウバーンは伝えている

アッラーのみ使いは「私の共同体の一グルプ（注）は真理の擁護者として存続するであろう。

これらの人々に敵対する者も彼等に危害を及ぼすことは出来ない。

これらの人々はアッラーの御命令（死）があるまでその状態を保つであろう」と申された。

クタイバのハディースには「彼等はその状態を保つであろう」という言葉はない。

（注）このグループの人々については、神学者達、あるいはスンナと共同体の民、またはハディースの徒、その他様々な意見があり定説はない

ムギーラは伝えている

私はアッラーのみ使いが「私の共同体の中の一グループの人達は人々の勝利者としてアッラーの御命令が下されるまで、その状態を続けるであろう」と申されるのを聞いた。

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

ジャービル・ビン・サムラは伝えている

預言者は「この宗教は絶えることなく存続し、ムスリム達のグループは復活の時が来るまで、それを防衛するために戦い続けるであろう」と申された。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私はアッラーのみ使いが「私の共同体の一グループは復活の日まで勝利者として真理の擁護のために戦い続けるであろう」と申されるのを聞いた。

ウマイル・ビン・ハーニーは伝えている

私はムアーウィヤがミンバルの上で（次のように）話しているのを聞いた。

私（ムアーウィヤ）はアッラーのみ使いが「私の共同体の一グループはアッラーの命令に服従し続けるであろう。

彼等に敵対する者も彼等に危害を及ぼすことは出来ぬ。

彼等は人々の勝利者としてアッラーの御命令があるまで存続するであろう」と申されるのを聞いた。

ヤジード・ビン・アサンムは伝えている

私はムアーウィヤ・ビン・アブー・スフヤーンが項言者から聞いたハディースを話すのを聞いた。

私は預言者からの話としては、彼がこれ以外のものをミンバルで話したのを知らない。

（すなわち）アッラーのみ使いは「アッラーは恩恵に浴させようとする者には宗教についてお教えになるであろう。

ムスリム達の一グループは、復活の日まで敵対する者に勝利を博しながら、真理のために戦い続けるであろう」と申された。

アブドル・ラフマーン・ビン・シャマーサ・マフリーは伝えている

私がマスラマ・ビン・ムハッラドの所にいた時、彼の許にはアブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースもいた。

アブドッラーは「最後の審判の時は、この世に最悪の族がはびこった時に起るであろう。

その族はジャーヒリーヤの人々より悪党である。

彼等はアッラーにどのような物でも請い求めるのだ。

彼等がこのような話をしていた時、ウクバ・ビン・アーミルが訪れた。

マスラマは彼に「ウクバよ、アブドッラーが話していることを聞くがよい」と言った。

ウクバは「彼は本当に良く知っている。

ところで私はアッラーのみ使いが『私の共同体の一グループは彼等の敵を制し、アッラーの御命令に服従して戦い続ける。

敵はそれらの人々に対していかなる危害も及ぼすことは出来ず、最後の審判の時が来るまで、そのまま（この世に）残り続けるであろう』と申されるのを聞いた」と言った。

するとアブドッラーは「その通りである。

それからアッラーは麝香のように香わしい風を吹かせ給う。

その感触は絹のようである。

その風は心にわずかでも信仰心のある者は全て連れ去る。

こうして後には最悪の族が残り、それらの者達の上に最後の審判の時が起るのである」と言った。

サアド・ビン・アブー・ワッカースは伝えている

アッラーのみ使いは「西方の人々（注）は最後の審判の時が来るまで、真理の擁護者として存続するであろう」と申された。

（注）アラビア半島の人々を指す

家畜を連れて移動する場合のそれへの配慮、そして夜は道路から離れて休息すること

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方が肥沃な地を旅する時は、ラクダにその地の牧草を食む機会を与えよ。
また乾燥しきった土地を旅する時は（気力のある中に）ラクダの歩みを速めるがよい。
夜間休息する場合、（テントを張る場所は）道路から離れた所にせよ。
そこは毒をもつ夜行性の小動物の住み家である故」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方が肥沃な地を旅する時は、ラクダにその地の牧草を食む機会を与えよ。
また乾燥しきった地を旅する時は、その家畜が元気な中に急いでそこを通過するがよい。
夜間休息する場合は道路から遠ざかるがよい。
そこは毒をもつ夜行性小動物の住み家である」と申された。

旅は難儀なもの故、仕事を終えたら早く家族の許に戻ることが望ましい

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「旅は難儀なものの一つである。
それは安眠、食事、飲み物等に支障を来たす。
故にあなた方は誰でも目的を達したらす早く家族の許に戻るがよい」と申された。

旅から戻った者が深夜、家族の許に帰るのは好ましくない

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは夜遅くその御方の御家族の許にお帰りになることはなかった。
その御方が家族の許に帰るのは朝か夕刻であった。
アナス・ビン・マーリクを根拠とするもので、前述のハディースと若干の相違をもったものがある。
それには"み使いは（夜間遅くにはその御方の）家庭にはお入りにならなかった"と述べられている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

われわれはアッラーのみ使いとある遠征を共にした。
われわれがマディーナに帰り、それぞれの家に向った時、み使いは「しばらくぶりで夫を迎える妻が髪を梳り、性毛を剃るため、家に入るのを夕刻まで遅らせよ」と申された。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方が（旅から）帰った時は、しばらくぶりで夫を迎える妻が性毛を剃り、髪を梳るまで家に入るのを遅らせよ」と申された。
このハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは、長い間家を留守にしていた男が夜更けに家族の許に帰ることを禁止された。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは、長い間家を留守にしていた男が、家族に背信行為がなかったかどうか、あるいはそれらの動向を知るために、夜更けてから家族の許に帰ることを禁止された。
前述のハディースの別伝承にスフヤーンが「私はこれがそのハディースにあったかどうか知らない」と言った。
それはみ使いの"家族に背信行為がなかったかどうか、あるいはそれらの動向を知るために"という言葉である。
このハディースはジャービルを根拠として別の伝承者経路でも伝えられている。
それらには預言者の「夜更けに帰ることは好ましくない」という言葉はあるが、「家族に背信行為がなかったか、あるいはそれらの動向を知るために」という言葉は述べられてはいない。

狩猟、屠殺動物食用動物についての書

調教された犬による狩猟

アディーユ・ビン・ハーティムは伝えている

私は「アッラーのみ使いよ、私が調教された何頭かの犬を放ち、それらが獲物を捕らえて来た時、それに対して（慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において、と）アッラーの御名を唱えて（畜殺すれば、食しても良いでしょうか）」と言った。

するとその御方は「あなたが、調教された犬を放ち（それらを放っている間に）アッラーの御名をその犬に対して唱えた場合には食してよい」と申された。

私が「たとえ犬がその獲物を殺してしまった場合でも（食してよいですか）」とお尋ねすると「たとえそれらが殺してしまっても、あなたの犬以外がそれに加わっていなければよい」と申された。

私は（更に）「私が獲物を捕るためミアラード（羽も矢じりも付いていない、重い矢のような狩猟用具）を投げ、それで仕留めた場合は（どうでしょう）」とお聞きすると、

「もしあなたがミアラードを投げて獲物を刺し通した場合は食してよい。

だが、それが獲物に当って地面に落ち（あるいは倒れているのを撲殺したもの）は食してはならぬ」と申された。

アディーユ・ビン・ハーティムは伝えている

私はアッラーのみ使いに「われわれはこれらの犬を使って狩猟している者ですが（どのようにしたら良いのでしょうか）とお尋ねした。

するとその御方は「もしあなたがあなたの調教された何頭かの犬を放ち、それらに対してアッラーの御名を唱えた時は、たとえ犬が獲物を殺してしまった場合でも、あなたのために獲ったものは食してよい。

だが、もし犬が（獲物の一部でも食べたら）それは食してはならぬ。

私は、犬が（主人のためではなく）已のためにそれを捕らえたのではないかと案ずるからである。

また、あなたの犬以外の犬が加わって獲ったものも食してはならぬ」と申された。

アディーユ・ビン・ハーティムは伝えている

私はアッラーのみ使いにミアラードについてお尋ねした。

するとその御方は「それが突き刺さって仕留めたものは食してよい。

だが、それが当っただけで倒したものは撲殺故に食してはならぬ」と申された。

更に私は犬についてお尋ねした。
するとみ使いは「あなたがあなたの犬を放ち、そしてアッラーの御名を唱えた時は食してよい。
だが、犬が少しでも食べた獲物は食してはならぬ。
それは犬が己のために捕らえたのである」と申された。
更に私は「もし、私の幾頭かの犬の中に他の犬が入っていて、どちらの犬が獲物をとったか分らない場合は（どうでしょうか）とお尋ねした。
その御方は「食してはならぬ。
あなたは、あなたの犬に対してアッラーの御名を唱えたのであり、他の犬に対してはそれを唱えなかったのだから」と申された。

アディーユ・ビン・ハーティムは伝えている
私はアッラーのみ使いにミアラードについてお尋ねした。
残余のハディースは前述と同様である。

このハディースはアディーユ・ビン・ハーティムを根拠とし、別の伝承者経路でも伝えられているが、それは前述のものと同様である。

アディーユ・ビン・ハーティムは伝えている
私はアッラーのみ使いにミアラードによる狩猟についてお尋ねした。
み使いは「それが突き刺さって仕留めたものは食して良い。
だが、それが当っただけで倒したものは撲殺である（故に食してはならぬ）」と申された。
私はまた犬による狩猟についてお尋ねした。
み使いは「それがあなたのために捕えて来たものであり、なおかつ少しも食べられていないものであれば食してよい。
また、その犬が捕えた獲物を殺してしまっていた場合も合法的な屠殺である。
だが、もしあなたがそこに他の犬を見つけ、それが一緒になって獲物を捕り、そして殺したことを懸念する場合は食してはならぬ。
あなたはあなたの犬に対してアッラーの御名を唱えたのであり、その他のものに対してはそれを唱えなかったのであるから」と申された。

このハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

シャウビーは伝えている
アディーユ・ビン・ハーティム（彼はナフラインの地において、われわれの隣人であり親友であり行動を共にした人物であった）は預言者に（次のように）お尋ねした。

「私が(狩猟のため)私の犬を放ちましたところ獲物を捕らえたのですが、そこに私の犬ではない犬がおりまして、さてどちらがその獲物を捕らえたのか分らないのです」と言った。
その御方は「それは食してはならぬ。
あなたはあなたの犬に対してアッラーの御名を唱えたのであり、他のそれに対しては御名を唱えなかったのであるから」と申された。

このハディースはアディーユ・ビン・ハーティムを根拠とし、別の伝承者経路でも、伝えられている。

アディーユ・ビン・ハーティムは伝えている

アッラーのみ使いは私に「あなたがあなたの犬を（獲物を捕えるために）放った時は、アッラーの御名を唱えよ。
そして犬があなたのために獲物を捕え、その捕獲物がまだ生きていたら屠殺せよ。
もし犬が殺してしまって（犬に）全く食べられていないものであったら食してよい。
もしあなたの犬に他の犬が加わっていて（獲物を）殺したのが分ったら食してはならぬ。
あなたはどちらの犬がその獲物を殺したか分らぬであろうから。
また、あなたが矢を放ったならアッラーの御名を唱えよ。
それでたとえそれ（獲物）が一日程見失しなわれたものであっても、あなたの矢傷のみによって捕獲されたものであれば、あなたの考え次第でそれは食してよい。
もしそれが水中にあったことが分ったら食してはならぬ」と申された。

アディーユ・ビン・ハーティムは伝えている

私はアッラーのみ使いに狩猟についてお尋ねした。
み使いは「あなたが矢を射た時はアッラーの御名を唱えよ。
それで、もしその矢で獲物を射殺したのが分ったら、それを食してよい。
だが、それが水中に落ちていた場合は別である。
それは獲物が水で死んだのか、それともあなたの矢で死んだのか分らないからである」と申された。

アブー・サアラバ・フシャニーは伝えている

私はアッラーのみ使いの所に行き「アッラーのみ使いよ、われわれは聖典の民の人達の土地に住み、彼等の器で食事をしています。
そして私の弓で、また調教された犬あるいはされていない私の犬を使って狩猟の出来る地で生活しております。
そのような事柄の中でわれわれにとって合法的なもの（またそうでないもの）は何であるかお話し下さい」と言った。
その御方は「あなた方が聖典の民の地に在って、彼等の器で食事をしているということに

関して、もしあなた方が彼等の器以外のものを見つけられるならそれ（今まで使用していたもの）で食さないこと。
だが、それ以外のものが無いのであればぱ、それを洗って使用するがよい（注）。
また、あなたが狩猟地に住んでいるということに関しては、あなたがあなたの矢で射止めたものはアッラーの御名を唱えた後に食べよ。
また調教された犬が捕えた物もアッラーの御名を唱えた後に食べよ。
また、あなたの犬で調教されていないものが捕えた獲物で（もしそれが生きていたらイスラーム法に基づいた方法で）それを屠殺してから食べよ」と申された。

（注)聖典の民の中にはイスラームで禁じられているもの、例えば豚肉や酒をその器で口にしているためである
前述のハディースは、別の伝承者経路を経ても伝えられている。
しかしイブン・ワハブ（途中伝承者の一人）のハディースには“弓の狩猟”という言葉は述べられてはいない。

見失った獲物がかなりの時間を経て見つかった場合について

アブー・サアラバは伝えている

預言者は「あなたが矢で仕留めた獲物が、しばらくたった後に見つかった場合でも悪臭を放っていなければ食してよい」と申された。

アブー・サアラバは伝えている

預言者は（仕留めた者が）三日後にその獲物を探し当てた場合について「もしそれが悪臭を放っていなければ食してよい」と申された。

アブー・サアラバ・フシャニーを根拠として伝えられた別伝承のハディースには言葉に若干の相違をもつものがある。

（すなわち）預言者は犬によって捕獲されたものについて「三日後でも悪臭を放たぬものは食してよい。

（もし悪臭を放つものであれば）放置せよ」と申された。

牙をもつ野獣、また鉤爪をもつ鳥はすべて食べることを禁止される

アブー・サアラバは伝えている

預言者は牙をもつ野獣はすべて食すことを禁じられた。

このハディースの別伝承者経路を経たものの中で“ズフリーは「われわれはこれについては、われわれがシャームに来るまで聞かなかった」と言った”ということを付加しているのがある。

アブー・サアラバ・フシャニーは伝えている

アッラーのみ使いは牙をもった野獣はすべて食すことを禁じられた。

イブン・シハーブ（途中伝承者）は「私は、シャームの法学者アブー・イドリースが（それについて）私に話すまでは知らなかった。

また、ヒジャーズに住むわれわれの学者達からもそれは聞かなかった」と語っている。

アブー・サアラバ・フシャニーは伝えている

アッラーのみ使いは牙をもつ野獣を食すことを禁じられた。

このハディースは表現に若干の相違をもって多くの別伝承老経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

み使いは「牙をもつ野獣はすべて、それを食すことはハラーム（禁制の事柄）である」と申された。

このハディースは異った幾つかの伝承者経路によっても伝えられている。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは牙をもつ野獣のすべて、そして鉤爪をもつ鳥のすべてを（食することを）禁じられた。

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

イブン・アッバースは「アッラーのみ使いは、牙をもつ野獣のすべてと鉤爪をもつ鳥のすべてを食すことを禁じられた」と言った。

このハディースはイブン・アッバースを拠り所とし、異った伝承者経路を経て伝えられている。

海の動物はたとえ死んでいても食してよい

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いはアブー・ウバイダをリーダーとして、クライシュのキャラバンを待ち伏せるため、われわれを派遣された。
われわれの荷にはなつめ椰子の実の入った皮の袋が渡されていたが、彼（リーダー）はそれ以外にわれわれの食糧は持っていなかった。
アブー・ウバイダはわれわれにその実を（毎日）一個づつ与えていた。
アブー・ズバイルは「あなた方はそれをどうしていたのですか」と言った。
するとジャービルは「われわれはそれを幼児がしゃぶるようにしゃぶり、その後で水を飲んで一日をしのいでいた。
そしてまた、われわれは落ちた木の葉を叩いて柔かくし、それを水に湿らせて食べていた」と言った。
続いて彼は「時に、われわれが海岸に出ると、そこに巨大な砂丘のような形をしたものが打上げられていた。
それに近づいて見ると、何とそれはアンバル（まっこう鯨）と呼ばれている動物であった。
アブー・ウバイダは『死んでいる。
だが問題はない。
われわれはアッラーの道のために、アッラーのみ使いから派遣されている者だ。
それに君達は飢え窮地に陥っている。
故にそれを食べよ』と言った。
われわれ 300 人はそこに一ヶ月滞在し（それを食べて）太った」と述べた。
続いてジャービルは（次のように）話した。
私は皆がその動物の目に溜った脂肪を壷で汲んでいるのや、雄牛一頭分程の（または雄牛一頭にも相当する量の肉片を）一切れ一切れと切断するのを見た。
アブー・ウバイダはわれわれの中の 13 人を前方に呼んで、彼等を鯨の目の空洞の部分に座らせて見せた。
また、その肋骨を一本取ってそれを立てた。
それはわれわれが所有していた最も大きなラクダに鞍を置いても、その下を通れる程（巨大なものであった）
こうしてわれわれはその肉から薄く切った（旅行用の）乾燥肉を自給出来たのである。
われわれがマディーナに帰った時、アッラーのみ使いの所に行ってそのことをお話しした。
するとみ使いは「それはアッラーがあなた方のために運んで下さった食糧である。
今その肉を少しでも持っているか、あったらわれわれに食べさせよ」と申された。
そこでわれわれはその一部をアッラーのみ使いに差し上げた。
するとその御方はそれをお食べになった。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いはラクダに乗ったわれわれ300人を派遣されたが、その時のリーダーはアブー・ウバイダ・ビン・ジャッラーフであった。

われわれはクライシュのキャラバンを待ち伏せして海岸に半月止まっていた。

その時（食糧不足から）激しい飢餓に見舞われた。

それでわれわれは落ちた木の葉も食べた。

（こういうわけでわれわれは）"木の葉の分遣隊"と呼ばれている。

折りしも、アンバルと呼ばれている動物が海岸に打ち上げられた。

われわれは半月の間それを食べ、その御陰で体に脂肪がつき元の状態に戻ることが出来た。

アブー・ウバイダはその肋骨を一本取り、それを立てた。

それからその隊の中の最も背の高い男と、最も背の高いラクダを選び、その男をそのラクダに乗せたが、それでもその（肋骨の）下を通ることが出来た。

また一集団がその動物の眼孔に座ることも出来た。

われわれはその窪みから何杯もの脂を壷で汲み出した。

ところでわれわれは皮の入れ物に入ったなつめ椰子の実を持っていた。

アブー・ウバイダはわれわれの一人一人にそれを一握りづつ与えていたが（それも乏しくなると）一個一個与えていた。

それが無くなってしまった時、われわれは"無"の空しさを切実に覚えた。

アムルはジャービルが"木の葉の分遣隊"に関して（次のように）話すのを聞いた

ある者が三頭のラクダを屠った。

それから三頭、そして更に三頭と屠った後、アブー・ウバイダは（乗用動物が不足するのを懸念して）その行為を禁止した。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者はわれわれ300人を派遣された。

その時われわれはわれわれの首に食量の入った袋を下げていた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは300人から成る軍勢を派遣され、そのリーダーとしてアブー・ウバイダ・ビン・ジャッラーフを任命された。

ところで彼等の食量が乏しくなるとアブー・ウバイダは彼等の食量を食量袋に集めた。

そしてそれをわれわれに分け与えていたがそれもいよいよ不足して来ると、一日に与えられる食糧はなつめ椰子の実一個だけとなった。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いが一団の軍勢を海岸に派遣された時、私はその中の一人であった。

残余のハディースは前述のものとほとんど同じであるが、ワハブ・ビン・カイサーンのハディースには“その軍隊は鯨を 18 日間食べた”と述べられている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いはジュハイナ族の地に遠征隊を派遣した。

そして一人の男を彼等の指揮官として任命された。

残余のハディースは前述のものと同一である。

飼育されたロバの肉を食することは禁止されている

アリー・ビン・アブー・ターリブは伝えている

アッラーのみ使いはハイバルの戦（注）で、女性との戯れの享楽や、飼育されたロバの肉を（食べること）禁止された。

（注）マディーナとダマスカスを結ぶ道筋に位置するオアシスのある町。
ここにはユダヤ人が住んでいたが 628 年、預言者はここに遠征した

このハディースは言葉に僅少の相違をもって、異った伝承者経路で伝えられている。

アブー・サアラバは伝えている

アッラーのみ使いは飼青されたロバの肉を食すことを禁じられた。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは飼育されたロバの肉を食すことを禁止された。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、ハイバルの戦で人々が飼育されたロバを食べざるを得ないような状態にあったが、それを禁止された。

シャイバーニーは伝えている

私はアブドッラー・ビン・アウファーに飼育されたロバの肉について尋ねた。
すると彼は（次のように）言った。
アッラーのみ使いが御一緒であったハイバルの戦で、われわれは飢えに見舞われた。
その時、その町の外れで飼われていたロバを手に入れ、それを屠殺した。
そして、われわれの土鍋が沸騰した時、アッラーのみ使いの御命令を告げる者の「土鍋を履がえせ、飼育されたロバの肉は少しも食してはならぬ」という呼び掛けがあった。
私は「み使いはどういうことでそれを禁じられたのでしょう」と言った。
彼は「（そのことについて）われわれは話し合った。
するとわれわれの一人は『み使いはそれを決定的に禁じられた』と言った。
またある者は『それが五分の一づつに分けられなかった（注）ために禁じられたのだ』と言った」と述べた。

（注）ここではロバが戦利品と見做されたわけである。
つまり戦利品は五等分され、その一つは国庫へというように、それぞれ定められた所に分

けられる。
従って、ロバを食すのが禁止されたのはそれが分割される前のものであったからと考えられたのである。
しかし、飼育されたロバを食すことはそのような一時的理由ではなく、決定的禁止事項としてなされたものである

スライマーン・シャイバーニーは伝えている
私はアブドッラー・ビン・アウファーが（次のように）言うのを聞いた。
われわれはハイバルでの幾夜か、飢えに見舞われた。
そこでの戦が行われた時、われわれは飼育されたロバを手にし、それを屠殺した。
そしてその肉を入れた土鍋が沸騰した時、アッラーのみ使いの御命令を告げる者の「土鍋を覆せ。
飼育されたロバの肉は少しも食してはならぬ」という呼び掛けを聞いた。
これについて人々は「アッラーのみ使いがそれを禁じられたのは、それが五分の一ずつに分けられなかったためである」と言った。
またある人々は「み使いはそれを決定的なものとして禁止されたのだ」と言った。

アディーユ・ビン・サービトは伝えている
私はバラーウとアブドッラー・ビン・アウファーが「われわれは飼育されたロバを手に入れ、それを料理した。
その時アッラーのみ使いの御命令を告げる者の『土鍋を覆せ』という呼び掛けがあった」と話すのを聞いた。

バラーウは言った
ハイバルの戦にわれわれは飼育されたロバを手に入れた。
その後アッラーのみ使いの御命令を告げる者の「土鍋を覆せ」という呼び掛けがあった。
サービト・ビン・ウバイドは「私はバラーウが『われわれは飼育されたロバの肉を（食べることを）禁じられた』というのを聞いた」と言った。

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている
アッラーのみ使いは飼育されたロバの肉は、それが生であっても煮てあっても投げ捨てるよう、われわれに御命じになった。
その後その御方はそれを食すことについては決して御命じにはならなかった。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いが（飼育されたロバを食すことを）ハイバルの戦で禁じられたのは、それが人々のために荷を運ぶ動物で（不足すると不便なために）それを屠ることを好まれなかったのか、

それともそれは（イスラーム法に則ったものとしてであったのか）私は知らない。

サラマ・ビン・アクワウは伝えている

われわれはアッラーのみ使いと御一緒にハイバルに遠征した。

アッラーはわが同胞に勝利を御授けになった。

人々が勝利を得たその日、彼等は夜になると炎炎と火を燃やした。

アッラーのみ使いは「あの燃えさかる火は何か。

あなた方は何のために火を燃やすのか」と申された。

人々は「肉のためです」と言った。

その御方は「何の肉か」と申された。

彼等は「飼育されていたロバの肉です」と言った。

するとアッラーのみ使いは「それを投げ捨てよ。

それの入った土鍋を壊してしまえ」と申された。

ある者が「アッラーのみ使いよ、中にあるものを投げ捨て、土鍋は洗えばよいのでしょうか」と言った。

み使いは「それでもよい」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いがハイバルを征服された時、われわれは村の外れで飼育されていた幾頭かのロバを手に入れた。

われわれはそれらの中の何頭かを料理した。

その時、アッラーのみ使いの御命令を告げる者の「アッラーのみ使いは、それを禁じておられる。

まことにそれは悪魔の所業で忌むべき事柄である」という呼び掛けがあった。

そこで、それを入れた土鍋はその中にあるもの諸共に覆えされたが、その土鍋は中身で溢れんばかりであった。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

ハイバルの戦で、ある者が来て「アッラーのみ使いよ、ロバが食べられてしまいました」と言った。

次にまた別の者が来て「アッラーのみ使いよ、ロバが殺されました」と言った。
アッラーのみ使いはアブー・タルハに（次のように）呼び掛けるように御命じになった。
（すなわち）「まことに、アッラーとその御使者は、あなた方にロバの肉を（食すことを）禁止された。
それは忌むべきもの、または不浄なものである」そこで、それらの入った土鍋は覆えされた。

馬肉を食すことについて

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いはハイバルの戦の時、飼育されたロバの肉は禁じられたが、馬の肉に関してはお許しになった。

アブー・ズバイルはジャービル・ビン・アブドッラーが（次のように）言うのを聞いた

われわれはハイバルの戦の時、馬と野性のロバを食べた。

だが預言者はわれわれに飼育されたロバについては禁じられた。

同様なハディースが別伝承者経路でも伝えられている。

アスマーウは伝えている

われわれはアッラーのみ使いが御在世の頃、馬を屠殺して食ぺました。

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

トカゲの肉を食すことは許される

イブン・ウマルは伝えている

預言者はトカゲの肉について尋ねられた。
すると「私はそれを食さないが、禁止はしない」と申された。

イブン・ウマルは伝えている

ある男がアッラーのみ使いにトカゲを食すことについて尋ねた。
するとその御方は「私はそれを食さないが、禁止はしない」と申された。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いが。ミンバルにおられた時、ある男がトカゲを食すことについて尋ねた。
するとその御方は「私はそれを食さないが、禁止はしない」と申された。

ウバイドッラーを拠り所とするもので、前述同様の話が別の伝承者経路を経ても伝えられている。

前述同様なハディースは、アッラーのみ使いから聞いた話として、イブン・ウマルを根拠として幾つかの伝承者経路を経て伝えられている。
それらの中には言葉に僅少の相違をもったものがある
（例えば）アイユーブのハディースには“アッラーのみ使いの許にトカゲがもって来られた。
その御方はそれをお食べにならなかったが、禁止はされなかった”とあり、
またウサーマのハディースには“アッラーのみ使いがミンバルにおられた時、ある男が（質問のため）そのマスジドで立ち上った”と述べられている。

イブン・ウマルは伝えている

預言者が幾人かの教友達と御一緒におられたことがあったが、その中にサアドも加わっていた。
その時彼等の所にトカゲの肉がもって来られた。
すると預言者の妻達の中の御一人が「それはトカゲの肉だわ」と呼んだ。
アッラーのみ使いは「食すがよい。
それは合法的なものである。
しかし私は、それは食さない」と申された。

タウバ・アンバリーは伝えている

シャウビー（伝承者の一人）は私に「あなたはハサンが預言者から直接に伺ったハディースを御存知ですか。

私はイブン・ウマルと二年あるいは一年半程親しくさせていただいたが、彼が預言者から直接伺ったもので、これ以外のことは彼から聞きませんでした」と言った。
（それは）“教友達の幾人かの中にサアドもいた”という前述のハディースについてである。

アブドッラー・ビン・アッバースは伝えている

私とハーリド・ビン・ワリードはアッラーのみ使いと御一緒にマイムーナの家に入った。
その時、焼かれたトカゲが運ばれて来た。
アッラーのみ使いは（とかげとは知らず）それに御手を伸ばされた。
するとマイムーナの家にいた幾人かの女達が「あなた達、アッラーのみ使いが今召上ろうとされているものについてお話しなさい」と言った。
み使いは（それがとかげであると分ると）手を引き込められて（お食べにならなかった）
私は「アッラーのみ使いよ、それはハラーム（禁じられたもの）でしょうか」と言った。
み使いは「いや、そうではないが、それは私の親族の地にはいないものである故、私はそれを好まぬ」と申された。
ハーリドは「私はそれを良く噛んで食べた。
その間み使いはじっと見つめておられた」と言った。

アブドッラー・ビン・アッバースは伝えている

アッラーの剣とうたわれているハーリド・ビン・ワリードは私に（次のように）告げた。
彼はアッラーのみ使いと御一緒にその御方の妻マイムーナの所に行った。
彼女は彼の母の姉妹であつ、また私（イブン・アッバース）の母の姉妹でもあった。
彼は彼女の許に焼かれたトカゲがあるのを知った。
それは彼女の姉妹フファイド・ビント・ハーリスがナジドから持って来たものであった。
彼女はそのトカゲをアッラーのみ使いに供した。
それは、その御方に差し上げることがまず無かった食べ物だったので、それについて話されることも、その名が出ることもほとんど無かった。
アッラーのみ使いはそのトカゲに手を伸ばされた。
その時、そこに居た婦人の一人が「あなた達、アッラーのみ使いに差し上げた食べ物についてお話しなさい」と言った。
彼女達は「アッラーのみ使い様、それはトカゲです」と言った。
するとみ使いは手を引き込められた。
ハーリド・ビン・ワリードは「アッラーのみ使いよ、トカゲはハラームですか」と言った。
その御方は「いや、そうではない。
だがそれは私の親族の土地にはいないものである。
それ故私はそれを好まぬ」と申された。

ハーリドは「それで、私はそれを良く噛んで食べた。
アッラーのみ使いはじっと見ておられたが禁止はされなかった」と言った。

ハーリド・ビン・ワリードは伝えている

私はアッラーのみ使いと御一緒に、私の母の姉妹であるマイムーナ・ビント・ハーリスの所に行った。
その時、ジャアファファル族の男性と結婚していたウンム・フファイド・ビント・ハーリスがナジドからもって来たトカゲの肉がアッラーのみ使いの前に差し出された。
だがアッラーのみ使いは日頃は、御自分の食べるものが何であるかをお知りになるまでは、何もお食べにはならなかった。
残余のハディースは前述のものと同じであるが、このハディースの終りに“イブン・アサンムはマイムーナから聞いたとしてそのことを話した。
なお彼は彼女の保護を受けていた”という付加がある。

イブン・アッバースは伝えている

われわれがマイムーナの家にいた時、二匹の焼かれたトカゲが預言者に供された。
残余の話しは前述のものと同じであるが、ヤジード・ビン・アサンムがマイムーナから聞いたとすることに関しては、これには述べられてはいない。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いがマイムーナの家に居られた時、トカゲの肉がその御方に供された。
その時、ハーリド・ビン・ワリードもそこに居た。
残余のハディースは前述のものと同一である。

サイード・ビン・ジュバイルは伝えている

私はイブン・アッバースが（次のように）言うのを聞いた。
私のおばウンム・フファイドはアッラーのみ使いにバターとチーズそれにトカゲを献上した。
み使いはバターとチーズは食されたが、トカゲは嫌がられてお残しになった。
しかしそれはアッラーのみ使いが居られる食卓で食されたのであった。
それがもしハラームであったなら、アッラーのみ使いがおいでになる食卓でそれが食されることはなかったであろう。

ヤジード・ビン・アサンムは伝えている

最近、マディーナで結婚した人がわれわれを招待してくれた。
彼はわれわれに 13 匹のトカゲを振る舞ってくれた。
人々の中にはそれを食す者もあれば全然手をつけぬ者もあった。

私はその翌日、イブン・アッバースに会った。
私は大勢の人々が彼を取り囲んでいる所で前日のことを彼に話した。
するとそこに居たある者が「アッラーのみ使いは『私はそれを食さないが禁止はしない。
またそれは不法なものでもない』と申された」と言った。
するとイブン・アッバースは「あなた方は何と悪い言い方をすることか。
まことに、アッラーのみ使いは合法的であるか、あるいは非合法的であるかを（明瞭に示されるためにみ使いとして）遣わされたのである。
アッラーのみ使いがマイムーナの所で、ファドル・ビン・アッバース、ハーリド・ビン・ワリードそれに他の婦人と御一緒に居られた時、そこに肉の入った器が運ばれて来た。
預言者がそれを召し上がろうとした時、マイムーナが『それはトカゲの肉でございます』と言うと、その御方は手を引き込められた。
そして、『これは私が食べない肉である』と申され、人々には『皆は食すが良い』と申された。
それでファドル、ハーリド・ビン・ワリード、その他そこに居た婦人はその肉を食べた」と言った。
マイムーナは「私はアッラーのみ使いがお食べになる物以外は食べません」と言った。

アブー・ズバイルはジャービル・ビン・アブドッラーが（次のように）言うのを聞いたと伝えている
アッラーのみ使いはトカゲを供されると、それをお食べになることを拒絶された。
私は良く分らぬが、多分それは長い年月の間に（ある民族が）姿を変えられたものかも知れない。

アブー・ズバイルは伝えている
私はジャービルにトカゲを食すことについて尋ねた。
彼は「それを食してはならぬ。み使いはそれをお嫌いになった」と言った。
ウマル・ビン・ハッターブは「預言者はそれを禁止されなかった。
至高偉大なるアッラーはそれを少なからぬ人々のために有益なものとして（創造された）
それは羊飼い達が常々食するものである。
もしそれが私の所にあれば、私はそれを食したであろう」と言った。

アブー・サイードは伝えている
ある男が「アッラーのみ使いよ、われわれはトカゲが多くいる地に住んでいます。
それで（それを食すことについて）あなたはわれわれにどのように御命じになりますか、またはどのような法的決定を下されますか」と言った。
その御方は「イスラエル族の中の一氏族が（トカゲの姿に）変えられたということが私に述べられたことがある」と申されて、何も御命じにならなかったし、また禁止もされなかった。

アブー・サイードは「その後のことであった、ウマルは『まこと、至高偉大なるアッラーはそれを少なからぬ人々のために有益なものとして創造された。
なおそれは羊飼い達が常々食するものである。
もしそれが私の許にあればそれを食したであろう。
アッラーのみ使いはそれを好まれなかっただけである』と言った」と述べている。

アブー・サイードは伝えている

砂漠に住む男がアッラーのみ使いの所に来て「私はトカゲが多くいる低地に住んでいる者です。
トカゲはそこの住人達の通常の食べ物です」と言った。
だがその御方はお答えにはならなかった。
そこでわれわれは彼に「あなたの（問題を）繰り返して見たまえ」と言った。
彼はそれを繰り返した。
しかしみ使いはお答えにはならなかった。
その言葉は三回繰り返された。
アッラーのみ使いは三度目に彼をお呼びになり「砂漠に住む者よ、アッラーはイスラエル族のある一氏族を呪われ、あるいはお怒りになられて、彼等を地をはう爬虫類の姿に変えられたのだ。
私はそれがその種類の一つであるかどうかは分らぬが、私はそれを食べないし、禁止もせぬ」と申された。

バッタを食すことは許される

アブドッラー・ビン・アブー・アウファーは伝えている

われわれはアッラーのみ使いと御一緒にバッタを食べ、七回も遠征を行った。
このハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。
伝承者の一人は彼の話の中で"七回の遠征"と言い、他の伝承者は"六回"別の伝承者経路のには"六回あるいは七回"と言っている、と述べている。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられ、その中では"七回の遠征"と言っている。

兎を食すことは許される

アナス・ビン・マーリクは伝えている

われわれはマッルッ・ザフラーン（マッカ近くの洞谷）を通った時、兎を追いかけた。

人々は懸命にそれを追ったが捕えられなかった。

だが私はそれを追いかけて捕えることが出来た。

私がそれをアブー・タルハの所に持って行くと、彼はそれを屠殺した。

そしてその腰部と両太股の部分をアッラーのみ使いに差し上げることになり、それを私が持参した。

するとその御方はそれを受け取られた。

前述のハディースは言葉に僅少の相違をもち、別伝承経路でも伝えられている。

それには“それの腰部もしくは両太股”となっている。

狩猟や敵を倒すために役立つ物は使用しても良いが、小石を投ずることは禁止されている

イブン・ブライダは伝えている

アブドッラー・ビン・ムガッファルは教友の一人が小石を投げるのを見た。
彼はその男に「小石を投げてはならぬ。アッラーのみ使いは（そのような行為を）好まれなかった。
（あるいは小石を投げることを禁じられた）
まこと、小石では獲物を捕ることは出来ぬし、敵を倒すことも出来ぬ。
だがそれは歯を折るであろうし、また、目をつぶすこともある」と言った。
この後彼は例の男がまた小石を投げるのを目撃した。
そこで彼は「私はお前に、アッラーのみ使いは（その行為を）お厭いになっておられた。
あるいは小石を投げることを禁止しておられたと告げた。
しかるに、私は君がその行為を繰り返すのを再度目撃した。
私はもうお前とは絶交だ」と言った（注）。

（注）偏に、イスラームのために行われる排斥行為はイスラーム法でも許されている。
しかし、物質的な事柄や世俗的目的のためになされる排斥行為、あるいは断絶は厳重にいましめられている

このハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

アブドッラー・ビン・ムガッファルは伝えている

アッラーのみ使いは小石を投げることを禁止された。
イブン・ジャゥファルは彼が伝えたハディースで「その御方は『（小石では）敵を倒せないし獲物も殺せない。
だがそれは歯を折るであろうし目をつぶしもする』と申された」と述べている。
イブン・マハディーは「それでは敵を倒せぬ」という言葉は伝えているが「目をつぶしもする」とは述べていない。

サイード・ビン・ジュバイルは伝えている

アブドッラー・ビン・ムガッファルの近くにいた者が小石を投げた。
彼はその男の行為を禁止し「アッラーのみ使いは小石を投げることを禁じられた。
そして『それでは獲物も捕獲出来ぬし、敵を倒すことも出来ぬ。
だがそれは歯を折るであろうし、目をつぶしもする』と申された」と言った。
ややあって例の男は再び小石を投げた。

彼は「私は君に、アッラーのみ使いはそのような行為を禁じられたと言っているのに、また投げる。
私は君とは絶交する」と言った。

このハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

屠殺あるいは何かの命を絶つ場合はナイフを鋭くするような配慮をし苦しませぬようにすること

シャッダード・ビン・アウスは伝えている

私がアッラーのみ使いからお聞きして記憶している二つの事柄がある。

（すなわち）その御方は「まことに、アッラーは全てのものに慈愛を垂れ給う。

それでもしあなた方が（あるもの、例えば罪人などを）殺す場合は良き方法で行うがよい。

またあなた方が屠殺する場合も良き方法でせよ。

（例えば）使用するナイフを鋭利にし、屠殺されるものが苦しまぬよう配慮するがよい」と申された（ことである）。

前述のハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

動物を（標的として）閉じ込めることは禁止されている

ヒシャーム・ビン・ザイド・ビン・アナス・ビン・マーリクは伝えている

私は私の祖父アナス・ビン・マーリクと一緒にハカム・ビン・アイユーブの家に入った。

するとそこで人々が雌鳥を弓の標的にしていた。

アナスは「アッラーのみ使いは動物を（標的とするために）閉じ込めることを禁止された」と言った。

このハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

イブン・アッバースは伝えている

預言者は「生きている動物を標的として用いてはならぬ」と申された。

前述のハディースも異った伝承者経路を経て伝えられている。

サイード・ビン・ジュバイルは伝えている

イブン・ウマルは雌鳥を標的にして交互に矢を射ている人々の側を通った。

彼等はイブン・ウマルを見るとその標的を置いて逃げるように散った。

その時イブン・ウマルは「これを行ったのは誰か。

まこと、アッラーのみ使いはこのようなことをする者をお呪いになった」と言った。

サイード・ビン・ジュバイルは伝えている

イブン・ウマルがクライシュの若者達の側を通ると、彼等は鳥を標的にしてそれに矢を射ていた。

そして、その標的に当らなかった矢は全て鳥の所有者が取ることにしていた。

彼等はイブン・ウマルを見ると逃げた。

彼は「このようなことをする者にアッラーの呪いあれ（と祈り）、まことにアッラーのみ使いは生きている動物を（閉じ込めて）標的にする者をお呪いになった」と言った。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは動物が閉じ込められて殺されることを禁じられた。

犠牲の書

生贄は何時屠るかについて

ジュンダブ・ビン・スフヤーンは伝えている

私はイードル・アドハーの日、アッラーのみ使いと一緒にいた。

その日その御方は（イードル・アドハーの）礼拝を捧げ終えた後、礼拝終了前に屠殺された生け督の肉をそこに御覧になった。

み使いは「イードの礼拝を捧げる前に（あるいはわれわれが礼拝を捧げる前に）生け贄を屠ってしまった者は、その代りに別の生け贄を屠らねばならない。

また、それを未だ屠っていなかった者はアッラーの御名を唱えて、それを屠れ」と申された。

ジュンダブ・ビン・スフヤーンは伝えている

私はイードル・アドハーの日、み使いと一緒にいた。

その御方が人々と礼拝を捧げ終えた時、そこに生け贄にされた羊を御覧になった。

み使いは「礼拝を捧げる前に屠った者は別の羊を既に屠ったものの代りとして屠らねばならぬ。

また、それを未だ屠っていなかった者はアッラーの御名を唱えて屠れ」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

ジュンダブ・バジャリーは伝えている

イードル・アドハーの日、私はアッラーのみ使いが礼拝するのを拝見した。

それからその御方は説教され「礼拝の前に（生け贄を）屠った者は、それに代るものを再び捧げねばならない。

そして未だそれを屠ってない者はアッラーの御名を唱えて屠れ」と申された。

前述のハデイースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

バラーウは伝えている

私のおじアブー・ブルダはイードの礼拝を捧げる前に（生け贄を）屠った。

その時アッラーのみ使いは「それは肉の羊であり（生け贄ではない）」と申された。

彼は「アッラーのみ使いよ、私には生まれて一年にも満たぬ山羊がございます」と言った。

その御方は「それを屠るがよい。

だがそれは君以外の者にとっては正しいことではない」と申された。
その御方は「礼拝の前に屠った者は、ただ自分自身のために屠ったに過ぎぬ。
礼拝の後に屠った者の生け贄は完全なものであり、ムスリムの正しい慣習に適った行為をしたのである」と申された。

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている

私の母方のおじアブー・ブルダ・ビン・ニヤールは預言者が生け贄を屠る前に（彼の生け贄を）屠ってしまった。
そして彼は「アッラーのみ使いよ、今日は肉の日で（皆それを）熱望しております。
それで私は、私の家族、近所の人々、私の親族に食べさせるために私の生け贄を屠るのを早めました」と言った。
するとアッラーのみ使いは「君はもう一度生け贄を捧げよ」と申された。
彼は「アッラーのみ使いよ、私には一年に満たない雌の子山羊がございます。
それは単に肉としてのみの用途しかない二頭の雌羊よりは良いでありましょう」と言った。
み使いは「それは君のために屠られた二頭よりは良きものである。
だが今後は、生まれて一年にも満たぬ子山羊（注）（の犠牲を捧げることは）誰にとっても満足なものではない」と申された。

（注）犠牲として捧げる動物は一年以上を経た体の大きなものでなければならない

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている

アッラーのみ使いは犠牲を捧げる日、われわれに説教され「誰一人といえども礼拝を終えるまで生け贄を屠ってはならない」と申された。
その時私のおじは「アッラーのみ使いよ、今日は肉の日で（皆それを）熱望しております」と言った。

この後のハディースは前述と同様である。

バラーウは伝えている

アッラーのみ使いは「われわれと同様の礼拝を捧げ、顔をわれわれのキブラの方向に向け、そしてわれわれが行うように生け贄を捧げる者は、礼拝を終えるまでは生け贄を屠ってはならぬ」と申された。その時私のおじは「アッラーのみ使いよ、私は私の息子のために動物を屠ってしまいました」と言った。み使いは「それは君が君の家族のため尚早に屠ったものである」と申された。おじは「私には（屠ってしまった）二頭の雌羊より良い雌羊がございます」と言った。み使いは「それを屠るがよい。それは最も良き（生け贄で）ある」と申された。

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている

アッラーのみ使いは「この日(イードル・アドハー)、われわれが最初に行うことは礼拝を捧げること、次は家に帰って犠牲を屠ることである。

それで、この順序に従って行動した者はわれわれの正しい慣習に適った行為をしたのである。

また(礼拝の前に犠牲を)屠ってしまった者のそれは、彼の家族に提供した肉にすぎず、神に捧げた犠牲ではない」と申された。

時に、アブー・ブルダ・ビン・ニヤールは(礼拝の前に)犠牲を屠ってしまっていた。

そこで彼は「私には一年に満たぬ山羊がございますがそれは(既に屠ってしまってただの肉となった)年を経た羊よりは良いものです」と言った。

み使いは「それを屠るがよい。だが今後は(生まれて一年にも満たぬ子山羊は)誰にとっても決して償いとはならない」と申された。

このようなハディースはバラーウ・ビン・アーズィブを根拠として、別の伝承者経路でも伝えられている。

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている

アッラーのみ使いはイードル・アドハーの日、礼拝の後で説教された。

残余のハディースは前述と同様である。

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている

アッラーのみ使いはイードル・アドハーの日説教され「誰もが礼拝を終えるまで、決して犠牲を屠ってはならない」と申された。

その時ある男が「私には生後一年にも満たぬ子山羊がありますが、それはただ肉としてのみの用途しかない二頭の雌羊よりは良いでありましょう」と言った。

み使いは「それを屠るがよい。

だが今後は、一年にも満たぬ子山羊は誰にとっても償いとはならない」と申された。

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている

アブー・ブルダは礼拝の前に犠牲を屠ってしまった。

預言者は「それに代るものを(捧げよ)」と申された。

彼は「アッラーのみ使いよ、私には生まれて一年未満の子山羊しかございません。

(シュウバは『私は彼が、次のようにも言ったと思う』と述べた。すなわち)

それは一年を経たものより良いでありましょう」と言った(である)

アッラーのみ使いは「それを先に屠ったものの代りとせよ.だが今後は一年も経ぬものは誰にとっても償いとはならない」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。
だがこれには「それは一年を経たものより良いでありましょう」という言葉に対する途中伝承者の疑念は述べられてはいない。

アナス(・ビン・マーリク)は伝えている

アッラーのみ使いはイードル・アドハーの日「礼拝を終える前に犠牲を屠った者は再びそれを行わねばならぬ」と申された。
その時男が立ち「アッラーのみ使いよ、今日は待望の肉日です」と言い、彼の近所の者達がそれを大いに必要としていることを述べた。
アッラーのみ使いはその男の言葉はもっともであるとされたようであった。
(だがそれはムスリムの正しい慣習に適ったことではなかった)
そこで彼は「私には生まれて半年程の子山羊がございますが、それは私にとって単なる肉(としての利用価値しかない)二頭の雌羊よりは好ましいものです。
それを屠りましょうか」と言った。
み使いは彼にそうすることをお許しになった。
彼(伝承者)は「私はこの許可が彼以外の者にも許されたのかどうかは知らない」と言った。
それからアッラーのみ使いは二頭の雄羊の方を向かれて、それを屠られた。
人々はその小さな犠牲に寄り、互いに分け合った。
または、彼等は分配し合った。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは(イードル・アドハーの日)説教され、礼拝を終える前に犠牲を屠った者は、再び他の動物を屠ることを命じられた。
残余のハディースは前述のものと同一である。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いはイードル・アドハーの日、われわれに説教された。
その時み使いは肉の匂いがするのに気が付かれ、人々が(礼拝を終える前に)犠牲を屠ることを禁じられた。
そして「(イードの礼拝を捧げ終える前に)犠牲を屠った者は、再びそれを行わねばならない」と申された。

生け贄として捧げられる団物の年齢について

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は生後一年以上の動物以外は屠ってはならぬ。

だが、それの入手が困難であり（余儀なくして一年未満のものを生け贄として捧げる場合には）雄の子羊を屠るがよい」と申された。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いはイードル・アドハーの日、マディーナでわれわれと一緒に礼拝を捧げられた。

（その日）幾人かの人々はみ使いに先んじて犠牲を屠ってしまった。

彼等は預言者が既にそれを屠られたと思ったのであった。

み使いは、御自分がされる前にそれを屠った者は再び別のものを屠ること、また、その御方がそれを屠るまでは、それを行ってはならぬこと等を御命じになった。

ウクバ・ビン・アーミルは伝えている

アッラーのみ使いは生け贄に供するため、教友達に羊を分け与えられた。

そして残ったのは子山羊だけであった。

ウクバがこのことをアッラーのみ使いにお話しすると「君がそれを屠るがよい（注）」と申された。

クタイバ（最終伝承者）は“教友達”という言葉について صحابة sahaba を使用した。

（注）先のハディースで一年未満の子山羊は犠牲として屠ってはならないとあった。

ここで再びそれを屠れとあるのは、ウクバもアブー・ブルダ同様に特別の計らいを受けたものと見られている

ウクバ・ビン・アーミル・ジュハニーは伝えている

アッラーのみ使いはわれわれに生け贄として捧げられる動物をお分けになった。

すると私には一年にも満たぬ子山羊が割り当てられた。

そこで私は「アッラーのみ使いよ、私には子山羊が当ってしまいました」と申し上げたところ「それを屠るがよい」との仰せであった。

このハディースはウクバ・ビン・アーミルを根拠として伝えられたが、“アッラーのみ使いは生け贄を教友達の間でお分けになった”のように言葉に若干の相違をもっている。

犠牲を屠るのは自分の手で、アッラーの御名を唱え、アッラーを讃美しつつ行うことが望ましい

アナスは伝えている

預言者は純白で美しい角をもった二頭の雄羊を犠牲に供された。
その御方は御自分の手でその二頭を屠られたが、その時アッラーの御名を唱えられ"アッラーは偉大なり"と讃美された。
時に、その御方は脚を生け贄の首の側に置かれていた。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは純白で美しい角を持った二頭の雄羊を犠牲に供された。
その時私はその御方が御自分の手でその生け贄を屠られるのを見た。
時に、その御方は足を生け贄の首の側に置かれていた。
なおその御方はアッラーの御名を唱え、かつ讃美されていた。

シュウバは伝えている

カターダは私に「私はアナスが『アッラーのみ使いは御自分で犠牲を屠られた』と言うのを聞いた」と述べた。
私は彼に「あなたはアナスから(直接)それを聞いたのですか」と尋ねると、彼は「はい」と答えた。

残余のハディースは前述と同様である。

アナスは預言者からお聞きしたとして前述のようなハディースを伝えているが(中には)"み使いは「アッラーの御名において、また、アッラーは偉大なり」と申されながら"のように言葉に若干の相違をもったものがある。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、四肢、腹部、そして目の周囲が黒い雄羊を用意するよう御命じになりました。
それが犠牲に供されるために連れて来られるとその御方は「アーイシャよ、ナイフを持って来なさい」と言われた後「それを砥石でとぎなさい」と申されました。
私は言われたようにしました。
み使いはナイフを手にされると雄羊を掴んで地に横たえられ、そしてそれを屠られました。
その後み使いは「アッラーの御名において、おおアッラー(この犠牲を)ムハンマドとムハンマドの一族、そしてムハンマドの共同体のために受け入れて下さい」と申されました。

犠牲を屠る道具は、瞬時に多量の血を流し得るようなものであること。動物の歯、蹄、その他の骨等はそれから除かれる

ラーフィウ・ビン・ハディージュは伝えている

私は「アッラーのみ使いよ、われわれは明日、敵と遭遇いたします。

しかしわれわれには(動物を屠る鋭利な)ナイフはございません」と言った。

み使いは「血を多量に流すような(ナイフの代りとなるようなものを用意し)アッラーの御名を唱え、屠られる動物を苦しめぬようす早く殺し、そしてそれを食すがよい。

しかし、歯や蹄を用いて屠ってはならぬ。

そのことについて君に話そう。

先ず歯について言えば、それは骨である。

また蹄について言えば、それはアビシニア人達の小刀である(注)」と申された。

伝承者は続けて言った。

われわれはラクダや羊を戦利品として得た。

それらの中で一頭のラクダが逃げ出した。

すると仲間の一人が矢を放ってそれを捕えた。

アッラーのみ使いは「このラクダは野性動物同様に既に野性化している。

それでもしそれらの中に手こずらせるようなものがあれば、先のものと同じくせよ」と申された。

(注)アビシニアの人々はムスリムではないが、かつて動物を屠る場合に蹄を使用していた。

しかしそれは切れないので動物を殺すのに長時間を要し苦しめた。

故に預言者はそれを屠殺用の道具として使用することを禁じたのである

ラーフィウ・ビン・ハディージュは伝えている

われわれはアッラーのみ使いと御一緒にズー・ル・フライファ(紅海岸に面した一地域)に遠征し、羊やラクダを戦利品として得た。

われわれの中のある者達は(戦利品に定められている配分をしない前に)急いでそれを屠り土鍋で煮た。

そのため、その御方はそれを覆すようお命じになった。

その後み使いは 10 頭の羊は一頭のらくだに相当するものとされた。

残余のハディースは前述と同様である。

ラーフィウ・ビン・ハディージュは彼の祖父から聞いたとして（次のように）伝えている

われわれは「アッラーのみ使いよ、われわれは明日敵と戦います。

だがわれわれにはナイフがありません。

それで、きびの皮で屠殺せねばなりません」と言った。

この後彼は彼にまつわるハディースを述べたが（その中で）「一頭のラクダがわれわれから逃げだした。

われわれはそれに矢を射かけ地に倒した」と言った。

前述のハディースは別の伝承者経路で伝えられているが、言葉に僅少の相違をもっている。

ラーフィウ・ビン・ハディージュは伝えている

私は「アッラーのみ使いよ、われわれは明日、敵と戦います。

しかしわれわれには（動物を屠る）ナイフがありません」と言った。

（この後、このハディースには）「人々は（戦利品の動物を）急いで屠って煮た。

するとその御方は「それを覆すように御命じになった」とは述べられてはいない。

他は前述のものと同様である。

イスラーム初期には、犠牲に供された肉は三日間は食すことが禁じられたが、その後、それは廃止されて、何時でも望む時に食されるようになったことについての説明

アブー・ウバイドは伝えている

私はアリー・ビン・アブー・ターリブと一緒にイードル・アドハーの礼拝を行った。

彼は説教の前に礼拝を捧げた。

その時彼は「まこと、アッラーのみ使いは三日後の生け贄の肉は、食すことを禁じられた」と言った。

イブン・アズハルの解放奴隷**アブー・ウバイド**は伝えている

私はウマル・ビン・ハッターブとイードル・アドハーの礼拝を行った。

その後また、アリー・ビン・アブー・ターリブともその礼拝を一緒に捧げた。

彼（アリー）はわれわれをリードして説教の前に礼拝を行った。

その後人々に説教し「まこと、アッラーのみ使いは三晩以上経た生け贄の肉を食べることを禁じられた。

故に諸君は（それを）食してはならない」と言った。

このハディースは多くの別伝承者経路でもって伝えられている。

イブン・ウマルは伝えている

預言者は「誰一人として三日以上経った生け贄の肉は食してはならぬ」と申された。

このハディースはイブン・ウマルを根拠として、別の伝承者経路でも伝えられている。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは三日後の生け贄の肉を食すことを禁じられた。

サーリム（伝承者の一人）は「イブン・ウマルは三日以上経った生け贄の肉は食べなかった」と言った。

イブン・アブー・ウマル（最終伝承者）は「三日後」と言った。

アブドッラー・ビン・ワーキドは伝えている

アッラーのみ使いは三日後の生け贄の肉を食すことを禁じられた。

アブドッラー・ビン・アブー・バクルは「私はそのことをアムラに話した。

すると彼女は『彼の言ったことは真実です。

私はアーイシャが（次のように）話すのを聞きました』と言った」と述べ彼女の話を以下の

ように伝えている。
アッラーのみ使いが御在世の頃、砂漠に住む貧しい人々がイードル・アドハーの折に（肉をもらいに町に）やって来ました。
その時アッラーのみ使いは「三日分だけの肉を保存し、残ったものについては自由喜捨とせよ」と言われました。
この後、ムスリム達は「アッラーのみ使いよ、人々は屠られた動物の皮で水袋をつくり、その中の脂肪を溶しております」と申し上げました。
み使いは「それはどういうことか」と申されました。
人々は「それはあなたが三日後の生け贄の肉を食すことを禁止されたからです」と言いました。
み使いは「私があなた方にそれを禁止したのは（町に肉をもらいに来た）貧しい人のためであった。
（だが今、情況は好転している）
それ故あなた方はそれを（自由に）食べ、保存し、そして自由喜捨を行うがよい」と申されました。

ジャービルは伝えている
預言者は三日後の生け贄の肉を食すことを禁じられた。
その後、その御方は「（その肉を自由に）食べ、旅の食糧として用意し、そして保存せよ」と申された。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
われわれはミナーにおいて三日以上経った生け贄の肉は食べなかった。
その後、アッラーのみ使いは「それを（自由に）食ぺよ。
そして旅の食粗として用意せよ」と申され、（先に禁じられたことを）解かれた。
私（途中伝承者）はアターウ（伝承者の一人）に「ジャービルは『われわれがマディーナに戻るまで』と言いましたか」と尋ねると彼は「はい」と答えた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
われわれは三日以上経った生け贄の肉は食べなかった。
その後、アッラーのみ使いはわれわれにその肉の一部を旅の食糧として用意し、またそれを（三日後も）食べることを御命じになった。

ジャービルは伝えている
われわれはアッラーのみ使いが御在世の頃、常々マディーナの食糧を生け贄の肉で賄っていた。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは「マディーナに住む人々よ、三日以上経った生け贄の肉は食してはならぬ」と申された。

（イブン・ムサンナーは「三日」と言った）

教友達はアッラーのみ使いに、彼等には養わねばならない子供や使用人がいるということで不平を申し立てた。

その後、その御方は「それを食べよ、そして食べさせよ、またそれを食糧として蓄えよ、あるいは保存せよ」と申された。

イブン・ムサンナー（ムスリムにこのハディースを伝えた一人の伝承者）は「アブドル・アーラー（伝承者の一人）は（それについて）疑った」と言った。

サラマ・ビン・アクワウは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方の中で犠牲を屠った者は、生け贄の肉が三日目の朝を迎えた後は、多少といえどもそれを家に残しておいてはならぬ」と申された。

その翌年になってのこと、人々は「アッラーのみ使いよ、われわれは昨年と同じようにするのでしょうか」と言った。

するとその御方は「いや、そうではない。

昨年は人々が困窮していたためであった。

それ故私はそれが人々の間に広く分け与えられるようにと願ったのだ」と申された。

サウバーンは伝えている

アッラーのみ使いは犠牲を屠られた。そして「サウバーンよ、この肉を何時でも利用出来るよう善処せよ」と申された。

それで私はその御方がマディーナにお着きになるまで、それを食事として差し上げ続けた。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アッラーのみ使いの解放奴隷**サウバーン**は伝えている

アッラーのみ使いは告別の巡礼で私に「この肉を何時でも利用出来るよう善処せよ」と申された。

それで私は仰せに従った。

それでその御方はマディーナにお着きになるまでそれを食べ続けられた。

このハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられているが、その中では「告別の巡礼で」とは述べられていない。

アブドッラー・ビン・ブライダは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「私はあなた方が墓を訪れることを禁じた。

だが今やそれを訪れるがよい。

また私はあなた方が三日以上経た生け贄の肉を食すことを禁じた。

だがそれもあなた方が望む限り保存してよい。

そしてまた、私はあなた方が皮の水袋にあるナビーズ（なつめ椰子の実または葡萄を侵した飲みもの）以外のそれを飲むことを禁じたが、今やいかなる容器にあるものでも飲んでよい。

ただし酔うものは飲んではならぬ」と申された。

イブン・ブライダは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「私は常々（これこれのことを）あなた方に禁止していた」と申され、前述同様の事柄をお述べになった。

ファラウ（注1）とアティーラ（注2）について

（注1）ファラウは最初に産まれた若い動物をいう。
イスラーム以前の偶像崇拝者達が家畜の増加を願って、その動物を偶像神に犠牲として捧げた

（注2）アティーラは偶像神を満足させるためにラジャブ月の最初の 10 日間に屠られる動物のこと

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「ファラウもアティーラも事実無根である」と申された。

イブン・ラーフィウは「ファラウは最初に生まれた家畜の子供で、彼等はそれを生け贄としていた」と彼の話に付加している。

犠牲を供することを望む者は、ズール・ヒッジャ月に入ったらいかなる毛も爪も切り取ることが禁止される

ウンム・サラマは伝えている

預言者は「ズール・ヒッジャ月に入り、誰かが生け贄を屠ることを望んだ時は、少しであっても毛や爪を切ってはならぬ」と申された。

スフヤーン（伝承者の一人）に、このハディースは預言者までさかのぼるものではない、とある人達が言っているということが伝えられた。

だが彼は「私は、それは預言者までさかのぼるものであると考えている」と言った。

ウンム・サラマは（このハディースが）預言者までさかのぼるものとして（次のように）伝えている

その御方は「犠牲に供する動物をもち、自分の手でそれを屠ろうとする者は、ズール・ヒッジャ月に入った時は、いかなる毛も切ってはならないし、また爪も切ってはならない」と申されました。

ウンム・サラマは伝えている

預言者は「あなた方の中で犠牲を自分の手で屠ろうとする者が、ズール・ヒッジャ月の新月を見た時は、いかなる毛も爪も切ってはならぬ」と申されました。

前述のハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

預言者の妻**ウンム・サラマ**は伝えている

アッラーのみ使いは「犠牲に供する動物を自分の手で屠ろうとする者は、ズール・ヒッジャ月の新月が現れた時は、それを屠ってしまうまでは毛を切ってはならないし、また、爪も切ってはならない」と申されました。

アムル・ビン・ムスリム・ビン・アンマール・ライスィーは伝えている

われわれはイードル・アドハーも間近い頃、浴場にいた。

そこで人々は脱毛用の軟膏を用いて性毛を除去していた。

するとその浴場のある者が「まこと、サイード・ビン・ムサイヤブはその行為を嫌っていた。またはそれを禁じていた」と言った。

私はサイード・ビン・ムサイヤブに会ってそれを話した。

すると彼は「私の兄弟の息子よ、これはハディースにあることだが、既に忘れ去られて実行されてはいない。

預言者の妻ウンム・サラマが『アッラーのみ使いが申されました』と言って私に話してくれた」と言って彼は前述同様の話を伝えた。

前述同様なハディースが別伝承者経路を経て伝えられている。

アッラー以外のものに犠牲を捧げることは禁じられており、そのような行為をなす者は呪われる

アブー・トゥファイル・アーミル・ビン・ワースィラは伝えている

私がアリー・ビン・アブー・ターリブの所に居た時、ある男が彼の所に来て「預言者があなたに密かに話されたことは何ですか」と言った。

するとアリーは怒った。

そして「預言者はいかなることも人に隠してこっそりと私に話されたことはない。

だがその御方は私に四つの事柄をお話しになった」と言った。

その男は「信者達の指導者よ、それは何ですか」と尋ねた。

彼は「み使いは『アッラーは己の父親を罵る者を呪われる。

アッラーはアッラー以外のものに犠牲を供する者を呪われる。

アッラーは(宗教に)不健全なものをもたらす者に協力する者を呪われる。

アッラーは(自分の領土にするため)境界の光塔の位置を変える者を呪われる』と申されたのだ」と言った。

アブー・トゥファイルは伝えている

われわれはアリー・ビン・アブー・ターリブに「アッラーのみ使いがあなたに密かに話したことをわれわれにおしえて下さい」と言った。

すると彼は「その御方は人々に隠して何かを私にこっそりと言われたことはない。

だが私はその御方が『アッラーはアッラー以外のものに生け贄を捧げる者を呪われる。

アッラーは不健全なものをもたらす者に協力する者を呪われる。

アッラーは両親を罵る者を呪われる。

アッラーは光塔の位置を変える者を呪われる』と申された」と言った。

アブー・トゥファイルは伝えている

アリーは「アッラーのみ使いが特にあなた方だけになされたことはありますか」と尋ねられた。

彼は「アッラーのみ使いが、人々全体に公表されなかったことで、特に私達だけにされたというものはない。

だが私のこの剣の鞘の中にある事柄だけは別である」と言って、彼は(次のような)言葉が書かれている書類を取り出した。

それは「アッラーはアッラー以外のものに生け贄を捧げる者を呪われる。

アッラーは境界線を(変えて領土を)奪う者を呪われる。

アッラーは父親を罵る者を呪われる。

アッラーは不健全なものをもたらす者に協力する者を呪われる」である。

飲み物の書

酒は禁じられている。
それは葡萄のジュース、乾燥したなつめ椰子の実、新鮮な果物、
乾し葡萄その他どのようなもので造られても、飲んで酔うものである

アリー・ビン・アブー・ターリブは伝えている

私はバドルの戦に参戦し、戦利品の中、老いた雌ラクダをアッラーのみ使いと分け合った。
アッラーのみ使いは私に老いた別の雌ラクダもお与え下さった。
ある日のこと、私はアンサールの一人の家の入口の側にその二頭のラクダを座らせた。
そのラクダには売るためのイズヒル（芳香のある植物）が積んであった。
その時私と一緒にカイヌカーウ族（マディーナに在ったユダヤの一部族）の金細工師がいたが、それは私が（彼を通じてイズヒルを売り）その代金をファーティマとの結婚費用に役立てようとしたからであった。
折りしも、ハムザ・ビン・アブドル・ムッタリブが歌女に歌をうたわせ、その家で酒を飲んでいた。
その女は「ハムザ様、お立ちになってあの太った雌ラクダを屠ってちょうだい」と言った。
ハムザは剣を手にしてそれに突進し、その二頭の背のこぶを切断し、そしてなおそれの腹を切り開いて肝臓を取り出した。
私（ムスリム）はイブン・シハーブに「彼はこぶから何か取り出したのですか」と尋ねた。
彼は「二頭のこぶを切り取って持ち去ったのだ」と言った。
それからイブン・シハーブはアリーが（次のように）話したと言った。
（すなわち）私は衝撃的な光景を目の当りにした。
それで預言者の所に行った。
そこにはザイド・ビン・ハーリサが居合わせた。
私は例の出来事をその御方に告げた。
するとみ使いもザイドも一緒にそこを出た。
私もその御方に従って急いだ。
み使いはハムザの所に入って行かれ彼を叱責された。
するとハムザは目をつり上げて「お前達は私の親父の奴隷に過ぎぬではないか（注）」と言った。
アッラーは（酔漢の暴言に嫌悪され）踵を返されて彼等から離れられた。

（注）ハムザ・ビン・アブドル・ムッタリブは預言者やアリーのおじで勇猛の士でありイスラ

ームのために戦った人物として知られている。
だが酒を飲むとハディースにあるように手におえぬ人物に一変した。
彼はバドルの戦で活躍し、ウワドの戦(628)で戦死した。
このハディースに見るような言葉は、預言者の父アブドッラーもアリーの父アブー・ターリブも、彼の父アブドル・ムッタリブには奴隷のように従順であったからであるとされる

前のハディースは別の伝承者経路を経ても伝られている。

フサイン・ビン・アリーは(父)アリーが(次のように)話したと伝えている
私はバドルの戦での戦利品の中より老いた雌ラクダの分配にあずかった。
アッラーのみ使いはその日(アッラーやそのみ使いのために保有される)五分の一の中より更に一頭の老いた雌ラクダを下された。
ところで、私がアッラーのみ使いの御息女ファーティマと家庭を持つことを望んだ時、私はカイヌカーウ族の金細工師を説き伏せて私との同行を約束してもらった。
それはわれわれがイズヒルを運んで金細工師達に売り、その代金を結婚費用に役立てようと願ったからである。
私がその二頭のラクダに荷鞍、わら袋、ロープ等を積んでいる間、その二頭は一人のアンサールの家の側に座っていた。
私は種々、必要なものを集めるのに奔走した。
そしてそのラクダの所に戻って見るとどうであろう。
私の二頭のらくだのこぶは切断され、腹部は切り開かれて肝臓は奪われているではないか。
私はその二頭の姿を見た時、悲しみで涙が止まらなかった。
私は「これをやったのは誰か」と言った。
人々は「それをしたのはハムザ・ビン・アブドル・ムッタリブだ」と言った。
その時彼はその家で歌女に歌をうたわせ、アンサールの飲み友達の間で泥酔していたのである。
歌女は歌の中で「ハムザ様、お立ちになってあの太った雌らくだを屠ってちょうだい」と言った。
するとハムザは剣を手にして立ち上がり、二頭のラクダのこぶを切り落し、腹部を切り開いて肝臓を取り出したのであった。
私はアッラーのみ使いの所に飛んで行った。
そこにはザイド・ビン.ハーリサが居合わせた。
アッラーのみ使いは私の顔色を御覧になり、私に何か問題があるということをお知りになり「どうしたのか」と申された。
私は「アッラーのみ使いよ、私は今日のような(不幸な日を)見たことがありません。

ハムザが私の二頭の雌ラクダを襲ってそのこぶを切り落し、腹を切り開きました。
彼は今、飲み友達と一緒にある家に居ります」と言った。
アッラーのみ使いは外套を求めて羽織られた。
そして急いでお歩きになった。
私とザイド・ビン・ハーリサは後に従った。
ハムザが居る家の入口に来るとその御方は中に入る許しを求められた。
人々はそれを聞き入れた。
見ればどうであろう。
そこで人々は酒を飲んで気炎を上げているではないか。
アッラーのみ使いがハムザの行為を叱責されると、彼は目を赤くし、アッラーのみ使いをじっと見つめた。
それから彼はその御方の両膝に視線を下ろし、再び視線を上げて腰を凝視し、更に視線を上げてその御方の顔をじっと見て「お前達は私の親父の奴隷に過ぎぬではないか」と言った。
アッラーのみ使いは彼が泥酔していることをお知りになり、踵を返してその家を出られた。
われわれもまた、その御方に従ってそこを出た。
このハディースは他にも、別の伝承者経路を経て伝えられている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

酒が禁じられた日、私はアブー・タルハの家で人々のための酌人をしていた。
彼等の飲み物といえば必ず乾したなつめ椰子の実、あるいは新鮮ななつめ椰子の実から造った酒であった。
折りしも大きな声で何かを告げる声があった。
彼（アブー・タルハ）は私に「出て（何を告げているのか）確かめよ」と言った。
私が外に出て見るとその告げ人は「聞くがよいっ、酒は禁じられましたぞっ」と叫んでいる。
伝承者は「酒はマディーナの道から道に流れて行った」と伝えている。
アブー・タルハは私に「出て酒を流せ」と言った。
それで私はそれを流した。
人々は（またある人々は）「誰々は酒を飲んで殺された。
誰々もそのために殺された」と言った。
（伝承者の一人は「私はその話がアナスのハディースからかどうかは分らない」と言った）
その時至高偉大なるアッラーは**「信仰して善行に勤む者は（既に）飲んだものに就いて罪はない。彼等が主を畏れ信仰して善行に励む時は…」**（クルアーン第5章93節）の啓示を下された。

アブドル・アズィーズ・ビン・スハイブは伝えている

人々はアナス・ビン・マーリクにファディーフ（なつめ椰子の実から造った酒）について尋ねた。

すると彼は（次のように）語った。

われわれにはあなた方がファディーフと呼んでいる酒以外には無かった。

私はわれわれの家で、アブー・タルハ、アブー・アイユーブその他の教友達にそれをつぐ仕事をしていた。

その時ある人物が訪れて「あなた方の所にそのニュースは伝わったか」と言った。

われわれは「いいえ」と言った。

彼は「まこと、酒は禁じられた」と言った。

するとアブー・タルハは「アナスよ、これらの大きな壷にあるものを流せ」と言った。

伝承者は「その人物がそのニュースを伝えた後、彼等がそれに逆戻りすることはなかったし、それを求めることもなかった」と言った。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

私は私の父方の兄弟の住む地区で人々にファディーフをつぐ仕事をしていた。

当時私はそこの人々の中では最年少であった。

そこにある人物が訪れて「まこと、酒は禁じられた」と言った。

すると人々は「アナス、それを流せ」と言った。

私はそれを流した。

彼（伝承者の一人スライマーン・タイミー）は「私はアナスに『それはどういうものですか』と尋ねた。

彼は『それは新鮮なもの、または良く熟れたなつめ椰子の実で造られた酒です』と答えた」と言った。

アブー・バクル・ビン・アナスは「それは当時、彼等が飲んでいた酒である」と言った。

スライマーンは「アナス・ビン・マーリクから話を聞いた者が私に『アナスもそのように言った』と話した」と述べた。

アナスは伝えている

私はその集落で彼等に酒をつぐ仕事をしていた。

この後のハディースは前述と同様である。

しかしその中には次のような相違も見られる。

（すなわち）アブー・バクル・ビン・アナスは「住時、それは彼等が飲んでいた酒である。

アナスは現にそれを見ている。

また、アナスはそれを否定しなかった」と言った。

ムウタミルは彼の父を根拠として（次のように）伝えた。

父と一緒にいたある者が父に「私はアナスが『それは当時、彼等が飲んでいた酒であった』と言うのを聞いた」と話した。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

私はアンサールの中のアブー・タルハ、アブー・ドジャーナ、そしてムアーズ・ビン・ジャバル等に酒をついでいた。
その時われわれの所に入って来た者かあって、「新しいニュースがある。
それは酒禁制の啓示が下ったことである」と言った。
それでその日、われわれは酒壷を覆した。
その酒は乾したなつめ椰子の実を混ぜて造ったものである。
カターダは（次のように）伝えている。
アナス・ビン・マーリクは「酒は禁止されたが、その当時人々に広く飲まれていた酒は乾したなつめ椰子と新鮮なそれとを混ぜて造ったものであった」と言った。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

私はアブー・タルハ、アブー・ドジャーナ、そしてスハイル・ビン・バイダーウ等に、乾したなつめ椰子の実や新鮮なその実とを混ぜて造った酒の入っている水袋から、その酒をついでいた。
残余のハディースは前述と同様である。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは乾したなつめ椰子の実や新鮮なその実を混ぜたものを時を置いて飲むことを禁止された。
それは酒が禁制となった頃、広く人々が飲んでいた酒であった。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

私はアブー・ウバイダ・ビン・ジャッラーフ、アブー・タルハ、そしてウバイユ・ビン・カァブ等に熟したなつめ椰子の実あるいは乾したそれの実で造った飲み物をついでいた。
そこに訪問者があり「まこと、酒は禁止されました」と言った。
するとアブー・タルハは「アナスよ、その壷を壊すがよい」と言った。
私は石を刳り貫いて作った壷の所に行き、その下部を打った。するとそれは割れた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーはクルアーンの一節を啓示され、その中で酒を禁じられた。
住時、マディーナにあった酒はなつめ椰子の実から造ったものだけであった。

酒から酢を造ることは禁止されている

アナスは伝えている

預言者は酒から造られた酢について質問をお受けになった。
すると「それは禁止されたものである」と申された。

酒を薬として使用することは禁止されている

ワーイル・ハドラミーは伝えている

ターリク・ビン・スワイド・ジュウフィーは預言者に酒について尋ねた。
するとその御方はそれを禁止された。
あるいはそれを造ることを嫌悪された。
彼（ターリク）は「私はそれを薬として造るだけです」と言った。
するとみ使いは「それは薬ではない。
しかしそれは病（をもたらすもので）ある」と申された。

なつめ椰子の実や葡萄から造られる果実の飲み物も酒と呼ばれる

アブー・フライラは伝えている

私はアッラーのみ使いが「酒はこれら二つの木、すなわちなつめ椰子と葡萄の木の実から造られるものである」と申されるのを聞いた。

このハディースはアブー・フライラを根拠として、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「酒は二つの木、すなわち葡萄となつめ椰子の木（の実）から造られるものである」と申された。

乾かしたなつめ椰子の実と乾葡萄を混ぜてナビーズ（注）を造ることは忌むべきことである

（注）ナビーズは果実酒あるいは葡萄酒のように訳されているが、このハディースに述べられているそれはなつめ椰子の実や葡萄のような果実の入った飲料水のことである

ジャービル・ビン・アブドッラー・アンサーリーは伝えている

預言者は乾葡萄と乾したなつめ椰子の実、または熟したなつめ椰子の実と乾したその実を混ぜることを禁止された（注）。

（注）それらの組合わせによると短時間に発酵して酒になるからである

ジャービル・ビン・アブドッラー・アンサーリーは伝えている

アッラーのみ使いは乾したなつめ椰子の実と乾葡萄を一緒にしてナビーズを造ることを禁止された。
その御方はまた、熟したなつめ椰子の実と良く熟れたその実とを一緒にしてナビーズを造ることも禁じられた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは「良く熟れたなつめ椰子の実と完熟前のその実、それから乾葡萄と乾したなつめ椰子の実を、ナビーズを造るために混ぜてはならぬ」と申された。

ジャービル・ビン・アブドッラー・アンサーリーは伝えている

その御方は乾葡萄と乾したなつめ椰子の実とを一緒にしてナビーズを造ることを禁止された。
また完熟前のなつめ椰子の実と良く熟れたその実を一緒にしてナビーズを造ることも禁じられた。

アブー・サイードは伝えている

預言者は乾したなつめ椰子の実と乾葡萄とを一緒に混ぜること、また乾したなつめ椰子の実と完熟前のその実も一緒に混ぜ合わせることを禁じられた。

アブー・サイードは伝えている

アッラーのみ使いはわれわれが（ナビーズを造るために）乾葡萄と乾したなつめ椰子の実を混ぜること、また完熟前のなつめ椰子の実と乾したその実とを混ぜることも禁じられた。

前述のハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方の中でナビーズを飲む者は乾葡萄だけで造られたもの、または乾したなつめ椰子の実だけで造られたもの、あるいは熟したなつめ椰子の実だけで造られたものを飲まなければならぬ」と申された。

アブー・サイードはまた伝えている。

アッラーのみ使いはわれわれが完熟前のなつめ椰子の実と乾したその実と混ぜること、または乾葡萄を乾したなつめ椰子の実と混ぜること、あるいは乾葡萄と完熟前のなつめ椰子の実と混ぜることを禁じられた。

そしてみ使いは「あなた方の中でそれを飲む者は……」と申された。

残余のハディースは前述のハディースと同様である。

アブー・カターダは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は赤らんだなつめ椰子の実と良く熟れたその実とを一緒にしてナビーズを造ってはならぬ。

また乾葡萄と乾したなつめ椰子の実とを一緒にしてナビーズを造ってもならぬ。

あなた方は両者の中のいずれか一方だけでナビーズを造れ」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・カターダは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は赤らんだなつめ椰子の実とよく熟れたその実を一緒にしてナビーズを造ってはならぬ。

また良く熟れたなつめ椰子の実と乾葡萄を一緒にしてナビーズを造ってもならぬ。

あなた方は（両者の中の）いずれか一方だけでナビーズを造れ」と申された。

ヤヒヤーはアブドッラー・ビン・カターダに会った。

その時彼（アブドッラー）は彼の父を根拠とする前述のような預言者の話を彼にしたと言っている。

このハディースでイブン・アブー・カシールを経由するものは二つの伝承者経路を経て伝えられている。

しかしそれには言葉に若干の相違がある。

アブドッラー・ビン・カターダは彼の父を根拠として伝えている

預言者は乾したなつめ椰子の実と完熟前のその実を混ぜたもの、また乾葡萄と乾したなつめ椰子とを混ぜたもの、あるいは赤らんだなつめ椰子の実と良く熟れたその実を混ぜたものから（ナビーズを造ることを）禁じられた。

そして「あなた方はそれぞれの果実一種類のみでナビーズを造るがよい」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは乾葡萄と乾したなつめ椰子の実を一緒にしたもの、また新鮮ななつめ椰子の実と乾したそれの実を一緒にしたものから（ナビーズを造ることを）禁じられた。

そして「ナビーズは二つのものの中のいずれか一方で造られるものである」と申された。

このハディースはアブー・フライラを根拠として、別の伝承者経路でも伝えられている。

イブン・アッバースは伝えている

預言者は乾したなつめ椰子の実と乾葡萄を一緒に混ぜること、また完熟前のなつめ椰子の実と乾したその実とを一緒に混ぜて（ナビーズを造ることを）禁じられた。

そして（イエメンの）ジュラシュの人々に書を送り、乾したなつめ椰子の実と乾葡萄を混ぜて（ナビーズを造ることを）禁止された。

このハディースでシャイバーニ—を経由するものも、別の伝承者経路を経て伝えられている。

だがそれには“乾したなつめ椰子の実と乾葡萄”とはあるが、“新鮮ななつめ椰子の実と乾したそれの実”という言葉は述べられてはいない。

イブン・ウマルは伝えている

彼は常々、完熟前のなつめ椰子の実と良く熟れたその実とを一緒に、また乾したなつめ椰子の実と乾葡萄を一緒にしてナビーズを造ることは禁じられた、と言っていた。

イブン・ウマルは伝えている

完熟前のなつめ椰子の実と良く熟れたその実と一緒にすること、また乾したなつめ椰子の実と乾葡萄を一緒にしてナビーズを造ることは禁じられた。

ワニスを塗った壷、ひょうたん、緑色のピッチを塗った壷、椰子の幹をくり抜いて作った桶等でナビーズを造ることは禁止されていた。
だがそれも今日、飲んでも酔わないものという条件で解禁となった説明について

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは、ひょうたん、あるいはワニスを塗った壷の中でナビーズを造ることを禁じられた。

アナス・ビン・マーリクの前述と同一のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方はひょうたんの中やワニスを塗った壷の中でナビーズを造ってはならない」と申された。

それからアブー・フライラは「あなた方は緑色の（ピッチを塗った）壷は避けよ」と言っていた。

アブー・フライラは伝えている

預言者は、ワニスを塗った壷、緑色のピッチを塗った壷、それと椰子の幹をくり抜いて作った桶の中で（ナビーズを造ることを）禁じられた。

アブー・フフイラは「ハンタムとは何ですか」と尋ねられた。

彼は「それは緑色のピッチを塗った壷である」と答えた。

アブー・フライラは伝えている

預言者はアブドル・カイス族の代表者達に「私はあなた方に、ひょうたん、緑色のピッチを塗った壷、椰子の幹をくり抜いて作った桶、ワニスを塗った壷、それと、上部が切断されている水袋で（ナビーズを造ることを）禁ずる。

だがあなた方は皮の水袋の中にあるものを飲み、（その後袋の）口を結べ」と申された（注）。

（注）口を結んだ皮の水袋にあるものが発酵すると袋が裂ける。

従ってそれが裂けていなければ飲んでも酔うことはないとされる。

このハディースで禁止されているような容器で造られたものは、飲んで酔うようなものに変っている恐れがある

アリーは伝えている

アッラーのみ使いは、ひょうたんやワニスを塗った壷でナビーズを造ることを禁止された。

イブラヒームは伝えている

私はアスワドに「君は信者達の母（アーイシャのこと）にナビーズを造ってはいけない容器はどれかを尋ねましたか」と言った。

彼は「もちろんです。

私は信者達の母よ、アッラーのみ使いがナビーズを造ることを禁じられた容器について教えて下さい、と言った。

彼女は「その御方はわれわれ家族の者に、ひょうたんやワニスを塗った壷でナビーズを造ることを禁じました」と言った」と述べた。

私は彼（アスワド）に「彼女は緑色のピッチを塗った壷や土器の壷については述べませんでしたか」と尋ねた。

彼は「私は私が聞いたことだけを君に話すだけです。

それとも、私が聞かなかったことまで君に話すのですか」と言った。

アーイシャは伝えている

預言者は、ひょうたんやワニスを塗った壷で（ナビーズを造ることを）禁じられました。

このようなハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

スマーマ・ビン・ハズヌ・クシャイリーは伝えている

私はアーイシャに会った。そこで彼女にナビーズについて尋ねた。

彼女は「アブドル・カイスの代表達が預言者の所に参りましてナビーズについて尋ねました。

するとその御方は、彼等がひょうたん、ワニスを塗った壷、そして緑色のピッチを塗った壷等でナビーズを造ることを禁じられました」と言った。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、ひょうたん、緑色のピッチを塗った壷、椰子の幹をくり抜いて作った桶、ワニスを塗った壷等で（ナビーズを造ることを）禁じられました。

イスハーク・ビン・スワイド（途中伝承者）はこのハディースを伝えているが、それには“ワニスを塗った壷”という言葉の代りに“ピッチを塗ったもの”という言葉が使用されている。

イブン・アッバースは伝えている

アブドル・カイスの代表がアッラーのみ使いの所に来た。

その時預言者は「私はあなた方に、ひょうたん、緑色のピッチを塗った壷、椰子の幹をくり抜いて作った桶、そしてピッチを塗った壷等で（ナビーズを造ることを）禁止する」と申された。

ハンマードを経由して伝えられたハディースには“ピッチを塗った壷”という言葉の代りに“ワニスを塗った壷”という言葉が使用されている。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、ひょうたん、緑色のピッチを塗った壷、ワニスを塗った壷、それと椰子の幹をくり抜いて作った桶（でナビーズを造ることを）禁止された。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、ひょうたん、緑色のピッチを塗った壷、ワニスを塗った壷、そして椰子の幹をくり抜いて作った桶で熟したなつめ椰子の実と赤らんだその実とを混ぜて（ナビーズを造ることを）禁じられた。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、ひょうたん、椰子の幹をくり抜いて作った桶、そしてワニスを塗った壷でナビーズを造ることを禁じられた。

アブー・サイードは伝えている

アッラーのみ使いは水がめでナビーズを造ることを禁じられた。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは、ひょうたん、緑色のピッチを塗った壷、椰子の幹をくり抜いて作った桶、そしてワニスを塗った壷でナビーズを造ることを禁じられた。

預言者がナビーズを造ることを禁止されたというハディースはカターダを経由しても、伝えられている。

アブー・サイードは伝えている

アッラーのみ使いは緑色のピッチを塗った壷、ひょうたん、椰子の幹をくり抜いて作った桶の中の飲み物を禁止された。

サイード・ビン・ジュバイルは伝えている

私は（次の事実があったことを）証言する。

（それは）イブン・ウマルとイブン・アッバースが、アッラーのみ使いが、ひょうたん、緑色のピッチを塗った壷、ワニスを塗った壷、そして椰子の幹をくり抜いて作った桶でナビーズを造ることを禁じられた、ということを証言した（ということである）。

サイード・ビン・ジュバイルは伝えている

私はイブン・ウマルに水がめのナビーズについて尋ねた。

彼は「アッラーのみ使いは水がめ（で造られた）ナビーズを禁じられた」と言った。

それから私はイブン・アッバースの所に来て「あなたはイブン・ウマルが言っていることをお聞きにはなりませんか」と尋ねた。

「彼の言っていることとは何か」と彼は言った。

私は「アッラーのみ使いが水がめのナビーズを禁じられたということです」と言った。

彼は「イブン・ウマルは正しいことを言った。

アッラーのみ使いは、水がめのナビーズを禁じられたのである」と言った。

私は「水がめのナビーズとはどのようなものですか」と尋ねた。

彼は「それは土製の壷で造られたもの全てである」と言った。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはある遠征で人々に説教された。

私は（良く聞き取れなかったので）その御方の方に進み出たが、私がその御方の近くに行く前に去ってしまわれた。

私は「み使いは何を言われたのか」と尋ねた。

すると人々は「み使いは、ひょうたんやワニスを塗った壷でナビーズを造ることを禁じられた」と言った。

このハディースはイブン・ウマルを根拠として異った伝承者経路を経て伝えられている。

だが、マーリクとウサーマを除く伝承者達は“ある遠征で”という言葉を述べてはいない。

サービトは伝えている

私はイブン・ウマルに「アッラーのみ使いは水がめのナビーズを禁じられたのですか」と言った。

彼は「人々はそのように主張している」と言った。

私は再度「アッラーのみ使いはそれを禁じられたのですか」と言った。

彼は「人々はそのように主張している」と言った。

ターウースは伝えている

ある男がイブン・ウマルに「アッラーのみ使いは水がめでナビーズを造ることを禁じられたのですか」と尋ねた。

イブン・ウマルは「その通り」と答えた。

それからターウースは「アッラーに誓い、私は彼からその話を聞いた」と言った。

イブン・ウマルは伝えている

ある男が私の所に来て「預言者は水がめやひょうたんでナビーズを造ることを禁じられたのですか」と尋ねた。

私は「その通り」と答えた。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは水がめやひょうたんで（ナビーズを造ることを）禁じられた。

イブラヒーム・ビン・マイサラは伝えている

私はターウースが（次のように）言うのを聞いた。

（すなわち）私はイブン・ウマルの側で座っていた。

そこにある男が来て「アッラーのみ使いは、水がめ、ひょうたん、そしてワニスを塗った壷等でナビーズを造ることを禁じられたのですか」と尋ねた。

彼は「その通り」と答えた。

ムハーリブ・ビン・ディサールは伝えている

私はイブン・ウマルが「アッラーのみ使いは、緑色のピッチを塗った壷、ひょうたん、それとワニスを塗った壷等で（ナビーズを造ることを）禁じられた」と言うのを聞いた。

彼は「私は何度かそれを聞いた」とも言った。

ムハーリブ・ビン・ディサールはイブン・ウマルを根拠として、前述のようなハディースを別の伝承者経路でも伝えている。

その中で彼（ムハーリブ）は「私は彼（イブン・ウマル）が椰子の幹をくり抜いて作った桶についても言及したと思う」と言った。

ウクバ・ビン・フライスは伝えている

私はイブン・ウマルが「アッラーのみ使いは、水がめ、ひょうたん、それにワニスを塗った壷で（ナビーズを造ることを）禁じられ、『あなた方は皮の水袋でナビーズを造れ』と申された」と言うのを聞いた。

ジャバラは伝えている

私はイブン・ウマルが「アッラーのみ使いはハンタマで（ナビーズを造ることを）禁じられた」と話しているのを聞いた。

その時私は「ハンタマとは何ですか」と尋ねた。

彼は「土製の壷である」と答えた。

ザーザーヌは伝えている

私はイブン・ウマルに「預言者が禁じられた飲み物について、あなたが使っている言葉でお話し下さい。

そしてそれをわれわれが使っている言葉で説明して下さい。

事実、あなた方の言葉とわれわれの言葉には相違があります」と言った。

すると彼は「アッラーのみ使いは（次に上げる容器で）ナビーズを造ることを禁じられた。

（すなわち）ハンタマ、これはピッチを塗った壷、ドッバーウ、これはひょうたん、ムザッファト、これはワニスを塗った壷、そしてナキール、これはなつめ椰子の皮をはぎ、それを穿ったものである。

そしてなお、その御方はナビーズを皮の水袋で造ることをお命じになった」と言った。

このハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

サイード・ビン・ムサイヤブは伝えている

私はアブドッラー・ビン・ウマルがこのミンバルの側で、アッラーのみ使いのミンバルの方を指し示し（次のように言うのを）聞いた。

「アブドル・カイスの代表がアッラーのみ使いの所に来た。

そして飲み物について尋ねた。

するとその御方は、ひょうたん、椰子の幹をくり抜いて作った桶、そして緑色のピッチを塗った壷等で（ナビーズを造ることを）禁じられた」

アブドル・ハーリク・ビン・サラマは（次のように）言った。

私は（サイード）に「アブー・ムハンマドよ、ワニスを塗った壷はどうなるのですか」と尋ねた。

と言うのは、彼がそれについて話すのを忘れたと思ったからである。

すると彼は「私はその日、それについてはアブドッラー・ビン・ウマルから聞かなかった」と言った。

時にアブドッラーはワニスを塗った壷でナビーズを造るのは忌むべきこととしていた。

ジャービルとイブン・ウマルを根拠とする（次のような）ハディースが伝わっている

アッラーのみ使いは、椰子の幹をくり抜いて作った桶、ワニスを塗った壷、ひょうたん等でナビーズを造ることを禁じられた。

アブー・ズバイルは伝えている

私はイブン・ウマルが「私は、アッラーのみ使いが水がめ、ひょうたん、それとワニスを塗った壷でナビーズを造ることを禁止されるのをお聞きした」と言うのを耳にした。

アブー・ズバイルは伝えている

私はジャービル・ビン・アブドッラーが「アッラーのみの使いは、水がめ、ワニスを途った壷、椰子の幹をくり抜いて作った桶等で（ナビーズを造ることを）禁止された」と言うのを聞いた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いはナビーズを造る容器（例えぱ皮の水袋のようなもの）が全く無かった時は、（蒸し焼きなべのような）蓋のある石の容器でそれを造らせておられた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者は蓋のある石の容器でナビーズを造らせておられた。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いが飲まれるナビーズは皮の水袋で造られていた。

だが人々が皮の水袋を手に入れられなかった時は蓋の付いた石の容器でそれを造って差し上げた。

ある人々は一私が聞いている所で、アブー・ズバイルに「（それは）石製の器ですか」と言った。

彼は「（そうだ）石製の器である」と言った。

アブドッラー・ビン・ブライダは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「私は、今まであなた方に皮の水袋にあるナビーズ以外のそれを飲むことを禁止した。

（だが今後は）全ての容器のものを飲んでよい。

ただし酔うものは飲んではならぬ」と申された。

イブン・ブライダは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「私はあなた方に特定の容器で（造られたナビーズを飲むことを）禁じた。

（だが今やそれは禁止されたものではない。と言うのも）それらの特定の容器—または、ある容器—が何かを合法なものとしたり、あるいは非合法なものとするのではないからで

ある。

要は、それを飲んで酔うものは全てハラームである」と申された。

イブン・ブライダは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「私はあなた方に皮で作られた容器以外にあるナビーズを飲むことを禁止して来た。

だが今や、あらゆる容器にあるものを飲んでよい。

ただし酔うものは飲んではならぬ」と申された。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いがある特定の容器にあるナビーズを飲むことを禁じられた時、人々は「全ての人々が皮の水袋を持っているわけではありません」と言った。

するとその御方は、彼等にワニスを塗った壷以外の水がめで造られたものは許可された。

飲んで酔うものは全て酒であり、酒は全てハラームである

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いはビトウ（注）について質問をお受けになりました。
するとみ使いは「飲んで酔うものは全てハラームである」と申されました。

（注）蜂蜜だけ、あるいは蜂蜜となつめ椰子の実で造ったナビーズ

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いはビトウについて質問をお受けになりました。
すると「飲んで酔うものは全てハラームである」と申されました。

このハディースはズフリーを経由しても伝えられているが、スフヤーンとサーリフを経由して伝えられたハディースには"その御方はビトウについて質問をお受けになった"という言葉は述べられてはいない。
それが述べられているのはマァマルを経由したハディースである。
またサーリフを経由したハディースには"彼女はアッラーのみ使いが「飲んで酔うものは全てハラームである」と申されるのを聞きました"という言葉だけが述べられている。

アブー・ムーサーは伝えている

預言者は私とムアーズ・ビン・ジャバルをイエメンに派遣された。
私は「アッラーのみ使いよ、われわれの地（イエメン）にはミズル（注）と呼ばれている飲み物と蜂蜜から造られるビトウと呼ばれている飲み物がございます（がそれについてはいかがでしょうか）」と言った。
するとその御方は「酔わせるものは全てハラームである」と申された。

（注）キビ、大麦、小麦その他の穀類から造られる飲み物

サイード・ビン・アブー・ブルダは彼の祖父を根拠として伝えている

預言者は彼（サイードの祖父アブー・ムーサー）とムアーズをイエメンに派遣された。
み使いはその二人に「（人々に）良き便りを伝え、物事を容易にし、教育を起こすがよい。また（人々を）脅えさせてはならぬ」とも申されたと思う。
その御方が（ムアーズを）任命されて、アブー・ムーサーが帰国した時「アッラーのみ使いよ、彼等には煮つめて濃厚にした蜂蜜の飲み物と、大麦から造るミズルという飲み物があります」と言った。

アッラーのみ使いは「礼拝に支障を来すような酔う飲み物は全てハラームである」と申された。

アブー・ブルダは彼の父（アブー・ムーサー）を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは私（アブー・ブルダの父）とムアーズをイエメンに派遣した。
その時み使いは「人々のために（多幸を）祈るがよい。
そして良き便りを伝え（人々を）脅えさせてはならぬ。
また物事を容易にし、困難にしてはならぬ」と申された。
私は「アッラーのみ使いよ、われわれがイエメンで用いていた二種の飲み物について法的判断をお示し下さい。
その一つはビトウで、蜂蜜から造られ濃厚にして発酵させたナビーズです。
他の一つはミズルで、とうもろこしや大麦から造られ、それもまた濃厚にして発酵させたナビーズです」と言った。
まことに、アッラーのみ使いは簡潔にして意味の多い御言葉を述べられる天与の才をお持ちの方であった。
その御方は「私は、酔わせて礼拝をなおざりにさせる飲み物は全て禁ずる」と申された。

ジャービルは伝えている

ある男がイエメンのジャイシャーンから来た。
そして預言者に、彼等がその地で飲むミズルと呼ばれているとうもろこしから造った飲み物に関して尋ねた。
預言者は「それは酔わせる飲み物か」と言われた。
彼は「はいそうです」と言った。
アッラーのみ使いは「酔わせるもの全てハラームである。
まことに、至高偉大なるアッラーは酔う飲料を飲む者にティーナト・ル・ハバールをお飲ませになることを約束されておられる」と申された。
人々は「アッラーのみ使いよ、ティーナト・ル・ハバールとは何のことですか」と尋ねた。
その御方は「（それは）火獄の住人の汗である。
または、火獄の住人の尿である」と申された。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「飲んで酔うものは全て酒である。
そして、飲んで酔うものは全てハラームである。
現世で酒を飲んでそれに溺れ、後悔もせず死せる者は来世では決してそれを飲むことはない（注）」と申された。

（注）「……来世では決してそれ（酒）を飲むことはない」と言うのは「天国に入れない」の換喩である

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「飲んで酔うものは全て酒である。
飲んで酔うものは全てハラームである」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

ナーフィウは伝えている

イブン・ウマルは「これはまさしく私が預言者から知り得た事柄である」と言ってから「その御方は『飲んで酔うものは全て酒であり、酒は全てハラームである』と申された」と言った。

酒を飲み後悔もせぬ者は懲罰として、来世にてそれを飲むことを禁じられる

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「現世で酒を飲んだ者は来世でそれを禁じられるであろう」と申された。

イブン・ウマルは伝えている

み使いは「現世で酒を飲み後悔もせぬ者は、来世でそれを禁じられ、それを飲まされることは決してないであろう」と申された。

（このハディースに関し）マーリクは「それは預言者までさかのぼるハディースですか」と問われた。

彼は「そうです」と言った。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「現世で酒を飲んだ者は来世でそれを飲むことは決してない。

ただし後悔した場合は別である」と申された。

このハディースはイブン・ウマルを根拠として、別の伝承者経路でも伝えられている。

ナビーズは飲んでよいが、発酵し飲んで酔うものは別である

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、夕刻その御方のために造られたナビーズは、その一夜が明けてからお飲みになり、その日、その日の晩、更にその翌日とその晩、そしてその次の午後までそれを飲まれていた。

それでもなお残った場合は召し使いにお与えになるか、またはそれを流すようお命じになった。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは皮の水袋で造られたナビーズを召し上がっておられた。

シュウバ（途中伝承者）は「それは月曜の夜からである。

つまりその御方は月曜日と火曜日の午後までそれを飲まれていたのである。

それでもし、その時いくらかでも残っていれば、それを召し使いにお与えになるか、あるいは流してしまわれた」と言った。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは乾葡萄を水に浸したものを召し上がっておられた。その御方は、それが造られた日、その次の日、更に三日目の夕刻までそれをお飲みになっていた。

その後は（誰かが）それを飲んでしまうか、あるいは流してしまうか（そのいずれかを）御命じになっておられた。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは皮の水袋の中に乾葡萄を浸したものを召し上がっておられた。

その御方は、それが造られた日と翌日、更にその翌日とそれをお飲みになっており、（結局）三日目の夕刻までお飲みになり（他の人々）にもそれを飲ませておられた。

それでもなお残った場合はそれを流してしまわれた。

ヤヒヤー・アブー・ウマル・ナハイーは伝えている

ある人々がイブン・アッバースに酒の売買やそれを商うことについて尋ねた。

すると彼は「あなた方はムスリムか」と尋ねた。

彼等に「そうです」と答えた。

彼は「それは売買してはならぬものであるし、もちろん、それで商売してはならない」と言った。

すると彼等はナビーズについて尋ねた。

彼は「アッラーのみ使いが旅に出られ、それからお帰りになった時、教友達の幾人かがそ

の御方のためにピッチを塗った壷、椰子の幹をくり抜いて作った桶、ひょうたんの中等にナビーズを造っておいた。
だがその御方は、それを流すように御命じになった。
それからみ使いは皮の水袋に乾葡萄と水を入れさせて一晩そのままにし、翌朝それをお飲みになった。
そしてその日とその晩、更にその翌日の夕刻までお飲みになり、（他の人々にも）飲ませておられた。
それが造られて三晩経た朝を迎えられると、残ったものを流すよう御命じになった。

スマーマ（イブン・ハズヌ・クシャイリー）は伝えている
私はアーイシャに会った。
そこでナビーズについて尋ねた。
彼女はエチオピアの女奴隷を呼び「この女性に尋ねなさい。
彼女はアッラーのみ使いにナビーズをお造りしておりました」と言った。
そのエチオピアの女性は「私は夜、その御方に皮の水袋でナビーズをお造りしていました。
そしてその袋の口を閉じて吊しておきました。
朝になりますとみ使いはそれからお飲みになりました」と言った。

アーイシャは伝えている
私達はアッラーのみ使いに上部を閉じた皮の水袋でナビーズを造って差し上げておりました。
その皮袋の下部には（水を出すための）口がついておりました。
私達が朝それを用意しますと、その御方は夕刻にお飲みになり、夕刻にそれを用意しますと夜が明けてからお飲みになりました。

サフル・ビン・サアドは伝えている
アブー・ウサイド・サーイディーはアッラーのみ使いを彼の結婚式に招待した。
その日花嫁は人々の間で（食事、飲み物等の）奉仕をしていた。
サフルは「皆さん、彼女がアッラーのみ使いにおつぎした飲み物は何かお分りですか。
それは彼女がみ使いに差し上げるため夜通しなつめ椰子の実を容器に浸しておいたのです。
そして、その御方が食事を済まされた時、それをおつぎしたのです」と言った。

サフルは伝えている
アブー・ウサイド・サーイディーはアッラーのみ使いを訪れ、その御方を（彼の結婚式に）招待した。

残余のハディースはほぼ同一であるが（このハディースでは）サフルは「その御方が食事を済まされた時、彼女がそれをおつぎしたのです」という言葉は述べていない。

サフル・ビン・サアドは伝えている

（このハディースは別の伝承者経路を経て伝えられたがその中で）
彼は「（その飲み物は）石製の容器で造られました。
そして、アッラーのみ使いが食事を済まされた時、彼女が特にみ使いのためになつめ椰子の実を水に浸したものを差し上げたのです」と言った。

サフル・ビン・サアドは伝えている

アッラーのみ使いに、砂漠に住む一女性のことが話された。
み使いはアブー・ウサイドに彼女の所に手紙を届けるよう御命じになった。
彼はそれをその女性の許に送った。
するとその女性はやって来てサーイダ族の砦に泊った。
アッラーのみ使いはその女性にお会いになるために出て行かれた。
彼女は頭を下げて座っていた。
アッラーのみ使いがお話しになられると、彼女は（恐れ）「アッラーが私をあなたからお救い下さいますように（注）」と言った。
その御方は「（御安心あれ）私はあなたを私の側に近づけはしない」と申された。
人々は彼女に「あなたはこの御方がどなたか御存知か」と言った。
彼女は「いいえ」と言った。
彼等は「この御方はアッラーのみ使いである。
あなたに結婚を申し込むために見えられたのに」と言った。
彼女は「私はこのことでは（大変な名誉を逸してしまい）不運な女でした」と言った。
サフルは「その日、アッラーのみ使いはお出でになられ、教友達を従えてサーイダ族の柱廊に座を占められた。
そして私に『われわれに水を与えよ』と申された。
私はこのコップを出し、これでその御方に水を差し上げた」と言った。
アブー・ハーズィムは「サフルはわれわれにコップを出した。
われわれはそれで飲んだ」と言った。
更に彼は「ウマル・ビン・アブドル・アズィーズが（マディーナの行政を預った時、祝福を願って）そのコップを欲した。
サフルは彼にそれを献上した」とも言った。
アブー・バクル・ビン・イスハークの話の中に“み使いは「サフルよ、われわれに水を飲ませよ」と申された”という言葉がある。

（注）この場合、女性の「アッラーが私をあなたからお救い下さいますように」という言葉は「私はあなたの妻にはなりたくない」の意で、彼女は相手が預言者とは知らずにこの言葉を発してしまったのである

アナスは伝えている

私はアッラーのみ使いに私のコップであらゆる飲み物を差し上げた。
例えば蜂密、ナビーズ、水そしてミルクである。

ミルクは合法的な飲料である

アブー・バクル・スィッディークは伝えている

われわれが預言者と御一緒にマッカを出てマディーナに向かった時、一人の牧童の側を通った。

その時、アッラーのみ使いは喉を渇かしておられた。

それで私はその御方に若干のミルクをしぼって差し上げげた。

その御方は(それを飲まれたので、私は)満足であった。

バラーウは伝えている

アッラーのみ使いがマッカからマディーナに向かわれた時(不善をたくらんでいる)スラーカ・ビン・マーリク・ビン・ジュウシュムがその御方の後をつけた。

み使いは(これをお知りになり)彼に"災いあれ"と祈ると、彼の馬は砂漠の中に沈んでしまった。

彼は「私はあなたに悪いことは致しませんから、私のために祝福をアッラーに祈願して下さい」と言った。

その御方は彼のためにアッラーに祈願された。

この時、アッラーのみ使いは喉の渇きをおぼえられた。

折りしも一同はある羊飼いの近くを通りかかった。

アブー・バクル・スィッディークは「私はコップを手にし、アッラーのみ使いのためにミルクを少ししぼって差し上げげた。

するとその御方はお飲みになったので私は満足であった」と言った。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いがエルサレムへの夜旅(イスラーウ)をされた時、そこで酒とミルクが入った二つのコップを出された。

その御方は両者をじっと御覧になられ、ミルクの入った方をお取りになった。

すると天使ガブリエルが「あなたを高潔な天性に導かれたアッラーに称えあれ。

もしあなたが酒の入ったコップを取ったら、あなたの共同体は誤ってしまったことであろう」と言った。

このハディースはアブー・フライラを根拠として、他の伝承者経路でも伝えられている。

しかしそれにはイーリヤーウ(エルサレム)という言葉は述べられてはいない。

ナビーズを飲むこととそれを入れた容器の覆いについて

アブー・フマイド・サーイディーは伝えている

私は預言者に純粋なミルクをコップ一杯差し上げたが、それは覆いがない容器にあったものであった。

その御方は「どうしてそれを覆っておかなかったのか。

たとえ容器に棒切れを渡しただけであったとしても（注）」と申された。

アブー・フマイドは「夜は、皮の水袋を閉じ、（同じく）夜は扉も閉じることを命じられただけである」と言った。

（注）発酵を防ぐためと害虫が飛ぶ不潔なものが入ることを防止するため

アブー・フマイド・サーイディーは伝えている

私は預言者にミルクの入ったコップを持って来て差し上げた。

残余のハディースは前述と同様である。

しかし、ザカリーヤーウが伝えたハディースにはフマイドが言っている“夜”という言葉は述べられてはいない。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

われわれはアッラーのみ使いと御一緒にいた。

その時、その御方が水をお求めになった。

ある者が「アッラーのみ使いよ、ナビーズをお持ちしましょうか」と言った。

その御方は「持って来なさい」と言われた。

彼は急いで出て行きナビーズの入ったコップを持って来た。

するとアッラーのみ使いは「どうしてそれに覆いをかけておかなかったのか、たとえ容器に棒切れを渡しただけであったとしても」と申された。

ジャービルは伝えている

アブー・フマイドという者が純粋なミルクの入ったコップを持って来た。

するとアッラーのみ使いが「どうしてそれに覆いをかけなかったのか。

たとえ容器に棒切れを渡しただけであったとしても」と申された。

容器を覆い、水袋を閉じ、扉も閉じ、それに対してアッラーの御名を唱える。そして休む際にはランプの火を消し、太陽が沈んだ後は子供や家畜を外に出さぬことの命令

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは「容器を覆い、水袋の口を結び、扉を閉じ、ランプの明かりを消すがよい。

そうすればサタンが水袋の口をゆるめたり、扉を開いたり、容器の覆いを取ることはない。

それでもし覆いを見出すことが出来ない者は、せめて容器に棒を渡し、アッラーの御名を唱えるだけのことだけでも行うがよい。

まことに鼠（や害虫）が人々に災害をもたらし、家族諸共その家に火をつけることもあろう（注）」と申された。

クタイバは彼のハディースの中で"扉を閉じよ"という言葉は述べてはいない。

（注）鼠その他の害虫が夜出て来て、悪役の病原菌を容器に落としたのも知らずにそれを飲み、大変な災禍を招くことにもなりかねない

このハディースはジャービルを根拠とし、言葉に若干の相違をもって伝えられている

（例えば）み使いは「容器にふたをせよ、容器を覆え」と申された。

しかし、"容器に棒切れを渡すこと"という言葉は述べられてはいない。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは「扉を閉じよ」と申された。残余のハディースは同一であるが、その中でみ使いは「容器類を覆え」と申された。

そしてまた「害をする生き物がその家族の衣服に火をつけることもあろう」とも申された。

このハディースはジャービルを根拠として別の伝承者経路で伝えられている。

その中には、み使いは「鼠（その他の害虫が）その家族諸共その家に火をつける」と申された、という言葉が述べられているものがある。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは「夜の帳が降りた時－または、あなた方が夕刻を迎えた時－あなた方の子供達を戸外に出してはならぬ。

その時刻にはサタンがいたる所に出没する。

そしてすっかり暗くなったら彼等の拘束を解くがよい。

そして扉は閉じ、アッラーの御名を唱えよ。

そうすればサタンは閉じられた扉を開くことはない。

また皮の水袋の口も結び、アッラーの御名を唱えよ。
そして容器に覆いをし（それにも）アッラーの御名を唱えよ。
たとえその上に何かを渡すだけであっても。
そしてランプの明かりを消すがよい」と申された。

イブン・ディーナールはジャービル・ビン・アブドッラーから、前述のような話を聞いたとして伝えている。
だが彼は「至高偉大なるアッラーの御名を唱えよ」とは述べていない。

前述のハディースはイブン・ジュライジュを経由して伝えられているのもある。

ジャービルは伝えている
アッラーのみ使いは「太陽が沈み夜の暗黒が広まってしまうまでは、あなた方の家畜や子供達を放置してはならぬ。
まこと、多くのサタンが太陽が沈み（一帯が）夕闇に覆われてしまうまでは地上で活動している」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
私はアッラーのみ使いが次のように申されるのを聞いた。
（すなわち）「容器を覆え、皮の水袋を閉じよ。
一年の中には疫病が訪れる夜がある。
それは蓋の無い容器、閉じられてない水袋の側は必ず通って行く」と申された。

前述のハディースはライス・ビン・サアドを経由しても、伝えられている。
しかしそれには“アッラーのみ使いは「まこと、一年の中には疫病が訪れる日がある」と申された。”と伝えられている。
そして更にそのハディースの終りに“われわれの所にいる非アラブ人は、それがカーヌーヌ・ル・アッワル（12 月）に訪れると恐れている。
という語句がある。

サーリムは彼の父を根拠として伝えている
預言者は「あなた方が寝る時は家にある（ランプその他の）火を放置したままであってはならぬ」と申された。

アブー・ムーサーは伝えている

マディーナのある家が夜、家族諸共焼けてしまった。

この災禍がアッラーのみ使いに話されると「火はあなた方の敵である。

あなた方は休む時は火を消してからにせよ」と申された。

食べ物、飲み物の作法とそれに関する法則

フザイファは伝えている

われわれはアッラーのみ使いと御一緒に食事をした時は、その御方が先ず（食べ物に）手を置かれ、食べ始められてからわれわれも食事を始めた。

ある日、われわれがその御方と御一緒に食事をした際、小娘が（何かに）押されたかのように飛んで来て食べ物に手を置いた。

その時み使いは彼女の手を押さえた。

次にベドウィンの男がこれも（何かに）押されたかのように飛んで来た。

み使いはその男の手も押さえた。

そして「まこと、サタンはアッラーの御名を唱えられていない食べ物は、彼が食べてよいものと考えている。

そこで彼は彼女を介することで容易に食べることが出来るために連れて来た。

それで私は彼女の手を押さえた。

また彼はベドウィンの男を介することで容易に食べることも出来るために連れてきた。

故に私は彼の手を押さえた。

私の命を手中にしておられる御方に誓い、まこと、彼（サタン）の手は、彼女（または彼）の手と共に私の手中にある」と申された。

フザイファ・ビン・ヤマーマは伝えている

われわれがアッラーのみ使いと御一緒に食事に招待された時は…

残余のハディースは前述と同一であるが（この中では）“彼はあたかも追われるようにして”と述べられ、小娘についても“彼女はあたかも追われるようにして”と述べている。

またそれにはベドウィンの男の方が小娘より早く来たことになっている。

なおこのハディースの最後に“”それからみ使いは、アッラーの御名を唱えてお食べになった”という言葉を付加している。

このハディースでアアマシュを経由したものも、別の伝承者経路で伝えられているが、それには小娘の方をベドウィンの男の前に出している。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私は預言者が（次のように申されるのを）聞いた。

（すなわち）人が自分の家に入った時は、入る際と食事の際にアッラーの御名を唱えるのです。

そうすればサタンは（彼の仲間に）「お前達の泊る場所も夕食も全くありはしない」と言うであろう。

それでもし人がアッラーの御名も唱えずに自分の家に入れば、サタンは「お前達は泊る所

を見つけたぞ」と言うであろう。
そしてまた人が食事の際にアッラーの御名を唱えなかったら、サタンは「お前達は泊まる場所と夕食に在り付いたぞ」と言うであろう。
またジャービル・ビン・アブドッラーは私はアッラーのみ使いが（次のように申されるのを）聞いた、と言って前述同様のハディースを伝えたが、
これには“み使いは「もし彼が食事の際にアッラーの御名を唱えなかったなら、そしてもし彼が自分の家に入る際にアッラーの御名を唱えなかったなら」と申された”という言葉がある。

ジャービルは伝えている
アッラーのみ使いは「あなた方は左手で物を食べてはならぬ。
まこと、サタンは左手で食べる」と申された。

イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「あなた方は誰でも食事をする時は右手を使用せよ。
また物を飲む時も右手を用いるがよい。
まこと、サタンは左手で食べ、左手で飲む」と申された。
このハディースはスフヤーンを経由し、伝承者経路で伝えられている。

サーリムは彼の父を根拠として伝えている
アッラーのみ使いは「あなた方は誰一人として左手で食べてはならぬ。
また左手で飲んでもならぬ。
まこと、サタンは左手で食べ、左手で飲む」と申された。
ナーフィウはこれに加え「それ（左手）で物を取ってもならぬ。
またそれで与えてもならぬ」と述べている。
アブー・ターヒル（途中伝承者）の話の中には「あなた方の誰もが（左手で）絶対に食べてはならぬ」という言葉がある。

サラマ・ビン・アクワウは伝えている
ある男がアッラーのみ使いの所で左手を使って食べた。
するとその御方が「右手で食べよ」と言われた。
彼は「私には出来ない」と言った。
彼は傲慢さから命令を拒否していたに過ぎなかった。
み使いは「君が（本当）にそうすることが出来なくなるように」と祈られた。
すると彼は右手を彼の口まで上げられなくなってしまった。

ウマル・ビン・アブー・サラマは伝えている

私はアッラーのみ使いの保護を受けていた。

私が食事の際、皿にある物をあちこちと取って食べているとみ使いは私に「これ、君はアッラーの御名を唱え、右手で君の近くにある物から取って食べよ」と申された。

ウマル・ビン・アブー・サラマは伝えている

私はある日、アッラーのみ使いと御一緒に食事をした。

私は皿のここかしこの肉をつまんで食べ始めた。

するとみ使いは「君の近くのものから取って食べよ」と申された。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

預言者は皮の水袋の上部を折り曲げ（その口から直接飲むことを）禁じられた（注）。

（注）中のものが清潔かどうか分らないので、コップその他の器に一旦注いでから飲めということ

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは皮の水袋の上部を折り曲げ、その口から（直接）飲むことを禁じられた。

前述のハディースはズフリーを経由しても伝えられている。

その中で彼はاختناث ikhtinath という言葉の意味を“水袋の頭部を引っ繰り返し（または折り曲げ）て、それから（直接）飲むことである”と説明している。

立ったまま飲むことは忌むべきことである

アナスは伝えている

預言者は立ったまま飲むとお咎めになった。

アナスは伝えている

預言者は男子が立ったまま飲むことを禁じられた。

カターダは「われわれはアナスに『食べ物はどうなのですか』と言った。

彼は『それはより悪いことである。またはより忌まわしいことである』と言った」と述べた。

このハディースはアナスを根拠として異った伝承者経路で伝えられている。
その中にはカターダの言葉は述べられてはいない。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

預言者は立ったまま飲むとお咎めになった。

アブー・サイード・フドリーはこのハディースを別の伝承者経路でも伝えている。
それには"アッラーのみ使いは立ったまま飲むことを禁じられた"と述べられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は誰でも絶対に立って飲んではならぬ。

それで、それを忘れた者は吐き出せ(注)」と申された。

(注)立って飲むことは絶対的禁止事項ではないが好ましくない行為である

ザムザムの水は立ったまま飲んでよい

イブン・アッバースは伝えている

私はアッラーのみ使いにザムザムの水を差し上げた。

するとその御方は立ったままお飲みになった。

イブン・アッバースは伝えている

預言者は皮バケツに在ったザムザムの水を立ったままお飲みになった。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは立ったままザムザムの水をお飲みになった。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いにザムザムの水を差し上げた。

するとその御方は立ったままお飲みになった。

その御方はカアバ神殿の側に立っておられた際にそれを求められたのであった。

このハディースはシュウバを経由し別の伝承者経路で伝えられているが、それには言葉に若干の相違がある。

飲む際は、容器の内側で呼吸することは忌むべきことである。その際の呼吸は外側で行い、しかも三呼吸で飲むのがよい

アブドッラー・ビン・アブー・カターダは彼の父を根拠として伝えている

預言者は容器の内側で呼吸することを禁じられた。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いはお飲みになる際は三呼吸で飲まれるのが常であった。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いはお飲みになる際は三呼吸でお飲みになった。

そして「これは渇きをより良く癒やし、その苦痛をより早く和らげ、またより美しい飲み方でもある」と申された。

アナスは「それで私も飲む際は三呼吸で飲む」と言った。

このハディースはアナスを根拠として、別の伝承者経路で伝えられているが、これには言葉に僅少の相違がある。

水やミルクを幾人かで飲む場合は右手の人から順次飲むのが好ましい

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いの所に水と混ぜられたミルクが持って来られた。

その御方の右にはベドウィンの男が、左手にはアブー・バクルが控えていた。

その御方はそれを飲まれた後、ベドウィンの男にそれをお与えになり「右の者から、右の者から」と申された。

アナスは伝えている

預言者がマディーナに来られた時、私は 10 歳であった。

そしてその御方は私が 20 歳の時亡くなられた。

私の母や母の姉妹達は私にその御方への奉仕を常に奨励していた。

ある時その御方は私達の家に来られた。

私はその御方に飼っていた羊の乳をしぼり、家の井戸の水を混ぜて差し上げた。

アッラーのみ使いはそれをお飲みになった。

ウマルとアブー・バクルはその御方の左に控えていたが、ウマルは「アッラーのみ使いよ、アブー・バクルにそれをお与え下さい」と言った。

するとその御方は右に控えていたベドウィンの男にそれをお与えになり「右の者から、右の者から」と申された。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いが私達の家にお出でになった。

そして、その御方は飲み物を望まれたので私達は羊の乳をしぼり、家の井戸水をそれに混ぜて差し上げた。

その御方はそれをお飲みになった。

その時アブー・バクルはその御方の左に、ウマルは前に、右にはベドウィンの男がいた。

アッラーのみ使いがその飲み物のいくらかを飲み終えた時、ウマルが「アッラーのみ使いよ、それをこちらに居るアブー・バクルにお与え下さい」と言った。

するとアッラーのみ使いはベドウィンの男にそれをお与えになり、アブー・バクルとウマルは後回しにされた。

その時み使いは「右の者から、右の者から」と申された。

アナスは「それはスンナ（聖慣習）である。

それはスンナである。それはスンナである」と言った。

サフル・ビン・サアド・サーイディーは伝えている

アッラーのみ使いの許に飲み物が持って来られた。

その御方はその中のいくらかをお飲みになった。

（その時）み使いの右手には少年が、左手には長老達が控えていた。

み使いは「君は、私がこちらに居る御長老達に（先に）与えることを許してくれるか」と言われた。

その少年は「いいえ、アッラーに誓って、私は、あなたより直接お受け出来るこの特恵をどなたにもお譲り致しません」と言った。

伝承者は「それで、アッラーのみ使いはそれを少年の手に置かれた」と言った。

このハディースはサフル・ビン・サアドを根拠としても、別の伝承者経路で伝えられているが、それには言葉に若干の相違がある。

指や皿を嘗めること、また一口程の食物でも落ちたものは拾い、それに付着したものを取り除いてから食べることが好ましい。
なお、手を嘗めてしまうまでは拭うことは好ましくない

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は誰でも、食事をした時は（使用した）右手を嘗めてしまうまで、または（誰かに）嘗めさせてしまうまでは、それを拭ってはならぬ」と申された。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は誰でも食事をした時は手を嘗めてしまうまで、または嘗めさせてしまうまで、それを拭ってはならぬ」と申された。

イブン・カアブ・ビン・マーリクは彼の父を根拠として伝えている

私は「預言者が食事に使用された三本の指を嘗めておられるのを見た」と言った。

イブン・ハーティムは"三本"という言葉は述べなかった。

なおこのハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

イブン・カアブ・ビン・マーリクは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは三本の指を使用して食事をしておられた。

そして、それを拭われる前に手を嘗めておられた。

アブドッラー・ビン・カアブは伝えている

私の父カアブは人々に「アッラーのみ使いは三本の指を使用して食事をしておられた。

そして食事をし終えるとそれを嘗めておられた」と話していた。

このようなハデイースはカアブ・ビン・マーリクを根拠として、別の伝承者経路でも伝えられている。

ジャービルは伝えている

預言者は（食事の後）指と皿を嘗めることを御命じになった。

そして「あなた方は祝福がどの部分にあるのか分らないであろう（注）」と申された。

（注）人が汗して得た食物には神の祝福があるがそれがどの部分にあるのかは分らない、従ってそれを少しでも粗末にすれば祝福を逃がすことになりかねないというわけである

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは「誰のものでも、一口程の食物でも落ちた時はそれを拾い、それに付いたものを取り除いてから食すがよい。
それをサタンのために放置してはならぬ。
（食事に使用した）指は嘗めてしまうまで手拭でぬぐってはならぬ。
それは食物のどの部分に祝福があるか分らないからである」と申された。

前述のハディースはスフヤーンを経由して他に伝えられているが、それには言葉に僅少の相違がある。

ジャービルは伝えている

預言者は「まこと、サタンはあなた方の誰の所にもやって来て一つ一つの事柄に関与する。
それは食事の際にもやって来る。
それでもしあなた方の誰かが一口程の食物でも落したらそれを拾い、付いたものを取り除いてから食すがよい。
それをサタンに放置してはならぬ。
また食事を終えた時は指を嘗めるがよい。
それはその食物のどの部分に祝福があるのか分らないからである」と申された。

このハディースはアアマシュを経由して他に伝えられている。
しかしそれには、このハディースの最初の部分の言葉「まこと、サタンはあなた方の誰の所にもやって来る」という言葉は述べられてはいない。

ジャービルはアッラーのみ使いから聞いた“（指を）嘗めること”に関する話と“一口程の（落ちた）食物”に関する話を伝えている。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは食事をされた時は使用された三本の指をお嘗めになっていた。
そして「誰のものでも一口程の食物でも落ちた時は、付いたものを取り除いて食すがよい。
サタンにそれを放置してはならぬ」と申された。
そしてわれわれに皿に付いている物もきれいに食すことをお命じになり「まことに、あなた方は食べ物のいずれの部分に祝福があるのか分らないであろう」と申された。

アブー・フライラは伝えている

預言者は「あなた方は誰でも食事をした時は指を嘗めるがよい。
それは食物のどの部分に祝福があるのか分らないからである」と申された。このハディースはハンマードを経由して他にも伝えられているが、それには言葉に僅少の相違がある。

客として招かれた者が招きを受けていない者を同伴した場合について、また招待者は連れてこられた者も招き入れることが望ましい

アブー・マスウード・アンサーリーは伝えている

アブー・シュアイブというアンサールの男がいた。
その男には肉売りを業とする召し使いがいた。
彼がアッラーのみ使いと会った時、その方の御顔には空腹の様子が現れていた。
そこで彼は召し使いに「われわれに五人分の肉を用意せよ。
私は預言者を含む五人の方々を御招待したいのだ」と言った。
召し使いは食物を用意した。
彼（アブー・シュアイブ）は預言者の所に来て、その御方を含む五人を招待した。
その時、その人々に一人の男が付いて来た。
み使いが門の所に着いた時「この者はわれわれに付いて来たのだが、もしあなたがよろしければ彼も同席させて下さい。
もしそれを好まなければ、彼にお引き取り願います」と申された。
すると招待者は「アッラーのみ使いよ、私は彼が同席することを許します」と言った。

前述のハディースはアブー・マスウード・アンサーリーを根拠として、多くの別伝承者経路でも伝えられている。

前述のハディースでジャービルを根拠とするものも多く伝えられている。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いの近所にペルシア人が住んでいた。
その人は肉のスープ料理が得意であった。
彼はアッラーのみ使いのためにそれをつくり、招待しようとしてその御方を訪れた。
するとみ使いは「この女性も（招待してくれますか）」とアーイシャについて尋ねた。
彼は「いいえ」と答えた。
するとみ使いは「それでは私もおことわりします」と申された。
だが彼は再度その御方を招待した。
み使いは「それで、この女性もですか」と申された。
彼はまた「いいえ」と言った。
み使いは「それでは私もおことわりします」と申された。
その後彼はまたその御方招待した。
するとみ使いは「それで、この女性もですか」と申された。

三度目に彼は「どうぞ」と言った。

そこでお二人はお立ちになり連れだってその男の家を訪れた。

ごく親しい人に招かれた場合、招待を受けた者は友人を随伴することを許される

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いはある日、またはある夜お出かけになった。
すると期せずしてアブー・バクルとウマルにお会いになった。
み使いは「このような時間にどうして家を出て来られたのか」と申された。
二人は「アッラーのみ使いよ、空腹のためです」と言った。
その御方は「私の命を手中にしておられる御方に誓って、あなた方が家を出た因は私が家を出た因でもあるのです。
さあ一緒に来なさい」と申された。
それで彼等はその御方と一緒に行った。
み使いはアンサールの一人の所に行かれた。
だが生憎留守であった。
彼の妻がみ使いを見ると「ようこそ、ようこそ御越し下さいました」と言った。
み使いは彼女に「御主人はどちらに行かれたのか」と申された。
彼女は「夫はわれわれのために新しい水を取りに行きました」と言った。
その時そのアンサールは帰って来た。
そしてアッラーのみ使いやお供の人達を見ると「アッラーに栄光あれ、本日、私にとってかくも名誉な客人が他にありましょうか」と言った。
そう言って彼は出て行き、完熟前のもの、乾いたもの、完熟、したもの等がついているなつめ椰子の房をもって来た。
そして「さあ、これをお上がり下さい」と言った。
それから彼は(羊を屠るための)ナイフを取った。
アッラーのみ使いは「乳を出すものは屠らぬように」と申された。
彼は羊を屠り訪問者はその肉やなつめ椰子の実を食しかつ喉をうるおした。
彼等が十分に食べそして飲んだ時、アッラーのみ使いはアブー・バクルとウマルに「私の命を手中にされている御方に誓って、復活の日、あなた方はこの享楽について必ず問われるであろう。
あなた方は空腹のために家を出て戻らず、この恩恵を享受し得た。
(これはアッラーに感謝せねばならぬことです)」と申された(注)。

(注)クルアーン第 102 章 8 節に「その日あなた方は(現を抜かしていた)享楽について必ず問われるであろう」と述べられている。
これは人間の貪欲さ、迷いに対する警告や叱責である。

しかし、このハディースで意図されることはそのようなことではなく、何も持たぬムハージル（マッカからの移住者）に与えられた恩恵に対する神への感謝を意味する

アブー・フライラは伝えている

ある日、アブー・バクルがウマルと一緒に座っていると、そこへアッラーのみ使いが来られた。
その御方は「あなた方はどうしてここに座っておられるのか」と申された。
二人は「空腹のために家を出て参りました。
真理のため、あなたを使わされた御方に誓って」と言った。
残余のハディースは前述のものと同一である。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

塹壕が掘られた時、私はアッラーのみ使いが空腹であることが分った。
そこで私は妻の所に取って返し彼女に「何か食べるものはあるか。
私はアッラーのみ使いが大分お腹を空かせておられると見た」と言った。
すると彼女は１サーア（穀物の計量単位）程の大麦の入った袋を出して来た。
またわれわれは小羊を飼っていた。
私はそれを屠り、妻は粉を挽いた。
彼女と私は相前後して仕事を終えた。
私は屠ったものを細かく切って土鍋に入れ、アッラーのみ使いの所に帰った。
彼女は「アッラーのみ使いや随行の方々を（多く招き過ぎて）私に恥かしい思いをさせないで下さいよ。
（食事の量は多くないのですから）」と言った。
私はその御方の許に行き小声で「アッラーのみ使いよ、私は飼っていた小羊を屠り１サーア程あった大麦を挽きました。
どうぞ幾名かの随員をお連れになってお出で下さい」と言った。
するとアッラーのみ使いは大きな声で「おお塹壕に居る人々よ、ジャービルがあなた方のために御馳走を用意してくれましたぞっ、急ぐがよい」と申され、
私に「私が行くまで、あなた方の土鍋をかまどから絶対に下ろしてはならぬ。
また、こねた粉も焼いてはならぬ」と申された。
私は御案内し、み使いは人々の先頭に立って歩かれた。
私が妻の所に来ると彼女は「あらあら、どうしましょう、どうしましょう（こんなに多勢の方々が来てしまって、あなたは何ということをしてくれたのですか）」と言った。
私は彼女に「私はお前が言った通りにしたのだが…」と言った。
彼女はこねた粉をその御方に差し出した。
み使いはその中に御自分の唾液を入れて、それに祝福を祈願した。

次に土鍋の所に行かれ、それにも唾液を入れて祝福を祈願された。
そして（彼女に）「パンを焼く女性を他にも呼んで来て、あなたと一緒にそれを焼かせよ。
あなたは土鍋のものを注ぐがよい。
それをかまどから下ろしてはならぬ。
客は千名であるから」と申された。
ジャービルは「私はアッラーに誓って言う。
それ等の人々は皆、空腹を満たして去った。
まこと、われわれの土鍋はぐらぐら煮え立ったままであった。
そしてわれわれのねった粉は減少することなく、パンは次々に焼かれていった（この話の最後の部分は、伝承者ダッハークも伝えている）」と言った（注）。

（注）ここに起ったことは預言者が行った奇跡の一つである。
なおハディースにあるように、招かれた者はみ使いを含む少数の人々であったが、預言者は全ての人々に広く公平であり、ある特定の人々だけに特恵を与えることはなかったことを示している

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アブー・タルハはウンム・スライムに「私はアッラーのみ使いのお声が弱々しいのを聞き、その御方が空腹をおかかえになっていると分った。
それで何か食べる物はあるか」と言った。
彼女は「はい」と答え幾枚かの大麦のパンを出して来た。
それから彼女は自分のスカーフを取り、その一部でパンをくるみ、それを私の衣服の下に入れた。
そしてその一部は（使いとしての体裁をつくるために）私の頭にかけてくれた後、アッラーのみ使いの所に行かせたのである。
私がみ使いの所へ行くとその御方は人々と一緒にマスジドに座っておられた。
私は人々の側に立った。
アッラーのみ使いは「アブー・タルハが君を使いによこしたのか」と申された。
私は「はい」と言った。
「食事のためか」と申されたので私は「はい」と答えた。
アッラーのみ使いは一緒に居た人々に「皆、立つがよい」と申された。
その御方はマスジドをお出になった。
私は人々の前に立って歩き、アブー・タルハの所に行きことの次第を話した。
アブー・タルハは「ウンム・スライムよ、アッラーのみ使いが人々を連れてお見えになった。
だが、われわれにはそれらの方々に差し上げるのに十分な食べ物はない…」と言った。
彼女は「アッラーとそのみ使いは最も良く御存知です」と言った。

アブー・タルハは急いで出て行きアッラーのみ使いを迎えた。
その御方は彼と一緒に家に入った。
み使いは「ウンム・スライムよ、あなたの所にあるものを早くここに出しなさい」と言われた。
彼女は例のパンを持って来た。
み使いはそれを小さく切るよう御命じになった。
ウンム・スライムはその上に皮製の小さな容器から脂肪をしぼってかけ、更にそれに調味料を入れた。
アッラーのみ使いはそれに対してアッラーへの祈願の言葉を唱えられた。
その後「10 名の者が食事をすることを許されよ」と申された。
彼には異存はなかった。
その人々は食べ満腹して外に出た。
それからみ使いはまた「10 名の者が食事をすることを許されよ」と申された。
こうして人々は全て満足したのである。
その人々の人数は 70 人あるいは 80 人であった。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アブー・タルハはアッラーのみ使いをお招きするために私を使いに出した。
その時彼は食事の用意を終えていた。
私はアッラーのみ使いが人々と一緒に居られる所に行った。
するとその御方は私を御覧になった。
私は恥ずかしくてためらったが「アブー・タルハの招待をお受け下さい」と言った。
するとみ使いは人々に「立つがよい」と申された。
アブー・タルハは「アッラーのみ使いよ、私はあなたに少しだけ食物を用意しただけです」と言った。
アッラーのみ使いはそれにお触れになり祝福を祈願された。
そして「教友達 10 名を中に通すがよい」と申された。
その御方は彼等に「食べよ」と申され、指の間から何かを取り出された。
彼等はそれを食べて満腹し、外に出た。
その後に「（次の）10 名を中に通せ」と申された。
その者達も食べて満腹した。
このようにして 10 人、また 10 人と一人ももれることなく食べて満腹した。
その後、その御方が食事を整えられると、何とその量は人々が食べるに先立って用意されたものと変っていなかったのである。

アナス･ビン･マーリクは伝えている

アブー･タルハは私をアッラーのみ使いの所に使いに出した。

残余のハディースは前述と同様であるが、その最後の部分に"み使いは残った食物を寄せ集められ、それに祝福を祈願された。

するとそれは元の量に戻った。

み使いは「これを取るがよい」と申された"という部分が異なる。

アナス･ビン･マーリクは伝えている

アブー･タルハはウンム･スライムに、預言者御自身のため特別に食事を用意するよう命じた。

それから彼は私をその御方の所に使いに出した。

残余のハディースは（前述のものと）同一であるが、その中に"預言者は（食物に）手を置かれ、それに対してアッラーの御名を唱えられた。

そして「10 名の者に（食事を）許されよ」と言われた。

彼がそれを承諾すると彼等は入って来た。

み使いは「アッラーの御名を唱え、食すがよい」と申された。

人々はそれを食べた。

その御方はこれを 80 名の人々に対して行われた。

その後、預言者とその家の人々が食べたが（それでもなお）残りを出す程であった。

アナス･ビン･マーリクはアブー･タルハが預言者を食事に招いた時に起った出来事についての話を伝えている。

その中で彼は"アブー･タルハはアッラーのみ使いがお見えになったので扉の所に立って行った。

そして「アッラーのみ使いよ、ほんの少しではこざいますが」と言った。

み使いは「それを持って来なさい。

まこと、アッラーはそれに祝福を垂れ給うであろう」と申された"という言葉がある。

アナス･ビン･マーリクはこの話の中で次のような言葉も伝えている。

（すなわち）次にアッラーのみ使いとその家族の人々が食べたが、それでもなお、近隣の人々に分け与える程のものが残った。

アナス･ビン･マーリクは伝えている

アブー･タルハはアッラーのみ使いがマスジドで、落ち着かない様子で片ひじをついて横たわっておられるのを見た。

彼はウンム･スライムの所に来て「私はアッラーのみ使いがマスジドで、落ち着かぬ様子で片ひじついて横たわっておられるのを拝見した。

私はその御方がお腹を空かしておられると思う」と言った。
残余のハディースは同一であるがその中で“それからアッラーのみ使い、アブー・タルハ、ウンム・スライムそしてアナス・ビン・マーリクが食べた。
それでもなお幾らかの食物は余った。
それでわれわれはそれを近隣の人々に分けた”とも述べている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

私がある日、アッラーのみ使いを訪れるとその御方は教友達と一緒に座り、彼等に話をされていた。
その時み使いは（空腹をまぎらわすために）お腹とベルトとの間に石を置かれ、しっかりと締めておられた。
ー（伝承者の一人）ウサーマは（その石のことについての話に関しては）「私は疑っている」と言ったー（注）。
それで私は幾人かの教友に「アッラーのみ使いはどうしてお腹を締めておられたのですか」と尋ねた。
彼等は「空腹からである」と言った。
それで私はミルハーンの娘ウンム・スライムの夫アブー・タルハの所に行き「お父さん、私はアッラーのみ使いがベルトでお腹をしっかり締めておられるのを見て、教友達に尋ねました。
すると『それは空腹のためである』と言っておりました」と伝えた。
するとアブー・タルハは私の母の所に行き「何か食べるものはあるか」と言った。
彼女は「はい、私の所にはパンの切れ端と若干のなつめ椰子がございます。
もしアッラーのみ使いがお一人で来られれば十分ですが、他の者が御一緒に見えられれば足りません」と言った。
残余のハディースは同一である。

（注）空腹時にそれをまぎらわすため、ベルトと腹の間に石を置くのはヒジャーズ地方の人々の習慣とされる
アナス・ビン・マーリクが伝える、アブー・タルハが預言者を招待した話は別の伝承者経路でも伝えられている。

スープは（中身が多くて）食べるような状態のものであってもよい。かぼちゃを食べることも好ましい。また招待した者が嫌がらない場合、客は自分の食べ物を他に進めてもよい

アナス・ビン・マーリクは伝えている

ある仕立屋が食事を用意し、アッラーのみ使いを招いた。

私はその御方と一緒に行った。

彼は大麦のパンとかぼちゃの入ったスープ、それと保存された乾燥肉をふるまった。

私はアッラーのみ使いが皿の両側の、しかも御自分に近い方からそのかぼちゃを次々とお取りになるのを見た。

それで私はその日以後ずっとかぼちゃを好んで食べている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

ある男がアッラーのみ使いを招いた。

私はその御方と一緒に行った。

その時かぼちゃの入ったスープが出された。

アッラーのみ使いはそれに入っていたかぼちゃを好まれて（次々と）それを食べておられた。

私はそれを見た時、それを食べずにその御方の御前に置いた。

それ以後、私はかぼちゃを食べることを好んでいる。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

ある仕立屋の男がアッラーのみ使いを（食事に）招待した。

サービト（伝承者）はこのハディースに次のような言葉を付加している。

私はアナスが「その後、私の食事には必ずかぼちゃを入れたものをつくっている」と言うのを聞いた。

なつめ椰子を食べたら、その種は器の外に置くこと。
招かれた者は招待者の家族の祝福を祈願することが好ましい。
また人々に尊敬されている人々には祈願を請うのがよい

アブドッラー・ビン・ブスルは伝えている

アッラーのみ使いが私の父の所にお出でになった。
われわれはその御方に食事となつめ椰子の実、チーズ、そしてバターを混ぜた食べ物を差し上げた。
み使いはそれをお食べになった。
その後、なつめ椰子の実をお出しするとそれを食べられた。
そしてその種子を二本の指の間に置かれ、人さし指と中指はくっつけておられた。
（シュウバは「私はこのハディースの中には、インシャーアッラー、“二本の指の間に種を置く”という言葉があると思っている」と言った）
その後で飲み物が出され、それをお飲みになり、それをその御方の右側に座っていた者にお与えになられた。
（み使いがお帰りになる時）私の父はその御方の乗り物の手綱を取り「われわれのためにアッラーに祝福を祈願して下さい」と言った。
み使いは「おおアッラー、あなたが彼等にお与え下さったものについて彼等に祝福をお垂れになりますよう（より一層の糧をお授けになりますよう）、また彼等をお許し下さい。
そして彼等に御慈悲を給わりますよう」と祈願された。
このハディースはシュウバを経由して別の伝承者経路で伝えられている。
その経路の伝承者達は、その御方が二本の指の間に種を置かれていたということについて疑いをもってはいない。

熟れたなつめ椰子の実と一緒にきゅうりを食ぺることについて

アブドッラー・ビン・ジャアファルは伝えている

私はアッラーのみ使いが熟れたなつめ椰子の実と一緒にきゅうりを食べておられるのを見た。

食べる物は慎んで頂くことが好ましい。またその時の座り方について

アナス・ビン・マーリクは伝えている

私は預書者が屈んでなつめ椰子の実を食べておられるのを見た。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いの所になつめ椰子の実が持って来られた。

預言者は屈んだ姿勢でそれをお配りになり、急いでそれを食べておられた。

ズハイルのハディースには“急いで”という」言葉にحثيث hathith という語が使用されている。

なつめ椰子の実二個を一緒に食したり、二口で食すべき食物を一口で食べることは禁じられている。
だが同席者の許可がある場合は別である

ジャバラ・ビン・スハイムは伝えている

イブン・ズバイルはわれわれになつめ椰子の実を分け与えていた。

その当時人々は食物に窮していた。

ある日われわれが（急いで）それを食べているとイブン・ウマルが通りかかり「（その実を）二個一緒にして食べてはならぬ。

まこと、アッラーのみ使いはそれを一緒に食べることを禁じておられた。

だが食す者がその場に居る者に許可を求めた場合は別である」と言った。

シュウバ（途中伝承者）は「私はこの言葉、つまり“許可を求めた場合は別である”はイブン・ウマルの言葉だと思う」と言った。

このハディースはシュウバを経由し別の伝承者経路で伝えられている。
しかしその中では「その当時、人々は食物に窮していた」とは述べていない。

ジャバラ・ビン・スハイムは伝えている

イブン・ウマルは「アッラーのみ使いは、共にいる仲間の許可を得るまでは、人はなつめ椰子の実を二個一緒に食すことを禁じられた」と言った。

子供達の食糧としてなつめ椰子やそれに類するものを確保すること

アーイシャは伝えている

預言者は「なつめ椰子を所有している家族は飢えない」と申されました。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは「アーイシャよ、なつめ椰子の無い家の人達は飢えるであろう。
アーイシャよ、なつめ椰子の無い家の人々は飢えるであろう。
または、その家族は必ず飢える」ということを二回ないし三回申されました。

マディーナのなつめ椰子の効用

アーミル・ビン・サアド・ビン・アブー・ワツカースは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「マディーナの両溶岩地帯の間に産したなつめ椰子の実を七個食した者は、朝起きてから夕刻になるまで毒に害されることはない」と申された。

アーミル・ビン・サアド・ビン・アブー・ワッカースは伝えている

私は（私の父親）サアドが次のように言うのを聞いた。
私はアッラーのみ使いが「朝、七個のアジュワ（マディーナ産の良質のなつめ椰子の実）を食べた者は、その日、毒に害されることはないし、呪術にかけられることもない」と申されるのを聞いた。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられているが、それは言葉に僅少の相違をもっている。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは「アーリヤ（注）のアジュワには治癒の効果がある。
またそれは早朝には解毒作用もある」と申された。

（注）マディーナの東方数マイルの地点にある村落

松露の徳性とそれの目に対する薬効

サイード・ビン・ザイド・ビン・アムル・ビン・ヌファイルは伝えている

私は預言者が「松露はマナ（注）の一種である。

その液は目の薬である」と申されるのを聞いた。

（注）昔イスラエル人がアラビアの荒野で神から恵まれたという食物

サイード・ビン・ザイドは伝えている

私はアッラーのみ使いが「松露はマナの一種である。

その液は目の薬である」と申されるのを聞いた。

前述のハディースは別伝承でも伝わっているがシュウバ（途中伝承者の一人）は「ハカムが私にそれを話した時、私はそれがアブドル・マリクの話から伝えられたものであったので否認しなかった」と語っている。

サイード・ビン・ザイドビン・アムル・ビン・ヌファイルは伝えている

アッラーのみ使いは「松露はマナの一種である。

それは至高偉大なるアッラーがイスラエルの民にお恵みになったもので、目の薬である」と申された。

サイード・ビン・ザイドは伝えている

預言者は「松露はマナの一種である。

それはアッラーがモーゼに下されたものであった。

なおその液は目の薬である」と申された。

サイード・ビン・ザイドは伝えている

アッラーのみ使いは「松露は至高偉大なるアッラーがイスラエルの民に下されたマナの一種で、それは目の薬である」と申された。

サイード・ビン・ザイドは伝えている

アッラーのみ使いは「松露はマナの一種である。

その液は目の薬である」と申された。

アラーク（注）の木の黒い実の長所

（注）トゲのある木で黒い実を生ずる

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

われわれはアッラーのみ使いとマッル・ザハラーン（注）にてアラークという木の熟した実を取っていた。

預言者は「あなた方は黒い実だけを取るがよい」と申された。

われわれは「アッラーのみ使いよ、あなたには羊の世話をされていた（御経験が）おありになるかのようです」と言った。

み使いは「その通り、預言者の中でそれの世話をしなかった者があろうか」と申された。

（注）マッカ近郊の地点

調味料としての酢の効用

アーイシャは伝えている

預言者は「最良の調味料、または種々の調味料の中で最良のものは酢である」と申されました。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

なおそれらの中では“最良の調味料”という言葉については疑念はない。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者は御家族に調味料をお求めになった。

御家族の方々は「私達の所には酢以外にはございません」と言った。

み使いはそれを持って来るよう求められた。

そしてそれを使って食べ始め「最良の調味料は酢である。最良の調味料は酢である」と申された。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

ある日、アッラーのみ使いは私の手を掴んでその方の家に連れて行かれた。

その時、み使いに幾切れかのパンが出された。

その御方は「何か調味料は無いか」と申された。

家族の方々は「酢以外にはございません」と言った。

すると「まことに、酢こそ最良の調味料である」と申された。

ジャービルは「私は預言者からそれを聞いてから、ずっと酢を好んでいる」と言った。

タルハは「私はジャービルからその話を聞いて以来、ずっとそれを好んで用いている」と言った。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは私の手を掴んでその方の家に連れて行かれた。

残余の話は前述のものと同一であるが、これには「最良の調味料は酢である」という言葉までで、その後は述べられてはいない。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私が家に座っているとアッラーのみ使いがお通りになって私に合図された。

それで私は立ってその方の所へ行った。

するとみ使いは私の手を掴んで歩かれ、その方の妻達の一人の部屋に行ってお入りになった。

そして私にも入ることを許された。

私はカーテンの向う側にみ使いの夫人が居られる所に入って行った。
その御方は「食事は出来るか」と言われた。
家族の方々は「はい」と言って三枚のパンを持って来て椰子の葉で編まれた容器に置いた。
アッラーのみ使いはその中の一枚を取られ、それを御自分の前に置かれた。
そして他の一枚を取って私の前に置いて下さった。
そして三枚目は二等分され、その一つを御自分の前に、他の一つを私の前にお置きになった。
その後「何か調味料はあるか」と申された。
家族の方々は「酢以外にはございません」と言った。
その御方は「それを持って来なさい。
最高の調味料ですそれは」と申された。

にんにくは食べてもよいが身分の高い者と話す場合は避けねばならぬ

アブー・アイユーブ・アンサーリーは伝えている

アッラーのみ使いは食べ物が運ばれて来ると全部はお食べにならず、一部を残されて私に下さっていた。

ある日、その御方は（例によって）食物を下されたが、私はその御方が全くお食べにならなかったものと分かった。

それはにんにくが付いていたからである。

そこで私はみ使いに「それはハラームですか」とお尋ねした。

すると「いや、そうではないが私はそれの匂いが嫌いだからである」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・アイユーブの解放奴隷**アフラフ**は伝えている

預言者は（マディーナに移って来られた時）アブー・アイユーブの許に身を寄せられた。

そして預言者は下の階で、アブー・アイユーブは上の階で生活した。

ある晩、アブー・アイユーブは目を覚まし「われわれがアッラーのみ使いの頭の上を歩くとは…」と言った。

それで彼は部屋の隅の方に寄って夜を明かした。

（朝になると）彼はこのことを預言者に告げた。

するとその御方は「私には下の部屋の方がより快適である」と申された。

しかし彼は「いえ、あなたが下に居られる床の上で（私は生活出来ません）」と言った。

そこで預言者は上の階に、アブー・アイユーブは下の階に変った。

こうして彼は預言者に食事を用意して差し上げていたのであった。

（このようなわけで食事の一部が）彼の所に寄越されると、み使いの指がその食物のどの部分に触れていたかについて尋ね、（祝福を願って）彼も同じ部分を持って食べていた。

（ある日）彼はにんにくの付いた食事をその御方に用意した。

そしてそれが彼にもたらされた時、預言者の指が触れた部分について尋ねた。

すると「お食べになりませんでした」と言われた。

彼は驚き、その御方の所に行って「それはハラームですか」と言った。

預言者は「いや（そうではないが）私はそれを好まないのだ」と申された。

彼は「私もあなたの好まない物はーまたはあなたが好まれなかった物はー好みません」と言った。

アブー・アイユーブ・アンサーリーは「預言者には天使が啓示を伝えるために訪れるのでそれをお食べにならなかったのです」と言った。

客をもてなすこと、そしてその者に対して犠牲を払うことの徳

アブー・フライラは伝えている

ある者がアッラーのみ使いの所に来て「私は飢えで苦しんでおります」と言った。

み使いは彼をその方の夫人達の一人の所に送った。

その夫人は「あなたを真理と共に使わされた方に誓って、私の所には水以外にはございません」と言った。

その御方は彼を別の夫人の所に送った。

するとその夫人の言葉も同じであった。

こうしてその御方の全ての夫人達が「あなたを真理と共に使わされた御方に誓って、私の所には水以外にはございません」という言葉を述べた。

み使いは（人々に）、今晩、この者を客としてもてなす者にはアッラーの御慈悲があるであろう」と申された。

するとアンサールの一人が立って「アッラーのみ使いよ、私が」と言って例の者を彼の家に連れて行った。

そして彼の妻に「何か食べる物はあるか」と言った。

彼女は「いいえ、私達の子供達に与える食べ物以外には」と言った。

彼は「彼等には別の何かで気を紛らせよ。

そして客人が入ったら明りを消し、われわれが食べているように見せ掛けよ。

（もう一度言うが）客が食べ始める時はランプを消しに立つのだ」と言った。

このようにして彼等は席に着き、その客は食事をした。

朝になって彼は預言者の所に行った。

するとその御方は「アッラーはあなた方お二人が、昨夜客に尽くしたことについて大変御満足である」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アンサールの男の許に客が泊った。

ところが彼の家には彼と彼の子供達の食事しかなかったのである。

そこで彼は妻に「子供達を寝かせよ。

そしてランプを消し、あるだけの物を客人に差し上げよ」と言った。それで**「自分（アンサール）自身に先んじて（困窮している人々）に与える。たとえ自分は窮乏していても」**（クルアーン第 59 章 9 節）が下された。

アブー・フライラは伝えている

ある者がアッラーのみ使いの所でもてなしを受けようとして訪れた。

だがその御方には彼をもてなす物が無かった。

それでみ使いは「この者を客としてもてなす者はないか。
アッラーはその者に御慈悲を垂れ給うであろう」と申された。
するとアンサールの一人でアブー・タルハという者が立ち、その男を家に連れて行った。
残余の話は前述と同じである。
またこれにはクルアーンの一節が下されたことも述べられている。

ミクダードは伝えている

私と私の友人二人は飢えの苦しみから、聴覚も視覚も衰えてしまっていた。
それでわれわれは教友達にわれわれの苦境を訴え始めたが（彼等も苦しんでいたために）誰もそれに応えてはくれなかった。
こういうわけでわれわれは預言者をお訪ねした。
み使いはわれわれをその御方の家族の所に連れて行かれた。
そこには三匹の羊がいた。
預言看は「われわれのためにこれの乳を搾るがよい」と言われた。
われわれはそれを搾り、預言者の分は別にしておいて、それぞれが分け前を飲んだ。
その御方は夜になると出かけて来られ、寝ている者を起さぬよう、起きている者には聞き取れる程度の（低い声で）挨拶されてマスジドに入られて礼拝されていた。
その後でその御方はミルクのある場所に行ってそれを飲まれていたのである。
ある晩のこと、私が私の分け前を飲だ時、サタンが私の許に来て「ムハンマドはアンサールの所で彼等の歓待を受けている。
故に彼にこの飲み物は必要ではない」と言った。
それで私はそのミルクのある場所に行って飲んでしまった。
それが私の腹に入ってしまい、それについてはもうどうしようもなくなったことを知ったサタンは私に後悔の念を起させた。
そして「汝に災いあれ、汝は何ということをしたのか。
汝はムハンマドの飲み物も飲んでしまったのか。
彼が来てそれが無いことを知れば汝のことを呪うであろう。
そうすれば汝は滅び汝の現世も来世もない」と言った。
ところで私は覆いを持っていたが、それを両足まで掛けると頭が出てしまうし一頭を覆うと両足が出てしまうので眠ることが出来なかった。
私の二人の友人は既に眠ってしまっていた。
それも私が行ったようなことをしていなかった（からであろう）。
やがて預言者が来られ、何時ものように挨拶され、マスジドに入って礼拝された。
それからその御方の飲み物の所に行って覆いを取られたがそれは空であった。
するとその御方はお顔を天に向けられていた。
私は「今、その御方は私を呪っておられる。私は破滅する」と（心の中で）」言った。

だがその御方は「おおアッラー、私に食物を与えた者に食物をお与え下さい。
また私に飲み物を与えた者に飲み物をお与え下さい」と祈られたのだ。
私は覆いを強く体の上に引き着けた。
（それからその御方が祈っておられる間に）ナイフを手にして山羊の所に行き、その中で最も肉付きの良い一頭をみ使いのために屠ろうとした。
するとどうであろう、それは乳房が張っているではないか、（いやそれ一頭だけではなかった）
それらは全て乳房が張っていたのである。
私は預言者の御家族が使用していた器のある場所に行った、その方々は常々それにミルクを搾っていた。
私はその中に泡が高く盛り上るまで搾った。
その後私はアッラーのみ使いの許に来て「あなたは夜、あなたの分け前のミルクをお飲みになりましたか」と言い、更に「アッラーのみ使いよ、これをお飲み下さい」と言った。
その御方はそれを飲まれてからお返しになった。
私は（再び）「アッラーのみ使いよ、お飲み下さい」と言った。
み使いはお飲みになり、それをお返しになった。
私は預言者が十分にお飲みになりその御方の祝福が得られたものと思い（不安が去った喜びのあまり）急に笑い出して大地に倒れた。
預言者は「ミクダードよ、君は何か良くないことを行ったのであろう…それは何か」と申された。
私は「アッラーのみ使いよ、実は私にこれこれのことがありました。
それで私はそのようにしたのです」と言った。
預言者は「それは全くアッラーの御慈悲による以外に起り得ぬことである。
君は何故私にそれを知らせなかったのか（もし知らせていれば）われわれは他の二人がミルクの分け前にあずかれるよう起したものを」と申された。
私は「あなたを真理と共に使わされた御方に誓い、私はあなたがそれをお飲みになり、私もあなたと御一緒にそれを飲んだ時は（たとえ）何人がそれを飲んだとしても一向にかまいません」と言った。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクルは伝えている

われわれ 130 人が預言者と御一緒であった時、その御方は「あなた方の中で、誰か食べ物を持っていないか」と言われた。
すると 1 サーア、またはほぼそれと同量の粉を持っていた者があった。
それは早速練られた。

そこへ、背が高く髪をぼさぼさにした多神教徒の男が一群の羊を御してやって来た。
預言者は「その中の一頭を売ってはくれぬかーまたは与えてくれぬかーあるいは贈呈してはくれぬか」と言われた。
彼は「いや、（与えることは出来ない）だが売って上げましょう」と言った。
その御方は彼から一頭の雌羊を買われた。
そしてそれは屠殺されて解体された。
アッラーのみ使いはその肝臓を焼くよう御命じになった。
伝承者は「アッラーに誓って、アッラーのみ使いはその肝臓の一切れ一切れを、その場に居た者にはその場で、その場所を外していた者にはそこに戻った時にというようにして、130 人もらすことなくお与えになった。
伝承者は（次のようにも）言った。
それからその御方は二つの大きな容器を汁と肉で満たされた。
こうしてわれわれは皆、その容器から取って食べ満腹した。
それでもなお二つの容器には幾らかのものが残っていた。
私はそれをラクダに積んだ。
（または、これと同じ内容の言葉が言われた）

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクルは伝えている

スッファの教友達（注 1）は貧しい人々であった。
アッラーのみ使いはかつて「二人分の食べ物を持っている者は三人を招いてもてなし、四人分の食べ物を持っている者は五人ないし六人を招いてもてなすようにせよ」と申された。
（または、これと同じ内容の言葉が言われた）
それでアブー・バクルは三名の人々を連れて行き、アッラーの預言者は 10 名を連れて行かれた。
さて、アブー・バクルの三名というのは、彼（アブー・バクル）、私、私の父（注）、（？）そして私の母であるー私（中途伝承者アブー・ウスマーン）は彼が「そして、私の妻とわれわれの家とアブー・バクルの家で共有していた召使いが」と言ったかどうか分らないー。
また伝承者は（次のように）言った。
ところでアブー・バクルは（客の接待を家族に言いつけ）預言者の所で夕食を済ませた。
そしてそのままそこに居て夜半の礼拝を（マスジドで）挙行し、その後またアッラーのみ使いの所に戻ってその御方が睡気を催されるまでそこに止まっていた。
そして夜も大分更けてから自分の家に戻った。
すると彼の妻は「どうしてお客様方（またはお客様）をおかまいにはならないのですか」と言った。
彼は「それであなたは未だお客様方に夕食を差し上げなかったのか」と言った。
彼女は「あの方々はあなたがお帰りになるまでと言ってことわられたのです。

皆が食事をするようにお勧めしたのですが聞き入れませんでした」と言った。
私は（父の怒りを恐れ）そっとその場を離れて隠れた。
彼は「愚か者め」と言って私を譴責し、ののしっていた。
そして「皆さん時を逸し御不満でしょうがお食べ下さい。
アッラーに誓って、私は、今夜は食べません」と言った。
アブドル・ラフフマーンは「アッラーに誓い、われわれがそれを少しでも食べれば、それは最下層から食べた量以上に増えた。
そのようなわけでわれわれは満腹した。
確かにそれは元の量以上に増えたのだ。
アブー・バクルがそれを見ると、それは元の量と同じか、いやむしろ増えていたのである。
彼は妻に「フィラース族の姉妹よ、これはどうしたことか」と言った。
彼女は「分りません。
私は驚きで目を見張っているのです。
今これは、元の量の三倍はあります」と言った。
アブー・バクルは「私が先程（今夜は食べないと）誓ったのはサタンがそそのかしたのです」と言って、彼もそれを食べた。
そしてその一部はアッラーのみ使いの所に持って行かれ、そしてそこに朝まで置かれていた。
伝承者は（次のような）話もした。
われわれとある人々との間には契約があったが、その契約期限は終ってしまっていた。
そこでわれわれはその人々を統率するための者 12 人を選んだ。
だがその一人一人がそれぞれ何人の人々を受け持ったかはアッラーのみがお知りになるところである。
み使いは例の食べ物を彼等に持たせてやった。
それは彼等全部が食べるに足る量であった。
（またはこれと同じ内容の言葉が言われた）

（注 1）スッファはマディーナのマスジドの一隅である。
この場所には貧しいムハージルが身を寄せており、預言者がその人々の面倒を見ていた。
それらの人々は“スッファの教友”と呼ばれている

（注 2）アビー（私の父）つまりアブー・バクルであるが、その人はその、言葉の前にホーワ（彼）という人称代名詞で表わされている。
従ってアビーという言葉の意は、伝承者が父親同様に考えていた人物なのかも知れない

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクルは伝えている

私達の家に幾人かの客が訪れた。

時に、私の父は夜は常々アッラーのみ使いの所に行き話をしていた。

それで（その日も）「アブドル・ラフマーンよ、お客様に夕食を差し上げてもてなすがよい」と言い残して出かけて行った。

夕刻になった時、私達はお客様方に夕食を差し上げた。

しかし彼等は「この家の御主人が来られて一緒に食事をされるまでは」と言って断った。

私は「父は言いつけられたことを行わないと厳しく叱ります。

それでもしあなた方がお食べ下さらないと私がひどく叱られます」と言った。

だがやはり彼等は拒絶した。

父が帰った時、先ず客人達のことを尋ね「お前達はお客様方に夕食を差し上げたか」と言った。

家族の者達は「いいえ、アッラーに誓って、未だ差し上げてはいません」と言った。

彼は「私がアブドル・ラフフマーンに命じておいたであろう」と言った。

私は父に見つからないように隠れていた。

父は「これっ、アブドル・ラフマーン」と私を呼んだ。

しかし私は出て行かなかった。

父はなお「愚か者め、私はお前に対しアッラーに誓って言う。

もし私の声が聞こえているのなら出て来い」と言った。

私は出て行き「アッラーに誓って、私に罪はありません。

これらの方々はあなたのお客人です。

尋ねて見て下さい。

私はこの方々に確かに夕食をお進めしたのですが、あなたが帰るまでは頂けないと言われて断ったのです」と言った。

すると父は「あなた方に何かおありなのですか。

われわれのもてなしを受けて下さらないのですか」と言った。

そして更に「アッラーに誓い、今夜、私は食べないのです」と言った。

彼等は「アッラーに誓って、われわれはあなたが食べるまでは食べません」と言った。

父は「私はこのように残念な晩を経験したことはありません。

あなた方が私共のもてなしを受けて下さらないのは何か訳があるのですか。

残念に思います」と言った。

その後父は「私が先程申し上げた（今夜、食べない、という誓い）はサタンにそそのかされたものでした。

それぞれ食事を運んでくるがよい」と言った。

こうして食事が運ばれ、彼はアッラーの御名を唱えて食べた。

こうして彼等も食べた。

朝になると父はアッラーのみ使いの所に行き「アッラーのみ使いよ、彼等は（私が食べるまでは絶対に食べないという）誓いを堅く守りましたが私は誓いを破ってしまいました」と言って昨晩の出来事を話した。
み使いは「しかし、あなたは彼等より誠実であり優れた者です」と申された。
彼（伝承者）は「私は彼がそのことに対する償いをしたかどうかは知らない」と言った。

少ない食物を分け合うことの徳

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「二人分の食べ物は三人を満足させ得るし、三人分の食べ物は四人を満足させ得る」と申された。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私はアッラーのみ使いが「一人分の食べ物は二人を満足させ得るし、二人分の食べ物は四人を満足させ得る。

また四人分の食べ物は八人を満足させ得る」と申されるのを聞いた。

イスハークの話には「アッラーのみ使いが申された」とはあるが、「私が(それを)聞いた」とは述べてはいない。

このようなハディースはジャービルを根拠として、別の伝承者経路でも伝えられている。

ジャービルは伝えている

預言者は「一人分の食事は二人の者を満足させ得るし、二人分の食事は四人の者を満足させ得る」と申された。

ジャービルは伝えている

預言者は「一人分の食べ物は二人の者を満足させ得る。

二人分の食べ物は四人を満足させ得る。

そして四人分の食べ物は八人を満足させ得る」と申された。

信者は一つの腹に食べ、不信者は七つの腹に食べる

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「信者は一つの腹に食べるが、不信者は七つの腹に食べる」と申された。

前述のハディースはイブン・ウマルを根拠として別の伝承者経路でも伝えられている。

ナーフィウは伝えている

イブン・ウマルは貧しい人を見た。
彼はその者の前に食べ物を置き、ややあってまた置いた。
その男は（二度とも）ことごとく平らげてしまった。
彼は「このような者は私の家には絶対に招き入れられない。
私はアッラーのみ使いが『不信者は七つの腹に食べる』と申されるのを聞いた」と言った。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「不信者は七つの腹に食べる。
信者は一つの腹に食べる」と申された。

前述のハディースはジャービルを根拠としても伝えられている。

アブー・ムーサーは伝えている

預言者は「信者は一つの腹に食べる。
不信者は七つの腹に食べる」と申された。

前述のハディースでアブー・フライラを根拠とするものも、異なった伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは不信者を客として迎えられた。
その御方は客のために羊の乳を搾るよう御命じになった。
客はそれが運ばれると飲んだ。
また別の羊の乳が出されるとそれも飲んだ。
更に別の乳が出されるとそれも飲んでしまった。
こうして彼は七頭の羊の乳を飲んでしまった。
翌朝その者はイスラームに帰依した。

アッラーのみ使いは彼のために羊の乳を搾るよう御命じになった。
そして彼はそれを飲んだ。
その後再び別の羊の乳を彼に与えるよう御命じになった。
だが彼はそれを飲み終えることは出来なかった。
この時アッラーのみ使いは「信者は一つの腹に飲む。
しかし不信者は七つの腹に飲む」と申された。

食べ物に関して不平不満は言わぬこと

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは食べ物のことで苦情を言われることは全くなかった。
その御方はお食べになりたい物を食べ、お嫌いなものがあればそれを残された。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

これと類似のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

私はアッラーのみ使いが食べ物のことで苦情を申されるのを見たことがない。
その御方はお好みになれば食され、好まれなかったら黙って（残された）。
このハディースはアブー・フライラを根拠として、別の伝承者経路でも伝えられている。

衣服と装飾に関する書

男女を問わず金や銀の器を飲食に使用することは禁止されている

預言者の妻**ウンム・サラマ**は伝えている

アッラーのみ使いは「銀の器で飲む者、それは己の腹の中に地獄の業火を飲み下しているに過ぎぬ」と申されました。

ウバイドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは「銀と金の器で食べ、または飲む者は…」と申された。

ウバイドッラーを根拠とするこの種のハディースで、"食べる"と"金"について述べられているのはイブン・ムスヒルのハディースだけで他にはない。

アブドル・ラフマーンは彼の母の姉妹ウンム・サラマを根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「金あるいは銀の器で飲む者、それは己の腹に地獄の業火を飲み下しているに過ぎぬ」と申された。

男女を問わず金銀の容器の使用は禁じられている。
また男性は金の指輪と絹の衣服は禁じられているが、婦人は別である。
しかし男性の衣服でも四本の指幅を出なければ、衣服に絹の伏縫(ふせぬい)があっても差し支えない

ムアーウィヤ・ビン・スワイド・ビン・ムカッリヌは伝えている

私はバラーウ・ビン・アーズィブの所に行った。

そこで私は彼が(次のように)言うのを聞いた。

アッラーのみ使いはわれわれに七つの事柄を御命じになり、七つの事柄を禁止された。

先ずわれわれに御命じになったことは、病人を見舞うこと、葬儀に参列すること、くしゃみをした者は「アル・ハムドリッラー(アッラーに称えあれ)」と言い、それを聞いた者は「ヤルハムカ・アッラー(アッラーの御慈悲がありますように)」と言うこと、誓いを履行すること、苦しめられている者に支援の手を伸すこと、招待された場合はそれを受けること、努めて挨拶を行うことである。

さて、禁じられたことは、指輪あるいは金の指輪をすること、銀製の器で飲むこと、赤く染められた絹の鞍敷を使用すること、カッスィー(注)と呼ばれる上質の絹地で作られた衣服を着用すること、それと絹または錦織あるいはビロードの衣服を着用することである

(注)往時エジプトからもたらされた衣服である。

これはその国のカッスィーという村で作られたというところからその名が出た

前述のハディースはアシュアス・ビン・スライムを経由し別の伝承者経路で伝えられているが、言葉に若干の相違がある。
(すなわち)それには“誓いを履行すること”という言葉は無く、その代りに“迷える者を導くこと”という言葉が述べられている。

前述のハディースはアシュアス・ビン・アブー・シャウサーウを経由しているが、それには「誓いを履行すること」という言葉が疑いなく述べられている。
そしてなお、“銀の容器で飲むことに関し、この世にてその容器で飲んだ者は、来世では絶対に(それでは)飲めない”という付加がある。

前述のハディースで別伝承には、“努めて挨拶を行うこと”の代りに“挨拶を返すこと”という言葉が述べられている。
また“その御方はわれわれに金の指輪、または金の輪を禁じられた”と述べられているのがある。

前述のハディースの別伝承には“努めて挨拶を行うこと、そして、金の指輪”という言葉が述べら

れている。

アブドッラー・ビン・ウカイムは伝えている

われわれがフザイファとマダーイン（注）に居た時、彼（フザイファ）は水を求めた。
その時村の有力者の一人がそれを銀の器に入れて持って来た。
すると彼はそれを投げ捨ててしまった。
そして「私は彼に、その容器で水を飲ませてはならぬ、と命じたことを諸君に告げる。
まこと、アッラーのみ使いは『金や銀の器で飲んではならぬ。
また錦織や絹の衣服を着用してもならぬ。
それはこの世においては彼等（不信者）のためにあるが、復活の日以来、来世にてあなた方のものとしてあるのだ』と申された」と言った。

（注）ペルシア皇帝アノシルワーンがチグリスとバクダードの間に築いた都市
前述のハディースの別伝承には“復活の日”という言葉が述べられてはいないものがある。

前述のハディースの別伝承には“復活の日”という言葉が述べられてはいないものがある。

シュウバは伝えている

ハカムはアブドル・ラフマーン（ビン・アブー・ライラー）が（次のように）言うのを聞いた。
私はフザイファがマダーインで水を求めるのを見た。
その時ある者が銀の器に（水を入れて）彼に持って来た。
残余の話はアブドッラー・ビン・ウカイムが述べたものと同一である。

前述のハディースはシュウバを経由して別の伝承者経路でも伝えられている。
それらの中で“私はフザイファが…するのを見た”という言葉を述べている者は一人も無い。
それを述べているのは前述のハディースのみである。
他は皆“フザイファは水を求めた”と述べているだけである。

フザイファについて語られたハディースは別伝承者経路でも伝わっている。

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・ライラーは伝えている

フザイファは水を求めた。
その時マギ教の男が銀の器に水を入れて持って来た。
すると彼は「私はアッラーのみ使いが『絹や錦織の衣服を着用してはならぬ。
金や銀の器で飲んではならぬ。

まこと、それらはこの世においては彼等（不信者）のためにあるのだ』と申された」と言った。

イブン・ウマルは伝えている

ウマル・ビン・ハッターブはモスクの入口で（ウターリドという者が）絹の衣服（を売っているのを）見た。
彼は「アッラーのみ使いよ、あなたがその衣服を買われ、金曜日、人々への説教に、またあなたの所を訪れる使節を迎えられるために召されたらいかがでしょう」と言った。
するとアッラーのみ使いは「これを着る者は来世にて全く報酬の希望の無い者である」と申された。
それからアッラーのみ使いに例の絹の衣服の中の幾枚かが届けられた。
み使いはその中の一着をウマルにお与えになった。
するとウマルは「アッラーのみ使いよ、あなたは私にこれをお着せになるのですか。
あなたはウターリドの衣服について先程私に申されたではありませんか」と言った。
み使いは「私は君がそれを着るために与えたのではない」と申された。
それでウマルはマッカにいた多神教徒の兄弟にそれを与えた。

このハディースはイブン・ウマルを根拠として別の伝承者経路でも伝えられている。

イブン・ウマルは伝えている

ウマルはタミーム族のウターリドという者が市場で絹の衣服を売っているのを見た。
彼（ウターリド）は王侯の許を訪れて（それを売り）彼等から利潤をあげていた男であった。
ウマルは（預言者に）「アッラーのみ使いよ、私はウターリドが市場で絹の衣服を売っているのを見ました。
それで、もしあなたがそれを求められ、アラブの諸部族からの使節が訪れた際にそれを召されてはいかがかと存じます」と言った。
（伝承者は）私はウマルが「金曜日に、それを召されては」とも言ったと思うと述べた。
すると、アッラーのみ使いは「この世で絹の衣服を着用する者は来世にて報酬を得る希望の無い者である」と申された。
後に、アッラーのみ使いの許に幾枚かの絹の衣服が届けられた。
み使いはその中の一着をウマルに送られた。
また、ウサーマ・ビン・ザイドにも一着送られた。
アリー・ビン・アブー・ターリブにも一着お与えになり「それを裂いて婦人達の頭部を覆うものにせよ」と申された。
だがウマルはその衣服を持って来て「アッラーのみ使いよ、あなたは私にこれをお送り下さいましたが、昨日、ウターリドの衣服について申されたことがありました」と言った。

するとみ使いは「私は君がそれを着用するために送ったのではない。
だが私は君がそれによって利を得るためである」と申された。
一方、ウサーマはその衣服に満悦して着用した。
だがアッラーのみ使いが彼の方をじっと御覧になっているので、その御方が彼の行為を否認されているのだと理解した。
それで「アッラーのみ使いよ、私をじっと御覧になられるのは何故でございますか。
あなたがこれをお送り下さったのです」と言った。
み使いは「私は君がそれを着用するために送ったのではない。
だが私は君がそれを裂いて婦人達の頭を覆うものとして使用するために送ったのである」と申された。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている
ウマル・ビン・ハッターブは市場で金糸で刺しゅうされた絹の服が売られているのを見つけた。
彼はそれを持ってアッラーのみ使いの所に来た。
そして「アッラーのみ使いよ、これをお求め下さい。
そして祭礼や使節の接見にお召し下さい」と言った。
アッラーのみ使いは「これは来世に報酬の希望の無い者の衣服である」と申された。
ややあって後、アッラーのみ使いはウマルに絹の外衣を送って寄越された。
ウマルはそれを持ってアッラーのみ使いの所に来て「アッラーのみ使いよ、あなたは『これは来世に報酬の希望のない者の衣服である』と申されました。
しかるに私にこれを送られましたのはどういうことでしょうか」と言った。
み使いは「君がそれを売り、その代価で必要なものを得るためである」と申された。

このハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

イブン・ウマルは伝えている
ウマルはウターリド家の者が錦または絹のカバーウ（袖の長い男子用の外衣）を売っているのを見た。
彼はアッラーのみ使いに「あれをお求めになられては」と言った。
するとその御方は「これを着る者は来世に報酬の希望の無い者である」と申された。
ややあつて、その絹の衣服がアッラーのみ使いに献上された。
するとその御方は私（ウマル）にそれを送って寄越された。
私は（み使いに）「あなたはこれを私に送って下されたが、私があなたから先刻お聞きしたことはどうなのでしょう」と言った。

み使いは「私が君にそれを送ったのは、君が（着用するためではなく）利を得るためである」と申された。

このハディースはイブン・ウマルを根拠として別の伝承老経路でも伝えられているが、言葉に若干の相違がある。
（すなわち）その御方は「私が君にこれを送ったのは、それを売った代価が何かの役に立つようにであり、君が着用するためではない」と申された。

イブン・ウマルは伝えている。
ウマルはある男が金糸で刺しゅうされた絹の衣服を持っているのを見た。
彼はそれを預言者の所に持って来た。
残余のハディースは前述と同様であるが、“み使いは「私が君にそれを送ったのは、それによってお金を得るためである」と申された”が異っている。

アブドッラー（アブー・バクルの娘アスマーウの解放奴隷で、アターウの息子のおじでもあつた人物）は伝えている

アスマーウは私をアブドッラー・ビン・ウマルの所に使いに出し「あなたが三つの事柄を禁止しているということを聞きました。
すなわち、衣服に絹の伏縺をすること、緋色に染められた鞍敷の使用、そしてラジャブ月を通して断食をすること（の三つです）と告げさせた。
するとアブドッラーは私に（次のように）言った。
「まず、あなたが述べているラジャブ月に関しては、あなたはそのような断食を行っている者をどう思われますか（注 1）。
次に、衣服の絹の伏縺に関しては、私はウマル・ビン・ハッターブが『私はアッラーのみ使いが“絹の衣服を着る者は（来世での）報酬の希望の無い者である”と申されるのを聞いた』と言うのを耳にしたのです。
それで私は絹の伏縺も（絹の衣服）の一つではないのかと心配しただけです。
また緋色の鞍敷に関しては、これは（私）アブドッラーの鞍敷のことで、赤い色ではあるが絹製のものではなく（禁止されたものではありません）」
私はアスマーウの所に帰りこれを告げた。
すると彼女は「これはアッラーのみ使いの外衣です」と言って、私にペルシアの布に絹の伏縺のある外衣で、両袖に絹の縁取りのある外衣を出して来た。
そして「これはかつてアーイシャが亡くなるまで彼女の許にありました。
彼女が亡くなりました時私がそれを引き継いだものですが、アッラーのみ使いが召されたものでした。

私達はそれを病人達のために洗い、それによって彼等の平癒を願ったのです(注 2)」と言った。

（注 1）イブン・ウマルは彼が言ったという言葉を.否認してそのように言ったのである。
なお彼自身はその断食を行っていたと伝えられている

（注 2）預言者の衣服を洗った水を、病人のための諸事に活用する。
それによって病が癒えると信じた

ハリーファ・ビン・カアブ・アブー・ズブヤーンは伝えている

私はアブドッラー・ビン・ズバイルが（次のように）説教するのを聞いた。
諸君、あなた方の御婦人方に絹の衣服を着用させてはならぬ。
まこと、私はウマル・ビン・ハッターブが「アッラーのみ使いは『絹の衣服を着用してはならぬ。
現世でそれを着た者は来世でそれを絶対に着られぬ』と申された」と言うのを聞いた。

アースィム・アフワルはアブー・ウスマーンを根拠として伝えている

われわれがアゼルバイジャンにいた時、ウマルはわれわれに書簡を送り（その中で次のように）述べていた。
ウトバ・ビン・ファルカドよ、（君の許にある）富は君の労苦の賜ではなく、君の父君や母君の労苦によるものでもない。
（それはムスリム達の財貨なのだ）
故に君が君の住いでそれから満足を得ているように、ムスリム達にも彼等の住いで満足出来るよう計って上げよ。
だが贅に流れる生活、多神教徒の衣装、そして絹の衣服は（身に着けぬよう）心せよ。
だがほんのこれだけ（の量の絹は男子の衣服に用いても）差し支えない。
つまりそれはアッラーのみ使いがわれわれにその御方の中指と人さし指をお上げになって、それをお合わせになった（幅である）
アースィムは「これは（われわれに送られた）書簡にも述べられていたことである」と言った。
（伝承者の一人）ズハイルは彼の二本の指を上げて（使用しても良い絹の幅を示した）

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

アブー・ウスマーンは伝えている

われわれがウトバ・ビン・ファルカドと一緒に居た時のことであった。
われわれの許にウマルから手紙が届いた。

（その中には）“アッラーのみ使いは「来世に全く報酬の希望の無い者のみ（現世で）絹の衣服を着用する。
だがほんの少量の絹は別である」と申された”（と述べられていた）
アブー・ウスマーンは彼の親指に近い二本の指を合わせ「私がペルシアの布で作られた外衣を見た時、その飾り縁の幅はこの二本を合わせた程と思った」と言った。

アブー・ウスマーンは伝えている
われわれはウトバ・ビン・ファルカドと一緒に居た。
残余のハディースは前述と同様である。

カターダは伝えている
私はアブー・ウスマーン・ナフディーが（次のように）言うのを聞いた。
われわれがアゼルバイジャン、またはシャームでウトバ・ビン・ファルカドと一緒に居た時、ウマルの書簡がわれわれに届いた。
（それには）「時に、アッラーのみ使いは二本の指を合わせた幅程のものを除いては、絹の使用を禁じられた」（と述べられていた）
アブー・ウスマーンは「われわれはそれが衣服の飾り縁を意図するのだと、直ちに理解した」と言った。
これに類似のハディースがカターダを根拠とし、伝えられているが、それには（前述の）アブー・ウスマーンの言葉は述べられてはいない。

スワイド・ビン・ガファラは伝えている
ウマル・ビン・ハッターブは（シャームの都市）ジャービヤで説教し「預言者は「二本の指、または三本、あるいは四本の指幅以外の絹地を衣服に付けることを禁じられた」と言った。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
ある日、預言者は献上された錦の外衣をお召しになった。
しかし、急いでそれをお脱ぎになって、ウマル・ビン・ハッターブに送られた。
すると（人々に）「アッラーのみ使いよ、あなたはどうしでそれを急いでお脱ぎになったのですか」と尋ねられた。
その御方は「ガブリエルが私にそれを禁じたのだ」と申された。
そこへウマルが泣きながらやって来て「アッラーのみ使いよ、あなたが嫌われた物を私に下さるとは。

私はどうなるのですか」と言った。
み使いは「私は君がそれを着用するために与えたのではない。
だが君がそれを売るためにである」と申された。
彼はそれを 2000 ディルハムで売った。

アリーは伝えている
アッラーのみ使いに絹の衣服が献上された。
するとその御方は私にそれを送って下さった。
それで私は着用した。
しかし、私はその御方が怒っておられるのが分った。
み使いは「私は君がそれを着用するために送ったのではない。
私がそれを送ったのは君がそれを裂いて婦人達の頭を覆うものを作るためである」と申された。

前述のハディースで別伝承には“（その御方は）私に御命じになった。
それで私はそれをわが家の女性達の間に分けた”という言葉がある。
また他の別伝承ハディースには“私はそれをわが家の女性達に分けた”という言葉はあるが“（その御方は）私に御命じになった”という言葉は述べられてはいない。

アリーは伝えている
ドーマ（マディーナから 13 日行程に位置する町）の統治者ウカイディルが預言者に絹の衣服を献上した。
するとその御方はアリーにそれをお与えになった。
そして「それを三人のファーティマ達（注）の頭を覆うものを作るために分割せよ」と申された。

（注）三入のファーティマとはファーティマ・ビント・ムハンマド（預言者の娘でアリーの妻、ファーティマ・ビント・アサド（アリー・ビン・アブー・ターリブの母）、ファーティマ・ビント・ハムザ・ビン・アブドル・ムッタリブ（預言者の叔父の娘）である

アリー・ビン・アブー・ターリブは伝えている
アッラーのみ使いは私に絹の衣服を下さった。
私はそれを着て外に出た。
すると私はその御方が怒っておられるのが分った。
それで私はそれをわが家の女性達のものとして使用するために裂いた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いはウマルに絹の外衣を送られた。

するとウマルは「あなたはそれを送って下さいましたが、以前それについて申されたことがございました」と言った。

その御方は「私は君がそれを着用するために送ったのではないだが、君が（それを売り）その代価が君の役に立つように送ったのだ」と申された。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは「現世で絹を着る者は、来世では絶対にそれを着られぬ」と申された。

アブー・ウマーマは伝えている

アッラーのみ使いは「現世で絹を着る者は、来世では絶対にそれを着られぬ」と申された。

ウクバ・ビン・アーミルは伝えている

アッラーのみ使いに絹の長上着が献上された。

その御方はそれを召されて礼拝を挙行された。

その後家に帰られて、それを嫌悪するかのように脱ぎ捨てられた。

そして「アッラーを畏れる者達にとってこれは望ましいものではない」と申された。

このハディースはヤジード・ビン・アブー・ハビーブを経由して別の伝承者経路でも伝えられている。

かいせんやそれに類する（皮膚病がある）場合、男子も絹の衣服の着用を許される

アナス・ビン・マーリクは教友達に（次のように）告げた。

アッラーのみ使いはアブドル・ラフマーン・ビン・アウフとズバイル・ビン・アッワームに旅行で、絹のシャツを着ることを特に許可された。

それは、その二人がかいせんに罹っていたか、または他の何かの病で苦しんでいたからであった。

このハディースは別の伝承者経路でも伝えられているが、それには“旅行で”という言葉は述べられてはいない。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いはズバイル・ビン・アッワームとアブドル・ラフマーン・ビン・アウフに絹の衣服の着用を特別に許可された。

それは二人がかいせんに罹っていたためであった。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アナスは伝えている

アブドル・ラフマーンとズバイル・ビン・アッワームはアッラーのみ使いに虱（しらみ）の悩みを訴えた。

それで、その御方はその二人に絹のシャツを着用することを許された。

これはある遠征において二人に起った出来ごとである。

男子が紅花で染めた衣服を着用することは禁止されている

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースは伝えている

アッラーのみ使いは私が紅花で染めた二枚の衣服を着ているのを御覧になった。
するとその御方は「それは不信者の衣服の一つである故にそれを着用してはならない」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブドッラー・ビン・アムルは伝えている

預言者は私が紅花で染めた二枚の衣服を着ているのをご覧になった。
すると「君の母君がそうするように命じたのか（注 1）」と申された。
私は「これを洗い落とします」と言った。
み使いは「いや、それは焼き捨てよ（注 2）」と申された。

（注 1）紅花で染めるのは女性の所為であり、それで染められたものは女性用であったからである

（注 2）これは実際に焼いてしまえと言うことではなく、預言者のそれに対する嫌悪の程を示したものとされる

アリー・ビン・アブー・ターリブは伝えている

アッラーのみ使いは紅花で染めた衣服、金の指輪、そして、立礼の姿勢でのクルアーンの読誦を禁じられた。

アリー・ビン・アブー・ターリブは伝えている

預言者は私が立礼した時にクルアーンの読誦を禁じられた。
また金で出来た物を身につけることや紅花で染めたものを着ることも同様である。

アリー・ビン・アブー・ターリブは伝えている

アッラーのみ使いは私に金の指輪、絹の衣服、立礼や跪拝の時のクルアーンの読唱、そして紅花で染めた衣服等を禁じられた。

亜麻布（または綿）で出来たイエメンの外套の徳

カターダは伝えている

われわれはアナス・ビン・マーリクに「アッラーのみ使いが最も好まれた、または最もお気に入りであった衣服はどのようなものですか」と尋ねた。

彼は「亜麻布（または綿）で出来た縞のあるイエメンの外套である」と言った。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いが最も好まれた衣服は亜麻布（または綿）で出来た縞のあるイエメンの外套であった）と言った。

衣服には謙虚さを示すこと、その布はきめの荒いものが好ましいが、（ラクダまたは羊の毛）で織られた衣服も許される

アブー・ブルダは伝えている

私はアーイシャの所に行った。
彼女はわれわれにイエメンで作られるきめの荒いイザール（注）とムラッバドと呼ばれるきめの荒い衣服を取り出した。
そして「アッラーに誓い、アッラーのみ使いはこの二枚の衣服を召されて亡くなられました」と言った。

（注）これについては度々述べられている衣服の一種で、腰から下にまとうものである

アブー・ブルダは伝えている

アーイシャはわれわれにイザールとムラッバドと呼ばれる衣服を取り出して来た。
そして「アッラーのみ使いは亡くなられた時、これを召されておられました」と言った。
イブン・ハーティムは彼のハディースの中で“きめの荒いイザール”と言った。

前述のハディースの別伝承の中では“きめの荒いイザール”と言っているのがある。

アーイシャは伝えている

預言者はある朝（ラクダまたは羊の）黒い毛で織られたもので、それにラクダの鞍の模様のある衣服を召されて外出されました。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが寄り掛っておられた肘掛けは椰子の繊維をつめた皮で出来ておりました。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いがお休みになっていたマットは椰子の木の繊維がつめられた皮で作られたものでした。
前述のハディースの別伝承には、言葉に僅少の相違がある。

カーペットの使用は許される

ジャービルは伝えている

私が結婚した時、アッラーのみ使いは私に「君はカーペットを使用したか」と申された。
私は「どうしてわれわれが（貧しくて）カーペットなど使用出来ましょうか」と言った。
その御方は「それは近い将来に（君達の手に入る）」と申された。

ジャービルは伝えている

私が結婚した時、アッラーのみ使いは私に「君はカーペットを使用したか」と申された。
私は「どうしてわれわれがカーペットなど使用出来ましょうか」と言った。
その御方は「それは近い将来に（君達の手に入る）」と申された。
ジャービルはまた「私の妻はカーペットを持っていた。
私は、それを家から出しなさいと言った。
すると彼女は『アッラーのみ使いは、それは近い将来あなた方の手に入るであろう、と申されました』と言った。
とも伝えられている。
このハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

実際に必要としないベッドや衣類を増やすことは好ましくないことである

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは「ベッドは夫のために一つ、妻のために一つ、そして三つ目は客用に（あればよい）。
それで、四つ目はサタンのため（に置くことになる）」と申された。

尊大に衣服の裾を引きずることは禁じられている。
また裾の適切な位置についての説明

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「尊大に己の衣服（の裾）を引きずる者を御注目にはなさらない」と申された。

前述のハディースはイブン・ウマルを根拠として異った伝承者経路で多く伝えられているが、それらには“復活の日”という言葉が付加されている。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「尊大に己の衣服を引きずる者は、アッラーが復活の日、その者には御注目なさらない」と申された。

前述のハディースはイブン・ウマルを根拠として、別の伝承者経路を経て伝えられている。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「尊大に己の衣服を引きずる者は、アッラーが復活の日、その者には御注目なさらない」と申された。

ハンザラ・ビン・アフー・スフヤーンは伝えている

私はイブン・ウマルが「私はアッラーのみ使いが（前述のハディース同様のことを）申されるのを聞いた」と言ったのを耳にした。
だが、このハディースでは“衣服”という語を複数で述べている。

ムスリム・ビン・ヤンナークは伝えている

イブン・ウマルがイザールを引きずっている者を見た。
彼は「あなたはどのような家柄の者か」と尋ねた。
彼は己の家系を述べた。
彼はライス族の者であった。
イブン・ウマルは彼のことが分って「私はアッラーのみ使いが『イザールを引きずる者がそうするのは、尊大ぶるに他ならぬのだ。
まこと、アッラーは復活の日、そのような者を御注目にはならない』と申されるのを私の両耳で聞いた」と言った。

前述のハディースで、言葉に僅少の相違をもって別の伝承者経路で伝えられているものがある。

ムハンマド・ビン・アッバード・ビン・ジャアファルは伝えている

私はナーフィウ・ビン・アブドル・ハーリスの解放奴隷ムスリム・ビン・ヤサールとイブン・ウマルの間に座っていた。
その時、私はムスリムに（次のことを）イブン・ウマルに尋ねるよう命令した。
（それは）彼が預言者から、尊大にイザールを引きずる者について何かお聞きしなかったかどうかについてである。
その時イブン・ウマルは「私はその御方が『アッラーは復活の日、そのような者には御注目されない』と申されるのを聞いた」と言った。

イブン・ウマルは伝えている

私がアッラーのみ使いの側を通った折にイザールを引きずっていた。
するとみ使いは「アブドッラー、君のイザールを上げよ」と申された。
それで私はそれを（少し）上に揚げた。
その御方は更に「もっと揚げよ」と申された。
それで私は更に揚げた。
そしてなおもそれを揚げていると、人々は「どの辺まで（揚げれば良いのだろうか）」と言った。
するとその御方は「脛の中程までである」と言った。

アブー・フライラは伝えている

アブー・フライラはイザールを引きずって歩いている男を見た。
その男はバハレーンの大守であった。
彼は「大守が参ったのだ。大守が参ったのだ」と言いながら（尊大に）大地を烈しく踏みつけ始めた。
アッラーのみ使いは「まことに、アッラーは尊大にイザールを引きずる者を御注目にはならない」と申された。
前述のハディースは多くの別の伝承者経路でも伝えられている。
それらの中には“マルワーンはアブー・フライラを彼の代理者としていた”と述べられたり、別のハディースには“アブー・フライラはマディーナの総督代理に任命されていた”と述べられているのがある。

着用の衣服を自慢し、尊大に歩くことは禁じられている

アブー・フライラは伝えている

預言者は「ある者が己の濃い髪の毛や、外衣を自慢して歩いている間に、その者諸共に大地は沈んでしまった。

その者は復活の日まで、ずるずると地深く沈み続けるのだ」と申された（注）。

（注）イスラームが教えている謙虚さを実践しない者への戒めの言葉である

前述のハディースはアブー・フライラを根拠として、異った伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「ある者が着用した外衣に得意になり、誇らしげに歩いている間に、アッラーは彼を地中にお沈めになった。

それで彼は復活の日まで、ずるずると地下深く沈み続けるのである」と申された。

このハディースはアブー・フライラを根拠として伝えられたが、その中に“アッラーのみ使いは「ある者が二枚の着衣をまとって誇らしげに歩いている間に…」と申された”と述べているのもある。

アブー・フライラは伝えている

私はアッラーのみ使いが「あなた方以前の者で、己の衣服を自慢して歩いている者があった」と申されるのを聞いた。

残余のハディースは同一である。

金の指輪は禁じられている。
それはイスラーム最期には許されていたものの一つであった

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは金の指輪を禁じられた。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アブドッラー・ビン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いはある男がつけていた金の指輪を御覧になった。
その御方はそれを抜き取られて投げ捨てられた。
そして「あなた方の中で地獄の熾火の中に入りたい者は、それを指にはめるがよい」と申された。
アッラーのみ使いがそこを立ち去られた後で例の男に「君の指輪を拾え、そしてそれを役立てよ」と言う者があった。
すると彼は「いやだ、アッラーに誓い、私は絶対にそれは拾わぬ。
それはアッラーのみ使いが投げ捨てられた物なのだ」と言った。

アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは金の指輪をお作らせになった。
そしてそれをはめられた時は宝石の部分を手の内側の方にしておられた。
人々は（その御方に倣って）それを作った。
ある日、その御方はミンバルに座られてそれをお取りになった。
そして「私はこの指輪をはめ、宝石を手の内側に置いていた」と申されてから、それを取ってお投げになった。
そして更に「アッラーに誓い、私はそれを絶対にはめぬ」と申された。
人々も彼等の指輪の使用を放棄した。
なおこのハディースの言葉はヤヒヤーが語ったものである。
このハディースはイブン・ウマルを根拠として、いくつかの伝承者経路で伝えられている。
それらの中には“その御方は右手にそれをはめておられた”という言葉があるものもある。

イブン・ウマルも預言者から聞いた話として、前述の“金の指輪に関する”話を伝えている。

アッラーのみ使いはムハンマドン・ラスールッラーヒ（ムハンマドはアッラーのみ使いである）という言葉が刻まれていた銀の指輪をされていた。それは後継正統カリフ達に受け継がれた

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは銀の指輪をお作りになって指にはめておられた。
それからその指輪はアブー・バクルの手に、そして次はウマルの手に、そして更にウスマーンの手へと渡った。
そして彼の（手から）アリースの井戸（注 1）の中に落ちた。
それにはムハンマドン・ラスールッラーヒ（注 2）という言葉が彫られていた。
イブン・ヌマイル（伝承者の一人）は"そしてそれは井戸に落ちた"と言っているが、"彼（の手）から"とは言っていない。

（注1）この井戸の場所がどこかは明瞭ではないが、マディーナ近郊の庭園にあったとされる。

（注 2）み使いの指輪の文字、ムハンマドン・ラスールッラーヒは、一番上段にアッラーと刻まれ、中段にはラスール（み使い）、最下段にムハンマドンと三段になっていた

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは金の指輪を用いておられたが、それを放棄されて銀の指輪を用いられた。
それにはムハンマドン・ラスールッラーヒと刻まれていた。
その御方は「誰も私の指輪の文字を（各自の指輪に）刻んではならない」と申された。
そしてそれを指にはめられた時はその言葉が刻まれている方が手の内側に来るようにしておられた。
その指輪はムアイキーブ（注）（の手）からアリースの井戸の中に落ちた。

（注）ムアイキーブはサイード・ビン・アブー・アースの解放奴隷であった。
なお先のハディースにはウスマーンの手からそれが井戸に落ちたとされていて、このハディースとの間に食い違いがある。
これは確かにウスマーンの所有物ではあったが、それを常に指につけていたわけではなく、何か特別の折にだけそれを身につけた。
そして、それの管理はムアイキーブが託されていたのではないかと考えられている

アナス・ビン・マーリクは伝えている

預言者は銀の指輪を用いられ、それに“ムハンマドン・ラスールッラーヒ”と刻まれた。

そして人々に「私は銀の指輪を用いた。

そしてこれにムハンマドン・ラスールッラーヒと刻んだ。

だが誰も（この文字を）指輪に刻んではならぬ」と申された。

このハディースはアナスを根拠としても、他の伝承者経路で伝えられているが、それには“ムハンマドン・ラスールッラーヒ”という言葉は述べられてはいない。

預言者は外国に書簡を送ることを望まれた時には（銀の印形）指輪を用いられた

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いがビザンティン帝国に手紙を送ることを望まれた時、教友達は「彼等は印が押されていない書簡は読みません」と言った。

それでアッラーのみ使いは銀の印形指輪を用いられた。

私はアッラーのみ使いの御手にあったその輝きを（今も）目の当たりにしているようだ。

それには“ムハンマドン・ラスールッラーヒ”と刻まれていた。

アナスは伝えている

預言者は外国に手紙を送ることを望んでおられた。

するとその御方に「外国人は印が押されていない書簡は受け取りません」という具申があった。

それでその御方は銀の印形指輪をお作らせになった。

私はその御方の御手にあったその輝きを（今も）目の当たりにしているようである。

アナスは伝えている

預言者はペルシア王、ビザンティン皇帝、エチオピア皇帝に書簡を送ることを望まれた。

すると「彼等は印が押されていない書簡は受け取りません」という具申があった。

それでみ使いは銀製の指輪を作らせ、それにムハンマドン・ラスールッラーヒと刻まれた。

指輪の放棄に関して

イブン・シハーブはアナス・ビン・マーリクからの話として伝えている

アナスはある日、アッラーの御手に銀の指輪がはめられているのを見た。

それで人々は銀の指輪を作ってはめた。

すると預言者は御自身のそれを放棄された。

人々も（それに倣って）彼等の指輪を放棄した（注）。

（注）伝承学者達は、これはイブン・シハーブが金と銀を間違えて伝えたものと言っている。

前のハディースにあったように預言者が禁止されたのは金の指輪である。

イブン・シハーブはアナス・ビン・マーリクからの話として伝えている

アナスはある日、アッラーのみ使いの御手に銀の指輪がはめられているのを見た。

それで人々も銀の指輪を作ってはめた。

すると預言者は御自身のものを放棄された。

人々も（それに倣い）彼等の指輪を放棄した。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アッラーのみ使いの銀の指輪にはエチオピアの宝石がついていた

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いの指輪は銀で作られていた。
それには黒いエチオピアの宝石がついていた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは右手に銀の指輪をしておられ、それにはエチオピアの宝石がついていた。
そしてその宝石がついている方を手の内側にしておられた。
前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アッラーのみ使いは小指に指輪をしておられた

アナスは伝えている

預言者の指輪はこの指にはめられていた。
（そう言って）彼（アナス）は彼の左手の小指を指し示した（注）。

（注）前述のハディースには右手と述べられていたが、預言者はそれを左右両方にはめたものと思われる

中指とその次の指（人さし指）に指怜をすることは禁止されている

アリーは伝えている

預言者は私がこの指に指輪をすること、あるいはその隣の指にすることを禁じられた。
ーアースィム（中途伝承者）は彼（アリー）が指摘した指がどの二本か分らなかったー（注）
またその御方は私にカッスィーの着用とマヤースィルの使用を禁じられた。
ところでカッスィーとはエジプトやシャームからもたらされた縞のある絹または亜麻布で出来た衣服で、それには意匠が凝らされている。
一方マヤースィルは縁房のついた赤い衣服のようなものであるが、それは婦人達が彼女達の夫のために乗り物の鞍の上に敷いていたものである。

（注）後のハディースから最初に指摘したのは中指で次は人さし指と思われる

このようなハディースはアリーを根拠として、異った伝承経路を経て伝えられている。

アリー・ビン・アブー・ターリブは伝えている

彼は「預言者は禁じられた（または私に禁じられた）」と言って前述の様な話を述べた。

アリーは伝えている

アッラーのみ使いは、私が私のこの指、またはこの指に指輪をすることを禁じられた。
それからアリーは彼の中指とその次の指（人さし指）を指摘した。

サンダル（または靴）を履くことの勧めとその理由

ジャービルは伝えている

われわれが行ったある遠征において預言者は「努めてサンダルを履くようにせよ。
人がそれを履いている時はあたかも乗り物に乗り続けているように（楽でしかも安全である）」と申されるのを聞いた。

サンダルを履く時は右より、脱ぐ時は左からが好ましい。
またそれを片方だけ履いて歩くのは嫌悪される

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は誰でも、サンダルを履く時は右足から履き始めよ。
そしてそれを脱ぐ時は左足からにせよ。
また、両者一緒に履いてもよいし、一緒に脱いでもよい」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は誰でも、サンダルを片方だけ履いて歩いてはならぬ。
その一対は一緒に履き一緒に脱ぐのだ」と申された。

アブー・ラズィーンは伝えている

アブー・フライラがわれわれの所に来た。
そして彼は手で自分の額を打ち（熱を込めて次のように）言った。
「諸君、心して聞くがよい。
あなた方はこの私が、あなた方が正しく導かれるようにと、（あることを捏造し）それをアッラーのみ使いに事寄せて話していると言っている。
（だがそのようなことが如何にして可能であろうか）
それは私自身が間違いを犯すことであり（それによって私は火獄の住人となってしまう）
良く聞くがよい。
私はアッラーのみ使いが『あなた方は誰でもサンダルの鼻緒が切れた時は、それを繕うまで他の一方だけで歩いてはならぬ』と申されたのを確かに聞いたと証言する」
このようなハディースはアブー・フライラを根拠として異った伝承者経路で伝えられている。

手を通す箇所もなく、包み込むような衣服を身にまとうことと、一枚の衣服をまとっただけで座すことは禁止されている

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは、人が左手で物を食すこと、サンダルを片方だけ履いて歩くこと、手を通す箇所もなく、包み込むようなものを身にまとうこと、そして露にしてはならぬ部分をさらけ出す恐れのあるような短い衣服一枚だけで座ることを禁じられた。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは（次のように）申された。
あるいは、私はアッラーのみ使いが（次のように）申されるのを聞いた。
あなた方は誰でも鼻緒が切れた場合はーあるいは、サンダルの鼻緒が切れた者はーそれを繕うまで片方のサンダルだけで歩いてはならぬし、片方の靴だけで歩いてもならぬ。
また左手で物を食べてはならぬし、膝のあたりまでの短い衣服一枚を身につけて座ること、そして手を通す箇所もないもの等を身にまとってはならぬ。

仰臥（ぎょうが）して片方の足をもう一方の足の上に置くこは禁止されている

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは手を通す箇所もなく、包み込むような衣服を身に着けること、膝程までの短い衣服を着けて座すこと、また、仰臥して片方の足を他の一方の上に乗せることを禁じられた（注）。

（注）ズボンのような衣服であればどのような姿勢をとっても問題はない

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者は「サンダルを片方だけ履いて歩いてはならぬ。
膝程までの短い衣服をまとって座ってはならぬ。
左手で物を食べてはならぬ。
手を通す箇所もないような衣服を身につけてはならぬ。
そして横になった時は片方の足を他の一方の上に置いてはならぬ」と申された。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者は「あなた方は誰でも横になって片方の足を他の一方の上に置くような姿は絶対にしてはならぬ」と申された。

醜態を晒さない限り、横になって片方の足を他の一方の上に置いても差し支えない

アッバード・ビン・タミームは彼のおじから聞いた話として伝えている

彼（アッバードのおじ）はアッラーのみ使いがマスジドで横になられ、片方の足を他の一方の上に置かれているのを見た。

このハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

男子はサフランで染めた衣服の着用を禁じられている

アナス・ビン・マーリクは伝えている

預言者は（衣服または髪の毛を）サフランで染めることを禁じられた。

ハンマードは「それは男性に関したことである」と言った。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは、男子がサフランで染めた衣服を着用することを禁じられた。

白髪は黄か朱に染めることが好ましい。黒い色は禁じられている

ジャービルは伝えている

勝利（マッカ征服）の年、または勝利の日、アブー・クハーファ（アブー・バクルの父）が（預言者に忠誠の誓いのため）連れてこられた。
あるいは（自ら）やって来た。
彼の頭はヒソップ（注 1）のように白かった。
その時、その御方は「これ（白髪）を他の色に変えよ」と御命じになった。
あるいは彼の側にいる女性達にそれが言いつけられた（注 2）。

（注 1）ヒソップはやなぎはっかともいい、白い花、白い実をつけるが、その際は木に雪を頂いた如くであるという

（注 2）アブー・バクルの父がイスラームに帰依した時は既に老境にあり髪は真っ白になっていた。

預言者は彼の新しい人生の門出に当って、老いの象徴でもある白髪を他の色に変えることで、在りし日の気力を感知せしめようとしたのである

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

マッカ征服の日、アブー・クハーファが連れて来られた。
彼の頭とあごひげはヒソップのように白かった。
アッラーのみ使いは「これを他の色に変えよ、だが、黒は避けよ」と申された。

毛髪を染めることについては、ユダヤ教徒達とは異なっている

アブー・フライラは伝えている

預言者は「ユダヤ教徒やキリスト教徒は毛髪は染めない。
それであなた方は彼等と異なったようにせよ」と申された。

天使は犬がいたり、画がある家には入らない

アーイシャは伝えている

天使ガブリエルはアッラーのみ使いを訪れる時刻について、その御方と約束を交わしました。

しかしその時刻が来ても彼は訪れませんでした。

み使いは手にされていた杖をお投げになり「アッラーは約束を絶対に違えられぬし、その御使者達も同様である」と申されました。

その時み使いはその御方の寝台の下に子犬がいるのに気が付かれました。

そして「アーイシャよ、この犬は何時ここに入ったのか」と申されました。

私は「アッラーに誓って、私は存じませんでした」と言いました。

その御方は小犬を外に出すように御命じになりました。

するとガブリエルが訪れました。

アッラーのみ使いは「あなたは私に約束されました。

それで私はあなたをお待ちして座って居りましたが来られませんでした」と申されました。

天使は「あなたの家にいた犬が私（の訪問を）妨げたのです。

私達は犬のいる家や画のある家には入りません」と言いました。

前述のハディースは別の伝承者経路で伝えられている。
だがそれは前述のもの程は長くない。

マイムーナは伝えている

アッラーのみ使いはある日、沈痛な御様子で朝をお迎えになった。

マイムーナは「アッラーのみ使い様、私は今日、あなたにいつもと違った御様子を拝見するのですが」と言った。

み使いは「ガブリエルは夜、私と会う約束をしたが私を訪れなかった。

アッラーに誓い、彼が約束を違えることはないのだが」と申された。

それでアッラーのみ使いはその日を（沈痛な面持ちで）過ごされた。

その後み使いは、われわれのテントの下に小犬がいるのに気付かれた。

それでその小犬を外に出すよう御命じになった。

それからその御方は水を手にされそれがいた場所に撒かれた。

夕刻になった時、ガブリエルがその御方を訪れた。

み使いは「あなたは昨夜、私と会う約束をされておりましたのに」と申された。

天使は「その通りです。

しかし、私達は犬がいたり画のある家には入りません」と言った。

アッラーのみ使いは朝になると、その日、犬を殺すことを御命じになった。

（その命令では）小庭園（を見張る）犬は殺し、大庭園の犬は容赦する、というものであった。

アブー・タルハは伝えている

預言者は「天使は犬がいる家にはお入りにならないし、画のある家にもお入りにならない」と申された。

アブー・タルハは伝えている

私はアッラーのみ使いが「天使は犬がいる家にはお入りにならないし、画のある（家にもお入りにならない）」と申されるのを聞いた。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

教友**アブー・タルハ**は伝えている

アッラーのみ使いは「まこと、天使は画のある家にはお入りにならない」と申された。

ブスル（伝承者の一人）は、次のように言った。

ザイドが病気になった。

それで、われわれが彼を見舞いに行くと、画がかかれていたカーテンが扉の上に掛っているではないか。

私は預言者の妻マイムーナに養われていたウバイドッラー・ハウラーニ―に「ザイドは以前、画に関して（み使いが御命じになったことを）われわれに告げなかったか」と言った。

するとウバイドッラーは「あなたは彼がそれを言った時“布の装飾以外は”と言ったのを聞かなかったのですか」と述べた。

アブー・タルハは伝えている

アッラーのみ使いは「天使は画のある家にはお入りにならない」と申された。

ブスルは（これに関し次のように）伝えている。

ザイド・ビン・ハーリドが病気になった。

それでわれわれは彼を見舞った。

われわれが彼の家に行ってみると、そこには画のあるカーテンが掛っているではないか。

私はウバイドッラー・ハウラーニーに「彼はわれわれに（アッラーのみ使いが画に関して御命じになったことを）話さなかったか」と言った。

彼は「確かにザイドはそれについて話しましたが“布に描かれた装飾は除く”と言いました。あなたはそれを聞きませんでしたか」と言った。

私は「いや、聞かなかった」と言った。

彼は「いいえ、彼は確かにそれについて述べました」と言った。

アブー・タルハ・アンサーリーは伝えている

私は、アッラーのみ使いが「天使は犬のいる家や肖像画のある家にはお入りにならない」と申されるのを聞いた。

私はアーイシャの所に行き「私は預言者が『天使は犬がいたり、肖像画のある家にはお入りにならない』と申されたということを伺ったのですが、あなたはアッラーのみ使いがそう言われるのをお聞きになりましたか」と言った。

彼女は「いいえ（私はそれについては聞いておりません）

しかし、私はあの御方がなされたことで、私が見たことをあなた方にお話し致しましょう」と言って（次のように）話した。

あの御方が遠征にお出でになりました。

それで私はカーペットを利用し、それで戸口を覆いました。

み使いがお帰りになりました時、そのカーペットを御覧になりました。

私はお顔を見て、その御方がそれに嫌悪されているのを知りました。

み使いはそれを引き下ろして裂き、それに描かれていた画を引き裂かれました。

または切断されました。

そして「まこと、アッラーは石や土（壁）に衣を着せることは御命じにはならなかった」と申されました。

私達はそれを切りました。

そして枕を二つ作り、それになつめ椰子の繊維を入れました。

その御方はそれについては私をお咎めにはなりませんでした。

アーイシャは伝えている

私達の許に鳥の画の入っているカーペットがございました。

それは家に入る者を正面で迎えるよう置かれておりました。

アッラーのみ使いは私に「これを（他のものに）変えよ。

私はここに入る度にこの世（の楽しみごと）を思い出す」と申されました。

彼女は（また）「私達の許には絹の伏繍がほどこされたビロードの衣服がございましたが、私達はそれを着用しておりました」と言った。

前述のハディースはイブン・ムサンナーを根拠としても伝えられているが、それには“アッラーのみ使いはそれを裂け、という御命令はされなかった”という付加がある。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが旅からお帰りになりました。
その時私は戸口をカーテンで覆っておりましたが、それには翼をもった馬の画が描かれておりました。
み使いは私に（それを取り除くよう）御命じになりました。
それで私はそれを取りはずしました。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられているが、それには言葉に僅少の相違がある。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが私の所にお出でになりました。
その時私は画が描かれている薄いカーテンを（入口に）掛けておきました。
み使いは（それを御覧になると）お顔の色が変りました。
そしてそのカーテンを掴んで引き裂かれました。
そして「まこと、復活の日、最も厳しい罰を受ける人々の中には、アッラーの創造を擬（なぞら）える人々がある」と申されました。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが私の所にお出でになりました。
残余のハディースは前述と同様であるが、これには“その御方はカーテンの方に近寄られ、それを手で引き裂かれた”という部分があり、その点が他と異っている。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。
それには“まことに、最も厳しい罰を受ける人々は”と述べられ、“人々の中には”とは述べられてはいない。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが私の所にお出でになりました。
その時私は肖像画のついた薄いカーテンで棚を覆っておりました。
その御方はそれを御覧になると（それを掴んで）引き裂かれ、お顔の色は変りました。
そして「アーイシャ、復活の日、アッラーの御許で最も厳しい罰を受ける人々は、アッラーの創造を擬える者達である」と申されました。

アーイシャは伝えている

私は画が描かれている布を持っておりましたのでそれを棚の前に掛けておりました。

み使いは常にその側で礼拝を捧げておられました。

そして私に「それを除けよ」と申されましたので、私はそれを取りはずしました。

アーイシャは伝えている

預言者が私の所に来られました。

その時私は画が描かれているカーテンを掛けておりました。

するとその御方はそれを取り除かれました。

それで私はそれを利用してクッションを二つ作りました。

預言者の妻**アーイシャ**は伝えている

私は画のついているカーテンを掛けました。

（でもそれは）アッラーのみ使いがお出でになって、それを取り除かれました。

私はそれを切ってクッションを二つ作りました。

その頃、集会にいた一人の男（彼はラビーア・ビン・アターウといいズフラ族のマウラーであった）がイブン・カーセムに「あなたはアブー・ムハンマド（カーセムの祖父）の（次のような）言葉を聞かなかったでしょうか。

それはアーイシャが『アッラーのみ使いはその二つのクッションに寄り掛っておられました』と言ったという言葉です」と言った。

イブン・カーセムは「いいえ（聞きませんでした）。

しかし私はカーセム・ビン・ムハンマドがそのように言うのを聞きました」と言った。

アーイシャは伝えている

私は画が描かれているクッションを買いました。

アッラーのみ使いがそれを御覧になった時、入口の所にお立ちになったまま中にはお入りになりませんでした。

私はその御方のお顔に嫌悪の御様子を見てとりました。

またはそれを知らされました。

それで私は「アッラーのみ使い様、私はアッラーに対し、またそのみ使いに対し（まことに申し訳ないことをした様子にて）後悔致しております。

どうか私が犯した罪が何かを（お話し下さい）」と言いました。

するとアッラーのみ使いは「このクッションは何か」と申されました。

私は「その上にあなたがお座わりになり、頭をお置きになるように買い求めたものでございます」と申し上げますと、み使いは「まこと、この画を描いた者達は懲罰を受けるであろう。

そして彼等は『汝等が創造したものに生を与えて見よ』と言われるであろう」と申されました。

そして更に「まこと、画のある家に天使はお入りにはならない」と申されました。
前述のハディースはアーイシャを根拠として、他の伝承者維路でも伝えられている。
それらの中には他のハディースには無い事柄を伝えているものがある。
（例えば）マージシューンの甥のハディースには“彼女は「私はそれを利用し、肘を掛けるクッションを二つ作りました。
その御方は家でそれに寄つ掛っておられました」と言った”と述べられている。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「画を描く者達は復活の日、懲罰を受けるであろう。
彼等は『汝等が創造せるものに生命を与えて見よ』と言われるであろう」と申された。

イブン・ウマルを根拠として伝えられた前述のハディースは、他の伝承者経路でも伝えられている。

アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは「まこと、復活の日、最も厳しい懲罰を受ける人々は画を描く者達である」と申された。

アシャッジュ（伝承者の一人）は“まこと”という強調詞は文頭には置かなかった。
前述のハディースは、別の伝承者経路で伝えられている。
その中で彼は“み使いは「まこと、復活の日、地獄の住人達の中で最も厳しい懲罰を受ける人々の中には画を描く者達がある」と申された”と述べている。

ムスリム・ビン・スバイフは伝えている

私はマスルーク（伝承者の一人）と一緒にマリアの肖像のある家にいた。
するとマスルークが「これはキスラー（ペルシア王の異名）の肖像である」と言った。
私は「そうではない。
これはマルヤムの肖像である」と言った。
するとマスルークは「私はアブドッラー・ビン・マスウードが『アッラーのみ使いは“復活の日、最も厳しい懲罰を受ける人々は画を描く者達である”と申された』と言うのを聞いた」と言った。

ムスリムは言った。

私はナスル・ビン・アリー・ジャフダミーが、アブドル・アーラー・ビン・アブドル・アーラーから聞いて書き留めたものを、彼の前で読んだ。

それはサイード・ビン・アブー・ハサンを根拠にしたものであった。

（以下はその内容である）

一人の男がイブン・アッバースの所に来て「私はこれらの画を描く者ですが、それについて私に法的な判断をお示し下さい」と言った。

彼は「私の近くに寄りなさい」と言った。

その男は近づいた。

するとなお「私の側に寄りなさい」と言った。

彼はすぐ側に近づいた。

すると彼は手をその男の頭に置き「私がアッラーのみ使いからお聞きしたことを君に告げよう。

私はアッラーのみ使いが『（動物を描く）画家は皆火獄に落ちるであろう。

アッラーはその者が描いた画の一つ一つに生命をお与えになる。

するとそれが彼を地獄で苦しめるであろう』と申された」と言った。

なおイブン・アッバースは「もし君がどうしてもそれをしなければならないのなら、樹木や生命の無い物を描くがよい」と言った。

ナスル・ビン・アリーはこの話が正しいことを認めた（注）。

（注）イスラームが偶像崇拝を否定して来たことは良く知られている。

これは絵画の場合も同様で、動物、特に人物を描くことは禁じられている。

だからと言ってこの宗教が芸術に反対の立場を取ったわけではない。

それは今日、この地域独特の文芸、能書（カリグラフィ）、建築術、アラベスク等々を見ても容易に理解出来るところである

ナドル・ビン・アナス・ビン・マーリクは伝えている

私はイブン・アッバースの側に座っていた。

その時彼は（イスラーム法の）法的効力を有する判断を示し始めたが、彼は「アッラーのみ使いが申された」とは言わなかった。

だが一人の男が「私がこれらの画を描く者です」と言って彼に尋ねた時

イブン・アッバースは「私はアッラーのみ使いが『この世で画を描く者は、復活の日、その画に生命を与えることを強いられる。だが彼にはそれは出来ない』と申されるのを聞いた」と言った。

ナドル・ビン・アナスは伝えている

一人の男がイブン・アッバースの所に来た。

彼は預言者から聞いた話をした。

残余の話は前述と同様である。

アブー・ズルアは伝えている

私はアブー・フライラと共にマルワーンの家に入った。

するとアブー・フライラはそこに画があるのを知った。

この時、アブー・フライラは（次のように）言った。

私はアッラーのみ使いが「至高偉大なるアッラーは『わが創造の如くに創造することを試みる者以上の不正行為者があろうか。

（そのような者達には）原子を創造せしめよ。

または小麦の種子を創造せしめよ。

あるいは大麦の種子を創造せしめよ』と仰せられた」と申されたのを聞いた。このハディースはアブー・ズルファを根拠としても伝えられたが、彼はその中で（次のように）述べている。

私とアブー・フライラはサイード、またはマルワーンのためにマディーナに建てられた家に入った。

彼はそこに画のあることを知った。

この時彼は「アッラーのみ使いが申された」と言って前述のような話をしたが「あるいは大麦の種子を創造せしめよ」という言葉は述べなかった。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「天使は肖像画または絵画のある家にはお入りにはならない」と申された。

旅に犬を連れ、ベルを持って出るのは好ましくない

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「（慈悲の）天使も犬を連れたリ、ベルを持って旅する一行には同伴しない」と申された（注）。

（注）天使が犬を嫌悪することは先のハディースに述べられていたが、このハディースの場合は、犬のなき声やベルの音がアッラーに精神をうちこんで念ずることの妨げとなるからであるとされる。
なおこのハディースにある事柄は好ましくないこと、というのであって絶対的禁止事項ではない

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「ベルはサタンの楽器である」と申された。

つるに通した首飾りをラクダの首に掛けるのは好ましくない

アブー・バシール・アンサーリーは伝えている

私がアッラーのみ使いとある旅に出ていた時のことであった。

アッラーのみ使いは一人の使者を送られて

ー（中途伝承者の一人）アブドッラー・ビン・アブー・バクルは「私は彼が『人々が彼等の宿泊地に居た時』と言ったと思う」と述べたー

「つるに通した首飾り、または首飾り（のみと言った）をラクダの首に付けたままであってはならぬ。（もしそうすれば）それは必ず切断されよう」と申された。

マーリクは「それは（イスラーム以前）邪視よけとして使用されたのだと思う」と言った（注）。

（注）ジャーヒリーヤの人々はラクダの首に首飾りを掛けることで災禍から免れると考えていた。

だがそれは迷信であるし、またラクダが走った場合それが木等にひっかかり、その動物の首をしめかねないということで禁止されたのである。

従って危険の全く無いもので装飾として用いられるものは差し支えない

動物の顔を打つこと、それに焼印を押すことは禁じられている

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは動物の顔面を打つこと、あるいは顔に焼印を押すことを禁じられた。

前述のハディースはジャービル・ビン・アブドッラーを根拠として、他の伝承者経路でも伝えられている。

ジャービルは伝えている

預言者の所を顔に焼印のあるロバが通った。

その時み使いは「アッラーが、ロバの顔に焼印を押した者を呪われますように」と祈られた。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは顔に焼印のあるロバを御覧になり、そのことを非難された。

イブン・アッバースは「アッラーに誓って、私は顔から最も遠い部分以外にはそれを押すことはしない」と言った。

そして彼は彼のロバに（焼印を押すことを）命令したが、それはロバの尻の部分であった。

なお彼は（動物の尻に焼印を押した）最初の人物である。

動物は顔面を除き、焼印を押すことが許されている。
また、ザカートやジズヤとしての家畜にはそれを押すのがよい

アナスは伝えている

ウンム・スライムが（男の子を）出産した時、彼女は私に「アナス、この子を見てちょうだい。明日の朝この子を預言者の所に連れて行き、その御方が噛まれたなつめ椰子の実でこの子の口蓋をこするまで、何一つ食べさせないようにね（注 1）」と言った。
朝、私はその御方の所に行った。
するとその御方はジャウニーヤ（注 2）の外套を召され、庭園で戦勝によってその御方の所に送られて来たラクダの焼印に忙しくしておられた。

（注1）これはタハニークと呼ばれているアラブの習慣の一つである。
アラブは子供が生まれると徳の高い人物の所に連れて行き、なつめ椰子の実、あるいはそれに類する物を噛んでもらい、その人の唾液のついた物で新生児の口蓋をこする。
そうすることによってその子供に祝幅があると信じている

（注 2）ジャウニーヤは、アズド族の中のジャウヌ族から出たとされる衣類で、色は黒、白、赤等がある

アナスは伝えている

私の母が男の子を出産した時、人々は早速その子を預言者の所に連れて行った。
それは、その御方になつめ椰子の実を噛んでいただき、それで新生児の口蓋をこするためである。
その時預言者は家畜の囲いの中で羊の焼印に忙しくしておられた。
シュウバは「私の知る限りにおいてアナスは「（その御方は）それらの耳に焼印を押しておられた』と言った」と述べた。

アナスは伝えている

われわれは家畜の囲いの中で羊に焼印を押されているアッラーのみ使いを訪れた。
ヒシャーム・ビン・ザイド（伝承者の一人）は「私は彼（アナス）が『（その御方は）家畜の耳に（焼印を押されていた）』と言ったと思う」と述べた。
このハディースはシュウバを根拠としても、別の伝承者経路で伝えられている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

私はアッラーのみ使いの御手に焼印のこてを見た。
その御方はザカートとして集められたラクダに焼印を押されていた。

カザウは忌むべきものである

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはカザウを禁じられた。
私はナーフィウに「カザウとは何ですか」と尋ねた。
彼は「男子の頭の一部を剃り、一部を残しておくことである」と言った。
前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。
そのハディースの（カザウについての）説明は、ウバイドッラーの言葉から得たものである。

前述のハディースはウマル・ビン・ナーフイウを経由し伝えられている。
なお、ムハンマド・ビン・ムサンナーはウマル・ビン・ナーフィウと同じようにカザウについて説明している。

前述のようなハディースは異った伝承者経路でも伝えられている。

道路に座ることは禁じられている（止むなくそこに座る場合は）そこでなすべき義務を遵守すること

アブー・サイード・フドリーは伝えている

預言者は「あなた方は道路に座らぬよう配慮せねばならぬ」と申された。
人々は「アッラーのみ使いよ、われわれにはそれに代る話し合いの場がございません」と言った。
アッラーのみ使いは「もしあなた方がそれをどうしても（必要だと）主張するのであれば、道路で果すべき義務は遵守せよ」と申された。
彼等は「その義務とは何でしょうか」と言った。
み使いは「（あなた方が婦人に出会ったら凝視しないよう）視線を転ずること、他の者に対して害を与えないようにすること、
互いに（あなたの上に平安あれ、と）挨拶を交わすこと、善行を勧めること、そして悪を禁ずることである」と申された。
前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている

髪に髢（かもじ）を添え加えること、入れ墨をすること、顔の毛を抜き取ること、そして人為的に歯と歯の間を開けるような、アッラーの創造を変える行為は禁じられている

アブー・バクルの娘**アスマーウ**は伝えている

ある婦人が預言者の所に参りまして「アッラーのみ使いよ、私には結婚間近の娘がございます。

その娘が天然痘に罹り髪が抜け落ちてしまいました。

それで私は髢を添え加えようと考えたのですが（それはいかがなものでしょう）と言いました。

その御方は「アッラーは、婦人の髪に髢を添えてやる女性、またそのような行為を請う女性を呪われる」と申されました。

このハディースはことばに僅少の相違はあるが、シュウバを経由しても伝えられている。

アブー・バクルの娘**アスマーウ**は伝えている

ある婦人が預言者の所に参りまして「私は娘、を結婚させましたが、娘の髪が抜け落ちてしまいました。

彼女の夫は長い髪を好むのです。

それで、アッラーのみ使いよ、私が髢を添えて上げてもよいものでしょうか」と言いました。

その時み使いはそれを禁止されました。

アーイシャは伝えている

アンサールの娘が結婚致しました。

ところが彼女は病気になり髪の毛が抜け落ちてしまいました。

近親者達は彼女の頭に髢を添えようとしました。

それでこのことをアッラーのみ使いにお尋ねしました。

その御方は「アッラーは婦人の頭に髢を添えてやる女性、またそれを添えることを請う女性を呪われる」と申されました。

アーイシャは伝えている

アンサールの一婦人の娘が結婚後、病気をして髪が抜け落ちてしまいました。

それでその婦人は預言者の所に参りまして「娘の夫は娘の髪に髢を添えることを望んでおります。

それで私はそのようにしようと思うのですが、（良いのでしょうか）」と言いました。

その時、アッラーのみ使いは「婦人の頭に髢を添える女性は呪われる」と申されました。

このハディースは別の伝承者経路でも伝えられているが、それは言葉に僅少の相違をもっている。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは髢を添えてやる女性、またそれを望んでしてもらう女性、入れ墨をする女性、それを望んでしてもらう女性を呪われた。

このハディースについては別伝承がある。

アブドッラーは伝えている

アッラーの創造を変容させ、入れ墨をほどこす女性、それを請う女性、顔の一部にある毛を抜き取る女性、そうすることを望む女性、そして美のためと称して歯と歯の間を人為的に開ける女性は呪われる。

この言葉がアサド族の女性でウンム・ヤアコーブと呼ばれていた者の耳に入った。

その女性は日頃クルアーンを読誦していた。

彼女はアブドッラーの所に来て「あなたが言ったとして伝わったこの話は何ですか。

（つまり）アッラーの創造を変容させて入れ墨をほどこす女性、それをしてもらうことを請う女性、顔の毛を抜き取ってやる女性、そのような行為を請う女性、美のためと称して歯と歯の間隔を人為的に広げる女性をあなたは呪ったというではありませんか」と言った。

アブドッラーは「アッラーのみ使いがお呪いになる者を、私ごときが呪ってどうなるというのか、またそれはクルアーンにも述べられていることだ」と言った。

彼女は「まこと、私はクルアーンの表紙と表紙の間にあるものは（全部）読みました。

しかしそれは見ませんでした」と言った。

彼は「もしあなたが（完全に）読んだのであれば、それを見出した筈だ。

至高偉大なるアッラーは**「また使徒があなた方に与える物はこれを受け、あなた方に禁じる物は避けよ」**（クルアーン第 59 章 7 節）と仰せられた」と言った。

するとその婦人は「でも私はあなたの奥さんに、今もそれらの中の何かがほどこされていると拝察しています」と言った。

彼は「それでは行って良く見てみよ」と言った。

それでその婦人はアブドッラー夫人の所に行って見たが（彼女が考えていた事柄は）何一つ見出せなかった。

その婦人は彼の所に来て「確かに何も見出せませんでした」と言った。

彼は「もしそれらのものが（妻に）あったとすれば、私はベッドを共にはしない」と言った。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられているが、それは言葉に僅少の相違をもっている。

前述のハディースで別伝承の中には、ウンム・ヤアコーブの話が述べられていないものがある。

前述のハディースは他にも別伝承者経路がある。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者は頭髪に（人工の髪に類する）物を添えていた婦人を譴責した。

アブドル・ラフマーン・ビン・アウフは伝えている

私は、ムアーウィヤ・ビン・アブー・スフヤーンが巡礼を行った年にミンバルで（次のように）説教するのを聞いた。

その時彼は、彼の護衛の手にあった一束ねの頭髪を摺み「マディーナの人々よ、あなた方の学者達はどこにいるのか。

私はアッラーのみ使いがこのようなものを禁じられ『イスラエルの民が滅亡したのはこれを彼等の女達が用いるようになった時である』と申されるのを聞いた」と言った。

前述のハディース別伝承には「イスラエルの民は罰せられた」と述ぺられているものがある。

サイード・ビン・ムサイヤブは伝えている

ムアーウィヤがマディーナに来てわれわれに説教をした。

その時彼は一束ねの頭髪を取り出して「私は今まで、これをつける者はユダヤ人以外誰一人見ていない。

まこと、アッラーのみ使いにこの行為が知らされると、その御方はこれを“ズール（注）”と称された。

（注）ズール（زور zur）は虚偽、模造、見せかけ、ごまかし等の意である。

預言者がこれを禁止したのもこの言葉から理解出来そうである

サイード・ビン・ムサイヤブは伝えている

ムアーウィヤはある日「あなた方は良くない装いをし始めた。

まこと、預言者はズールを禁じられた」と言った。

折しも、ある男が杖を持ち布切れを頭に置いてやって来た。

ムアーウィヤは「見よ、これがズールである」と言った。

カターダは「それは婦人達が彼女等の髪に添える布切れを意味する」と言った。

体のある部分は隠すが、ある部分は美を誇張するたに露にし、
男性の心を良くないことに向けさせ、自らも悪に傾く女達について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「地獄に落ちる人達の中には、私の時代には無いが、（やがて出現する）二つのグループがある。
（その一つは）牛の尾のような鞭を持ち、それで人々を打つある集団の人々、
（他の一つは）体のある部分は隠すが、ある部分は美をひけらかすために露にし（男性の心を良くないことに）向けさせ、自らも悪に傾く女達である。
彼女等の頭はさながらラクダのこぶのように片方に傾いている。
彼女等は天国には入れないし、その芳香さえ知らないのだ。
まこと、その芳香はこれこれの方向より漂うのである」と申された。

誤魔化しの衣服を着用することは禁じられている

アーイシャは伝えている

ある婦人が「アッラーのみ使い様、私の主人が実際には私にくれていないのに、主人は私にはくれた、等と（私のダッラ（注）に）言っても良いものでしょうか」と言いました。
アッラーのみ使いは「与えられてもいない物（を与えられたかのように思わせ、それ）で満ち足りているかのようなふりをする者は、ズールの衣服を着用しているような者である」と申された。

（注)ダッラはイスラーム教徒で同一の夫をもつ妻達のこと

アスマーウは伝えている

ある婦人が預言者の所に参りまして「私の夫には複数の妻がございます。
それで、夫が私にくれてもいないお金（をくれたと偽って）満ち足りているかのようなふりをすることは罪悪なのでしょうか」と申しました。
アッラーのみ使いは「与えられてもいない物で、満ち足りているかのようなふりをする者は、ズールの衣服を着用しているような者である」と申されました。
前述のハディースは別の伝承者経路で伝えられているものもある。

礼儀の書

アブー・カーシムというクニヤ（注）で呼ぶことは禁止されている。
また、アッラーが好まれる名前に関して

（注）クニヤは現在でもよく耳にする呼称法で、誰々のお父さん、あるいはお母さん、
または“誰々の息子さん、あるいは娘さん”の如くに言う一種の人に対する呼び方で
ある。
アブー・カーシムは預言者のクニヤであるが、その御方の場合は単にカーシムという
息子があったというだけではない。
これにはアッラーから授けられた知識を広く知らしめる者、あるいは戦利品、ザカート
その他アッラーから授けられた物も公平に分配する者という意味も含まれている

アナスは伝えている

ある男がバキーウ（マディーナの墓地）で一人の男に「おおアブー・カ―シムよ」と呼んだ。
するとアッラーのみ使いがその男の方を向かれた。
彼は「アッラーのみ使いよ、私はあなたにお声を掛けたのではありません。
私はこれこれの者に呼び掛けたのです」と言った。
するとみ使いは「あなた方は私の名前を名付けるのはよいが、私のクニヤ（と同じクニヤ）
で呼ばれてはならない」と申された。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「まこと、あなた方の名前でアッラーが最も好まれる名はアブドッラー
とアブドル・ラフマーンである」と申された。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

われわれの友人に男の子が生まれた。
彼はその子をムハンマドと名付けた。
すると彼の仲間達は彼に「われわれは、君がアッラーのみ使いのお名前を子供に付けた
ことを黙認出来ない」と言った。
彼は即刻その子を背負って預言者の所に連れて来た。
そして「アッラーのみ使いよ、私に男の子が生まれまして、ムハンマドと名付けました。
すると私の友人達が『君が子供にアッラーのみ使いのお名前を付けたことは黙認出来な
い』と言ったのです」と告げた。

その時アッラーのみ使いは「あなた方は私の名前を名付けてもよいが、私のクニヤ（と同じクニヤ）で呼ばれてはならない。
それは、私があなた方に対し（アッラーより授ったものを公平に）分配する分配者であるからである」と申された。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

われわれの仲間の一人に男の子が生まれた。
彼はその子にムハンマドと名付けた。
そこでわれわれは「君がみ使いにこれに関して相談するまでは、君をアッラーのみ使いの御名前によるクニヤで呼ぶわけにはいかぬ」と言った。
それで彼はその御方を訪れ「私に男の子が生まれまして、その子にアッラーのみ使いのお名前を頂戴して命名致しました。
しかし私の近隣の者達は、これについて私が預言者に話すまでは、私をその名の付いたクニヤで呼ぶことを拒否しました」と言った。
その時、その御方は「あなた方は私の名前を名付けてもよいが、私のクニヤ（と同じクニヤ）で呼ばれてはならない。
私こそがあなた方の間に（公平に）分配する分配者として使わされた者であるから」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられているが、それには「私こそがあなた方の間に（公平に）分配する分配者として使わされた者であるから」という言葉は述べられてはいない

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は私の名前を名付けてもよいが、私のクニヤで呼ばれてはならない。
まこと、私こそが分配者であり、あなた方の間に（公平に）分配する者である」と申された。
アブー・バクルの話の中にも「あなた方は（私の）クニヤで呼ばれてはならない」というように述べられているが“クニヤで呼ぶ”という動詞が他と異なっている。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。
その中で“み使いは「私はあなた方の間に（公平に）分配する分配者として使わされた」と申された”と述べられている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アンサールの一人に男の子が生まれた。
彼は子供にムハンマドと名付けようとした。

それで預言者の所に来て（それについて）尋ねた。
するとその御方は「アンサール達は（私の意を理解して）良き処置をした。
あなた方は私の名前を名付けてもよい。
だが私のクニヤで呼ばれてはならぬ」と申された。

前述のハディースは、異った伝承者経路で伝えられているが、それらは言葉に僅少の相違がある。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

われわれの仲間の一人に男の子が生まれた。
彼はその子にカーシムと名付けた。
われわれは「君のことをアブー・カーシムというクニヤでは呼ばないし、（君がそのクニヤを採用したことでは）君を祝福もしない」と言った。
それで彼は預言者の所に来てそのことを話した。
するとその御方は「君の子をアブドル・ラフマーンと名付けよ」と申された。

前述のハディースの別伝承で“君を祝福もしない”という言葉が述べられていないものもある。

アブー・フライラは伝えている

アブー・カーシム（預言者のこと）は「あなた方は私の名前を名付けてもよいが、私のクニヤで呼ばれてはならぬ」と申された。
アムル（伝承者の一人）は「私はこの話をアブー・フライラから聞いたが、彼は『私は（アッラーのみ使いから直接に）聞いた』とは言わなかった」と述べた。

ムギーラ・ビン・シュウバは伝えている

私がナジュラーンに来た時、その地のキリスト教徒達が私に尋ねて「あなた方は（クルアーン第 19 章 28 節で）**「ハールーン姉妹（マリアを意図する）よ」**と読誦しているが（ハールーンの兄弟）モーゼはキリストよりずっと以前の方である。
（従ってマリアを“ハールーン姉妹よ”と言っているのは事実に反するのではないですか）」と言った。
そこで私はアッラーのみ使いの所に行った時、このことについてお尋ねした。
するとみ使いは「（マリア時代の）人々は、彼等以前に生きた預言者達や聖人達に因んで名付けられていたのである」と申された。

忌むべき名前、例えばナーフィウやそれに類似の名を付けることは好ましくない

サムラ・ビン・ジュンドブは伝えている

アッラーのみ使いはわれわれの奴隷に、アフラフ（成功した）、ラバーフ（利潤）、ヤサール（富裕）そしてナーフィウ（有益な）の四つの名前を付けることを禁じられた。

サムラ・ビン・ジュンドブは伝えている

アッラーのみ使いは「あなたの奴隷にはラバーフという名を付けてはならぬ。
また、ヤサールもアフラフもナーフィウもならぬ」と申された。

サムラ・ビン・ジュンドブは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーが最も好まれるお言葉は“アッラーに称えあれ”“アッラーに栄光あれ”“アッラーの外に神はない”“アッラーは偉大なり”である。
あなたがアッラーについて思い起す時、それをどの順序で唱えても害はない。
また、あなたの奴隷には絶対にヤサールという名を付けてはならぬし、ラバーフもナジーフ（ナーフィウと同意）もアフラフもならぬ」と申された。

前述のハディースは多くの伝承者経路がある。
それらには奴隷の名前に関することだけで、その他の話については述べられてはいない。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは、ヤアラー（高められた）、バラカ（祝福）、アフラフ、ヤサール、ナーフィフ等の命名の禁止を望まれた。
しかしその後、その御方はそのことについては触れず、何も言われなかった。
こうしてアッラーのみ使いは亡くなられてしまい、それらについては禁止されなかった。
次にウマルがそれの禁止を望んだが、（結局）彼もそれを放置した。

悪い名前を良い名前に変えるのば好ましい。
バッラという名前はザイナブやジュワイリヤ等に変えること

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは（ある女性の）アースィヤ（注）という名前を変えられた。
そして「あなた（の名）はジャミーラである」と申された。
アハマド（伝承者の一人）はこれを僅少の言葉の相違をもって伝えている。

（注）アースィヤとは"不従順な女性"という意味であるが、これはジャーヒリーヤ時代に付けられたもので、恐らくその意味は前述のものとは違って、その時代には歓迎された意をもっていたものと思われる。
なおジャミーラは"美しい女性"あるいは"善良な女性"の意である

イブン・ウマルは伝えている

ウマルにはアースィヤという名の娘があった。
アッラーのみ使いは彼女の名を"ジャミーラ"とお変えになった。

イブン・アッバースは伝えている

（預言者の妻の一人）ジュワイリヤは最初はバッラ（敬虔な、誠実なの意）という名前であった。
アッラーのみ使いは彼女の名をジュワイリヤにお変えになった。
それはその御方が「み使いはバッラの許から出て来られた」と言われるのを嫌悪されていたからである（注）。
このハディースは別伝承者経路では言葉に僅少の相違をもって伝えられているものがある。

（注）これについての理由はこの後三つ目のハディースに述べられている

アブー・フライラは伝えている

ザイナブ（という女性）は最初はバッラという名前であった。
すると彼女は「自ら（勝手に）敬虔な者であるとしている」と言われた。
それでアッラーのみ使いは彼女をザイナブと名付けられた。

ウンム・サラマの娘**ザイナブ**は伝えている

私の名は、最初はバッラといいました。
しかし、アッラーのみ使いが私にザイナブと名付けて下さいました。

ところでジャフシュの娘ザイナブがその御方の所に参りました。
彼女の名前も最初はバッラといいました。
それで、その御方が（彼女も）ザイナブと名付けられたのです。

ムハンマド・ビン・アムル・ビン・アターウは伝えている
私は私の娘にバッラという名を付けた。
するとアブー・サラマの娘ザイナブが私に「アッラーのみ使いはこの名前を禁じられました。
実は私も最初はバッラと名付けられたのです。
するとアッラーのみ使いは『あなた方はあなた方自らを（勝手に）敬虔な者であるなどとしてはならぬ。
アッラーはあなた方の中の敬虔な人々については誰よりも良く御存知である』と申されました。
その時彼等（教友達）は「われわれは彼女に何と命名致しましょう」と言った。
するとその御方は「彼女をザイナブと名付けよ」と申された。

王達の王と名付けることは禁止されている

アブー・フライラは伝えている

預言者は「アッラーの御許で最も卑しまれる名前の者は“王達の王”と名付けられた者である」と申された。

イブン・アブー・シャイバは彼の話の中で“その御方は「至高偉大なるアッラー以外に支配者はない」と申された”と付加している。

アシュアシーは「スフヤーンは『（ペルシャの）シャーハーン・シャーのように』と言った」と述べた。

アハマド・ビン・ハンバルは「私はアブー・アムルに“أخنع Akhna'u”の意について尋ねた。すると彼は『أودع Aw da'u（最も下劣な）の意である』と言った」と述べた。

アブー・フライラは伝えている

彼は多くのハディースを伝えているがその中の一つで、アッラーのみ使いは「復活の日、アッラーの最も厳しいお怒りを受け、懲罰を被る最悪人は“王達の王”と呼ばれていた者である。

アッラーを除いて王は無い」と申された。

**新生児には聖人賢者よりタハニークをしてもらうことが望ましい。
またその子供にはアブドッラー、イブラヒームその他預言者の名前を名付けるのが好ましい**

アナス・ビン・マーリクは伝えている

私はアブドッラー・ビン・アブー・タルハ・アンサーリーが生まれた時、彼をアッラーのみ使いの所に連れて行った。
その御方は羊毛の上着を召され、ラクダに液体樹脂(皮膚病の薬)を塗っておられた。
み使いは(私の用件を察し)「君はなつめ椰子の実を持っていますか」と言われた。
私は「はい」と答え、その実を幾つかその御方に差し出した。
み使いはそれを口に入れて噛まれ、幼児の口を開けてその口にお入れになった。
するとその子はそれをなめ始めた。
アッラーのみ使いは「(見なさい)アンサールはなつめ椰子の実を好む」と申され、彼をアブドッラーと名付けられた。

アナスは伝えている

アブー・タルハの息子は常々健康が優れないと言っていた。
アブー・タルハが旅に出た後、その子供は亡くなってしまった。
彼が帰った時「息子はどうしたか」と尋ねた。
(彼の妻)ウンム・スライムは「彼は(既に事切れて)以前より安楽にしております」と言った。
そして彼の所に夕食を運んで来た。
彼は夕食を済ませてから、妻と夫婦の交わりをもった。
その後彼女は「子供を埋葬する用意をして下さい」と言った。
朝になるとアブー・タルハはアッラーのみ使いの所に行き(彼の家の出来事を)その御方に告げた。
すると「あなた方は昨夜ベッドを共にしましたか」と申された。
彼は「はい」と言った。
その御方は「おおアッラー、彼等二人に祝福を垂れ給え」とお祈り下さった。
こうして彼の妻に男の子が授かったのであった。
アブー・タルハは私(アナス・ビン・マーリク)に「この子を抱いて預言者の所に連れて行ってくれ」と言った。
私はその子を預言者の所に連れて行った。
その時彼女はその子供と一緒になつめ椰子の実を持たせた。
預言者はその子を抱かれ「君は(タハニーク(注)のための)何か持っているか」と申された。
するとそこに居た教友達が「はい、なつめ椰子の実がございます」と言った。

預言者はそれをお取りになって噛まれた。
そしてそれを子供の口に入れ、それで子供の口蓋をこすられた。
その新生児はそこで、アブドッラーと名付けられた。

（注）タハニークの説明は前述したが、これは有徳の人物にハディースにあるような行為をしてもらうことで、子供に祝福があると考えられている

前述のハディースはアナスを根拠として、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・ムーサーは伝えている
私に男の子が生まれた。
私はその子を預言者の所に運れて行った。
その御方は彼にイブラーヒームと名前を付けて下され、なつめ椰子の実でタハニークをして下された。

ウルワ・ビン・ズバイルとファーティマ・ビント・ムンジル・ビン・ズバイルは伝えている
アスマーウ・ビント・アブー・バクルは（マッカからマディーナへ）移住した際、アブドッラー・ビン・ズバイルを身ごもっていた。
彼女がクバーウに着くと、そこでアブドッラーを出産した。
それから彼女はタハニークをしてもらうために子供をアッラーのみ使いの許に連れて行った。
み使いは彼女からその子供を抱き収り膝の上に置かれた。
その後、なつめ椰子の実をお求めになった。
アーイシャは（次のように）言った。
私達はなつめ椰子の実を見つけるまでしばらくの間そこに止まりました。
（それが手に入りますと）その御方はそれを噛まれました。
そしてそれを唾液と共に子供の口の中にお入れになりました。
まこと、最初に子供のお腹に入りましたのはアッラーのみ使いの唾液でした。
次にアスマーウは（次のように）言った。
それからその御方は子供をお撫ぜになり、祝福されてアブドッラーという名前を付けて下さいました。
この子が7才か8才になりました時、アッラーのみ使いに忠誠の誓いをしにその御方の所に参りました。
それは（父親の）ズバイルが子供に命じたのです。
アッラーのみ使いは息子がその御方の所に参上する様子を御覧になって微笑されました。
その日息子はその御方に忠誠の誓いを果しました。

アスマーウは伝えている

私はマッカでアブドッラー・ビン・ズバイルを妊娠しました。
それで私は臨月に（移住のためマッカを）出たのです。
やっとマディーナに着き、クバーウに泊りました。
そこで子供を産んだのです。
その後私はアッラーのみ使いの所に参りました。
その御方は子供を膝の上に置かれ、なつめ椰子の実をお求めになりました。
そしてそれを噛まれ、その御方の唾液を子供の口に入れました。
従って子供のお腹に最初に入りましたのはアッラーのみ使いの唾液です。
その後その御方はなつめ椰子の実でその子の口蓋をこすられました。
そして子供のために幸多からんことを祈願され、祝福して下さいました。
この子はイスラーム時代に入って最初に生を受けた子供でした。

アブー・バクルの娘**アスマーウ**は伝えている

私はアブドッラー・ビン・ズバイルを妊娠している時、アッラーのみ使いのおられる所に移住して行きました。
残余の話は前述のものと同一である。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いの許によく新生児が連れて来られました。
その御方は彼等を祝福され、なつめ椰子の実を噛まれ、それで子供達の口蓋をこすって上げておられました。

アーイシャは伝えている

私達はタハニークをしていただくために、アブドッラー・ビン・ズバイルを預言者の許に連れて参りました。
でもなつめ椰子の実を入手するのが大変困難でした。

サフル・ビン・サアドは伝えている

ムンジル・ビン・アブー・ウサイドは生まれた時アッラーのみ使いの許に連れて来られた。
預言者はその子を膝に置かれ、ウサイドはその側で（タハニークが終るのを待って）座っていた。
だが預言者は（子供を膝の上に置いたまま）御前の何事かに忙しくされていた。
アブー・ウサイドはアッラーのみ使いから自分の子供を退かせるよう命令じた。
人々はその子を取り退けた。
この時み使いは突然思い出されたように「幼児は何処か」と申された。

アブー・ウサイドは「アッラーのみ使いよ、われわれが退かせました」と言った。
するとその御方は「その子の名は何か」と申された。
彼は「アッラーのみ使いよ、何々です」と言った。
その御方は「いや、それはだめだ。彼の名はムンジルである」と申された。
このようにしてその日、その御方は子供をムンジルと命名して下された。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは何人も比肩し得ない、高潔な品性を供えておられた。
時に、私にはアブー・ウマイルと呼ばれていた（幼い）兄弟があった。
私は、彼は既に離乳されていたと思うがアッラーのみ使いがわが家に来られた時、彼を御覧になり「（やさしく）アブーウマイルよ、雀はどうしてしまったの」と申された。
彼はその時（死んだ）雀と遊んでいたのであった。

他人の子供に対して“我が息子よ”と呼びかけてもかまわない

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは私を「わが息子よ」とお呼びになった。

ムギーラ・ビン・シュウバは伝えている

私程にダッジャール（注）についてアッラーのみ使いにお尋ねした者は他には無い。

その御方は私に「わが息子よ、君はそれの何を心配するのか。

彼が君を害することはない」と申された。

私は「人々は、彼は水を湛えた多くの河川やパンの山々を所有していると主張しております」と言った。

その御方は「彼に言われているような事はアッラーにのみ可能なことであり、低級な能力の彼には、そのようなことは出来ないことである」と申された。

（注）ダッジャールは前述されている。

それは偽救世主のことで、この世の終末期に現れるとされている

前述のハディースは別伝承者経路で伝えられているがそれには言葉に僅少の相違がある。

他人の家に入る時の許可の求め方について

アブー・サイード・フドリーは伝えている

私はマディーナにあるアンサール達の集会所に座っていた。

そこへアブー・ムーサーが驚怖の体をなし、あるいは脅えてやって来た。

われわれは「どうしたのか」と言った。

その時彼は（次のように）話した。

ウマルが私に来るように使いを寄越した。

私は彼の家の入口に立って三度挨拶したが彼は応えなかった。

それで私は帰って来てしまった。

するとウマルは「何故来なかったのか」と言った。

私は「本当に、私はあなたの所に行きました。

そして入口の所で三度挨拶しましたが返事をする者はありませんでした。

それで私は帰ったのです。

アッラーのみ使いは『あなた方は誰でも三度許しを求め、それで許しが無い場合は帰るべきである』と申されました」と言った。

するとウマルは「君の言ったことについて証人を連れて参れ、さもなくば君に労役を課する」と言った（注）。

ウバイユ・ビン・カアブは「（そのような事柄では）人々の中で最も若い者以外は君の証人にはならないであろう」と言った。

するとアブー・サイードは「私が一番年少です」と言った。

（注）これはウマルがアブー・ムーサーを疑ってそのように言ったのではない。

彼が意図するところは、いやしくもハディースを伝える者は、たとえそれが良く知られていた話であっても厳格かつ慎重であるべきことを認識させることにあった。

なおこのハディースの内容は人々の間で良く知られていたために、最も年の若い者でも、その証人としては十分であるとされたのである

前述同様のハディースは別伝承者経路で伝えられている。

その中でイブン・アブー・ウマルは「アブー・サイードは『私は彼と共にウマルの所に行き証言した』と言った」という話を付加している。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

われわれはウバイユ・ビン・カアブの家の近くの集会所にいた。

そこへアブー・ムーサー・アシュアリーが怒ってやって来て立ち止った。

そして「私はアッラーに誓って、あなた方に御願いする。

あなた方の中の誰か、アッラーのみ使いが『許しを求めるのは三度だけ、それでもし許されれば（入れ）、さもなければ立ち去るがよい』と申されたのを聞いたでしょうか」と言った。
ウバイユは「それがどうしたというのか」と言った。
彼は「私は昨日、ウマル・ビン・ハッターブに（家に）入る許可を三度求めた。
しかし彼は私にそれを許さなかった。
それで私は帰ってしまった。
そして今日、私は彼の許に行き「私は昨日訪れ、三度挨拶し、（お声が無いので）帰りました」と彼に告げた。
彼は「確かにわれわれは君の声を聞いたが、その時は手が離せなかった。
だがどうして君は許しが得られるまでそれを請わなかったのか」と言った。
彼は「私はアッラーのみ使いからお聞きした（方法で）許しを求めたのです」と言った。
ウマルは「アッラーに誓い、もし君がそのことについての証人を連れて来ないなら、私は君の背や腹を打ち据えてやる」と言った。
ウバイユ・ビン・カアブは「アッラーに誓って、われわれの中で最も若い者でなければ君の証人にはならないであろう。
おおアブー・サイードよ、君が（証人に）立て」と言った。
それで私はウマルの所に来て「私はアッラーのみ使いが、その言葉を申されるのを聞きました」と言った。

アブー・サイードは伝えている

アブー・ムーサーはウマルの家の入口の所に来た。
そして（家に入る）許しを求めた。
するとウマルは「それで一度」と言った。
彼は二回目の許しを求めた。
ウマルは「それで二度」と言った。
彼は三回目の許しを求めた。
ウマルは「それで三度」と言った。
アブー・ムーサーはそれ以上許しを求めることなく帰ってしまった。
ウマルは彼の後を追わせ、連れ戻した。
そして「もし今の行為が、君がアッラーのみ使いよりお聞きして覚えていたことであるとしたら、その証人を連れて来るがよい。
さもなければみせしめとして君を厳罰に処する」と言った。

アブー・サイードは（次のように）言った。

それで彼はわれわれの所に来て「あなた方はアッラーのみ使いが『許可を求めることは三度だけ』と申されたのを御存知ではないか」と言った。

すると彼等は笑い出した（注）。
その時アブー・サイードは「ムスリムであるあなた方の兄弟が恐れて、あなた方に（支援の手を求めて）来たというのに笑っているとは（何事ですか）
よろしい、急いで行きましょう。
私がその罰をあなたと共に受けましょう」と言った。
それで彼はアブー・ムーサーに同行した。
彼は（ウマルに）「これは（証言に立つ）アブー・サイードです」と言った。

（注）教友達が笑ったのはアブー・ムーサーの言うハディースがよく知られたもので、ウマルの処罰などあり得ないという確信があったからである。
また、家に入る許可を求めるのは三度までについて、その第一回目は訪問者の来訪を示す挨拶、二回目は姓名を名乗って自己を明らかにするもの、三回目は同姓同名の者もあるのでこれをはっきりさせるための言葉、例えばクニヤ等を名乗るものである

前述同様なハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

ウバイド・ビン・ウマイルは伝えている
アブー・ムーサーはウマルの家に入る許しを三度求めた。
だが彼はウマルが（何かに）忙殺されているように思えたので帰ってしまった。
その時ウマルは（家族の者に）「君は今、アブドッラー・ビン・カイス（アブー・ムーサーのクニヤ）の声を聞かなかったか。
彼を家に入れよ」と言った。
それで彼は呼び戻された。
ウマルは「君が即刻帰ってしまったのにはわけがあるのか」と言った。
彼は「まこと、われわれはそうするように命じられて来ました」と言った。
ウマルは「よし、その証人を連れて来るがよい。
さもなくば君を厳罰に処する」と言った。
それで彼は急ぎ（アンサール達の）集会所へ行った。
彼等は「君の証言にはわれわれの中の最年少者以外には立たないであろう」と言った。
それでアブー・サイードが証言に立ち「われわれはそうするよう命じられておりました」と証言した。
ウマルは「私は市場での取り引きに気を奪われて（注）、今日までアッラーのみ使いの御命令であったこのことが、私の脳裏から薄れてしまっていた」と言った。

（注）日々の生活に忙殺されての意

前述のハディースは別伝承者でも伝えられている。
しかしそれには“市場での取り引きに気を奪われて”という言葉は述べられてはいない。

アブー・ムーサー・アシュアリーは伝えている

アブー・ムーサーはウマル・ビン・ハッターブの所に来て「アッサラーム・アレイクム、ここに参りましたのはアブドッラー・ビン・カイスです」
だが彼は入る許しを与えなかった。
そこで彼はまた「アッサラーム・アレイクム、ここにアブー・ムーサー（と彼のクニヤで名乗った）がお訪ねしています。
アッサラーム・アレイクム、ここにアシュアリーがお訪ねしています」と言った。
そして彼は帰ってしまった。
するとウマルは「彼を私の所に連れ戻せ、彼を私の所に連れ戻せ」と言った。
彼が戻って来るとウマルは「アブー・ムーサーよ、何故帰ってしまったのか、われわれには（手の離せぬ）仕事があったのだ」と言った。
彼は「私はアッラーのみ使いが『許しを求めるのは三度まで、それでもし許されれば（中に入れ）、さもなければ立ちさるがよい』と申されるのを聞きました」と言った。
ウマルは「よし、君はそれに対する証人を連れて参れ、さもなくば厳罰に処するであろう」と言った。
それでアブー・ムーサーは（教友達の）所に行ったのである。
ウマルは「もし彼が証人を見つけられれば、夕刻、あなた方は彼をミンバルの近くに見出すであろう。
だが、もし、彼が証人を見つけられなければ、彼はそこには居ないであろう」と言った。
夕刻になると、人々は彼が（その場所に居るのを）見た。
ウマルは「アブー・ムーサーよ、君が言ったことについて証人を見つけたか」と言った。
彼は「はい、（それは）ウバイユ・ビン・カアブです」と言った。
ウマルは「よろしい、彼は信頼出来る者である」と言った。
そして「アブー・トゥファイル（ウバイユのクニヤ）よ、彼が言っていることは何か」と言った。
ウバイユは「イブン・ハッターブ様、私はアッラーのみ使いがそのように申されるのを聞きました。
絶対に、アッラーのみ使いの教友に対し厳しいお仕打などなさいませんように」と言った。
ウマルは「アッラーに称えあれ、私もそれについてはある程度聞いてはいたが、確信を得たかったのだ」と言った。
前述のハディースは別伝承者でも伝えられている。
しかし、それでは（次の部分に）若干の相違がある
（すなわち）彼（ウマル）は「アブー・ムンジルよ、君はこれをアッラーのみ使いよりお聞きしたのか」と言った。

彼は「はい（聞きました）。
イブン・ハッターブ様、どうかアッラーのみ使いの教友に対し、厳しいお仕打ちなどなさいませんように」と言った。
だが、これにはウマルが言ったとする「アッラーに称えあれ」やその他の言葉は述べられてはいない。

訪問者は“どなたですか”と問われた時“私です”という答えをするのは好ましくない

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私はアッラーのみ使いをお訪ねしてお声を掛けた。

すると預言者は「誰か」と申された。

私は「私です」と言った。

するとその御方は「私です、私です、(とは何か)」と申されながら出て来られた(注)。

(注)前述のように、先ず挨拶の言葉を述べ、次に自分の姓名を名乗り、そしてなお相手が分らないと判断した時はクニヤを述べるのがイスラームの教える礼儀である

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私は預言者に、その御方の家に入る許可を求めた。

するとその御方は「誰か」と申された。

私は「私です」と言った。

み使いは「私です、私です(とは何か)」と申された。

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられているが、それらには言葉に若干の相違が見える

(すなわち)“その御方は「私です、私です」という言葉をお嫌いになっているようであった”(という部分である)

他人の家を覗くことは禁止されている

サフル・ビン・サアド・サーイディーは伝えている

ある男がアッラーのみ使いの家の戸の穴から覗き見をしていた。

その時、アッラーのみ使いは頭を掻く（櫛のような）道具を手にしておられた。

ややあってみ使いがその男に会われた時「もし私が、君が私を覗き見しているのを知っていたら、その道具で君の目を突き刺していたであろう」と申され、また「そもそも許可は視線を向けることのために置かれたのだ」と申された。

サフル・ビン・サアド・サーイディーは伝えている

ある男がアッラーのみ使いの家の戸の穴から覗き見をしていた。

その時アッラーのみ使いは頭を掻く道具を手にしておられた。

アッラーのみ使いはその男に「もし私が、君が覗き見をしているのを知っていたなら、君の目をこれで突き刺していたであろう。

アッラーは許可を視線を向けることのために置かれたのだ」と申された。

前述のハディースはサフル・ビン・サーイディーを根拠とし、言葉に僅少の相違をもって他経路でも伝えられている

アナス・ビン・マーリクは伝えている

ある男が預言者の部屋の一つを覗いていた。

その御方は幅広の鉄の矢じり、または数個のそれを手に取ってその男の所に立って行かれた。

私（伝承者）はアッラーのみ使いがそれでその男を突き刺すために立って行かれたのではないかと注目していた。

アブー・フライラは伝えている

預言者は「他人の家を許可なく覗き見する者の目はくり抜いても差し支えない」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「誰かが許可なくしてあなたを凝視し、あなたがその者に石を投げてその者の目を潰すようなことがあったとしても、あなたには罪は無い」と申された。

無意識の凝視について

ジャリール・ビン・アブドッラーは伝えている

私はアッラーのみ使いに無意識に（誰かを）凝視してしまった場合についてお尋ねした。するとその御方は、私が視線を直ちにそらすよう御命じになった（注）。

（注）このようなハディースを論拠として、多くの学者達は婦人が面を覆う必要はないと言っている。
しかし現在もそのような習慣が見られるのはスンナによるものである
前述のハディースは、他の伝承者経路でも伝えられている。

挨拶の書

乗り物に乗っている人は歩行者に、また小グループは大グループに最初に挨拶すること

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「乗り物に乗っている者は歩行者に挨拶し、歩いている者は座っている者に、また小グループは大グループに（最初に）挨拶をする」と申された（注）。

（注）少ない人数の方が挨拶の伝達を合わせ易いからであるとされる

歩道に座る場合は必ず挨拶を行うこと

アブー・タルハは伝えている

われわれが家の前に座って話していると、アッラーのみ使いが来られてわれわれの側にお立ちになった。

そして「あなた方は歩道に座って集会を開いているのはどういうことか。

歩道の集会は避けよ」と申された。

われわれは「しかしわれわれは（通行人の）迷惑にならないように座っております。

そして色々なことを回想し合い、また話し合っているのです」と言った。

するとその御方は「もし、その場所がどうしても必要であるなら、道路で果すべき義務は遵守せよ。

それは（凝視することを禁じられているものを見ないために）うつ向いたり、挨拶や良き言葉を交したりすることである」と申された。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は歩道に座らぬよう気をつけよ」と申された。

教友達は「アッラーのみ使いよ、われわれがここに座って話し合うことは避けられないのです」と言った。

み使いは「あなた方がどうしてもそこに座らねばならならないのなら、道路で果すべき義務は遵守せよ」と申された。

彼等は「その義務とは何ですか」と言った。

その御方は「見ることを禁じられたものから視線を転ずること、挨拶を交わすこと、そして善行を勧め、邪悪を禁止することである」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

ムスリムが他のムスリムに対して行うべきことは良き挨拶である

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「ムスリムが他のムスリムに対して行うべき正しい事柄は五つである。
（すなわち）挨拶を交わすこと、
誰かがくしゃみをした時は“ヤルハムカ・アッラー”（アッラーがあなたに御慈悲を垂れますように）と言い、それに対して“アルハムドリッラー”（アッラーに称えあれ）と応ずること、
病人を見舞うこと、
そして葬儀に参列することである」と申された。
アブドル・ラッザーク（伝承者の一人）は「このハディースはマァマルがムルサル（注）としてズフリーを根拠として伝えていた。
だが彼（ズフリー）は、一度は、イブン・ムサイヤブそしてアブー・フライラにさか上る伝承者経路を伝えていた」と言った。

（注）伝承者経路から何かの理由で、それを伝えた教友の名前が欠けてしまってはいるが、信頼に足るハディースのこと

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「ムスリムが他のムスリムに対して行うべき正しい事柄は六つある」と申された。
すると「アッラーのみ使いよ、それは何ですか」と言う声があった。
その御方は「あなたが彼（他のムスリム）に会った時は挨拶をすること、
彼が食事に招待したらそれを受けること、
彼があなたの助言を求めたらそれに応えること、
彼がくしゃみをしたら“ヤルハムカ・アッラー”と祈願し、彼は“アルハムドリッラー”と唱えること、
彼が病気になった時は見舞うこと、
そして彼が亡くなった時は葬儀に参列することである」と申された。

聖典の民に対してはムスリムからの挨拶は控えること、また、彼等に挨拶された場合の応答について

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは「聖典の民（注1）があなた方に挨拶した時は“ワ・アライクム（そして、あなた方の上にも)”と言うがよい」と申された(注2)。

（注1）聖典の民とはイスラーム教徒、キリスト教徒、ユダヤ教徒を指すが、ここでは後の二者を意味している

（注 2）ムスリム同士であれは“ワ・アライクムッサラーム”と応ずるが、この場合は“ワ・アライクム”とだけ言う

アナスは伝えている

教友達が預言者に「聖典の民達がわれわれに挨拶をしますが、彼等にはどのように応答するのでしょうか」と尋ねた。
その御方は「“ワ・アライクム”と言うがよい」と申された。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「ユダヤ教徒達があなた方に挨拶し、彼等の中の誰かが“アッサーム・アライクム（注）”（あなた方の上に死がありますように）と言うような場合は、“アライカ”（あなたの上にも）と言うがよい」と申された。

（注）これはムスリムに対する邪な心を持つ者の呪の言葉である

前述のハディースはイブン・ウマルを根拠とし、言葉に僅少の相違をもって他の伝承者経路でも伝えられている。

アーイシャは伝えている

一団のユダヤ人達がアッラーのみ使いに会う許可を求めに来て「アッサーム・アライクム（あなた方の上に死がありますように）」と言いました。
それで私は「あなた方の上にこそ死と呪いがありますように」と言ってあげましたわ。
するとアッラーのみ使いが「アーイシャよ、まこと、アッラーは全ての事柄に優しさを好まれる」と申されました。
私は「でも、あなたは彼等が言った言葉をお聞きになりませんでしたか」と言いますとみ使いは「私が既に“ワ・アライクム（注）”と言ったのを（お前は聞かなかったのか）」と申されま

した。

（注）これの原義は“あなた方の上にも”であるが、ここで意図されるのは“われわれもあなた方も皆死す定めにあり、それにおいては平等である”の意とされている

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられているが、その中でアッラーのみ使いは「私は既に“アライクム”と言った」と述べられているが“ワ・アライクム”の“ワ”は述べられてはいない。

アーイシャは伝えている

預言者の所に幾人かのユダヤ人が参りまして「アブー・カーセムよ、アッサーム・アライカ」と言いました。

その御方は「ワ・アライクム」と申されました。

私は「あなた方の上にこそ死とお咎めがありますように」と言ってあげましたわ。

するとアッラーのみ使いが「アーイシャよ、忌まわしい言葉を使ってはならぬ」と申されました。

私は「あなたは彼等が言ったことをお聞きになりませんでしたか」と申しますと「彼等があのように言った時、私は“ワ・アライクム”（そして、あなた方の上にも）と応答したのを（知らなかったのか）」と申されました。

前述同様のハディースは他にも伝えられている。
（それには）アーイシャは彼等の意図を理解し、彼等をののしった。
するとアッラーのみ使いは「これ、アーイシャ、まこと、アッラーは忌まわしき言葉や不潔な言葉は好まれない」と申された（と述べられている）
なお伝承者は「至高偉大なるアッラーは**「また彼等があなたの許に来た時、アッラーがあなたに対して決して挨拶されなかった言葉（死を意味する呪いの言葉など）で」**（クルアーン第 58 章 8 節）からその章の最後まで啓示されたと」いう言葉を付加している。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

ユダヤの人達がアッラーのみ使いに挨拶し「アッサーム・アライカ、アブー・カーセムよ」と言った。

するとその御方は「ワ・アライクム」と申された。

するとアーイシャが怒ってみ使いに「あなたは彼等が言ったことをお聞きにならなかったのですか」と言った。

その御方は「確かに私は聞いた。

それで彼等に応えたのだ。

まこと、われわれの彼等への呪いの祈願は聞きとどけられるが、彼等のわれわれへのそれは、聞きとどけられぬ」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「ユダヤ教徒やキリスト教徒にはあなた方の方から挨拶は行わぬこと、もしあなた方が道で彼等の一人に出合った時は（その者の安全を慮り）道路の端に寄らせるようにせよ」と申された。

前述のハディースは言葉に僅少の相違をもち他の別の伝承者経路で伝えられている。

一つには「あなた方がユダヤ人達に会った時」とあり、また別のものには“聖典の民に（会った時は）”と述べられ、別のでは「あなた方が彼等に会った時は」と述べられている。

だが“多神教徒”とは誰一人として述べてはいない。

子供達に挨拶の声を掛けるのは好ましいことである

イブン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いはたまたま、少年達の近くを通りかかられて、彼等に挨拶をされた。

このハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

サイヤールは伝えている

私がサービト・ブナーニ—と一緒に歩いていた時、子供達の側を通りかかった。

すると彼はその子供達に挨拶した。

サービトは（次のように）言った。

私がアナスと一緒に歩いていた時、子供達の側を通りかかった。

すると彼はその子供達に挨拶した。

アナスは（次のように）言った。

私がアッラーのみ使いと御一緒に歩いていた時、子供達の側を通りかかった。

するとその御方はその子供達に挨拶された。

カーテンが開かれているとか、これに類するサインによって家に入ることの許可を与えることに関して

イブン・マスウードは伝えている

アッラーのみ使いは私に「君は（私の家の）カーテンが開いているのを見るとか、あるいは私の静かに話す声を耳にした等の場合は、私が禁じない限りは家に入ってもよい」と申された（注）。

（注）これはイブン・マスウードの預言者への奉仕に対する特別の計らいとされる

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

女性が外に出て用を足すことについて

アーイシャは伝えている

ベールの着用が婦人に規制されてからのことでありました。

サウダは用を足すために外に出ました。

彼女は体格の良い女性で、女性達の間でも一際背が高く、彼女を知っている者なら（たとえ衣服で体全体を覆っていても）容易に判別出来ました。

それでウマル・ビン・ハッターブが彼女を見て「サウダよ、アッラーに誓って、われわれにはあなただと容易に見分けがつく。

それ故、外出する際には十分気を配るがよい」と言いました。

彼女（アーイシャ）は（次のようにも）言った。

それで彼女はアッラーのみ使いが私の家におられます所へ引き返して参りました。

その時み使いは夕食をとっておりまして、その御方の手には残り肉がついた骨が握られておりました。

彼女は入って来て「アッラーのみ使い様、私は外出致しました。

するとウマルが私に（これこれのように）申しました」と言いました。

その時、その御方に啓示（注）が下されました。

それが過ぎました時、例の骨はその御方の手に握られたままでした。

その御方は「まこと、あなた方が用を足すための外出は許可された」と申された。

アブー・バクル（イマーム・ムスリムに伝えた伝承者）の伝承には“彼女は女達の中でも並外れて背が高い”とある。

なおアブー・バクルは彼のハディースに“ヒシャームは「つまり屋外にあるトイレに行くことである」と言った”ということを付加している。

（注）啓示には二つの場合があるとされる。

その一つは言語による啓示、他の一つは、アッラーが人間の心の中に吹き込まれる示唆である。

このハディースの場合は後者である

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

その中では“彼女は人々の中でも並外れて背の高い女性であった”あるいは“まこと、その御方が夕食を取っておられると”という言葉になっている。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いの妻達が用を足す場合は夜、（マディーナの外れの）広々とした場所に出て行きました。

ウマル・ビン・ハッターブは日頃、アッラーのみ使いに「あなたの奥方達にベールの着用を遵守おさせ下さい」と進言しておりました。
しかしアッラーのみ使いはそうはされませんでした。
ある晩暗くなって、預言者の妻達の一人サウダ・ビント・ザムアが外に出ました。
彼女は背の高い女性でした。
その時ウマルが彼女に「サウダよ、われわれはあなただと直ぐ分った」と声を掛けましたが、これは彼が（この問題を深く憂慮し）ベールについての啓示を熱望しての行為なのです。
アーイシャはまた（次のようにも）言った。
それから至高偉大なるアッラーはベールに関する啓示を下されました。
前述のハディースは別の伝承者経路で伝えられている。

見知らぬ女性と二人だけになること、また、女性が一人でいる家に入ることは禁じられている

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは「結婚している女性の許には、彼女の夫または三親等の者以外泊ってはならぬ」と申された。

ウクバ・ビン・アーミルは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は（既婚の）婦人達の所には入らぬよう配慮せよ」と申された。
するとアンサールの一人が「アッラーのみ使いよ、夫の兄弟はどうなのでしょう」と言った。
この御方は「夫の兄弟は死である（注）」と申された。

（注）結婚した女性とその夫の兄弟との関係は、他のいかなる者以上に罪を犯し易い危険をはらんでおり、破滅（死）に結びつくの意

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

イブン・ワハブは伝えている

私はライス・ビン・サアドが（次のように）言うのを聞いた。
ハムウという言葉は夫の兄弟、または夫の近親者の中の誰かで、（例えば）従兄弟のような者である。

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースは伝えている

ハーシム家の幾人かがアスマーウ・ビント・ウマイスの家に入った。
ややあってアブー・バクルも入って行った。
アスマーウはアブー・バクルの妻であった。
彼は家に入った者達を見て（彼等が彼に無断で家に入ったことを）快く思わなかった。
彼はそれをアッラーのみ使いに話し「私は（私の妻には）全くやましいことは見ておりません」と言った。
アッラーのみ使いは「まこと、アッラーは、彼女は潔白であるとされた」と申された。
そしてその御方はミンバルに立たれ「本日以後、夫が不在の女性の所には誰か人を一人、あるいは二人伴わない限り絶対に入ってはならぬ」と申された（注）。

（注）これはアブー・バクルの単なる嫉妬から起こった話のようである

他人の妻または法的に結婚が禁じられている間柄の女性を伴っている場合は“これは誰々です”と素姓を明白にすることが好ましい

アナスは伝えている

預言者がその御方の奥方と一緒におられた時、一人の男が近くを通りかかった。

するとその御方は彼を呼んだ。

彼が近くに来ると「某よ、これは私の妻で名はこれこれである」と申された。

すると彼は「アッラーのみ使いよ、たとえ私が人を疑うようなことがあったとしても、あなたについては何も疑ってはおりません」と言った。

するとアッラーのみ使いは「まこと、サタンは人間の血管を循環し（悪い考えを起させようとし）ている」と言われた。

サフィーヤ・ビント・フヤィイーは伝えている

預言者がお籠りの行をされておりました。

私はその御方にお尋ねすることがありまして、夜伺いました。

そして私はその御方にお話しました後、帰るために立ちますとその御方は私を送って下さるために外にお出になりました。

その頃私はウサーマ・ビン・ザイドの家に住んでおりました。

折りしも、アンサールの男二人がその御方の側を通りかかりました。

そして預言者を見ると歩みを早めたのです。

預言者は「二人共落ち着いて歩くがよい。

この女性はサフィーヤ・ビント・フヤィイーである」と申されました。

するとその二人は「アッラーに称えあれ、アッラーのみ使いよ（われわれはあなたに関して疑いなど微塵も抱いてはおりません）」と言った。

その御方は「サタンは人間の血管の中を循環している。

私はそれがあなた方の心に悪い（または何かの）考えを起させはしないかと懸念したのだ」と申された。

預言者の妻**サフィーヤ**は伝えている。

私はラマダーンの月末の 10 日間に、預言者がマスジドでお籠りの行をされておられた時、その御方を訪問致しました。

そしてその御方の許で一時間程お話しました。

それから帰るために立ちました。

預言者も私を送るために立たれました。

残余のハディースは前述のものと同一である。

しかしこれには“預言者は「まこと、サタンは血液が体の隅々まで行き渡るように人間の

（体のいずこにも）入り込んでいる」と申された”と述べてはいるが“循環している”とは述べられてはいない。

集会に来た者は、人々の間に場所を見つけた場合はそこに座り、見出せない場合は,後部に座るべきこと

アブー・ワーキド・ライスィーは伝えている

アッラーのみ使いが人々と一緒にマスジドに座っておられた時、三人の男が入って来た。
そしてその中の二人はアッラーのみ使いの方に近づき、他の一人は（別の方向に）行った。
例の二人はアッラーのみ使いの側に立ち、その中の一人は輪状に座った人々の間に場所を見つけて座った。
もう一人は人々の後に座った。
三人目の男については、彼は背を向けて立ち去ってしまったのであった。
アッラーのみ使いが用事をまされた時「諸君、私はあなた方に是非三人のグループについて告げねばならぬ。
彼等の一人はアッラーの御許に避難した。
それでアッラーは彼を保護された。
他の一人は恥しがった。
それでアッラーは彼の内気さに同情された（それで彼はその集会に加えられた）。
ところで最後の人は元の方向に戻ってしまった。
それでアッラーは彼から注意をお逸らしになられた」と申された。

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

先着の者が自由な場所に座っているのを立たせ、そこに座すようなことは禁じられている

イブン・ウマルは伝えている

預言者は「あなた方は誰でも（先に来て）座っている者を立たせ、その場所に座すようなことをしてはならぬ」と申された。

イブン・ウマルは伝えている

預言者は「人は、（先に座っている）人を立たせ、そしてその場所に座るようなことをしてはならぬ。

そのような時は（互いに詰め合って、座れる）余地をつくるがよい」と申された。

前述のハディースはイブン・ウマルを根拠とし、異った伝承者経路でも伝えられている。
しかしそれらには「そのような時は（互いに詰め合って、座れる）余地をつくるがよい」という言葉は述べられてはいない。
なおイブン・ジュライジュのハディースには“私は「（それは）金曜日にですか」と言った。
イブン・ウマルは「金曜日も、その他の日においても」と言った”が付加されている。

イブン・ウマルは伝えている

預言者は「あなた方は誰でも、あなた方の同胞を立たせ、そしてその場所に座るようなことをしてはならぬ」と申された。
それでイブン・ウマルは誰かが彼のために立って場所を譲ってもそこに座ることはなかった。

前述のハディースは別伝承者経路で伝えている。

ジャービルは伝えている

預言者は「あなた方は誰でも、金曜日（の合同礼拝の折、先に来て座っている）同胞を立たせてその場所に座るようなことがあってはならぬ。
その時は一言“場所を広げて下さい”と言うがよい」と申された。

人が座っていた場所を立ったとしても、彼が再び戻ってくれば、その場所の占有権利は前者にある

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方の誰かが立った時でも」と申された。

（これについて）アブー・アワーナのハディースに「先に座っていた者がその場所を立っても、再びそこに帰って来た場合は、前者にその場所の占有権はある」というみ使いの言葉がある。

男女（おとこおんな）も見知らぬ女達の所に入ることは禁じられている

ウンム・サラマは伝えている

アッラーのみ使いがウンム・サラマの家に来られた時、彼女の所に男女が居た。

彼はウンム・サラマの兄弟に「ねえアブドッラー・ビン・アブー・ウマイヤ、もしアッラーが明日、ターイフであなた方に勝利をお与え下さったら、私があなた方にガイラーンの娘をお見せしますわ。

彼女は（大変肥えていて）おなかは四重に、また背中は八重になっておりますわよ」と言った。

アッラーのみ使いはそれをお聞きになられ「そのような者があなた方の所に入ってはならぬ」と申されました。

アーイシャは伝えている

預言者の妻達の所に男女が来ておりました。

皆、彼のことを性的不能者と見ておりましたので彼の訪問を拒みませんでした。

ある日、預言者が入って来られた時、その者がみ使いの妻の一人の所におりまして、ある婦人（の体）について（次のように）話しておりました。

「彼女が近づいて来ると四重になったおなかが見えるの、また後を向けば八重になった背が見えるわ」と言った。

すると預言者は「私はこの男が、そのような事柄を知っているということが確かに分った。故に彼をあなた方の所に絶対入れてはならぬ」と申されました。

それで皆、彼を遠ざけました。

見知らぬ女性でも道で疲労困ぱいしていた場合は乗り物の後に乗せてもよい

アブー・バクルの娘**アスマーウ**は伝えている

ズバイルと私は結婚しました。
その時彼はこの地で、馬を除けば（財産と言えるものは）お金も奴隷も、またそれに類するものは何一つ所有しておりませんでした。
それで私はその馬に餌を与え、その飼い葉を用意して世話をしておりました。
これに加え、私は水を運ぶラクダのためになつめ椰子の種を砕き、飼を与え、水を飲ませておりました。
また皮の水袋を縫い、粉をこねることも致しました。
でも私はパンを焼くことは上手ではありませんでした。
それでアンサールの婦人方が私のためにパンを焼いてくれたのです。
彼女達は誠実な女性でした。
それから彼女は（次のようにも）言った。
私はアッラーのみ使いがお与え下さったズバイルの土地でなつめ椰子の種子を拾い集め、それを私の頭の上に乗せて運んでおりました。
その地はマディーナから 2 マイルの距離の所にありました。
ある日のこと、その種子を頭に乗せて運んでおりますと幾人かの教友達と御一緒のアッラーのみ使いにお会いしました。
その御方は私を呼び止められました。
そして私をその御方の後に乗せて下さるためにラクダを座らせました（私はこのことを私の夫に告げました）。
そして「私は恥しく思いましたし、あなたが嫉妬することも知っておりました」と言った。
すると彼は「アッラーに誓い、君がなつめ椰子の種子を頭で運ぶことは、君がその御方と一緒に（乗り物に）乗ること以上に（私にとっては）つらいことである」と言いました。
（私のこのような辛い生活は）その後、（父）アブー・バクルが私に女性の召し使いを送ってくれるまで続きました。
それからは彼女が馬の世話を私に代ってしてくれました。
それで私は彼女によって、あたかも（奴隷の身から）解放されたかのような感じを受けました。

アスマーウは伝えている

私は（妻として）ズバイルに内助の功を厭いませんでした。
所で彼は馬を持っておりまして、私がその世話をしておりました。
その馬の世話程、私にとって辛い仕事はありませんでした。

私はずっとそれの飼を運び世話をして来たのです。
その後私は召し使いを得ました。
アッラーのみ使いの許に捕虜になった者達が連れて来られたのです。
それでその御方は（その中から）女性の召し使いを私に下されたのです。
彼女は私に代って馬の世話をし、その労苦から私を解放してくれました。
時に一人の男が私の所に来て「アブドッラーのお母さん、私は大変貧しい者です。
それで私はあなたの家の涼しい陰をお借りして商いをしたいのです」と言いました。
私は「たとえ私がそれをあなたに許したとしても、ズバイルが拒否するかも知れません。
それで彼が居ります時に来てそれを頼みなさい」と言いました。
彼は（私の言葉に従って再び）やって来ました。
そして「アブドッラーのお母さん、私は大変貧しい者です。
それで私は御宅の涼しい陰をお借りして商いをしたいのです」と言いました。
私は「でも、あなたにとってこのマディーナに私の家の陰以外に（商いをする場所は）無いのですか」と言いました。
するとズバイルが「お前が何故、この貧しい方の商いを拒むのか」と言いました。
こうして彼は商いを始め可成の利益を得ました。
それで私達は例の召し使いを売ったのです。
私がその代価を懐にしておりました時、ズバイルが私の所に来まして「それを私にくれ」と言いました。
私は「まこと、それはサダカとして使用してしまいました」と申しました。

三人でいた時はその中の一人を除外し、その者の許しも得ずに二人だけでひそひそ話すことは禁じられている

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「三人でいた時は、その中の一人を除外し二人だけでひそひそと話し合ってはならない」と申された。

前述のハディースはイブン・ウマルを根拠として、多くの別伝承経路で伝えられている。

アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方が三人でいる時は、他の人々と一緒になるまでは、友人の一人を除外して二人だけでひそひそと話し合ってはならない。
それは彼の心を傷つけるからである」と申された。

アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方か三人でいる時は、友人の一人を除外して二人だけでひそひそと話し合ってはならぬ。
まこと、そのような行為は彼の心を傷つけるものである」と申された。
前述のハディースは別伝承者経路で伝えられている。

治療、病、邪視について

預言者の妻**アーイシャ**は伝えている

アッラーのみ使いが病気になられますと、ガブリエルがその御方にお会いになって「アッラーの御名において、アッラーがあなたを全ての病気から癒やされますように、そして嫉妬する者の嫉妬から、また、全ての邪視からあなたをお守り下さいますように」と唱えました。

アブー・サイードは伝えている

天使ガブリエルが預言者の所に来て「ムハンマドよ、あなたは病気になったのですか」と言った。
その御方は「はい」と言われた。
天使は「アッラーの御名において、私があなたを害するもの全てから、そして（邪念をもった）者からの害悪、あるいは妬みによるあらゆる災厄を払って上げます。
アッラーがあなたを癒やして下さいますように、そして私はアッラーの御名においてあなたの（平癒を）祈願します」と言った。
アブー・フライラが伝えた多くのハディースの中には（次のようなものが）ある。
アッラーのみ使いは「邪視（注）（が災禍を招くこと）は真実である」と申された。

（注）邪な心をもつ者に凝視された者には災禍が起こるという考え方

イブン・アッバースは伝えている

預言者は「邪視（が災禍を招くこと）は真実である。
全ての事柄は運命づけられているもので（それらはアッラーの御決定によってのみ起る）。
邪視の災厄も（その他、善事も悪事も）アッラーのお定めによってのみ起るのである。
それで、あなた方が（邪視の影響を取り除くため）身を清めることを求められた時は沐浴をせよ」と申された。

呪術(注)について

(注)アラビアの古い魔法や呪術は、呪文を特定の物の上に書き、あるいはその物に呪いを託して何処かに隠すことによって効果かあると信じられている。
一方、呪いをかけられた者は例の物を探し出すことによってその魔力は消失すると考えていた

アーイシャは伝えている

ズライク族のユダヤ人の一人、ラビード・ビン・アァサムという者がアッラーのみ使いに呪術をかけました。
アッラーのみ使いはその影響を懸念されましたが、別に何もございませんでした(しかしこの問題について不安は続きました)。
それである日も、ある夜もアッラーのみ使いは(その災厄をはらうために)祈られました。
そしてその後も祈願されておられました。
更にその後も祈願されました。
この後その御方は私に(次のように)申されました。
アーイシャよ、お前はアッラーが私の祈願にお応え下さったことについて気付いたであろうか。
(夢の中で)私の所に二人の男性(天使)が訪れ、一人は私の枕許に座り、他の一人は足許に座った。
そして枕許に座った者が他の一人に、あるいは足許に座った者が他の一人に「この者(預言者)は何故苦しんでいるのですか」と言った。
すると他の一人が「呪術にかけられたのです」と言った。
(この後、二人の天使の間には次のような会話があった)
「それをかけたのは誰ですか」
「ラビード・ビン・アァサムです」
「彼は何に呪を託したのですか」
「それは櫛と抜け落ちた毛、それになつめ椰の仏焔苞(ぶつえんほう)です」
「それは何処に隠されたのですか」
「ジー・アルワーンの井戸(注1)です」
(これを知って)アッラーのみ使いは教友達と一緒にそこへ行かれました。
その御方は私に「アーイシャよ、アッラーに誓って、そこの水はあたかもヘンナ(注 2)を浸したように赤く、その椰子の木はサタンの頭の如くであった」と申されました。
私は「アッラーのみ使い様、あなたはそれをお焼きにならなかったのですか」と申しました。
その御方は「いや(そのようなことは望まぬ)
私のことはアッラーが既に救済して下された。

私は人々に（報復のための）邪悪な行為を煽り立てるようなことは好まなかったのだ。
それで私は（それを埋めるように）命じ、それは埋められたと」申されました。

（注 1）マディーナの、ズライク族所有の庭園にあった井戸

（注 2）ヘンナは赤い染料に使用される植物

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いに呪術がかけられました。
残余のハディースは前述のものと同様であるが、次の部分が若干異なる
（すなわち）アッラーのみ使いはその井戸に行かれ、それを御覧になった。
その側にはなつめ椰子の木がありました、私は「アッラーのみ使い様、それを抜き倒してしまわれたら」と申しました。
だが伝承者は“あなたはそれをお焼きにならなかったのですか”という言葉や「私は（それを埋めるように）命じ、それは埋められた」という言葉は述べなかった。

毒に関して

アナスは伝えている

ユダヤの女性がアッラーのみ使いに毒を塗った羊肉を持って来た。

その御方はそれの一部をお食べになった。

（そしてその影響が現れた時）その女性がアッラーのみ使いの所につれて来られた。

その御方は彼女にそれについてお尋ねになった。

彼女は「私はあなたを殺そうと思ったのです」と言った。

み使いは「アッラーは、そのようなことに対しては、決して力をお与えにはならぬ」と申された。

アナスは、その御方は、あるいは「私に対しては」と申された（かも知れない）と言った。

また（次のようにも）言った。

教友達は「われわれがその女を殺してはなりませんか」と言った。

み使いは「ならぬ」と申された。

私は未だにアッラーのみ使いの口蓋に現れた毒の影響を覚えている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

ユダヤの女性が肉に毒を塗ってアッラーのみ使いの所に持って来た。

残余のハディースは前述と同様である。

病人の治療のために、まじないの言葉を唱えるのは良いことである

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは私達の誰かが病気になますと、右手で病人を摩（さす）られました。
そして「人々の主よ、不幸を追い遣って下さい。
病人を癒やして下さい。
あなたこそが真実の治療者、あなたからの治癒こそが真実であり完全なものでございます」と申されました。
時に、アッラーのみ使いが御病気になられ大変苦しんでおられた折、私はその御方がなさっていたようにするため、み使いの手を取りました。
するとその御方は御自分の手を私の手から引き離されました。
そして「アッラー、私をお許し下さい。
願わくば私を至高なる御方と共に在るようお計い下さい」と申されました。
私はずっとその御方を見守っておりましたが、そこでその御方は息を引き取られました。

前述のハディースは別伝承者経路で伝えられている。
あるものは“その御方は病人をその御方の手で摩られた”と述べ、また、あるものは“その御方は病人をその御方の右手で摩られた”と述べられている。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが病人の所に行きますと「人々の主よ、不幸を追い遣って下さい。
病人を癒して下さい。
あなたこそが真実の治療者、あなたからの治癒こそが真実であり完全なものでございます」と申されました。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが病人の所に行きますとその者のことを祈願され「人々の主よ、不幸を追い遣って下さい。
病人を癒やして下さい。
あなたこそが真実の治療者、あなたからの治癒こそが真実であり完全なものでございます」と申されました。

前述のハディースはアーイシャを根拠とし、言葉に僅少の相違をもって、別の伝承者経路でも伝えられている。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは常々「人々の主よ、不幸を追い遣って下さい。

治癒はあなたのお力によるものです。

病人のための救済はあなたによる以外にはありません」という祈願の言葉を述べておられました。

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

病人へのまじないの言葉はムアッウィザート（注）と息を吹きかけることである

（注）ムアッウィザートは、神の御加護を祈願するためのもので、ここではクルアーン第 113 章や第 114 章を指している

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは家族の者が病気になりますとムアッウィザートを唱えられ、穏やかに息を吹きかけられました。
その御方が死の病に伏された時、私がその御方に息を吹きかけ、その御方の御手を取ってそれで摩って差し上げました。
と申しますのも、その御手は私の手以上に祝福されていたからです。

アーイシャは伝えている

預言者が病気になられますと、御自身でムアッウィザートを御自分に対して読誦され、そして息を吹きかけておられました。
その御方の病が重くなった時、私がそれを読誦し、その御方の御手を取り、それの祝福を祈願して摩って上げました。
前述のハディースは言葉に若干の相違をもって、異った伝承者経路で伝えられている。
しかし、それらの中にはマーリクのハディースを除き、“それ（み使いの手）の祝福を祈願して”という言葉は見えない。
また、ユーヌスとジヤードのハディースには“預言者が病気になられると、御自身の上に祈願の言葉を唱えて息を吹きかけ、御自分の手で摩っておられた”と述べられている。

邪視の災厄を受けたり、蟻やさそりの毒におかされた場合は、まじないをして癒すのは良い

アブドル・ラフマーン・ビン・アスワドは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いはアンサールの家族に、毒性のもの全ての治療にはまじないをすることを許可された（注）。

（注）これは、まじないとは言え、クルアーンの一節を唱えるようなものであり、一種の心理的療法と考えられる

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いはアンサールの家族に対し毒性によるものの治療にまじないをすることを許可されました。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは誰かが病気になったり、潰瘍が出来たり、あるいは傷を負った場合には、その御方の指をこのようにされ
ーこれについて伝承者スフヤーンは彼の人さし指に（唾をつけ）それを大地に置いた後、上に揚げたー
「アッラーの御名において、われわれの何人かの唾で付いたわが大地の土は、われらが主の御許しによってわれわれの病が癒やされるのに役立つであろう」と申され（それで患部をお撫ぜになりました）
イブン・アブー・シャイバは"癒やされる"とだけ言ったが、ズハイルは"われわれの病が癒やされるのに"と言った。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いはアーイシャが邪視の災厄に会った時、その治療にまじないを頼むよう、彼女に御命じになった。

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、私が邪視の災厄に会った時、まじないを頼むよう、私に御命じになりました。

アナス・ビン・マーリクもまじないに関して伝えている

さそりの毒や蟻にかまれた場合、また邪視の災厄などにはまじないによって癒すことが許された。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは、邪視の災厄やさそりの毒、あるいは蟻にかまれた場合などの治療に、まじないをすることを私に許可された。

ウンム・サラマの娘**ザイナブ**はウンム・サラマを根拠として伝えている

アッラーのみ使いは、その御方の奥方ウンム・サラマの家の下女の顔色が異常なのに気が付かれた。
その御方は「彼女は邪視の災厄にかかっている。
故に彼女のためにまじないをしてその災厄を払うように」と申された。
つまりこの時、下女の顔色は黄味を帯びていたのである。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者はハズム一族に対し、蛇の毒を軽減するためにまじないをすることを許された。
そしてウマイスの娘アスマーウに「私は私の兄弟の子供達がやせ細っているのを見るが、どうしたことなのか。
彼等は腹を空かせているのか」と申された。
彼女は「そんなことはございませんが、彼等は邪視の災厄にかかっているのです」と言った。
すると「彼等にまじないをせよ」と言われた。
彼女は「それで私はまじないの言葉をその御方の前で唱えました」と言った。
するとその御方は「そう、そのまじないを彼等のために用いよ」と申された。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者はアムル族に対し蛇の毒に対して、まじないをすることを許可された。
アブー・ズバイルは（次のように）言った。
私はジャービル・ビン・アブドッラーが「われわれがアッラーのみ使いと御一緒に座っていた時、仲間の一人がさそりに刺された。
すると一人の男が『アッラーのみ使いよ、私がまじないをいたしましょうか』と言った。
するとその御方は『あなた方の中で同胞のために役立てる者が（それを）すべきである』と申された」というのを聞いた。

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられているが、それには言葉に僅少の相違がある。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私の母方のおじはサソリに刺された場合にはまじないをしていた。

するとアッラーのみ使いはそのまじないを禁じられた。

彼はその御方の所に来て「アッラーのみ使いよ、あなたは私がさそりに刺されてまじないをしている時、それを禁じられましたが」と言った。

するとその御方は「あなた方の中で同胞のために役立てる者がそれをすべきである」と申された（注）。

（注）まじないの言葉の中に非イスラーム的なものが多少でもあれば、それは許可されない。

つまり、このハディースにある男性のまじないにはそのような言藁があったと考えられる

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いはまじないを禁じられた。

すると、アムル・ビン・ハズムの一族がその御方を訪れ「アッラーのみ使いよ、われわれにはまじないの言葉かあって、さそりに刺された場合などにそれを行っていました。

しかしあなたはそれを禁じられました。

（それはどうしてでしょう）」と言い、彼等が使用しているまじないの言葉をその御方の前で唱えてお聞かせした。

するとみ使いは「（それについての使用は）差し支えないであろう。

故に、あなた方の中で同胞のために役立てる者がそれを役立てよ」と申された。

まじないの言葉の中に多神教についての事柄が無ければ、それを使用して差し支えない

アウフ・ビン・マーリク・アシュジャイーは伝えている

われわれはジャーヒリーヤ時代にまじないをしていた。

われわれはこれについて「アッラーのみ使いよ、そのことについてどのように思われますか」とお尋ねした。

するとその御方は「あなた方のまじないの言葉を私の前で唱えて見よ」と申され、更に「それに多神教についての何かが無ければ差し支えない」と申された。

クルアーンの言葉をまじないに使用した際、その行為に対する報酬を受けてもよい

アブー・サイード・フドリーは伝えている

幾人かの教友達が旅をしていた。

彼等がアラブの一部族の所に差し掛った際、その部族の人々の世話を受けようとしたが、彼等は教友達をもてなしてはくれなかった。

そして「あなた方の中にまじないをする方がおりますか、実は、族長がさそりに刺されて苦しんでいるのです」と言った。

すると教友達の一人が「よろしい」と言ってその族長の所に行き、クルアーンの開端章をまじないの言葉として使用した。

するとその男の苦しみは癒えた。

まじないを行った教友は（その礼として）一群の羊を贈られたが「この事柄をアッラーのみ使いにお話しするまでは」と言って受け取らなかった。

その後彼は預言者の所に来てその話をし「アッラーのみ使いよ、アッラーに誓って、私はただ開端章をまじないの言葉として使用しただけです」と言った。

その御方は微笑されて「君はどうしてその章がまじないの言葉としても使用されることを知ったのか」と言われ、続けて「それ（羊群）を受け取るがよい。

そして、あなた方の分け前と一緒に私の分も配慮せよ」と申された（注）。

（注）このハディースの最後の言葉は、明るい雰囲気の中で出た預言者のジョークと考えられている

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられているが、その中に"彼はウンム・ル・クルアーン（開端章のこと）を読誦し、彼の唾液を溜めて吐き出した。

するとその男は癒えた"と述べられているものもある。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

われわれはある家に泊った。

すると一人の婦人がわれわれの所に来て「族長様がさそりに刺されました。

それで、あなた方の中にまじないをする方はおありでしょうか」と言った。

すると仲間の一人が立ち上ったが、われわれは彼が（本当に）まじないの言葉に通じているとは思っていなかった。

彼はクルアーンの開端章によってまじないを行った。

るとその男は癒え（その礼として）彼に幾頭かの羊を贈り、われわれにミルクを飲ませてくれた。

われわれは彼に「君は以前からまじないが上手だったのか」と言うと「私はクルアーンの開端章以外に、まじないの言葉は言わなかった」と言った。
私（伝承者）は「われわれが預言者の所に行って（この話をお伝えするまでは）その羊を移動させてはならぬ」と言った。
（これについて）その御方は「彼はどうしてその章がまじないの言葉としても使用されるのを知ったのであろうか。
あなた方はそれを分け、私の分も配慮せよ」と申された。
前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられているが、その中に“仲間の一人は立ってその女性と一緒に行った。
われわれはそれまで、彼がまじないの言葉を知っているなどとは思いもよらなかったことであった”と述べられているものがある。

アッラーへの祈願に合わせ、体の痛い部分に手を置くことが好ましい

ウスマーン・ビン・アブー・アース・サカフィーは伝えている

彼はアッラーのみ使いに痛みによる苦しみをうったえたが、それは彼がイスラームに帰依して以来ずっと悩んでいたものであった。

アッラーのみ使いは彼に「君の手を体の痛い部分に置き、先ず“ビスミッラー”と三回唱え、そして更にأعوذ بالله و قدرته من شر ما أجد و أحاذر

A’udhu billahi wa qudratihi min sharri ma ajidu wa uhadhiru

（私は私が知りかつ用心している禍からの救済を、アッラーとその御力にお求め致します）

と7回言え」と申された。

礼拝においてサタンの囁きがあった場合は、アッラーに救済を求めるのがよい

ウスマーン・ビン・アブー・アースは伝えている

私は預言者の所に行き「アッラーのみ使いよ、まこと、サタンが私の礼拝、クルアーンの読誦を妨げ、私を混乱させます」と言った。

するとアッラーのみ使いは「それはヒンザブと言われているサタンの所業である。

君がそれを感じたなら、それから逃れられるようアッラーに救済をお求めせよ。

そして君の左側に三度、唾を吐くがよい」と申された。

それで私はそのようにした。

するとアッラーはサタンを私から追い払って下された。

ウスマーン・ビン・アブー・アースは伝えている

私は預言者の所に行った。

残余のハディースは前述と同様であるが、サーリム・ビン・ヌーフのハディースには“三度”という言葉は述べられてはいない。

前述のハディースはウスマーン・ビン・アース・サカフィーを根拠として他にも伝えられているが、それらは言葉に僅少の相違がある。

どのような病にもそれに効く薬がある。それ故適切な薬を用いることである

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは「どのような病にも薬はある。
それ故、その病に合った薬が用いられれば、至高偉大なるアッラーのお許しで癒える」と申された。

ジャービルは伝えている

私はムカンナウを見舞いに訪れた。
そして「私は君が吸角（注）を掛けるまでは去らぬ。
まこと私はアッラーのみ使いが『それをすると治癒する』と申されたのを聞いたのだ」と言った。

（注）悪血の膿汁などを吸い取る一種の外科手術

アーシム・ビン・ウマル・ビン・カターダは伝えている

われわれの家族の所に（たまたま）ジャービル・ビン・アブドッラーと腫瘍、あるいは傷に苦しんでいる男が来合わせた。
彼（アブドッラー）は「あなたは何に苦しんでおいでですか」と尋ねた。
その男は「私には腫瘍が出来ておりまして、それがとても辛いのです」と言った。
すると彼は少年に「君、ここに吸角法施術者を連れて来なさい」と言った。
すると例の男は「アブドッラーよ、あなたはそれでどうしようとなさるのか」と言った。
彼は「私はそれ（腫瘍）に吸角を掛けようと思いまして」と言った。
彼は「とんでもない、ハエが止っても痛む（または衣服の触れも痛い）のに、私はそれにはとても耐えられない」と言った。
彼はその男が吸角法を嫌がっているのを見て「私はアッラーのみ使いが『もしあなた方の治療の中に有効なものがあるとすれば、それは吸角法、蜂蜜を飲むこと、それに、火による焼灼である』と申され、更に『私としては焼灼は好まない』と言われるのを聞いた」と言った。
それで吸角法施術者が連れて来られ、彼の皮膚に浅い傷をつけ（悪血を放出した）すると彼の痛みは引いた。

ジャービルは伝えている

ウンム・サラマはアッラーのみ使いに吸角法を行う許可を求めた。
すると預言者はアブー・タイバに、彼女のため吸角を掛けて血を取るように御命じになった。

ジャービルは「私は、アブー・タイバは彼女の乳姉弟、あるいは成人には達していない子供であったと思う」と言った。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いはウバイユ・ビン・カアブに医者を送られた。

その医者は彼の血管を切り焼灼を行った。

アアマシュ（途中伝承者の一人）もこのハディースを伝えているが、彼は“その医者がウバイユの血管を切った”ということについては述べていない。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

ウバイユはアフザーブの戦（注）で腕の正中静脈に矢傷を負った。

するとアッラーのみ使いは彼に焼灼を施された。

（注）クライシュ族を主体とする中に、ユダヤ人やアラビア諸族を含む約一万人の連合軍とムスリム軍との戦い（627 年）

ジャービルは伝えている

サアド・ビン・ムアーズは腕の正中静脈に矢傷を負った。

預言者は細い鉄の棒で焼灼を施された。

すると皮膚がはれ上った。

すると再度焼灼を行なわれた。

イブン・アッバースは伝えている

預言者は吸角法を受けられ、吸角施術者にその報酬を支払われた。

そして（医薬を）鼻から吸われた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは吸角法をお受けになった。

そして、その施術者には必ず報酬を支払われた。

イブン・ウマルは伝えている

預言者は「（病いの）熱は地獄の極熱より及ぶものである。

故にそれを水で冷やすがよい」と申された。

イブン・ウマルは伝えている

預言者は「まこと、（病いの）高熱は地獄の極熱より及ぶものである。
故に水でそれを冷やすがよい」と申された。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「（病いの）熱は地獄の極熱より及ぷものである。
故にそれを水でさますがよい」と申された。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「（病いの）熱は地獄の極熱より及ぶものである。
故にそれを水でさますがよい」と申された。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは「（病いの）熱は地獄の極熱より及ぶものである。
故にそれを水でさますがよい」と申されました。

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

アスマーウは伝えている

私の所に高熱で衰弱した婦人が連れて来られました。
私は水を求め、それを彼女の衣服の上部の開いた所に注ぎ込みました。
まこと、アッラーのみ使いは「水で熱を冷やすがよい」と申され、なお「それは地獄の極熱より及ぶものである」と申されました。

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。
イブン・ヌマイルを根拠とするハディースには“彼女（アスマーウ）は高熱の女性の胸の上部に（直接）水を注いだ”と述べられている。
アブー・ウサーマのハディースには「その熱は地獄の極熱より及ぶものである」という言葉は述べられてはいない。

ラーフィウ・ビン・ハディージュは伝えている

アッラーのみ使いは「まこと、（病いの）熱は地獄の烈しい熱に起因する。
故に、水でそれを冷やすがよい」と申された。

ラーフィウ・ビン・ハディージュは伝えている

私はアッラーのみ使いが「（病いの）熱は地獄の烈しい熱より及ぶものである。

故に、あなた方の熱は水で冷やすがよい」と申された。

アブー・バクル（伝承者の一人）は「あなた方の」という言葉は述べなかった。

そして彼は"ラーフィウ・ビン・ハディージュが私に伝えた"と言った。

無理に薬を口に注ぐのは好ましくない

アーイシャは伝えている

私達はアッラーのみ使いが御病気の時、その御方の口の端から薬を注ぎ入れようとしました。

するとその御方は、無理やり薬を私に飲ませてはならぬとの合図をなさいました。

その時、私達は「（これは多分）薬を注ぎ入れられることに対する病人の自然の抵抗なのでしょう」と申しました。

その御方が回復されました時「あなた方の中で、私の側に居た者は一人残らず、薬を口の端から注ぎ入れられるのだ（注）。

だがイブン・アッバースは別である。

それは彼があなた方の所には居なかったからである」と申された。

（注）これは預言者の意に反したことを行おうとしたための罰として、このように申されたとも言われるし、また、それは預言者のジョークとも言われる

治療にインドのアロエの木を用いることについて

ウカーシャ・ビン・ミフサンの兄弟で、ミフサンの娘**ウンム・カイス**は伝えている

私は私の子供を連れてアッラーのみ使いを訪れました。

その子は（当時、未だ離乳しておらず）食物は食べておりませんでした。

それでその子はみ使いの衣服をおしっこで濡らしてしまいました。

するとその御方は水を要求され、その部分におかけになりました。

彼女は（次のようにも）言った

私は私の息子を連れてその御方を訪問しました。

その時私は（私の子供の）喉の痛みに私の指を押しつけて治療しました。

するとその御方は「あなた方はどうして子供達の喉をそのように押しつけて苦しめるのか。

インドからのこのアロエの木切れを使用するとよい。

それには七種類もの薬効がある。

その中には肋膜炎に対する効用もある。

それで、炎症による喉の痛みには（その粉末を）鼻でかぐが、肋膜炎にはそれを服用する」と申されました。

ウンム・カイスはミフサンの娘で、アッラーのみ使いに忠誠の誓いをした最初のムハージルの一人であった。
彼女はウカーシャ・ビン・ミフサンの兄弟でもあり、アサド・ビン・フザイマ族の出身であった。
その彼女に関し（次のように）伝えられている。

彼女は彼女の子供を連れてアッラーのみ使いの所に来た。

その時、子供は（離乳前で）食物を食べてはいなかった。

時に、彼女は子供の喉の痛みに指を押しつけて治療した。

（ユーヌスは「彼女は喉を指で押した。

それは、彼女が子供の喉が炎症によって痛むのではないかと心配していたためである」と言った）。

その時アッラーのみ使いが「あなた方はどうして子供達の喉をそのように押しつけて苦しめるのか。

あなた方はインドからのこの木（アロエの木）の枝を使用するとよい。

それには七種類もの薬効がある。

その一つが肋膜炎に対するものである」と申されました。

ウバイドッラーはまた彼女に関し次のように伝えている。

彼女は私に（次のように）伝えた。

彼女の子供がアッラーのみ使いの膝におしっこをした。

するとその御方は水をお求めになり、その尿の上にお掛けになった。
だがその御方はそれを良く洗われなかった（ということである）。

黒い種子を用いての治療に関して

アブー・フライラは伝えている

私はアッラーのみ使いが「まこと、黒い種（注）には万病に効く要素がある。
だが死病は別である」と申されるのを聞いた。
み使いの言葉の中にある“サーム”は死のことであり、“シューニーズ”は黒い種子のことである。
前述のハディースは言葉に若干の相違をもって、別の伝承者経路でも伝えられている。

（注）南ヨーロッパ原産の植物ニゲラ（クロタネソウ）を意図している

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「いかなる病でも、黒い種子の効かぬ病はない。
だが死病は別である」と申された。

タルビーナ（注）は傷心の者を慰める

（注）小麦粉と蜂蜜やミルクの入った甘い液体でつくられた軽食

預言者の妻**アーイシャ**は伝えている

彼女の家族に不幸があると、女達がそれのお悔みのために集まった。
その後、彼女の家族と彼女と特別に親しい者だけを除いて、皆帰って行った。
このような折には、彼女は土鍋の中にタルビーナという食べ物を用意させた。
それが料理されると次はサリード（注）がつくられ、その上にタルビーナが注がれた。
この後彼女は「それを召し上って下さい。
私はアッラーのみ使いが『タルビーナは傷心の者を慰め、悲しみを消す』と申されるのを聞きました」と言った。

（注）細かく切ったパンをスープに浸したもの

蜂蜜の飲用による治療に関して

アブー・サイード・フドリーは伝えている

ある男が預言者を訪れ「私の兄弟が下痢をしております」と言った。
するとアッラーのみ使いは「彼に蜂蜜を飲ませよ」と申された。
彼はその御言葉に従った。
その後彼はまたその御方の所に来て「私は彼に蜂蜜を飲ませましたが、下痢は一層ひどくなりました」と言った。
その男は三度も訪れてこの言葉を言った。
彼が四度目に訪れた時、その御方はまた「彼に蜂蜜を飲ませよ」と申された。
すると彼は「私は確かに、彼にそれを飲ませましたが下痢は一層ひどくなりました」と言った。
するとアッラーのみ使いは「アッラーは真実をお述べになり、君の兄弟の腹が偽っているのである（注）」と申された。
それでその男は彼の兄弟に引き続きそれを飲ませた。
するとその者は癒えた。

このハディースはアブー・サイード・フドリーを根拠とし、言葉に若干の相違をもって別の伝承者経路でも伝えられている。

（注）クルアーンに**「それらは、腹の中から種々異った色合いの飲料を出し、それには人間を癒すものがある」**（第 16 章 69 節）と述べられている、つまり、その言葉は真理であり、それによって癒されぬ筈はない、という意である

疫病に関して

アーミル・ビン・サアド・ビン・アブー・ワッカースは彼の父を根拠として伝えている

彼は彼の父（サアド）がウサーマ・ビン・ザイドに「あなたはアッラーのみ使いからペストに関して何か聞きましたか」と尋ねるのを聞いた。

ウサーマは「アッラーのみ使いは『ペストはイスラエルの民、あるいはあなた方以前にこの世に在った者に下された天罰、あるいは懲罰である。

それであなた方は、どこかの地にそれが発生したことを聞いた時は、そこに行ってはならない。

またそれがあなた方の居る所に発生した時は、そこから逃れるようにして出て行ってはならぬ（注）」と申された。

アブー・ナドルは（前述のハディースにある預言者の言葉の最後の部分を）誤って伝えている。

（注）人心を惑わしたり、動揺させたりしないためである

ウサーマ・ビン・ザイドは伝えている

アッラーのみ使いは「ペストは天罰の印である。

至高偉大なるアッラーはそれによって下僕たる人々をお試しになる。

あなた方がそれについて聞いた時は、それが発生した所に入ってはならぬ。

また、あなた方の居る地にそれが発生したら、その地から逃げてもならぬ」と申された。

ウサーマは伝えている

アッラーのみ使いは「まこと、このペストはあなた方以前に生きた者、あるいはイスラエルの民に対して下された天罰であった。

それで、それが居住地域に発生した時はそこから逃がれるようにして出て行ってはならぬ。

またそれが発生した地に入ってもならぬ」と申された。

アーミル・ビン・サアドは伝えている

ある男がサアド・ビン・アブー・ワッカースにペストについて尋ねた。

するとウサーマ・ビン・ザイドが「私がそれについて話そう。

アッラーのみ使いは『それはアッラーがイスラエルの民の一集団に、またはあなた方以前に生を受けたある人々に対して下された懲罰、あるいは天罰である。

それで、あなた方は、それが発生したことを聞いた時は、そこに入ってはならぬ。

それがもしあなた方の地に入って来た時はそこを逃れるようにして出て行ってもならぬ』と申された」と言った。

このハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

ウサーマ・ビン・ザイドは伝えている

アッラーのみ使いは「まこと、この苦痛、または病は、あなた方以前のある民族がそれによって罰せられた天罰なのである。
その後それがこの地球上に残り、時々流行を見る。
それで、それがある地に発生したことを聞いた者は決してその地に行ってはならぬ。
またそれが発生した地にたまたま居合わせた者は、あわててそこから逃げ出してもならぬ」と申された。

前述のハディースは異った伝承者経路でも伝えられている。

シュウバはハビーブからの話として伝えている

われわれがマディーナに居た時、クーファでペストが発生したということが伝えられた。
するとアターウ・ビン・ヤサール、その他の者が「まこと、アッラーのみ使いは『もしあなたが、それが発生した地に居た時は、そこから出てはならない。
そして、もしある地にそれが発生したことを知った時は、そこに入ってもならない』と申された」と私（ハビーブ）に言った。
私は「誰から（それを聞いたのか）」と言った。
彼等は「アーミル・ビン・サアドがそれを話した」と言った。
それで私は彼の所に行った。
すると人々は「彼はここには居ない」と言った。
私は彼の兄弟であるイブラーヒーム・ビン・サアドに会って尋ねた。
彼は「私はウサーマがサアドに（次のように）話していたということを証言する。
（すなわち）ウサーマは「私はアッラーのみ使いが『まこと、この苦痛はあなた方以前のある人々がそれによって罰っせられた天罰、あるいは懲罰の残余である。
それでもしあなた方がいる地にそれが発生した時は、そこから出てはならない。
また、それがどこかに発生したことを聞いた時は、そこに入ってもならない』と申されるのをお聞きした」と言った。
ハビーブは「私はイブラヒームに、あなたはウサーマがサアドに（それを）話すのを聞いたのですか。
また（それを聞いて）彼は否認しませんでしたかと」言った。
彼は「はい、しませんでした」と言った。

前述のハディースはシュウバを根拠としても別の伝承者経路で伝えられているが、これには前述のハディースの初めの部分にあったアターウ・ビン・ヤサールその他によって話された事柄は述べ

られてはいない。

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

イブラヒーム・ビン・サアド・ビン・アブー・ワッカースは伝えている

ウサーマ・ビン・ザイドとサアドは話しながら座っていた。
そしてその二人は「アッラーのみ使いは申された」と言って前述のような話をした。
このハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

アブドッラー・ビン・アッバースは伝えている

ウマル・ビン・ハッターブはシャーム（シリア）へ出かけた。
彼がサルグ（ヒジャーズからシャームに入って直ぐの村落）に着くと、その地区の軍司令官アブー・ウバイダ・ビン・ジャッラーフやその友人達が彼を出迎えた。
そして疫病（ペストであると言われる）がシャームに発生したと告げた。
イブン・アッバースは（次のように）言った。
その時ウマルは「ここに最初のムハージル達を呼び集めよ」と言った。
私は彼等を呼び集めた。
ウマルはシャームに疫病が発生したことを伝え（前進すべきか、引くべきかについて）彼等の意見を求めた。
すると彼等の意見は分かれ、ある者達は「あなたは重大な問題のために来られたのです。
あなたがそのことから退くのは賛成出来かねます」と言った。
またある者達は「あなたは前途有望な人々や預言者の教友達の命を預っておられます。
故にそれらの人々をその疫病の地に敢えて行かせることには賛成しかねます」と言った。
すると彼は「あなた方は下ってよい」と言った。
そして「次にアンサールを呼び集めよ」と言った。
私は彼等を呼び集めた。
彼は彼等の意見を求めた。
すると彼等も前者と同じ考えを示しその意見は二分された。
ウマルは「あなた方は下ってよい」と言った。
次に彼は「私に、クライシュの長老達の中で、マッカ征服前に移住した者達を呼び集めよ」と言った。
私はその人達を集めた。
すると彼等は皆「われわれは、あなたが人々を連れて戻られ、敢えて疫病のある地に行かせぬ方がよいと思います」と異口同音に述べた。
それでウマルは人々に「私は明朝、乗り物に乗って（マディーナに）向う。
諸君もその用意をせよ」と号令した。

その時アブー・ウバイダ・ビン・ジャッラーフが「あなたはアッラーの御決定から逃がれるのですか」と言った。
するとウマルは「アブー・ウバイダよ、もし君以外の者がその言葉を言ったのであれば（注）（と言って黙った。
ウマルはアブー・ウバイダとの対立を嫌がっていたのである。
それで）そうだ、われわれはアッラーの御決定からアッラーの御決定に逃避するのだ。
ところで君（次のようなことを）考えて見ないか、つまり君がラクダをもっていてたまたま緑に覆われた側と草木一本無い側とをもつ洞谷に降りたとしよう、それでもし君が緑の側に出てラクダに草を与えたとすれば、それはアッラーの御決定によってそうしたのではないのだろうか。
またもし君が不毛の側に出てそれに餌を与えられなかったとしても、それもまたアッラーのお定めに従ったものではないのだろうか」と言った。
その時、アブドル・ラフマーン・ビン・アウフがやって来た。
彼はある用事のために不在であった。
そして「私にはそれについて、ある知識がある。
私はアッラーのみ使いが『あなた方は、もしある地に疫病が発生したことを聞いた時はそこに行ってはならぬ。
またもしそれがあなた方の居る地に発生した時はそこから逃れるようにして出てはならぬ』と申されるのを聞いた」と言った。
ウマル・ビン・ハッターブはアッラーを讃美し（そこを）後にした。

（注）これの応答節は述べられてはいないが次の二つが考えられている。
一、「うなずけもしよう。だが博識の君がそれを言うとは驚きである」

二、「罰したであろう」

前述のハディースは別伝承者経路で伝えられているが、それには（次のような）表現がある
それで彼（ウマル）はアブー・ウバイダに「もし人が肥沃な地があるにもかかわらずそれを放棄し、不毛の地で放牧したなら、君はその者を無能な者と極めつけたのではないか」と言った。
彼は「その通りである」と言った。
ウマルは「それでは、（私に）続け」と言った。
こうして彼は引き返し、マディーナに戻って来た。
そして「この場所は、またはこの家は健全な所である。
インシャー・アッラー」と言った。

アーミル・ビン・ラビーアは伝えている

ウマルはシャームに向って（マディーナを）出た。

彼がサルグに着いた時、シャームに疫病が発生したということが伝えられた。

するとアブドル・ラフマーン・ビン・アウフが彼に「アッラーのみ使いは『あなた方がある地に疫病が発生したことを聞いた時はそこに入ってはならぬ。

また、あなた方が在住する地にそれが発生した時はそこから逃れるようにして出てもならぬ』と申された」と告げた。

それでウマル・ビン・ハッターブはサルグから引き返した。

サーリム・ビン・アブドッラーは“ウマルが人々を引き連れて引き返した”（という言葉）はアブドル・ラフマーン・ビン・アウフのハディースから得たものである」と言った。

伝染病も、（鳥占いによる）凶兆も、（不吉の鳥）ハーマも、（腹中の毒虫）サファルも、（雨の前兆となる星）ナウウも、（悪鬼）ゴールも全くの事実無根である。
（だが）病に罹っているラクダの所有者はそれを健全なラクダの所有者の所に連れて行かぬこと等について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いが「伝染病も、（腹中の毒虫）サファルも、（不吉の鳥）ハーマも全く事実無根である（注）」と申された時、ベドウィンの男が「アッラーのみ使いよ、それでは、鹿のように（美しい毛並の）ラクダが砂漠にいて、そこに皮膚病のらくだが来てそこにいたもの全てにその病を移すのはどうしてでしょう」と言った。
み使いは「それでは一番最初のラクダにその病をももたらした者は誰か」と申された。

（注）このハディースで理解しにくいのは伝染病についてであるが「これは必ずしも他に移るわけではない」あるいは「必ずしもそれに罹患するとは限らない」のような意味で、伝染病そのものを否定しているのではない。
それは疫病に対する配慮を喚起するハディースが既に何度か見られたことでも容易にわかる。
また、これについてはイスラームの六信の一つ「カダル」（宿命、神の決定）の観念も深く関係していると考えられるが、このハディースの真の意図はジャーヒリーヤ時代に行われていた数々の迷信の一掃にある
サファル＝アラブはこれを腹中に住む害虫で、空腹時にあばれ、それが因で死に至ることもあると考えていた。
ハーマ＝ジャーヒリーヤの人々はそれを、殺された人の霊が復讐を促すために鳥（これは梟の姿をしているという）に姿を変えたものと考えていた。
そしてこの鳥は復讐が果されるまで“イスクーニー、イスクーニー”（原意は、私に飲ませよ、であるが、ここでは敵を討って、その血を飲ませよの意）と鳴き続けると信じていた

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「伝染病も、ティヤラ（注）も、サファルも、ハーマも全く事実無根である」と申された。
するとベドウィンの男が「アッラーのみ使いよ、……」と言った。
残余のハディースは前述と同様である。

（注）ジャーヒリーヤ時代に行われた鳥や鹿による占いで、凶兆を知らせるもの

アブー・フライラは伝えている

預言者が「伝染病は全く事実無根」と申されるとベドウィンの男が立った。

残余のハディースは前述と同様である。

ズフリーを根拠としたハディースにも“アッラーのみ使いは「伝染病も、サファルも、ハーマも全く事実無根である」と申された”と述べられている。

アブー・サラマ・ビン・アブドル・ラフマーン・ビン・アウフは伝えている

アッラーのみ使いは「伝染病は事実無根」と申された。

伝承者は続けて（次のようにも）言った。

アッラーのみ使いは「病に罹っているラクダの所有者はそれを健全なラクダの所有者の所には連れて行かない」とも申された。

アブー・フライラはアッラーのみ使いから聞いた前述の二つのハディースを常に話していた。

しかしその後「伝染病は全く事実無根である」という言葉に関しては沈黙してしまった。

そして「病に罹っているラクダの所有者はそのラクダを健全なラクダの所有者の許には連れて行かない」という言葉だけを言っていた。

ハーリス・ビン・アブー・ズバーブー（彼はアブー・フライラの従兄弟）は「アブー・フライラよ、私は君がそのハディースと一緒にもう一つ別のハディースを話すのをよく聞いていたものだが、それについては君は黙ってしまった。

（すなわち）君は『アッラーのみ使いは“伝染病は全く事実無根である”と申された』とよく話していた」と言った。

するとアブー・フライラはそれについては知らないとし、み使いの「病に罹っているラックダの所有者はそのラクダを健全なラクダの所有者の許には連れて行かない」（という言葉だけを）言った。

しかし、ハーリスは彼の言葉を認めなかった。

するとアブー・フライラはアビシニア語でわけの分からぬことをしゃべった。

そしてハーリスに「君は私の言ったことが分かるのか」と言った。

彼は「いいえ」と言った。

アブー・フライラは「私は（そのようなことを言ったとする君の言葉を）否認する、と言ったのだ」と述べた。

アブー・サラマは「私の生命にかけて、確かにアブー・フライラはわれわれに『アッラーのみ使いは“伝染病は全く事実無根である”と申された』と話していた。

私はアブー・フライラがそれを忘れてしまったのか、それともその二つのハディース（からある種の矛盾を感じ）その一つを廃棄してしまったのかどうか、私には分らない」と言った。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「伝染病は全く事実無根である」と申されたが「病に罹っているラクダの所有者はそのラクダを、健全なラクダの所有者の許には連れて行かない」とも申された。

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「伝染病も、ハマーも、ナウウ（雨の前兆と言われる星）も、サファルも全く事実無根である」と申された。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは「伝染病も、ハーマも、ゴール（想像上の悪鬼）も全く事実無根である」と申された。

ジャービル・（ビン・アブドッラー）は伝えている

アッラーのみ使いは「伝染病も、ゴールも、サファルも全く事実無根である」と申された。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私（ジャービル）は預言者が「伝染病も、サファルも、ゴールも全く事実無根である」と申されるのを聞いた。

私（ムスリム）はアブー・ズバイルが（前述のことに関し、次のように）述べるのを聞いた。

ジャービルは人々にみ使いの言葉「サファルも事実無根」について説明した。

アブー・ズバイルは「サファルは腹の意である」と言った。

するとジャービルに「どうしてなのですか」という問があった。

彼は「それが腹の虫と言われていたことからである」と言った。

しかし彼はゴールの説明はしなかった。

アブー・ズバイルが「このゴールは旅人に危害を加えるものである」と言った。

ティヤラとファアル（吉兆）、そして凶兆が存在するもの等に関して

アブー・フライラは伝えている

私は預言者が「ティヤラ（注）占いは全く事実無根である。

その種のもので最良のものはファアルである」と申されるのを聞いた。

すると「アッラーのみ使いよ、ファアルとは何ですか」と問われた。

その御方は「それは縁起の良い言葉で、あなた方の誰がそれを聞いても喜べるものである」と申された。

（注）ティヤラは先のハディースにもあった占いで、不吉なものが多い。

これに対してファアルは、大半が吉兆のもので人心を和ませる縁起の良いものである

前述のハディースは言葉に若干の相違はあるが、別伝承者経路でも伝えられている。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは「伝染病も、ティヤラも全く無実無根である。

だが私はファアルには感嘆している。

それは縁起の良い言葉であり、心を明るくさせるものだ」と申された。

アナス・ビン・マリークは伝えている

預言者は「伝染病も、ティヤラも全く事実無根である。

だが私はファアルには感嘆している」と申された。

すると「ファアルとは何ですか」と問われた。

その御方は「それは心を明るくさせる言葉である」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「伝染病も、ティヤラも全く事実無根である。

だが私は心を明るくさせる言葉のファアルは好きである」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「伝染病も、ハーマも、ティヤラも全く事実無根である。

しかし私は心を明るくするファアルは好きだ」と申された。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「災難は家と妻と馬の三つに生ずることがある（注）」と申された。

（注）家については、その狭さ、近所づき合いの煩わしさ、時には近隣の者達から肉体的、

精神的な害を受けること等である。

妻については、子供を産まない女性、口うるさい女性、猜疑心の強い女性のことが意図されている。

馬は聖戦のための道具であり極めて重要であるが、ここではそれ以外の目的で所有している場合のことで、それの世話の労力や費用は侮れないものがある

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「伝染病も、ティヤラも全く事実無根である。

そして災難は妻と馬と家の三つに生ずることがある」と申された。

前述同様なハディースは他にも多くの異った伝承者経路で伝えられているが、それらは言葉に僅少の相違がある。

ウマル・ビン・ムハンマド・ビン・ザイドは伝えている

私は私の父が、イブン・ウマルが預言者から聞いた話として伝えたものを、話しているのを聞きました

（すなわち）その御方は「もし災難が現実に起るとすれば、それは馬と妻と家についてである」と申された。

前述のハディースの別伝承には“現実に”という言葉は述べられていない。

アブドッラー・ビン・ウマルは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「もし災難が何かにあるとすれば、それは馬と住居と妻である」と申された。

サフル・ビン・サアドは伝えている

アッラーのみ使いは「もし災難が起ったとすれば、それは妻と馬と住居である」と申された。

前述のハディースには別伝承者経路で伝えられているものもある。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは「もし何かに災難があったとすれば、それは土地、召し使い（注）、馬である」と申された。

（注）この土地は良き作物を産出しない土地で徒（いたず）らに労力を費やすもの、またこの召し使いは無能で怠惰な者である

占いをすること、また、占師に頼ることは禁じられている

ムアーウィヤ・ビン・ハカム・スラミーは伝えている

私は「アッラーのみ使いよ、ジャーヒリーヤ時代、われわれが常に行っていた幾つかの事柄がありました。

われわれが占師達の許を訪れていたこともその一つでした」と言った。

するとみ使いは「占師達の所へ行ってはならぬ」と申された。

私はまた「われわれはティヤラもしておりました」と言った。

み使いは「その忌むべきものは習慣としてあなた方の心に潜在しているが、そのようなものは振り返ってもならないし、ましてや、それに戻ることは絶対にならぬ」と申された。

前述のハディースは言葉に若干の相違はあるが、他にも伝えられている

前述のようなハディースは異った伝承者経路を経て伝えられている。

またある伝承には次のような付加がある

私は「われわれの中には大地に線を引いて占いをする者達がおります」と言った。

み使いは「以前、預言者の中にはそれを行っていた方があった。

故にその者の占いが確実に的中するものであれば許される（注）」と申された。

（注）これはその占いが一般人には禁止されたものであることを示す。

言うまでもなく、一般人には未来のことを確実に予言する能力は無いからである

アーイシャは伝えている

私は「アッラーのみ使い様、占師達は、私達によく特定の事柄について話しておりましたが、それは真実でございました」と言いました。

その御方は「その言葉は誠のもので、ジン（霊魔）が盗み聞きしたものを彼の仲間（この場合は占師）の耳に投げ込む。

するとその仲間はその言葉に 100 もの虚偽を付加して伝えるのだ」と申されました。

ウルワはアーイシャからの話として伝えている

人々はアッラーのみ使いに占師について尋ねました。

アッラーのみ使いは彼等に「その者達の（言葉は）とるに足らぬものである」と申されました。

人々は「アッラーのみ使いよ、彼等は時々、誠の事柄を話します」と言いました。

するとみ使いは「その言葉はジンが盗み聞きしたもので、元はジンのものなのだ。

ジンはそれを雌取りがクワッ、クワッと鳴くように仲間の耳許でしゃべる。
すると彼等はその言葉の中に 100 以上もの虚偽を混ぜ入れてしまうのである」と申されました。

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。

アブドッラー・ビン・アッバースは伝えている
教友達の中のアンサールの一人が私に(次のように)告げた。
教友達がある晩、アッラーのみ使いと一緒に座っていると流星が走り、明るい光を放った。
その時アッラーのみ使いが教友達に「あなた方はジャーヒリーヤ時代、このような流星を見た時には、どのように言っていたか」とお尋ねになった。
人々は「アッラーとそのみ使いは最も良く御存知です。
(と言ってから)われわれはこの夜、偉大な男子が生まれ、偉大な人物が亡くなったと言っておりました」と答えた。
するとアッラーのみ使いは「それは誰かの生死のために起る現象ではない。
だが(次のようなことで起る現象なのだ、すなわち)いと高く尊くおわしますわが主がある問題を御決定になると、玉座に仕える天使達が主の栄光を称え、次にそれに近接して住む天上の住人達も讃美する。
それはこの世界の天界の住人に達するまで続けられる。
この後、玉座に仕える天使に近接する住人達がその天使達に「あなた方の主は何と仰せられましたか」と尋ねる。
すると主の御言葉が告げられる。
そうすると天上の住人達は互いにその言葉を尋ね合い、やがてその情報がこの世界の天界に到達する。
するとジンがす早く盗み聞きしてその情報を仲間に運ぶのである。
天使達がジンを見るとそれに流星が投げられるのである。
もし占師達が運ばれた情報だけを告げるならそれは真実である。
しかし彼等はそれに虚偽を混ぜ増大する」と申された(注)。

(注)このハディースの内容はクルアーン第 15 章、第 37 章、第 72 章を参照するとよい

前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられているが、それらには言葉に若干の相違がある。

サフィーヤは、預言者の妻の一人がその御方から聞いたとして話したものを伝えている
アッラーのみ使いは「占師を訪れ、彼に何かを尋ねた者は、40 夜にわたり彼の礼拝は受け入れられぬ」と申された。

らい病やそれに類する病に近寄らぬことに関して

アムル・ビン・シャリードは彼の父を根拠として伝えている

サキーフ族の遣使団の中にらい病の男かいた、預言者はそれに使者を送り「われわれはあなた方の忠誠の誓いを受け入れた故、引き取るがよい」と申された。

蛇その他を殺すことに関して

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは背に二筋の白い縞のある蛇を殺すことを御命じになりました。
それは視力や胎児に悪影響を及ぼすからです（注）。

（注）この蛇は見ただけで目がくらんだり、妊婦の場合は流産するともいう
前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられている。
その中では「尾の短い蛇と縞のある蛇」とある。

サーリムは彼の父を根拠として伝えている

預言者は「背に二筋の白い縞のある蛇と尾の短い蛇は殺せ。
それは流産させ、視力にも悪影響を及ぼすからである」と申された。
それで、イブン・ウマルは見つけた蛇は全て殺していた。
アブー・ルバーバ・ビン・アブドル・ムンジルまたはザイド・ビン・ハッターブは彼（イブン・ウマル）が蛇を殺そうとして追いかけるのを見た。
その時彼（二人の中の一人）は「家々に巣くう蛇を（殺すことは）禁止されています」とイブン・ウマルに言った。

イブン・ウマルは伝えている

私はアッラーのみ使いが犬を殺すことを御命じになるのを聞いた。
その御方は「蛇や犬は殺せ。
背に二筋の白い縞のある蛇や尾の短い蛇は殺せ。
それらは視力に悪影響を及ぼし、流産を起す因となる」と申されていた。
ズフリーは「われわれには、それがそれらの毒によるものであると考えられるが、アッラーこそ最も良く御存知である」と言った。

サーリムは（次のように）言った。

アブドッラー・ビン・ウマルは「私は見つけた蛇は容赦なく殺し続けた。
ある日、私が家に巣くう蛇を追いかけていると、ザイド・ビン・ハッターブ、またはアブー・ルバーバが通り掛り、私がそれを追い掛けているのを見て「待ちなさい、アブドッラー」と言った。
私は「アッラーのみ使いはこれを殺すよう御命じになった」と言うと、彼は「アッラーのみ使いは家々に巣くうものは（殺すことを）禁じられた」と言った。
このハディースはズフリーを経由し、別伝承者経路を経でも伝えられている。
だがそれらには言葉に若干の相違がある。

ナーフィウは伝えている

アブー・ルバーバはイブン・ウマルの家に在って、その家のモスクの見える戸を開けてくれるよう頼んだが、それは彼がモスクの近くに居るのだという感慨に浸りたい気持ちからのことであった。

その時子供達が蛇の抜けがらを見つけた。

アブドッラーは「それを見つけ出して殺してしまえ」と言った。

するとアブー・ルバーバは「いや、それを殺してはならない。

アッラーのみ使いは家に巣くう蛇を殺すことを禁じられた」と言った。

ナーフィウは伝えている

イブン・ウマルは蛇を見つけると全て殺していた。

だが、アブー・ルバーバ・ビン・アブドル・ムンジル・バドリーがわれわれに「アッラーのみ使いは家々に巣くう蛇を殺すのを禁じられた」と話すと、彼はそれを止めた。

ナーフィウは伝えている

彼はアブー・ルバーバがイブン・ウマルに「アッラーのみ使いは蛇を殺すことを禁じられた」と告げるのを聞いた。

アブドッラーは伝えている

アブー・ルバーバは彼に「アッラーのみ使いは家々に巣くう蛇を殺すことを禁じられた」と告げた。

ナーフィウは伝えている

アブー・ルバーバ・ビン・アブドル・ムンジル・アンサーリーは、最初クバーウと言うところに所に住んでいたが、マディーナに移った。

アブドッラー・ビン・ウマルがそのアブー・ルバーバのためにくぐり門を開いて一緒に座っていると、その家の人々が家に巣くう蛇を見つけ、殺そうとしていた。

その時アブー・ルバーバが「（家に巣くう蛇を殺すことは）禁じられている。

だが尾の短い蛇と背に二筋の白い縞のあるのは殺すことが命じられた」と言った。

その二種類の蛇は視力に悪影響を及ぼし、流産の因ともなると言われていた。

ナーフィウは彼の父を根拠として伝えている

アブドッラー・ビン・ウマルが、ある日、壊れかけた彼の古い屋舎の側に立っていると蛇の抜けがらを見た。

彼は「この蛇を追い、殺してしまえ」と言った。

アブー・ルバーバ・アンサーリーは「まこと、アッラーのみ使いが、家々に巣くう蛇について、

それを殺すのを禁じられたのを私は耳にした。
だが、尾の短いものと背に二筋の白い縞のあるのは別である。
その二種は視力を奪い、胎児に影響を及ぼす」と言った。

ナーフィウは伝えている
アブー・ルバーバはイブン・ウマルの側を通り掛った。
その時イブン・ウマルはウマル・ビン・ハッターブの家の近くの城砦の側で蛇の動きに注目していた。
残余のハディースは前述と同様である。

アブドッラーは伝えている
われわれが預言者と一緒にある同窟にいた時、その御方に**「次々と送られる風において」**(クルアーン第 77 章 1 節)の啓示が下された。
われわれは啓示されたものを(最初に聞く者として)清々しい気持で拝聴した。
その時、われわれの所に蛇が出て来た。
み使いは「殺せ」と申された。
われわれはそれを殺そうとして突進した。
しかしそれの逃げる方が早かった。
アッラーのみ使いは「アッラーはあなた方をそれの危害より救われたように、それもまた、あなた方の害よりお救いになった」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アブドッラーは伝えている
アッラーのみ使いは巡礼の儀式を行っている者に、ミナーで蛇を殺すことを御命じになった。

アブドッラーは伝えている
"われわれがアッラーのみ使いとある洞窟にいた時…"
残余のハディースは前述と同様である。

ヒシャーム・ビン・ズフラのマウラー(解放奴隷)**アブー・サーイブ**は伝えている
私がアブー・サイード・フドリーの家に入った時、彼は礼拝していた。
私は彼の礼拝が終るのを待った。
その時、ふと私はその家の一隅にあった木の枝の中にある物音を聞いた。
その方を見ると何とそれは蛇である。

私はそれを殺そうとして飛び掛った。
するとアブー・サイード・フドリーが私に“座れ”と合図をしたので私は座った。
彼が礼拝を終えた時、部屋の一つを指し「君はこの部屋を知っているか」と言った。
私は「はい」と言った。
彼は「そこにはわれわれの仲間で新婚の若者がいた」と言って（次のような話をした）
われわれはアッラーのみ使いと一緒にハンダクの戦（塹壕の役・627 年）に出かけた。
その若者はよく日中に、アッラーのみ使いに彼の家族の許に帰る許可を求めていた。
ある日彼が（例によって）許可を求めると、アッラーのみ使いは「武器を携えて行くがよい。
私はクライザ族（マディーナに在ったユダヤ部族）が君に危害を加えないかと心配する」と申された。
それで彼は武器を持って帰った。
家に着くと彼の妻が入口の扉の間に立っているのを見た。
彼はそのことに嫉妬し、彼女の方に槍を向けて突き刺そうとした。
彼女は「あなた、槍を引いてっ、そして家の中に入って私がここに出ている訳を分ってちょうだい」と言った。
彼が入って見ると、ベッドの上にとぐろを巻いた大蛇がいたのである。
彼は槍でそれを突き刺した。
そして槍を家の中に突き立てたまま外に出た。
だが蛇はのた打って彼を襲った。
（その結果両者共に死んだが）蛇の方が先に死んだのか、それとも若者か、それについては知られていない。
われわれはアッラーのみ使いの所に来てそのことをお話した。
そして、われわれはみ使いに「アッラーが彼をわれわれのために蘇らせて下さるようお祈り下さい」と言った。
するとその御方は「あなた方の友人のために、アッラーにお許しを願うがよい」と申され、
更に「まこと、マディーナにはイスラームに帰依したジンがいる。
故にあなた方がそれらの仲間を見た時は、三日間それに対して警告を出すがよい。
それでもしそれが、その後も現れたなら殺すがよい。
それはサタンなのだ」と申された。

アスマーウ・ビン・ウバイドはサーイブと言われる男－彼はわれわれの言うアブー・サーイブである－から聞いた話を伝えている

われわれはアブー・サイード・フドリーを訪問した。
われわれが座っているベッドの下である物音を聞いた。
見るとそれは蛇であった。
残余のハディースは同一であるがその中で伝承者は（次のようにも）言っている。

アッラーのみ使いは「まこと、これらの家々には蛇が住んでいる。
それで、あなた方がその中の一匹でも見た時は三日間苦しめよ。
もし出て行けばよし、さもなくば殺すがよい。
それは不信者なのだ」と申された。
またその御方は教友達に「行って君達の友（蛇に噛まれて亡くなった）を埋葬するがよい」
と申された。

アブー・サイード・フドリーは伝えている
アッラーのみ使いは「マディーナにはイスラームに帰依したジンのグループが住んでいる。
それでそれらの中の一匹でも見た者は三日間それを苦しめよ。
そしてもしその後も現れることがあれば殺すがよい。
まこと、それはサタンである」と申された。

やもりは殺すのがよい

ウンム・シャリークは伝えている

預言者は彼女（ウンム・シャリーク）にやもりを殺すことを御命じになった。
イブン・アブー・シャイバのハディースには「御命じになった」とだけ述べられており（「彼女に」という言葉は無い）

ウンム・シャリークは伝えている

彼女は預言者にやもりを殺すことについて伺った。
するとその御方は、それを殺すことを御命じになった。
なお、ウンム・シャリークはアーミル・ビン・ルアイ族の女性である。
このハディースは同一の内容で、別の伝承者経路でも伝えられている。

アーミル・ビン・サアドは彼の父を根拠として伝えている

預言者はやもりを殺すことを御命じになった。
そしてそれをフワイスィク（有害な小生物）とお呼びになった。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いはやもりのことを「フワイスィクと申されました。
ハルマラ（伝承者の一人）は（次のような言葉を）付加している。
「私はその御方がやもりを殺すことを御命じになったということを存じません」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「一撃でやもりを殺した者には施し物としてこれこれのものがある。
二回打ってそれを殺した者にも施し物としてこれこれのものがあるが、それは前者に劣る。
三回打ってそれを殺した者にも施し物としてこれこれのものがあるが、それはさらに二番目の者に劣る」と申された。

前述同様なハディースはアブー・フライラを根拠として、別の伝承者経路でも伝えられているが、その中には（次のような）言葉がある。
（アッラーのみ使いは）「一撃でやもりを殺した者には 100 の施し物が与えられる。
二撃で（殺した者に）も施し物は与えられるが、前者よりは少ない。
三撃で（殺した者のそれは）さらに二番目の者より少ない」（と申された）

アブー・フライラは伝えている

預言者は「一撃で（やもりを殺した者には）70 の施し物がある」と申された。

蟻を殺すことは禁止されている

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「蟻が歴代の預言者の一人をかんだ。

すると彼は蟻の巣を（焼き払うことを）命じた。

それは実行された。

するとアッラーは彼に『汝は、汝をかんだ一匹の蟻のために（わが徳を）讃美する一集団生活体を滅亡させたのか』という啓示を下された」と言われた。

アブー・フライラは伝えている

預言者は「歴代の預言者の一人が木の下で休息していると一匹の蟻が彼をかんだ。

彼は彼の所持品を木の下から移動させるように命じた。

そして（その木を）焼くことを命じ、それは焼き払われた。

するとアッラーは彼にどうして（汝をかんだ）一匹の蟻だけを成敗しないのか』という啓示を下された」と言われた。

アブー・フライラは伝えている

彼（アブー・フライラ）は多くのハディースを伝えているがその中に（次のような話が）ある。

アッラーのみ使いは「歴代の預言者の一人が木の下で休んだ。

すると一匹の蟻が彼をかんだ。

彼は所持品をその下から移動させ、その木を焼くよう命令し、それを焼き払ってしまった。

するとアッラーは彼に『どうして一匹の蟻だけを成敗しないのか』という啓示を下された」と申された。

猫を殺すことは禁じられている

ナーフィウはアブドッラーからの話として伝えている

アッラーのみ使いは「ある女性が猫が原因で懲罰を受けた。
それは彼女が猫を閉じ込めたままで死に至らしめたからであった。
それ故彼女は地獄に落ちた。
彼女はその猫を閉じ込めて餌も水も与えず、地上にある自然の餌を取るために自由にもして上げなかったのである」と申された。

前述同様なハディースはアブー・フライラを根拠として、別の伝承者経路でも伝えられている。

前述同様なハディースはイブン・ウマルを根拠としても伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「ある女性が猫が原因で懲罰を受けた。
それは彼女がその猫に餌も与えず、水も与えず、しかも地上にある自然の餌を取るために自由にもしてあげなかったからである」と申された。
前述のハディースは別伝承者経路でも伝えられているが、それらは言葉に若干の相違がある。

アブー・フライラは前述のようなハディースを別の伝承者経路でも伝えている。

前述同様なハディースはアブー・フライラを根拠として他にも伝えられている。

獣に水や餌を与える徳について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは（次のように）話された。

ある男が道を歩いていた時、ひどく喉の乾をおぼえた。

彼は井戸を見つけてそこに下り、水を飲んで上にあがると、一匹の犬が激しい乾から舌を垂らし、湿った土を食べていた。

彼は「この犬も私が激しい乾をおぼえたと同じ程に喉を乾かしているのだ」と言った。

そこで彼は再び井戸に下り、彼の履物に水を満たし、それを口にくわえて這い上がり犬に飲ませた。

アッラーはこの行為を愛でられ、彼（の過去の罪過）をお許しになった。

人々は「アッラーのみ使いよ、われわれにとって、そのような畜生に奉仕することにも報酬があるのですか」と言った。

その御方は「その通り。全ての生き物に対する奉仕に報酬がある」と申された。

アブー・フライラは伝えている

預言者は（次のように）話された。

ある暑い日、一人の娼婦が井戸の周辺を巡っている犬を見た。

それは（激しい）乾で舌を垂れ下げていた。

彼女は彼女の靴に水を汲み、その犬に与えた。

このため、彼女は（過去の罪過を）許された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは（次のように）話された。

一匹の犬が激しい乾で死に瀕し、井戸の周囲を巡っていた。

その時、イスラエル族の娼婦がそれを見た。

そして彼女の靴を脱ぎそれで水を汲み犬に与えた。

このため彼女は（過去の罪過を）許された。

正しい言葉使いの書

ダハル（時（注））を罵るべからず

（注）人の力では抗しがたい時の流れ、災いをもたらす時の力の意でイスラーム以前に人々は己れの不運にかこつけてしばしば時（ダハル）を罵った

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったところを聞いたとして伝えている

アッラーは言った。
“人間は時を罵る。
されどわれこそ時である（注）。
なぜならわれの手中にこそ夜と昼があるのだから”

（注）アッラーが時そのものであるはずがない。
時はアッラーの被造物の一つである。
だがアッラーは時の創造後に時の運行を流れに任せたのではなく、その時の流れをも彼が司っている意味で“われこそ時である”と言ったのであろう

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アッラーは言った。
“人間は時を罵りわれに不快を感じさせる（注）。
われこそ時であり、われが昼と夜とを交替させているのだ”

（注）時の運行者即ちアッラーに不満を表明していることになるからである

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アッラーは言った。
“人間は時に災あれと言ってわれに不快を感じさせる。
だからおまえたちのうちの誰れであっても時間に災いあれなどと決して言ってはいけない。
なぜならばわれこそが時間であり、われが夜と昼とを交代させているのだ。
そしてもしわれが望めばそれらを静止することさえできるのだ”

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた達のうちで誰でも“時に災あれ”と決して口にしてはならない。

なぜならばアッラーこそが時であるのだから。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

時を罵ってはならない。

なぜならアッラーこそが時であるのだから。

葡萄をカルム（注）と呼ぶことは好ましくない

（注）原義は上質の“葡萄の木”だが当時は葡萄の別称として多く用いられていた

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
あなた達の誰でも時を罵ってはならない。
なぜならばアッラーこそが時であるからです。
またあなた達の誰でも葡萄（イナブ）をカルム（注 1）と呼んではならない。
なぜならカルムはムスリムの男性のことであるからだ（注 2）。

（注 1）カルムには“気前の良さ、従って高貴さ”などの別の意味がある。
このカルムの木から造ったブドウ酒は人をして大いに気前の良さを誘うことから来た意味であるとされている
（注 2）クルアーン第 49 章 13 節には「**アッラーのみもとで最も高貴なる者はあなた方のうちで最も主を畏れる者なり**」とあり、カルムは高貴さに用いられている。
こうしてイナブはワインを想像しカルムは高貴さを連想する限りでは問題がないがここで葡萄をカルムと呼ぶことによってさらにワインを連想する恐れが充分にあるのでこうした語法を禁じたわけである

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている
あなた達は（イナブ）をカルムと言ってはいけません。
なぜならばカルム（高貴さ）は信者の心であるからです。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている
あなた達はイナブをカルムと名付けてはいけません。
なぜならばカルムはムスリムの男性のことであるからです。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
あなた達の誰れでも決してカルム（イナブ）と言ってはいけません。
なぜならばカルムは信者の心であるからです。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
あなた達の誰れでもイナブをカルムと言ってはならない。
なぜならカルムはムスリムの男性のことであるからです。

アルカマ・ビン・ワーイルは父からの伝聞として預言者が次のように語ったとして伝えている

あなた達は（イナブを）カルムと言ってはならない。

そうですハブラと言いなさい（それは葡萄を意味する）。

アルカマ・ビン・ワーイルは父からの伝聞として預言者が次のように語ったとして伝えている

あなた達はカルムと言ってはならない。

そうですイナブまたはハブラと言いなさい

アブド（奴隷）、アマ（女奴隷）、マウラー（主人）、サイイド（主人）というという言葉の使い方

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた達の誰れでも“私の奴隷とか私の女奴隷”とは決して言ってはならない。

なぜならあなた達のすべてはアッラーの奴隷でありあなた達の女達はすべてアッラーの女奴隷であるからです。

そうですグラーミー（私の小僧）とかジャーリヤティー（私の女中）またはファターヤー（私の若い者）とかファターティー（私の小娘）と言いなさい。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた達の誰れでも“私の奴隷”と言ってはならない。

なぜならあなた達のすべてはアッラーの奴隷です。

そうですファターヤー（私の若い者）と言いなさい。

また奴隷の方はラッビー（我が主）と言ってはならない。

そうですサイイディー（私の主人）と言いなさい。

同様のハディースがアアマシュによって伝えられているが、ここでは次のように表現されている。
奴隷は己れの主人に対してマウラーヤ（我が主）と言ってはならない。
またアブー・ムアーウィヤは次のように付け加えている。
なぜならあなた違の主は至高にして偉大なるアッラーのみであるからです。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた達の誰れでも“お前の主（ラッバカ）に水を与えよ”とか“お前の主に食を与えよ”とか“お前の主のウドゥー（清浄行為）を手助けせよ”とか言ってはならない。

またあなた達は誰れでも“我が主（ラッビー）”と言ってはならない。

またあなた達は誰れでも“私の奴隷”とか“私の女奴隷”と言ってはならない。

そう私の若い者（ファターヤー）とか私の小娘（ファターティー）とか私の小僧（グラーミー）と言いなさい。

私の魂が堕落した（ハブサ）という表現は好ましくないこと

アーイシャはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた達は誰れでも“私の魂か堕落した（ハブサ）”と言ってはならない。

そう“私の魂が無慈悲になった（ラキサ（注））と言いなさい。

同様のハディースがアブー・バクルによって伝えられている。

しかしここでは“そう”の一語は述べられていない。

（注）堕落した（ハブサ）も無慈悲になった（ラキサ）も似たような意味であるが前者にはこの地に不毛、糞便などの語感として一層悪いイメージがある。

また前者には永続的な状態を示す動詞のパターンで示され、後者は一時的状態を示す動詞のパターンで示されている。

それで心はもともと純粋で完全なものであるとする信念があり同じ意味であるならばより上品な語を使う方が良いということであろう

前述のハディースは別伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・ウマーマ・ビン・サハルは父からの伝承としてアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた達は誰れでも“私の魂が堕落した(ハブサ)”と言ってはならない。

しかし“私の魂が無慈悲になった（ラキサ）”と言いなさい。

ミスク（注）の使用、そしてそれは最良の香料であること、また香の良い花や香料（の贈物）を拒むことは好ましくないこと

（注）じゃこう鹿の雄の腹部から得られる分泌物からとる香料

アブー・サイード・フドリーは預言者が次のように伝えているに語ったとして伝えている

イスラエルの民（ユダヤ人）の背の低い女が背の高い二人の女と一緒に歩いていた。
彼女は木のサンダルを履き、金製蓋付きの指輪をはめてその中には、ミスクを詰めていた。
（そもそも）それは最良の香料ですが、それから彼女は連れの二人の女の間にはさまれて歩いていた。
それで人々は彼女の姿を見ることはなかったが（そのとき）彼女は手でこんな具合に合図した。
ところで伝承者の一人シュウバは彼女がそのときどのように手を振ったかを示すために実際に手を振って見せた。

アブー・サイード・フドリーは次のように伝えている

アッラーの使徒は指輪にミスクを詰めたイスラエルの民の女について語った。
（そもそも）ミスクは最良の香料です。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

香の良い花を差し出された者はそれを断わってはならない。
なぜならばそれは軽い上に香が良いからです。

ナーフィウは次のように伝えている

イブン・ウマルは香を焚くときほかに香料を混ぜないで沈香木を焚くかまたは沈香木に樟脳をかけて香を焚いていました。
それから彼は“このようにアッラーの使徒は香を焚いていました”と念を押した。

詩の書

タイトルなし

アムル・ビン・シャリードは父からの伝聞として次のように伝えている

ある日私はアッラーの使徒の後ろに合乗りしていました。

その時彼は私にこう尋ねました。

あなたはウマイヤ・ビン・アブー・サルト（注）の詩を知っていますか？

そこで私は“はい”と答えた。

すると彼は“それを朗唱して下さい”と言った。

それで私は詩の一節を朗唱しました。

すると彼は“もっと続けて朗唱して下さい”と言った。

そこで私はまた詩の一節を朗唱しました。

するとまた彼は“もっと続けて朗唱して下さい”と言った。

こうしてとうとう私は詩の 100 節を朗唱することになりました。

同様のハディースがアムル・ビン・シャーリドによって別の伝承者経路を経て伝えられている。

しかしここでは多少の表現上の違いが見られる。

（注）628 年に歿したイスラーム以前の詩人で聖書とキリスト教に通じていた先駆的な詩人であったと言われている。

彼の詩のテーマの中には復活、天使、最後の審判などを扱ったものがある

アムル・ビン・シャリードは父からの伝聞として次のように伝えている

アッラーの使徒は私に詩を朗誦するよう頼んだ。

以下は前記のハディースと同様である。

しかしここでは最後に次の一文が付け加えられている。

彼（ウマイヤ・ビン・アブー・サルト）はムスリムになろうとしていたが…

ところでイブン・マフディーの伝えるハディースでは“彼は彼の詩の中ではほとんどムスリムであった”と伝えている。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

イスラーム以前にアラブが語った言葉の中で最も素晴しい言葉はラビード（注）の次の言葉である。

実にアッラーを除いて全てのものは消滅する。

（注）高名な詩人、後半生はイスラームに改宗したがそれ以前にもイスラーム精神を吐露した詩を詠じた。
預言者によって評価され愛された

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
詩人が語った言葉で最も真実に満ちた言葉はラビードの次の言葉である。
実にアッラーを除いて全てのものは消滅する。
そしてまたウマイヤ・ビン・アブー・サルトはほとんどムスリムであった。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
詩人が語った詩行のうちで最も真実に満ちた詩行は“実にアッラーを除いて全ては消滅する”である。
またウマイヤ・ビン・アブー・サルトはほとんどムスリムであった。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
詩人達が語った詩行のうちで最も真実に満ちた詩行は“実にアッラーを除いて全てのものは消滅する”である。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
詩人が語った言葉の中で最も真実に満ちた言葉はラビードの次の言葉である。
実にアッラーを除いて全ては消滅する。
（ところで）預言者はこれ以上何も付け加えなかった。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
男の腹の中がそれをむしばむうみで満たされることの方が（中傷的で軽薄な）詩で満ねされることよりもまだましである（注）。
ところでアブー・バクル（中途伝承者）は「ハフサは“むしばむ”の一語を伝えていない」と語った。

（注）ここでの詩の評価には二説がある。
ここで言うところの詩は
①預言者に対する中傷詩である。
②詩全般を示している、
なぜなら人々は詩に夢中になるとクルアーンやハディースを軽視するから

サアドは預言者が次のように語ったとして伝えている

あなた達の誰れかの腹がそれをむしばむうみで満たされることの方が（中傷的で軽薄な）詩によって満たされるよりもまだましである。

アブー・サイード・フドリーは次のように伝えている

私達はアッラーの使徒と一緒に歩いていましたがアラジュという所（注）に到着したときそこで一人の詩人が詩を朗唱しているところでした。

そのときアッラーの使徒は次のように言った。

この悪魔を捕まえよ、またはこの悪魔を抑留せよ、なぜなら人の腹の中がうみで満たされることの方がそれが詩で満たされるよりもまだましだからです。

（注）マディーナからは 72 マイル離れた所にある比較的大きな村。

マッカとマディーナの間の山道にも同名の地名があるがここで言う村はターイフの方角にある

さいころ遊びの禁止

ブライダは父からの伝聞として預言者が次のように語ったとして伝えている

さいころ遊び（注）を行う者は手を豚の血肉に浸して染めるようなものである。

（注）ここではナルダシールという言葉で示されている通りこの遊びはペルシャ起源である。
普通アラビア語ではこの語の頭部をとってナルドと言うが庶民の間ではターウラと称され
今日でも中東ではよく見かける遊びである

夢の書

タイトルなし

アブー・サラマは次のように伝えている

私は夢を見てそれ（恐怖）で熱が出て震えが止まらなかった。
だが私は外衣で身を包むことはしなかった。
それから私はアブー・カターダに会い、彼にそのことを話した。
すると彼はアッラーの使徒が次のように言っているところを聞いたとしてこう伝えた。
良い夢（ルウヤー）はアッラーからであり、悪夢（フルム）は悪魔からのものである。
もしあなた達の内の誰れかが嫌な悪夢を見たときは彼の左側に三回唾を吐かせなさい。
そしてその災から逃れるためにアッラーにご加護を求めさせなさい。
そうすれば彼には何の害も及ばないだろう。

同様のハディースが**アブー・カターダ**によって伝えられている。
しかしここではアブー・サラマが伝えた次の一文即ち“私は夢を見てそれで熱が出て震えが止まらなかった。
だが私は外衣で身を包むことはしなかった”は述べられていない。

同様のハディースが**ズフリー**によって伝えられている。
しかしここでは“それで熱が出て震えが止まらなかった……”の一文は伝えられていない。
ところで伝承者ユーヌスが伝えたハディースには次のような一文が付け加えられている。
彼が眠りから覚めたときに、彼の左側に三回唾を吐かせない。

アブー・カターダはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

良い夢（ルウヤー）はアッラーからであり、悪夢（フルム）は悪魔からである。
もしあなた達の内の誰れかが（夢の中で）嫌なものを見たときには彼の左側に三回唾を吐かせなさい。
そしてその災いから逃れるためにアッラーにご加護を求めさせなさい。
そうすればそれば彼に何の害も及ぼさないでしょう。
ところで伝承者のアブー・サラマは次のように言った。
私はいつも山よりも重くのしかかる夢を見ていたものでしたがこのハディースを聞いてから私はそれを気にしなくなった。

サカフィーの伝えるハディースではアブー・サラマの言葉（“私はいつも……夢を見ていたものでした”）は伝えられているが、**ライス**の伝えるハディースではアブー・サラマの言葉は最後までは伝えられていない。
またイブン・ルムフの伝承では次の一文が付け加えられている。
そして彼に寝返りをうたせなさい。

アブー・カターダはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
　　良い夢はアッラーからであり悪い夢は悪魔からである。
　　何か嫌なものか出てきた夢を見た者には左側に唾を吐かせなさい。
　　そしてその悪魔から逃れるためにアッラーにご加護を求めさせなさい。
　　そうすればそれは彼に何も害を及ぼさないであろう。
　　また誰れにもそのことは知らせてはならない。
　　良い夢を見た者は喜びなさい。
　　しかし愛する者以外にはそのことを知らせてはならない。

アブー・サラマは次のように伝えている
　　私は病気になるような悪夢をよく見ていた。
　　そのようなときに私はアブー・カターダに会った。
　　そして彼は次のように話してくれました。
　　私（アブー・カターダ）もアッラーの使徒が次のように言っているところを聞くまでは病気になるような悪夢をよく見ていました。
　　良い夢はアッラーからである。
　　あなた達の内の誰れかが自分の好きな夢を見たときは愛する者以外にはそのことを話してはならない。
　　またいやな夢を見たときには左側に三回唾を吐かせなさい。
　　そして悪魔の災とその悪夢から逃れるためにアッラーにご加護を求めさせなさい。
　　そして決してそのことを誰れにも話してはならない。
　　そうすればそれが彼に害を及ぼすことはないであろう。

ジャービルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
　　あなた達の内の誰れかが嫌な悪夢を見たならば左側に唾を吐かせなさい。
　　そしてその悪魔から逃れるためにアッラーにご加護を三回求めさせなさい。
　　そして寝返りをうたせなさい。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

終末の時が近づくときにはムスリムの夢は殆んど嘘を付かない。

そしてあなた達の中で夢において最も信頼のおける者は言葉においても最も信頼のおける者である。

ムスリムの夢は預言者性の 40 分の 5 である。

夢には三つの種類がある。

それはアッラーからの吉報としての正夢と悪魔からの悲報としての悪夢と人の個人的暗示による夢である。

それであなた達の内の誰れかが嫌な夢を見たときは起きて礼拝をしなさい。

だが決して人にそれを話してはならない。

さてここでアブー・フライラは次のように言った。

私は夢で足かせを見ることは好きだが首かせを見ることは嫌いである。

足かせは（その者が）宗教に確固不動であることを示しているからです。

しかし伝承者は“前記の部分がハディースの一部であるのかイブン・スィーリーンの言葉なのか私は知りません”と言った。

アブー・フライラは次のように伝えている

（夢の中で）私は足かせは気にいっているが首かせを見るのは嫌いである。

なぜならば足かせは宗教に確固不動であることを意味しているからです。

それから預言者は次のように語った。

信者の夢は預言者性の 46 分の 1（注）である。

（注）預言者の見る夢はアッラーの啓示、お告げによるものだから 100％正夢であろう。

これに対して常人の夢はその 100％を基準として何％にあたるかをここでは問題にしている

アブー・フライラは次のように伝えている

“終末の時が近づくときには……”と述べて以下は同様のハディースを伝えたが“預言者からの伝聞として”の分は述べていない。

アブー・フライラは預言者の言葉として次のように伝えている

“私は首かせを嫌う”以下は上記と同じであるが“夢は預言者性の 46 分の 1 である”という一文は述べられていない。

ウバーダ・ビン・サーミトはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

信者の夢は預言者性の 46 分の 1 である。

また同様のハディースが**アナス・ビン・マーリク**によって伝えられている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

確かに信者の夢は預言者性の 46 分の 1 である。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ムスリムの見た夢、もしくは彼が見せられた夢は……

ところでイブン・ムスヒルの伝承では次のように伝えている。

正夢は預言者性の 46 分の 1 である。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

正しき者の夢は預言者性の 46 分の 1 である。

同様のハディースが**ヤヒヤー・ビン・アブー・カスィール**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・フライラによって同様のハディースか別の伝承者経路を経て伝えられている。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

正夢は預言者性の 70 分の 1 である。

同様のハディースが**ウバイドッラー**によって伝えられている。

ライスの伝えるハディースでナーフィウは次のように語っている

私はイブン・ウマルが“預言者性の 70 分の 1 である”と言ったと思います。

預言者の言葉“夢で私を見た者は確かに私を見たのです”について

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

夢で私を見た者は確かに私を見たのです。なぜなら悪魔は私の姿を真似できないからです。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

夢で私を見た者はいずれ目が覚めているときに私を見るであろう。
あるいはあたかも目覚めている状態で私を見るであろう。
なぜならば悪魔は私の姿を真似できないからである。
アブー・カターダはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている。
夢で私を見た者は確かに真実を見たのである。
ところでズフリーの甥は叔父からの伝聞として同様のハディースを伝えている。

ジャービルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

夢で私を見た者は確かに私を見たのである。
なぜなら悪魔には私の姿を真似することは不可能だからです。
あなた達の誰れかが悪い夢を見たならば夢の中での悪魔の悪戯を誰れにも伝えてはならない。

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

夢で私を見た者は確かに私を見たのである。
なぜなら悪魔は私の姿を模倣することはできないからである。

夢の中で見た悪魔の悪戯は誰にも伝えてはならないこと

ジャービルは次のように伝えている

アッラーの使徒のもとに一人の遊牧民がやって来てこう言いました。

私は首を切られた夢を見ました。

そして私はそれ（離れた首）を追いかけました。

すると預言者は彼を叱りつけて次のように言いました。

夢の中で見た悪魔の悪戯を誰にも伝えてはならない。

ジャービルは次のように伝えている

一人の遊牧民が預言者のもとにやって来て次のように言った。

アッラーの使徒よ、私は夢の中で首を打たれ首がころがり落ちるところを見ました。

そこで私はその首の後を追ってよろよろと追いかけました。

するとアッラーの使徒はその遊牧民に次のように言った。

夢の中で見た悪魔の悪戯は誰にも伝えてはならない。

また伝承者はつづけて次のように伝えた。

のちに私は預言者が次のように演説しているところを聞いた。

あなた達のうちの誰でも夢の中で見た悪魔の悪戯を決して語ってはならない。

ジャービルは次のように伝えている

一人の男が預言者の所にやって来て次のように言った。

アッラーの使徒よ、私は夢の中で（自分が）首を打たれるところを見ました。

するとアッラーの使徒は笑い次のように言いました。

悪魔が夢の中であなた達の誰かをもて遊んだとしてそれを決して他人に伝えてはならない。

ところでアブー・バクルは“あなた達の誰かがもて遊ばれたとしても”と伝え“悪魔”の一語は伝えていない。

夢の解釈（夢解き）について

イブン・アッバースかまたは**アブー・フライラ**が.次のように伝えている

一人の男がアッラーの使徒のところにやって来て次のように言った。

アッラーの使徒よ、私は夢の中で雲が脂肪と蜂蜜をしたたらせ、人々がそれを手の平に集めているところを見ました。

人々の中には沢山集める者もいれば少ししか集めない者もいます。

そして私は天から地に繋がっている綱を見ました。

そしてまた私はあなたがその綱をつかみ天へ昇って行くところを見ました。

それからあなたの後につづいてある男がそれをつかみ昇って行き、それからまた別の者がつづいてそれをつかみ昇って行き、それからまた別の者がつづいてそれをつかみましたがそれが切れてしまいました。

しかしそれはまもなく彼のために繋がりました。

ここで（その場に居合わせた）アブー・バクルが次のように言った。

アッラーの使徒よ、あなたは私の父にも代えがたいお方です。

アッラーに誓って、どうか私にその夢の解釈をさせて下さい。

するとアッラーの使徒は“よろしい、それについて解釈しなさい”と言った。

そこでアブー・バクルは次のように述べた。

雲それはイスラームの雲を意味します。

脂肪と蜜をしたたらせるものとはそれはクルアーンでありクルアーンの甘さと柔さを意味しています。

人々がそれを手に集めている様子はクルアーンから多くを得た者もいれば少ししか得ない者もいるということです。

天から地に繋がっている綱はあなたを（この世で）支えている真理です。

あなたはそれをつかみそれによってアッラーはあなたを天国へ引き上げます。

それからあなたの後から別の者がつかみそれによって彼は天国に昇ります。

それからまた別の者がつかみそれによって天国に上がります。

それからさらに別の者がそれをつかみますがそこでそれが切れてしまう。

しかしそれは彼のために元通りに繋がり彼は昇って行きます。

アッラーの使徒よ、あなたは私の父にも代えがたいお方です。

どうか私に教えて下さい。

私は正解を言い当てましたかそれとも問違っていたのでしょうか。

するとアッラーの使徒は次のように答えた。

あなたは部分的には言い当てましたが一部では間違っています（注）。

そこでアブー・バクルは“アッラーに誓ってアッラーの使徒よ、どうか私に間違った部分を教えて下さい”と言った。

すると彼は答えて“アッラーに誓を立てて、言ってはいけません”と言った。

（注）この解釈については色々な意見がある。
たとえば
①固形脂はクルアーンて蜂蜜はスンナ（預言者の慣行）であるべきだった。
②クルアーンの甘さと柔さとは蜂蜜のことだから固形脂の解釈が必要でありそれはスンナとすべきだった
③綱が切れた者は第三代カリフ・ウスマーンを暗示していること従って次の第四代カリフ・アリーについても言及すべきだった……

イブン・アッバースは次のように伝えている
ウフド（の戦い）から戻ってきた男が預言者のもとにやって来て次のように言った。
アッラーの使徒よ、私は昨夜夢で脂肪と蜂蜜をしたたらせる雲を見ました。
後は前記のハディースと同じである。

イブン・アッバース、または**アブー・フライラ**が次のように伝えている
ある男がアッラーの使徒のもとへやって来て次のように言った。
私は夜夢の中で雲を見ました。
以下は前記のハディースと同じである。

イブン・アッバースは次のように伝えている
アッラーの使徒は教友達によく次のように語っていた。
あなた達の中で夢を見た者はそれを話してみなさい。
私がその者のためにそれについて解釈してあげます。
そこへ一人の男がやって来てこう言った。
アッラーの使徒よ、私は夢の中で雲を見ました。
以下は前記のハディースと同じである。

預言者の夢について

アナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私はある夜寝ている者が見るもの（夢）を見た。

それはあたかも私達がウクバ・ビン・ラーフィウの家にいてそこへ新鮮なイブン・タープのなつめ椰子の実（注）が私達のところに持って来られた。

そこで私はそのことを現世においては私達には栄誉があり、来世においては良い結果があり、また我々の宗教は確かに完結したことと解釈した。

（注）イブン・ターブはマディーナの住人の一人の名前であるがここではなつめ椰子の種類の一つの名称として使われている

アブドッラー・ビン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私は夢の中でミスワーク（注1）を使っている自分を見た。

そのとき二人の男が私を（ミスワークを取るために）引張りあった。

そのうちの一人は他方の者よりも年上だった。

そこで私は、ミスワークを若い男に渡した。

しかしそのとき"年上の者へ"と言われたので私はそれを年上の方に渡した（注 2）。

（注1）砂漠に生えている灌木の枝でアラブではこれを歯ブラシとして古くから用いていた

（注 2）預言者は夢の中でも神の啓示または指示を受けることがこれによってよくわかる

アブー・ムーサーは預言者が次のように語ったとして伝えている

私は夢の中で自分がマッカからなつめ椰子の生えている土地へ移住するところを見た。

私はそこをヤマーマかハジャル（注）だと思った。

ところがそこはヤスリブの町でした。

また私は夢の中で自分が剣を振り回しているところを見た。

そのときその剣の先の方が折れてしまいました。

そしてそれはウフドの戦いの日に信者達が被る災難のことでした。

それから私はそれをもう一度振り回しました。

するとそれは以前よりもずっと立派になりました。

つまりこれはアッラーが勝利と信者達の結束をもたらしたということでした。

また私は夢の中で（ほふられる）雌牛の一群を見ました。

そしてアッラーこそ恩恵者であるところを見ました。

するとそれらはまずウフドの戦いの日の信者の一団を意味し、また恩恵とはその後にアッ

ラーが授けて下さった良いこととバドルの戦いの後にアッラーが私達に授けて下さった真理の報酬のことを意味していました。

（注）バハレーン地方の一都市名

イブン・アッバースは次のように伝えている

大嘘つきのムサイリマ（注）が預言者（ムハンマド）の時代にマディーナにやって来た。
そこで彼は次のように言いはじめた。
ムハンマドが私を彼の後継者とする指示を出すならば私は彼に従いましょう。
ところでそのとき彼はそこへ大勢の彼の部族の者を連れて来ていた。
それで預言者はサービト・ビン・カイスを連れて彼の方に近づいてきた。
そのとき彼（預言者）はなつめ椰子の小枝を一本手にしていた。
こうして彼は仲間とともにいるムサイリマの前に来て立ち止まりこう言った。
たとえお前さんがこの一本の小枝を私に求めたとしても私はこれをお前さんには渡さない。
私はお前さんのことでアッラーの命令に背くつもりは決してない。
もしお前さんが私が言うことに顔をそむけるならばきっとアッラーはお前さんを殺すに違いない。
私は今お前さんに関して私が（夢で）見たその通りのものをお前さんを前にして見ている。
ここにいるのはサービトである。
彼が私に代ってお前さんに答えるだろ。
それから彼（預言者）は彼（ムサイリマ）の前を立ち去った。
ここでさらにイブン・アッバースは次のように伝えている。
そこで私は預言者の言葉“お前さんはお前さんに関して私が夢で見せられた通りである”について尋ねた。
そこでアブー・フライラは預言者が次のように語ったとして私に伝えた。
私は寝ているとき自分の両手に金製の腕輪をしている自分を夢の中で見た。
そしてそれら（二つの金の腕輪）が私を不安にした。
すると夢の中でその二つの腕輪を吹くようにと私に啓示された。
そこで私はそれを吹くとそれは飛んでいってしまった。
私はその二つを私の死後に出現する二人の大嘘つき者であると解釈した。
そしてそのうちの一人はサヌアーのアンスィーでありもう一人はヤマーマのムサイリマでした。

（注）預言者の他界後には自ら預言者を名乗って離反者達を率いて大反乱を起した。
イスラーム史上で大嘘つきの偽預言者のムサイリマとして知られている

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私は寝っている間に大地の宝庫に連れてこられ両手に金製の腕輪をつけられた。

それ（金製の腕輪）は私にとって大きな重荷となり、私に不安をつのらせた。

ここで私は（夢の中で）その二つの腕輪を吹くように啓示された。

そこで私がそれを吹くとそれは飛んでいってしまった。

それで私はその二つの腕輪を私を真中において（アラビア半島の両端に）住んでいる二人の大嘘つきであると解釈した。

即ち私をはさんでその一人はサヌアーの出でありもう一人の方はヤマーマの出である。

サムラ・ビン・ジュンダブは次のように伝えている

預言者は彼がスブフ(早朝)の礼拝を済ませたときは彼らの方に顔を向けてこう言ったものでした。

あなた達の内で誰か昨夜夢を見ましたか。

功徳の書

預言者の家系の功徳と紹命体験以前（注）にも石が彼に挨拶をしていたこと

（注）預言者として選ばれて啓示が下る以前

ワースラ・ビン・アスカウはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

確かにアッラーはイスマイールの子孫の中から（最良の民として）キナーナ族を選んだ。

またキナーナ族の中から（最良の部族として）クライシュ族を選んだ。

そしてクライシュの中から（最良の支族として）バニー・ハーシム（ハーシム家）を選んだ。

それからバニー・ハーシムの中から（最良の人間として）私を選んだ。

ジャービル・ビン・サムラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私は啓示を受ける前にマッカで私に挨拶をしていた石をよく知っている。

今もなおそれをよく知っている（注）。

（注）預言者ムハンマドの数少ない奇跡の一つである。

ただしアッラーの目からみれば奇跡でも何でもない。

クルアーン第 2 章 74 節には「ほんとうに岩の中には……アッラーを畏れて崩れ落ちるものもある。」とある

全ての被造物中我らの預言者が特に優れていること

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私は最後の審判の日、人類の長となる。

また私は墓から復活する最初の者である。

また私は最初の取り成し者であり、その取り成しが受け入れられる最初の者である。

預言者の奇跡について

アナスは次のように伝えている

預言者は水を持ってくるように人を呼んだ。
そして彼に底の浅い縁の広い容器が持ってこられた。
そこで人々はウドゥー（清浄行為）を始めた。
そして私は人々の数は 60 人から 80 人の間であると推定した。
そのとき私は彼（預言者）の指の間からこんこんと湧き出てくる水をながめていました。

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

私はアッラーの使徒を見ていました。
そのとき丁度アスルの礼拝の時刻になった。
それで人々はウドゥーのための水を探していたが探し出すことはできなかった。
するとアッラーの使徒のもとへウドゥーの水が持ち込まれた。
そこでアッラーの使徒はその容器の中に手を置いて人々にウドゥーをするように命じた。
ところが私はそのとき水が彼の指の下からこんこんと湧き出てくるところを見ました。
こうして人々は最後の一人まで全員がウドゥーを行った。

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

アッラーの預言者と彼の教友達はザウラー（注）に居りました。
彼は水の入った容器を持ってくるように人を呼び、それから彼は手の平をその中に置きました。
すると彼の指の間からは水がこんこんと湧き出てきました。
そこで彼の教友達全員がウドゥーをしました。
さて伝承者の一人（カターダ）はそこでこう伝えています。
私は“アブー・ハムザよ、彼らは何人いましたか”と尋ねた。
すると彼は“彼らは約 300 人でした”と答えた。

（注）マディーナのモスクの近くにあったバザールの一地名

アナスは次のように伝えている

預言者はザウラーに居ました。
そして彼のもとに水の入った容器が持ち込まれました。
しかし水の量は彼の手の指を完全に浸すほどではなかった。
それからアナスは前記と同様のハディースを述べた。

ジャービルは次のように伝えている

ウンム・マーリク（マーリクの母）が皮袋の中から固形油を預言者に贈っていた。

そして彼女の子供達が彼女のもとにやって来て調味料を求めたが、そのとき彼らには他に何も調味料はなかった。

そこで彼女は（その中から）預言者への贈物をしたもの（皮袋）のところに行きましたがその中に未だ脂肪が残っていることに気が付いた。

それからそれは彼女の家の調味料をずっと供給しつづけたのですが遂に彼女はそれを完全に絞り出してしまいました。

そして彼女は預言者のもとに行き（事の次第を話したが）そのとき彼は"あなたはそれを完全に絞り出してしまったのですか"と尋ねたので彼女は"はい"と答えた。

すると彼はこう言った。

もしあなたがそれをそのままにしておいたならばそれはずっと（固形油を）供給しつづけたであろうに

ジャービルは次のように伝えている

一人の男が預言者のもとにやって来て食べ物を求めた。

そこで彼は大麦半ワスク（注）をその男に与えた。

ところでその男の妻および彼ら二人の客はそれをずっと食べつづけたのですが（あまりにも量が減らないので）遂に彼はその量を計った。

そして彼は預言者のもとに行き（事の次第を話し）ました。

そこで預言者はこう言った。

もしあなたがその量を計らなかったなら、あなた達はそれを食べつづけ、それはあなた達のためにいつまでも残りつづけていたでしょう。

（注）1 ワスクは 60 サーアでそれはヒジャーズでは 320 ラトルである

ムアーズ・ビン・ジャバルは次のように伝えている

タブークの戦いの年だったが私達はアッラーの使徒と一緒に遠征に出ました。

そのとき彼は複数の礼拝を合わせて一緒に行った。

彼はズフルの礼拝とアスルの礼拝をまたマグリブの礼拝とイシャーの礼拝を合わせて一緒に行った。

ある日彼は礼拝を遅らせた。

それから彼は（テントから）出て来てズフルとアスルの礼拝を合わせて一緒に行った。

そしてまた入って行った。

その後にまた出て来て今度はマグリブとイシャーの礼拝を一緒に合せて行った。

そして彼は次のように言った。

アッラーがお望みならばあなた達はタブークの泉に明日着くでしょう。
だが夜明けになるまではそこには着くことはないだろう（注）。
それであなた達の内でその泉に到着した者は私が行くまでその水に触れてはいけません。
さて私達はそこに到着したが私達より先に既に二人の男が到着していた。
そして泉の水はサンダルの皮紐のようにほんの少しちょろちょろと流れているだけでした。
そこでアッラーの使徒はその二人に“あなた達はこの水に触れたか？”と尋ねると二人は
“はい”と答えた。
それで預言者は二人を叱りつけて二人にはアッラーが望まれる通りのことを言った。
それから彼らは手で泉の水を少しづつすくいあげたわけですが、水がある程度溜ったの
でそれでアッラーの使徒が両手と顔をそれで洗った。
そしてそれからそれを彼は泉に再び戻した。
すると泉から水がこんこんと流れ出し、それで人々は喉を潤すことができた。
それから彼は次のように言った。
ムアーズよ、あなたが長生きをしたならば、まさにここが数々の果樹園で満たされる光景
を見ることになるでしょう。

（注）行軍は夜間にも行われた。
またアラビアの一日は日没から始まって次の日没で終った

アブー・フマイドは次のように伝えている
私達はタブークの戦いにアッラーの使徒と一緒に出陣した。
私達はある女性の所有する果樹園のほとりにあるワジ・クラー（クラー峡谷）に着いた。
すると彼はこう言った。
その果樹園（の収穫物の値段の合計）を推定しなさい。
そこで私達はそれを推定したがアッラーの使徒はそれを 10 ワスクと推量した。
そして彼はその女性にこう言った。
「アッラーの御心にかない私達が再びあなたのところに戻ってくるまでにその合計を実際
に見積もっておいて下さい。」
こうして私達はそこを出発してタブークに到着した。
そのときアッラーの使徒はこう言った。
「今夜強風が私達を襲い誰一人として起きてはいられないでしょう。
だからラクダを持っている者は足かせをしっかりかけて置くことです。」
さて（預言者の言葉通りその夜）強風が吹いたのです。
しかし一人の男が起き上がり風にあおられてタイイ地方の二つの山（注 1）の間まで一気
にふっ飛ばされてしまった。
それからアイラ（注 2）の族長アルマーウという者の息子の使者が手紙をもってアッラーの

使徒のもとにやって来た。
そして彼は預言者に白い雌ラバを進呈した。
それでアッラーの使徒は彼（アイラの族長）に返書を書き送りこちらからは上衣を進呈した。
それから私達は引き返し例のワジ・クラーにたどり着いた。
そこでアッラーの使徒は“果樹園の収穫はどれ位でしたか？”とその所有者の女性に尋ねた。
すると彼女は“10 ワスクでした”と答えた。
そこでアッラーの使徒はこう言った。
「私は先を急いでいます。
あなた達の中で先を急ぐ者は私と一緒に来なさい。
また残りたい者はこのまま残りなさい。」
こうして私達は旅立ちマディーナの郊外まで戻って来た。
そこで彼はこう言った。
「これはターバ山であり、これがウフド山であり、あの山は我々に親しみ我々もまたそれに親しんでいます。」
それから彼は次のように語った。
「アンサール（注 3）の中で最良のファミリーはバニー・ナッジャール家の人々であり、それからバニー・アブドル・アシュハル家であり、それからバニー・アブドル・ハーリス・ビン・ハズラジュ家であり、それからバニー・サーイダ家である。
そして全てのアンサールのファミリーには功徳がある。」
その後サアド・ビン・ウバーダが私達に追い付いた。
それでアブー・ウサイドが彼にこう言った。
「見たか、アッラーの使徒はアンサールのファミリーの全てに功徳があるとされたが、我々（のファミリー）を後回しにしました。」
そこでサアドはアッラーの使徒に会い彼に次のように言った。
「アッラーの使徒よ、あなたはアンサールのファミリーの全てに功徳があるとされましたが、我々を後回しにしました。」
そこで彼は「あなた達は既に優秀な人々の仲間となっているということだけでは不充分なのですか？」と言った。

（注 1）イエメン系の大部族タイイ族の領界内の有名な山でラジャウ山とサルマ山のこと

（注 2）アカバの北に位置する

（注 3）マディーナ土着の全住民でアンサールとはイスラームの支援者の意味、当時のイスラーム勢力の大半を占めていた人々である。

尚ナッジャール家は預言者の祖父の母の里でマディーナでは預言者に最も血縁の絆が強いファミリー
同様のハディースが**アムル・ビン・ヤヒヤー**によって“全てのアンサールのファミリーには功徳がある”まで伝えられている。
しかしサアド・ビン・ウバーダの話は伝えられていない。
また伝承者の一人ウハイブは“それでアッラーの使徒は彼に返書を書き送り”の代りに“それでアッラーの使徒は彼らの街について彼に手紙を書いた”とある。

預言者のアッラーへの信頼と人々がアッラーの預言者に対する攻撃や誘惑に対するアッラーの庇護

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている

私達はアッラーの使徒と一緒にナジュド方面に遼征に出た（注 1）。

そしてアッラーの使徒は。刺のある潅木が生い茂っているワジ（注 2）で私達に追いついた。

それからアッラーの使徒は木の下に腰をおろし剣を木の枝にかけた。

人々も木陰を求めてワジの中に散らばった。

そこでアッラーの使徒は次のように話しはじめた。

「私が寝ているとき、一人の男が私に近づき、そして彼は剣を取り上げた。

私が目覚めたときには彼は私の枕元に立っていたが私はそこに抜き身の剣が彼の手元にあることをほとんど気付きませんでした。

そして彼は私にこう言った。

『誰が一体私からお前を守っているのか？』

そこで私は『アッラーである』と答えた。

するとまた彼は『誰が一体私（の危害）からお前を守っているのか？』と言った。

そこで私は『アッラーである』と答えた。

すると彼は剣を鞘に納めた。

その者こそほらここに座っている者です。」

それからアッラーの使徒はともかく彼を逮捕しませんでした。

（注1）ガトファーン族への遠征のこと

（注 2）語源はアラビア語のワジで意味は涸れ谷、涸れた渓谷、涸れ川等の意

預言者の教友の一人であった**ジャービル・ビン・アブドッラー・アンサーリー**はこう伝えている

彼は預言者とともにナジュド方面の遠征に出陣した。

そして預言者が戻る際に彼もまた帰途についた。

こうしたある日のこと彼らは昼寝の睡魔に襲われた。以下は前記と同様のハディースを伝えた。

ジャービルは次のように伝えている

私達はアッラーの使徒と一緒に進んで行き、ザート・リカーウという所に到着した。

以下は前記のハディースと同様である。

しかしここでは“それからアッラーの使徒は彼を逮捕しませんでした”の一文は伝えていない。

預言者は導きと知識とをたずさえて紹命されたことについてのたとえの解説

アブー・ムーサーは預言者が次のように語ったとして伝えている

アッラーが私に授けて下さった導きと知識はたとえてみれば大地に降った慈雨のようなものである。

大地には肥沃な土地もありそれは雨をうけて沢山の牧草を育てる。

また不毛な土地もある。

だがそれは水を溜めアッラーはそれを人々に役立たせ彼らはそれを飲みまたそれで家畜に飲ませたりする。

それから雨はほかの土地にも降る。

それは全くの不毛で水も溜めず草も育たない土地である。

つまり（最初のたとえは）アッラーの宗教についてよく考え、私に授けられたものをよく役立てて教えをまず知り、そしてそれを他人にも教える者のたとえである。

また（第二のたとえは）教えを直接には役立てない者のたとえである。

それから（最後のたとえは）私が授けられた教えを受け付けない者のたとえである。

信仰共同体（ウンマ）に対する預言者の憂慮と彼ら信徒に害を及ぼすものに対する警告

アブー・ムーサーは預言者が次のように語ったとして伝えている

私とアッラーが私に授けて下さったものをたとえるならばそれは次のようなことである。
ある男が自分の仲間の所にやって来てこう言った。
皆さん私は確かにこの目で（敵の）軍隊を見た。
私は率直な警告者です。
だから皆さんはただちに逃げる準備をしなければならない。
それで人々のうちのあるグループは彼に従い日暮れに旅立ちゆっくりと去っていった。
だがあるグループは彼を嘘付きよばわりしてそのまま彼らの家で朝を迎えた。
だが朝軍隊が彼らの所に攻め入り彼らを殺害し一人残らず斬殺してしまった。
つまり上の例は私に従い私が授かったものに従った者とまた逆に私に背き、私が授かった真理を嘘付きよばわりした者とのたとえである。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私と私の信仰共同体についてたとえればそれはある男が火を灯しそこに虫や蛾が群がり落ちはじめるようなものである。
つまり私があなた達の腰紐をつかんでそこに落ちるのを引き止めようとするがあなた達はそこに突進してしまうといった具合です。

同様のハディースが**アブー・ズィナード**によって伝えられている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私をたとえればそれは次のようなことである。
ある男が火を灯しその火の回りがぼっと明るくなったとき、明かりに群がった蛾や虫が火の中に落ちはじめ、彼が引き戻そうとするがそれらは彼を無視して火の中にどんどん突っ込んでいく。
つまりこれが私とあなた達についてのたとえである。
私はあなた達の腰紐をつかんで火に近づくことを禁じて“火に近づくな、火に近づくな”と叫ぶがあなた達は私を無視してその火の中に突っ込んでいってしまう。

ジャービルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私とあなた達のことをたとえれば次のようなことである。
ある男が火を灯すとバッタと蛾がその中に落ちはじめ、彼はそれらを火から守ろうとしている。

つまり私はあなた達の腰紐をつかんで火に近づくことを禁じるがあなた達は私の手から摺り抜けてしまう。

ムハンマドは最後の預言者であること

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

私と（他の）預言者達をたとえるならばそれはある男が「建物を立派に豪華に建て人々が〝私達はこの一個の煉瓦を除いてはこの建物よりも立派な建物は見たこともない」と言いながらその建物の周りを回りはじめた。

つまり私はそこの一個の煉瓦であったと言う訳である（注）。

（注）あと煉瓦一個で完成する建物は預言者の系列の全体像である。

最後の完成者は預言者ムハンマドで彼に先行する全ての預言者系列を認める立場かイスラームの立場であることかわかる

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私と私以前の預言者達をたとえるならばそれはある男が家を立派に豪華にそして完璧に建てたがその一角の一個の煉瓦分の場所だけが残っていた。

人々はその建物の素晴しさに驚いてその周りを回りはじめた。

そして彼らは口々に「どうしてここに煉瓦を置かないのですか？

そうすればあなたの建物が完成するのに」と言った。

さてムハンマド様はそこでこう言いました。

「私がその煉瓦だったわけです」

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私と私以前の預言者達をたとえるならば、それはある男が建物を立派に豪華に建てたがその一角の一個の煉瓦の場所だけが残っていた。

すると人々はその建物の素晴しさに驚嘆しその周りを回りはじめたが、口々にここの煉瓦はどうしてセットされないのかと言った。

さてここで預言者は私にこう言った。

「私こそがその一個の煉瓦であり最後の預言者です。」

ところで**アブー・サイード**は、アッラーの使徒が語ったとして伝えているが、それはわずかな表現の違いを除いて、前記ハディースと同じである。

ジャービルは預言者が次のように語ったとして伝えている

私と他の預言者達をたとえるならばそれはある男が館を完成させ完璧に建てたが、一個の煉瓦の場所だけが取り残されていた。

人々はその中に入りはじめたがその建物の素晴しさに驚嘆した。

しかし彼らは口々に「ここの煉瓦の（セットさるべき）場所がなければ完成するのに」と言っていた。
さてここでアッラーの使徒は次のように言った。
「私こそがその煉瓦の場所です。
私の出現により私は預言者達（の系譜）に封印をしたのです。」
同様のハディースがサリームによって伝えられている。
しかしここでは「館を完成させた」の代りに「立派に館を建てた」となっている。

至高なるアッラーが信仰共同体に慈悲をかけることを望んだとき共同体に先だって預言者を（永遠の地へ）連れ去ること

アブー・ムーサーは預言者が次のように語ったとして伝えている

アッラーは下僕達（人間）の共同体に慈悲をかけることを望んだときはその預言者の魂を共同体より先に抜きとる。

そして彼を共同体に先立つ先駆者となし（あの世で）彼に報いるのです。

だがアッラーが共同体の破滅を望んだときはそれを罰するが、そのとき（その共同体の）預言者は生きている。

つまりアッラーがそれを破滅させるとき預言者はそれを眺めている。

アッラーはそれを破滅させることによって彼を慰めるのです。

なぜなら彼らは彼を嘘つき呼ばわりし彼の命に従わなかったからです。

預言者のハウド（天国の溜池）とその特質

ジュンダブは預言者から直接聞いたとして次のように伝えている

私はハウドにあなた達より先に到着する者となる（注）。

（注）そして溜池を修理して水くみができるようにして君達を待っているの意

同様のハディースが**ジュンダブ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

サフルは預言者から直接聞いたとして次のように語ったとして伝えている

私はハウドにあなた達より先に到着する者となる。
そしてそこにやって来た者は水を飲み、その水を飲んだ者は決して喉が乾くことはない（注 1）
そこで確かに私の前に私が彼らを知りかつ彼らが私を知っている人々が現われる。
それから私と彼らの間に調停（交渉）が行われる。
ところで伝承者の一人アブー・ハーズィムは次のように伝えた。
ヌアマーン・ビン・アブー・アイヤースがこのハディースを聞いたがそのとき私は彼らにこのハディースを語っていました。
そこで彼はこう尋ねた。
あなたはサハルが言っているところをそのように聞いたのですか？
そこで私は“はいその通りです”と答えた。
アブー・ハーズィムはさらにつづけて次のように言った。
私はアブー・サイード・フドリーからもそれを聞いたということを証言します。
しかし彼は預言者が次のように言ったとして付け加えている。
私（預言者）は“彼らは私に従った者達です”と言う。
だが私はこう云われる。

“汝は彼らが汝のなき後に何を行ったかを知らない（注 2）”
そこで私は“私のなき後で宗教を変えた者を遠ざけたまえ”と言う。

（注 1）ハウドの水を飲むのは当然あの世の天国に入ってからのこと

（注 2）預言者の死後にイスラームの教えに改変を加えることを意味している

同様のハディースが**アブー・サイード・フドリー**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私のハウドの広さは一ヵ月の道のりである。

そして縦横同じ長さである。

その水の色は銀よりも白く、その香りはミスクよりもかぐわしく、そこにある水差しは天の星の数よりも多く、その水を飲む者は以後決して喉が乾くことがない。

アブー・バクルの娘のアスマーウはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている。

私はハウドの側に座っていてあなた達が私の前に来るところを見ている。

しかし幾人かの人々は私が到着する前につかまってしまう。

そこで私は次のように懇願する。

主よ、彼らは私に従い私の信仰共同体に居たもの達です。

だが私はこう云われる。

「汝は汝の後で彼らが何をしたか気付かないのか？

アッラーに誓って汝の後に彼らはきびすを返して逆戻りしつづけたのですよ」

ところで伝承者は以下のようにつけ加えた。

イブン・アブー・ムライカは祈願の言葉の中で次のように言っていたものでした。アッラーよ、私達がきびすを返さないようにまた私達の宗教に関して試されないように、あなたに救いを求めます。

アーイシャは次のように伝えている

私はアッラーの使徒が教友達と一緒に居るとき彼が次のように語っているところを聞いた。

私はハウドの側に居てあなた達の中から私の前に来る者を待っている。

しかしアッラーに誓って幾人かの者達が私に到着する前に妨げられている。

そこで私は確かにこう言います。

「主よ、彼らは私に従った者達であり、私の信仰共同体に居た者達です」

だがアッラーは「汝は汝の後に彼らが何を行ったかを知らない。

彼らはきびすを返しつづけたのである」と言います。

預言者の妻（の一人）である**ウンム・サラマ**は次のように伝えている

私は人々がハウドについて語っているところで聞いていました。

しかし私はそれまでにアッラーの使徒からそれについて聞いたことはありませんでした。

ある日、召し使いが私の髪をすいていたとき私はアッラーの使徒が“皆の衆”と言う声を聞いた。

そこで私は彼女に“後にして”と言うと彼女は“彼は男の人達を呼んだのであり女性は呼んでいません”と言った。

それで私は“私も皆の衆の一員ですよ”と言い返した。

いずれにせよアッラーの使徒はそのとき次のように言った。

「私はあなた達よりも先にハウドに到着する先駆者です。

あなた達の誰れもが私のもとに来るが迷ったラクダのように私から引離されて追放されるような事のなきよう注意しなさい。

さて私（預言者）は「これは一体どうしたことですか？」とアッラーに尋ねる。

すると私は次のように言われる。

『汝は汝の後で彼らが何をなしたかは知らないのだ。』

そこで私は「遠ざけたまえ」と言います。

また**ウンム・サルマ**は次のように伝えている

彼女は預言者がミンバル（説教台）の上で“皆の衆”と言う声を聞いた。

そのとき彼女は髪をすいていた。

彼女は髪すき女に向って“私の頭をそのままにしてまとめて”と言った。

以下は前記と同じハディースである。

ウクバ・ビン・アーミルは次のように伝えている

ある日アッラーの使徒は（ウフドへ）出かけて行きウフドでの殉教者達に対して死者への礼拝を行った。

それから彼は（マディーナに戻り）ミンバルに向かいそして壇上で次のように言った。

私はあなた達より先にそこへ到着する先駆者となるでしょう。

そして私はあなた達の証人となるでしょう。

アッラーに誓って私は今ハウドを目前にかい間見る思いです。

私は確かに大地の財宝の全ての鍵を与えられている。

または大地の全ての鍵を与えられている。

私はあなた達が私の後で多神教徒になることを心配しているのではなく、あなた達がこの世の財を競って集めるようになることを心配しているのです（注）。

（注）ここではイスラームの大征服によって彼らが大地の財宝を手に入れてこの世の財を競い合うことをある程度予告しているわけだが実際の史実もその通りに進行したと後代の人々には読みとれるハディースである

ウクバ・ビン・アーミルは次のように伝えている

アッラーの使徒はウフドでの殉教者達に対して死者への礼拝を行い、それから（マディーナへ戻り）あたかも彼は生きている者達と死んだ者達全てに別れを告げるかのようにミンバルに昇り次のように説教した。

私はあなた達よりも先にハウドに到着する先駆者となるでしょう。

その広さはアイラの町（注 1）とジュフファの町（注 2）の間ほどの広さである。

私はあなた達が私の後で多神教徒に戻ることを心配しているのではなく、あなた達がこの世の誘惑にかられて財を集めることで競うようになり、お互いに殺しあいあなた達以前の者が破滅したように破滅することを心配しているのです。
またウクバは次のように付け加えた。
これが私がミンバルの上でアッラーの使徒を見た最後でした。

（注 1）アカバの北の町でマディーナとダマスカスとエジプトの問の中継地点にある町として当時よく知られていた。
マディーナまでは 15 日行程、ダマスカスまでは 21 日行程、エジプトまでは 8 日行程の所に位置していた。

（注 2）マディーナとマッカの間にありマディーナからは 7 日間行程の所に位置していた

アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
私はあなた達より先にハウドに到着する先駆者となるでしょう。
（そこで）私はある人々と言い争うが彼らに譲歩することになりこう言います。
「主よ、彼らは私の仲間です、私の中間です。」
だが私は「汝は彼らが汝の後で（宗教に）改変を加えたことを知らない。」と言われます。

同様のハディースが**アアマシュ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは“私の仲間です、私の仲間です”の一語は伝えられていない。

同様のハディースが**アブドッラー**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

同様のハディースが**フザイファ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

ハーリサは預言者からの伝聞として次のように伝えている
彼のハウドはサヌアー（注）とマディーナの間ほどの広さである。
またムスタウリドが彼（ハーリサ）に“あなたは（水飲用の）容器について何か聞かなかったか？”と尋ねたが彼は“いいえ”と答えた。
するとムスタウリドはこう言った。
そこには星の数ほどの容器が見られるだろう。

（注）イエメンの首都名

ハーリサ・ビン・ワハブ・フザーイによって前記と同様のハディースが伝えられているが彼はムスタウリドの言葉は伝えていない。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた達の前にハウドはある。

その両岸の距離はジャルバ（注 1）とアズルフ（注 2）の間ほどである。

（注 1）アイラの近くにある地名でその住民はユダヤ人であった

（注 2）ヨルダンのシャウバクの近くの町でタブークからは 4 日行程あった。

また後に 658 年のスィッフィーンの戦いの後の和平交渉がここで行われた地点としても知られている

同様のハディースが**イブン・ウマル**によって伝えられているが、伝承者の一人イブン・ムサンナーは“…私のハウドはある”と伝えている。

同様のハディースが**ウバイドッラー**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは次のように付け加えられている。

私（ウバイドッラー）は彼に二つの町について尋ねた。

すると彼は次のように答えた。

それはシリア地方にある二つの町である。

その距離は三夜の行程である。

またイブン・ビシルの伝えるハディースでは三日間の行程とある。

同様のハディースが**イブン・ウマル**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた達の前にハウドはある。

その両岸の距離はジャルバとアズルフの間ほどである。

そこには天の星ほどの水差しがある。

そこへ来た者はそこの水を飲みその後決して喉が乾くことはない。

アブー・ザッルは次のように伝えている

私は“アッラーの使徒よ、ハウドの容器とは何ですか？”と質問した。

すると彼はこう答えた。

ムハンマドの魂を手中にするお方（アッラー）に誓って、その容器は空の星の数よりも多い。

それは雲のない闇夜の晩に見られる星の数です。
そのように天国の容器はある。
そしてその水を飲んだ者は決して喉が乾くことはない。
そこには天国から二つの水口（とい）が流れ込んでいる。
その水を飲んだ者は決して喉が乾くことがない。
その広さは縦も横も同じでアンマンからアイラまでの距離ほどである。
その水はミルクよりも白く蜂蜜よりも甘い、

サウバーンはアッラーの預言者が次のように語ったとして伝えている
確かに私は私のハウドの岸に居てイエメンの人々のために他の人々を追い出しています（注）
そして（ハウドの水が）溢れ出るように私は杖で（水面を）たたいています。
そこで彼はそれの幅の広さについて尋ねられ、彼は“それは私のいる所からアンマンまでの広さである”と答えた。
また彼はその飲み物について尋ねられ、彼は次のように答えた。
それはミルクよりも白く、蜂蜜よりも甘い。
またそこには天国を源としてほとばしる二つの水口がある。
一つは金でできていてもう一つは銀でできている。
このハディースはヒシャームによって伝えられているが以下の一節の最初の部分が少し違っている。
私は最後の審判の日にハウドの岸に居る。

（注）イエメン系の人々つまりここではマディーナの住民でありアンサールを優先している様が描かれている

サウバーンがハウドに関するハディースを伝えた。
ところで私（ムハンマド・ビン・バッシャール）はヤヒヤー・ビン・ハンマードに“これは私がアブー・アワーナから聞いたハディースである”と言った。
すると彼は“私もまたシュウバからそれを聞いた”と言った。
そこで私（ムハンマド・ビン・バッシャール）は“私にそれを伝えるためによくそれを検討しなさい”と言った。
それで彼（アブー・アワーナ）はそれをよく検討してそれを私に伝えた。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている
きっと私はある人々を私のハウドから追い出します。（人々は）丁度迷ったラクダが（水飲みの際に牧人によって）追い出されるように（追い出されます（注））。このハディースはア

ブー・フライラによって別の伝承者経路を経て伝えられている。（注）つまり迷ったラクダは拾得物としてはならないという掟があるから水際で他の牧人によって追い出されることになるのであろう

アナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
私のハウドの広さは、アイラとイエメンのサヌアーの間ほどである。
そこには水差しが空の星数ほどもある。

アナス・ビン・マーリクは預言者が次のように語ったとして伝えている
私の教友だった人達の中から幾人かの男達がハウドで私の方にやってくる。
私が彼らを見てそれで彼らが私の方にあがって来たときに彼らは道の途中で遮断される。
そこで私はこう言う。
『主よ、彼らは私の仲間です、仲間です。』
だがしかし私は『汝は汝の後に彼らが改変を加えたということを知らない』と言われます。

アナスは預言者から同じような意味のハディースを伝えている。

しかしここでは彼は次のように付け加えている。
その容器は星の数ほどもある。

アナス・ビン・マーリクは預言者が次のように語ったとして伝えている
私のハウドの両岸の幅はたとえばサヌアーとマディーナの間ほどである。

このハディースは**アナス**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは伝承者の一人がハウドの広さについて疑問を抱いて“もしくはマディーナとアンマンの間ほどある”と付け加えている。

アナスはアッラーの預言者が次のように語ったとして伝えている
そこでは金銀の水差しが空の星の数ほど見られるであろう。
またアナスによって同様のハディースが別の伝承者を経て伝えられているが、ここでは次のような表現をとっている。
もしくは空の星の数よりも多く……
ジャービル・ビン・サムラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
見よ、確かに私はハウドへあなた達より先に到着する先駆者となる。
その両岸の間の距離はサヌアーとアイラの間ほどもあり、そこの水差しは（数が多くて）星のようである。

アーミル・ビン・サアド・ビン・アブー・ワッカースは次のように伝えている

私はジャービル・ビン・サムラへ次のような手紙を書いてそれを召し使いのナーフィウに持たせた。

あなたがアッラーの使徒から聞いたことを私に知らせて下さい。

すると彼は次のように書いてきた。

私（ジャービル）は彼（預言者）が「私はハウドへ最初に到着する先駆者である」と言っているところを聞きました。

ウフドの戦いのとき天使ジブリール（注 1）と天使ミカーイール（注 2）が預言者と一緒に戦ったこと

（注 1）天使ガブリエル
（注 2）天使ミカエル

サアドは次のように伝えている

私はウフドの戦いの日にアッラーの使徒の右側と左側に白い衣をまとった二人の男を見た。
私はそれ以前にもそれ以後にもその二人を見たことがなかった。
つまり二人は天使ジブリールと天使ミカーイールである。

サアド・ビン・アブー・ワッカースは次のように伝えている

確かにウフドの戦いの日に私はアッラーの使徒の右側と左側に白い衣をまとった二人の男を見た。
その二人は彼を守って激しく戦っていた。
私はそれ以前にもそれ以後にもその二人を見たことがなかった。

預言者の勇気と彼の戦闘突撃について

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

アッラーの使徒は人々の中で最も卓越した方で最も寛大な方であり、また最も勇敢な方であった。

ある夜マディーナの人々はすっかり怯えて一部の人々は声のする方へ飛び出して行った。

そこで戻ってきたアッラーの使徒が彼らに出会った。

彼は声のする方へ彼らよりも先に飛び出していた。

彼はアブー・タルハの裸馬に乗っていて彼の首には剣を下げていた。

そして彼は「何も怖がるものはない、何も怖がるものはない」と言っていた。

そしてさらにこう言った。

「むしろ私達はそれ（この馬）が駿馬であることがわかった。」

もしくは「それは確かに駿馬だ。」

ここで伝承者は“それ以前はその馬は駄馬でした”と付け加えた。

アナスは次のように伝えている

マディーナに（人々の）怯えを誘う声が上がった。

そのとき預言者はアブー・タルハのマンドーブと呼ばれていた馬を借りそれに乗った。

そして次のように言った。

私達は何も怖いものを見つけなかった。

それ（馬）が駿馬であることがわかった。

だがシュウバによってこのハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。

しかし表現には多少の違いがあり伝承者イブン・ジャアファルは“私達の馬”と伝え、“アブー・タルハの（馬）”とは伝えなかった。

預言者は人々の中でも最もよく善行を施したお方であり、その寛大さは（間断なく）吹く風（注）のようである

（注）慈善の行為が万遍なくてかつ迅速であるたとえ

イブン・アッバースは次のように伝えている

アッラーの使徒は人々の中で最もよく善行を施しなさるお方であった。

彼はラマダーン月（断食の月）に最もよく善行を施しました。

天使ジブリールは毎年ラマダーン月にはその月が終るまで彼と出会っていました。

それでアッラーの使徒はクルアーンを彼（天使ジブリール）に誦んで聞かせつづけていました。

つまり天使ジブリールが彼（預言者）に会ったときにアッラーの使徒は間断なく吹く風のように迅速に万遍なく善行を施していたものです（注）。

（注）イスラームの施しはチャリティー以上の巾広い意味があり、ほとんど善行と同じである。

気持の良い候拶も施しならば笑顔も一つの施しと考えられている。

ラマダーン月にはいわゆる狭義の施しが盛んになるが、このことはイスラーム社会ではほとんど確立されている。

またクルアーンを 30 部に分けて読む伝統的慣習があるが、これも預言者の慣行に習ったものと思われる

このハディースは**ズフリー**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アッラーの使徒は人々の中でも最も素晴らしい人格の持ち主であったこと

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

私はアッラーの使徒に 10 年間仕えました。

アッラーに誓って彼は私に一度でも“チェ”などと不快な言葉を決して言わなかった。

また彼はことにあたって私に「なぜこのようなことをしたのか？」とか「なぜこのようにしなかったのか？」などと言ったことはなかった。

ところでアブー・ラビーウは次のように付け加えている。

それは「それは召使いが行うべきことではない」という一文である。

だが彼は「アッラーに誓って」の一言は伝えていない。

このハディースは**アナス**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アナスは次のように伝えている

アッラーの使徒がマディーナに移住して来たとき、アブー・タルハが私の手を取り私をアッラーの使徒の所に連れて行き次のように言った。

「アッラーの使徒よ、アナスは分別ある少年です。

ですから彼をあなたに仕えさせましょう。」

こうして私は旅の時も家に居る時も彼に仕えました。

アッラーに誓って彼は私が行ったことで“なぜこれをこのようにしたのか？”とかまた私が行わなかったことで

“なぜこれをこのようにしなかったのか？”などと私に言ったことはありませんでした。

アナスは次のように伝えている

私はアッラーの使徒に 9 年間仕えました。

だが彼が私に次のようなことを言ったという記憶が私には全くありません。

「なぜあなたはこれこれこうしたのか？」

また彼は決して私の欠点をとがめることもありませんでした。

アナスは次のように伝えている

アッラーの使徒は人々の中で最も素晴しい人格者でした。

ある日彼は用事のために私をお使いに出そうとした。

その時私は“アッラーに誓って私は行きません”と言った。

しかし私は心の中ではアッラーの預言者が命じたことだから私は行くつもりでいました。

こうして私は出て行き途中で市場で遊んでいる子供達の側を通った。

そのときアッラーの使徒が（そこへやって来て）後ろから私の首筋をつかんだ。

そこで私が彼の方を振り向くと彼は笑いながらこう言った。

「ウナイサ（注）よ、私が命じたところへ行きましたか？」

そこで私は「はいアッラーの使徒よ、今行くところです」と答えた。

またアナスは次のように伝えた。

アッラーに誓って確かに私は彼に 9 年間仕えました。

彼が私の行ったことで「なぜこれこれこのようにしたのか？」とか私の行わなかったことで「なぜこれこれこのようにしなかったのか？」と言ったという記憶は全くありません。

（注)アナスの縮少形で愛称として用いられている

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

アッラーの使徒は人々の中でも最も素晴しい人格の持ち主です。

アッラーの使徒が物を乞われて「駄目だ」と言ったことは全くない。むしろ彼は沢山の物を人々に施していたこと

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている

アッラーの使徒は物を乞われ「駄目だ」と言ったことが全くない。

このハディースは**ジャービル・ビン・アブドッラー**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

ムーサー・ビン・アナスは父からの伝承として次のように伝えている

アッラーの使徒はイスラームのために何か求められたとき彼は必ずそれを与えた。
それで彼のもとにある男がやって来て、彼はその男に山あいを埋め尽さんばかり沢山の羊の群れを与えた。
さてその男は彼の部族のもとに帰り次のように言った。
「皆さん、イスラームに入りなさい。
本当にムハンマドは貧窮を恐れる必要のないほど沢山の物をくださるのだから。」

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

ある男が預言者に山あいを埋め尽くす程沢山の羊の群れを求めた。
そこで彼はその男にそれを与えた。
さてその男は彼の部族のもとにやって来て次のように言った。
皆さん、イスラームに入りなさい。
アッラーに誓って本当にムハンマドは貧困を恐れることのないほど沢山の物をくださるのだから。

また**アナス**は次のように言っている。

その男は現世を求めてイスラームに入ったが、いずれ彼はムスリムになりイスラームは彼にとって現世やそこにある俗物よりもずっと好きなものとなることであろう。

イブン・シハーブは次のように伝えている

アッラーの使徒はあの征服の戦い、つまりマッカ征服を敢行した。
それからアッラーの使徒はムスリム達と出陣し、彼らはフナインで戦い、アッラーが彼（預言者）の宗教とムスリム達に勝利をもたらした。
そしてそのときアッラーの使徒はサフワーン・ビン・ウマイヤにラクダ 100 頭を与えさらに 100 頭、さらに 100 頭を与えた。
ところでサイード・ビン・ムサイブはサフワーンが次のように言ったとして伝えた。
アッラーに誓って、確かにアッラーの使徒は私に与えるものを与えて下さった。

かつて彼は私にとって人々の中で最も嫌いな人物でした。
だが彼は私に与えつづけとうとう彼は私にとって人々の中で最も愛する人物となった。

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
もし私達がバハレーンから富を得たならばこれもこれもこれもあなたに与えますと言って
彼は両手でそのことを示した。
だがアッラーの使徒はバハレーンの富を得る前に他界した。
そこでそのことは彼の後にアブー・バクルへ受け継がれた。
それで彼は（人々に）次のように呼びかけるように命じた。
「預言者に約束または貸付がある者は来るように。」
そこで私はやって来て預言者が次のように私に言ったと伝えた。
「もし私達がバハレーンから富を得たならばこれとこれとこれをあなたに与える。」
それでアブー・バクルは一つかみの金貨をすくいあげてそれを私にわたし、それから私に
「これを数えなさい」と言った。
私がそれを数えたところ、それは 500（ディーナール）あった。
それから彼は「それの二倍分もとりなさい（注）」と言った。

（注）つまり合計は 1500 ディーナール金貨の意

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている
預言者が他界したとき、アブー・バクルはアラーウ・ビン・ハドラミーから財が送られてきた。
それでアブー・バクルは次のように言った。
「預言者に貸付金がある者または彼から約束があった者は来なさい。」
以下は前記ハディースと同じである。

子供や家族に対する預言者の思いやりや、彼の謙遜さ、および彼の卓越した美徳について

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

アッラーの使徒は次のように伝えている。

今夜私に男の子が生れその子を私の父の名前であるイブラヒームと名付けた（注 1）。

それから彼はその子をアブー・ユースフと呼ばれる鍛冶屋の妻のウンム・サイフのもとに送った（注 2）。

それから彼（預言者）は彼の所へ急いで出かけ私は彼のお供をして同行した。

私達はアブー・サイフの所へ到着したがそのとき彼はふいごで火をおこしていた。

そのため家の中は煙で一杯であった。

そこで私はアッラーの使徒の前を急ぎ足で通り過ぎ「アブー・サイフよ、やめなさい」と言った。

そこへアッラーの使徒がやって来た。

それで彼は（仕事）をやめた。

そして預言者は子供を呼び子供を抱きしめアッラーが望みたまうことを言った。

ついでアナスは次のように語った。

私はアッラーの使徒の前でその子供が最後の息を引き取るところを見た。

そのときアッラーの使徒の両目からは涙が溢れていたがこう言った。

「目は涙し心は悲しみ（でも）私達は主の満足すること以外は何も言えません。

アッラーに誓ってイブラヒームよ、まこと私逢はあなたのために悲しみます。」

（注 1）ムハンマドの父はアブドッラーであるかここではユダヤ教、キリスト教、イスラーム教の教父預言者イブラヒーム（アブラハム）のこと。

この子はエジプトの支配者から預言者ムハンマドに送られた女奴隷のマリヤとの間に生れた。

ヒジュラ 2 年にマディーナで生れ 6-7 才で天折している

（注 2）多分当時の一般的風習に従って里子に出したの意であろう

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

私はアッラーの使徒よりも家族に優しい人を見たことがない。

（預言者の息子の）イブラヒームがマディーナの郊外の乳母のもとへ預けられていた。

それで彼（預言者）はよくそこへ出かけたが私達も彼の供をした。

そして彼がその家に入ると家の中には煙が充満していた。

なぜならその子の養父は鍛冶屋であったからです。

さて彼は息子を抱きしめキスをしてそれから帰ったものでした。
ところでアムルは次のように伝えている。
イブラヒームが死んだときアッラーの使徒は次のように言った。
イブラヒームは我が子、彼は乳飲み子のまま死んだ。
まことに彼には天国で離乳するまで乳母夫妻がついている。

アーイシャは次のように伝えている
遊牧民の一団がアッラーの使徒のもとへやってきて「あなた達は子供にキスをしますか？」と尋ねた。
それで彼らは「はい」と答えた。
ところが彼ら遊牧民は「しかしアッラーに誓って私達はキスをしません」と言った。
そこでアッラーの使徒は次のように言った。
もしアッラーが慈悲の心をあなた達から奪い取ったのであれば、私にはどうしようもありません。
ところでイブン・ヌマイルは「あなたの心から慈悲の心を奪い取ったならば」と伝えている。

アブー・フライラは次のように伝えている
アクーフウ・ビン・ハービスは預言者がハサン（注）にキスをしているところを見て次のように言った。
「私には十人の子供がいますが一人としてキスをしたことがない」するとアッラーの使徒は次のように言った。
慈悲をかけない者は決して慈悲をかけられないであろう。

（注）預言者の娘ファーティマの子供で預言者の孫

また同様のハディースがアブー・フライラによって別の伝承者経路を経て伝えられている。

ジャリール・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
人々に慈悲をかけない者には決してアッラーは慈悲をおかけにならない。
同様のハディースがジャリールによって別の伝承者経路を経て伝えられている。

預言者の慎み深さについて

アブー・サイード・フドリーは次のように伝えている

アッラーの使徒はカーテンの後ろの処女よりも慎しみ深い方でした。

彼が何かを嫌ったとき私達は彼の顔からそのことを察知した（注）。

（注）はずかしくて何も言えなかった様の意

マスルークは次のように伝えている

ムアーウィヤがクーファにやって来たとき、私達はアブドッラー・ビン・アムルを訪ねた。

すると彼はアッラーの使徒について語りこう言った。

彼は決して（言葉で）節度を失うことがなくまた決して他人をののしることはなかった。

そして彼はアッラーの使徒が次のように言ったとして伝えた。

あなた達の中で最も立派な人、それは道徳的に最も素晴しい人である。

ところでウスマーンは「彼がムアーウィヤと一緒にクーファへ来たとき」と言い以下は前記と同様のハディースを伝えた。

アアマシュは同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。.

預言者の微笑と彼の素晴らしい交際について

スィマーク・ビン・ハルブは次のように伝えている

私はジャービル・ビン・サムラに次のように尋ねた。

「あなたはアッラーの使徒と同席したことがありますか？」

すると彼は「はい、しばしば」と答えた。

そして彼は次のように言葉をつづけた。

彼はスブフの礼拝を行った場所から朝日が昇るまで離れることはなかった。

それで朝日が昇ったときに彼は立ち上がった。

それから彼ら（教友達）はお互に話しはじめジャーヒリーヤ時代の事を話題にしてはそれでもって笑っていました。

そのとき預言者は（満足げに）ただ（黙って）微笑んでいるだけでした。

預言者の女性達に対する思いやりについて、また彼がラクダ引きに女性達が乗っているときはゆっくりと引くように命じたこと

アナスは次のように伝えている

アッラーの使徒はある旅でアンジャシャと呼ばれる黒人の奴隷少年と一緒でした。

そしてその少年は歌いながらラクダを駆り立てていました。

そのときアッラーの使徒は彼にこう言った。

アンジャシャよ、ガラスの容器（注）を運んでいるのだからゆっくりとラクダを引いて下さい。

（注）ガラスの容器とはここでは女性を意味している

同様のハディースが**アナス**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アナスは次のように伝えている

預言者が彼の妻達の所にやって来た。

そのときアンジャシャと呼ばれるラクダ使いが彼女達が乗っているラクダを追っていた。

そこで彼は次のように言った。

おお災あれ、アンジャシャよ、ガラスの容器を運んでいるのだからゆっくりとラクダを引きなさい。

ところでアブー・キラーバは次のように言った。

アッラーの使徒はある言葉を口にしました。

それをあなた達の誰れかが口にしたならばあなた達はそのことで彼をとがめたことになるでしょう。

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

ウンム・スライムは預言者の妻達と一緒に居ました。

そのとき一人のラクダ引きが彼女達の乗っているラクダを引いていた。

するとアッラーの使徒は次のように言った。

アンジャシャよ、ゆっくり手綱を引きなさい。

ガラスの容器を運んでいるのだから。

アナスは次のように伝えている

アッラーの使徒のもとに美声のラクダ追いがいましたが、アッラーの使徒は彼に次のように言った。

アンジャシャよ、ゆっくり手綱を引きなさい。

ガラスの容器を毀さないように（つまり女性の弱さのこと）。

アナスは同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えた。
しかしここでは“美声のラクダ追い”とは伝えていない。

預言者の人々に対する親近感と人々が彼からの祝福を求めること

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えた

アッラーの使徒が夜明けの礼拝を終えたときはマディーナの召使い達が水の入った壷を持って来たものでした。

そして持ってこられた壷には彼が手を浸さなかった壷はなかった。

時々、彼らは寒い夜明けに彼のところにやってくることもあったが（嫌な顔一つすることもなく）彼はその中に手を浸しました。

アナスは次のように伝えている

私は床屋が預言者を散髪しているところを見ました。

そのとき教友達は彼の周りを囲んでいました。

なぜなら彼らは髪の毛一本でも人の手の中以外に落ちることを望まなかったからです。

アナスは次のように伝えている

多少精神的障害がある女性がいて彼女が次のように言った。

「アッラーの使徒よ、あなたに聞いて欲しいことがあります」

すると彼はこう言いました。

「誰々の母よ（注）、あなたの望む路地の方角を見なさい（そちらへ行きましょうの意）

そこであなたの用件を済ますためです」こうして彼は彼女の用件が済むまで路地の隅に彼女と一緒に居ました。

（注）誰々の母という呼び方は婦人に対する敬称である

預言者は罪になることを遠ざけ、またアッラーの禁じたことが犯されるとアッラーに代って復讐すること

預言者の妻**アーイシャ**は次のように伝えている

アッラーの使徒はそれが罪にならないものであり、二つの事柄の内から一つを選ばなければならないものであれば容易な方を採用した。
もしそれが罪になるものであったならば彼は人々の中でも最もそれを遠ざける人でした。
またアッラーの使徒はアッラーが禁じたことが犯された場合を除き己れ自身のために復讐することはなかった。

同様のハディースが**アーイシャ**によって伝えられている。

イブン・シハーブは同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒は一方が他方より容易である二者択一を迫られたときには、それが罪なものでなければ容易な方を選択した。
またもしそれが罪なものであったならば、彼は人々の中でも最もそれを遠ざける人でした。

このハディースは**ヒシャーム**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしそれは"容易な方を選択した"の一文までであり、残りの部分は伝えていない。

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒は決して自らの手で誰れも殴ったことはなかった。
女性も召し使いも殴ったことはなかった。
ただ彼はアッラーの道のために戦っていた。
また彼は自分が被害を被ることによってそれで復讐することはなかった。
しかしアッラーが禁じたことで何かが犯されたならば彼はアッラーのために復讐をした。
同様のハディースが**ヒシャーム**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかし表現には多少の違いがある。

預言者の体から漂う芳香、また彼の体のなめらかさ、また彼に触ることによる祝福

ジャービル・ビン・サムラは次のように伝えている

私はアッラーの使徒と最初の礼拝を行った。
それから彼は家族のもとへ行ったが私も彼と一緒に同伴した。
その途中で彼は子供達に出会った。
すると彼は一人一人彼らの両ほほをさすり始めた。
また彼は私のほほもさすった。
そのとき私は彼の手の冷たさ（注）とその芳香を感じたがあたかもそれは香水商の皮製の臭い袋から今とり出したかのようでした。

（注）暑い所だから身体の冷さは熱ぼったさに比べればはるかによいことである。

アナスは次のように伝えている

私は預言者の体から漂う芳香よりよい香りのする竜涎香、麝香やその他の香水をかいだことがない。
また私は預言者の体よりもなめらかな錦や絹に触ったことがない。

アナスは次のように伝えている

アッラーの使徒は大変艶のある色白の膚でした。
また彼の汗（のしずく）はあたかも真珠のようでした。
また彼が歩くときは前かがみに歩いた。
また私は預言者の掌よりもなめらかな錦や絹に触ったことがないし、預言者の体から漂う芳香よりよい香りのする麝香や竜涎香をかいだことがありません。

預言者の汗の香りとそれによる祝福

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

預言者は私達の家に来ていた。

それで彼は汗をかき、そこへ私の母が瓶を持ってきて、汗をそれに集めはじめた。

そこで預言者が目を覚ましてこう言った。

「ウンム・スライムよ、あなたは何をしているのですか？」

すると彼女はそれに答えて次のように言った。

「これはあなたの汗ですが私達はそれを私達の香水に混ぜます。

それは最も香りの良い香水になります。」

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

預言者はウンム・スライムの家に入り、彼女が家に居ないとき、よく彼女のベッドで寝たりしていた。

ある日、彼がやって来て彼女のベッドで寝ていた。

そこで彼女は連れ戻され「確かに預言者があなたの家で寝ている」と言われた。

そこで彼女はやって来たが彼は汗をかいていた。

そして彼の汗がベッドの上の皮布の上ににじんでいた。

そこで彼女は小さな香水袋を開け、彼女はその汗を吸い取り、それを瓶の中に絞り出していた。

そのとき預言者は目を覚まして「スライムの母よ、何をしているのですか？」と尋ねた。

すると彼女はこう答えた。

「アッラーの使徒よ、私達はこれでもって私達の子供達に祝福を願っています。」

そこで彼は「あなたは正しいことを行いました」と言った。

ウンム・スライムは次のように伝えている

預言者は彼女の家を訪れそこで昼寝をしたのでした。

それで彼女は彼のために皮布を敷き彼はその上で横になった。

さて彼は大変汗をかいたが、彼女は彼のその汗を集めてそれを香水に混ぜたり瓶に入れていた。

そこで項言者は「ウンム・スライムよ、一体何をしているのですか？」と尋ねた。

すると彼女はこう言いました。

「あなたの汗を私の香水に混ぜています。」

啓示が預言者に下りるときは寒いときでも汗をかいたこと

アーイシャは次のように伝えている

たとえ寒い早朝に預言者に啓示が下りたときでも彼の額は汗をかいていた。

アーイシャは次のように伝えている

ハーリス・ビン・ヒシャームは預言者に「啓示はどのようにしてあなたに下りてきますか？」と尋ねた。

すると彼は答えてこう言った。

時には激しい鈴の音のようにして私にやってくる。

それは私にとって非常につらいものです。

それからそれが私から去ったのちに私はその啓示をきちんと記憶しています。

また時には男の姿をした天使がやって来ますが私は彼が言うことを全て記憶しています。

ウバーダ・ビン・サーミトは次のように伝えている

アッラーの使徒に啓示が下るときは、それによって彼は非常に疲れを感じて顔色が変っていた。

ウバーダ・ビン・サーミトは次のように伝えている

預言者に啓示が下るときは、彼は頭を下げていた。

また彼の教友達も頭を下げていた。

そして啓示の状態が彼から去ったとき彼は頭を上げた。

預言者は髪を垂らしたり分けたりしたこと

イブン・アッバースは次のように伝えている

啓典の民は髪を（額まで）垂らしていた。

そして多神教徒達は髪を頭の上で分けていた。

そしてアッラーの使徒はアッラーからの命令がない事柄について啓典の民の慣行をとり入れることを好んだ。

それでアッラーの使徒は額まで髪を垂らしていた。

それから後になって彼は髪を分けた（注）。

（注）後になってこの件に関して啓示を受けた証拠であり、髪は分けることが預言者の慣行即ちスンナであるゆえである

同様のハディースがイブン・シハーブによって別の伝承者経路を経て伝えられている。

預言者の容姿について、彼は人々の中で最もハンサムであった

バラーウは次のように伝えている

アッラーの使徒は中背であり、肩幅は広く、ふさふさとした髪は両耳たぶまで垂れていた。
彼は赤い（縞のある）上衣を着ており、私は彼よりハンサムな男を見たことがない。

バラーウは次のように伝えている

耳たぶまで巻毛を垂らした者の内で赤い縞の上着を着たアッラーの使徒よりもハンサムな男を私は見たことがない。
彼の髪の毛は両肩まで垂れていたが、その肩幅は広く背は高くも低くもなかった。
ところでアブー・クライグは「彼には髪の毛があった」の一文を付け加えている。

バラーウは次のように伝えている

アッラーの使徒は人々の中で最もハンサムな顔立をしていた。
また最も美しい姿をしていて背が非常に高くもなくまた低くもなかった。

預言者の髪の特長について

カターダは次のように伝えている

私はアナス・ビン・マーリクに「アッラーの使徒の髪はどのようでしたか？」と尋ねた。
すると彼は答えて次のように言った。
「彼の髪は軽くカールしていてひどい巻き毛でもなく全くの直毛でもなかった。
そしてそれは両耳と両肩の間に垂れていた。」

アナスは伝えている

アッラーの使徒の髪は両肩に触れる程度でした。

アナスは次のように伝えた

アッラーの使徒の髪は両耳の半分ぐらいまで垂れていた。

預言者の口と両目と両踵について

ジャービル・ビン・サムラは次のように伝えている

アッラーの使徒は頑丈な口で、(眼は)白目に赤が混ざり、やせた踵をしていた。

ところでシュウバは次のように伝えている。

私はスィマークに「頑丈な口とは何ですか？」と尋ねた。

彼は「大きな口である(注 1)」と答えた。

また私は「白目に赤がありとは何ですか？」と尋ねた。

彼は「切れ長の目である(注 2)」と答えた。

また私は「やせた踵とは何ですか？」と尋ねた。

彼は「ほっそりとして引き締った踵のことである」と答えた。

(注 1)アラブでは小さい口をよしとせず、大きい口がよしとされていた

(注 2)スイマークは明らかに解説を間違えたが、これは文字通り山目に赤が混じった状態の目であり、それはアラブ人にとってよいとされていた

預言者は白い上品な顔をしていた

ジュライリーは次のように伝えている

私はアブー・トゥファイルに「あなたはアッラーの使徒を見ましたか？」と言った。

すると彼は「はい」と答え、さらに「彼は白い上品な顔立ちでした」と言った。

ところでムスリム・ビン・ハッジャージュは次のように伝えている。

アブー・トゥファイルはヒジュラ 100 年に死んだ。

彼はアッラーの使徒の教友の中で最後に死んだ教友でした。

アブー・トゥファイルは次のように伝えている。

私はアッラーの使徒を見た。

いま地上に私以外に彼を見たものはいない。

そこでジュライリーが彼に次のように尋ねた。

「あなたは彼(預言者)をどのように見ましたか？」

すると彼「色白で上品な顔立で中肉中背でした」とのべた。

預言者の白髪について

イブン・シーリーンは次のように伝えている。

アナス・ビン・マーリクは「アッラーの使徒が髪を染めていたかどうか」を聞かれた。
それで彼は「彼には白髪はなかった」と言った。
ところでイブン・イドリースは「少ししか」と言わんばかりだったと伝えている。
それから彼は「アブー・バクルとウマルは髪をヘンナとカタム（注）で染めていた」と伝えた。

（注）ギンバイカに似た植物でアフリカの山地やその他亜熱帯地方に白生しその果実はペパーに似ていて中に実が一個入っている。
かつては頭髪を黒く染めたりインクとして用いられた

イブン・シーリーンは次のように伝えている

私はアナス・ビン・マーリクに「アッラーの使徒は髪を染めていましたか？」と尋ねた。
すると彼は次のように答えた。
「彼は髪を染めるほど年をとっていませんでしたが顎髭に少し白髪が混じっていました。」
そこで私はさらに「アブー・バクルは髪を染めていましたか？」と尋ねた。
すると彼は答えてこう言った。
「はい、ヘンナとカタムで染めていました。」

ムハンマド・ビン・シーリーンは伝えている

私はアナス・ビン・マーリクに「アッラーの使徒は髪を染めましたか？」と尋ねた。
すると彼は次のように答えて言った。
「彼には少しだけしか白髪がありませんでした。」

サービトは次のように伝えている

アナス・ビン・マーリクは預言者の髪の染めについて尋ねられた。
そこで彼はこう言った。
私は彼の頭髪にあった白髪を数えようと思えば数えることができました。
そして彼はさらにつづけて次のように言った。
彼は髪を染めませんでした。
だがアブー・バクルはヘンナとカタムで染めていました。
またウマルはヘンナだけで染めていました。

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えた

男が髪の毛や顎髭から白髪を抜き取ることは嫌われています。
そしてアッラーの使徒は髪を染めなかった。
彼の下口唇の下の顎髭には白いものが見え、またこめかみと頭髪のあちこちに少し白髪があった。

同様のハディースがムサンナーによって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アナスは預言者の白髪について尋ねられて次のように言った。

「アッラーは彼を白髪によって醜くしませんでした。」

アブー・ジュファイファは次のように伝えている

私がアッラーの使徒を見たとき、彼のここに白いものがあった。
それからズハイルは下口唇の下の顎髭のところに彼の指を当てた。
そしてジュファイファは「その時あなたはいくつ位でしたか？」と尋ねられて次のように答えた。
「そのとき私は矢を造りそれに羽根を付けていました（注）。」

（注）つまり子供ではなかったの意か

アブー・ジュファイファは次のように伝えている

私はアッラーの使徒を見て彼の頭に白いものを見ました。
確かに白髪が多少あった。
そして彼は（孫の）ハサン・ビン・アリーに似ていた。

同様のハディースが**アブー・ジュファイファ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは多少の表現上の違いがある。

ジャービル・ビン・サムラは次のように伝えている

彼は預言者の白髪について尋ねられて次のように答えた。
彼が頭に油を塗ったとき何も（白いものは）見えませんでした。
しかし油を塗らないときは何か（白いものが）現われていました。

ジャービル・ビン・サムラは次のように伝えている

アッラーの使徒は頭と顎髭の前部が白くなっていた。
そして彼が油を塗ったときにはそれは現われなかった。

しかし髪の毛が乱れているときには現われていました。
また彼には顎髭が多かった。
ここである男が「彼の顔は剣のようでしたか？」と尋ねた。
そこで彼は答えてこう言った。
「いいえ、だが太陽や月のようでした」（注）
つまり彼の顔は丸かった。
そして私は彼の肩のところに鳩の卵ほどの印を見ました。
その色は彼の体色と同じであった。

（注）剣も太陽も月もどれも輝いているが剣は細長いから比喩としては避けた

預言者性の印の確認と、その特性とそれがある預言者の体の場所について

ジャービル・ビン・サムラは次のように伝えている

私はアッラーの使徒の背中に印を見た。

それは鳩の卵のようであった。

同様のハディースが**スィマーク**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

サーイブ・ビン・ヤジードはこう伝えている

母方の叔母が私をアッラーの使徒のところへ連れて行き、次のように言った。

アッラーの使徒よ、ここにいる甥が（病気で）苦しんでいます。

すると彼は私の頭を撫で私に祝福があるようにと祈りそれから彼はウドゥー（清浄行為）をした。

そして私は彼のウドゥーをした水を飲んだ。

それから私は彼の後ろに立ち、両肩の間にある彼の印を見た。

それはあたかも丸屋根の飾り房のようでした。

アブドッラー・ビン・サルジスは次のように伝えている

私は預言者を見た。

そして彼と一緒にパンと肉を食べた。

または肉汁にひたしたパン、つまりサリードを食べた。

ところで私（次の伝承者のアースィム）は彼（アブドッラー）に「預言者はあなたのために罪の赦しを請いましたか？」と尋ねた。

すると彼は「はい、そしてあなたのためにも」と答え、次の一節を誦んだ。

「そして汝の罪に対してお赦しを請いなさい。また男性信者のためにもお赦しを請いなさい」（第 47 章 19 節）。

それから私（アブドッラー）は彼（預言者）の後ろに回った。

そのとき私は預言者性の印を彼の両肩の間の左肩の肩甲骨のところにそれを見た。

そこにはいぼのようなほくろがありました。

預言者の容姿と預言者として紹命体験したときと他界したときの年令（注）

（注）史実としては 40 才のとき最初の啓示を受けて預言者となり、その後マッカで 13 年間布教につとめ 53 才でマディーナに移住して、ここで 10 年間信仰共同体を率いて後 63 才で他界したとされている

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

アッラーの使徒は目立って背が高くも低くもなかった。
また彼は白子色でもなく濃褐色でもなかった。
またひどい巻き毛でもなく直毛でもなかった。アッラーは彼が 40 才になったとき預言者として紹命した。
それで彼はマッカで 10 年間、マディーナで 10 年間過ごした。
そしてアッラーは彼が 60 才になったときに彼を他界させた（注）。
そのとき彼の頭と顎髭には 20 本も白髪はなかった。

（注）マッカでは 13 年間布教したのであり、従って他界したのは 63 才のときであったので史実と違っている。
前項の（注)を参照
同様のハディースが**アナス・ビン・マーリク**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
ただしここでは“白子色”の代りに“輝く白色”と述べている。

臨終の日、預言者は何才であったか

アナス・ビン・マーリクはこう伝えている

アッラーの使徒は 63 才で逝去した。
アブー・バクルも 63 才で逝去した。
またウマルも 63 才でした。

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒は 63 才の時に他界した。
また同様のハディースがサイード・ビン・サイブによって伝えられている。
同様のハディースが**イブン・シハーブ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

預言者はマッカとマディーナに何年滞在したか

アムルは次のように伝えている

私はウルワに「（預言者は）マッカに何年滞在しましたか？」と尋ねた。

すると彼は「10 年」と答えた。

そこで私は「イブン・アッバースは 13 年と言いました」と言った。

アムルは次のように伝えている

私はウルワに「預言者はマッカに何年滞在しましたか？」と尋ねた。

すると彼は「10 年」と答えた。

そこで私は「イブン・アッバースは十数年と言いました」と言った。

するとウルワはアッラーに彼（イブン・アッバース）の罪の赦しを請い、こう言った。

多分彼は詩人の言葉からそれを引用したに違いない（注）。

（注）その詩人の名はアブー・カイス・サルマ・ビン・アブー・アナス

イブン・アッバースは次のように伝えている

アッラーの使徒は 13 年間マッカに滞在した。

そして彼は 63 才の時に他界した。

イブン・アッバースは次のように伝えている

アッラーの使徒は啓示を受けた後 13 年間マッカに滞在し、マディーナに 10 年間滞在した。

そして 63 才の時に死去した。

イブン・イスハークは次のように伝えている

私はアブドッラー・ビン・ウトバと一緒に座っていた。

その時彼らはアッラーの使徒の年令について話していた。

そこである者は「アブー・バクルはアッラーの使徒より年上だった」と言った。

するとアブドッラーは次のように言った。

「アッラーの使徒は 63 才で逝去した。

アブー・バクルも 63 才の時に死去した。

ウマルも 63 才で殺害された。」

ところでアーミル・ビン・サアドと呼ばれる男がジャリールからの伝承としてこう伝えている。

私達はムアーウィヤと一緒に座っていた。

そのとき彼らはアッラーの使徒の年令について話していた。

そこでムアーウィヤはこう言った。

アッラーの使徒は 63 才の時に逝去した。
アブー・バクルも 63 才の時に死んだ。
ウマルも 63 才の時に殺害された。

ジャリールは次のように伝えている
彼はムアーウィヤが次のように演説しているところを聞いた。
アッラーの使徒は 63 才の時に死んだ。
アブー・バクルとウマルの場合もそうだった。
そし私も（今）63 才である（注）。

（注）ウマイヤ朝の創始者ムアーウィヤも多分 63 才で自分の死を望んだかも知れない。
しかし彼は 80 才（ヒジュラ 60 年））まで生きた

ハーシム家の解放奴隷である**アンマール**は次のように伝えている
私はイブン・アッバースに「アッラーの使徒が死んだとき彼は何才でしたか？」と尋ねた。
すると彼は次のように言った。
彼（預言者）の部族に関係が深いあなたのような人がそのことについて知らないなどとは思ってもみなかった。
そこで私は「私は確かにそれについて人々に尋ねました。
しかし彼らは私と意見を異にしていました。
そこで私はこれに関してあなたの意見を聞いたわけです」と言った。
すると彼は「計算したいですか?」と尋ねたので私は「はい」と答えた。
そこで彼はこう言った。
まず 40 才の時に彼は預言者として紹命され、それから 15 年間マッカで過しました（注）。
彼は（その間）時には安全であったし、時には怖いめにも会いました。
そしてマディーナに聖遷してからそこで 10 年過ごしました。

（注）イブン・アッバースは紹命の年とマディーナへの聖遷の年とをそれぞれ一年として数えてそれらも含めてマッカ滞在の年として計算したものと考えられる

同様のハディースが**ユーヌス**によって他の伝承者経路を経て伝えられている。

ハーシム家の解放奴隷である**アンマール**はイブン・アッバースからの伝承としてこう伝えている
アッラーの使徒は 65 才の時に他界した。

同様のハディースが**ハーリド**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

イブン・アッバースは次のように伝えている

アッラーの使徒はマッカに 15 年間滞在した。
そのうち七年間は天使の声を聞きその輝きを目のあたりにしていたが何もはっきりとした姿を見なかった（注）。
そしてそれから八年間啓示を受けた。
そしてマディーナに 10 年間過ごした。

（注）ムハンマドが天使ガブリエルを人間の姿で見たのは 40 才以後のことだとされている。

預言者の名前、名称の教々について

ムハンマド・ビン・ジュバイル・ビン・ムトイムは父からの伝承として預言者が次のように語ったと伝えている

私はムハンマドである。
私はアフマドでもある。
また私はマーヒー（抹消者）であり、それは私によって不信心の罪が消されるからである。
また私はハーシル（召集者）であり、それは私の足元に人々が集められるからである。
また私はアーキブ（最終者）である。
さてアーキブとは彼の後には預言者が現われないことである。

ムハンマド・ビン・ジュバイル・ビン・ムトイムは父からの伝承としてアッラーの使徒が次のように語ったと伝えている

私はいくつかの名前をもっている。
私はムハンマドでありまたアフマドでもある。
また私はマーヒー（抹消者)であり、それは私によって不信心の罪が消されるからである。
また私はハーシル（召集者）であり、それは私の足元に人々が集められるからである。
また私はアーキブ（最終者）であり、その者の後には一人も(預言者は)現われない。
そしてアッラーは彼を憐み深い者（ラウーフ）、慈悲深い者（ラヒーム）と名付けた。

同様のハディースが**ズフリー**によって別な伝承者経路を経て伝えられている。
またシュアイブとマアマルの伝承では“私は預言者が……と言ったところを聞いた”と伝えている。
またウカイルの伝承ではこうなっている。
私はズフリーに“アーキブとは何ですか？”と尋ねた。
すると彼はこう答えた。
それは彼の後には預言者が現われない者のことです。
またマアマルとウカイルの伝承では“不信心者”とありシュアイブのそれでは“不信心”とある。

アブー・ムーサー・アシュアリーはこう伝えている

アッラーの使徒は私達に対して自分自身をいくつかの名前で呼んでいました。
そして彼は次のように言った。
私はムハンマドであり、アフマドであり、ムカッフィー（最終者）であり、ハーシルであり、改俊の預言者であり、慈悲の項言者である。

預言者のアッラーについての知識とアッラーに対する彼の強い畏怖の念について

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒があることを行いそれを合法とした。
そのことが彼の教友達の幾人かに伝わったが、あたかも彼らはそのことを嫌いそれを避けようとしたようだった。
そしてそのことが彼（預言者の耳）に伝わった。
そこで彼は演説を行い次のように言った。
なぜ私が合法としたことが彼らに伝わったのに彼らはそのことを嫌いそのことを避けたのか？
アッラーに誓って、私は彼らの間でもアッラーについては最も良く知っている。
そして私は彼らの間でも最も強い畏怖の念をアッラーに対して抱いている。

同様のハディースが**アアマシュ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒があることを合法とした。
ところが人々の幾人かはそのことを避けた。
そしてそのことが彼の耳に伝わり、彼は顔の怒りが現われるほど激怒した。
それから彼はこう言った。
なぜ私に合法とされたことを彼らは嫌うのか？
アッラーに誓って私は彼らの中でもアッラーについて最も良く知っている。
また私は彼らの中でも最も強い畏怖の念をアッラーに対して抱いている。

預言者への絶対服従

アブドッラー・ビン・ズバイルはこう伝えている

アンサールのある男がハッラ（注）にあるナツメヤシ用の水路のところでアッラーの使徒を前にしてズバイルと言い争った。

それでその男（アンサーリー）は「水を流すようにしろ」と言った。

だが彼（ズバイル）はそのことを拒んだ。

それでアッラーの使徒の面前で彼らは言い争った。

するとアッラーの使徒はズバイルにこう言った。

「ズバイルよ、あなたのナツメヤシに水をやりなさい。

それからあなたの隣人に水を流しなさい。」

それで例の男は怒って「アッラーの使徒よ、彼があなたの父方の叔母の息子だからでしょう」と言った。

すると突然アッラーの預言者の顔色が変りこう言った。

「ズバイルよ、水をやりなさい。

そして（囲いの）壁にあふれるまで水を溜めなさい」

さてズバイルは次のように言った

「私は以下の節はこのことに関して下されたものと考えます。

「だが汝の主にかけてそうではない。彼らの間の紛争について汝の裁定を仰ぎ汝が判決したことに彼ら自身不満を感じずに心から納得するまでは彼らは信じることはないだろう」

（第 4 章 65 節）。

（注）マディーナの近くの黒石の原

預言者への尊敬と必要でないことについて彼に沢山の質問をすることやその他彼に負担をかけることは避けるべきこと

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

私があなた達に禁じたことは避けなさい。

そして私があなた達に命じたことをできる限り行いなさい（注）。

誠にあなた方以前の人達は沢山の質問を（預言者達に）投げかけて、そして預言者の教えに異議ばかりを申し立てていた。

（注）預言者が命令も禁止もしていない事項は勿論、許容事項（ムバーフ）である。
ただし預言者の命令事項は義務事項（ファルド）ではあるが、これはあくまで各自の能力に応じた義務事項であることが示されている

同様のハディースが**イブン・シハーブ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

私があなた達に止めるように求めたものは止めなさい。

誠にあなた達以前の人達は（異議ばかり申し立てて）自ら破滅してしまった。

アーミル・ビン・サアドは父からの伝聞としてアッラーの言葉を次のように伝えている

ムスリム達の中でも最も罪深いムスリムはムスリム達に禁じられていなかったことに関して質問してそのためにそれがムスリム全体に禁じられてしまう、そうした質問をした者である（注）。

（注）預言者の命令でも禁止でもない場合は預言者の黙認事項（ムバーフ）となるが、これを色々と質問して禁止事項に追い込んでしまうということか

アーミル・ビン・サアドは父からの伝聞としてアッラーの使徒の言葉を次のように伝えている

ムスリム達の中でも最も罪深いムスリムは禁じられていなかった事柄について質問してそのことが彼の質問故に禁じられてしまうそうした質問をした者である。

同様のハディースがズフリーによって別の伝承者経路を経て伝えられているが伝承者の一人マァマルの伝えるハディースには次のように付け加えられている。

ある男が（預言者に）あることを尋ねたがその男はそれについて専らこまごまと詮索した。

アナス・ビン・マーリクはこう伝えている

アッラーの使徒に教友達についてのあることが伝わった。
そこで彼は演説を行い、こう言った。
「天国と地獄が私に提示された。
さても善悪に関して今日のような状態は見たことがない。
もし私が知っていることをあなた達が知ったならばきっとあなた達は少し笑い、沢山悲しむであろう。」
さて伝承者はさらに次のように伝えている。
アッラーの使徒の教友達にとってこれ程厳しい日はなかった。
彼らは頭を覆い泣き声をあげていた。
そこでウマルは立ち上ってこう言った。
私達はアッラーを（われらの）主となし、イスラームをば（われらの）宗教とし、ムハンマドを（われらの）預言者とすることに喜んで満足しています。
そのとき例の男が立ち上がり、突然「私の父は誰ですか?」（注）と言った。
それで預言者は「あなたの父は誰それです。」と答えた。
そしてそのとき以下の啓示が下った。
「信仰する者よ、もしあなた方に明白に示されると迷って悩まされることについては色々と尋ねてはならない」（第 5 章 101 節）。

（注）これは変な質問である。
母親の貞節を疑うような質問でクルアーンでも預言者の指示によっても不義はご法度であることは明らかなことだから

アナス・ビン・マーリクはこう伝えている

ある男が「アッラーの使徒よ、私の父は誰ですか？」と言った。
そこで預言者は「あなたの父は誰それです」と答えた。
そこに次の啓示が下った。
「信仰する者よ、もしあなた方に明白に示されると迷って悩まされることについては色々と尋ねてはならない……」（第 5 章 101 節）。

アナス・ビン・マーリクはこう伝えている

太陽が子午線を過ぎたときアッラーの使徒は（家を）出て彼らを先導してズフル（正午過ぎ）の礼拝を行った。
そして彼は礼拝最後のタスリーム（挨拶儀礼）を終えた後に彼は説教台（ミンバル）に上り、終末とその前に起る重要な出来事について述べた。
それから次のように言った。

「私に何か尋ねたい者は尋ねなさい。
アッラーに誓ってあなた達が私に尋ねたことについて私が答えない限り（私はこの場所を動きません）。」
さらにアナス・ビン・マーリクは次のように伝えている。
人々はそのことを聞いたとき大変涙を流したが、アッラーの使徒は繰り返し「私に尋ねなさい。」と言ったので、アブドッラー・ビン・フザーファが立ち上がり「アッラーの使徒よ、私の父は誰ですか？」と言った。
それで彼は『あなたの父はフザーファです。」と言った。
ところかアッラーの使徒が繰り返して「私に尋ねなさい」と言ったので、ウマルが膝まづき次のように言った。
「私達はアッラーをわれらが主とし、イスラームをわれらの宗教とし、ムハンマドをわれらの預言者とすることに喜んで満足しています。」
そしてウマルがそのように言っている間アッラーの使徒は黙っていた。
それからアッラーの使徒は次のように言った。
「破滅がすぐそこまで来ている。
ムハンマドの魂を手中にするお方に誓って、確かに私に天国と地獄が近いことが提示された。
この壁の側面のように近いことが。
さても私は善悪に関して今日のような状態を見たことがない。」
ここでイブン・シハーブは次のように伝えている。
ウバイドッラー・ビン・アブドッラー・ビン・ウトバが私に次のように語った。
アブドッラー・ビン・フザーファの母がアブドッラー・ビン・フザーファに次のように言った。
「私はお前より親不幸な子供を聞いたことがない。
お前の母親がジャーヒリーヤ時代の女達が行うような悪いこと（姦通を暗示）を行っていたなどと、しかも人々の目の前で（自分の）母親を侮辱した事が、それで済むと思っているのですか？」
それでアブドッラー・ビン・フザーファは次のように言った。
「アッラーに誓ってもし彼が私の父を黒人奴隷であると言っても私はそのことを受け入れたでしょう。」

同様のハディースが**ズフリー**によって伝えられている。
しかしここでは表現上に多少の違いがある。

アナス・ビン・マーリクはこう伝えている
人々はアッラーの使徒に彼が辟易するまでしつこく質問した。
それである日彼は出て行き説教台に登りこう言った。

「私に尋ねなさい。
あなた達が尋ねたことについて私はことごとく明らかにしよう。」
そして人々はそのことを聞いたときにあたかも悲劇的なことが実際に起ころうとしていると感じて口をつぐんで静まりかえり恐れていた。
さてアナスはつづけて次のように伝えている。
そこで私は左右を見回したが全ての者が服で頭をくるみこんで泣いていた。
するとモスクにいたある男が話を切り出した。
彼は彼の父が別の男であると言われて人々といつも口論していたのだが、彼は「アッラーの使徒よ、私の父は誰ですか？」と言った。
すると預言者は答えて「あなたの父はフザーファです」と言った。
それからウマル・ビン・ハッターブは次のように話しはじめた。
「私達はアッラーをわれらの主とし、イスラームをわれらの宗教とし、ムハンマドをわれらの預言者とすることに喜んで満足しています。
また私達は騒動の災いからのがれてアッラーにご加護を求めます。」
そこでアッラーの使徒は次のように言った。
「私は善悪に関して今日のような状態を見たことがない。
私に天国と地獄がはっきりと描き出された。
私はそれらをこの壁よりももっと近くに見ました。」

同様のハディースかアナスを通して**カターダ**によって伝えられている

アブー・ムーサーは次のように伝えている
預言者は彼が好まない事柄について尋ねられた。
そして彼にしつこく質問が殺到したとき彼は怒った。
それから彼は人々に「あなた達の思うがままに質問しなさい」と言った。
するとある男が「私の父は誰ですか？」と尋ねた。
預言者は「あなたの父はフザーファです」と答えた。
するとまた別の男が「私の父は誰ですか？」と尋ねた。
そこで彼は「あなたの父はシャイバの解放奴隷であるサーリムです」と答えた。
そのときウマルはアッラーの使徒の顔に怒りの気配を感じて次のように言った。
「アッラーの使徒よ、私達はアッラーに改悛いたします。」
ところでアブー・クライブの伝えたハディースでは次のようになっている。
彼（その男）は「アッラーの使徒よ、私の父は誰ですか？」と尋ねた。
すると預言者は「あなたの父はサーリムでシャイバの解放奴隷です」と答えた。

預言者が法的に言ったことには従わなければならない。しかし個人的見解として生活一般について述べたことは別であること

ムーサー・ビン・タルハは父からの伝聞として次のように伝えている

私は預言者と一緒にナツメヤシの木の近くにいる人々のそばを通りかかった。
すると彼は「あの人達は何をしているのですか？」と言った。
そこで彼らはこう言った。
「授粉しているのです。
彼らは雄しべを雌しべにつけて授粉して収穫を上げるのです。」
するとアッラーの使徒は「そのようなことが何かの役に立つとは思いません」と言った。
それで彼らの方はそのように知らされたので授粉を止めた。
しかし後にアッラーの使徒は（そのことにより収穫が減ったことについて）知らされた。
それで彼は次のように言った。
「そのこと（授粉）が彼らのためになるのならばそうしなさい。
あくまでも私はただそう（不要と）思い込んだまでですから。
私の思い違いで私を責めないで下さい。
でも私がアッラーについてあなた達に何か語ったならば必ずそれを守りなさい。
なぜならば私はアッラーについて決して間違いを言いません。」

ラーフィウ・ビン・ハディージュはこう伝えている

アッラーの預言者がマディーナに到着したとき、人々はナツメヤシの木に授粉していた。
そこで彼は「何をしているのですか？」と尋ねた。
すると彼らは「私達は授粉しているのです。」と答えた。
さてそこで彼はこう言った。
「たぶんあなた達はそのようにしない方が良いでしょう。」
そこで彼らはそのことを止めてしまった。
そのためにナツメヤシの実が落ちてしまったかまたは収穫が減ってしまった。
そして彼らはそのことを彼に伝えた。
すると彼はこう言った。
「まず私は単に人間です。
でももし私があなた達の宗教について命じたならば必ず守りなさい。
しかし私があなた達に（単なる個人的な）意見（注）を命じたのならばそれは私もただの人間であるということです。」
ところで伝承者のイクリマは「（彼は）このようなことを（言った）」と伝えた。
またマアキリーユは「すると（実が）落ちてしまった」とだけ伝え「または」以下には言及していない。

（注）つまり現世の生計にかかわること

アナスは次のように伝えている

預言者は授粉している人々のところを通りかかり「あなた達はそのようなことはしない方がよい。」と言った。

だがその結果、悪質のナツメヤシがとれた。

さてまた彼が彼らのところを通ったとき彼は「あなた達のナツメヤシは一体どうしたのですか？」と尋ねた。

すると彼らは「あなたはこれこれと言いました」と答えた。

それで彼は「あなた達はあなた達の世俗のことについては一番良く知っています。」と言った。

アッラーの使徒を拝顔する功徳およびそうしたい切望について

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

ムハンマドの魂を手中におさめているお方に誓って、私を見ることのできない日があなた達の誰にも必ずやって来る。

それから私を見ることが彼にとって彼の家族や彼らと共にある彼の財産よりももっと大切なこととなるでしょう。

同様のハディースがアブー・イスハークによって伝えられている。

しかしここでは多少の表現上の違いがある。

イーサー（イエス）の美徳

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている。

私は全人類の中でマルヤム（マリヤ）の息子（イエス）に最も近い親族である。
諸預言者達は母親違いの兄弟である（注）。
私と彼との間には預言者はいない。

（注）一神論的信条では同根であるが聖法や儀式の上では相違があるので異母兄弟にたとえたわけである

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

私は全人類の中でイーサーに最も近い親族である。
諸預言者達は母親違いの兄弟である。
私とイーサーの間には項言者はいない。

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

私は現世および来世において全人類の中でマルヤムの息子イーサーに最も近い親族である。
そこで彼らは「それはどのようなことですか？」と尋ねた。
そこで彼は次のように答えた。
「諸預言達は母親違いの兄弟である。
つまり彼らの母達は違うが、彼らの宗教（注）は一つである。
そして私達二人の間には預言者はいない。

（注）一神教の根本信条

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

生れてくる子供で悪魔が（彼を）苦しめない子供はいない。
それ故に子供は悪魔の苦しめにあって泣き叫ぶのである。
しかしマルヤムの息子と彼女だけは別であった。
それからアブー・フライラはつづけてさらに次のように言った。
もしあなたが望むならば次の一節を誦みなさい。
「あなたにお願い致します。どうか彼女とその子孫の考をいまわしき悪魔からお守り下さい」（第 3 章 36 節）
同様のハディースがズフリーによって伝えられている。
しかしここでは多少の表現上の違いがあり次のように述べている。

子供が生れると悪魔が彼に触れる。
そこで子供は悪魔が彼に触れるので声を立てて泣きはじめる。
またシュアイブの伝承にも多少の表現上の違いがある。

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
人は誰でも母親が生むときに悪魔が彼に触れる。
しかしマルヤムと彼女の息子だけは別である。

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
子供の叫び声は悪魔が苦しめるときに起る。

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
マルヤムの息子のイーサーは盗みを働いている男を見た。
そこでイーサーは彼に「あなたは盗みを働いたか？」と言った。
ところがその男は「いいえ、彼以外に神はないお方に誓って」と言った。
そこでイーサーはこう言った。
「私はアッラーを信じます。しかし私は白分自身を欺きました（注）。

（注)イスラームではイエスは特別な預言者として敬まわれているが神の子とは考えられていない。
ここではあくまでも一個の人間としての人間のもつ過失性を暗示しているものと思われる

イブラヒームの美徳

アナス・ビン・マーリクはこう伝えている

ある男がアッラーの使徒のところへやって来て「最も素晴しい彼造物よ」と言った。

そこでアッラーの使徒は「それはイブラヒームですよ」と言った。

似たようなハディースが**アナス**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
ただしここでは次のような表現をとっている。
ある男が"アッラーの使徒よ"と言った。
以下は前記ハディースと同じである。

同様なハディースが**アナス**によって預言者からの伝聞として別な伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

イブラーヒームは 80 歳の時に手斧で割礼をした。

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている。

我々は以下のイブラヒーム(の言葉)以上に疑いについてはっきりさせることを要求する権利があります。
即ち「彼(イブラヒーム)はこう言った。
「主よ、あなたは死者をどのようにして蘇らせられるのですか、私に見せてください」と言ったとき主は「では汝は信じておらないのか?(注 1)」と言われた。
彼(イブラヒーム)は「いえ、とんでもない。ただ自分の気持を安堵させたいだけです(注 2)」と言った」(第 2 章 260 節)。
またアッラーよ、ルート(ロト)に慈悲をおかけ下さい。
まことに彼は強力な支援者を求めていたのです(注 3)。
また私がもし預言者ユースフ(ヨセフ)と同じ位長く牢獄に閉じ込められた(注 4)としても私は私を招いた者に応えたであろう(注 5)。

(注 1)これは神からの重大な質問である。
預言者イブラヒームが一見来世の復活に疑いを抱いていたのではないかと思われるかも知れないが、そうではない。
それは以下の彼の答えの通りである

(注 2)「安堵させたい」の一節は信仰の上にさらにその信仰を強化したいの意であろう。

即ち肉体的感覚を通して強化したい意味である。
従って信仰にはその奥深さによって段階があることもわかる

（注 3）預言者ルート（ロト）の民、即ちソドムの町の住民は男色狂で彼の大切な男性客をねらって力づくでも襲おうとした。
ルートの信仰にはいささかもゆるぎはなかったがあまりの出来ごとに気が動転して、そのとき彼は強力な彼の部族民がいて彼らを追い払ってくれればよいのにと願ったということ（第 11 章 80 節）

（注 4）預言者ユースフ（ヨセフ）は悪いエジプトの女達によってあらぬぬれ衣を着せられて長い間獄中にあった。
その後王様の夢解きのことで出獄のチャンスがあったが、彼は王様の使者にまずは以前のぬれ衣事件の取調べを要求して公けに身の明かしが晴れるまでは動こうとしなかった（第 22 章 50 節）。
勿論神は彼の潔白をはじめからよくご存知だったことは申すまでもない

（注 5）この一見寄せ木細工的な重層したハディース全体が意味するところは次のように考えられる。
預言者であっても彼は生身の一人の人間であり、この世の肉体を伴った生活の中では目に見える証拠を必要とし、また時には親族その他の人々の支援を必要とする。
そして社会生活の上では名誉と尊敬によって支えられて生きたいと願うものである

同様のハディースが**ズフリー**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・フライラによって前記と同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは次のような表現をとっている。
アッラーよ、ルートをお赦し下さい。
彼は強力な支援者を求めていました。

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
預言者イブラヒームは三回以外は決して嘘を付いたことはない。
そのうちの二つはアッラーの存在を知らしめるためであり、それは「私は病気です（注１）」と「だが彼らの中の一番大きいこれ（偶像）がそのようにした（他の偶像を破壊した）」という彼の言葉である。
後の一回はサーラ（イブラヒームの正妻）に関することである。
つまり彼は高慢で残忍な暴君（注 2）のいる土地（エジプト)へサーラを伴ってたどり着いた。

彼女は人々の中でも際立って美しかったので彼は彼女にこう言った。
「もしここの暴君があなたが私の妻であることを知ったならば彼はあなたを私から奪い取るであろう。
それでもし彼があなたに尋ねたならば、あなたは私の妹であると彼に告げなさい。
なぜなら確かにあなたはイスラームにおいて私の妹であるのだから。
また私はこの地上で私とあなた以外にムスリムを知りません。」
こうしてイブラヒームがその土地へ入って行ったとき暴君の仲間の者が彼女を見て彼（暴君）のもとにやって来て次のように言った。
「ある女性があなたの土地へ来ましたが彼女はあなたのものになる以外はありませんね。」
そこで彼（ファラオ）は人を彼女に送り、かくて彼女は連れてこられた。
そこでイブラヒームは礼拝をして祈った。
彼女が彼（ファラオ）を訪れたとき彼（ファラオ）は自制できずに彼女に手を延ばした。
しかし彼の手は強く金縛りになって、動かなくなってしまった。
そこで彼（ファラオ）は彼女にこう言った。
「アッラーに私の手を解くように祈りなさい。
私はお前さんに害を加えないから。」
それで彼女はそのように祈った。
しかし彼は同じ過ちを繰り返した。
すると彼の手は一回目よりも強く金縛りになった。
それで彼は彼女にまた同じように言った。
そして彼女はそのように行った。
それから再び彼は過ちを繰り返した。
すると彼の手は先の二回よりももっときつく金縛りになった。
それで彼はこう言った。
「アッラーに私の手を解くように祈ってくれ、アッラーに誓って、私はあなたに害を加えないから。」
そこで彼女はそのように行って、彼の手が解かれた。
こうして彼は彼女を連れて来た者を呼び出し、次のように言った。
「お前は私に悪魔を連れてきたのだ。
人間を連れてきたのではない。
彼女を私の土地から連れ出しなさい。
そして彼女にはハージャル（注 3）を付けてやれ。」
こうして彼女は戻って行った。
そしてイブラヒームは彼女を見たとき彼女に近寄り「どうした？」と尋ねた。
すると彼女はこう言った。

「大丈夫です。
アッラーがあの無法者の手を締め上げました。
そして彼は私に召使いを与えました。」
ところでアブー・フライラは次のように付け加えている。
その女性（ハージャル）こそあなた達の母である。
天水の民よ（注 4）。

（注 1）親や一族を含めて周囲の者が皆偶像崇拝にひたり切って彼の言葉にいっこうに耳を貸さない姿をみて、嘆わしく彼の口をついて出た言葉（第 37 章 89 節）

（注 2）エジプトのファラオ（パロ）のことで仮に聖書考古学上の時代を合わせるとすれば第 12 王朝のアメンエムハトⅢの治下ではないかとされている。
なぜならば彼の治下ではエジプトとシリアは統一されていた時代であったからである

（注 3）ハガルとも言うがエジプト人の女召使いの名前である。
後に彼女はイブラヒームとの間に預言者イスマイールを生み、彼の子孫が北アラブ族であると言われている

（注 4）川の水や井戸水でなく降雨に全面的に依存して暮す遊牧の民の意と思われる。
ただしここでの解釈では①全アラブの民、②特にアンサールをさすなど色々ある

ムーサー（モーゼ）の美徳

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

イスラエルの民はお互いに裸で風呂に入っていた。

そしてお互いに恥部を見ていた。

しかしムーサーは一人で風呂を使っていた。

そこで彼らは次のように言った。

「アッラーに誓って、ムーサーが私達と一緒に風呂に入らないのは彼が睾丸肥大のヘルニアであるに違いないからである。」

さてある日ムーサーが風呂に入りに行き、彼の服を石の上に置いた。

ところがその石がひとりでに服も一緒に持って逃げはじめた。

それでムーサーはその後を「私の服よ、石よ」と言いながら急いで追いかけたので、イスラエルの民がムーサーの恥部を見てしまった。

そしてこう言った。

「アッラーに誓って、ムーサーには何も問題などない。」

さて彼が見られてしまった後になってやっとその石は止まった。

そして彼（ムーサー）は服を取り上げてその石を打ち始めた。

さてアブー・フライラはさらに次のように付け加えてこう伝えた。

アッラーに誓って、ムーサーが石を打ったことによってその石に六箇所か七箇所の傷跡ができた。

アブー・フライラは次のように伝えている

ムーサーは慎しみ深い男であった。

それで彼は決して裸を見せるようなことはなかった。

そこでイスラエルの民は「彼は睾丸肥大のヘルニアに違いない」と言っていた。

ところである日、彼が水場で体を洗っていたがそのとき彼は服を石の上に置いた。

ところがその石がひとりでに動きはじめた。

そこで彼はそれを打つために棒を持って「私の服よ、石よ、私の服よ、石よ」と言いながらその石の後を追いかけた。

そしてそれがイスラエルの民の面々が集まっているところで止まった。

そのとき次の一節が降りた。

「信仰する者よ、汝等はムーサーを中傷した者達のようになるでない。

だがアッラーは彼らが言った中傷より彼を浄められた。

まことに彼はアッラーのみもとで面目をほどこされた」（第 33 章 69 節）

アブー・フライラは次のように伝えている

死の天使がムーサーのもとに遣わされた。

そして天使がやって来たときムーサーは彼を殴り彼の目をえぐり取ってしまった。

そこで天使は主のもとに帰り次のように言った。

「あなたは死を望んでいない下僕のもとに私を遣わしました。」

それでアッラーは彼に目を与えて次のように言いました。

「彼の所に再び行きなさい。

そして彼にこう言いなさい。

「もし彼が生を望むのならば、彼の手を雄牛の背に置き、彼の手が覆い隠す毛の数の一本につき一年の生を許すであろう」

さてムーサーは「はい、我が主よ、それからどうなるのでしょうか？」と言った。

すると天使は「それから死です」と言った。

そこでムーサーは「では只今より」と言い、彼は石を投げればとどく程の聖地（注）の近くに連れて行って下さるようにアッラーに頼んだ。

ここでアッラーの使徒は次のように述べた。

もし私がその場所にいるのであるならば、私はあなた達に道のわきの盛り上った細長い赤い砂地の下に彼の墓を見せることができたのだが。

（注）つまりここではエルサレムのこと

アブー・フライラは預言者の言葉として次のように伝えている

死の天使がムーサーのもとにやって来て「あなたの主の命に服しなさい」と言った。

するとムーサーは死の天使の目を殴り彼の目をえぐり取ってしまった。

そこで天使はアッラーのもとへ帰り次のように言った。

「あなたは死を望んでいないあなたの下僕のもとに私を遣わしました。

それで彼は私の目をえぐり取ってしまいました。」

そこでアッラーは彼に目を返してやり次のように言った。

私の下僕の所にもう一度行きなさい。

そしてこう言いなさい。

「あなたは生をお望みですか？

もしあなたが生をお望みならばあなたの手を雄牛の背に置きなさい。

あなたの手が覆い隠す毛の数と同じ年数だけあなたは生きるでしょう」

さてムーサーは「それからどうなるのでしょう」と言ったので天使は「それからあなたは死ぬでしょう」と言った。

するとムーサーは次のように言った。

「では、今はもう近い。

主よ私を石を投げれば届く程近い聖地の近くで死なせて下さい。」
さてアッラーの使徒はここで次のように言った。
アッラーに誓って、もし私がそこに居たとすれば、私はあなた達に道のわきの盛り上った
細長い赤い砂地のところで彼の墓を見せることができるのだが。
同様のハディースがマァマルによって伝えられている。

アブー・フライラは次のように伝えている
あるユダヤ人が彼の商品を売っているとき、それと交換にあるものを与えられたが彼はそ
れを嫌ったかまたはそれに満足しなかった。
（アブドル・アズィーズはその表現に疑いを抱いているが）
そこで彼（ユダヤ人）は次のように言った。
「だめだ。
人類の中からムーサーを選んだお方に誓って」
これを聞いた一人のアンサールの者が彼の顔を殴り、次のように言った。
「お前は人類の中からムーサーを選んだお方に誓ってと言うのか。
現に我々の中にアッラーの使徒がいらっしゃるのに。
そこでユダヤ人はアッラーの使徒のもとへ行き次のように言った。
「アブー・カーシム（ムハンマドの異名）よ、私は契約による庇護民です。
（それなのに）某氏は私の顔を殴った。」
そこでアッラーの使徒は「なぜあなたは彼（ユダヤ人）の顔を殴ったのですか？」と尋ねた。
すると彼（アンサールの男）は次のように言った。
「彼（ユダヤ人の男）が人類の中からムーサーを選んだお方に誓ってと言ったからです。
あなたが現に我々の間にいらっしゃるというのに。」
するとアッラーの使徒は怒りを顔に表わすほどに激怒してこう言った。
アッラーの預言者達の間に差別を付けるものではない。
ラッパが吹かれアッラーが望んだもの以外の天地にあるもの全てが死に絶え、それから
もう一度ラッパが吹かれると私が復活者の内で最初の者になる。
あるいは私は復活する最初の者の中にいる。
ところでムーサーはそのとき（アッラーの）玉座をつかんでいるでしょう。
私は彼がトゥール山の日の卒倒によって償われているかどうか、また彼が私以前に復活
するのかどうかは知らない。
そしてまた私は誰かがユーヌス・ビン・マッター（注）よりも優れているとは言いません。
同様のハディースがアブドル・アズィーズ・ビン・サルマによって伝えられている。

（注）預言者ヨナ

アブー・フライラは次のように伝えている

一人のユダヤ人と一人のムスリムが口論して罵りあっていた。

そしてムスリムが「全世界の中でムハンマドを選んだお方に誓って」と言い、一方ユダヤ人が「全世界の中でムーサーを選んだお方に誓って」と言った。

そこでムスリムは手をあげてユダヤ人の顔を殴った。

それでユダヤ人はアッラーの使徒のところへ行き彼とムスリムの間で起ったことを彼に知らせた。

するとアッラーの使徒は次のように言った。

ムーサーに比べて私を優れているとしてはならない。

人はすべて死ぬものだが、私が最初に目覚めるであろう。

そしてそのときムーサーは玉座の端を持っています。

彼が死んだ者の中にあって私以前に目覚めるかそれともアッラーが彼を例外とした者の中の一人なのか私にはわからない。

アブー・フライラは次のように伝えている

ユダヤ人の一人とムスリムの一人が口論して罵っていた。

以下は前記と同様のハディースである。

アブー・サイード・フドリーは次のように伝えている

顔を殴られたユダヤ人が預言者の所にやって来た。

以下は前記のハディースと同様である。

しかしここでは以下の部分の表現が違っている。

彼が死んだ者の中にあって私よりも以前に目覚めたのか、それともトゥール山の卒倒によって償われたのかどうか私は知らない。

アブー・サイード・フドリーは預言者の言葉として次のように伝えている

預言者の間に優劣をつけてはならない。

アナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

夜間飛行の夜（注）に赤い砂地のところで私はムーサーのところにやって来た（ハッターブの伝承では“そば”を通った”とある)。

そのとき彼は彼の墓の中で礼拝をしていた。

（注）マッカ時代の預書者の奇跡の一つで彼が一夜にしてマッカからエルサレムに飛行しさらに昇天してアッラーの御前に立ち再び戻って来たという夜の旅のこと。

夜間飛行をイスラーといい昇天をミアラージという。

今日でもこの夜はイスラーワミアラージの夜としてイスラーム社会ではモスクなどで記念行事が行われている

アナスはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
私はムーサーのそばを通ったがそのとき彼は彼の墓の中で礼拝をしていた。
ところで伝承者のイーサーの伝えるハディースでは次のように付け加えられている。
私は夜間飛行の夜に……そばを通った。

ユーヌス（預言者ヨナ）に関するハディースで預言者の言葉「アッラーの下僕は私（預言者ムハマンド）がユーヌス・ビン・マッターより優秀であると言うべきではない」について

アブー・フライラは次のように伝えている

アッラーは次のように言われた。

私の所有する下僕（イブン・ムサンナーは「私の下僕」と伝えている）は私（預言者ムハンマド）がユーヌス・ビン・マッターより優れているなどと言うべきではない。

アブー・アーリヤは次のように伝えている

あなた達の預言者の従兄弟（つまりイブン・アッバース）が預言者の言葉をこう伝えている。

アッラーの下僕は私がユーヌス・ビン・マッターより優れていると言うべきではない。

ところでこのマッターは彼の父の名前でもある。

ユースフの美徳

アブー・フライラは次のように伝えている

預言者は「アッラーの使徒よ、最も尊敬に値する人物は誰ですか？」と尋ねられた。
それで彼は「それは最もアッラーを恐れる人です」と答えた。
すると彼らは「私達はそれについてあなたに尋ねているのではありません」と言った。
そこで彼はこう言った。
「それはユースフです。
彼はアッラーの友（イブラヒーム）の息子であるアッラーの使徒の息子のさらにアッラーの使徒の息子でありアッラーの預言者である。」
すると彼らはまた「私達はそれについてあなたに尋ねているのではありません。」と言った。
そこで彼は次のように言った。
「つまりあなた達はアラブの祖先について私に尋ねているのですか？
無明時代（ジャーヒリーヤー）に立派な者達は彼らがイスラームに入りそれを正しく理解したならばイスラームにおいても立派な者達である。」

ザカリーヤーの美徳

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

ザカリーヤーは大工でした（注）。

（注）短いハディースだが筋肉労働が決していやしい者の生計でないことをよく示している

ハディルの美徳（注）

（注）ヒドルとも言い（緑の男）の意で古代アラビア文学のフォークロア文学の立役者であった。
クルアーンでは諸預言者の上位にある如く語られているが、イスラームの神秘主義者（スーフィー）の間でも高い地位が与えられている。
この物語は非常に長いが全体の筋はクルアーン第 18 章の 60-82 節までの説話を参照すべきである

サイード・ビン・ジュバイルはこう伝えている

私はイブン・アッバースに次のように言った。
「ナウフ・ビカーリーはイスラエルの民の使徒であるムーサーはハディルと一緒にいたあのムーサーとは同じではない」と主張していた。
すると彼は「アッラーの敵（注）は嘘をついたのだ」と言いさらにこう言った。
「私（イブン・アッバース）はウバイ・ビン・カアブからアッラーの使徒の言葉として次のように聞いた。
ムーサーはイスラエルの民の間で演説を行うために立ち上がった。
そこで彼は「人々の中でも誰が最も知識がありますか？」と尋ねられた。
そこで彼は「私が最も知識があります（注）」と答えた。
するとアッラーは彼に知識を与えず彼を叱り彼に次のような啓示を与えた。
「私の下僕達の中で二つの海（川）が出会う所（注）の下僕こそより知識がある。」
そこでムーサーは「はい、我が主よ、いかにしたら私が彼に会うことが出来ますか？」と言った。
それでアッラーは次のように言った。
「大きな籠に魚を入れて運びなさい。
そしてそれが汝から逃げた場所そこが彼のいる場所です。」
そこで彼（ムーサー）は青年を一人連れて旅立ったが、その若者はユウシャウ・ビン・ヌーンです。
そしてそのときムーサーは大きな籠に魚を入れて運んでいた。
こうして彼と青年は岩のある所にたどり着くまで進みつづけた。
そこでムーサーと青年は眠ってしまい、魚が籠の中で暴れだし籠から飛び出して、とうとう海に落ちてしまった。
そしてアッラーはその魚のために通り道がつくられるように丸天井のように水の流れを止めてしまわれた。
それはムーサーと青年にとって驚きであった。
さて彼ら二人はまた昼夜進んで行ったがムーサーの連れは彼にこの出来事（魚がいなく

なったこと）を話すことを忘れてしまっていた。
それからムーサーが朝を迎えた時彼は青年に次のように言った。
「私達の朝食を出しなさい。
私達はこの旅で本当に疲れ果てました。
だが彼は命令された場所（魚を逃がした所）に到着するまでは疲れを感じなかった（から不思議である）。
さてそこで青年はこう言った。
あなたはお分りでしょうか。
私達が大きい岩のある所にたどり着いたとき、私はその魚のことをすっかり忘れていました。
これについて私があなたに告げることを忘れさせたのはきっと悪魔に違いありません。
驚いたことにその魚は海に道をとって逃げました。
そこでムーサーは「それこそ私達が求めていたものだ」と言った。
こうして彼ら二人はまたもと来た道を引き返して例の大きな岩の所まで戻った。
そこで彼は頭から服をすっぽりと被った一人の男を見た。
そこでムーサーは彼に挨拶した。
するとハディルは彼にこう言った。
「このあなたの土地のどこにサラーム（平和）がありますか？
（平和なぞないではないかの意（注 4））。
そこで彼は「私はムーサーです」と言った。
すると彼は「イスラエルの民のムーサーですか？」と言った。
それで彼は「はいそうです。」と答えた。
そこでハディルはこう言った。
「あなたは私が知らない知識をアッラーから授かり知っています。
また私もあなたの知らない知識をアッラーから授かって知っています。」
するとムーサーは「私をあなたに付いて行かせて下さい。
あなたが教わった正しい知識を私に教えて下さい」と言った。
そこで彼はこう言った。
「あなたは私と一緒では我慢できますまい。
あなたは自分でも何のことやらわけの分からないことにどうして辛抱できましょうか。」
そこでムーサーは「アッラーのみ心ならば、私がよく耐え忍び決してあなたに背かないことがお分りになるでしょう」と言った。
ここでハディルは彼に次のように言った。
「もしあなたが私に付いてくるのならば、私があなたに話しを切り出すまでは決して私にものを問うてはなりません。」
そこで彼（ムーサー）は「はい分かりました」と彼に言った。

こうしてハディルとムーサーは海岸を歩き出したが、彼ら二人の前を一隻の船が通りかかった。
そこで二人は彼ら（船の持ち主）に二人を乗せてくれるように話しかけたが彼らはハディルを知っていたので、ただで彼らを乗せてくれた。
ところがハディルは船の厚板を一枚つかみそれを剥がしてしまった。
そこでムーサーは彼にこう言った。
「人々は私達をただで乗せてくれました。
それなのにあなたは彼らの船を壊し船の相客を溺れさせようとして船底に穴をあけました。
あなたはなんとも嘆かわしいことをしました。」
すると彼は「私はあなたに、あなたは私と一緒ではとても我慢できないと言いませんでしたか？」と言った。
そこでムーサーはこう言った。
「忘れていました。
どうか悪く思わないで下さい。
まああまりむずかしい義務を私に負わさないで下さい。」
それから二人は船から降りて歩きはじめたが、二人が海岸を歩いていると一人の少年が他の少年達と遊んでいました。
するとハディルは彼（少年）の頭をつかみ引き抜いて彼を殺してしまった。
そこでムーサーはこう言った。
「あなたは無邪気な子供を何の罪もないのになぜ殺したのですか？
あなたは何とも忌わしいことをしてしまいました。」
すると彼は「私はあなたに、あなたは私と一緒ではとても我慢できないと言いませんでしたか?」と言った。だがムーサーは「これは最初よりも残酷です」と言ってさらにこう言った。
「もし私が今度もう一度あなたに何かのことで尋ねたならば私を道連れにしないで下さい。
もはやあなたは私と分かれる立派な言い訳をお持ちですので。」
それからまた二人は歩きはじめ、ある村の住民のところにたどり着き彼らに食べ物を求めたが、彼らは二人を客として迎えることを拒否した。
さて彼ら二人はその村で今にも崩れ落ちそうな塀を見付けたのでハディルはそれを修理してやった
（ところで伝承者のマーイルはハディルは彼の自らの手で“このようにしながら修理した”とジェスチャーを交えて語っている）。
そこでムーサーは彼に次のように言った。
「私達が訪ねた人々は私達を客としてもてなすこともなく、また食べ物を私達に与えることもなかった。
だからもしあなたがその気になればそれ（塀の修理）に対して報酬を取ることができます。」

そこでハディルは「これであなたと私はお別れです。
あなたが私と一緒では辛抱し切れなかったことについてはその意味を解き明かしてあげましょう」と言った。
さて（そのとき）アッラーの使徒はさらに次のように話をつづけてこう言った。
アッラーがムーサーに慈悲をかけて下さいますように、彼が辛抱しそして彼ら二人の話が私達に伝わることを私は望んでいました。
またアッラーの使徒はこうも言った。
最初ムーサーが言ったことは彼が（最初の約束を）すっかり忘れていたためでした。
またアッラーの使徒はさらにこう言った。
そのとき一羽の燕が来て船の縁に止まり、それから海の水をつついた。
するとハディルはムーサーにこう言った。
私の知識もあなたの知識もアッラーの知識に比べればこの燕が海からつついて飲んだ水のようなものです。
ところでサイード・ビン・ジュバイルは次の（クルアーンの）一節を誦んで伝えた。
「彼らの行く手には一人の王がいて全ての使える船を強奪していました」
また彼（サイード）は次の一節も誦んでいました。
「少年について言えば彼は（根からの）不信者であった（注 5））」

（注 1）これはいささか誇張であるが、クルアーンの話しと預言者の話を否定されたことに対する反発としてイブン・アッバースの怒りの表現となったもの

（注 2）モーゼは当時の文明国エジプトで育ち、色々なことを学んで知識欲が盛んであったと思われる

（注 3）ここではバハルの双数形で示されている。
バハルは普通は、“海”を示すがしばしば“大河”をも示している。
ナイル河もクルアーンではバハルと呼ばれている。
モーゼは 20 年前後エジプトに住んでいたことになっているので、二つの河が出会う所は白ナイルと青ナイルの合流点の今日のカルツームあたりとする異説まである。
あだし魚（フート）を海魚と解釈すれば別の場所たとえば今日のバハレーン島あたりまたは地中海とインド洋が接する所、またはモロッコのタンジールあたりと様々な説がある

（注 4）前のムーサーの挨拶は“アッサラーム・アライクム（あなたの上に平和があるように！）”というものですが、ハディルのこの返事はかなりきついへそ曲りな返答であるようだ

（注 5）クルアーンの話を総合すると次のようになる。

①船が行き着く先には使用可能な船ならどんな船でも奪ってしまう悪い王様がいることがあらかじめハディルには分っていたこと

②少年の両親は信仰深い者であったが親不幸な無信心のこの少年のために二人は信仰を棄てることになる恐れがあったことをハディルには前もって分っていた

③塀は二人の孤児のもので生前に彼らの両親はその下に財宝をかくしていたが二人が成人に達した際にアッラーはそれを二人に掘り出してやろうという計らいであったことをハディルは前もって分かっていた

サイード・ビン・ジュバイルは次のように伝えている

イブン・アッバースは次のように言われた。

「ナウフは知識を求めて行ったムーサーはイスラエルの民を率いたムーサーではないと主張している。」

すると彼（イブン・アッバース）は「確かに、あなたはそのことを聞きましたか？」と言った。

そこで私は「はい。」と言った。

すると彼は「ナウフは嘘をついた」と言った。

ウバイユ・ビン・カアブはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている。

ムーサーがアッラーの日々について説教をしていた。

アッラーの日々とはアッラーからの恩恵と試練のことであるがそのとき彼はこう言った。

そこでアッラーは彼に次のように啓示した。

私は汝よりも良い人間を知っている。もしくは汝よりも知識がある人間を知っている。

すると彼は「我が主よ、私を彼のところに案内して下さい」と言った。

そこでアッラーは次のように言った。

旅の食料として海の魚を用意しなさい。

そしてそれ（求めている人物の場所）こそ汝がその魚を失う場所である。

さてそこで彼と彼の従者は大岩のある所にたどり着くまで進んで行ったが、しかしまったく手掛かりがなかった。

そして彼はさらに進み、若者（従者）はそこに残した。

すると突然その魚が水の中で暴れだした。

そして水がドームのようになりその魚を包んだ。

そこでその若者は次のように言った。

私はアッラーの預言者（ムーサー）に追い付き彼に知らせなくてはならない。

しかし彼はそのことをすっかり忘れてしまった。

そして彼ら二人がその場所を通り過ぎたとき彼は若者にこう言った。
私たちの朝食を持ってきなさい。
私達はこの旅で本当に疲れ果てました。
ところが彼ら二人は（ハディルと会う場所を）通り過ぎるまでは疲れを感じなかったが、そこで若者が思い出して次のように言った。
あなたはお分りでしょうが私達が大きい岩にたどり着いたとき私はその魚のことを忘れていました。
それについて（あなたに）告げることを忘れさせたのは悪魔の仕業に違いありません。
驚いたことにその魚は海に道をとつて逃げました。
そこでムーサーは「それこそ私達が求めていたものだ」と言った。
こうして二人はもと来た道を引き返し、若者は彼にその魚をなくした場所を示した。
するとムーサーは「ここが私に啓示で示された場所だ」と言って捜しはじめた。
すると驚いたことに頭からすっぽりと服を被り、まっすぐあおむけになっているハディルがそこにいました。
そこでムーサーは彼にアッサラーム・アライクム（あなたの上に平和を）と挨拶をした。
すると彼は頭から服を取りワ・アライクム・サラーム（そしてあなたの上にこそ平和が）と言った。
そこでムーサーは「私はムーサーです」と言うと彼は「どこのムーサーですか？」と言った。
そこで彼は「イスラエルの民のムーサーです」と言った。
すると彼は「どのような大事なことで来たのですか？」と言った。
それでムーサーは彼にこう言った。
私はあなたが教わった正しい知識をあなたから教えてもらうために来ました。
すると彼は次のように言った。
あなたは私と一緒では我慢できますまい。
あなたは自分でも何のことやらわけの分からないことにどうして辛抱できましょうか？
私が命じられたことを実行する所を見たときあなたは我慢できないでしょう。
そこでムーサーは「アッラーのみ心ならば、私がよく耐え忍び決してあなたに背かないことが分かるでしょう」と言った。
するとハディルは次のように言った。
もしあなたが私についてくるのならば私があなたに話を切り出すまでは決して私にものを問うてはなりません。
こうして彼ら二人は進み、そして二人が船に乗ったとき、彼（ハディル）がそれに穴を開けた（またはそれに穴を開けようとした）。
そこでムーサーは彼にこう言った。
あなたは船の相客を溺れさせようとして船底に穴をあけました。
あなたは何とも嘆わしい事をしてしまいました。

すると彼は「私はあなたに、あなたは私と一緒では我慢できないと言いませんでしたか？」と言った。
そこでムーサーはこう言った。
私は忘れていました。
どうか悪く思わないで下さい。
まあ私にあまりむずかしい義務を負わせないで下さい。
それから彼ら二人は歩きはじめ、遊んでいる少年達に出合った。
そして彼（ハディル）は彼らの中の一人に考える暇もなく素早く近づき、彼を殺してしまいました。
そこでムーサーは恐れおののきこう言った。
あなたは無邪気な子供を何の罪もないのになぜ殺したのですか？
あなたは何とも忌わしいことをしてしまいました。
ここでアッラーの使徒はつづけて次のように言った。
アッラーの慈悲が私達ならびにムーサーにありますように、もし彼が慌てなければ彼はもっと多くの驚くことを見たであろう。
しかし彼は彼の連れに関して自責の念にかられて「もし私がもう一度あなたに何か尋ねたならば、私を道ずれにしないで下さい。
あなたは私と分かれる立派な言い訳を既にお持ちです」と言ってしまった。
いずれにせよもし彼が耐えたならばもっと多くの驚きを見たであろう。
さてここで彼（伝承者）は次のように言った。
彼（預言者）は預言者達の中の一人について語るとき、彼は自ら「アッラーの慈悲が私達ならびに私の兄弟誰それにありますように」と言っていた。
それからまた彼ら二人は歩きはじめ、貪欲なある村の住民のところにたどり着いた。
そして人々の集まる所をまわり彼らに食べ物を求めたが、彼らは彼ら二人を客として迎えることを拒否した。
そして彼ら二人はその村で今にも倒れそうな壁を見つけたのでハディルはそれを直した。
そこでムーサーはこう言った。
もしあなたがその気になればそれに対して報酬を受け取ることができます。
するとハディルは「これであなたと私はお別れです」と言った。
そして彼は彼の服を取りこう言った。
「船について言うと、それは海で働くある貧乏人達の所有物でした……」以下第 18 章 79 節の最後まで（即ち私がそれを役立たないようにしようとしたのは彼らが行きつく先にはどんな船でも強奪する王様が待っていたためであった）。
それでその般を強奪しようとする者がやって来たとき、それには穴が開いていることを知り強奪者は通り過ぎてしまった。
その後彼らは一枚の板でその船を修繕しました。

少年について言うと、彼はもともと根からの不信者であった。
だが彼の両親は彼を大変かわいがっていた。
もし彼がそのまま成長したならば彼の反抗と不信心が両親に累を及ぼすかもしれなかった。
それで私達は主が彼よりも優れた性質の純正でもっと親孝行（な息子）を不信心なあの少年に代えて両親に授けるように願ったのである。
また「**あの壁について言うと、あれは村の二人の幼い孤児のものでその下には彼らに帰属する財宝が埋めてあり、父親は正しい人物であった**」以下は第 18 章 82 節の最後まで（即ち：それで主は二人が成年に達したなら神の恵みの宝物を掘り出すことを望まれた。
何も私が自分勝手に行ったことではない）。

同様のハディースが**アブー・イスハーク**によって伝えられている。

ウバイユ・ビン・カアブは預言者が「それに対してきっと報酬が取れるでしょう」の一節を少しだけ違えて誦んだとして伝えている。

アブドッラー・ビン・アッバースは次のように伝えている
彼はフッル・ビン・カイス・ビン・ヒスン・ファザーリーとムーサーの連れについて言い争いをしていた。
そしてイブン・アッバースは「それはハディルである」と言った。
そこにウバイユ・ビン・カアブ・アンサーリーが通りかかった。
それでイブン・アッバースが呼び止めて次のように言った。
アブー・トゥファイルよ、私達のところに来てくれ。
私はこの者とムーサーが会うことを望んだ彼の連れについて言い争いをした。
あなたはアッラーの使徒が彼のことについて語っているところを聞きましたか？
そこでウバイユは「私はアッラーの使徒が次のように言っているところを聞いた」としてこう伝えた。
ムーサーがイスラエルの民の面々と一緒にいるとき、ある男が彼の所にやって来て「あなたよりも知識がある人を知っていますか？」と言った。
するとムーサーは「いいえ」と言った。
そこでアッラーは彼に「いやいや、私の下僕のハディルがいる」と啓示を下した。
そこでムーサーは彼に出会う方法を懇願した。
そこでアッラーは彼のために魚を印として次のように言われた。
「汝がその魚をなくしたとき、すぐに戻りなさい。
汝はそこで彼に出会うであろう。」
それからムーサーはアッラーの望むとおりに進んで行った。

それから彼は随伴した若者に「私達の朝食を出しなさい」と言った。
さて彼が朝食を求めたとき若者は次のように言った。
あなたはお分りでしょうか、私達が大きな岩にたどり着いたとき、私はその魚のことをすっかり忘れていました。
それについて（あなたに）告げることを忘れさせたのはきっと悪魔に違いありません。
するとムーサーはその若者に「それこそ私達が求めていたものだ」と言った。
そこで彼ら二人はもと来た道を引き返した。
そして二人はそこでハディルを見付けました。
さてもこの二人の事についてはアッラーの啓典で語られている通りです。
しかし伝承者のユーヌスは次の一文を付け加えている。
彼は海に消えた魚の跡をたどった。

教友達の美徳の書

アブー・バクル・スィッディークの美徳

アナス・ビン・マーリクはアブー・バクル・スィッデイークが次のように語ったとして伝えている

私達が洞窟にいたとき（注）私は多神教徒達の足を頭のすぐ上に見た。

そこで私は次のように言った。

「アッラーの使徒よ、もし彼らの一人が足元を見たならば彼は彼の足元に私達を見付けるでしょう。」

すると彼は次のように言った。

「アブー・バクルよ、あなたは二人に何が起ると考えますか？

アッラーが三番目としていらっしゃいますよ」

（注）622 年預言者はアブー・バクルを伴ってマッカからマディーナに密かに逃亡したが二人はマッカ側の追跡者達をかわすためにいったんこの洞窟の中に身を潜めた

アブー・サイードは次のように伝えている

アッラーの使徒はミンバル（説教台）に座って次のように言った。

アッラーはある下僕にこの世の栄華かそれとも彼（アッラー）のもとにあるものかを選ばせた。

そしたらその下僕は彼（アッラー）のもとにあるものの方を選んだ。

それを聞いたアブー・バクルは泣きに泣き、そしてこう言った。

私達はあなたのためなら私達の父母をも身代りとして差し出しても惜しくはありません。

ところでアッラーの使徒こそその選ばれたアッラーの下僕であった。

そしてアブー・バクルはそのことを私達よりもよく知っていた。

さてアッラーの使徒はこう言った。

人々の中で財産や親交において私に最も寛大な者はアブー・バクルである。

私がもし親友を選ぶなら私は親友としてアブー・バクルを選ぶであろう。

しかし彼に対しては私はイスラームの兄弟愛の方を大事にする。

そしてモスクの扉はアブー・バクルの小さな扉以外は決して開けない（注）。

（注）当時マディーナの預言者のモスクは小さく、周囲には教友達の住いが囲んでいた。

それらの各家の戸口はモスクに直接つながっていた。

然し預言者が死ぬことになる最後の病気になったとき、彼はアブー・バクルの家の扉を除いてモスクに直結する全ての教友の家のモスクに面する扉を閉鎖させた。

同様のハディースが**アブー・サイード**・フドリーによって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブドッラー・ビン・マスウードは預言者の言葉として次のように伝えている

私がもし親友を選ぶならば私は親友としてアブー・バクルを選ぶであろう。

しかし彼は私の兄弟であり仲間である。

またまさにアッラーはあなた達の仲間（預言者自身）を親友として選んだ。

アブドッラーは預言者の言葉として次のように伝えている

私がもし私のウンマの中から親友を選ぶとすれば私はアブー・バクルを選ぶであろう。

アブドッラーは預言者の言葉として次のように伝えている

私がもし親友を選ぶならば私はイブン・アブー・クハーファ（アブー・バクルの異名）を選ぶであろう。

アブドッラーは預言者の言葉として次のように伝えている

私がもしこの地上の人間の中から親友を選ぶとすれば私はイブン・アブー・クハーファを選ぶであろう。

またアッラーはあなたたちの仲間（預言者自身）を親友として選ばれた。

アブドッラーはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

見よ、私はいかなる親友にも依存する者ではない。

だが私がもし親友を選ぶならば私はアブー・バクルを親友として選ぶであろう。

そしてまさにあなた達の仲間（預言者自身）がアッラーの親友である。

アムル・ビン・アースは次のように伝えている

アッラーの使徒が彼をザート・サラーシル（注 1）遠征軍の隊長として派遣したときのことである。

私が彼のもとに戻ってきたとき私は彼に「あなたにとって誰が最愛なる人ですか？」と尋ねた。

すると彼は「アーイシャだ（注 2）」と言った。

そこで私は「男性では？」と尋ねた。

すると彼は「彼女の父です」と答えた。

そこで私は「それから誰ですか？」と尋ねた。

すると彼は「ウマルです」と言って、それから幾人かの男性の名前を挙げた。

（注 1）シリア方面のジュザーム族の水場

（注 2）アブー・バクルの娘で預言者の最愛の若妻

イブン・アブー・ムライカはアーイシャからの伝聞として次のように伝えている。

彼女は「アッラーの使徒がもし後継者を指名したならば、彼は誰を指示したでしょうか？」と尋ねられた。

すると彼女は「アブー・バクル」と答えた（注）。

それから彼女は「アブー・バクルの後は誰でしょうか？」と尋ねられた。

すると彼女は「ウマル」と答えた。

それからまた彼女は「ウマルの後は誰でしょうか？」と尋わられた。

すると彼女は「アブー・ウバイダ・ビン・ジャッラーフ」と答えた。

そしてここまでで彼女は口をつぐんだ。

（注）このハディースによって逆にアブー・バクルがカリフ位についた根拠が預言者による明らかな指名ではなくウンマ即ちイスラームの信仰共同体が全体として彼を第一代カリフに選出したということを証明している

ムハンマド・ビン・ジュバイル・ビン・ムトイムは父からの伝聞として次のように伝えている

ある女性がアッラーの使徒に何かを尋ねた。

そのとき彼は彼女にまた別の機会に来るように命じた。

すると彼女はこう言った。

「もし私が来てもあなたを見付ける事ができなかったときはどうしましょうか？」

ーそのとき私の父（ジュバイル）はあたかも彼女は預言者の死を想定したような口振りだったがと付け加えていたー

すると彼（預言者）は「もし私を見付けないときはアブー・バクルのところに行きなさい」と言っていた。

同様のハディースがジュバイル・ビン・ムトイムによって別の伝承者経路を経て伝えられているが、ここでは以下のような表現上の違いがある。

ある女性が彼のもとに来てあることで彼と話し合い、彼は彼女にある命令を与えた。

以下は前記のハディースと同様である。

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒は彼が病気の時（注 1）でしたが私に次のように言った。

アブー・バクルとあなたの兄弟を私のところに呼びなさい。

それは私が書状を書き残しておくためです。

というのは思惑のある者が言いたいことを言い出しアッラーと信者達はアブー・バクル以外の者を拒否しているというのに「私が最も相応しい」などと言いだすことを私は懸念しているからです（注 2）。

（注 1）最後の病気のときの意

（注 2）実際には預言者は何も書き残さずアブー・バクルがウンマによって後継者に選出されることを堅く信じて他界した。
さすがにここまでのハディースは一つしかないカリフの座を争う決め手となるようなハディースで厳しいものがある

アブー・フライラは次のように伝えている
アッラーの使徒は「今日、あなた達の中で断食した者は誰ですか？」と尋ねた。
するとアブー・バクルは「私です」と答えた。
それから彼はまた「今日、葬儀に参列した者は誰ですか？」と尋ねた。
するとアブー・バクルは「私です」と答えた。
それからまた彼は「今日、貧しい人に食事を与えた者は誰ですか？」と尋ねた。
するとアブー・バクルは「私です」と答えた。
それからまた彼は「今日、病人を見舞った者は誰ですか？」と尋ねた。
するとアブー・バクルは「私です」と答えた。
そこでアッラーの使徒は次のように言った。
これらすべてを行った者こそ天国に入る。

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
ある男が雌牛に荷物を載せて引いていたとき、雌牛は彼の方を振り向いてこう言った。
「私はこのために創られたのではない。
耕作のために創られたのである。」
この話しを聞いた人々は「アッラーに讃えあれ、何ということだ。
雌牛が喋るのですか？」と言った。
するとアッラーの使徒はこう言った。
「確かに私は信じます。
そしてアブー・バクルもウマルもそれを信じます。」
ところでアブー・フライラはまたアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている。
羊飼いが羊の群れの中にいたとき、狼がそれを襲い羊一匹を捕まえた。
そこで彼は狼にその羊を手離すように説得し遂にその羊を救った。
そのとき狼は彼の方に振り向いてこう言った。

「私だけが残り、その羊達を護る羊飼いがいない日つまり猛獣の日(注)には誰が一体その羊達を護るのですか？」
その話しを聞いた人々は「アッラーに讃えあれ」と言った。
するとアッラーの使徒はこう言った。
「確かに私は信じます。
そしてアブー・バクルもウマルもそれを信じます。」

(注)いろいろ考えられる。
たとえば祭日などで羊飼が羊の世話の手を抜くときとか、最後の終末の日などは混乱して羊の世話どころではなくなる
このハディースは**イブン・シハーブ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは雌牛の話しは伝えられていない。

またこのハディースは**ズフリー**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
ただしここでは雌牛と雌羊(山羊)の双方の話しが伝えられている。
しかし最後の一文はこうなっている。
アッラーの使徒は“確かに私は信じます。
そしてアブー・バクルもウマルもそれを信じます”と言った。
だがそこには二人は居なかった。

同様のハディースが**アブー・フライラ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

ウマルの美徳

イブン・アッバースは次のように伝えている。

ウマル・ビン・ハッターブが遺体台の上に置かれたとき、人々が彼をとりまき、台が持ち上げられる前に彼のために祈り、彼を讃え、彼のために礼拝を行った。
そのとき私は彼らと一緒にいたが何も私の注意を引くようなことはなかった。
ただ後ろから私の肩を引っぱる者がいた。
振リ返って見るとそれはアリーであった。
彼はウマルにアッラーの慈悲があるように祈り、そして（ウマルの遺体に向って）こう言った。
「私がその者の望ましい行為故に、一緒にアッラーに会いたいと思う者をあなたは後に誰も残さなかった。
アッラーに誓って、アッラーがあなたをあなたの友人二人（預言者とアブー・バクル）と一緒になさいますことを確信しています。
というのは、私はアッラーの使徒が次のように言っているところをしばしば聞いています。
『私がやって来て、そしてそこへアブー・バクルもウマルもやって来た。
また私が出て行き、そしてアブー・バクルもウマルもそこを出て行った。』
いずれにせよ私はアッラーがあなたをあなたの友人二人と一緒になさいますよう切に望みます。
またはそのように確信しています（注）。」

（注）このハディースによればアリーはアブー・バクルにも、またウマルにも何の怨念も抱いていなかったことになる

前記のハディースが**ウマル・ビン・サイード**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・サイード・フドリーはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

私が寝ているとき夢の中で人々が現われてきたところを見たが、彼らはシャツを着ていた。
そのうちの一部の者は胸部まであるシャツをつけ、他の一部はそれ以上に長いシャツをまとっていた。
そこにウマル・ビン・ハッターブがシャツを引きずりながら（注）通りかかった。
さてこの話しを聞いた人々には「アッラーの使徒よ、あなたはそれをどのように解釈しますか？」と尋ねた。
すると彼はこう答えた。
それは宗教である（つまり信仰の強さを示している意）。

（注）イスラームの夢解きによればシャツは宗教を意味し、引きずっていたことは吉兆を意味するとされている

アブドッラー・ビン・ウマル・ビン・ハッターブはアッラーの使徒の言葉としてこう伝えている

私が眠っているとき夢の中でミルクの入ったカップが持ち込まれるところを見た。
そこで私がそれを飲むと爪の先まで新鮮さを感じました。
それから残りをウマル・ビン・ハッターブに与えた。
それを聞いた人々は「アッラーの使徒よ、あなたはそれをどのように解釈しますか？」と尋ねた。
すると預言者は「それ（ミルク）は知識（注）である」と答えた。

（注）夢の中のミルクは宗教的な知識の意である。
なぜならそれは人の魂に栄養を与えるからであるとイスラームでは考えているからである

前記のハディースは**ユーヌス**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

私は眠っているとき、夢の中で井戸のそばにいる私を見た。
そこには（皮製の）バケツが（滑車にとりつけて）あった。
アッラーが望むままに私はそこから水を汲んだ。
それからイブン・アブー・クハーファ（アブー・バクルの別名）がそれを取り、それでバケツ一杯かまたは二杯の水を汲み上げた。
ところで彼の汲み上げには弱さが見られたが、だがアッラーよ彼を赦したまえ。
それからそのバケツが大きいものにかわった。
そしてイブン・ハッターブ（ウマル）がそれをとり、汲み上げたのだが私はウマル・ビン・ハッターブのように水汲みする豪の者を見たことがない。
（彼が大量の水を汲み出したので）それで人々はラクダに水をやり、水場の近くで休息をとらせた（注）。

（注）このハディースは水によって象徴される初期イスラームのイスラーム共同体の発展を暗示している。
即ちアブー・バクルが一杯か二杯の水汲みをしたとは彼の治世が短かかった.ことを示し、また彼の汲み上げか弱かったことはイスラーム共同体の基盤が未だ弱く小さかったことを暗示している。
またウマルの汲み上げの力強さは彼の治世におけるイスラーム帝国の出現と大発展を暗示しているといった具合である

同様のハディースが**ユーヌス**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・フライラは、アッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

わたしはイブン・アブー・クファーハ（アブー・バクル）が水を汲むところを見た。

以下は前記ハディースと同様である。

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

私は眠っていたとき、夢の中で私が人々に水を飲ませるために私の水槽から水を汲み出している自分を見た。

そこへアブー・バクルがやって来て、私を休ませるために私の手から（皮製の）バケツを取り、バケツ二杯の水を汲みあげた。

そして彼の汲みあげには弱さが見られた。

だがアッラーよ、彼を赦したまえ。

そこへイブン・ハッターブ（ウマル）がやって来て、彼からそれを取り（水を汲みあげたが）

私は水を汲むことで彼よりも強い男を見たことがない。

（彼が水を汲み出すと）それでもって人々の渇きをいやし去ったが、それでも水槽は溢れんばかりに満杯になっていた。

アブドッラー・ビン・ウマルはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

私は自分が井戸で滑車の付いた（皮製の）バケツで水を汲んでいるところを夢で見せられた。

一杯または二杯の水を汲みあげた。

そのとき彼は弱々しく水を汲み上げた。

アッラーよ、どうか彼をお赦し下さい。

それからウマルがやって来て水を求めた。

そのときバケツが大きいバケツに変ったが、私は彼のような豪の者を見たことがありませんでした。

（彼が水を汲み出すと）人々は満足して（近くの）休息場所へと向った。

サーリム・ビン・アブドッラーは父からの伝聞としてアッラーの使徒の夢についてアブー・バクルやウマル・ビン・ハッターブについてのアッラーの使徒の夢について前記と同様のハディースを伝えている。

ジャービルは預言者の言葉として次のように伝えている

（夢で）私が天国に入り、そこで私はある館または城を見た。

私は「これは誰のものですか？」と尋ねた。

すると彼ら（天使達）は「それはウマルのものです」と答えた。
そして彼（預言者）は（ウマルに向って）「私は、そのときそこに入りたく思いました。
しかし私はあなたの嫉妬を考えました」と言った。
するとウマルはそれを聞き、涙を流して次のように言った。
「アッラーの使徒よ、私があなたに関して嫉妬することができましょうか？」

前記のハディースは**ジャービル**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
私は眠っているとき、夢の中で天国にいる自分を見た。
そこで私はある城のそばで一人の女性がウドゥー（清浄行為）をしているところを見ました。
そこで私は「これは誰のものですか？」と尋ねました。
すると彼ら（天使達）は「それはウマルのものです」と答えた。
しかし私はウマルの嫉妬を考えましたのでそれに背を向けてその場を立ち去りました。
ここでアブー・フライラはさらにつづけて次のように伝えている。
するとウマルは涙を流した。
そのとき私達はその場にアッラーの使徒と一緒にいました。
それからウマルはこう言った。
「あなたは私の父を身代りにしてもおしくないお方です。
アッラーの使徒よ。
私があなたに関して嫉妬することができましょうか？」
前記と同様のハディースがイブン・シハーブによって別の伝承者経路を経て伝えられている。

サアド・ビン・アブー・ワッカースは次のように伝えている
ウマルがアッラーの使徒に訪問の許しを請うた。
そのとき彼のところにはクライシュの女性達がいて、彼女達は彼（預言者）よりも声高に（注）彼と話し、また彼に多くの質問を浴びせていた。
そしてウマルが許しを求めたとき彼女達は立ち上がり、急いでカーテンの後ろに隠れた。
そのときアッラーの使徒は笑いながら、ウマルに入室を許可した。
そこでウマルはそれを見てこう言った。
「アッラーがあなたを生涯笑わせますように。
アッラーの使徒よ。」
するとアッラーの使徒は「私は私のところにいる女性達に驚きました。
それというのも彼女達はあなたの声を聞くと急いでカーテンの後ろに隠れました」と言った。
そこでウマルは「アッラーの使徒よ。

彼女達はあなたを恐れて然るべきです」と言いながらさらに（女性達に向って）こう言った。
「お前達自ら仇なす者よ。
お前達は私を恐れてアッラーの使徒を恐れないのか？」
すると彼女達は「はい、あなたはアッラーの使徒よりも粗野で荒っぽい人です」と答えた。
そこでアッラーの使徒は次のように言った。
私の魂を手中におさめているお方に誓って、もし悪魔が通りであなたに出会ったならばそれ（悪魔）は（あなたを恐れて）別の通りを探すでしょう。

（注）クルアーン第 49 章 2 節には信徒たるもの預言者を前にして彼の声よりも声高に話してはならぬとある。
つまりこのハディースは前記の啓示が下される前のことと思われる

アブー・フライラは次のように伝えている
ウマル・ビン・ハッターブがアッラーの使徒の所へやって来た。
その時彼のところには女性がいてアッラーの使徒よりも声高に話していた。
そしてウマルが許しを求めたとき、彼女達はカーテンの後ろに急いで隠れた。
以下は前記と同じハディースを伝えた。

アーイシャは預言者の言葉として次のように伝えている
あなた達以前の時代の人々の中には霊感を与えられた人達（ムハッダス）がいた。
もし私のウンマ（信仰共同体）に彼らの中の一人がいるとしたならば、それはウマル・ビン・ハッターブである。
ところで伝承者のイブン・ワハブは次のような解説を加えている。
ムハッダスとはムルハム（霊感を与えられた者）のことである。

前記のハディースは**サアド・ビン・イブラヒーム**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

イブン・ウマルはウマルの言葉として次のように伝えている。
私は三つの事柄で我が主と一致しました（注 1）。
それはマカーム・イブラヒーム（アブラハムのお立ち所）の場合（注 2）と女性のベールの場合（注 3）とバドルの戦いの人質達の場合（注 4）です。

（注1）つまりさまざまな局面でウマルの個人的見解がアッラーの意図する所と一致してウマルの見解を支持する啓示がしばしば下されたという意味である。
ここでは三つだけが示されているが、実際には 50 例を数えると言われている
（注 2）カーバ神殿の境内にある場所であるがウマルはここをムスリムの礼拝の中心場所

とするように預言者に助言した。
マディーナに移ってからしばらくの間ムスリムはエルサレム（北）に向って礼拝していたが、
その後啓示がありカーバ神殿（南））に向けて礼拝することを命ぜられた

（注 3）ウマルはかねてより女性（特に預言者の身内の女性）はベールを付けないで外出すべきではないと主張していた。
そして預言者はこの件に関しては消極的であったが、まもなくベールに関する啓示が下された

（注 4）バドルの戦いの敵の捕虜の扱いについてはウマルは敵対する異教徒として殺すべきとする強硬論を唱えアブー・バクルは同じクライシュ族の仲間として身代金と引換えに釈放すべしとする人情論の立場をとった。
預言者はアブー・バクルの意見に傾き実際にはそのような措置がとられた。
その後、（預言者たるもの敵に妥協してはならぬとする）啓示が下されてウマルの見解が正しかったことが証明された（第 8 章 67 節）

イブン・ウマルは次のように伝えている
アブドッラー・ビン・ウバイユ・ビン・サルール（注）が亡くなったとき彼の息子のアブドッラー・ビン・アブドッラーがアッラーの使徒のところにやって来て彼の父の遺体を包むために預言者のガウンを彼に与えてくれるようにと頼んだ。
それで預言者は彼にそれを与えた。
それから彼（アブドッラー）は父のために礼拝をしてくれるよう（冥福を祈ってくれるよう）に頼んだ。
そこでアッラーの使徒は礼拝をするために立ち上がった。
そのときウマルが立ち上がり、アッラーの使徒の服をつかんでこう言った。
「アッラーの使徒よ、アッラーは彼のために礼拝をすることを禁じたというのにあなたは彼のために礼拝をするのですか？」
そこでアッラーの使徒は「アッラーは次のように言って私に選択をお与え下さった」と.言った。
「汝が彼らのためにお赦しを請おうともまた請わなくとも（同じことだ）。
たとえ汝が 70 回も彼らのためにお赦しを請うたとしても」（第 9 章 80 節）。
こうして預言者は「私はさらに 70 回つけ足しましょう」と言いながらさらに「そして彼（アブドッラー・ビン・ウバイユ）はまことに似非信者であった。」と言った。
かくしてアッラーの使徒は彼のために礼拝をした。
そのときアッラーは次のような啓示を下した。
「彼らのうちの誰が死んでも、汝は決して彼のために葬儀の礼拝を捧げてはならない。

またその者の墓に足を止めてはならない」（第 9 章 84 節）

（注）似非信者の頭目として知られた男だった

同様のハディースが**ウバイドッラー**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは最後に次の一文が付け加えられている。
それで彼は彼らのための礼拝を止めた。

ウスマーン・ビン・アッファーン（注）の美徳

（注）後に第三代カリフに就任する。
彼は預言者の属するハーシム家とはマッカの市政を争って対抗したウマイヤ家に属していたが、早々とイスラームに入信して預言者の二人の娘婿（ルカイヤついでウンム・カルスーム）となった。
ただし双方とも若くして他界して子供（預言普にとっては孫）を残さなかった

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒は私の家で太腿または脛を出して横になっていた。
そのときアブー・バクルが家に入る許可を求め、預言者は彼に許可を与え彼はそのままの状態で談話した。
それからウマルが家に入る許可を求め、預言者は彼に許可を与えたが、彼は同様の状態で談話した。
それからウスマーンが家に入る許可を求めたが、アッラーの使徒は座り直し服を整えた。
ここで伝承者の一人ムハンマドは「私はそのことが同じ日に起ったとは言いませんが」と念を押した。
こうしてウスマーンが入り談話した。
彼が出て行ったときアーイシャはこう言った。
「アブー・バクルが入ってきたとき、あなたは動かず彼を気に掛けませんでした。
ウマルが入ってきたときもあなたは動かず彼を気に掛けませんでした。
それからウスマーンが入って来たときはあなたは座り直して服を整えました。」
そこで彼は次のように言いました。
天使達でさえ恥かしがる男に対して私が恥かしがらないのですか？

預言者の妻**アーイシャ**と**ウスマーン**は次のように伝えている

アブー・バクルがアッラーの使徒に家に入る許可を求めた。
そのとき彼はアーイシャのウールの服を着てベッドの上に横になっていたが、彼はそのままの状態でアブー・バクルに許可を与えた。
そして彼は用事を済ませて立ち去った。
それからウマルが許可を求めた。
そこで預言者はやはり前と同じ状態で彼に許可を与え、ウマルは用事を済ませて立ち去った。
ところでウスマーンは次のように伝えている。
それから私が彼の家に入る許可を求めたとき彼は座り直し、彼はアーイシャには「お前の衣服を整えなさい」と言った。

そして私は用事を済ませて立ち去った。
そこでアーイシャは次のように言った。
アッラーの使徒よ、どうしてあなたはウスマーンに気を配ったようになぜアブー・バクルとウマルにも気を配らないのですか？
するとアッラーの使徒は次のように言った。
ウスマーンは大変恥かしがりやです。
だから私がそのままの状態で許可を与えたならば彼は私への用向きを伝えられなくなるであろう。
それを心配したからです。

同様のハディースが**ウスマーン**と**アーイシャ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・ムーサー・アシュアーリーは次のように伝えている
アッラーの使徒がマディーナのある農園の中にいるとき、彼は杖を水場と土面の間に突き立てて横になっていた。
そこへある男が門を開けるように求めてきた。
そこで彼は「開けなさい、そして彼に天国への吉報を告げなさい」と言った。
ところでそこにいたのはアブー・バクルであった。
さて私は門を開けて彼に天国への吉報を告げた。
それからそこへまた別の男が門を開けるように求めてきた。
それで彼（預言者）は「開けなさい。
そして彼に天国への吉報を伝えなさい」と言った。
さて私が行ってみるとそこにいたのはウマルであった。
そこで私は門を開け彼に天国への吉報を告げた。
それからまた別の男が門を開けるように求めてきた。
そのとき預言者は座り直して「開けなさい。
そして試練の後の天国への吉報を彼に告げなさい」と言った。
そこで私が行ってみるとそこにいたのはウスマーンでした。
私は彼のために門を開け天国への吉報を伝えた。
そして私が彼が言ったこと（試練の後の……）を伝えた。
すると彼はこう言った。
アッラーよ、私に忍耐を授けたまえ。
またはアッラーにこそ救いを求めまつる唯一のお方。

同様のハディースが**アブー・ムーサー・**アシュアリーによって別の伝承者経路を経て伝えられている。

しかしここでは「アッラーの使徒はある果樹園に入った。
そして私（アブー・ムーサー）に門番をするように命じた」とあり以下は前記と同じハディースである。

アブー・ムーサー・アシュアリーは次のように伝えている

彼（アブー・ムーサー）は家でウドゥー（清浄行為）を済ませそれから出かけた。
そのとき彼は「今日一日はアッラーの使徒にしっかりと同伴し一緒に過ごさねば」と独言した。
こうして彼はモスクにやって来て預言者がどこにいるかを尋ねた。
すると彼ら（教友達）は「彼はこの方角へ出かけて行った」と言った。
そこで私（アブー・ムーサー）は彼を探して彼の跡を追ったがついにアリースの井戸までやって来た。
ここで彼（アブー・ムーサー）は次のように語った。
私（アブー・ムーサー）はアッラーの使徒が用を済ませウドゥーを行うまで、なつめ椰子の枝でつくられた門のところに座っていた。
そして私が立ち上がり、彼のところに行ったとき彼はアリースの井戸の縁に座っていた。
そして彼は井戸の縁を押し広げ脛をむき出しにして両脚をその井戸にぶら下げていた。
そこで私は彼に挨拶をして、それから戻って門のところに座った。
そのとき私は「今日はアッラーの使徒の門番になるのだ」と独言した。
するとそこへアブー・バクルがやって来て門を叩いた。
そこで私は「誰ですか？」と尋ねた。
すると彼は「アブー・バクルです」と答えた。
そこで私は「お待ち下さい」と言った。
それから私は預言者のところに行き「アッラーの使徒よ、アブー・バクルがあなたの許可を求めています」と言った。
すると彼は「彼に許可を与えなさい。
そして彼に天国への吉報を伝えなさい」と言った。
そこで私は（もとの所に）やって来て、アブー・バクルに「入りなさい、アッラーの使徒はあなたに天国への吉報を告げています」と言った。
それでアブー・バクルは中に入り井戸の縁の預言者の右側に一緒に座った。
そして彼も預言者がしているように両脚をその井戸にぶら下げて脛を丸出しにした。
それから私は戻って座った。
私（アブー・ムーサー）は兄弟を（家に）残してきたが、彼はウドゥーを済ませて私に追いつくことであろう。
そのとき私はこんな独言を言った。
もしアッラーがある者に良いことをお望みならば（彼はそれを彼の兄弟に望んでいたのだが）アッラーはその者を（ここに）連れてくるのだなあ。

いずれにせよそのときある者が門を動かしていました。
そこで私は「誰ですか？」と言った。
すると彼は「ウマル・ビン・ハッターブです」と答えた。
そこで私は「お待ち下さい」と言って、それからアッラーの使徒のところに来て彼に挨拶をして「ウマルがあなたに許可を求めています」と言った。
すると彼はこう言った。
彼に許可を与えなさい。
そして彼に天国への吉報を伝えなさい。
そこで私はウマルのところに来て「アッラーの使徒は許可しました。
そしてあなたに天国への吉報を告げています」と言った。
そこで彼は入り、井戸の縁の預言者の左側に一緒に座った。
そして彼もまた両脚をその井戸にぶら下げた。
こうして私は再びもとに戻って座った。
そしてそのとき私は次のように独言した。
もしアッラーがある者に良いことをお望みならば（彼はそれを自分の兄弟に望んでいたのだが）アッラーはその者を連れてくるのだなあ。
いずれにせよ、そのときまたある者が来て門を動かしていた。
そこで私は「誰ですか？」と言った。
すると彼は「ウスマーン・ビン・アッファーンです」と答えた。
そこで私は「お待ち下さい」と言って預言者のところに来てそのことを知らせた。
すると彼はこう言った。
彼に許可を与えなさい。
そして彼に天国への吉報を知らせなさい。
また彼が直面する試練についても一緒に（知らせなさい）。
そこで私は（もとの場所に）来て彼に「お入りなさい。
アッラーの使徒はあなたに天国への吉報を告げています。
またあなたが直面する試練も一緒に」と言った。
すると彼は入り押し広げられた井戸の縁を見て対面の彼らに向い合った縁に座った。
ところでここで伝承者の一人シャリークは次のように伝えている。
サイード・ビン・ムサイイブは「私はそれを彼らの墓（の配置）であると解釈しました」と言った。
ところでアブー・ムーサーはまた次のように伝えている。
私はアッラーの使徒に会いたいと思い出かけました。
そして彼が農園に行ったことが分かったので私は彼の跡を追いかけて彼を捜し当てた。
彼は農園に入り、井戸の縁に座り脛をむき出しにして井戸に両脚をぶら下げていた。

以下は前記のハディースと同様であるがしかしここではサイードの言葉（私はそれを彼らの墓であると解釈しました）は伝えていない。

アブー・ムーサー・アシュアリーは次のように伝えている

アッラーの使徒はある日、彼自身の用事のためにマディーナの郊外にある果樹園に出かけた。

そして私も彼の跡を追って出かけた。

以下は前記と同様のハディースである。

しかしここではイブン・ムサイイブはこう言っている。

私はそれを彼らの墓の事であると解釈します。

（三人は）ここに集まり、ウスマーンだけが（少し）離れている。

アリー・ビン・アブー・ターリブの美徳

アーミル・ビン・アブー・ワッカースは父からの伝聞としてアッラーの使徒がアリーに次のように言ったとして伝えている

あなたは私にとってムーサーにとってのハールーンのような立場（注）である。
ただし私の後には預言者はいない。
また伝承者の一人サイードは次のように伝っている。
そこで私はそのことでサアドに直接話したいと切望した。
そして私はサアドに会った。
そのとき私はアーミルが私に語ったことを彼に語った。
すると彼は「それを確かに聞いた」と言った。
そこで私はさらに「あなた自身がそれを聞きましたか？」と念を押して尋ねた。
すると彼は二本の指を耳に当ててこう言った。
はい、もしそうでなかったならばそのときは私の両耳をばつんぼにせしめよ。

（注）ムーサーの兄弟で彼の代弁者。
聖書ではアロン。
この箇所はシーア派が主張するアリーをもって預言者の第一後継者と考える一つの根拠となっている。
しかし伝説ではハールーンはムーサーよりも先に他界したことになっているので皮肉なことである

サアド・ビン・アブー・ワッカースは次のように伝えている

アッラーの使徒はタブークの戦いでアリーを後方に残した（マディーナに残した）。
そこで彼はこう言った。
「アッラーの使徒よ、私を女や子供達の中に残すのですか？」
すると彼は次のように言った。
「あなたは私にとってムーサーにとってのハールーンのような立場になることに満足しないのですか？
ただし私の後には預言者はいない。」

伝承者の**シュウバ**は同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アーミル・ビン・サアド・ビン・アブー・ワッカースは父からの伝聞としてこう伝えている

ムアーウィヤ・ビン・アブー・スフヤーンはサアドを知事に任命したが、そのとき彼はこう言った。

アブー･トラーブ（アリーの悼名（注 1））を侮辱するのに何がそんなにお前をためらわせるのか？
そこで彼は次のように答えた。
なぜならアッラーの使徒が彼に言った三つのことを思い起こすからです。
そのため私は決して彼を侮辱しません。
もし私がその三つのうちのひとつを見付けたならば私にとってそれは赤いラクダ（注 2）よりも好ましいことです。
私はアッラーの使徒が彼（アリーに）語っているところを直接聞いています。
それは預言者がある戦いで彼を後方に残したときでしたが、アリーは預言者にこう言った。
アッラーの使徒よ、私を女や子供達の中に残すのですか？
するとアッラーの使徒は彼に次のように言った。
あなたは私にとってムーサーにとってのハールーンのような立場になることに満足しないのですか？
ただし私の後には預言者はいない。
また私は頑言者がハイバルの戦いの日に次のように言っているところを聞いた。
必ず私はこの軍旗をアッラーと彼の使徒を愛し、また（逆に）アッラーと彼の使徒が愛する男に与える。
それから伝承者はつづけてこう云いました。
私達は心配してそれを待っていました。
すると預言者は「アリーを私のところに呼びなさい」と言った。
そこへただれ目にかかった彼が連れてこられた。
すると預言者は彼の目に唾液をつけてから彼に軍旗を手渡した。
かくてアッラーは彼に勝利を与えた。
さてまた次の一節**「では言ってやるがよい。さあ私達の子孫とあなたがたの子孫、……呼び出してみよう……」**（第 3 章 61 節）が啓示されたときアッラーの使徒はアリーとファーティマとハサンとフサインを呼んでこう言った。
アッラーよ、この者達が私の家族です。

（注 1）文字通りの意味は「埃のお父さん」だからここでは悪意を込めた悼名のつもリで用いるが、その由来は預言者が愛情を込めて名付けたもので、アリー自身はそれこそ誇りにしていた悼名であったのだから皮肉である。
（注 2）アラブにとってこの種のラクダは最も血統が好ましいラクダとされていた。
それはアラブにとって最も高価なものの代名詞でもあった

サアドは預言者がアリーに向って次のように言ったとして伝えている

あなたは私にとって、ムーサーにとってのハールーンのような立場になることに満足しないのですか？

アブー・フライラは次のように伝えている

アッラーの使徒はハイバルの戦いの日にこう言った。

必ず私はこの軍旗をアッラーと彼の使徒を愛し、アッラーがその両手に勝利を授ける男に与える。

ところでウマル・ビン・ハッターブは次のように語った。

私はその日ほど指揮権を望んだことはなかった。

私はそのために呼ばれたいと希望してそれを待ち望んだ。

しかしアッラーの使徒はアリーを呼び、彼にそれを与えた。

そしてこう言った。

行きなさい。

そしてアッラーがあなたに勝利をもたらすまで脇目も振るでない。

そこでアリーは少し進みそれから立ち止まったが、彼は脇目も振らず「アッラーの使徒よ、私は何のために人々と戦うのですか？」と叫んだ。

すると彼は次のように言った。

彼らが「アッラー以外に神は無し、ムハンマドはアッラーの使徒である」と誓言するまで彼らと戦いなさい。

もし彼らがそれを行った（誓言した）ならそのときは彼らがあなたに彼らの血と財産を禁じることができる。

しかし法的に正当なものは別であり、彼らの清算はアッラーに任せられる。

サフル・ビン・サアドは次のように伝えている

アッラーの使徒はハイバルの戦いの日に次のように言った。

私は必ずこの軍旗をアッラーがその両手に勝利を授ける男、またアッラーと彼の使徒を愛し、同時にアッラーと彼の使徒が愛する男に与える。

そこで人々はそれが与えられる者は誰かについて夜を徹して話し込んでいた。

そして人々が朝を迎えたとき、彼らはアッラーの使徒のところに急いで行った。

そして彼ら全員がそれぞれそれを与えられることを望んでいた。

すると彼は「アリー・ビン・アブー・ターリブはどこにいますか？」と尋ねた。

そこで彼らは「アッラーの使徒よ。彼は目を患っています」と言った。

そしてアリーが連れてこられたが、アッラーの使徒は彼の両目に唾液をつけて彼のために祈った。

すると彼は治った。

そして彼は全く痛みがとれたようでした。
こうして預言者は彼に軍旗を与えた。
そこでアリーは「アッラーの使徒よ、私は彼らが私達の様になるまで彼らと戦います」と言った。
すると預言者はこう言った。
彼らの広場に着くまで用心して進みなさい。
それから彼らをイスラームに誘いなさい。
そして彼らが行わなければならないアッラーの権利（注）を彼らに知らせなさい。
アッラーに誓って、あなたを通じてたとえ一人でもアッラーが正しく導くこと、それは赤いラクダがあなたのものになることよりもあなたにとってずっと良いことです。

（注）それは人間側からみると義務にあたる

サラマ・ビン・アクワウは次のように伝えている

ハイバルの戦いの日、アリーは預言者の後方に残された。
そのとき彼はただれ目であったが、彼は「私はアッラーの使徒の後方に残るのですか？」と言って出て行き、預言者に追い付いた。
そしてアッラーが翌朝には勝利をお授けになるその夜半にアッラーの使徒はこう言った。
必ず私はこの軍旗をアッラーと彼の使徒が愛し、またはアッラーと彼の使徒を愛する男に与える。
またはその男がこの軍旗を必ず受け取り、アッラーは彼に勝利を与えるであろう。
そのとき私達と一緒にそこにアリーがいるではありませんか！
私達は全くそれを予想していませんでした。
そこで彼らは「ここにアリーがいます」と言った。
そこでアッラーの使徒は軍旗を彼に与えた。
そしてアッラーは彼に勝利を授けた。

ヤジード・ビン・ハイヤーンはこう伝えている

私はフサイン・ビン・サブラとウマル・ビン・ムスリムと一緒にザイド・ビン・アルカムの所へ出かけた。
私達が彼のそばに座ったとき、フサインは彼に次のように言った。
ザイドよ、あなたは沢山の良きことに出会い彼のハディースを聞いた。
また彼と一緒に戦った。
また彼の背後で礼拝をした。
ザイドよ、本当にあなたは沢山の良きことに出会いました。
ザイドよ、アッラーの使徒から聞いたことを私達に語って下さい。

すると彼は次のように言った。
私の甥よ、アッラーに誓って、私は年をとってしまいました。
そして私の時代は過ぎ去ってしまいました。
アッラーの使徒について記憶していたことの一部は忘れてしまいました。
だから私が（今でも覚えていて）語ったことだけを受け入れなさい。
そして私が（今は忘れて）語らなかったことに関しては私にそれを強いないで欲しい。
それから彼は次のように語った。
ある日、アッラーの使徒は、マッカとマディーナの間にあるフンムと呼ばれる水場（注１）で私達に演説した。
彼はアッラーを讃え彼を讃美してから（私達に）訓戒を与える説教をした。
それから預言者は次のように語った。
では皆さん私は今にも主のお使いが（お迎えに）来ようとしている一介の人間です。
そしてそれに私は応えねばなりません。
そこで私はあなた達に二つの重いものを残してゆきます。
その一つはアッラーの啓典です。
そこには正しい導きと光明があります。
ですから皆さんはアッラーの啓典をしっかりとつかみ、それを固く守りなさい。
こうして彼は（私達に）アッラーの啓典を（しっかりとつかむことを）勧告しそれに望みを託された。
それから彼はこう言った。
（第二番目は）私の家族である。
私は私の家族によってあなた達にアッラーを思い起こさせます。
（私は）あなた達に私の家族によってアッラーを思い起こさせます。
ここでフサインは彼（ザイド）に「ザイドよ、彼の家族は誰ですか？
彼の妻達は彼の家族の一員ではないのですか？」と尋ねた。
すると彼は答えてこう言った。
彼の妻達も家族である。
しかしここでは彼の家族とは彼のなき後にサダカ（つまりザカートの受け取り）を禁じられた者です。
そこで彼は「それは誰ですか？」と尋ねた。
するとザイドは答えてこう貢った。
彼らはアリーの家族とアキール（注 2）の家族とジャアファル（注 3）の家族とアッバース（注 4）の家族である。
すると彼は「これら皆がサダカを禁じられているのですか？」と尋ねた。
そこでザイドは「そうだ」と答えた。

（注 1）クムとも発音されよう。
池または水溜りでジャフファという所からは三マイルの所にある

（注 2）アリーの兄弟でバドルの戦いではマッカ側に組して戦い捕虜となった。
スィッフィーンの戦いではムアーウィヤ側について戦った変り種

（注 3）アリー及びアキールの兄弟で早くからイスラームに入信した。
一時エチオピアに移住したが 628 年にマディーナに戻り、同年ムータの戦いで戦死した

（注 4）預言者の叔父の一人。
彼の子孫が後にアッバース朝を樹立する

同様のハディースが**ザイド・ビン・アルカム**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

同様のハディースが**ザイド・ビン・アルカム**によって伝えられている。

しかしここでは次の一文が加えられている
アッラーの啓典には導きと光明がある。
それを固く守り、それをしっかりとつかんだ者は正しく導かれよう。
しかしそれを間違えた者は道に迷うだろう。

ヤジード・ビン・ハイヤーンはこう伝えている
私達は彼（ザイド・ビン・アルカム）の所を訪ねた。
私達は彼に次のように言った。
あなたは良きことを見た。
あなたはアッラーの使徒とともに生きた。
また彼の背後で礼拝をした。
以下は前記と同様のハディースを伝えたが、しかしここでは多少の表現上の違いがあり
彼は次のように伝えた。
見よ、私はあなた達に二つの重いものを残してゆきます。
その一つはアッラーの啓典である。
それはアッラーのロープ（注）である。
それに従った者は正しく導かれそれを捨てた者は迷い道を歩くことになる。
またこのハディースの中には次のような表現がある。
私達は「彼の家族とは誰ですか?彼の妻ですか？」と尋ねた。
すると彼はこう答えた。

いいえ、アッラーに誓って、.女性は（妻として）男性と一緒にある一時期を過ごすだけです。
それから彼が彼女を離婚すると彼女は彼女の父のもとに、彼女の親族のもとに帰ります。
彼の家族とは彼自身が血縁者で、つまり父方の親族（アサバ）であり彼らは預言者の死
後ザカートの受け取りを禁じられている人達です。

（注）比喩であり約束、光明、慈悲の原因……など色々に解釈されている

アブー・ハーズィムはサフル・ビン・サアドからの伝聞として次のように伝えている
マルワーン家の者（注 1）がマディーナの総督として起用された。
彼はサフル・ビン・サアドを呼び出して、アリーを非難するように命じた。
しかしサフルはそれを拒んだ。
すると彼（総督）は彼にこう言った。
もしあなたがそれを拒むのならせめて「アッラーがアブー・トラーブ（アリー）を呪いますよう
に」と言いなさい。
そこでサフルは彼に「アリーにとって、アブー・トラーブよりも好ましい名前は他にありませ
ん。
彼はその名で呼ばれれば本当に喜んでいました」と言った。
すると総督は彼に「彼の話しを私達にしなさい。
なぜ彼がアブー・トラーブと名付けられたのか？」と言った。
そこで彼は次のように語った。
アッラーの使徒がファーティマの家（注 2）に来たが、彼は家にアリーがいないことに気が
付いた。
そこで彼は「お前の従兄弟（つまりここではお前の夫の意）はどこですか？」と尋ねた。
すると彼女はこう言った。
「私と彼の間のあることで彼が私に怒って出て行きました。
彼は私のところで昼寝をしませんでした」
そこでアッラーの使徒はある者に「彼がどこにいるか探して下さい」と言った。
そしてその者が来て「アッラーの使徒よ、彼はモスクで眠っています」と言った。
そこでアッラーの使徒は彼のところにやって来たが、アリーはそこで横になっていました。
そのとき彼の上着は彼の背中から落ちていて彼の背中には土がついていた。
するとアッラーの使徒は彼の体から土を払いながらこう言った。
起きなさい。アブー・トラーブ（埃の父）よ、起きなさいアブー・トラーブよ。

（注 1）マルワーン・ビン・ハカムのこと。
ウマイヤ朝に属しアリー及びアリー党を宿敵とした

（注 2）預言者の娘ファーティマはアリーと結婚していたのでアリーの家と同じこと。
またアリーは預言者とは従兄弟同士で、従ってアリーにとって妻のファーティマは従兄弟の娘でもある。

サアド・ビン・アブー・ワッカースの美徳

アーイシャは次のように伝えている

ある夜アッラーの使徒は眠れない夜を過してこう言った。
今夜、教友達の中でも正直な男が私を護衛してくれたらなあ。
こうして彼女はさらにつづけて「私達は武器の（すれる）音（注）を聞きました」と語った。
そこで預言者は「誰ですか？」と言った。
するとサアド・ビン・アブー・ワッカースが「アッラーの使徒よ、私はあなたを護衛しに来ました」と言った。
さらにアーイシャはこう伝えた。それでアッラーの使徒は眠りました。
そして私は彼のいびきを聞きました。

（注）武具足をして武器を帯びて歩くとそれらが触れてすれる音がする。

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒はマディーナに着いてからある夜眠れなくてこう言った。
今夜は教友達の中でも正直な男が私を護衛してくれたらなあ。
そして彼女はさらにつづけて次のように伝えている。
私達がこのような状態のとき、武器の（触れてすれる）音チリンチリンを聞いた。
そこで預言者は「誰ですか？」と言った。
すると相手は「サアド・ビン・アブー・ワッカースです」と言った。
それでアッラーの使徒は「なぜここに来たのか？」と彼に言った。
すると彼は「アッラーの使徒が心配になり護衛に参りました」と言った。
こうしてアッラーの使徒は彼のために祈り、それから眠った。
ところでイブン・ルムフの伝えるハディースではこうなっている。
そこで私達は「誰ですか」と言った。

アブドッラー・ビン・アーミル・ビン・ラビーアはアーイシャからの伝聞としてこう伝えている

アッラーの使徒はある夜眠れなかった。以下は前記ハディースと同様である。

アブドッラー・ビン・シャッダードはアリーからの伝聞として次のように伝えている

アッラーの使徒はサアド・ビン・マーリクの場合を除いては誰にも彼（預言者）の両親のことをもち出したことはない。

それはウフドの戦いの日でしたが、預言者は彼にこう言った。
（矢を）射かけなさい。
私の父と母をあなたの身の代金にしてもおしくない（注）。
（注）当然この時点では預言者の父母は他界していてこの世にはいないが、これは古くからのアラビアの慣用表現であり、深い愛情と献身を示す誇張表現の一つである

同様のハディースが預言者からの伝聞として**アリー**が別の伝承者経路を経て伝えられている。

サアド・ビン・アブー・ワッカースは次のように伝えている
ウフドの戦いの日に、アッラーの使徒は彼の両親のことを私のために持ち出しました。

同様のハディースが**ヤヒヤー・**ビン・サイードによって別な伝承者経路を経て伝えられている。

アーミル・ビン・サアドは父からの伝聞として次のように伝えている
ウフドの戦いの日に、預言者は彼の両親のことを彼（サアド）のために持ち出しました。
それは多神教徒の一人が火攻めを行ったときでしたが預言者は彼にこう言った。
（矢を）射かけなさい。私の父と母をあなたの身代りとしてもおしくない。
そして彼（サアド）は次のように伝えた。
そして彼（多神教徒）に矢じりのない矢を射かけて彼の脇腹に命中させた。
それで彼は倒れた。
そして彼の恥部が現われた。
それでアッラーの使徒は笑い（注）そのとき私は彼の奥歯を見た。

（注）敵を倒したので喜んで笑ったの意

ムスアブ・ビン・サアドは父からの伝聞として次のように伝えている
彼（サアド）に関してクルアーンの数節が下った。
サアドの母は彼が彼の宗教（イスラーム）を捨てるまでは決して彼とは喋らないし食べないし飲まないという誓いを立てた。
そして彼女は彼に次のように言った。
アッラーはあなたに親孝行をするように命じたとあなたは主張しました。
私はあなたの母です。
そこで私はあなたにまさにこのことを命じます。
そして彼女は（このような状態で）3 日間も過ごしましたが、疲労のために彼女は気絶してしまった。
そこでウマーラと呼ばれる彼女の息子が立ち上がり彼女に水を飲ませた。

すると彼女はサアドを呪い始めた。
そこでアッラーはクルアーンの中の次の一節を下した。
「われ（アッラー）は両親への態度を良くするよう人間に指示した。……だがもし（あなたの知らないものを）われに同等に配することを両親があなたに強いたとしたら彼らに従ってはならない」（第 31 章 15 節）。
だが現世のことでは彼らに親切に仕えなさい。
また彼は次のように伝えている。
アッラーの使徒は沢山の戦利品を獲得した。
そこに一振りの剣があったので私はそれを取りアッラーの使徒のところにそれを持ってやって来て「この剣を分け前として私に下さい。
あなたは私の状態を良く知っているはず」と言った。ところが彼は「それを持って来た場所に戻しなさい」と言った。
そこで私は戻り、それを戦利品置場に投げようと思っていたのだが私の魂の方が私に打ち勝ち私は再び彼のところに戻ることになり「これを私に下さい」と言った。
すると彼は声高に私に向って「それを持って来た場所に戻しなさい」と言った。
ここでアッラーは以下の啓示を下した。
「彼らは戦利品についてあなたに問うであろう」（第 8 章 1 節）（注）。
また彼は次のように伝えた。
私が病気になった時、私は使いの者を預言者のもとに送った。
それで彼（預言者）が私のところにやって来ることになった。
そこで私は彼に「私の財産を私の好きなように分配させて下さい」と言った。
ところが彼は同意しなかった。
そこで私は「半分だけでも」と言ったが、またも彼は同意しなかった。
それで私は「三分の一だけ」と言った。
すると今度は彼は黙っていた。
こうして以後（財産の）三分の一が（遺言によって分配することが）許されるようになった。
また彼は次のように伝えている。
私がアンサール（支援者達）とムハージルーン（移住者達）のグループを訪ねたとき、彼らはこう言った。
いらっしゃい。
あなたに食事と酒を飲ませてあげます。
もっともこれは酒が禁じられる以前のことでした。
そのとき私は農園に彼らを訪問したのでしたが、そこには焼かれたラクダの頭と酒の入った小さな皮袋があった。
そこで私は彼らと食べて飲んだ。
そうこうするうちに彼らの間でアンサール（マディーナ人）とムハージルーン（マッカ人）の

議論がはじまった。
そこで私は「ムハージルーンの方がアンサールよりも良い」と言った。
すると一人の男がそのラクダの頭の顎の一部をつかみ、それで私を殴った。
このため私の鼻が傷ついた。
そこで私はアッラーの使徒のもとへ行き彼に（事の次第を）伝えた。
ここでアッラーは酒に関して次のような啓示を下した。
「まことに酒と賭矢と偶像と占い矢は忌むべきことで悪魔の仕業である」（第 5 章 90 節）。

（注）バドルの戦いの戦利品の分配について問うの意味だろう

ムスアブ・ビン・サアドは父からの伝聞として「私（サアド）に関して四つのクルアーンの一節が下された」と伝えたが、残りのハディースは前のハディースと同じである。
ただしシュウバの伝えるハディースでは次のように表現されている
そして彼らは彼女（サアドの母）に食事をさせようと思ったとき彼女の口を杖でこじ開けて食べ物を口に入れた。
またこのハディースの中に次のような表現がある。
彼はそれでサアドの鼻を殴り、傷つけた。
それでサアドの鼻には傷跡ができていた。

サアドは次のように伝えている
私に関して次の一節が下りた。
「また汝（預言者）は朝な夕な主に祈る者を追放してはならない」（第 6 章 52 節）（注）。
この一節は六人に関連して下りたものだが私とイブン・マスウードは彼らの内の二人である。
そのとき預言者はマッカの多神教徒達によって「このような（下賎な）者達をお前（預言者）は近づけている」と非難されていた。

（注）マッカ時代の初期に入信した者の多くはクライシュ族の指導者達が全く人格を認めない下層の貧困者だった。
そしてこのような下賎な者達と預言者のもととはいいながら同席することを望まない者達が彼らの追放を要求していた。
サアドはこうした貧しい下賊の人々の一人であった。
そして彼ら多神教徒逢はこれらの下賎な者達とは同席しないという条件で預言者を認めてもいいと主張していた。

サアドは次のように伝えている

私達、預言者と一緒にいたのは六人だった。

そこで多神教徒達は預言者にこう要求した。

これらの者達を追い出して下さい。

私達に大胆な態度を取らないためにも。

ついで彼は次のように伝えた。

それは私とイブン・マスウードとフザイル族出身のある男とビラールとそれに名前の分からない二人の男でした。

そこでアッラーの望まれることがアッラーの使徒の心にわき起こり彼は独り言を言ったが、そのときアッラーは次の一節を下した。

「ひたすら主のお喜びを願って朝な夕な主に祈る者を汝は追放してはならない」（第 6 章 52 節）。

タルハ(注 1)とズバイル(注 2)の美徳

(注 1)裕福な商人であったが、初期に入信してイスラームの道に献身した。
ウフドの戦いでは預言者の命を身を挺して救った。
預言者の生前に天国を約束された 10 人の内の一人に選ばれていたがアリーとアーイシャが対決したラクダの戦いてはアーイシャ側に味方して 656 年に殺害されている
(注 2)預言者とは従兄弟同志(叔母の子供)でありまたアーイシャの姉のアスマーウの夫てある。
預言者が生前に天国を約束した者の一人である。
バスラ近郊のラクダの戦いではタルハと同様にアーイシャ側につき 656 年に殺害されたが武人としても名高い

アブー・ウスマーンは次のように伝えている。

アッラーの使徒が戦ったある日のことだったが、そのときタルハとサアド以外には(預言者のもとに踏み止まって)誰も残っていなかった。
二人は私にそのように語ったと伝承者は語った。

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

ハンダクの戦いの日にアッラーの使徒は人々に(聖戦を)呼びかけていた。
それでまずズバイルがそれに応えた。
それからまた彼は人々に呼びかけた。
するとズバイルがそれに応えた。
それからまた彼は人々に呼びかけた。
するとまたズバイルがそれに応えた。
そこで預言者は次のように言った。
預言者にはそれぞれ支援者(ハワーリー(注))がいるものだが私のハワーリーはズバイルである。

(注)イエスキリストの場合は彼の使徒つまり弟子達のことである。
この言葉はエチオピア語である。
古代イエメンの末期にエチオピアのキリスト教勢力がイエメンの地に侵入し一時占領したが、その時以来の侵入語でナジラーン経由でヒジャーズ地方のアラビア語に入ったものと思われる

ジャービルは別の伝承者経路を経てこのハディースを伝えている。

アブドッラー・ビン・ズバイルは次のように伝えている

ハンダクの戦いの日、私（注）とウマル・ビン・アブー・サラマは女性達と一緒にハッサーン（ビン・サービト）の砦にいた。
彼はあるとき私に腰を屈めたので、私は彼をちらっとながめました。
また別の時には私が彼に腰を屈めたので、彼が私をちらっとながめました。
さて私は父（ズバイル）が武器を持って馬に乗り、クライザ族討伐に向ったときの事を覚えていました。
ところでアブドッラー・ビン・ズバイルはさらに次のように伝えた。
私はそのことを父（ズバイル）に語った。
すると彼は「私を見たかね、我が息子よ」と言ったので、私「はい」と答えた。
そして彼（ズバイル）は次のように言った。
アッラーに誓って、その日アッラーの使徒は私のために彼の両親を持ち出してこう言った。
私（預言者）の父と母をあなたの身代りにしても惜しくない。

（注）イブン・ズバイルはヒジュラ元年に生れた。
それでハンダクの戦いはヒジュラ四年のことなのでこの時彼は四才以下のはずである。
しかし彼は以下のハディースの如く物事をかなりしっかりと覚えている。
この貴公子は長じてフサインの殉教死の後にヒジャーズにおける反ウマイヤ朝勢力のリーダーとして頭角を現わし、イスラーム初期の第二次反乱の中心人物となった

アブドッラー・ビン・ズバイルは次のように伝えている

ハンダクの戦いの日、私とウマル・ビン・アブー・サラマは女性達もそこにいたハッサーンの砦にいた。
ところで女性達とはつまり預言者の身内の女達である。
以下は前記のハディースと同じである。

アブー・フライラは次のように伝えている

アッラーの使徒はヒラーの山（注 1）にいた。
彼と一緒にアブー・バクル、ウマル、ウスマーン、アリー、タルハ、ズバイルがいた。
そしてそのとき岩がぐらっと動いた。
するとアッラーの使徒は次のように言った。
静かになさい。あなたの上には預言者とスィッディーク（アブー・バクルの悼名）と殉教者（注 2）しかいないのだから。

（注 1）マッカ郊外の山

（注 2）後にウマル、ウスマーン、アリー、タルハ、ズバイルは全て殉教死した

アブー・フライラは次のように伝えている

アッラーの使徒はヒラーの山にいた。

そのときヒラーの山がぐらっと動いた。

そこでアッラーの使徒は次のように言った。

ヒラーよ、静かにしなさい。

あなたの上には預言者とスィッディークと殉教者しかいません。

そのときそこには預言者とアブー・バクルとウマル、ウスマーン、アリー、タルハ、ズバイル及びサアド・ビン・アブー・ワッカースがいました。

ヒシャームは父（ウルワ・ビン・ズバイル）からの伝承として次のように伝えている

アーイシャは次のように言った。

アッラーに誓って、あなた（ウルワ）の両親（アブー・バクルとズバイル）（注 1）は**「ひどい負傷をこおむった（注 2）後でもアッラーと使徒の坪びかけに応えた者達である」**（第 3 章 172 節）。

（注 1）ウルワの両親はズバイルとアスマーウである。

アスマーウはアブー・バクルの娘でアーイシャの姉である。

従って実際にはウルワにとってアブー・バクルは母方の祖父にあたるわけである。

（注 2）ウフドの戦いのこと

またこのハディースは**ヒシャーム**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

しかしここでは次の一文が付け加えられている。

それはアブー・バクルとズバイルを意味する。

ウルワは次のように伝えている。

あなたの両親（アブー・バクルとズバイル）は**「ひどい負傷をこおむった後でもアッラーと使徒の呼びかけに応えた者達である」**（第 3 章 172 節）。

アブー・ウバイダ・ビン・ジャッラーフの美徳

アナスはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

すべてのウンマ（信仰共同体）にはアミーン（誠実な人）がいる。
このウンマ（イスラーム）の私達のアミーン（注）はアブー・ウバイダ・ビン・ジャッラーフである。

（注）イスラーム以前にムハンマドの悼名がアミーン（正直者）であったことでよく知られているが、現代アラビア語では図書館長とか財団基金の長とかアラブ連盟や国連の総長など幅広い用法がある。
それらの共通点は絶大な公権力を行使するというよりも信頼を基にして託された権限を忠実に実施する公職に当てられている

アナスは次のように伝えている

イエメンの人達がアッラーの使徒のもとに到着した。
そして彼らは次のように言った。
スンナ（注）とイスラームを我々に教えてくれる者を私達と一緒に派遣して下さい。
すると彼（預言者）はアブー・ウバイダの手を取って「この者がウンマのアミーンです」と言った。

（注）預言者のスンナ（慣行）の意味である、そしてスンナがイスラーム教と不可分であると考えられていたことも分る

フザイファは次のように伝えている

ナジュラーンの人々（注）がアッラーの使徒のもとへやって来た。
そして彼らはこう言った。
「アッラーの使徒よ、誠実な男（アミーン）を私達に派遣して下さい」
そこで預言者は「必ずあなた達に本当に信頼に足る誠実な男を派遣します」と言った。
それで人々（教友達）は（誰を派遣するのかと）期待して見守っていた。
すると彼はアブー・ウバイダを派遣した。

（注）ナジュラーンは現在はイエメン共和国に接するサウディアラビア王国内にあるが伝統的にはイエメンの一部と考えられていた。
この地の住民は早くからネストリウス派のキリスト教を信奉していたが、それはササン朝ペルシャ下の同派の布教活動の結果と考えられている。

いずれにせよ彼らは一神教徒であったので、イエメン人の中でも最もイスラームを理解できる立場にあったものと思われる
このハディースは**アブー・イスハーク**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

ハサン、フサインの美徳

アブー・フライラは次のように伝えている

預言者は（孫の）ハサンに次のように言った。
アッラーよ、私は本当に彼を愛しています。
どうかあなたも彼を愛して下さい。
また彼を愛する者を愛して下さい。

アブー・フライラは次のように伝えている

私はアッラーの使徒と一緒に日中に出かけたが、彼はカイヌカーウ族（注）の市場に着くまで私に話しもせず、また私の方も話しかけませんでした。
それから彼は戻りファーティマの家にやって来て「子供はそこにいますか?子供はそこにいますか？」と尋ねた。
つまりそれはハサンのことでした。
さて私達は彼の母親がまず彼をつかまえ、水を浴びさせ、服を着させ、花の首飾りで彼を飾りつけているのであろうと思っていました。
こうして待つほどもなく彼（ハサン）が走ってきてお互いに抱きあった。
そこでアッラーの使徒は次のように言った。
アッラーよ、私は本当に彼を愛しています。
どうかあなたも彼を愛して下さい。
また彼を愛する者を愛して下さい。

（注）マディーナのユダヤ三部族のうちの一つ

バラーウ・ビン・アーズィブはこう伝えている

預言者が「アッラーよ、私は本当に彼を愛しています。
どうかあなたも彼を愛して下さい」と言っているとき、私はハサン・ビン・アリーが彼の肩の上に乗っているところを目撃した。

バラーウ・ビン・アーズィブはこう伝えている

私は預言者がハサン・ビン・アリーを肩に乗せて彼が「アッラーよ、私は本当に彼を愛しています。
どうかあなたも彼を愛して下さい」と言っているところを目撃した。

イヤースは父からの伝聞としてこう伝えている

私は預言者とハサンとフサインを灰色のラバに乗せて引いていた。
そのとき私は彼らを預言者の家まで引いたが、彼らの一人は彼の前にもう一人は彼の後ろに乗っていた。

預言者の家族の美徳

アーイシャは次のように伝えている。

預言者は朝、黒いラクダの毛の縞模様の上衣を着て出かけた。

そこにハサン・ビン・アリーが来た。

すると預言者は彼（ハサン）をその中に入れて包み込んだ。

それからフサインがやって来たが、預言者は彼（フサイン）も一緒にその中に入れて包み込んだ。

次にまた（父親の）アリーが来たので彼をその中に入れた。

そして預言者は次のように誦んだ。

「お前達お家の者達よ、アッラーはひたすらお前達から穢れを払い、お前達を清浄にしてやることを望まれている」（第 33 章 33 節）。

ザイド・ビン・ハーリサとウサーマ・ビン・ザイド（親子）の美徳

サーリム・ビン・アブドッラーは父からの伝聞として次のように伝えている

私達はザイド・ビン・ハーリサをザイド・ビン・ムハンマドと呼んでいたが（このことで）次のクルアーンの一節が下った。
「彼ら（養子）は彼らのほんとうの父親（の名）をもって呼んでやりなさい。
その方がアッラーのもとから見ればずっと公平というものです」（第 33 章 5 節）（注）。

（注）ザイドはムハンマドの最初の妻ハディージャの召使いで奴隷身分であったが、彼女は彼を解放してムハンマドに与えた。
預言者はザイドを自分の養子として自分の息子と呼んでいた。
当時のアラブの慣習もそのようであったが、そこにこのクルアーンの一節が下り、以後本当の父親の名前が分る限りその息子の誰某と名乗るようになった。
ちなみにザイドは戦争捕虜から奴隷にされたので彼の出所ははっきりしていた

このハディースは**アブドッラー**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

イブン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの使徒は遠征隊を送ったとき、ウサーマ・ビン・ザイドを彼らの指揮官に任命した。
しかし人々は彼の指揮に不服であった（注）。
そこでアッラーの使徒は立ち上がりこう言った。
もしあなた達が彼の指揮に不服であるならば、それはあなた達は以前から彼の父の指揮に不服を唱えていたことになる。
アッラーに誓って、彼は指揮官に相応しかった。
そして彼は私にとってもっとも好ましい人物であった。
そして彼の後は本当にこの者が私にとって最も好ましい人物である。

（注）遠征隊はシリア国境に向けられたが、これは預言者の他界直前であった。
人々がウサーマの指揮に不満であった理由は彼の父ザイドが少年の頃、奴隷身分（戦争捕虜）だったためと思われる。
ザイドは 629 年にシリア方面の遠征即ちムウターの戦いの指揮をとり戦死していた。
恐らく預言者はこのハディースの遠征で、息子のウサーマに父の仇を討たせてやろうと考えていたのかも知れない

サーリムは父からの伝聞としてこう伝えている

アッラーの使徒はミンバル（説教台）の上から次のように言った。
もしあなた達が彼（ウサーマ・ビン・ザイド）の指揮に不満があるならばそれはあなた達が彼以前の彼の父（ザイド）の指揮に不服を唱えていたことになる。
アッラーに誓って、彼（ザイド）はそれに相応しかった。
アッラーに誓って、彼は私にとって最も好きな人物であった。
アッラーに誓って、この者（ウサーマ）はそれに相応しい。
アッラーに誓って、ザイドのなき後彼が最も好きな人物である。
そこで私はあなた達に彼を公正に扱うことを忠告します。
なぜなら彼はあなた達の中でも敬虔な人物のうちの一人であるからである。

アブドッラー・ビン・ジャアファル（注）の美徳

（注）彼の父がエチオピアに避難移住していたので、彼はエチオピア生れである。
アリーの甥に当たり大変気前の良かったことて知られている

アブドッラー・ビン・ムライカはこう伝えている

アブドッラー・ビン・ジャアファルはイブン・ズバイルに次のように言った。
私達つまり私とあなたとイブン・アッバースがアッラーの使徒に会ったときのことを覚えていますか？
彼は私達を（ラクダに）乗せてあなたを残しましたね（注）。
するとイブン・ズバイルは「はい」と言った。

（注）三人は一度に乗せられないので、イブン・ズバイルを残したの意

このハディースはハビーブ・ビン・シャヒードによって伝えられている。

アブドッラー・ビン・ジャアファルはこう伝えている

アッラーの使徒が旅から戻ってきたとき、彼は彼の家族の子供達に迎えられたものでした。
あるとき、彼が旅から戻ったとき、私が最初に彼のところに行った。
すると彼は私を彼の前に乗せた。
それからファーティマの息子の一人が来たので、彼は彼を後ろに乗せた。
このようにして私達三人は動物（ラクダ）に乗ってマディーナに入ったものでした。

アブドッラー・ビン・ジャアファルはこう伝えている

預言者はが旅から戻ってきたとき、彼は私達に迎えられました。
あるとき私とハサンまたはフサインによって迎えられました。
彼は私達の一人を彼の前に乗せ、もう一人を後ろに乗せた。このようにして私達はマディーナに入った。

アブドッラー・ビン・ジャヤファルはこう伝えた

ある日、アッラーの使徒は私を彼の後ろに乗せた。
そして彼は私にあることを話した。
だが私は人々の誰れにもそれを話していません。

信者達の母ハディージャ（注）の美徳

（注）ムハンマドより 15 才年上の彼の最初の妻で結婚して 15 年後にムハンマドが啓示をうけて預言者となり、最初の信者となって彼を励まし、彼のイスラーム運動を献身的に支えた。
預言者との間に 6 人の子供を生んだが、ファーティマを除いて皆幼少または若くして他界した

アブドッラー・ビン・ジャアファルはこう伝えた

私はクーファでアリーが次のように語っているところを聞いた。
私（アリー）はアッラーの使徒が次のように言っているところを聞きました。
マルヤム・ビント・イムラーン（聖母マリヤ）は当代で最も素晴しい女性でした。
またハディージャ・ビント・フワイリドも当代随一の素晴しい女性です。
ここで伝承者のアブー・クライブは「そのときワキーウは天地を指差した（注）」と伝えた。

（注）天上天下を意味して当代随一のジェスチャー

アブー・ムーサーはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

男性達の中には多くの人格者がいた。
しかし女性達の中からはマルヤム・ビント・イムラーンとファラオ（パロ）の妻のアーシヤ（注 1）だけである。
また他の女性達に比べてアーイシャ（注 2）の素晴しさは他の食べ物に比べてサリード（肉スープにパンを浸したもの）の素晴しさのようなものである。

（注 1）預言者ムーサー（モーゼ）を救つた女性、旧約書ではパロの娘ということになっている

（注 2）なせハディージャの項にアーイシャが登場するのか全く分からない

アブー・フライラは次のように伝えている

天使ジブリール（ガブリエル）が預言者のところに来て次のように言った。
アッラーの使徒よ。
見よ、ここにハディージャがあなたの方にやって来た。
彼女はおかずかまたは調理した食べ物または飲み物が入っている容器を持っています。
彼女があなたのところに来たならば彼女の主と私からの挨拶を彼女に伝えなさい。
そして宝石でできた天国の宮殿の吉報を彼女に伝えなさい。

そこには騒音もなければ困難もない。
またこのハディースはアブー・フライラによって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは表現上の違いが多少ある。

イスマイールは次のように伝えている
私はアブドッラー・ビン・アブー・アウファーに次のように尋ねた。
アッラーの使徒はハディージャに天国の宮殿の吉報を伝えましたか？
すると彼は「はい」と答え、彼が彼女には宝石でできた天国の宮殿の吉報を伝え、そこには「騒音もなければ困難もないと」言った。
同様のハディースがイブン・アブー・アウファーによって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アーイシャは次のように伝えている
アッラーの使徒はハディージャ・ビント・フワイリドに天国の宮殿の吉報を伝えた。

アーイシャは次のように伝えている
私はハディージャに嫉妬したほどに他の女性には嫉妬したことはありません。
彼女は預言者が私と結婚する三年も前に死んでいましたが、私は彼が彼女をほめる言葉をしばしば聞かされました。
そして彼の主は彼に宝石でできている天国の宮殿の吉報を彼女に伝えるように命じました。
また彼は羊を犠牲に捧げたときは（いつもその肉を）彼女の女友達に贈っていました。

アーイシャは次のように伝えている
私はハディージャ以外の預言者の妻達には誰も嫉妬したことはない。
でも私は決して彼女を（直接）見ることはなかったのですが（注）。
またアーイシャは次のように伝えている。
アッラーの使徒は羊を犠牲に捧げたときにこう言った。
彼女（ハディージャ）の友達にそれを届けなさい。
ついでアーイシャはさらに次のように伝えた。
ある日、私は彼に怒って「（あなたの心には）ハディージャだけですか？」と言った。
すると彼はこう言った。
彼女の愛は私の中に育てられたものである（アッラーのご意志によって）。

（注）ハディージャが死んだときアーイシャはまだ六才の幼女だった

同様のハディースが**アブー・ウサーマ**によって羊の話しまで伝えられている。
しかしそれ以下は伝えられていない。

アーイシャは次のように伝えている

私はハディージャに嫉妬したほどに、預言者のどの妻にも嫉妬したことはない。
それは彼があまりにも彼女をほめるからである。
しかも私は彼女には決して会ってもいないというのに。

アーイシャは次のように伝えている

預言者はハディージャが亡くなるまでいかなる他の女性とも結婚しなかった。

アーイシャは次のように伝えている

ハディージャの妹であるハーラ・ビント・フワイリドがアッラーの使徒に面会の許可を求めた。
そのとき彼はハディージャの許可の求め方を思い出して、それだけで彼は和やかな気分になった。
そして彼は「アッラーよ、あれはハーラ・ビント・フワイリドです」と言った。
それで私は嫉妬してこう言った。
「なぜ歯茎の赤いクライシュの一人の老婆を思い起こすのですか？
彼女はすでに死んでしまいました。
そしてアッラーは彼女より良いものを代わりにあなたに授けました。」

アーイシャ（注）の美徳

（注）彼女は預言者の第三番の若妻でアブー・バクルの娘である。
彼女は預言者が結婚した妻達のうちで唯一人の処女であった。
この結婚は親友アブー・バクルとの絆を一層強くし、この感覚の鋭い利口な若妻をして預言者の私生活全般と人となりを語らしめて後世に伝えることになった。
また若い世代に対してイスラームの教えを伝えて理解せしめる結果をも生み出したと言えよう

アーイシャはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

私は三日間、夢の中であなたを見せられた。
つまり絹の衣をまとったあなたを天使が私のところに連れて来て「これがあなたの妻である」と言った。
そこで私はあなたの顔からベールを剥がした。
何とそれはあなた自身であった。
そこで私は次のように言った。
もしこれがアッラーのおぼしめしであるのならばアッラーをしてそうなさしめたまえ。

同様のハディースが**ヒシャーム**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒は私に「私はあなたが私に満足しているときと、私に怒っているときとが分かります」と言った。
そこで私は「どこからそれが分かりますか？」と尋ねた。
すると彼は次のように答えた。
あなたが私に満足しているときは、あなたは「いいえ、ムハンマドの主に誓って」と言います。
また私に怒っているときは「いいえ、イブラヒームの主に誓って」と言います。
それで私（アーイシャ）は「その通りで。
アッラーの使徒よ。
実際私は（私があなたに怒っているときは）あなたの名前をさし控えます」と言った。

同様のハディースが**ヒシャーム・ビン・ウルワ**よって別の伝承者経路を経て「いいえ、イブラヒームの主に誓って」まで伝えている。
しかしここではそれ以下は伝えていない。
アーイシャは次のように伝えている

彼女がアッラーの使徒の前で娘達（人形）と遊んでいた。
そのときのことを彼女はこう伝えた。
そして私の友達が私のところに来たとき、彼女達はアッラーの使徒に恥ずかしがっていた。
そこでアッラーの使徒は彼女達を私の所へ気ままに行かせたのでした。

同様のハディースが**ヒシャーム・ビン・ウルワ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

しかしここでは伝承者の一人**ジャリール**のハディースに次のようにある
私は彼（預言者）の家で娘達と遊んでいた。
それ（娘達）は人形のことです。

アーイシャは次のように伝えている
人々はアーイシャの順番の日（注）に（預言者に）彼らの贈り物をした。
それによって彼らはアッラーの使徒が（より多く）喜ばれることを望んでいたのです。

（注）預言者の複数の妻のうちでアーイシャを彼が訪れることになっている日の意

預言者の妻**アーイシャ**は次のように伝えている
預言者の妻達はアッラーの使徒の娘であるファーティマをアッラーの使徒へ使いとして送った。
そして彼女は彼に面会の許可を求めた。
そのとき彼は私のマントの中で私と一緒に横になっていたが、彼は彼女に許可を与えた。
そこで彼女は次のように言った。
アッラーの使徒よ、あなたの妻達はアブー・クハーファの娘（アブー・バクルの娘、つまりアーイシャのこと）との間に公平さを求めて（注）私をあなたのもとに送りました。
そのとき私は黙っていました。
するとアッラーの使徒はファーティマにこう言った。
「娘よ、あなたは私が好きなものをあなたも好きではありませんか？」
すると彼女は「そうです」と答えた。
そこで彼は「私が愛するのはこの者です」と言った。
そこでファーティマはアッラーの使徒からそれを聞いたとき、立ち上がり預言者の妻達の所へ戻り、彼女が（預言者に）言ったことと彼が彼女に言ったこととを彼女達に伝えた。
すると彼女達はこう言った。
「私達はあなたが私達の役に立たなかったと思います。
アッラーの使徒のところにもう一度戻り、あなたの妻達はあなたにアブー・クハーファの娘（アーイシャ）との間に公平さを求めていると言いなさい。」

するとファーティマは「アッラーに誓って、私はそのことに関して彼に決して話しません」と言った。
さてアーイシャはさらにつづけてこう伝えている。
そこで預言者の妻達はやはり預言者の妻の一人のジャハシュの娘ザイナブを（代表として）送った。
彼女は彼女達の中でもアッラーの使徒のもとでいくらか私に匹敵する高い位置に評価されていた。
実際私は宗教においてザイナブよりも素晴しい女性を見たことがありません。
彼女はアッラーに対して誰よりも畏怖の念を抱き、誰よりも真実を語り、誰よりも親族に親切であり、よくサダカ（施し）を行ない、アッラーの名のもとに捧げつくし、アッラーに近づくために行う行為には誰れよりも厳しい自己犠牲を捧げる人でした。
ただ彼女には短気な性格があった。
しかしその場合でもすぐに彼女は平静を取り戻した。
こうして彼女（ザイナブ）はアッラーの使徒に面会の許可を求めた。
そのときアッラーの使徒はアーイシャと一緒に彼女のマントの中にいた。
それはちょうどファーティマが彼を訪ねてきたときと同じ状態であった。
それでアッラーの使徒は彼女に許可を与えた。
そして彼女はこう言った。
「アッラーの使徒よ、あなたの妻達はアブー・クハーファの娘との間に公平さを求めるために私をあなたのもとに送りました」
それから彼女は私に悪口を言い、私に対して高圧的になった。
その間私はアッラーの使徒の方を見守っていた。
私は彼がそのことで私をゆるすかどうか彼の目を見ていた。
そして私が言い返すことをアッラーの使徒が嫌っていないと分かるまでザイナブはそれを止めなかった。
そして私が彼女に悪口を言ったときには反対に彼女がおとなしくなるまで私はひるまなかった。
するとアッラーの使徒は微笑みながらこう言った。
「まさに彼女はアブー・バクルの娘だ」
同様のハディースがズフリーによって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは「そして私が彼女に悪口を言ったとき、私は彼女を封じ込めてやっつけることで手をゆるめなかった」とある。

（注）待遇改善というより愛情の平等を要求した意味である

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒は（病床にふしているとき）次のように尋ねました。

「今日は、私はどこにいるのですか？

明日は私はどこですか？」

それはアーイシャの順番の日は遠いといった口振りでした。

そして私の日が来たとき、アッラーは彼の魂を奪った。

そのとき彼は私の胸と首との間に頭を置いていた。

アーイシャは次のように伝えている

彼女はアッラーの使徒が死ぬ前に口にした言葉を聞いた。

そのとき彼は彼女の胸元にもたれかかっていた。

そして彼女は彼が言っている次の言葉に注意深く耳を傾けていた。

アッラーよ、私をお赦し下さい。

また、私に慈悲をおかけ下さい。

また私を仲間達（注）と一緒にさせて下さい。

（注）彼に先行した諸預言者の意

同様のハディースがヒシャームによって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アーイシャは次のように伝えている

私は「預言者は現世と来世の間の選択を与えられるまで決して死なない」と聞いていた。

また私は預言者がそれで死ぬことになった（最後の）病気になったとき、彼がかすれた声で次のように言っているところを聞いた。

「それでそうした者達はアッラーが恩恵を施された預言者達、誠実な者達、殉教者達や有徳者達の仲間となろう。

（さても）これらの者達は何と立派な仲間であることよ」（第 4 章 69 節）。

それで私はそのときに彼が選択を与えられていると考えた（注）。

（注）それで彼がこれらの敬虔な人々とともに天国で生きること（死）を選んだことか分かったの意

同様のハディースが**サアド**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

預言者の妻**アーイシャ**は次のように伝えている

アッラーの使徒は健康なときから、いつも次のように言っていた。

預言者は天国の自分の場所を見せられて選択が与えられるまで、決して魂を抜かれない。

そしてアーイシャはさらに次のように伝えた。

アッラーの使徒に死期が近づいたとき、彼の頭は私の太腿の上にあり、彼はしばらく気を失い、それから意識をとり戻し、彼は天井をみつめた。

そして彼はこう言った。

アッラーよ、（私を）最上の仲間（と一緒にして下さい）。

（これを聞いて）私は「つまり、彼はもはや私達を選ぼうとしていない」とつぶやいた。

さらにアーイシャは次のように伝えている。

私は（そのとき）彼が元気なときいつも私達に話していた次のような言葉を思い起した。

預言者は天国での自分の場所を見せられ、選択が与えられるまで決して魂を抜かれない。

さらにまたアーイシャは次のように言った。

アッラーの使徒が口にした最後の言葉「アッラーよ、どうか最上の仲間と一緒に」であった。

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒が旅に出たとき、彼は妻達の間で（同伴する妻を）くじ引きで決めてそのくじがアーイシャとハフサ（注）に当たり、それで二人とも彼と一緒に出かけた。

そして夜になったとき、アッラーの使徒はアーイシャと一緒に（彼女のラクダに乗って）旅をして彼女と話していた。

そこでハフサがアーイシャにこう言った。

「今夜は私のラクダにあなたが乗り、あなたのラクダに私が乗り、それであなたが（普段見ないものを）見て、私も（普段見ないものを）見ることになりませんか？」

すると彼女（アーイシャ）は「ええ、そうしましょう」と言った。

そしてアーイシャがハフサのラクダに乗り、ハフサがアーイシャのラクダに乗った。

そこにアッラーの使徒がハフサが乗っているアーイシャのラクダに近寄り挨拶をして、それから彼は彼女と一緒にラクダに乗って二人が到着するまで旅をつづけた。

そこでアーイシャは彼との同伴の機会を失い嫉妬していた。

そして二人が到着したとき、彼女は片足を草むらの中に入れてこう言った。

「主よ、私をばさそりが刺すか蛇に咬ませるかして下さいませ。

あなたの使徒の彼には私は何も言えませんので」

（注）第二代カリフとなったウマルの娘で夫の死後、預言者の妻の一人となった

アナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

他の妻達に比べてアーイシャの素晴しさは、他の料理に比べたサリードの素晴しさのようなものである。

同様のハディースが**アナス・ビン・マーリク**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アーイシャは次のように伝えている

預言者は彼女に「ジブリールがあなたに挨拶しています」と言った。

そこで私は「彼にこそ平安とアッラーの慈悲がありますように」と応えた。

同様のハディースが**アーイシャ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

同様のハディースが**ザカリヤー**によって伝えられている。

預言者の妻**アーイシャ**は次のように伝えている

預言者は「アーイシャよ、ここでジブリールがあなたに挨拶しています」と言った。

そこで私は「彼の上にこそ平安とアッラーの慈悲がありますように」と応えた。

そして彼女は次のように付け加えた。

「そのとき彼は私には見えないものを見ていた」

ウンム・ザルウのハディース

アーイシャは次のように伝えている

11 人の女達が集まって座り「彼女達の夫のことについて何も隠し立てしない」と約束をした。

そして最初の女性はこう言った。

「私の夫は険しい山頂の痩せたラクダの肉（注 1）のようなものです（注 2）」

つまり登れるほど平坦でもなくまた（山頂から）運び出すほど肥ってはいない。

二番目の女性はこう言った。

「私の夫（は非常に悪いので）彼のことは広めたくない。

また私は彼のことについては欠点が多すぎて完全に伝えることができないことを恐れています（注 3）。

そしてもし私が彼について語ることになるならば目に見える彼の欠点も隠れた欠点も述べてしまうでしょうから。」

三番目の女性が言った。

「私の夫はのっぽであるだけ（頭はからっぽ）です。

もし私が彼について口を開けば私は離婚されるでしょう。

またもし私が黙っていれば私はちゅうぶらりんな状態にされるでしょう（注 4）。」

四番目の女性が語った。

「私の夫はティハーマ（注 5）の夜のようである。

暑くもなく寒くもない。

また恐怖もなければ悲嘆もない。」

五番目の女性が言った。

「私の夫は家にいれば豹のようであり（注 6）、外へ出ればライオンのようである。

また決して家で任せたことについてとやかく言わない。」

六番目の女性が言った。

「私の夫に関して言えば、彼は食べれば一かけらも残すことなく、飲めば一滴も残さない。

横になれば体を包み、私の悲しみを知るために私に手を忍ばせることもない（注 7）。」

七番目の女性が言った。

「私の夫は精神的に重く輝きがありません。

虚弱ですぺての病気を持ち（粗野な人ですので）あなたにだって頭を傷付けるか、体に暴行するかまたは両方を行なうほどです。」

八番目の女性が言った。

「私の夫について言えば、その香りはザルナブ（サフラン）の香りのように甘く、また兎の毛のように柔かい（注 8）。」

九番目の女性が言った。

「私の夫は非常に高い建物の持ち主であり背も高く、門前にはいっても積った灰があり（注 9）、しかも彼の家は集会所の近くにあります（注 10）。」
十番目の女性は言った。
「私の夫は物持ち（マーリク）です。
マーリクとは何と素晴しいことでしょうか。
マーリクは全てにおいて良いものです。
彼はラクダを沢山もっていて、その多くは囲いの中に座っていて、放牧されているのは少ない（注 11）。
それらが、ミズハル（注 12）の昔を聞くと屠られる時がきたと確信している。」
11 番目の女性が言った。
「私の夫はアブー・ザルウです。
アブー・ザルウとは何と素晴らしいことでしょう！
彼は私の両耳に沢山の耳飾りをぶら下げ（私を気儘に食べさせて）私の筋肉を脂肪ばかりにしてしまった。
また彼は私を喜ばせ、それで私の心は喜んだ。
彼は私を山のかたわらの（貧しい）羊飼いの一家で見付けた。
そして彼は私を馬やラクダの所有者の一員とし、農地と穀物の所有者とした。
彼は私の言葉を何を言っても受け入れ、そして私は眠りゆっくりと朝、目を覚ましそして心ゆくまで飲み満足しています。」
アブー・ザルウの母、アブー・ザルウの母はいかに？
彼女の包みは大きな包みであり、彼女の家は広い。
アブー・ザルウの息子、アブー・ザルウの息子はいかに？
彼のベッドは柔かく樹皮から引き抜いたナツメヤシの緑の枝のようである。
または鞘から引き抜かれた剣のようである。
そして子羊の手一本が彼を満腹にさせる（注 13）。
アブー・ザルウの娘、アブー・ザルウの娘はいかに？
彼女の父への従順さ、彼女の母への従順さ、充分に肥えていて（注 14）。
彼女の夫の他の妻達の嫉妬のもとである。
アブー・ザルウの女奴隷、アブー・ザルウの女奴隷はいかに？
彼女は私達のことを他へもらさない。
また彼女は（正直で）私達の食料を腐らせたり、なくしたり、持ち去ったりしない。
また彼女は私達の家をがらくたで一杯にすることはない。
さて彼女はつづけて次のように語った。
ある日、アブー・ザルウが出かけた。
そのとき（バターを作るために）ミルクの入った皮袋が振られていた。
そして彼は一人の女性に出会ったが彼女には豹のような二人の子供がいた。

その二人は彼女の胸元でザクロの実（乳房）をもて遊んでいた。
そして彼は私（ウンム・ザルウ）を離婚して彼女と結婚した。
さて私（ウンム・ザルウ）はその後である勇敢な男と結婚した。
彼は名騎手であり、名射手であったが、彼は私に沢山の贈り物（家畜や財宝）を持ってきた。
彼はすべての種類の動物のつがいを私に与えた。
そしてこう言った。
「ウンム・ザルウよ、食べなさい（あなたの必要なだけ使いなさい）。
そしてあなたの家族にも送りなさい。
だがもし彼が私に贈ったものをすべて集めたとしてもアブー・ザルウの最も小さな容器（つまり贈り物）にも達しない。」
アーイシャはアッラーの使徒が彼女に次のように言ったとして伝えている。
あなたにとって私はウンム・ザルウにとってのアブー・ザルウのようなものである。
同様のハディースがヒシャーム・ビン・ウルワによって伝えられているが、表現に多少の違いが見られる。

（注 1）アラブでは山頂に置かれた肉とは高慢さ、不遜、頑固さを暗示しているという。
つまりここでは人付合いの悪さ、性格の悪さなどを示しているものと考えられる

（注 2）つまり彼女の夫には良い所がないということである。
羊の肉でなくラクダの肉であり、太った肉でなく痩せた下等な肉であり、それを手に入れようにも山頂にあってはままならぬといった具合

（注 3）この部分は「もし私が彼の欠点をあげれば私は彼をあきらめねばならない（離婚される）でしょう」とも解釈できる

（注 4）つまり離婚はされないが妻としての扱いをされないの意

（注 5）ジェッダなど紅海に沿った海岸平野地帯で広義にはマッカ、マディーナなども含めるようである

（注 6）よく寝る人のたとえで夫をほめている

（注 7）「悲しみ」を彼女の身体上の欠陥とすればこの男は思いやりのある男となるが、それを彼女の「愛」と置きかえると、この男はあらゆる点で動物的だが彼の妻の幸せなどあまり気にしない男という風にもとれる

（注 8）身体的にも精神的にもソフトだの意

（注 9）あたたかく気前の良い入で、いつも台所の火を絶やさず、人に食を施していることを暗示している

（注 10）彼はこのあたりの長老格の人物で客のもてなしにも忙しいことを暗示している

（注 11）客が来るとラクダを屠ってもてなすためそのためのラクダは放牧の必要がなくいつも囲いの中に止めておくの意

（注 12）リュートの一種で来客があるとラクダを屠りこの楽器と飲み物で宴会がはじまる。この楽器の音に聞き慣れたラクダはそれによって死が近いことを知るの意。
当時のアラブではダンスと音楽なしの宴会は考えられなかった

（注 13）小食は元来アラブの美徳であった。
ここでは息子はデリケートでスマートで飲食もほどほどにとるの意
（注 14）アラブでは肥満体の女性が美人で今も昔も変らないようだ

預言者の娘ファーティマの徳

ミスワル・ビン・マフラマはこう伝えている。

彼はアッラーの使徒がミンバル（説教台）の上で次のように言っているところを聞いた。
ヒシャーム・ビン・ムギーラ家の者達が彼らの娘（注）とアリー・ビン・アブーターリブを結婚させる許しを私に求めてきた。
しかし私は絶対に彼らに許可を与えなかった。
それからまた私は彼らに許可を与えなかった。
さらにまた私は許可をしなかった。
ただしイブン・アブー・ターリブが私の娘を離婚して彼らの娘と結婚するのであれば別である。
なぜならば私の娘は私の一部であり、彼女を疑うことは私を疑うことであり、彼女を傷付けることは私を傷付けることである。

（注）アリーが結婚を申し込んだというアブー・ジャハルの娘のことである。
アブー・ジャハルはマッカの長老で預言者の敵であったがバドルの戦いで戦死した

ミスワル・ビン・マフラマはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

ファーティマは私の一部である。
彼女を傷付けることは私を傷付けることである。

アリー・ビン・フサインはこう伝えている

彼らがフサイン・ビン・アリーの殉教の後にヤズィード・ビン・ムアーウィヤのもとから（逃れて）マディーナにやって来たとき、ミスワル・ビン・マクラマが彼（アリー・ビン・フサイン）に会い、そして「何か私に命じるようなことがありますか？」と尋ねた。
そこで私（アリー）は彼に「いいえ」と言った。
また彼は彼（アリー）にこう言った。
「あなたは私にアッラーの使徒の剣を渡してくださいませんか？
私は人々がそれをあなたから奪い取るのではないかと心配です。
アッラーに誓って、もしあなたがそれを私に渡して下さるならば、私が生きている限りは誰れも決してそれを奪うことはできません。」
確かにアリー・ビン・アブー・ターリブはファーティマがいるにもかかわらずアブー・ジャハルの娘と婚約をした。
そして私はアッラーの使徒がその日、この彼のミンバル（説教台）の上で人々に次のように演説をしているところを聞きましたが、そのとき私は青年でした。
ファーティマは私の一部である。

彼女が宗教に関して苦境に立たされることが心配である（注 1）。
それから彼はアブド・シャムス家出身の義理の息子（注 2）のことを述べた。
彼は義理の息子としての彼の態度をほめてこう言った。
彼が私に語れば必ず真実を語り、彼が私に約束すれば必ず実行する。
私は決して合法的なことを非合法とはしない。
また非合法なことを合法とはしない（注 3）。
しかしアッラーに誓って、アッラーの使徒の娘とアッラーの敵（アブー・ジャハル）の娘とが決して一つ場所で一緒にはならない。

（注 1）その原因は人間世界の嫉妬心によって引き起こされるケースをここでは想定している

（注 2）預言者の娘のザイナブの夫、アブー・アース・ビン・ラビーウのこと。

（注 3）つまりアッラーが合法としたものを非合法としたり、非合法としたものを合法とはしない意

ミスワル・ビン・マフラマはこう伝えている

アリー・ビン・アブー・ターリブはアブー・ジャハルの娘と婚約した。
そのとき彼のもとにはアッラーの使徒の娘ファーティマが（妻として）いた。
そしてファーティマがそのことを聞いたとき彼女は預言者のところに来て彼にこう言った。
「人々はあなたはあなたの娘達のために怒らないと言っています。
今アリーがアブー・ジャフルの娘と結婚しようとしています。」
さらにミスワルはつづいてこう伝えている。
そこで預言者は立ち上ったが、そのとき私は彼がタシャッハド（証言儀礼）を行い、それから次のように言ったところを聞いた。
さて確かに私は（私の娘を）アブー・アース・ビン・ラビーウと結婚させた。
そして彼は私に語れば必ず真実を語ります。
またムハンマドの娘ファーティマは私の一部です。
そして私は彼らが彼女を苦境に立たせることを嫌っています。
アッラーに誓って、アッラーの使徒の娘とアッラーの敵の娘が決して一人の男のもとで一緒にはならない。
こうしてアリーは婚約を破棄しました。
同様のハディースがズフリーによって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒は彼の娘ファーティマを呼び、彼女に何事かを秘かにささやいた。
すると彼女は泣いた。
それからまた彼は彼女に秘かに何事かをささやいた。
すると彼女は笑った。
そこで私は彼女にこう尋ねた。
「アッラーの使徒があなたに秘かにささやいて、それであなたが泣いたことは何ですか？
またあなたに秘かにささやいて、それであなたが笑ったことは何ですか？」
そこで彼女は次のように答えた。
「彼は私に秘かに彼の死のことを伝えたので私は泣きました。
それからまた私が彼の家族の中で彼の後を最初に追う者（注）であると伝えたので私は笑いました。」

（注）つまり天国へ行くの意味で、彼女が夫や子供達よりも早く死んで預言者と天国で最初に会うだろうということを暗示している

アーイシャは次のように伝えている

預言者の妻達が（彼の最後の病気のときに）彼のもとに（集って）いたが彼女達の誰もその場を離れようとしなかった。
そこへファーティマが歩いてやって来た。
そして彼女の歩く姿はアッラーの使徒が歩く姿と全く変わらなかった。
そして彼が彼女を見たとき彼は彼女を歓迎して「良く来た、我が娘よ」と言った。
それから彼は彼女を彼の右側もしくは左側に座らせた。
そして彼は彼女に秘かに何事かささやいた。
すると彼女は激しく泣いた。
そこで彼は彼女の悲しみを見たとき、また再び彼女に秘かに何事かをささやいた。
すると彼女は笑った。
そこで私は彼女に次のように言った。
「アッラーの使徒は彼の妻達のいる中で特にあなただけにささやきました。
そして（それを聞いて）あなたは泣きました。」
それからアッラーの使徒が（病気から）立ち直ったとき、私は彼女にアッラーの使徒が何を言ったか尋ねました。
すると彼女は「私はアッラーの使徒のことで、彼の秘密を公表しません」と言った。
さてアッラーの使徒が亡くなられたとき私は彼女に次のように言った。
「私はあなたに次のことを尋ねる権利があると考えます。
一体アッラーの使徒はあなたに何と言ったのですか？

私に教えて欲しい。」
すると彼女「はい、今なら」と言い次のように伝えた。
最初に彼が私に秘かにささやいたことについては彼は私にこう伝えたのです。
ジブリールは毎年一回か二回彼とクルアーンを誦んでいました。
しかし今年はもう二回誦みました。
そこで私（預言者）は死期が近いと思いました。
アッラーを恐れ、耐えなさい。
私こそあなたにとって最も素晴しい先人となるでしょう。
それであなたが見たように私は泣きました。
それから彼が私の悲しみを見たとき、彼は再び私に秘かに次のことをささやきました。
ファーティマよ、あなたは信者の妻達の長もしくはこのウンマ（信仰共同体）の女性達の長になることを喜ばないのですか？
それで私はあなたが見たように笑いました。

アーイシャは次のように伝えている
預言者の妻達が（彼の最後の病気のとき彼のもとに）集まっていたが、彼女達の誰もその場を離れようとはしなかった。
そこへファーティマが歩いてやって来た。
彼女の歩く姿はアッラーの使徒の歩く姿のようであった。
（彼が彼女を見たとき彼は彼女を歓迎して）
彼は「よく来た、我が娘よ」と言った。
それから彼は彼女を彼の右側もしくは左側に座らせた。
そして彼は彼女に秘かにささやいた。
すると彼女は泣いた。
（彼は彼女の悲しみを見たとき再び）
彼は彼女に何事かを秘かにささやいた。
すると彼女は笑った。
そこで私（アーイシャ）は彼女に「何があなたを泣かせるのですか？」と言った。
すると彼女は「私はアッラーの使徒の秘密を公表しません」と言った。
そこで私は「私は今日のように悲しみに近い喜びを見たことがありません」と言った。
そして私は彼女が泣いたときこう言った。
「アッラーの使徒は私達ではなく特にあなたに何かをささやきそれであなたは泣きましたね？」
そして私は彼が言ったことについて（彼女に））尋ねました。
だが彼女は「私はアッラーの使徒の秘密を公表しません」と答えた。
さてアッラーの使徒が他界したとき私は再び彼女に尋ねた。

すると彼女は彼は（そのとき）次のように言ったと答えた。
天使ジブリールは毎年一回彼（私）とクルアーンを誦んでいました。
しかし今年はもう二回誦みました。
そこで私は私の死期が来たと考えました。
あなたは私の家族の中で（天国で）私に最初に出会う者となるでしょう。
そして私はあなたの良き先人となりましょう。
このため私は泣きました。
それから彼は再び秘かに次のことをささやきました。
あなたは信者の妻達の長もしくはこのウンマの女性達の長となることを喜ばないのですか？
それで私は笑いました。

信者の母ウンム・サラマ（注）の美徳

（注）夫とともにエチオピアに避難、夫の戦死後に乳飲み児をかかえて預言者の妻となる

サルマーンは次のように伝えている

出来る限り市場に最初に入りそして最後にそこから出る者にならないように。
そこは悪魔の戦場である。
そこに悪魔は彼の旗を揚げている。
また彼は次のことを知らされたとしてこう伝えている。
天使ジブリールがアッラーの預言者のもとに来た。
そのとき彼と一緒にウンム・サラマがいた。
そして彼（ジブリール）は彼と話しはじめた。
それから彼は立ち上がった。
そこでアッラーの預言者はウンム・サラマに「この者は誰か（分かりますか）？」と言った。
それで彼女は「この者はダヒヤ（注）です」と言った。
さてサルマーンはさらにウンム・サルマが次のように言ったとして伝えている。
アッラーに誓って、私はアッラーの使徒が私達のこと（つまりここではジブリールのこと）について知らせる演説をし、それを聞くまでは私は彼のことをダヒヤとしか考えませんでした。
またサルマーンは伝承者の一人アブー・ウスマーンに「誰からあなたはこの話しを聞きましたか？」と言った。
すると彼は「ウサーマ・ビン・ザイドからです」と答えた。

（注）カルビ一族出身の富裕な商人で美男子として知られていた。
シリアに来たビザンチン皇帝への預言の使節をつとめた。
ヤルムークの戦いでは小隊を率いて活躍、670 年に死去

信者の母ザイナブの美徳

信者の母**アーイシャ**はアッラーの使徒が次のように言ったとして伝えている

あなた達の中で最も手が長い者が最も早く私に（天国で）会う者となろう。

また彼女は「そこで彼女達は誰が一番手が長いか計っていた」と言った。

さらに（後になって）彼女は次のように述べた。

さて私達の中で一番手が長い者はザイナブであった。

なぜなら彼女は彼女の手で仕事をしてその中からサダカ（施し）を行っていたからである（注）。

（注）手が実際に長い意味と最初は考えたがアラブではよく施しをする慈悲深い人をその者の手が長いというがその意味であることが後で分かったことになる。

現に彼女達のうちで最初に他界した者はザイナブであった。

なお実際に最も長い手をしていた者はサウダであった

ウンム・アイマン（注）の美徳

（注）預言者の乳母でいわば彼の第二の母（育ての親）であった

アナスは次のように伝えている

アッラーの使徒はウンム・アイマンの所へ行った。
それで私も彼と一緒について行った。
すると彼女は彼に飲み物の入った容器を差し出した。
さてアナスはつづいて次のように語った。
偶然彼が断食中であったのか、それともそれを欲しくなかったのか（彼がそれを断った理由を）私は知らない。
いずれにせよそれで彼女は彼に向って声を張り上げ文句を言っていた。

アナスは次のように伝えている

アッラーの使徒の死後アブー・バクルがウマルに次のように伝えた。
アッラーの使徒がウンム・アイマンを訪問したように私達も彼女を訪問しよう。
そして私達が彼女のところに来たとき、彼女は泣いた。
そこで彼ら二人は彼女にこう聞いた。
何があなたを泣かせるのですか？
アッラーのみもとに待っている運命の方が（現世の生活よりも）アッラーの使徒にとってはよいはずです。
すると彼女は次のように語った。
アッラーのみもとに待っている運命の方が（現世の生活よりも）アッラーの使徒にとってよいということを知らなくて私は泣いているわけではありません。
しかし私は啓示が途絶えたことで泣いているのです。
そしてこのことで彼女は彼ら二人を泣かせ、彼ら二人は彼女と一緒に泣き出した。

アナス・ビン・マーリクの母ウンム・スライムとビラール（注）の美徳

（注）エチオピア系の元奴隷で早くからイスラームに入信し迫害を受ける。
アブー・バクルが彼を買って解放、イスラーム最初のムアッズィン（礼拝呼び掛け師）
となる

アナスは次のように伝えている

預言者は彼の妻達の家とウンム・スライムの家以外には女性の家に入ることはなかった。
そして確かに彼は彼女の家をよく訪れていた。
そのことに関して預言者が尋ねられると彼は次のように言った。
私は彼女に非常な哀れみを感じています。
彼女の兄弟が私と一緒にいるときに殺されたからです。

アナスは預言者の言葉としてこう伝えている

私は天国に入り、そこで足音を聞いた。
そこで私は「誰ですか？」と言った。
すると彼らはこう言った。
「ミルハーンの娘のグマイサーウ（注）です。
つまりアナス・ビン・マーリクの母です。」

（注）「かすみ目」の意だがこれは彼女の悼名

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

私は天国を見せられた。
そこでアブー・タルハの妻（注）を見た。
それから私は私の前できぬずれの音を聞いたが、何とそれはビラールであった。

（注）ウンム・スライムのこと

アブー・タルハ・アンサーリー（注）の美徳

（注）彼の本名はザイド・ビン・サハルでマディーナの名門ナッジャール家の一員である。
勇敢なイスラームの戦士として全ての預言者の遠征に参加、652 年頃没した

アナスは次のように伝えている

ウンム・スライムから生れたアブー・タルハの息子の一人が死亡した。
そこで彼女は家族の者に次のように言った。
「私がアブー・タルハに話すまでは（死んだ）息子のことについては彼に話してはならない。」
そして彼が（家に）戻って来た。
そこで彼女は彼に夕食をもって来た。
それで彼は食べて飲んだ。
それから彼女はこれまでにしたことがないほどに彼のために化粧をした。
そこで彼は彼女と性行為を持った。
そして彼女は彼が満腹になり、また性的に満足したところを見たときに次のように言った。
「アブー・タルハよ、たとえばある人々が彼らのものを他の家族に貸したとします。
それで彼らがそれを返すように求めたとして彼らにはれを返すことを拒む権利がありますか？
いかがですか？」
そこで彼は「いいえ」と言った。
それで彼女は「それがあなたの息子だったら（あなたの息子は没しましたの意）？ 」と言った。
すると彼は怒って次のように言った。
「あなたは私があなたと交わるまで私に黙っていて、それから息子のことを知らせました。」
そして彼はアッラーの使徒のところに出かけて行って事の次第を伝えました。
するとアッラーの使徒はこう言った。
「あなた達二人が過ごした夜にアッラーの祝福がありますように」
さてアナスはさらにつづけて次のように伝えた。
それで彼女は妊娠した。
アッラーの使徒は旅の途中であり、彼女は彼と一緒でした。
アッラーの使徒はいつも旅行からマディーナへ帰ってきたときは夜中には（彼の家に）入らなかった。
さて人々がマディーナに近づいたとき、陣痛が彼女を襲った。

そこでアブー・タルハは彼女のためにそこに留った。
しかしアッラーの使徒は進んでいった。
そのときアブー・タルハは次のように言った。
「主よ、私は出て行くときはあなたの使徒と一緒に出かけまた入るときにも一緒に入ることを切望していることをあなたはよくご存知です。
しかしご覧のように私はここに止まらざるを得ません。」
そこでウンム・スライムは「アブー・タルハよ、私は先程感じたほどには痛くありません。
先へ進みましょう。」と言った。
こうして私達は出発した。
そして（マディーナに）二人が到着したとき、陣痛が彼女を襲い彼女は一人の男の子を生んだ。
さてそれから私の母は私にこう言った。
「アナスよ、明朝早くあなたがこの子を連れてアッラーの使徒のもとへ行くまでは誰れもこの子に乳を与えません。」
さて朝になったとき私は彼を抱えてアッラーの使徒のもとへ行った。
そのとき彼は偶然焼きごて（注 1）を手にしていたが、彼は私を見ると「たぶんウンム・スライムが子供を生んだのかな」と言った。
そこで私は「はい」と言うと彼は手にしていた焼ごてを置いた。
さてアナスはさらにつづけて次のように語った。
私は子供を連れてきて彼（預言者）の膝の上に置いた。
そしてアッラーの使徒はマディーナのなつめヤシ製のアジュワ（注 2）を一つ求め、それが口の中でよく溶けるまでかんでそれを子供の口の中に入れた。
すると子供はそれを舌で味わいはじめた。
そこでアッラーの使徒はこう言った。
「いかにアンサール（マディーナの住人）がなつめヤシを好むか見なさい。」
そして預言者は子供の顔をさすり、彼をアブドッラーと名付けた。

（注 1）当時から家畜の目印として焼きごてを当てていたことが分かる

（注 2）なつめヤシの実のわりもの

同様のハディースが**アナス・ビン・マーリク**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

ビラールの美徳

アブー・フライラは次のように伝えている。

アッラーの使徒は早朝の礼拝のとき、ビラールに次のように言った。

ビラールよ、イスラームで良き報酬をとり得るあなたの行った行為で最も望ましい行為を私に語ってみなさい。

なぜなら私は夜間に（夢の中で）天国にいる私の前であなたのサンダルの音を聞いたからです。

するとビラールはそれに答えてこう言った。

私はイスラームで特に価値のあるような行為をしませんでした。

ただ私は夜となく昼となく完全なウドゥー（清浄行為）なしにはアッラーが定めた礼拝をしたことはありませんでした。

アブドッラー・ビン・マスウード（注）と彼の母の美徳（注）七番目にイスラームに入信した人と言われている教友でクルアーンとハディース解説の権威として知られている。
652 年没

アブドッラーは次のように伝えている
次のクルアーンが啓示されたとき、私は彼らのうちの一人ですと預言者に言われた。
「信仰して善行にいそしむ者ならば食べ物について何の罪もない。彼らが主を恐れ、信仰して……」（第 5 章 93 節）。

アブー・ムーサーは次のように伝えている
私と私の兄弟がイエメンから到着して、私達がしばらくそこに住んでいたとき、私達はイブン・マスウードと彼の母をアッラーの使徒の家族の一員としか考えませんでした。
というのは彼らは常に彼のところに出入りしており、また常に彼と一緒にいたからです。
またアブー・ムーサーは次のように伝えている。
私と私の兄弟は確かにイエメンからやって来ました。
以下は前記ハディースと同じである。

アブー・ムーサーは次のように伝えている
私はアッラーの使徒のところへやって来た。
そして私はアブドッラーをお家の一員（預言者の家族の一員）と考えていました。

アブー・イスハークはアブー・アフワスからの伝聞として次のように伝えている
イブン・マスウードが死んだとき、私はアブー・ムーサーとアブー・マスウードと一緒にいた。
そして二人のうちの一人が他方に「彼なき後に彼に匹敵する人物を知っていますか？」と言った。
すると他方はこう言った。
「たとえ、あなたがそのように言ったとしても（彼に匹敵する者はいない） 」
私達が留置されているときでも彼は（預言者と共にいることを）許されていました。
私達が欠席しているときでも彼は（預言者と一緒に）いたのですから。

アブー・アフワスは次のように伝えている
私達はアブドッラーの友人達の幾人かと一緒にアブー・ムーサーの家にいて彼らは聖典を誦んでいました。
そしてアブドッラーが立ち上がり、そのときアブー・マスウードが次のように言った。
私はアッラーの使徒が彼の死後にアッラーが下さったもの（啓示）について、いま立ってい

る者よりも知識がある者を誰か他に残したかどうか知りません。
そこでアブー・ムーサーは次のように言った。
もしあなたがそのように言ったとしても(確かに他には誰もいない)。
私達が欠席しているときも彼は(預言者と)同席し、また私達が留置されているときでも彼は(預言者と同席することを)許されていたのだから。

ザイド・ビン・ワハブは次のように伝えている
私はフザイファとアブー・ムーサーと一緒に座っていた。
以下は前記ハディースと同様である。

アブドッラーは次のように伝えている
彼(アブドッラー)は(教友達に向ってクルアーンのコピーを隠すよう言ってから)次のように(クルアーンの一節を)誦んだ。
「そして詐欺を働く者は復活の日にその着服した重荷を背負わされるであろう」(第 3 章 161 節)。
それからつづけて彼は次のように言った。
あなた達は誰の誦み方でもって私に誦むよう命じますか?
実際私はアッラーの使徒の前で 70 以上の章を誦みました。
またアッラーの使徒の教友達は私がアッラーの書について彼らの中で一番良く知っていると認めていました。
もし私よりもよく知っている者がいることが分かれば私は彼の所に(学ぶために)旅立ちます。
ところでシャキークは次のように伝えている。
私はムハンマドの教友達の車座の中に座っていた。
しかし私は誰一人として彼(アブドッラー・ビン・マスワード)にそのことで言い返す声を聞かなかったし、彼を非難する声も聞かなかった。

アブドッラーは次のように伝えている
彼以外に神はいないお方に誓って、アッラーの書の章に関してどこでそれが下されたかを私が知らない箇所はどこにもない。
また節の中でどんな状況のもとにそれが下されたかを私が知らない箇所はどこにもない。
もし私かアッラーの書について私よりもよく知っている者が分かれば私はラクダに乗って彼のところへ行くでしょう。

マスルークは次のように伝えている

私達はアブドッラー・ビン・アムルのところへよく行って彼と話しをしていた。

ついでまた、イブン・ヌマイルは次のように伝えている。

彼のところで私達はある日アブドッラー・ビン・マスウードについて語った。

そこで彼は次のように言った。

あなた達は私がアッラーの使徒から彼について聞いて以来ずっと好きになった男について語りました。

そのとき私はアッラーの使徒が次のように言っているところを聞いたのです。

「次の四人からクルアーンを学びなさい。

それはイブン・ウンム・アブド（アブドッラー・マスウードのこと）と預言者はまず彼から始め、ついでムアーズ・ビン・ジャバル、ついでウバイユ・ビン・カアブ、ついでアブー・フザイファの解放奴隷のサーリムの四人である」

私達はアブドッラー・ビン・アムルのところにいて、（アブドッラー・ビン・アムル）アブドッラー・ビン・マスウードのハディースについて語っていた。

そこで彼はこう言った。

その男は私がアッラーの使徒から彼について聞いて以来ずっと好きになった者です。

私はアッラーの使徒が次のように言っているところを聞いた。

「次の四人からクルアーンを学んで誦みなさい。

それはイブン・ウンム・アブド（アブドッラー・ビン・マスウードのこと）と預言者はまず彼から言いはじめ、ついでウバイユ・ビン・カアブそしてフザイファの解放奴隷のサーリムついでムアーズ・ビン・ジャバルの四人である」

同様のハディースがアアマシュによって別の伝承者経路を経て伝えられている。
ただしアブー・バクルの伝承ではムアーズをウバイユの前に述べ、アブー・クライブの伝承ではウバイユがムアーズの前にある。

同様のハディースがシュウバを経てアアマシュによって伝えられている。
しかしその四人の順番には違いが見られる。

マスルークは次のように伝えている

彼らはアブドッラー・ビン・アムルのところでイブン・マスウードについて語った。

そこで彼は次のように言った。

その男は私がアッラーの使徒が次のように言っているところを聞いて以来ずっと好きになった人です。

「次の四人にクルアーンを誦んでくれるように頼みなさい。

それはイブン・マスウード、そしてアブー・フザイファの解放奴隷のサーリム、そしてウバイユ・ビン・カアブそしてムアーズ・ビン・ジャバルです」
同様なハディースが別伝承者経路で伝わっている。
その中の途中伝承者シュワバは「彼は二人の名前を伝えたがどの名前を最初に伝えたか分からない」と述べている。

ウバイユ・ビン・カアブ（注）とアンサールの仲間達の美徳

（注）マディーナのナッジャール家の一員である。
イスラームに改宗する前はユダヤ教徒で、聖書に精通していて預言者の書記の一人となった。
エルサレムが降服した際には降服文書の草案を書いた。
またウスマーン治下のクルアーンの編集に際してはその編集委員の一人となった

アナスは次のように伝えている

アッラーの使徒の時代に四人の者がクルアーンを結集した。
彼ら全員はアンサールの者達でした。
それはムアーズ・ビン・ジャバルとウバイユ・ビン・カアブとザイド・ビン・サービト及びアブー・ザイドである。
さてカターダは次のように伝えている。
私はアナスに「アブー・ザイドとは誰ですか？」と尋ねた。
すると彼は「私の（父方の）叔父の一人です」と答えた。

ハンマームは次のように伝えている

私はアナス・ビン・マーリクに「アッラーの使徒の時代に誰がクルアーンを集めたのですか？」と尋ねた。
すると彼はこう答えた。
「四人います、彼らすべてはアンサールの人達です。
それはウバイユ・ビン・カアブとムアーズ・ビン・ジャバルとザイド・ビン・サービトとアブー・ザイドという別称をもつアンサールの男です。

アナス・ビン・マーリクはこう伝えている

アッラーの使徒はウバイユに向って「アッラーはあなたにクルアーンを読誦して聞かすようにと私に命じました」と言った。
するとウバイユは「アッラーが私を指名にされたのですか？」と言った。
すると彼は「アッラーがあなたを指名されたのです。」と言った。
するとウバイユは俄かに泣きはじめました。

アナス・ビン・マーリクはこう伝えている

アッラーの使徒はウバイユ・ビン・カアブに向って「アッラーはあなたに次のクルアーンの一節を読誦して聞かすようにと私に命じました」と言った。
「（真理に）背いた啓典の民も……（道から）離れて行きはしなかった」（第 98 章 1 節）。

すると彼((ウバイユ)は「アッラーは私を指名されたのですか？」と言った。
そこで預言者が「そうです」と言うと、彼（ウバイユ）は涙を流した。
カターダはアッラーの使徒がウバイユに前節と同様のハディースを語ったとアナスから聞いたと伝えた。

サアド・ビン・ムアーズ（注）の美徳

（注）マディーナのアウス族のアシュハル支族のリーダーで、住民のイスラーム化に影響力を発揮した。
ハンダクの戦いで重傷を負ってそれがもとで死ぬ

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒がサアド・ビン・ムアーズの葬儀を前にして次のように語ったとして伝えている

慈悲深きお方（アッラー）の玉座がそのために（ムアーズの死のショックで）に揺れ動いた。

ジャービルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

慈悲深きお方の玉座がサアド・ビン・ムアーズの死に対して揺れ動いた（注）。

（注）玉座が揺れ動いた原因としてサアドの魂が昇天することをアッラーが喜ばれて動いたという解釈をする説もある

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えた

彼（サアド）の遺体が人々の前に置かれていて、アッラーの預言者がこう言った。
慈悲深きお方の玉座がそのために揺れ動いた。

バラーウが次のように伝えている

アッラーの使徒に絹の服が贈られた。
それで彼の教友達はそれに触りその柔かさに驚いていた。
そこで彼はこう言った。
あなた方はこの柔かさで驚くのですか？
天国にいるサアド・ビン・ムアーズのハンカチはこれよりも数段すぐれていてもっともっと柔かいですよ。

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている

アッラーの使徒の所に絹の服が届けられた。
それから前記のハディースを語ったがこのハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。

シュウバが別の二つの伝承者経路を経て前記のハディースを伝えている。

アナス・ビン・マーリクが次のように伝えている

アッラーの使徒に絹のジュッバ（外套）が贈られた。

そのとき彼は（男性には）絹の使用を禁じていたので、人々は大層驚きました。

そこで彼は次のように言いました。

ムハンマドの魂を手中にするお方に誓って、天国にいるサアド・ビン・ムアーズのハンカチは本当にこれよりもずっと優れています。

アナスは次のように伝えている

ドゥーマトル・ジャンダルのウカイデル（王様）がアッラーの使徒に服を贈りました。

そして前記のハディースを伝えたがここでは「そのとき、彼は絹の使用を禁じていた」の一文については伝えていない。

アブー・ドゥジャーナ（シマーク・ビン・ハラシャ）（注）の美徳

（注）マディーナ出身のイスラームの戦士として名高い

アナスは次のように伝えている

アッラーの使徒はウフドの戦いで一本の剣を手に入れ、そこでこう言いました。

「私からこの剣を手に入れる者は誰ですか？」

すると人々はこぞって手を差し出し「私が、私が」と言い立てました。

それで預言者はこう言った。

「それではその権利を実行するためにそれを手に入れる者は誰ですか（注）？」

すると人々は後ずさりをしました。

しかしシマーク・ビン・ハラシャ（アブー・ドゥジャーナ）は「私が手にします」と言った。

そして彼はそれを手に入れると、多神教徒達の頭を次々と切り離して行きました。

（注）この剣を手にする者にふさわしい働きをする者は誰かの意で、つまりそれによってムスリムを殺さないことは勿論だが、多神教徒は一人も逃さないということだろう。

ウフドの戦いはムスリム側の敗け戦だったので、この剣の取得は決死の覚悟が必要だったと思われる

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・ハラーム（ジャービルの父（注））の美徳

（注）マディーナ出身の初期ムスリムの一人。
第二アカバの誓いの 70 人の内の一人で、マディーナのムスリムを代表する 12 人衆の一人だった

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

ウフドの戦いで私の父は（戦死して）その遺体は着物に覆われて運ばれて来た。
彼は手足をばらばらにされていました。
それで私はその着物の覆いを除けようとしましたが、やはり部族の者達が止めました。
そのときアッラーの使徒がそれを取り除けたのだったか、あるいは彼がそうすることを命じたために着物の覆いが除けられました。
すると彼はそのとき女性の泣き声か叫び声を聞いたので「それは誰ですか？」と彼は言いました。
そこで人々は「アムルの娘、あるいはアムルの姉妹です」と答えました。
すると彼は次のように言った。
なぜ彼女は泣くのだろうか？
彼が（天国に）召されるまで天使が翼で彼に影をつくり続けていると言うのに。

ジャービル・ビン・アブドッラーが伝えている

ウフドの戦いで私の父が戦死しました。
それで私は泣きながら彼の顔から着物を取り除こうとしました。
しかし人々は私を止めに入りました。
ただアッラーの使徒は私を止めませんでした。
そして（着物の覆いを取り除いたために）アムルの娘のファーティマが泣き出しました。
するとアッラーの使徒はこう言いました。
あなたが彼のために泣いても泣かなくても、あなた方が彼を（墓場まで肩に担って運ぶために）持ち上げるまで天使は翼で彼に影をつくりつづけています。

ジャービルは前記のハディースを他の伝承者経路を経て伝えている。
しかしイブン・ジュライジュの伝えるハディースでは天使及び泣いた女性の話しは伝えていない。

ジャービルは次のように伝えている

ウフドの戦いで私の父は鼻と両耳をそがれた遺体で戻りました（注）。
そして預言者の面前に安置されました。
以下は前記と同様のハディースが述べられている。

（注）彼はウワドの戦いの最初の戦死者である。
それでクライシュ側は見せしめのために惨殺した。
恐らくバドルの戦いで殺されたマッカ側の遺族が復讐としてそれぞれ怨念の一太刀を浴びせたものと思われる。
クルアーン第 3 章 169 節はこの惨殺に対する神の啓示だとされている

ジュライビーブの美徳

アブー・バルザは次のように伝えている

かつて預言者が戦場に出ると、アッラーは彼に戦利品を与えました。

そして彼が教友達に向って「あなた方の内で誰か亡くなった人はいますか？」と言うと、彼らは「はい誰々と誰々と誰々です。」と答えた。

それから彼が「あなた方の内で誰か亡くなった人がいますか？」と言うと、彼らは「はい、誰々と誰々と誰々です」と答えた。

それからさらに彼が「あなた方の内で誰か亡くなった人がいますか？」と言いました。

そこで彼らは「いいえ」と答えました。

そこで彼はこう言いました。

「しかし私はジュライビーブを見失った。

どうか彼を探してくれ。」

こうしてジュライビーブが戦死者の間で深し求められました。

そして教友達が彼を見つけた時には、彼は自分が殺した七人の遺体の脇で殺されて死んでいました。

そして預言者がすぐにやって来て彼のそばに立ってこう言いました。

彼は七人の敵を殺したが敵は彼を殺した。

彼は私のものであり、私は彼のものである。

彼は私のものであり、私は彼のものである。

（二人は一身同体の道を歩んでいるの意）。

それから彼（ジュライビーブの遺体）は両腕に抱えられました。

そのとき彼を支えていたのは預言者の両腕だけでした。

それから彼のための墓が掘られてそこに埋められたが、預言者は死体の洗浄については何も言いませんでした（注）

（注）殉教者の死体は洗浄の必要が無いため

アブー・ザッル（注）の美徳

（注）敬信の念厚くストイックな生活を送った。
人々に貧者の救済を訴え、イスラーム最初の社会主義的精神を主張し実践した人と言う人もいる。
また格調の高いアラビア語を話し代表的なハディースの伝承者としても知られている

アブドッラー・ビン・サーミトはアブー・ザッルが語ったとして次のように伝えている

私達は私達の部族のギファール族の地から出発したが、彼らは神聖月を守っていませんでした（注 1）。
そして私と兄弟のウナイスと母親はそこを出てから私達の母方の叔父の所に身を寄せました。
すると叔父は私達を歓待してくれて良く面倒を見てくれました。
しかし彼の部族の者達は私達を妬んでこう言いました。
「お前が家を留守にしているとき、ウナイスは家族の者に反抗していた（お前の妻と姦通していたの意）。」
そこで叔父は私達の所にやって来て彼が告げ口されたことを告げました。
そこで私は次のように言いました。
「これまであなたが行ってきた好意をこれであなたは台なしにしてしまいました。
もうこれ以上あなたと一緒にいることはできません。」
そして私達は私達ののラクダの所に行き荷物を乗せました。
そのとき叔父は着衣をすっぽり頭から被り泣きはじめました。
私達は旅を続けマッカの郊外に達した所で泊まりました。
そこでウナイスは私達のラクダと他の同数のラクダと（どちらか良い方が両方のラクダを取る）賭けをしました。
二人は判定をしてもらうために占い師の所に出かけて行きましたが、占い師がウナイスのラクダを選んだためにウナイスは私達のラクダとそれと同数のラクダを一緒に連れて私達の所に戻って来ました。
さてアブー・ザッルはつづけて次のように語った。
私の甥よ、私はアッラーの使徒に会う三年も前から礼拝をしていました。
そこで私（アブドッラー）は「誰に対してですか？」と言うと、彼は「アッラーに対してです」と答えた。
そこでまた私が「どこに向かってですか？」と言うと、彼はこう言いました。
「私は主が私を向かせる方角に向かいました。
また私はイシャー（夜の礼拝）をその夜の最後に行いそのまま太陽が私の上に昇るまでマントのように平伏していました。」

さてまたウナイスが次のように言いました。
私はマッカに用事があるので（出かけますが）私をここで待っていて下さい。
こうして彼はマッカへ出かけて行き、遅くなってから私の所に帰って来ました。
私が「何をしていたのですか？」と尋ねると、彼はこう言った。
私はマッカであなたの教えを信奉している一人の男に会いました。
彼はアッラーが彼を使徒として遣わしたと主張しています。
そこで私は「人々は何と言っていますか？」と言った。
すると彼はこう言いました。
「彼らは彼を詩人、占い師、魔術師と呼んでいます。」
さてそのときウナイスは詩人の一人でもありましたが、ウナイスはさらにこう言いました。
「私は占い師の言葉を聞いたことがありますが、彼の言葉は彼らのそれではありません。
また私はそれを幾つかの詩の数々と照らし合わせて見ましたが、誰一人としてそれに合致する詩人はいません。
つまりそれが詩であるはずがない。
アッラーに誓って、確かに彼は真実を語っていて、彼らの方が嘘をついています。」
そこで私は「私が行って確かめて来るまでここで待っていてくれ」と言った。
こうして私はマッカにやって来ました。
そこで一番弱そうな男を見付けてこう言いました。
「あなた方がサービー教徒（注 2）と呼んでいる者はどこにいますか？」
すると彼は「あれがサービー教徒だ」と示しました。
するとワジ（涸谷）の住人が土塊や骨を持って私に襲いかかり私が気を失うまで殴りました。
それから私は意識を取り戻して立ち上り血を洗い流しました。
そしてその水を飲みました。
おお私の甥よ、私はそこで 30 日昼夜過ごしましたが、ザムザムの水以外に何も食べるものを持っていなかったのですよ。
でも私は太って脇腹のしわがはち切れそうでした。
そして肝臓に飢えによる衰弱など少しも感じませんでした。
その間マッカの住人は月の光が煙々と輝く夜は眠りに落ち入って誰一人としてカーバ神殿の周りを回るタワーフを行う者がいないのですが二人の婦人だけがイサーフとナーイラの偶像の名を唱えながら回っていました。
そして二人がタワーフをしながら私のそばにやって来たので私は「それらの偶像をお互いに結婚させてみなさい」と言いました。
しかし彼女達は（お題目を）言うことを止めませんでした。
そして再び私のそばに回りめぐって来たので私は「（偶像の陰部に）さし込んだ木片のようなものだ（注 3）と比喩も使わずにストレートに言いました。」

すると彼女達は「ああここに私達の仲間の助人が一人でもいればよかったのに（注 4）。」と言って呪いの言葉を吐きながら行ってしまいました。
そして二人は丁度丘を降りてきたアッラーの使徒とアブー・バクルに会いました。
そしてアッラーの使徒が「どうしたのですか？」と尋ねると二人はこう言った。
「カーバ神殿と（それを覆っている）布地のカ―テンの間にサービー教徒がいます。」
そこで彼が「あなた方に何と言いましたか？」と尋ねると、二人は「私達に口一杯の言葉（これ以上ない汚い言葉）を言いました。」と答えた。
そこでアッラーの使徒は（カーバ神殿に）やって来てその黒石に挨拶（触ってキスすること）してから彼の教友とカーバ神殿をタワーフしました。
そしてその後、彼は礼拝を行いました。
さて私（アブー・ザッル）は彼が礼拝を終えたときこう言いました。
「アッラーの使徒よ、アッサラーム・アライカ（あなたの上に平安がありますように）」とイスラームの挨拶をしました。
なお彼に向かって最初にイスラームの挨拶をしたのは私でした。
すると彼は次のように返事をした。
「あなたの上にこそ（平安がありますように）。
そしてアッラーのご慈悲がありますように。」
それから彼が「あなたは誰ですか？」と尋ねたので、私は「ギファール族の者です。」と答えた。
すると（座っていた）彼は（考え込むように）指を額に当てて手にもたれかかるようにしました。
そのとき私は「私がギファール族に属していることで気に入らないのだ」と内心つぶやきました。
そして私はすぐに彼の手を取りに行きましたが、私よりも彼については良く知っている彼の教友が私を押し止どめました。
しばらくして彼は頭を上げて、それから彼は「あなたはいつからここにいるのですか？」と尋ねました。
そこで私は「ここに 20 日昼夜おります。」と答えた。
また彼は「誰が食事を与えてくれるのですか？」と尋ねたので私は次のように答えました。
「ザムザムの水以外に食べ物は持っていません。
しかし脇腹のしわがはち切れそうに太りましたし、肝臓に飢えによる衰弱など少しも感じたこともありません。」
すると彼は「それは祝福された水だ。
食べ物のように飲む者を満腹にする。」と言った。
それからアブー・バクルは「アッラーの使徒よ、私に彼の今夜の食事を供させて下さい」と言った。

それからアッラーの使徒とアブー・バクルは立ち去りましが、私は二人について行きました。
そしてアブー・バクルは（彼の家の）扉を開けました。
そして私達にターイフの干しぶどうを持って来てくれました。
それは私がマッカで食べた最初の食べ物でした。
それから私はそこに留まるだけ留まった後にアッラーの使徒の所にやって来ました。
すると彼はこう言いました。
私はナツメヤシの木が生い茂っている土地を見せられましたが、それはヤスリブ（マディーナの古名）以外に考えられません。
あなたは私の代りになってあなたの部族の人々に私の教えを伝えてくれませんか？
アッラーは恐らくあなたを通して彼らを益することでしょう。
また彼らのことであなたに報酬をお与え下さるでしょう。
そこで私はウナイスの所に戻った。
すると彼は「何をしていたのですか？」と尋ねました。
それで私はこう言いました。
イスラーム教徒になり（ムハンマドを預言者として）承認しました。
それから私達は母の所に行きましたが彼女は次のように言いました。
私にはお前たちの宗教を拒む理由は無い。
私もまたイスラーム教徒になり（ムハンマドを預言者として）承認します。
それから私達はラクダに乗り私達の部族ギファール族のもとにやって来ました。
そこで彼らの半分がイスラーム教徒になりました。
そしてアイマーウ・ビン・ラハダが彼らのイマーム（教導師）を勤めました。
そのとき彼は彼らの族長でした。
そしてまた残りの半分の人々もこう言った。
アッラーの使徒がマディーナに来たならイスラーム教徒になる。
こうしてアッラーの使徒が実際にマディーナに到着したとき残りの半分がイスラーム教徒になりました。
そしてアスラム族の者達が預言者の所にやって来てこう言いました。
アッラーの使徒よ、私達の兄弟がイスラーム教徒になったように私達もイスラームに改宗します。
こうして彼らはイスラーム教徒になりました。
そこでアッラーの使徒はこう言った。
アッラーはギファール族をお赦しになった。
またアッラーはアスラム族を平安にお守りになりました（注 5）。

（注 1）ギファール族はイスラーム以前にクライシュ族のキャラバンを襲ったことで悪名高かった。
そのために休戦協定期間中とも言うべき神聖月の掟も守らなかったの意

（注 2）サービー教徒はユダヤ教とキリスト教を混合した一神教的な宗教グループと考えられているが当時星や天使を崇拝していたので崇星教徒とも呼ばれるグループ。
今日でもサービー教徒と名乗る少数のグルーブが北イラクにみられる

（注 3）彼女達が口にしている偶像を中傷する言葉でこれで女性がまともに聞くに耐えないような意味を連想するらしい

（注 4）そうすればこんなひわいな言葉を使って私達を侮辱したお前に罰を与えてくれようにの意

（注 5）キファール族の語根 Gh,F,R には“ものを隠す、覆う”から“罪を赦す”と言った根元的な意味があり、またアスラム族の語根 S,L,M には“平安、平和”から“イスラーム”までの根元的な意味かある。
従ってここでの預言者の言葉は当を得た上品な語呂合わせとなっている

フマイド・ビン・ヒラールは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。
しかし彼は前記の「私が行って確かめてくるまでここで待っていてくれ」の後に次の言葉を付け加えている。
彼（ウナイス）はこう言った。
分かった。
しかしマッカの住人には気を付けなさい。
なぜならば彼らは彼（預言者）を憎んでおり、彼にしかめ面でしか顔を会わせないのだから。

アブドッラー・ビン・サーミトはアブー・ザッルが次のように語ったとして伝えている
私の甥よ、私は預言者の紹命以前に二年間も礼拝をしていました。
そこで私（アブドッラー）は「あなたはどの方角に顔を向けていたのですか？」と尋ねた。
すると彼は「アッラーが私に指示された方角です」と答えた。
残りのハディースは前記ハディースと同じであるが次の部分を加えている。
そこで二人は判定してもらうために或る占い師の所に出かけた。
そして私の兄弟のウナイスは彼を褒めたたえ遂に彼はウナイスを勝者（ここでは詩のコンテストか）とした。

そこで我々は彼（賭をした相手）のラクダを獲得した。
そしてそれらを我々のラクダの群れの中に入れた。
また伝承者は次のように伝えている。
そこで預言者がやって来てカーバ神殿をタワーフした。
そして彼はイブラヒームのお立所の後ろでニラカアの礼拝を行った。
それから私は彼の所へ行ったが、私は間違いなく彼にイスラームの挨拶を最初にした者でした。
即ち私は次のように言った。
アッサラーム・アライカ（あなたの上に平安がありますように）、おおアッラーの使徒よ。
すると彼はこう答えた。
ワ・アライカッサラーム（あなたの上にこそ平安がありますように）。
あなたは誰ですか？
さらに伝承者は次のように伝えている。
それで彼（預言者）は「あなたはここにいつ頃からいるのですか？」と尋ねたので、私は「15 日前からです」と答えた。
また伝承者は次のように伝えている。
そこでアブー・バクルは「今夜、彼を客としてもてなすことを私にお許し下さい」と言った。

イブン・アッバースは次のように伝えている

マッカに預言者が遣わされたという知らせがアブー・ザッルの耳に届いたとき彼は弟に次のように言った。
そのワジに向けて出発し、天から啓示がやってくると主張しているその男を調べて私に教えてくれ。
そして彼の言葉をよく聞いてから戻って来なさい。
そこで彼（弟）は出かけて行き、マッカにやって来た。
そして彼（預言者）の言葉を聞いた。
それから彼はアブー・ザッルの所に帰りこうった。
私は彼が（人々に）高貴な人格を持つようにと熱心に勧めているところを見ました。
また彼の言葉は詩で表現できるようなものではありません。
するとアブー・ザッルは「お前は私が望んでいたものを十分に伝えていない」と言った。
そして彼は旅支度を整え水の入った皮袋を持ってマッカへやって来た。
そしてそこに着くと彼はモスク（カーバ神殿のある聖モスク）に行き預言者を求めて探し回った。
彼は預言者を知らなかったが、彼について尋ねることも好まなかった。
そうこうしているうちに夜になったので彼は眠った。
するとアリーが見つけ彼がよそから来た者であることを知った。

そこで彼はアリーに従ってついて行った。
しかし朝になるまで二人はお互いの連れについて何も尋ねなかった。
それから彼は彼の小さな革の水袋と食糧をモスクに持ち込み日中はそこで過ごした。
しかし夜になっても彼は預言者を見ることは無かった。
そこで彼は寝場所へと戻った。
するとアリーがそこを通りかかりこう言った。
この男は未だに自分の宿泊場所を見付け出せないでいる。
そしてアリーは彼を立たせ彼を一緒に連れて行った。
しかしその間二人はお互いの連れに何も尋ねなかった。
こうして三日目も彼は同じ行動をした。
そこでアリーはまた彼を立たせて一緒に連れて行った。
そしてアリーは彼にこう言った。
あなたをこの土地に来させたものは何かを私に話してくれる訳にはいかないか？
すると彼は「もしあなたが私を正しく導くときっかりと約束するのであれば話す」と言った。
それでアリーが約束をしたので彼は（事の次第を）話した。
（それを聞いて）アリーはこう言った。
それは本当です。
彼はアッラーの使徒です。
朝になったら私について来なさい。
もし私があなたに危険が振りかかると思う時には私は水を注いでいるようにして立っています。
またもし私がそのまま行くようでしたら、私に付いて来て私が入る所に入って下さい。
こうしてアリーは行動を起した。
それで彼（アブー・ザッル）はそれにつづき、アリーが預言者の所に入ると彼も一緒に入った。
そして預言者の言葉を聞いた。
そして彼はその場でイスラーム教に入信したが預言者は彼にこう言った。
あなたの部族の所に戻り私の命令が行くまで彼らにこの教えを伝えなさい。
そこで彼は次のように言った。
私の魂を手中にするお方に誓って、きっと私は彼らの中でそれを声を張り上げて伝えます。
それから彼はそこを退出してモスクまでやって来た。
そして彼は有らん限り大声でこう呼びました。
私はアッラー以外に神が無いこと、そしてムハンマドがアッラーの使徒であることを証言する。
すると人々は騒然として彼に殴りかかり彼を打ちのめした。
そこへアッバースがやって来てお前達に呪いあれ、お前達はこの男がギファール族の者

であることが分からないとでも言うのか？
そしてお前達のシリアに向う交易路が彼らの所を通っていることを知らないとでも言うのか？
こうしてアッバースは彼らから彼を助け出した。
それから翌日、彼は再び同じことを行った。
そして人々は騒然として彼に殴りかかった。
それからアッバースが彼の上に屈み込んで彼を助け出した。

ジャリール・ビン・アブドッラー（注）の美徳

（注）イエメン系のバージィラ族の族長でイスラームの大征服軍のイラン・イラク方面の一部将。
アリーとムアーウィヤの対立ではアリー側に味方しアリー側を代表した

ジャリール・ビン・アブドッラーが伝えている

アッラーの使徒は私がイスラーム教に入信して以来いかなる時でも私の訪問を禁じませんでした。
また私を見る時はいつも笑顔を見せておいででした。

ジャリールは次のように伝えている

アッラーの使徒は私がイスラーム教に入信して以来いかなる時でも私の訪問を禁じられませんでした。
また私を見る時には私にいつも微笑みをかけて下さいました。
またイブン・ヌマイルはイブン・イドリースが伝えたハディースの中で次のようなジャリールの言葉を加えている。
私は預言者に馬の上にどうしてもしっかりと乗っていられないと訴えたことがあります。
すると彼は私の胸を彼の手でたたきながら次のように祈ってくれました。
アッラーよ、彼を固定してやって下さい。
そして正しい道にお導き下さい。

ジャリールは次のように伝えている

かつてジャーヒリーヤ時代にズルハラサと呼ばれる神殿があり、それはイエメンのカーバ神殿と呼ばれ、マッカのカーバ神殿をシリアのカーバ神殿と呼んで区別していました。
そこでアッラーの使徒は私にこう言いました。
ズルハラサ、イエメンのカーバ神殿から私を解放してくれませんか？
そこで私はすぐにアフマス族の 150 人の騎士を率いてそこへ出向きました。
そして私達はそれを破壊し、そこにいた者を殺害しました。
それから私は彼の所に戻りそのことを報告しました。
すると彼は私達とアフマス族のためにお祈りして下さいました。

ジャリール・ビン・アブドッラー・バジャリーは次のように伝えている

アッラーの使徒は私に「やあ、ジャリールよ、私をズルハラサ神殿から解放してくれないか？」と言いました。
それはハスアム族の偶像を安置した神殿でイエメンのカーバ神殿と呼ばれていました。

そこで私は 150 人の騎士を率いてそこに出向きました。
その当時私は馬にぐらつかないでしっかりと乗っていることが出来なかったのでアッラーの使徒にその事を話しました。
すると彼は彼の手で私の胸をたたきながらこう言った。
アッラーよ、彼をしっかりと固定させて下さい。
そして彼を正しくお導き下さい。
さてそれから彼（ジャリール）は出かけて行き、それ（神殿）を火で焼きつくしました。
彼は一足先にその朗報をアッラーの使徒に伝えるために一人の男（彼の悼名はアブー・アルターと言ったが）を遣わしました。
それで彼はアッラーの使徒の所へやって来るとこう言いました。
「私はそれが疥癬に罹ったラクダのように真っ黒になったことを確認してからその場を立ち去り、あなたの所へやって参りました。」
するとアッラーの使徒はアフマス族の馬とその騎士達を五回も祝福されました。
イスマイールが前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。
その中でマルワーンが伝えたハディースでは次のように伝えている。
そこでジャリールの送った朗報を伝える使者、アブー・アルター・フサイン・ビン・ラビーアがやって来て預言者に朗報を伝えた。

アブドッラー・ビン・アッバース（注）の美徳

（注）預言者の従兄弟に当たるが彼はヒジュラ前三年に生れた。
従って預言者が他界した時 22 才であった。
イスラームへは父親より早く母親とともに入信したが抜群の記憶力によって初期イスラームの最大級のクルアーン解説者ハディースの伝承者として知られている

イブン・アッバースは伝えている

預言者が用足しに行かれたので私は彼のためにウドゥー（小浄）の水を置いておきました。
そして彼が戻って来て「誰がこれを置いたのか？」と言いました。
すると彼ら（ズハイルの伝承）、私（アブー・バクルの伝承）は「イブン・アッバースです」と言った。
そこで彼はこう言った。
アッラーよ、彼に宗教への深い洞察の才を与えたまえ。

アブドッラー・ビン・ウマル（注）の美徳

（注）第二代カリフ・ウマルの長男、マッカ征服の年に 20 才に達したが、その後大征服時代は北アフリカ、ペルシャ、タバリスターン、小アジアなど各地を転戦した。
父ウマルの死に臨んで次期カリフ選出六人委員会の枠の外で審判役を命ぜられる。
アリー・ムアーウィヤの対立の中では双方の和解を計ったが晩年この立場を後悔したという

イブン・ウマルは次のように伝えている

私は夢で天国で着るという一片の絹布を手にしている自分を見ました。
そして私は天国でその絹布の一片が飛んでいった所以外の場所へは行きつくことを望みませんでした。
それでこのことをハフサ（姉妹で預言者の妻の一人）に話しました。
するとハフサはそれを預言者に話しました。それで預言者はこう言いました。
私はアブドッラーが信仰深い男であることが分った。

イブン・ウマル（アブドッラー）が伝えている

かつてアッラーの使徒が存命中、夢を見た人は彼にそれを話したものでした。
そこで私も夢を見て、それを預言者に話してみたいものだと願っていました。
その時私はまだ結婚前の若い少年でした。
そして私はアッラーの使徒の治世にはモスクで寝ていました。
そこで私は二人の天使が私を捕まえて火獄へ連れて行く夢を見ました。
そしてそれ（火獄）は井戸の（煉瓦で固めた）囲いのように作られており、そこには井戸に付随する二本の柱のような柱が二本立っていました。
そこで私はこう言いつづけました。
私はこの地獄の業火からのお助けをアッラーに請い願う。
私はこの地獄の業火からのお助けをアッラーに請い願う。
私はこの地獄の業火からのお助けをアッラーに請い願う。
すると二人の天使にもう一人の天使が加わり、彼は私に「何も恐れることはありません。」と言いました。
さて私はこの話しをハフサに物語りました。
それでハフサはそれをアッラーの使徒に話しました。
すると預言者はこう言いました。
何とアブドッラーは立派な男だろうか！
もしも彼が夜も礼拝していればなあ！
ところでサーリム（伝承者）は次のように伝えている。

アブドッラーはそれ以後夜は僅かな睡眠しか取らないで、礼拝に専念するようになりました。

イブン・ウマルは次のように伝えている

私には家族もいませんでしたので夜はモスクで過していました。
そんなある時、私は井戸に連れて行かれる夢を見ました。
それで預言者にそれを話しました。
以下は前記と同様のハディースを伝えた。

アナス・ビン・マーリク（注）の美徳

（注）若い頃より預言者の身近で仕え、たくさんのハディースを伝えている。
アリーとムアーウィヤの確執ではアリー側に味方し、ついでイブン・ズバイル側を支持してウマイヤ朝には反対の立場をとった

アナスはウンム・スライム（彼の母親）が次のように語ったとして伝えている

アッラーの使徒よ、ここにあなたの召使いのアナスがいます。
どうか彼のためにアッラーにお祈り下さい。
そこで彼は次のように祈った。
アッラーよ、彼の財産と子供が増えますように。
またあなたが彼にお与えになるものでことごとく彼を祝福して下さい。

アナスはウンム・スライムが次のように語ったとして伝えている

アッラーの使徒よ、ここにあなたの召使いのアナスがいます。
以下は前記と同様のハディースを伝えた。

アナス・ビン・マーリクは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アナスは次のように伝えている

預言者が私達の所へやって来た。
そのときそこには私と私の母親と母の妹のウンム・ハラームしかいませんでした。
そこで私の母は次のように言いました。
アッラーの使徒よ、ここにあなたの小さな召使いがいます。
どうか彼のためにアッラーにお祈りして下さい。
すると彼は私のために全てがよくなるようにとお祈りしました。
そして彼が最後に祈った言葉は次の言葉でした。
アッラーよ、彼の財産と子供をお増やし下さい。
そして彼を祝福して下さい。

アナスは次のように伝えている

私の母が私を連れてアッラーの使徒の所にやって来ました。
彼女は彼女のかぶりものの半分で私の腰を巻き、残りの半分で私の上半身を覆って服の代用にしていました（注）。
さて彼女はそこで次のように言った。
アッラーの使徒よ、これは私の息子のウナイス（小っぽけなアナスの意で愛称）です。

私があなたの所にやって来たのはこの子をあなたに仕えさせるためです。
どうか彼のためにアッラーに祈ってやって下さい。
すると彼は次のように祈った。
おおアッラー、彼の財産と子供を増やしてやって下さい。
さてアナスはここで次のように伝えている。
アッラーに誓って私の財産は確かに増えました。
そして私の子供と孫たちは今日百人になろうとしています。

（注）貧しさを想起させる

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーの使徒が（私達のそばを）お通りになったとき、私の母ウンム・スライムは彼の話し声を聞きつけてこう言いました。
「私の父母に誓って、アッラーの使徒よ、ここにウナイス（小さなアナス）がいます。」
するとアッラーの使徒は私のために三つのお祈りをして下さいました。
そして私はその内の二つがこの世において実現されたことを確かに見ました。
そしてその三番目があの世で実現されることを切望しています。

アナスは次のように伝えている

私が仲間の子供達と遊んでいるとアッラーの使徒が私の所へやって来ました。
そして彼は私達に挨拶し、私をある用事で使いに出しました。
それで私は母の所へ戻るのが遅くなってしまいました。
それで私が帰ってくると母は「何かあったのかい？」と尋ねたので私は「アッラーの使徒が私をある用事で使いに出したのです」と答えた。
すると彼女は「その用事って何だい？」と聞きましたが、私は「それは秘密です」と答えた。
すると彼女は「アッラーの使徒の秘密は決して誰にも話してはいけないよ。」と言った。
さてアナスはさらにつづけて次のように伝えている。
サービトよ、アッラーに誓ってもし私がそれを誰かにもらしていたとしたら必ずあなたにも（今）もらすでしょう。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーの預言者が私にある秘密を打ち明けました。
それで私はそれを誰にも話していません。
そしてウンム・スライム（アナスの母）がそれについて尋ねましたが、私は話しませんでした。

アブドッラー・ビン・サラーム（注）の美徳

（注）イスラーム以前はマディーナの学識あるユダヤ教徒であった。
第三代カリフ・ウスマーンが暴従によって囲まれたとき、彼は「一度引き抜かれた剣はもとの鞘には納まらない」と言って止めに入ったと言われている。
その後アリーとムアーウィヤの確執には介入を避けたという。
またクルアーン第 46 章 10 節は彼に関して語られていると言われている

アーミル・ビン・サアドは彼の父（注 1）が次のように語ったところを聞いたとして伝えている

私（サアド）はアッラーの使徒が生きている人間のうちでその者が天国に入ると語ったとすればそれはアブドッラー・ビン・サラームの場合以外には聞いたことがありません（注 2）。

（注 1）サアド・ビン・アブー・ワッカースのこと
（注 2）教友達の、うちで生前に天国を約束された者（たとえば 10 人の祝福された人々など）は何人もいるのでこのハディースはいささか理解に苦しむ。
ただこのハディースのような特殊な表現によって天国の約束をした例はなかったという解釈はなりたつだろう

カイス・ビン・ウバードは伝えている

私はかつてマディーナである人々と一緒にいました。
その中には預言者の教友も何人かおりました。
そこへいかにも信仰深い顔付きをした一人の男がやって来ました。
すると何人かの人が（口々に）次のように言いました。
「彼は天国を約束された人々の内の一人だ。
彼は天国を約束された人々の内の一人だ。
彼は天国を約束された人々の内の一人だ。」
そして彼はそこでニラカアの礼拝を済ませると出て行きました。
そこで私は彼について行きました。
そして彼が自分の家に入ると私もそこに入りました。
そして私達は互いに話をし始めました。
さて彼が私になじんできた頃、私は彼にこう言いました。
「あなたが（モスクに）入って来てあなたの家に入る前に、ある人がこれこれと（あなたが天国の住人の一人だと）言っていました。」
すると彼は次のように言いました。
おお何ということだ、アッラーに称あれ、誰一人として知りもしないことを話す権利はないはずだ。

何故そうなったのかあなたにお話ししましょう。
アッラーの使徒が生きている時代に私はある夢を見ました。
そしてそれを次のように彼に話しました。
私はある庭園の中にいる自分を見ました（彼はその大きさとそこに生えている草や野菜について話したが）。
そしてその庭園の真ん中には鉄でできた柱が立っていました。
その根元は大地に、その頂上ははるか天空にありてっぺんには取っ手がありました。
そして私は「それに登れ。」と言われました。
そこで私は「無理です。」と言うと、すぐにミンサフ（召使い）が私の所にやって来ました（伝承者のイブン・アウスはミンサフとは召使いのことだと伝えているが）。
そして彼は私の着物の後ろから捕まえた（そのとき彼は「このように」と自分の手で後ろをつかみ上げて説明しました）。
さてそこで私は登りはじめて遂にその柱のてっぺんまで到達しました。
そこで私はその取っ手を手にしました。
するとまた私は「しっかりつかまえていろ」と言われた。
そこで私は目覚めましたが、そのとき私の手にはその取っ手が握られていました。
そこで私はこの話を預言者にしたのです。
すると彼はこう言いました。
その庭園はイスラームを示している。
またその柱はイスラームの柱であり、その取っ手は強い信仰を示している。
そしてあなたは死ぬまでイスラームを守りつづけていくことになります。
さて伝承者のカイスは（最後に）こう伝えている。
その男とはアブドッラー・ビン・サラームです。

カイス・ビン・ウバードは伝えている

私はサアド・ビン・マーリクやイブン・ウマルがいる（モスクの）車座集団に座っていました。
そこへアブドッラー・ビン・サラームが通りかかりました。
すると彼らは「彼は天国の住人の一人だ」と言いました。
そこで私は立って彼の所に行き「彼らはこうこうと言っています」と言った。
すると彼はこう言った。
おお、何ということだ。
アッラーに称えあれ、彼らは自分達の知らないことを語るべきではない。
私はただ青々と草木が生い茂っている庭園に一本の柱が立てられている所を（夢）で見ただけです。
そしてそのてっぺんには取っ手が据え付けられていました。
またその根元には一人のミンサフ（召使い）がいて、私は「登れ」と言われたので登り、て

っぺんにある取っ手をつかむまで登りました。
そして私が今の話しをアッラーの使徒に話しましたところアッラーの使徒はこう言いました。
アブドッラーはしっかりした取っ手（信仰）を手にして死ぬだろう。

ハラシャ・ビン・フッルが伝えている

私はマディーナのモスクの中で行われていたハルカ（車座講義）に参加していました。
そしてそこには容姿端正な一人のシャイフ（老人）がいました。
彼はアブドッラー・ビン・サラームでした。
そして彼はその場の人々に良い話しをはじめたが（それが終ると）立ち上がりました。
すると人々は「天国の住人を見たい者は彼を見なさい」と言いました。
そこで私はこう言った。
「アッラーに誓って、私は彼について行って彼の家のある場所を知らなければならない。」
こうして私は彼について行きました。
そして彼は今にもマディーナの町を出てしまう位の所までやって来ると彼の家に入りました。
そして彼は「私の兄弟の息子よ、何かご用かな？」と言ったので、私はこう言いました。
あなたが席を立った時に人々があなたについて「天国の住人を見たい者は彼を見ろ。」と言っているところを聞きました。
それで私はどうしてもあなたと一緒にいたくなったのです。
すると彼は次のように言った。
天国の住人について知っているのはアッラーだけです。
でもそれならあなたに彼らがどうしてそのように言うようになったか話してあげよう。
ある日私が寝ていると（夢の中で）一人の男が私の所にやって来て「起きろ」と言った。
（私が起きると）彼は私の手を取った。
それで私は彼と一緒に歩いて行った。
しばらくすると私の左手の方に向う幾筋かの道がある所に出た。
そこで私がそちらの道を取ろうとした時、彼は次のように言った。
「そちらへ行ってはいけない。
それは左手の仲間（地獄の住人）が通る道だ。」
それからしばらく行くと右手の方向に真っすぐな道が現われた。
そこで彼は私に「この道を取りなさい」と言った。
そして彼は私を連れてある山の麗までやって来た。
そして彼は「登りなさい」と私に言った。
そこで私は登ろうと試みたのですが、尻から落ちてしまいました。
そして私は何度もやったのですが失敗しました。
そこで彼は私を連れてそこを離れて一本の柱が立っている所へやって来ました。

そのてっぺんは天空の中にあり根元は地面の中にありました。
そしてその頂上には取っ手が付けられていました。
そこで彼は私に「この上に登れ」と言いました。
そこで私はどうやってこれを登ればよいのですかと聞きました。
すると彼は私の手を取り私をほうり投げました。
次の瞬間、私は取っ手につかまってぶら下っていました。
それから彼が柱をたたくとそれは崩れ落ちました。
しかし私は朝になるまでその取っ手にぶら下ったままでした。
（目覚めた後）私は預言者の所へ行きこの話しをしました。
すると彼は次のように言いました。
あなたが左手に見た道は左手の人々（地獄の住人）の道である。
またあなたが右手に見た道は右手の人々（天国の住人）の道である。
そして山は殉教者のすみかである。
そしてあなたは決してそれを手に入れることは無いでしょう。
一方その柱はイスラームの柱です。
また取っ手はイスラームの取っ手です。
あなたはそれを死ぬまでしっかりとつかみつづけていくでしょう。

ハッサーン・ビン・サービト（注）の美徳

（注）マディーナのハズラジュ族出身の詩人。
イスラーム以前は北方のガッサーン朝やヘイラ朝の富廷にも出入りしていた。
イスラームに改宗後は一貫して預言者とイスラームを擁護する詩を作りアッラーの使徒の詩人と、言われた。
長寿をして 120 才前後で没したと言われている

アブー・フライラが次のように伝えている

ハッサーンがモスクで詩を朗誦しているとき、ウマルが彼のそばを通った。
そしてウマルは彼を意味あり気に見た。
それで彼（ハッサーン）は次のように言った。
「私はあなたより良い人（預言者）がここにいたときによく詩を朗誦したものでした。」
それから彼（ハッサーン）はアブー・フライラに向ってこう言った。
「私はアッラーに誓って、あなたに聞きますが、あなたはアッラーの使徒が次のように言ったところを聞きましたか？」
（ハッサーンよ）、私に代って（詩で）答えてやりなさい。
アッラーよ、どうか彼（ハッサーン）をルーフル・クドス（天使ガブリエル）によってご支援下さい（注）。
すると彼（アブー・フライラ）は「アッラーに誓って、その通りです」と答えた。

（注）つまりハッサーンにすばらしい作詩の力をお借し下さいという意味であろう

イブン・ムサイブはハッサーンが次のように語ったとして伝えている

ある車座集会で、その中にはアブー・フライラもいましたが、彼（ハッサーン）は（彼に）こう言いました。
「アッラーに誓って、アブー・フライラよ、あなたはアッラーの使徒が次のように語ったところを聞きましたか？」
そして前記と同様のハディースを伝えた。

アブー・サラマ・ビン・アブドル・ラフマーンはハッサーン・ビン・サービトがアブー・フライブに次のように言って証言を求めているところを聞いたとして伝えている

私はあなたにアッラーに誓って、聞きますが、あなたは預言者が次のように言ったところを聞きましたか？
ハッサーンよ、アッラーの使徒に代って（詩で）答えてやりなさい。

アッラーよ、どうか天使ガブリエルによって彼（ハッサーンの作詩）に力をお借し下さい。
するとアブー・フライラは「はい」と答えた。

バラーウ・ビン・アーズィブが伝えている
私はアッラーの使徒がハッサーン・ビン・サービトに次のように言っているところを聞いた。
彼ら（不信心者に）風刺詩を書いて攻撃しなさい。
天使ガブリエルはあなたと共にいます。
シュウバは同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

ヒシャームは彼の父親からの伝聞として次のように語ったとして伝えている
実際ハッサーン・ビン・サービトはかつてアーイシャについて多く語り過ぎていた。
それで私は彼を非難した。
するとアーイシャはこう言った。
「おお私の姉妹の息子よ、彼の好きなように放っておきなさい。
なぜならば彼はアッラーの使徒を擁護し続けていたのですから。」

ヒシャームの前記のハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。

マスルークが次のように伝えている
私はアーイシャを訪問したとき、ハッサーン・ビン・サービトが彼女のもとにいて最愛の女性を称える次の詩を朗誦していた。
（彼女）貞節で思慮深く誰れからも中傷されることもない。
そして無神経な者達の肉を食べることもなく空腹で朝を迎える（注 1）。
すると彼女は「しかしあなた（ハッサーン）はそうでない（注 2）」と言った。
そこで私は彼女に次のように尋ねた。
「なぜあなたは彼があなたの所に入って来ることを許しているのですか？
アッラーは次のように啓示しましたよ。」
「なかでもそれに大きく関与した張本人はひどい天罰に処せられよう」（第 24 章 11 節）（注 3）。
すると彼女は次のように言った。
「彼が盲目になったことより厳しい懲罰がありますか？
実際彼はかつてアッラーの使徒を擁護し、不信心者達を風刺する詩を書いていました。」

（注 1）他人の陰口をきかない意、なぜならばもし他人の陰口をきけばアラブでは彼らの肉で満腹すると表現するから

（注 2）詩人ハッサーンは以前にアーイシャを中傷したことがあり、そのことを指摘している

（注 3）この節に最も関与している人物は似非信者の頭目アブドッラー・ビン・ウバイユで彼はアーイシャの貞節に関して嘘の噂をでっち上げて広めた張本人である。
ハッサーンに責めがあるとすれば彼は一時期この似非情報におどらされたことがあることである。
しかし彼は後にこのことで謝罪し反省したと言われている

シュウバが前記と同様のハディースを別の伝な者経路を経て伝えているが、ここでは「彼はアッラーの使徒を守った」とあり、また「貞節で思慮深い」とは伝えていない。

アーイシャはハッサーンが次のように語ったとして伝えている
アッラーの使徒よ、アブー・スフヤーンを風刺する詩を書くことをお許し下さい。
すると預言者は「私は彼の親類ですよ、どうしてそんなことができましょうや」と言った。
そこでハッサーンはこう言った。
あなたを祝福なさるお方に誓って、私はちょうど（こねられて）発酵したもの（小麦粉）から一本の髪の毛を抜き取るように彼らの血統からあなたを抜き取って（詩を作って）みせます。
こうして彼は次の詩を朗誦した。
栄光の頂点とはハーシム家の内のマフズーム系の娘の子孫に属する（注 1）。
でもお前（アブー・スフヤーン）の父は奴隷だった（注 2）。

（注 1）預言者の父のアブドッラーと叔父の、ズバイルとアブー・ターリブの母はファーティマで、彼女はマフズーム家に属していた

（注 2）このアブー・スフヤーンは当時預言者の怨敵であったウマイヤ家のそれではない。
彼は預言者とは乳母兄弟であり祖父を同じくする従兄弟同士である。
彼の具体的な系譜は次のようになる。
彼の父（ハーリス）の母親（スマイヤ）の父親（マウハブ）は奴隷であった。
また彼の母親（ガズイヤ）即ちハーリスの妻も奴隷であった。
するとアブー・スフヤーンは四分の三の奴隷の血を受け継いだ計算になる。
それで奴隷と決めつけたわけだがさらに効果を出すために彼の父親ハーリスを奴隷と決めつけたものと思われる。
尚このアブー・スフヤーンもヒジュラ八年のマッカ征服の年にイスラームに入信した

ヒシャーム・ビン・ウルワは同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えているが、ここでは次のように伝えた

ハッサーン・ビン・サービトが預言者に多神教徒達を風刺する詩を作る許可を求めた。

つまりここではアブー・スフヤーンを名指しで特定していない。

またハミール（発酵したもの）の代りにアジーン（こねた小麦粉）という言葉を用いている。

アーイシャはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

クライシュ族を風刺しなさい。

なぜならそれは弓矢の一撃よりも彼らにとって痛烈であるからです。

そして彼はイブン・ラワーハの所に人を遣わし、彼らを風刺するように言った。

それで彼はその詩を作ったが預言者は満足しなかった。

そこで今度はカアブ・ビン・マーリクの所に人を遣わした。

（だが彼はそれにも満足しなかったので）次にハッサーン・ビン・サービトに人を遣わした。

その使者が彼の所にやって来ると彼は次のように言った。

あなた方が敵をしっぽで攻撃するライオンを呼ぶ時が今まさに来たれり。

こう言って彼は舌を唇の外にペロリと出して動かしてみせた（注 1）、そして彼はこう言った。

「あなた（預言者）を真理をたずさえて遣わしたお方に誓って、私は必ずこの舌で切り裂かれた皮革のように彼らをば切り裂いて見せましょう」

するとアッラーの使徒はこう言った。

そんなに急がないで、私もクライシュ族に家系を持っている者です。

ちょうどアブー・バクルはクライシュ族きっての家系通です。

彼ならあなたに私の家系を取リ除く方法を知らせてくれるでしょう。

そこでハッサーンはアブー・バクルの所に行き、それから戻って来てこう言った。

アッラーの使徒よ、彼は私にあなたの家系を取り除いてくれました。

真理をたずさえてあなたを遣わしたお方に誓って、私は必ずあなたを彼らから取り除いてみせます。

ちょうどこねられた小麦粉から一本の髪の毛を抜き取るように。

さてさらにアーイシャはアッラーの使徒がハッサーンに次のように言ったところを聞いたとして伝えている。

ルーフル・クドス（天使ガブリエル）はあなたがアッラーとアッラーの使徒を擁護する限りあなたを助けるでしょう。

さらにアーイシャはアッラーの使徒が「ハッサーンが彼らを風刺し、それで（信者達が）安心し、多信教徒達は不安に駈られた」と言うところを聞いたとして伝えた。

さてハッサーンは次のような詩を朗誦した。

おまえはムハンマドを中傷した。

だが私か彼に代わって応えよう。

その報いはアッラーのもとにあるのだ。
おまえは高徳で信仰深いムハンマドを中傷した、
誠実な人格をもつアッラーの使徒を。
まこと私の父と彼の父と私の名誉は、
ムハンマドの名誉をお前達から守るための防御なのだ。
お前達が見たことのない私のかわいい娘をたとえ失うことになっても。
カダー（注 2）の両側から壊を巻き上げよ。
彼らは馬の手綱を引き登って行く、
（敵の血に）飢えた槍を肩にかけて。
我々の馬は汗をかきつづけ
女達は頭のかぶりものでそれを拭う。
もしお前達が我々を妨げなければ我々はウムラ（小巡礼）を果たしたであろう。
そして勝利があり、（真理を隠す）覆いが取りのけられたであろう。
さもなくばその戦いの日まで耐え忍べ、
アッラーがお望みの者に名誉をお与え下さるその日まで。
アッラー言わく、我は下僕を遣わしたり、
曖昧さを残さない真理を語る下僕を。
さらにアッラー言わく、我は軍隊を配したり。
彼らの名誉は敵と出合うこととするアンサールなり。
我ら（アンサール）のもとには毎日マアッド（注 3）から（人が）やって来る、
悪態やら戦闘やら風刺詩が。
お前達の内からアッラーの使徒を風刺する者も、
彼を称讃する者も支援する者もみんな同じだ（注 4）。
なぜなら天使ガブリエルとアッラーの使徒は我々の中にあり、
ルーフル・クドス（注 5）には比べるものが何もないからである。

（注 1）つまりハッサーンは自分をライオンにたとえ、尻尾を彼の舌にたとえているわけ

（注 2）マッカ門に面した山

（注 3）アドナーン系の民族即ち北アラブ族の総称。
しかしここではその代表的部族としてのクライシュ族を指している

（注 4）預言者にとってみればたいして変らないの意

（注 5）文字通りには「聖霊」だが天使ガブリエルの別名

アブー・フライラ・ダウーシー（注）の美徳

（注）アブー・フライラは彼の通り名で「子猫のお父さん」の意。
彼が羊を飼いながら仔猫と遊んでいたことから名付けられたと言われる程の大の猫好き。
彼は預言者の言葉を聞くこと以外に興味がなく、仕事をもたずモスクに寝泊りしていた預言者の供廻リの寄食集団（アハル・スッファ）の一人だった。
抜群の記憶力によって多くのハディースを伝えその数は 3500 に及んだとされている

アブー・フライラは伝えている

以前に私は母にイスラームに入信するよう呼びかけていました。
そのとき彼女は多神教徒だったのです。
そんなある日、私はいつものように彼女に説法をしていました。
すると彼女はアッラーの使徒についてとても聞くに耐えないようなことを私に聞かせました。
それで私は泣きながらアッラーの使徒の所に行ってこう言いました。
アッラーの使徒よ、私は母にイスラームに入信するよう呼びかけてまいりましたが、彼女はいつも私を拒絶していました。
それで今日、いつものように彼女に説法したところ彼女はあなた様について聞くに耐えないことを私に聞かせました。
どうかアブー・フライラの母を導いて下さるようアッラーにお祈りして下さいませ。
そこでアッラーの使徒は「おおアッラー、アブー.フライラの母をお導き下さい。」と言った。
このため私はアッラーの使徒のお祈りの言葉に喜び勇んでそこを出ました。
そして私は家に着いて戸口に近付いて行ったがそれは閉じられていました。
それで私の母は私の足音を聞きつけてこう言いました。
「アブー・フライラよ、ちょっとそこで待っていておくれ。」
そして私は水が流される音を聞きました。
つまり彼女はグスル（大浄）をした。
そして上掛けを着けて急いで頭のかむりものを被った姿で戸を開きました。
そして彼女はこう言った。
アブー・フライラよ、私はアッラー以外に神がないことを証言します。
またムハンマドが彼の使徒であり下僕であることを証言します。
そこで私はアッラーの使徒の所に嬉し泣きをしながらとって返してこう言いました。
アッラーの使徒よ、喜んで下さい。
アッラーはあなたのお祈りをお聞きとどけになりました。
アッラーはアブー・フライラの母をお導きになりました。
すると彼はアッラーに感謝し、彼を称え賛美しました。

そこで私はこう言いました。
アッラーの使徒よ、どうかアッラーに私と私の母が彼の下僕である信者を喜んで好きになるように、また彼らを通して私達を喜んで好きになれるようにお祈り下さい。
そこでアッラーの使徒はこう祈りました。
おおアッラー、あなたの信者の下僕達にこのあなたの小さな下僕（アブー・フライラ）とその母を好きにせしめ、また二人をして信者達を好きにせしめたまえ。
それからというもの私のことを聞いたり見たりする信者で私を好きにならない信者はいませんでした。

アアラジュはアブー・フライラが次のように語ったところを聞いたとして伝えている
あなた方はアブー・フライラがアッラーの使徒のハディースをあまりにもたくさん伝えていると主張しているが、アッラーこそは最後の審判をつかさどるお方である（注）。
かつて私は貧しかったがお腹を満たすためにアッラーの使徒のお世話をしていました。
当時ムハージル（マッカからの移住者）は市場で精を出していました。
またアンサール（マディーナ土着の住民）は彼らの財産を守ることに熱心でした。
それでアッラーの使徒はこう言った。
自分の着物を広げた者は私から聞いたことを一言も忘れないであろう。
そこで私は彼が話しを終えるまで私の着物を広げていました。
それから私はそれを自分の胸に抱きしめました。
こうして私は彼から聞いたことを一言も忘れることがないようになりました。

（注）もし彼が嘘をついていれば罰を受けることになるし、そうでなければ彼に疑惑を持った者はその罪を問われるであろうの意

アブー・フライラは前記のハディースを伝えたが、ここでは伝承者のマーリクはアブー・フライラの言葉を終えた所まで伝え、預言者の言葉以下は伝えていない。

アーイシャは次のように伝えている
アブー・フライラには本当に篤かされます。
ある日、彼がやって来て私の部屋のそばに座ると預言者のハディースを私に聞かせるために語りはじめました。
そのとき私はアッラーを称讃する言葉（スブハーナッラー）を唱えている最中でした。
すると彼は私がそれを終える前に（語りを止めて）立ち上がりました。
それでたとえ私が彼の話しについて行けたとしてもきっと私は彼にこう言ったでしょう。
アッラーの使徒はあなたが話すように早口では話しませんでした。
またイブン・シハーブはイブン・ムサイヤブが次のようにアブー・フライラが語ったとして伝

えている。
人々はアブー・フライラがあまりにも多くのハディースを伝えたと言っている。
しかしアッラーこそは最後の審判を司るお方である。
また人々はムハージルやアンサールの人達が彼（アブー・フライラー）のようにはハディースを伝えていないのはどうしてかと言っている。
私はその理由をあなた方に話そう。
我が兄弟のアンサールの人達は彼らの土地にかかりっきりで忙しく、また我が兄弟のムハージルの人達はスーク（市場）の商売で忙しかったのです。
しかし私は空腹を満たすためにアッラーの使徒といつも一緒でした。
それで彼らの不在中にも私は一緒でした。
また彼らが預言者の言葉を忘れてもいいように私はそれをしっかりと心に留めました。
ある日アッラーの使徒はこう言いました。
着物を広げて私のこの話しを聞きとりそれをしっかりと胸に抱きしめる者は誰でも彼が聞いたことを一つも忘れることはないでしょう。
それで私は上衣を広げ彼の話しが終わるとそれを自分の胸に抱きしめました。
するとその日以来、私は彼が私に語ったことを一言も忘れなくなりました。
またもしアッラーが次の二節を聖典の中で啓示しなかったとしたら私は決してハディースを一言も伝えることはなかったでしょう。
「われが下した明解な神兆と導きを（口をつぐんで）隠す者達は……」（第 2 章 159-160 節）。

アブー・フライラが伝えている
あなた方はアブー・フライラがアッラーの使徒のハディースをあまりにも多く伝えていると言っている。
以下は前記と同様のハディースを伝えている。

バドルの戦いに参戦した者達の美徳とハーティブ・ビン・アブー・バルタア（注）の物語り

（注）ヒジュラ八年にビザンチン帝国治下のエジプト州知事マカウカスのもとに預言者の使節として赴く。
マカウカスには歓迎され、たくさんの贈物が預言者に贈られる。
その中にコプト教徒の女性マリヤがいたが、彼女はマディーナに着く途中でイスラームに入信し預言者の妻となりイブラヒームを生む。
マッカ征服の年のヒジュラ八年にハーティブは秘かにマッカ側にイスラーム側の動勢と意向を知らせる手紙を送ろうとして発覚した。
ウマルは彼を殺すことを主張したが預言者はバドルの戦いの参加者として赦す

アリーの書記である**ウバイドッラー・ビン・アブー・ラーフィウ**はアリーが次のように語っているところを聞いたとして伝えている

アッラーの使徒はこう言って我々つまり私とズバイルとミクダードを派遣しました。
ハーフ庭園（注）に行きなさい。
そこにはラクダに乗った女がいます。
そして彼女は手紙を持っていますから、それを彼女から手に入れてきなさい。
そこで我々は出発し馬で急ぎました。
そして我々はその女性に出会ったとき「手紙を出して下さい」と言いました。
しかし彼女は「私は手紙は持っていません」と言いました。
そこで我々はこう言いました。
「手紙を出すか、さもなければ着物を脱ぐかどうかです。」
すると彼女はそれを編み上げた髪の毛の中から取り出しました。
そして我々はそれを持って預言者のところに戻りました。
それでその内容はハーティブ・ビン・アブー・バルタアからマッカにいる何人かの多神教徒にあててアッラーの使徒に関する幾つかの情報を知らせているものでした。
そこでアッラーの使徒はこう言った。
ハーティブよ、これはどういうことだね？
すると彼はこう言いました。
アッラーの使徒よ、私のことであまりにも早急に結論を出さないで下さい。
確かに私はクライシュ族に属する人間でした。
（ここで伝承者の一人スフヤーンは、彼が彼らの同盟関係にあったが、彼らの部族の一員ではなかったと伝えている）。
またあなたと一緒に（ここに）来たムハージル（移住者）の人達の中にも彼らとは血縁者がいて彼らの家族を（マッカで）守ってやっています。

ところで私には彼らの中にそのような血のつながりのある者がいませんので彼らの中に私の家族を守ってくれる者を見つけたいと願ったのです。
決してそれを不信仰から行ったわけでも自分の宗教に離反するために行ったわけでもありません。
イスラームに入信した後で不信仰を受け入れることなど絶対にありません。
すると預言者「彼は正しい」と言った。しかしウマルはこう言った。
アッラーの使徒よ、このムナーフィク（似非信者）の首をはねることをお許し下さい。
すると預言者は次のように言った。
彼はバドルの戦いに参加したではないか？
あなたはアッラーがバドルの戦いに参加した人々について啓示を下したことをあまりよく知らないのですか？
そして彼は「あなた方の好きなようにしなさい。
私はあなた方を赦すでしょう」と言った。
するとアッラーが次の啓示を下された。
「汝ら信仰する者よ、われの敵であり、また汝らの敵である者を友としてはならぬ……」
（第 60 章 1 節）。
ところでアブー・バクルとズハイルの伝えるハディースにはこのクルアーンの一節は伝えられていない。
またイスハークはこの一節をスフヤーンが誦んだとして伝えている。

（注）マッカとマディーナの間にありマディーナからは 12 マイルの所にある所

アリーは次のように伝えた

アッラーの使徒は私とアブー・マルサド・ガナウィーとズバイル・ビン・アッワームを派遣した。
そして私達はみな馬で行きました。
そのとき彼（預言者）は次のように言った。
ハーフの庭園に着くまで急ぎなさい。
そこには一人の多神教徒の女がいてハーティブが多神教徒に宛てた手紙を持っている。
以下は前記と同様のハディースを伝えた。

ジャービルは次のように伝えている

ハーティブの奴隷かアッラーの使徒のところにやって来て彼のことを次のように言って訴えた。
「アッラーの使徒よ、ハーティブは必ず地獄に入るでしょう。」
するとアッラーの使徒は次のように言った。

お前は嘘をついた。
彼は地獄に入ることはない。
何故なら彼はバドルの戦いにもフダイビーヤの遠征にも加わっているのだから。

木の下で預言者と誓約を行った人々(注)の美徳

(注)ヒジュラ六年に預言者はマッカへの小巡礼を思い立ち、ムスリムの一団を同行して敵地マッカに向った。
マッカ側との交渉者にウスマーンを選び送ったが、帰りがあまりにも遅くなり彼はクライシュ族との武力衝突は避けられないとして、この樹の下で同行者の忠誠の誓い(リドワーンの誓い)を行った。
このことに関してはクルアーンの啓示(第 48 章 18 節)があるがその後、この樹自体が人々の間で特別視されるようになり遂に第二代カリフ・ウマルは聖木崇拝を恐れて切り倒した。
現在はこの場所にリドワーン・モスクが建てられている

ウンム・ムバッシルは預言者がハフサのところで次のように言ったところを聞いたとして伝えている

アッラーがお望みなら樹の下で誓約を行った人々の誰一人として地獄に落ちる者はいない。
するとハフサは「アッラーの使徒よ、それは確かですか？」と言った。
すると彼は彼女を叱った。
そこで彼女はこう誦んだ。
「そしてあなた方の内で誰一人としてそれ(地獄の縁)まで行かない者はいないのだ」(第 19 章 71 節)。
すると預言者は次のクルアーンの一節を誦んだ。
「それからわれは主を畏れる敬虔な者は救い出すが不義を行った考はそのままそこに居残りとする」(第 19 章 72 節)。

アブー・ムーサー・アシュアリー（注）とアブー・アーミル・アシュアリーの美徳

（注）イエメンのアシュアリー族出身の教友。
イエメンでイスラームを布教、ウマルの時代にバスラ州知事に任命される。
フゼスターン、ケルマーンを平定。
アリーとムアーウィヤの確執ではアリー側を代表してスィッフィーンの戦い（ヒジュラ 37 年）の和平交渉に臨む。
クルアーンの理解とハディースへの洞察力でも知られている

アブー・ムーサーは次のように伝えている

私は預言者がマッカとマディーナの間にあるジウラーナに留まっていたとき彼のもとにいました。
またそのときビラールが彼と一緒でした。
すると一人の遊牧民がアッラーの使徒のところにやって来てこう言った。
「ムハンマドよ、あなたは私に約束したことを実行しないのですか？」
そこでアッラーの使徒は彼に「良い知らせです」と言いました。
するとその遊牧民は次のように言った。
「あなたは私にその『良い知らせです』を言いすぎます。」
そこでアッラーの使徒はアブー・ムーサーとビラールの方に向かって怒った様子でこう言った。
こいつは良い知らせを拒否してしまった。
だから（彼の代りに）あなた方二人が受けとりなさい。
そこで二人は「アッラーの使徒よ、喜んで受けとります。」と言いました。
それからアッラーの使徒は水の入ったコップを持って来させて彼の両手と顔を洗い、そしてそこに唾を吐きました。
それから彼はこう言った。
それを飲んで、あなた方の顔と胸にふりかけなさい。
そして自分を祝福しなさい。
そこで二人はそのコップを手にし、アッラーの使徒が二人に命じたように行いました。
すると帳の後ろからウンム・サラマが二人に次のように言いました。
「あなた方のお母さん（注）のために少し（水を）残して置きなさい。」
そこで二人は彼女のためにもいくらか残して置きました。

（注）アブー・ムーサーとビラールは兄弟ではない。
また「あなた方のお母さん」はそれぞれの実母という意味ではなくウンム・サラマ彼女自身を指してそう呼んでいるものと思われる

アブー・ブルダは彼の父親が次のように語ったとして伝えている

預言者はフナインの戦いが済んだとき、アブー・アーミルを指揮官とした軍隊をアウタース（注）に遣わしました。
そして彼（アブー・アーミル）はドゥライド・ビン・スィンマと交戦したがドゥライドは殺され、彼の仲間にはアッラーが敗北を与えた。
さてここでアブー・ムーサーが次のように言って伝えています。
預言者はアブー・アーミルと一緒に私も遣わしていました。
さてアブー・アーミルは膝に弓矢を射られました。
彼を射たのはバヌー・ジュシャム族の男でしたがその矢は彼の膝にしっかりと刺さっていました。
それで私はアブー・アーミルの所に行き「叔父さん、誰れがあなたを射たのですか？」と言った。
すると彼はアブー・ムーサーに指で指し示しながらこう言いました。
「あれが私を殺そうとした奴だ。
私を射た奴が見えるだろう。」
そこで私（アブー・ムーサー）はその者を捕まえて殺すことを決意して彼の後を追った。
だが彼は私を見ると私に背を向けて逃げ出しました。
そこで私は彼を追いかけながらこう言った。
「お前は恥かしくないのか？
お前はアラブ人ではないのか？
しっかりと止まることも出来ないのか？」
すると彼は止まりました。
そこで私は彼と向き会った。
そして我々は戦い、私は剣で彼に一撃を与えて彼を殺しました。
それから私はアブー・アーミルの所に戻り「確かにアッラーはあなたの相手を殺しました」と言った。
すると彼は「それならこの矢を抜いてくれ」と言った。
そこで私がそれを抜いたところ、そこから水が止めどもなく流れ出しました。
すると彼はこう言った。
私の従兄弟よ、アッラーの使徒のところに急いで行って私の挨拶を伝え、そして彼にアブー・アーミルがあなたに「私のためにお赦しを請うて下さい」と言っていると伝えてくれ。
それからアブー・アーミルは私を人々の長に任命してから間もなくして亡くなりました。
さて私は預言者のところに行き、彼に会ったがそのとき彼は家にいて縄で編んだ簡易ベッドに横になっていた。
だがその上には敷物が無かったので（注 2）彼の背中と両脇腹には（縄の）跡が残っていました。

そこで私は我々に起ったこととアブー・アーミルに起ったことを彼に伝えました。
そして私はアブー・アーミルが「私のためにお赦しを請うて下さい」と語ったことを彼に伝えた。
するとアッラーの使徒は水をもって来させ、それでウドゥー（小浄）を行いました。
それから彼の両腹の白さが見える位に高く両手を挙げてこう言った。
アッラーよ、親愛なる下僕、アブー・アーミルをお赦し下さい。
それからまた彼はこう言いました。
アッラーよ、終末の日、彼をしてあなたが創造された大部分の者の、あるいは大部分の人々の上にしてやって下さい。
そこで私は「アッラーの使徒よ、私にもお赦しを請うて下さい。」と言いました。
すると預言者はこう祈りました。
アッラーよ、アブドッラー・ビン・カイス（アブー・ムーサーの本名）にも彼の罪をお赦し下さい。
そして彼を終末の日に寛大な入口にお入れ下さい。
さてここでアブー・ブルダはこうも伝えている。
二つの祈りのうちの一つはアブー・アーミルのためのものであり、もう一つはアブー・ムーサーのためのものである。

（注 1）フナインの戦いのあったワジ（涸川）の名前

（注 2）原文テキストでは「その上に敷物かあり」となっているが、文脈からみてむしろ「敷物がなく」かまたは「上掛けだけがあったが」位の意味でなければならないだろう

アシュアリー族の人々（注）の美徳

（注）預言者がイエメン人を誉めたことはよく知られているが、これは主としてアシュアリー部族民を指していると言われている。
彼らはイエメンにおけるイスラームの布教に貢献した他、大征服時代にはエジプトをはじめ各地で活躍。
しかし全体としては反ウマイヤ朝的だった

アブー・ムーサーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

夜暗くなってアシュアリー族の一行がやって来た場合でも彼らがクルアーンを誦めば私は必ずその声を聞き分けます。
また夜間でも彼らがクルアーンを誦む声から彼らの宿泊場所を私は見つけ出します。
それはたとえ私が彼らの昼間の逗留地を見ていなかったとしてもです。
そして彼らの中にはハキーム（注 1）がいます。
彼がもし騎士または敵に出会ったとすれば彼は彼らに向ってこう言うでしょう。
「私の仲間は君達に彼らが到着するまで待っているようにと命じている（注 2）」

（注 1）これは人名なのかまたは①聖者②医者③哲学者などの普通名詞なのか必ずしもはっきりしない。
しかしここでは"部族の賢者"位の意味かもしれない

（注 2）敵に出会ったら自分は一人ではないこと仲間が大勢いるように見せかける言葉を放つことは砂漠の一つの戦術である

アブー・ムーサーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

実にアシュアリー族の者達はもし戦場で食糧が乏しくなったり、あるいはマディーナにおいて彼らの子供達の食べ物が少なくなった時には彼らの持っているものを一枚の着物の中に全部集めてそれから一つの容器に入れて平等に分け合ってともに食べる（注 1）。
彼らは私から（出た者たち）であり、私は彼らから（出た者）である（注 2）。

（注 1）要するに立食風、バイキング風に集団で分ち合って食べたということ

（注 2）彼らは完全に預書者の生き方と一致しているという称賛した表現だが、このハディースからみてアシュアリー族は①クルアーンの詠誦が上手であったこと②質素を旨としていること③賢く慎重で突然の危機にも対処できる知恵が働くこと④融通が利いて利己的でないことなどの美徳がうかがえる

アブー・スフヤーン・ビン・ハルブ（注）の美徳

（注）イスラームに改宗するまではマッカを代表する指導者で、従ってイスラームの敵のリーダーであった人物

イブン・アッバースが伝えている

かつてイスラーム教徒達はアブー・スフヤーンを見ようとしなかったし、また彼と同席しようとしませんでした（注 1）。
それで彼は預言者に「アッラーの使徒よ、私に三つのものをお与え下さい」と言った。
そこで彼は「よろしい」と答えた。
それでアブー・スフヤーンはこう言った。
私は最も美しくまた最高のアラビア女性を持っています。
それはアブー・スフヤーン（自分）の娘のウンム・ハビーバです。
私は彼女をあなたに嫁がせたい（注 2）。
それで預言者が「よろしい」と言うと、アブー・スフヤーンは次のように言った。
それから（息子の）ムアーウイヤだが彼をあなたの書記にして下さい。
それで預言者が「よろしい」と言うと、次にアブー・スフヤーンはこう言った。
かつて私がイスラーム教徒と戦ったように不信者と戦うように命令して下さい。
すると預言者は「よろしい」と答えた。
ところで伝承者の一人アブー・ズマイルは次のように伝えた。
もし彼（アブー・スフヤーン）が預言者にそれらのことを求めていなかったら彼（預言者）はそれらを与えていないでしょう。
なぜならば預言者は求められるものにはいつも「よろしい」としか言わなかったからです。

（注 1）マッカ征服のヒジュラ八年以来彼はイスラームに改宗していたが、人々は彼をかつての敵の頭目として敬遠していたものと考えられる

（注 2）娘のウンム・ハビーバが預言者と結婚した時がヒジュラ六年か八年のこととされているのでこの話しは辻つまが合わないようだ

ジャアファル・ビン・アブー・ターリブ（注 1）とウマイスの娘アスマーウ（注 2）と船の仲間達の美徳

（注 1）アリーの兄で預言者とは従兄弟同士。
マッカ時代の初期に入信し、第二回のエチオピアへの避難団の固長としてエチオピア皇帝にイスラームを代弁する。
ヒジュラ七年にマティーナに戻ったが、翌年のシリアの辺境地で起ったムウタの戦いで戦死した
（注 2）ジャアファルの妻で夫と共にエチオピアに行き夫と共にマディーナに帰ってくる。
その時一絡に行動した仲間を"船の仲間達"と言う。
また彼女は夫の戦死後アブー・バクルと再婚する

アブー・ムーサーが伝えている

私達がイエメンにいた時にアッラーの使徒のヒジュラ（移住）の知らせが私達の耳に届いた。
それで私達も彼のいるところへ向うムハージル（移住者）として出航しました。
そして私達は私と私の二人の兄弟でしたが、私がその中で一番年下でした。
それで兄弟の一人はアブー・ブルダと言い、もう一人がアブー・ルフムでした。
そして私の部族民の何人かの者達、それは 53 人とも 52 人とも言われているが、彼らが我々と同行しました。
それで私達は一艘の船に乗り込みましたが、船ははるかエチオピアのナジャーシー（注 1）の所へと向って航行しました。
そしてそこで私達はジャアファル・ビン・アブー・ターリブと彼の仲間達に出会いました。
するとジャアファルはこう言いました。
アッラーの使徒が私達をここに遣わしたのです。
そして私達にここに滞在するように命じました。
ですからあなた方も私達と一緒にここに滞在しなさい。
そこで私達は彼と一緒にここに滞在しましたが、遂に私達全員が出発し丁度ハイバルが征服された時にマディーナに到着してアッラーの使徒に会いました。
そのとき彼は私達に戦利品の分け前を、あるいはその中から幾らかを与えて下さいました。
ところで彼（預言者）はハイバルの征服に参加しなかった者には誰れにも分け前を与えることがありませんでした。
しかしジャアファルと彼の仲間と一緒にやって来た私達船の仲間に対しては征服参加者とともに分け前を与えました。
それで一部の人々は私達船の仲間に対して次のように言っていました。

私達の方があなた方（船の仲間）よりも前に（マディーナに））ヒジュラ（移住）しました。
さらに彼（アブー・ムーサー）はつづけて次のように伝えた。
ウマイスの娘のアスマーウが預言者の妻の一人ハフサを訪問しました。
彼女は先にエチオピアの王ナジャーシーのもとに移住していて私達と一緒にマディーナにやって来た一人でした。
こうして彼女がハフサのもとにいるとき、ウマルが彼の娘のハフサを訪ねてやって来ました。
そして彼がアスマーウを見た時「これは誰ですか？」と尋ねました。
そして彼女（ハフサ）は「ウマイスの娘アスマーです」と答えました。
するとウマルは「エチオピアからの船の仲間か？」と言いました。
そこでアスマーは「そうです」と答えました。
するとウマルはこんなことを言い出した。
我々はあなた方より先にヒジュラ（移住）をしました。
だから我々はアッラーの使徒に対してあなた方以上に権利を持っている。
すると彼女は怒って次のように言った。
ウマルよ、あなたは事実を語っていません。アッラーに誓って、あなた方はアッラーの使徒と一緒に飢えている人々には食物を与え、無知な人々には説法してきた。
しかし私達は遠く離れたエチオピアの地で身寄りの無い理解者もいない所にいたのです。
これもみなアッラーとその預言者のためでした。
アッラーに誓って、私はあなたが言ったことをアッラーの使徒に述べるまでは飲み食いをしません。
私達は彼の地において常にトラブルに悩まされ、恐れおののいていました。
ですから私はアッラーの使徒にその事を話して尋ねてみます。
アッラーに誓って、私は決して嘘をつきませんし、また（真実から）逸脱するようなこともありません。
ましてや意図して嘘をついたりはしません。
それから預言者がやって来たとき彼女は「アッラーの使徒よ、ウマルはこれこれと語りました」と言った。
するとアッラーの使徒はこう言った。
私にとってあなた方より多くの権利を持つ者は誰もいません。
彼（ウマル）や彼の仲間のヒジュラ（移住）は一回であり、あなた方船の仲間のヒジュラは二回です（注）。
ところで彼女はさらに次のように言った。
かつてアブー・ムーサーと船の仲間が連れだって私の所にやって来て、このハディースについて私に聞いたものでした。
なぜなら彼らにとってこの世でアッラーの使徒が彼らに語ったこの事以上に重要でかつ喜

ばしい事は他になかったからです。
また（伝承者の）アブー・ブルダはアスマーウが次のように言ったとして伝えている。
私はアブー・ムーサーがこのハディースを何度も繰り返して欲しいと私に頼む姿をこの目でしっかりと見ています。

（注 1）エチオピア皇帝のタイトル

（注 2）一担マッカからエチオピアにヒジュラし、ついでエチオピアからマディーナにヒジュラした意か

サルマーン（注 1）とスハイブ（注 2）とビラール（注 3）の美徳

（注 1）ペルシャ生れの教友。
ハンダク（塹壕）の戦いの塹壕戦術は彼の発案によるもの
（注 2）モスルの近くで生れ、幼少時にビザンチン側の捕虜となり彼の地で育つ。
その後奴隷として売られマッカの地に到る。
ギリシャ語に通じ、クルアーン第 2 章 207 節は彼の場合を啓示しているとされている
(注 3)エチオピア系の解放奴隷で美声ゆえに預言者のムアッジンとしてよく知られている

アーイド・ビン・アムルが伝えている

アブー・スフヤーンが一群の人々の中にいたサルマーンとスハイブとビラールの所にやって来た（注）。
すると彼らはこう言った。
アッラーに誓って、アッラーの剣はアッラーの敵（アブー・スフヤーン）の所定の喉元にはとどかなかった。
するとアブー・バクルは「お前達はそれをクライシュ族の長老であり、彼らの長である人に対して言っているのか？」と言ってたしなめた。
そして預言者がやって来たときアブー・バクルは彼にそのことを話しました。
すると預言者はこう言いました。
アブー・バクルよ、多分あなたは彼らに腹を立てたのでしょうが、もしあなたが彼らに腹を立てたとすれば、それはあなたの主に腹を立てたことになるのですよ
それからアブー・バクルは彼らのところにやって来て「兄弟よ、私はあなた方に腹を立てましたか？」と言いました。
すると彼らはこう言った。
「いいえ、親愛なる兄弟よ、アッラーがあなたをお赦しになりますように。」

（注）これはアブー・スフヤーンがイスラームに入信する以前のフダイビーヤの盟約のときのこと

アンサール（支援者達）の美徳

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている。

次のクルアーンの一節は私達アンサールに関して下されたものです。

「汝らの中の二つの軍団が臆病風に吹かれてひるんだ時のことを思い出しなさい。

だがその時アッラーは彼ら双方を守って下されたのだ」（第 3 章 122 節）（注）。

さてこれはバヌー・サリマ支族とバヌー・ハーリサ支族に関するものである。

また私達は「だがその時アッラーは彼ら双方を守って下されたのだ」の一節が啓示されたことを良かったと思っています。

（注）ウフドの戦いのとき、似非信者の頭目アブドッラー・ビン・ウバイに引きずられて一時バヌー・サリマ支族とバヌー・ハーリサ支族が参戦をしぶったがアッラーが彼らを導いて気を取り戻させたの意

ザイド・ビン・アルカムはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アッラーよ、アンサールの人々にお赦しあれ。また彼らの子供達にも、さらにまたその子供の子供達にもお赦しあれ。

またシュウバはこのハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アナスは次のように伝えている

アッラーの使徒はアンサールの人々のために罪の赦しを祈りました。

私は彼が確かに次のように語ったと思います。

アンサールの子供達にも、またアンサールの解放奴隷達にも。

アナスは次のように伝えている

預言者はアンサールの子供達と女達が結婚式の披露宴から帰ってくるところを見ました。

するとアッラーの預言者はすっと立ち上がると次のように言った。

アッラーよ、ご照覧あれ、あなた方は私にとって最も好ましい人々です。

アッラーよ、（ご照覧あれ）あなた方は最も好ましい人々です。

さて彼はそれをアンサールの人々を意図していました。

アナス・ビン・マーリクが伝えている

アンサールの女性の一人がアッラーの使徒のところにやって来ました。

するとアッラーの使徒は彼女と二人だけになると次のように三回繰り返して言いました。

私の命をその手にしているお方に誓って、あなた方は私にとって最も好ましい人々です。

シュウバは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている.

アナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アンサールは私の胃袋と衣装ケース（注）である。

これから人々は増えていくが彼らアンサールは少なくなっていくだろう。

故に彼らの良い点はどんどん取り入れてゆき、彼らの悪い点は赦してやりなさい。

（注）私の家族であり、信頼できる友人であるの意

アンサールの内でも優れた一族

アブー・ウサイドはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アンサールの内でも優れた一族はバヌー・ナッジャール（注）である。
次はバヌー・アブドル・アシュハルそれからバヌー・ハーリス・ビン・ハズラジュ、そしてバヌー・サーイダの順である。
もっともすべてのアンサールの諸支族はそれぞれみな素晴しい。
ところでサアド（教友の一人）はそこで次のように言った。
私はアッラーの使徒が我々より上位に他の者達を置いていたと思う。
すると彼（サアド）は次のように言い返された。
彼（預言者）はあなた方を他の多くの人達の上位に置いていた。

（注）ナッジャール家一門の人々の意で彼らは預言者の父方の遠い親類である。
即ち預言者の祖父アブドル・ムッタリブの母マルマーはマディーナのバヌー・ナッジャール支族の出身であった。
そんなわけで預言者の祖父は幼少の頃はマディーナで育ち、預言者の父アブドッラーは旅の途中で母方の叔父叔母の地マディーナで他界している

アブー・ウサイド・アンサーリーは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アナスは前記と同様のハディースを伝えた。
しかしここではサアドの言葉を伝えていない。

イブラヒーム・ビン・ムハンマド・ビン・タルハが伝えている

私はアブー・ウサイドがイブン・ウトバのところでアッラーの使徒が次のように語ったとして説教したところを聞きました。
アンサール内でも優れた一族はバヌー・ナッジャールであり、そしてバヌー・アブドル・アシュハルとバヌー・ハーリス・ビン・ハズラジュ及びバヌー・サーイダである。
だがアッラーに誓って、もし私（アブー・ウサイド）にそれらに加えてもう一つ選べるなら自分の一族をきっと選んだでしょう。

アブー・ウサイド・アンサーリーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アンサールの内でも優れた一族はバヌー・ナッジャールです。
それからバヌー・アブドル・アシュハル、次にバヌー・ハーリス・ビン・ハズラジュそれからバヌー・サーイダです。
もっともアンサールの全ての一門はみな優れているが。

ところでアブー・サラマはアブー・ウサイドが次のように言ったとして伝えている。
私（アブー・ウサイド）がアッラーの使徒について嘘をついていると疑いますか？
もし私が嘘をついたとしたら私はきっと自分の一族であるバヌー・サーイダ支族から言いはじめたことでしょう。
そしてこの話しがサアド・ビン・ウバーダの耳に入ると、彼は自身の中で自らのランク付けをしてこう言った。
我々はその四つの内の最後に位置するとはランクを下げられたものだ。
さあ私のロバに鞍を乗せてくれ、私はアッラーの使徒のところへ行かなければならない。
すると彼の兄弟の息子のサハルが次のように彼に言ってたしなめた。
あなたはアッラーの使徒の言われたことを取り消そうとなさるのですか？
アッラーの使徒は最も良くご存知でおられる方なのに。
あなたの考えでは四つだけのうちの四番目ということなのですね？
しかし彼は（出かけて行き）戻って来て次のように言った。
アッラーと彼の使徒は最もよくご存知だ。
そして彼は彼のロバの鞍を解くように命じた。

アブー・ウサイド・アンサーリーはアッラーの使徒が次のように言ったところを聞いたとして伝えている

最良のアンサール、あるいはアンサールの内でも優れた一門は……以下は前記と同様のハディースを伝えた。
ただしここでは彼はサアド・ビン・ウバーダの話しは伝えていない。

アブー・フライラは次のように伝えている。

アッラーの使徒はムスリムの大きな集会で次のように言いました。
私はあなた達にアンサールの内でも最も優れている一族についてお話ししましょう。
すると彼らは「アッラーの使徒よ、そうして下さい」と言いました。
そこでアッラーの使徒は「それはバヌー・アブドル・アシュハル支族である」と言った。
すると彼らは「アッラーの使徒よ、それから誰ですか？」と言い、そこで彼は「それからバヌー・ナッジール支族である」と言った。
すると彼らは「それから誰ですか？」と言い、彼は「それからバヌー・ハーリス・ビン・ハズラジュ支族である」と言った。
それからまた彼らは「それから誰ですか？」と言い、彼は「それからバヌー・サーイダ支族である」と言った。
すると彼らはさらに「それから誰ですか？」と言った。
そこで彼は「それから全てのアンサールの支族は優れている」と言った。
するとサアド・ビン・ウバーダは怒って立ち上がった。

そしてアッラーの使徒が彼ら一族に言及した際に彼は「我々は四つの内の最後です
か？」と言って（このことで）アッラーの使徒と話しあおうとした。
しかし彼の支族の一人がこう言った。
「座っていろ。
お前はアッラーの使徒がお前の部族をベストフォーとして述べられたことに不満なのか？
彼が言及することもなくそのままになった支族の方が彼が言及した支族よりもずっと多い
のだよ」
それでサアド・ビン・ウバーダはアッラーの使徒に話すことを止めました。

アンサールは預言者に随伴しつくしたこと

アナス・ビン・マーリクは伝えている

私はジャリール・ビン・アブドッラー・バジャリーと一緒に旅に出ました。

彼は私によくつくしてくれたので私は「何もしなくて良いのだよ」と彼に言いました。

しかし彼はこう言いました。

私はかつてアンサールの人々がアッラーの使徒にこうしている所を見ました。

それで私はアンサールの誰れにでもよくつくそうとアッラーに誓いました。

またイブン・ムサンナーとイブン・バッシャールはそれに加えて「ジャリールはアナスよりも年寄りであった」と伝えた。

またイブン・バッシャールは「彼はアナスよりも年をとっていた」と伝えた。

預言者のギファール族とアスラム族への祈り（ドアー）

アブー・ザッルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ギファール族はアッラーがその罪をお赦しになった部族です。

またアスラム族はアッラーがそれを安泰にされた部族です。

アブー・ザッルはアッラーの使徒が彼に向って次のように言ったとして伝えている

あなたの部族の所に行ってアッラーの使徒が次のように言ったと伝えなさい。

アスラム族はアッラーが安泰を与えた部族であり、またギファール族はアッラーがその罪をお赦しになった部族です。

シュウバは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

このハディースは異った伝承者経路を経て伝えられているがそれらの全てはジャービルが次のように伝えたとしている

預言者は「アスラム族はアッラーが安泰を与えた部族であり、またギファール族はアッラーがその罪をお赦し下さった部族である」と語った。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アスラム族はアッラーが安泰を与えた部族であり、またギファール族はアッラーがその罪をお赦しになった部族である。

ただしそれを言ったのはこの私ではなくアッラーがそう言ったのです。

クフアーフ・ビン・イーマーウ・ギファーリーはアッラーの使徒が礼拝の中で次のように言ったとして伝えている

アッラーよ、ラフヤーン族とリウル族とザクワーン族とアッラーとその使徒を裏切ったウサイヤ族に呪いあれ。

しかしギファール族はアッラーがその罪をお赦しになった部族でアスラム族はアッラーが安泰を与えて下さった部族です。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ギファール族はアッラーがその罪をお赦し（ガファラ）になった部族であり、またアスラム族はアッラーがそれに安泰（サーラマ）を与えた部族です。

そしてウサイヤ族はアッラーとその使徒に反抗（アサー）した部族です。

イブン・ウマルは前記と同様のハディースを預言者からの伝聞として伝えている。
またサーリフとウサーマの伝えるハディースではこう伝えた

アッラーの使徒はそのことをミンバル（説教台）の上で語った。

またイブン・ウマルは「私はそのようにアッラーの使徒が言っているところを聞いた」と伝えた。

ギファール族とアスラム族とジュハイナ族とアシュジャウ族とムザイナ族とタミーム族とダウス族とタイイ族の美徳より

アブー・アイユーブはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アンサールとムザイナ族とジュハイナ族とギファール族とアシュジャウ族とバヌー・アブドッラーの一族の者（注）は私の特別な支援者であり、アッラーとその使徒は彼らの守護者である。

（注）ガトファーン部族中のバヌー・アブドル・ウッザ支族のことだが、預言者はウッザが偶像の名前であるためにこれをアッラーに変えてアブドッラーと改名して呼んだ

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えた

クライシュ族とアンサールとムザイナ族とジュハイナ族とアスラム族とギファール族とアシュジャウ族は私の支持者達であり、彼らにはアッラーとその使徒以外に守護者はいない。

サアド・ビン・イブラームは前記と同様のハディースを僅かに表現を少し変えただけで伝えている。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

アスラム族とギファール族とムザイナ族とジュハイナ族の者（注）はタミーム族やアーミル族及び彼らの同盟部族のアサド族やガトファーン族よりも優れている。

（注）つまりこれらの部族は早々とイスラームに改宗し、その上他の部族民と比べると温和で親切でモラルの点でも一段と優れていた

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ムハンマドの魂を手中にしている者に誓って、ギファール族とアスラム族とムザイナ族とジュハイナ族の者あるいはジュハイナ族とムザイナ族の者は最後の審判の日アッラーのもとでアサド族やタイイ族やガトファーン族よりもきっと優れているだろう。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アスラム族とギファール族と一部のムザイナ族とジュハイナ族、あるいは一部のジュハイナ族とムザイナ族は最後の審判の日（私アブー・フライラは彼がそう言ったと思いますが）、アッラーのもとではアサド族とガトファーン族とハワーズィン族とタミーム族よりもきっと優れているだろう。

イブン・アブー・バクラは彼の父からの伝聞として次のように伝えている

アクラウ・ビン・ハービスがアッラーの使徒のところにやって来てこう言った。

巡礼者達を襲って略奪をしていたアスラム族とギファール族とムザイナ族（伝承者のムハンマドはここで私はジュハイナ族だと思うがとしている）これらの者があなたに忠誠を誓ったのです。

するとアッラーの使徒は次のように言った。

あなたはアスラム族とギファール族とムザイナ族（伝承者のムハンマドはそれをジュハイナ族だと思っているが）がタミーム族とアーミル族とアサド族とガトファーン族よりも優れているとするならば彼ら（タミーム族以下の部族）は失敗をし、損をしたことになると考えたわけですね？

そこで彼は「はいそうです」と答えた。

するとアッラーの使徒はこう言った。

私の魂を手中にしているお方に誓って、彼ら（前者）は確かに彼ら（後者）よりも優っている。

またイブン・アブー・シャイバのハディースには“（伝承者の）ムハンマドは疑っているが”という挿入句はない。

ムハンマド・ビン・アブドッラー・ビン・アブー・ヤークーブ・ダッビーが前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経てわずかに言葉を変えて伝えている。

アブー・バクラは父からの伝聞としてアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アスラム族とギファール族とムザイナ族とジュハイナ族はタミーム族やアーミル族よりもまたその同盟者であるアサド族とガトファーン族よりも優っている。

アブー・ビシュルは前記のハディースと別の伝承者経路を経て伝えている。

アブー・バクラは父からの伝聞としてアッラーの使徒が次のように大声で語ったとして伝えた

あなた方はもしジュハイナ族やアスラム族やギファール族がタミーム族やアブドッラー・ビン・ガトファーン族やアーミル・ビン・サアサア族よりも優っているとしたらどう考えますか？

すると彼らは「アッラーの使徒よ、彼らは失敗して損をしたのです」と言った。

すると彼は次のように言った。

されば彼ら（アスラム族以下の前者）の方が確かに優っている。

ところでアブー・クライブの伝えるところでは「あなた方はもしジュハイナ族とムザイナ族とアスラム族とギファール族の方が……」となっている。

アディーユ・ビン・ハーティムは伝えている

私はウマル・ビン・ハッターブの所にやって来たとき、彼は私にこう言いました。
アッラーの使徒と彼の教友達の顔を喜びで明るくした最初のサダカ（喜捨）はタイイ族のそれでした。
あなたはそれをアッラーの使徒にもたらしました。

アブー・フライラは伝えている

トゥファイルと彼の仲間がやって来て次のように言いました。
アッラーの使徒よ、ダウス族は信仰を拒み、あなたを裏切りました。
どうかアッラーに彼らへの呪いをかけて下さい。
すると「ダウス族よ、滅びてしまえ」と（誰かが）言った。
そこで預言者はこう言った。
アッラーよ、ダウス族を正しくお導き下さい。
そして彼らを私に向けて下さい。

アブー・フライラはこう伝えている

私はアッラーの使徒から三つのことを聞いて以来タミーム族を好ましく思い続けています。
即ちアッラーの使徒はこう言っています。
彼らこそウンマの中でダッジャール（注）に対抗する最も強力な者たちである。
また彼らのサダカ（喜捨）が届いたとき項言者は「これは我々の仲間のサダカです」と言いました。
またその時アーイシャのもとにタミーム族の奴隷の少女がいました。
そこでアッラーの使徒はこう言いました。
彼女を解放してやりなさい。
なぜなら彼女はイスマイールの子孫であるからです。

アブー・フライラはまた次のようにも伝えている。

私はアッラーの使徒が彼らについて語っている三つの事柄を聞いてからタミーム族を好ましく思い続けています。
そして前記と同様のハディースを伝えた。

アブー・フライラは次のように伝えた

私はアッラーの使徒からタミーム族について三つの特色を聞いて以来、彼らを好ましく思い続けています。
そして前記と同様のハディースを伝えた。
しかしここでは彼はアッラーの使徒が「彼らは戦場で最も激しく戦う人々である」と語ったと

して伝えた。
ただし彼はダッジャール（注）については何も言及しなかった。

（注）終末が近くなると現われるとされている悪の権化

優れた人々について

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方は人々が鉱物（注 1）のようなものであることを知るでしょう。

なぜならジャーヒリーヤ時代（イスラーム以前）に優れた人々はイスラーム時代においても、もし彼がそれ（イスラーム）を理解するなら一層優れた人々であるからです。

そしてあなた方はこのこと（イスラーム）について最も優れた人々はそれに入る前はそれを最も嫌っていた人々（注 2）であったことを知るだろう。

またあなた方は最も悪い人々は二つの顔をもった人々であることを知るでしょう。

彼らはこちらに良い顔をしてまたあちらにも良い顔をする人々である。

（注 1）ここでは血筋、血統の意味

（注 2）ウマルのようにイスラームに入信する以前はイスラームの最大の敵対者であった

アブー・フライラは前記と同様のハディースを伝えているがアブー・ズルアとアアラジュの伝承では少し言葉の言いまわしが違っている。

クライシュ族の女性の美徳

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えた

最も優れた女性はラクダに乗る女性つまりアラブの女性（注）である。

（ここで一人の伝承者は「クライシュ族の信仰深い女性達である」と伝えている）。

彼女達は嫁入り前でも幼い孤児の面倒をよくみてやり、（嫁入り後は）夫の財産を良く処理します。

（注）アラブの女性の意味。

またここではアラブの女性の中でも最も優れている女性はクライシュの女性であると考えられている

アブー・フライラは前記と同様のハディースを伝えているが、ここでは「子供が幼い時に面倒をよくみる」と伝えているが「孤児」とは伝えていない。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語っているところを聞いたとして伝えた

クライシュ族の女性はラクダに乗る女性（アラブの女性）の中で最も優れている女性である。

なぜなら子供の面倒を良くみるし夫の財産を良く管理するからである。

またアブー・フライラはこの後につづけて「イムラーンの娘マルヤム（聖母マリヤ）は一度もラクダに乗ることはありませんでした」と言った。

アブー・フライラは次のように伝えた

預言者はアブー・ターリブの娘ウンム・ハーニウに結婚の申し込みをしました。

すると彼女はこう言いました。

アッラーの使徒よ、私はもう年をとってしまいました。

それに私には家族があります。

するとアッラーの使徒は「最も優れた女性は（ラクダに）乗った女性です」と言った。

それから前記と同様のハディースを伝えた。

しかしここでは彼は「彼女達は子供が幼い時に良く面倒をみる」と伝えた。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えた

ラクダに乗った女性（アラブ女性）の中で最も優れているのはクライシュ族の信仰深い女性である。

彼女達は子供が幼い時に良く面倒をみるし、また彼女達の夫の財産を良く管理する。

アブー・フライラは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

預言者が教友たちの間に定めた兄弟姉妹関係

アナスが次のように伝えている

アッラーの使徒はアブー・ウバイダ・ビン・ジャッラーフ（アンサール）とアブー・タルハ（ムハージル）の間に兄弟関係を結ばせた。

アーシム・ビン・アフワルが伝えている

アナス・ビン・マーリクは次のように尋ねられた。

アッラーの使徒が「イスラームにはヒルフは無い」（注）と言ったということを聞いていますか？

するとアナスは次のように答えた。

アッラーの使徒は彼の家でアンサールとクライシュ族を誓いによって兄弟関係にしました。

（注）他人同上が誓いによって兄弟関係を結ぶうちで遺産相続を含んだ兄弟関係の誓いは無効の意

アナスは次のように伝えている

アッラーの使徒はアンサールとクライシュ族（の信徒）とを彼の家で誓いによって兄弟関係にしました。

ジュバイル・ビン・ムトイムはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えた

イスラームにはヒルフ（遺産相続を含んだ義兄弟関係）は無い。

しかしジャーヒリーヤ時代に行われていた（良いことに対する）ヒルフについてはイスラームはそれを強化した。

預言者の存在は彼の教友に対する保証であり、彼の教友の存在はウンマに対する保証であることの証し

アブー・ブルダは彼の父からの伝聞として次のように伝えている

我々はアッラーの使徒と共にマグリブ（日没）の礼拝を行いました。

その後我々はもしこのまま座っていて彼と一緒にイシャー（夜）の礼拝を行えばどんなに良いであろうと話しました。

そこで我々はそのまま座っていました。

それから彼が我々のところに再びやって来たとき「あなた方は未だここにいたのですか？」と言った。

そこで我々は次のように言いました。

アッラーの使徒よ、我々はあなたと一緒にマグリブの礼拝を行いました。

その後で我々はあなたと一緒にイシャー（夜）の礼拝をするまでここに座っていようと話しあったのです。

すると彼は「あなた方は良いことをしました」あるいは「あなた方は正しいことをした」と言いました。

そして彼は顔を天空に上げると（当時彼はよく顔を天空に向けましたが）こう言った。

星は空の存在を保証している。

もし星.が無くなれば空には定められたものがやって来る（終末）。

私は私の教友達の保証をしている。

もし私が居なくなれば彼らには定められたものがやって来る。

そして私の教友は私のウンマの保証をしている。

もし彼らが居なくなれば私のウンマには定められたものがやって来る（注）。

（注）つまり預言者の他界とともに教友達の間で戦乱が引き起こされ、教友達が皆この世を去った後にウンマの分裂が引き起るという予見

教友達の美徳と彼らの後に続く者達の美徳とさらにその後に続く者達の美徳

アブー・サイード・フドリーは預言者が次のように語ったと伝えている

やがて、人々の上に彼らがそれぞれの集団で戦う時がやって来るであろう。

そして彼らには「あなた方の中にアッラーの使徒を見た人はいますか？」と呼びかけられる。

それで彼らが「はい」と答えると勝利は彼らの側にもたらされるであろう。

その後また人々がそれぞれの集団となって戦うであろう。

そして彼らにはこう呼びかけられる。

あなた方の中にアッラーの使徒の教友を見た人はいますか？

そこで彼らが「はい」と答えると勝利は彼らの側にもたらされるであろう。

またその後人々はそれぞれの集団で戦うであろう。

そして彼らは「あなた方の中にアッラーの使徒の教友と同席した人を見た人はいますか？」と呼びかけられる。

そこで彼らは「はい」と答えると勝利は彼らの側にもたらされるであろう。

アブー・サイード・フドリーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

やがて人々の上に彼らの間で戦いのために部隊が派遣されるそんな時がやって来るであろう。

そして彼らは「お前たちの中に預言者の教友が一人でもいるかどうかよく見ろ」と言うであろう。

そしてその人物が存在すると彼（教友）のおかげで彼らの側に勝利がもたらされるであろう。

その後また部隊の派遣がなされるであろう。

そして彼らは「預言者の教友を見た者はいるか？」と言うであろう。

そして（その人物がいれば）彼のおかげで彼らに勝利がもたらされるであろう。

その後、三度目の部隊の派遣がなされるであろう。

そして彼らは「お前たちの中に預言者の教友を見た者を見た者がいるかよく見ろ」と言うであろう。

その後、四度目の部隊の派遣がなされる。

そして「お前達の中に預言者の教友を見た者を見た者が誰れかいるかよく見ろ」と言われる。

そしてその人物が存在すると勝利が彼のおかげで彼の側にもたらされるであろう。

アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして次のように伝えている

私のウンマで最も優れているのは私に続く世代の人々（教友）である。
その次は彼らに続く世代の人々である。
またその次はさらに彼らに続く世代である。
そしてその後には証言（シャハーダ）を誓約（ヤミーン）の前に行ったり、証言の前に誓約を行ったりする人々が出現するであろう（注）。
またハンナードは彼のハディースで「世代」という言葉を伝えなかった。

（注）証言と誓約を同時に行うことはよくないとされている。
従ってこの場合の証言者も誓約者も不完全ということになる

アブドッラーは次のように伝えている

アッラーの使徒は「どの人々が優れていますか？」と尋ねられると、彼は次のように答えた。
私の世代の人々である。
それから彼らに続く人々である。
それからまたさらに彼らに続く人々である。
そしてその後に来る人々の中には証言が誓約の前に明らかにされたり、誓約が証言の前に明らかにされたりするようになるであろう。
またイブラヒームは次のようにつけ加えて伝えている。
かつて彼らは私達が小さかった頃、誓約と証言を同時にすることを禁じていました。

アブー・アフワスとジャリールは前記と同様のハディースを伝えている。
しかしこの二人のハディースでは「アッラーの使徒は尋ねられた」という言葉は伝えられていない。

アブドッラー（ビン・マスウード） は預言者が次のように語ったとして伝えた

最も優れている人々は私の世代の人々である。
その次に来る者は彼らに続く人々である。
そしてその次に来る者はその人々に続く人々である。
それから彼がこのように第三世代まで言及したのか第四世代までであったのか私にはよく分かりませんが（ともかく）その後でこう言った。
それから彼らの後に証言を誓約の前に行ったり、誓約を証言の前に行ったりする世代が続いてやって来るだろう。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私のウンマで最も優れているのは私が紹命された世代の人々である。

その次は彼らに続く人々である。

さて私（アブー・フライラ）には彼がそれを第三世代まで言及したかどうか分かりませんのでアッラーのみご存知ですが、いずれにせよさらに彼（預言者）は次のように言った。

それから肥大化（大食）を好む人々が後に続いてやって来るであろう。

そして彼らは証言を求められる前に証言してしまうであろう（注）。

（注）別のハディースに「最良の証言は自発的に行う証言である」というものがあるがここでは必要以上に性急で判断を狂わせるような特別なケースの悪い証言のことを念頭に置いているものと思われる

前記と同様のハディースが**アブー・フライラ**によって別の伝承者経路を経て伝えられているが、ここではアブー・フライラはこう伝えている

だが私は彼が「そして次に」を二回かそれとも三回言ったのか分からない。

イムラーン・ビン・フサインはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方の中で最も優れている人々は私の世代の人々である。

その次は彼らに続く人々である。

その次はそれに続く人々である。

そしてその次はさらにそれに続く人々である。

またイムラーンは「私はアッラーの使徒が彼の世代の後に続く人々についてさらに二世代まで一言及したのかあるいは三世代まで言及したのか分からない」と言った。

さらに彼は次のように付け加えた。

それから彼らの後に証言を求められないのに証一言したり、裏切り者で信頼できない人々や、誓いを立てながらそれを実行しない人々や、肥満体の人（大食漢）が出現するであろう。

シュウバは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えているが彼はそこで「私は彼の世代の後に二世代について言及したかそれとも三世代に言及したのか覚えていない」と言った。
またシャバーバは次のように伝えている。
私はザフダム・ビン・ムダッリブからこのハディースを聞いたが、彼はある用事で私の所に馬に乗ってやって来た。
そして彼はイムラーン・ビン・フサインから聞いたとして前記のハディースを私に語った。
この他伝承者によっては若干の表現上の相違がみられる。

イムラーン・ビン・フサインは前記と同様のハディースを他の伝承者の経路を経て伝えているが、ここでは次のように伝えている

このウンマで最も優れているのは私が紹命された世代の人々である。

それからその後に続く人々である。

またアブー・アワーナのハディースではそれに加えて次のように伝えている。

はたして彼が第三世代まで述べたのかどうかはアッラーが最もよく知りたもう。

またカターダからのヒシャームの伝えるハディースではそれに加えてこう伝えている。

彼らは誓いを求められないのに誓いを立てるであろう。

アーイシャは次のように伝えている

ある男が預言者にどの人々が優れているのかを尋ねました。

そこで彼はこう言いました。

それは私が生きている世代の人々である。

その次は次に来る第二世代の人々である。

それからその次は第三世代の人々である。

「今日生きている人々（預言者とは同時代人）が 100 年後も生さていることはない」という預言者の言葉の意味

アブドッラー・ビン・ウマルが伝えた

アッラーの使徒は彼の晩年のある夜、私達と一緒にイシャー（夜間）の礼拝を行いました。
彼は礼拝の最後の挨拶儀礼（タスリーム）を終えると、立ち上がってこう言いました。
あなた方は今夜をよく見とどけましたか？
これより 100 年後の初頭には現在この地上に生きている者で誰れ一人として生きていないのですよ。
そしてイブン・ウマルはつづけて次のように言いました。
人々は彼らがこの手のハディースを語る中でアッラーの使徒のその言葉を誤解しました。
しかしアッラーの使徒が言ったことは「今日地上にいる者が誰一人として生存しないだろう」ということであり、彼はその言葉によってその世代は終ってしまうことを言いたかったのです（注）。

（注）つまり終末が来ると言った訳ではない

ズフリーは前期と同様のハディースをマァマルを典拠として伝えている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは預言者が彼の死の一月前に次のように語っているところを聞いたとして伝えている

あなた方はいつも終末の日（がいつ来るか）について尋ねるがそれを知っているのはアッラーだけである。
私はアッラーに誓って、現在この地上に生を受けた者で 100 年後も存在している者はいないと宣言する。
またイブン・ジュライジュは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えているがここでは「彼の死の一月前に」の一節は述べられていない。

ジャービル・ビン・アブドッラーは預言者が彼の死の一月前かそのくらいに次のように語ったとして伝えている

今日、生を受けた者で 100 年たっても生き続けている者はいない。またアブドル・ラフマーンはジャービル・ビン・アブドッラーからの伝聞として預言者が次のように語ったとして前記と同様のハディースを伝えたが、彼はそれを解説して「それは人の寿命が短かいためである」と言った。

スライマーン・タイミーは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アブー・サイードは次のように伝えている

預言者がタブークの戦いから凱旋して来たとき、人々は彼に終末の日について尋ねた。

そこでアッラーの使徒はこう言った。

この地上で今日生を受けた者で 100 年目を迎える者はいない。

ジャービル・ビン・アブドッラーは預言者が「生を受けた者が 100 歳に到達することはない」と語ったとして伝えた。

そこでサーリムはこう言った

私達はそれを彼（ジャービル）の所で話した。

すると彼は「それはその当時に生を授けられたすべての魂のことである」と言った。

教友を中傷することは禁止

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私の教友達を中傷してはいけない。

私の教友たちを中傷してはいけない。

私の魂を手中にするお方に誓って、たとえあなた方の一人がウフド山と同じ位に金を費しても それは彼ら教友達の一人が費す１ムッド（注）の金またはその半分にも値しない。

（注）各種の度量基準であるが、いずれにせよわずかな量を意図している

アブー・サイードが伝えている

かつてハーリド・ビン・ワリードとアブドル・ラフマーン・ビン・アウフの間にあることが起った。

そこでハーリドは彼を中傷した。

するとアッラーの使徒はこう言った。

私の教友達を中傷してはいけない。

なぜならたとえあなた方の一人がウフド山と同じ位金を費したとしても、それは彼ら一人が費す１ムッドの金またはその半分にしか値しないからだ。

アアマシュは前記と同様のハディースを伝えたがシュウバとワキーウのハディースにはアブドル・ラフマーン・ビン・アウフとハーリド・ビン・ワリードへの言及はない。

ウワイス・カラニー（注）の美徳

（注）教友であるが預言者には直接面会していない。
荒野で修道生活を送ったことで知られている。
二代ウマルの時代にマディーナにやって来て、ついでクーファに移り住む。
スッフィーンの戦いではアリー側に加わった

ウサイル・ビン・ジャービルはこう伝えている

クーファの住民が（カリフ）ウマルのもとへ使節を送った。
その中にはかねてよりウワイスを嘲笑していた人物が加わっていた。
そこでウマルは「ここにはカラン族の者はいますか？」と言った。
すると、その男がやって来た。それでウマルはかつて預言者が次のように語ったと言った。
あなたは方の所にイエメンからウワイスと呼ばれる男がやって来るだろう。
彼はイエメンには母親だけを残してやって来るだろう。
彼はかつて（癩病性）白子班点の皮膚だったがアッラーに祈ってそれらを取り除いてもらった。
ただしその痕跡がディーナール金貨かあるいはディルハム銀貨の大きさで一ヶ所だけ残っている。
ですからあなた方のうちで彼に会うことがある者は彼に頼んであなた方の罪の赦しを求めて祈ってもらいなさい。

ウマル・ビン・ハッターブはアッラーの使徒が次のように語っているところを聞いたとして伝えている

教友達の次の世代の人々の中で最も優れている人はウワイスと呼ばれる男です。
彼には母親があり、また彼にはかつてかかった癩病の白子班点の跡がある。
さて彼のそばを通りかかる時には彼をしてあなた方の罪をお赦し下さるようにとアッラーに祈らせたらいいでしょう。

ウサイル・ビン・ジャービルは伝えている

かつてウマル・ビン・ハッターブは彼のもとへイエメンの住民からなる支援部隊がやって来るたびに彼らに向って「あなた方の中にウワイス・ビン・アーミルがいますか？」と尋ねたものでしたが遂に彼と会うことになりました。
それでウマルは「あなたがウワイス・ビン・アーミルですか？」と言った。
すると彼は「はいそうです」と答えると、ウマルはさらにこう尋ねた。
「あなたはムラード部族のカラン支族出身ですか？」
そこで彼は「はい」と答えると、ウマルはさらに次のように尋ねた。

「かつてあなたは癩病に罹っていたがそれでディルハム銀貨大の跡を残すだけに治りましたか？」
すると彼は「そうです」と答えたが、さらにウマルは「あなたには（まだ）母親がいますか？」と尋ねました。
それで彼は「はい」と答えた。
そこでウマルはアッラーの使徒が次のように語ったところを聞いたとして次のように言った。
あなた方の所にウワイス・ビン・アーミルがイエメンの住民からなる支援部隊と一諸にムラード族のカラン支族からやって来るだろう。
かつて彼は癩病に罹っていたがディルハム銀貨大の跡を残すだけに治りました。
そして彼には母親があり、彼は彼女を大切にしていました。
もし彼がアッラーに誓うならば、アッラーは必ずそれを叶えて下さる。
ゆえにもしあなたがアッラーから罪の赦しを請うことを彼に依頼できるものならそうしなさい。
そしてさらにウマルは「こういう訳ですからどうか私のために罪の赦しを求めて下さい」と言った。
そこでウワイスは彼のためにアッラーに赦しを求めてやりました。
それからウマルは彼に「あなたはどこへ行きたいのですか？」と尋ねました。
すると彼は「クーファ」ですと答えた。
それでウマルは「そこの知事に手紙を書いてあげましょうか？」と尋ねた。
しかしウワイスは、「私はそこの貧しい人達の中で生活したいのです」と答えた。
さて伝承者のウサイルはさらにつづけて次のように伝えている。
翌年クーファの上層階級の一人の男が巡礼を行いました。
そのとき彼はウマルに面会しました。
そこでウマルは彼にウワイスのことを尋ねました。
すると彼「私は彼を乏しい食糧と貧しい暮らしのまま放置しています」と言った。
そこでウマルはこう言った。
私はアッラーの使徒が次のように語っているところを聞きました。
あなた方の所にウワイス・ビン・アーミルがイエメンの住民の支援部隊と一緒にムラード部族のカラン支族からやって来るだろう。
彼はかつて癩病に罹っていたがディルハム銀貨大の跡を残すだけに治った。
そして彼には母親があり、彼は彼女を大切にしていた。
もし彼がアッラーに誓うならば、アッラーは必ずそれを叶えるであろう。
ゆえにもしあなたがアッラーからの罪のお赦しを請うことを彼に依頼できるものならそうしなさい。
こうして彼（クーファの上層階級の一人）はウワイスの所にやって来ると「どうか私のために（アッラーに）罪の赦しを請うて下さい」と言いました。

するとウワイスはこう言いました。
あなたはまさに信仰深い旅（巡礼）から戻られたばかりです。
どうかあなたこそ私のためにお赦しを請うて下さい。
だが彼は「いいえ、どうか私のためにお赦しを請うて下さい」と繰り返した。
するとウワイスはまたこう言いました。
あなたはまさに信仰深い旅から戻られたばかりです。
どうかあなたこそ私のためにお赦しを請うて下さい。
そして彼（ウワイス）は続けて「あなたはウマルに会いましたか？」と尋ねました。
そこで彼が「はい」と答えると、彼（ウワイス）は初めて彼のために赦しを請いました。
そこで人々は彼の宗教的立場に気付きました。
しかし彼の流儀に従ってその場を離れてしまいました。
また伝承者のウサイルはさらに次のように付け加えて伝えている。
私は彼（ウワイス）に外套を着せて上げました。
それで人々が彼を見た時にはいつも「ウワイスの持っているあの外套はどこから手に入れたのだろうか？」と尋ねるのでした。

預言者のエジプト住民への遺言

アブー・ザッルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方はキーラート（お金の単位）（注 1）という言葉が使われている土地をやがて征服するであろう。

あなた方はその住民には恩恵をもって臨みなさい。

なぜなら彼らには庇護と血縁の権利（注 2）があるからです。

そしてもし二人の男がブロック置場で争っているところを見た時にはそこから離れなさい。

またアブー・ザッルはつづけて次のように言った。

私はシュラフビール・ビン・ハサナの二人の息子のラビーアとアブドル・ラフマーンがブロック置場で争っているそばを通りかかりました。

それで私はこの地から離れました。

（注 1）カラットの語源

（注 2）北アラブは預言者イスマイールの子孫と言われている。

イスマイールの実母はエジプト人の女性ハージャル（ハガル）であるとされている

アブー・ザッルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた達はエジプトの地を征服するであろう。

そこはキーラートという言葉がよく使われるがあなた達はそこを征服したらその住民によくしてやりなさい。

なぜなら彼らには庇護と慈悲を受ける権利があるからです。

また彼らには庇護と血縁または庇護と縁戚の権利（注）があるからです。

そしてもしあなたが彼の地のレンガ置場で二人の男が争うところを見たならばあなたはそこを出なさい。

さらにアブー・ザッルは次のように伝えている。

それで私はシュルハビール・ビン・ハサナの息子のアブドル・ラフマーンが兄弟のラビーアとレンガ置場で争っている所を見ましたので、私はこの地を離れることになった。

（注）幼折した預言者の息子イブラヒームの実母はビザンチン帝国エジプト州知事マカウカスが預言者に贈ったコプト女性のマリヤだったから

オマーンの住人の美徳

アブー・バルザが次のように伝えている

アッラーの使徒はアラブのある部族に使者を送りました。

しかし彼らはその使者を嘲笑し攻撃しました。

それで彼はアッラーの使徒の所に戻ってくると、そのことを彼に報告した。

するとアッラーの使徒はこう言いました。

もしあなたがオマーンの住人の所に行ったのであれば、彼らはあなたを嘲笑することも、

ましてや攻撃することもなかったであろうに。

サキーフ族の大嘘つきとその大量虐殺者について

アブー・ナウファルは次のように伝えている

私はアブドッラー・ビン・ズバイルがマディー坂（マッカにある坂道名）にはりつけにされているところを見ました（注）。

そしてクライシュ族や他の人々が彼のそばを通り過ぎて行きました。

それでアブドッラー・ビン・ウマルが彼のそばを通り過ぎたとき、彼は立ち止まってこう言った。

フバイブの父よ（イブン・ズバイルの別称）。

あなたに平安がありますように。

フバイブの父よ。

あなたに平安がありますように。

フバイブの父よ。

あなたに平安がありますように。

ところで確かに私はアッラーに誓って、あなたにそのことを禁じていました。

確かに私はアッラーに誓って、あなたにそのことを禁じていました。

確かに私はアッラーに誓って、あなたにそのことを禁じていました。

確かにあなたは私の知る限りよく断食をし、礼拝を行い、肉親を大切にしてきました。

確かにアッラーに誓って、あなたがその頭目である信仰集団は本当に素晴しい集団です。

それからアブドッラー・イブン・ウマルは立ち去った。

そしてまもなくアブドッラーの取った立場と彼の言葉はハッジャージュ・ビン・ユース（注 2）の耳に届いた。

そこで彼は使者をアブドッラー・ビン・ズバイルの（遺体をさらしてある）所に送った。

そして彼（の遺体）はぶら下げられていた木の幹から下ろされて、ユダヤ人の墓に投げ込まれた。

それからハッジャージュは使者を彼の母親のアスマーウ・ビント・アブー・バクルのもとに遣わした。

しかし彼女は彼の所に出頭することを拒否した。

そこで彼は再び彼女の所に使者を遣わしてこう言った。

あなたは私の所にやって来なければならない。

さもなければ私はあなたの編みあげた髪の毛を引っ張ってでも連れて来る者を遣わさねばならない。

しかし彼女は拒絶して次のように言った。

アッラーに誓って、私は髪の毛を引っ張ってでも連れて行く者をあなたが遣わさない限りは、あなたの所には行きません。

そこで（これを聞いて）彼は「私の履物を持って来なさい」と言って、履物をはくと急いで出

かけて行き彼女を訪れてこう言った。
あなたは私がアッラーの敵（注 3）に対して行ったことをどうお考えですか？
すると彼女はこれに対して次のように答えた。
あなたは彼の現世を駄目にしたが、彼はあなたの来世を駄目にした。
あなたは彼を「二本のベルトの主の息子よ」と呼びかけていたと聞いているが、アッラーに誓って、私はその二本のベルトの主です。
つまりそのうちの一本はアッラーの使徒とアブー・バクルの食物を家畜の背に載せる際に使ったものです（注 4）。
そしてもう一本は女性が無くてはならぬベルトとして使っていた。
ところでアッラーの使徒は私達にこう話していました。
サキーフ族には大嘘つきと虐殺者がいる。
大嘘つきについては私達は既に知っている（注 5）。
だが虐殺者についてはあなた以外には考えられない。
するとハッジャージュは彼女のもとから立ち上がり二度と再び彼女を訪ねることはありませんでした。

（注 1）イブン・ズバイルはアブー・バクルの娘のアスマーウ（アーイシャの姉）の息子であるが、ウマイヤ朝第二代カリフが他界するとヒジャーズにあってカリフに選出された。
これでダマスカスのウマイヤ朝とは全面対決することになった。
その結果ウマイヤ朝の猛将ハッジャージュによってマッカを包囲されて 693 年に殺された

（注 2）ターイフのサキーフ族出身のウマイヤ朝の猛将で、イブン・ズバイルの反乱に対してマッカを包囲して火を放ちヒジャーズの、反乱を力で鎮圧した

（注 3）アブドッラー・ビン・ズバイルをアッラーの敵と決めつける立場が、ウマイヤ朝側の見解である

（注 4）預言者とアブー・バクルの二人がマッカからマティーナに秘かに移住する際に一時マッカ郊外のサウル山に二人は身を隠した。
その時に秘かに食べ物を届ける役割を果した者がアブー・.バクルの娘のアスマーウだった。
そのとき彼女は食糧袋の口を締ぶ紐としてベルトを用いたとも言われている

（注 5）サキーフ族の大嘘つきとはムフタール・ビン・アブー・ウバイドという人物でクーファを中心としたシーア派運動の中心人物のことである

ペルシャ人の美徳

アブー・フライラは、アッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

たとえ宗教がすばる星にあったとしてもペルシャ人あるいはその子孫は必ずそれを手にするために、そこまで出かけて行くでしょう。

アブー・フライラは、次のように伝えている

私達はジュムア（金曜合同礼拝）章が啓示されたとき、預言者の所に居合わせました。
そして預言者が次のように朗誦した。
「そして未だ彼ら（アラブ人）に追いついていない者達の間の他の人々にも（恩恵を与え給う）」（第 62 章 3 節）。
そのときある男が「アッラーの使徒よ、それらの人々は誰のことですか？」と尋ねました。
しかし預言者は彼がそれを二度あるいは三度と繰り返して尋ねるまでは答えませんでした。
さて私達の中にはペルシャ人のサルマーンがいましたが、預言者は自分の手をサルマーンの上に置いて次のように答えたのです。
たとえ信仰がすばる星にあろうともこれらの人々の仲間（ペルシャ人）はそれを手に入れに行くであろう。

預言者の言葉「人々とはラクダの群のようなもの。
100 頭に 1 頭も乗り心地がよいもの（ラーヒラ）は見つけられない」について

イブン・ウマルは、アッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方は人々とは乗り心地のよいラクダ（ラーヒラ）（注 1）が 100 頭に一頭もみつからない群のようなものであることを知るだろう（注 2）。

（注 1）完全なラクダのこと

（注 2）いろいろな解釈がされている。

たとえば①人は皆同じであり、血筋血統の優れて抜きんでた者は極くわずかである。

②現世の欲を捨ててひたすら来世を求むる者は非常に少ない。

③ラクダによって意味する所は他人の重荷を背負うほどの世話を買って出る人でこういう人は数の上で少ない……など

善行と親戚縁者関係と行儀の書

親孝行について、両親はそれを受ける権利がある

アブー・フライラは次のように伝えている

一人の男がアッラーの使徒の所にやって来て「私は人々のうちで誰に一番つくすべきでしょうか？」と言った。
すると預言者は「あなたの母親です」と言った。
そこでその男は「その次は誰ですか？」と尋ねた。
すると預言者は「その次もあなたの母親です」と言った。
そこでその男はさらに「その次は誰ですか？」と尋ねた。
すると預言者は「その次もあなたの母親です」と答えた。
さてその男はさらに「ではその次は誰ですか？」と尋ねた。
すると預言者「その次はあなたの父親です」と答えた。
ところでクタイバのハディースでは「私は誰に一番つくすべきか？」として伝えられており彼は「人々のうちで」は伝えなかった。

アブー・フライラは、次のように伝えている

一人の男が「アッラーの使徒よ、誰に一番つくすべきでしょうか？」と言った。
すると預言者は次のように言った。
あなたの母親です。
その次もあなたの母親です。
またその次もあなたの母親です。
そしてその次はあなたの父親です。
それからあなたの血縁に近い人の順です。

アブー・フライラは伝えている

ある男が預言者の所へやって来た。
以下は前記と同様のハディースである。また彼はそれにつけ加えてこう言った。
はいあなたの父親に誓って（注）、あなたはきっと（そのことについての）情報を得るでしょう。

（注）イスラームではアッラー以外のものにかけて誓約することは無効である。
従ってここではつい口がすべってしまったことになる

ウハイブと**イブン・シュブルマ**は前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。
ただウハイブのハディースでは「最も孝行を受ける者は誰ですか？」となっている。
またムハンド・ビン・タルハのハディースでは「どんな人に最も私はつくすべきですか？」と伝えられている。

アブドッラー・ビン・アムルが伝えている

ある男が預言者の所へやって来て彼にジハード（聖戦）に参加する許しを求めた。
すると彼は「あなたのご両親は存命ですか？」と言った。
そこでその男は「はい」と答えた。
すると預言者はこう言った。
彼ら二人にこそ（それを許可する権利が）あります。
（もし二人が許すならば）聖戦に参加しなさい。

ところで**ハビーブ**はこう言っている

私はアブー・アッバースがアブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースから前記と同様のハディースを直接聞いたとしてそれを聞いた。
ところでムスリムは「アブー・アッバースとはサーイブ・ビン・ファルーフ・マッキーの事です」と伝えた。

ハビーブは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

ヤジード・ビン・アブー・ハビーブはナーイム（ウンム・サルマの解放奴隷）からアブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースが次のように語ったとして伝えている

アッラーの預言者の所に一人の男がやって来た。
そして彼は次のように言った。
私はアッラーからの報酬だけを願って移住と聖戦についてあなたに忠誠を誓います。
すると預言者は「あなたのご両親の一人でもご存命ですか？」と言った。
そこで男は「はい二人とも」と答えた。
すると預言者はさらに「それであなたはアッラーからの報酬を求めているのですね？」と言った。
そこで男が「はい」と答えると彼はこう言った。
それではあなたの両親の所に帰りなさい。
そして二人に孝行しなさい。

親孝行は任意の礼拝やそれに類するものに勝る

アブー・フライラが伝えている

かつてジュライジュがある修道院で祈りに耽っていました。

そこへ彼の母親がやって来ました。

ところでフマイド（伝承者の一人）は彼女が彼を呼んだときの様子をアッラーの使徒が説明した通りにさらにアブー・フライラが説明したとしてアブー・ラーフィウが語ったとして次のように伝えた。

彼女は手のひらを眉の上にかざして彼に呼びかけるために顔を上にあげてこう言った。

ジュライジュよ、私はお前の母です。

どうか私に話しかけておくれ。

しかし彼女がそうした時、彼は丁度礼拝をしているところでした。

それで彼はこうつぶやいた。

アッラーよ、母が私を呼んでいますが私は礼拝をしています。

そして彼は礼拝の方を選んだ。

それで彼女は一旦戻ったが再びやって来てこう言った。

ジュライジュよ、私はお前の母です。

どうか私に話しかけておくれ。

すると彼は「アッラーよ、母が私を呼んでいますが私は礼拝をしています」とつぶやいて彼はまた礼拝を選んだ。

すると彼女はこう言った。

アッラーよ、まことにこの子はジュライジュで私の息子です。

しかし私が彼に話しかけても彼は私に話しかけようとしません。

アッラーよ、彼に売春婦を見せるまでは彼に死をお与えになりませんように。

さてここで伝承者は「もし彼女が彼の上に災難が降りかかるようにと祈ればその通りになるのです」と付け加えた。

一方彼の修道院には一人の羊飼いが住みついていた。

そして一人の婦人が村から抜け出して彼の所にやって来た。

そしてその羊飼いは彼女と性的関係を持った。

彼女は妊娠して一人の男の子を生んだ。

そこで彼女は「これは何だ？」と言われ「この修道院のあるじのものです」と答えた。

そこで人々は手斧や鋤を持ってやって来た。

そして彼らは彼に呼びかけたが彼はそのとき礼拝中で彼らに話しかけようとしなかった。

そこで彼らはその修道院を壊わしにかかった。

それで彼がそれに気付くと彼らの所に降りて行った。

すると彼らは「この女性に聞いてみろ」と言った。

そこで彼はその子の頭を撫でながら「あなたのお父さんは誰ですか？」と尋ねた。
すると子供は「私の父は羊飼いです」と言った。
これを聞いた彼らは「私達が壊したあなたの修道院を金と銀とで造ります」と言った。
すると彼はこう言った。
「いいえ、それはいけません。
しかし元通りに土で復元して下さい」
そして彼は再び上にあがって行った（注）。

（注）イスラームではこのような修道院主義、隠遁主義をすすめていない点は留意せねばならない。
即ちいかなる形にせよ現世の責任を放棄することは好ましくないと考えられている

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている
次の三人だけが揺籠の中で（赤ん坊の時に）話した。
それはマリヤの息子のイエスとジュライジュの連れです。
ジュライジュはかつて信仰深い男でした。
彼はある修道院を手に入れるとそこにこもりきっていました。
そこへ彼の母がやって来たが、そのとき彼は礼拝中でした。
それで彼女は「ジュライジュ」と呼びましたが彼は「主よ、母が私を呼んでいますが私は礼拝をしています」と言って彼の礼拝をつづけていました。
翌日彼女は再び彼の所にやって来ましたが、彼はまた礼拝中でした。
そして彼女は「ジュライジュ」と呼ましたが彼は「主よ、母が私を呼んでいますが、私は礼拝をしています」と言って、彼の礼拝をつづけました。
そこで彼女はこう言った。
アッラーよ、どうか彼が売春婦の顔を見るまでは彼に死をお与えになりませんように。
（このジュライジュと彼の信仰深い話しはイスラエルの民つまりユダヤ人の間でも知れ渡っていた）
一方美しさを絵に書いたような一人の売春婦がいました。
彼女は「もしお望みなら、私は必ず彼をかどわかしてお見せします」と言っていました。
そこで彼女は彼の前に現われました。
しかし彼は彼女に見向きもしませんでした。
そこで彼女は当時彼の修道院に住みついていた羊飼いの所にやって来て彼を誘惑しました。
それで彼は彼女と性的関係を持つことになった。
その結果、彼女は妊娠しました。
そして彼女が出産したとき彼女は「この子はジュライジュの子供です」と言いふらしました。

それで人々は彼の所にやって来ると彼に降りてくるように要求しました。
そして彼らは彼の修道院を壊わし、彼を殴りにかかりました。
それで彼は「いったいどうしたというのですか？」と尋ねました。
すると彼らはこう言いました。
「お前はこの売春婦と姦通した。
そして彼女はお前の子供を生んだのだ」
すると彼は「その子はどこにいますか？」と言ったので、彼らはその子を連れてやって来ました。
それでまず彼は「お祈りをするから私を離して下さい」と言って礼拝をはじめました。
そしてそれを終えるとその子の所に行き、その子の腹をつついて「子供よ、あなたの父は誰ですか？」と言った。
するとその子は「羊飼いの誰其です」と答えた。
（それを聞いた）人々はジュライジュの所に群がって来て彼にキスしたり（彼の身体を）触りました。
そして「あなたのために金で修道院を建てさせて下さい」と彼らは言いました。
しかし彼は「いいえ、それを元通りに土で復元して下されば結構です」と言った。
そこで彼らはその通りにしました。
話しは変って一人の子供が母親から乳を飲んでいるところに素晴しい服装をした一人の男がすばしっこくて強そうな動物に乗って通りかかりました。
そこでその母親は「アッラーよ、私の息子もこの人のようにして下さい」と言いました。
するとその子は乳房を離して彼の方に向き直って彼を見ると「アッラーよ、私を彼のようにはしないで下さい」と言いました。
そして再び乳房の方に向き直ると乳房を吸いはじめました。
ここで彼（アブー・フライラ）は次のように付け加えました。
私はアッラーの使徒がその子の乳を飲む様子を彼の人差し指を口に入れそれを吸ってみせたあの光景を今でも目の前にしているようにまざまざと思い出します。
さらにアブー・フライラはこう言って話しをつづけた。
それから人々が一人の奴隷の少女のそばを通ると「お前は姦通し盗みをした」と言いながら彼女をたたいていました。
しかし彼女は「私にはアッラーがいればそれで十分です。
彼こそは私の最も素晴しい保護者です」と言った。
そこでその子の母は「アッラーよ、アッラーよ、私の息子を彼女のようにはしないで下さい」と言った。
するとその子は乳房を放して彼女の方を見てこう言った。
「アッラーよ、私を彼女のようにして下さい」
そしてそのとき、二人（母と子）はこの話しを元に戻した（注）。

それで彼女はこう言った。
丸坊頭よ、立派ななりをした男が通りかかったとき私は「アッラーよ、私の息子を彼のようにして下さい」と言いました。
しかしあなたは「アッラーよ、彼のようには私をしないで下さい」と言いました。
ところが人々が「お前は姦通して盗みを働いた」と言いながらたたいている少女の奴隷を連れて通りかかった時に私は「アッラーよ、私の息子を彼女のようにはしないで下さい」と言いました。
しかしあなたは「アッラーよ、私を彼女のようにして下さい」と言いました。
するとその子はこう言った。
あの男はかつて圧政者でした。
それで私は「アッラーよ、私を彼のようにしないで下さい」と言ったのです。
また人々が姦通したと言っていた女性は（実際には）姦通をしていなかった。
また盗みをしたと言っていたが（実際には）盗んでいなかったのです。
それで私は「アッラーよ、私を彼女のようにして下さい」と言ったのです。

（注）最初は子供が言葉の意味も分からずにしゃべったと思って注意しなかった母親が、二度目には子供が言葉の意味が分っていて話していることに気付いて、話しを元に戻して話しかけたの意

年老いた両親または片親の年令まで長生きしてもなお天国へ入る資格を得られない者の下劣さ（注）について

（注）原文では「鼻柱を砂ぼこりにつけること」とある

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

砂ぼこりにまみれてしまえ（卑しめよ）！

さらに砂ぼこりにまみれてしまえ！

さらに一層砂ぼこりにまみれてしまえ！

すると彼は「アッラーの使徒よ、誰のことですか？」と質問された。

そこで彼は次のように答えた。

年老いた両親あるいは片親の年令まで長生きしても（親孝行しなかったために）天国へ入る資格のない人のことです。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

嫌々やっている。

また嫌々やっている。

それでもまだ嫌々やっている者がいる。

すると彼は「アッラーの使徒よ、それは誰ですか？」と尋ねられました。

そこで彼は次のように言いました。

年老いた両親をその片方かあるいは両方を世話している者である。

そして彼は天国に入れない（者のことです）。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

「嫌々やっている者がいる」この言葉を三度繰り返した。

以下は前記と同様のハディースである。

父親や母親の友人に対して親切にすることは美徳である

アブドッラー・ビン・ディーナールは伝えている

アブドッラー・ビン・ウマルがマッカへの途中で遊牧民の一人の男に会った。
それでアブドッラー・ビン・ウマルは彼に挨拶をしさらに彼が乗って来たロバにその男を乗せ、その上彼が被っていたターバンをもその男に与えた。
ここでイブン・ディーナールはさらにつづけて次のように語った。
私達は彼（アブドッラー・ビン・ウマル）に「アッラーがあなたに良いことをして下さいますように。
彼らは遊牧民です。
彼らはわずかな物で満足するというのに……」と言った。
するとアブドッラーはこう言った。
実はこの男の父はウマル・ビン・ハッターブ（自分の父親）の親友だったのです。
それに私はアッラーの使徒が次のように言うところを聞いています。
最も素晴しい孝行とは、子供が彼の父親の親友の家族に対して親切に振る舞うことです。

アブドッラー・ビン・ウマルは預言者が次のように語ったとして伝えている

最も素晴しい孝行とは、人が彼の父親の親友に対して親切に振る舞うことである。

アブドッラー・ビン・ディーナールは伝えている

アブドッラー・ビン・ウマルがマッカに旅する時にはタクダに乗り疲れた時の息抜きのために一頭のロバを連れて行くことと頭に巻きつけるターバンを持って出る習わしでした。
そんな旅の途中のある日のこと、彼はくだんのロバに乗って旅をしていた。
そこに一人の遊牧民が通りかかった。
すると彼は「あなたは誰其の子供ではありませんか？」と尋ねると相手は「その通りだ」と答えた。
それで彼はその者にそのロバを与えて「これに乗りなさい」と言い、さらにまたターバンを与え「これをあなたの頭に巻きなさい」と言った。
そこで彼の連れの者が次のように言った。
アッラーがあなたの罪をお赦しになりますように！
あなたはこの遊牧民に息抜きに使っていたロバを与えたばかりか、あなたの頭に巻き付けていたターバンまで与えるとは……？
すると彼（イブン・ウマル）は次のように言って答えた。
私はアッラーの使徒が次のように語っているところを聞いています。

最も素晴しい孝行の一つに死んだ父親の親友の家族に親切に振る舞うことがある。
さて彼（その男）の父親はかつてウマルの友人でした。

善良（ビッル）と悪徳（イスム）の解釈

ナッワース・ビン・サムアーヌ・アンサーリーは次のように伝えている

私はアッラーの使徒に善良（ビッル）と悪徳（イスム）について尋ねました。

すると彼は次のように言いました。

ビッルとは親切で思いやりのある性向のことです。

そしてイスムとはあなたの胸を疑惑と罪の意識による恐怖でかきみだすもので、他人にはそれをどうしても知られまいとするものである。

ナッワース・ビン・サムアーンが伝えている

私はマディーナでアッラーの使徒と一緒に一年間過ごしました（注 1）。

私に（マディーナに）移住（ヒジュラ）することをためらわせたのは預言者に宗教上の質問がしたかったからです（注 2）。

当時、我々の内の誰かがヒジュラすると彼はアッラーの使徒に何も質問しませんでした。

そんなわけで私はビッルとイスムについて尋ねました。

するとアッラーの使徒はこう言いました。

ビッルとは親切で思いやりのある性向のことです。

そしてイスムとはあなたの胸を疑心と罪の意識による恐怖心でかきみだすもので、他人にはそれをどうしても知られまいとするものです。

（注 1）つまり移住者としてではなく長期滞在者として過ごしたいという意味

（注 2）当時、移住者には宗教に関する質問が許されていなかったために彼は移住者になって逆って色々な質問が出来なくなることを恐れたわけ

血縁者の絆とそれを断ち切ることの禁

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

真にアッラーはこの世界をば創造された。

そしてそれが終えたとき、血縁の絆（の権化）が進み出て「これ（血縁の絆）は断絶を避ける者の避難所ですか？」と尋ねた。

するとアッラーはこう言った。

その通りだ。

しかしお前は私がお前に血縁の絆を頼んで来た者に縁を結んでやり、血縁の絆を断ち切ることを頼んで来た者にはそれを断ち切ってやることで不満があるのか？

それで血縁の権化は「いいえ」と言った。

するとアッラーは「それならお前のものである」と言った。

それからアッラーの使徒は「もし良ければ次のクルアーンを読誦しなさい」と言った。

「汝らは、仮にご命令に背き去り、地上に退廃をもたらし、また血縁の絆を断ち切ってしまうようなことを期待するのか。

これらの人々はアッラーが見限った者で聾唖（者）にされ視力も奪われて盲目にされる。

彼らは一体クルアーンをよく熟読玩味しようとしないのか。

それとも心に鍵がかけられているのだろうか」（第 47 章 22-24 節）。

アーイシャはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

血縁者の絆はアルシュ（アッラーの座る玉座）（注）にぶら下っていてこう言っています。

私に血縁の絆を求めて来る者にはアッラーがそれを結び、また私に血縁の絆を断ち切ることを求めてくる者にはアッラーがそれを断ち切る。

（注）無限大のアッラーに玉座などあり得ようはずがないのだが、ここではアッラーに近い所を比喩的に表現したものと考えられる。

またこうした問題「なぜと問うことなかれ」と主張する立場もある

ジュバイル・ビン・ムトイムは預言者が次のように語ったとして伝えている

（血縁の絆を）断ち切る者は天国には入れない。

ジュバイル・ビン・ムトイムはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

血縁者の絆を断ち切る者は天国には入れない。

ズフリーは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒が次のように語っているところを聞いたとして伝えている

生計がうるおい、寿命が延びることを願う者は、まず自ら血縁の絆を結ぶべきである。

アナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

生計がうるおうことと寿命が延びることを望む者は、まず自ら血縁の絆を結ぶべきである。

アブー・フライラは次のように伝えている

ある男が次のように預言者に言った。

アッラーの使徒よ、私には親類がいますが私が彼らと親しく接しようとしても彼らはそれを拒みます。

また私は彼らに良くしてやるのですが、彼らは私に不親切です。

そして私が彼らに優しくしても彼らは私に毒づきます。

すると預言者は次のように言った。

もしそれがあなたの言う通りなら、あなたは確かに彼ら（の顔）に熱い灰（注）を降りかけているようなものです。

そしてあなたにはそうあり続ける限り、アッラーの保護と助けが（天使を通じて）あるでしょう。

（注）ここでは火獄を象徴している。

「熱い」は火獄の火を象徴し、「灰」は恥辱、無用などを象徴している

お互いに妬むことや憎悪や敵愾心を抱くことはご法度

アナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

互いに憎み合ったり、嫉妬し合ったり、敵対しあったりしてはいけない。
アッラーの下僕達よ、あなた方は互いに兄弟になりなさい。
そしてムスリムは彼の兄弟と三日以上疎遠になってはならない。

アナスは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

ズフリーは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えているが、伝承者の一人のウヤイナは「互いに絶交しあってはならない」という一文を加えている。

ズフリーは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えているが伝承者の一人アブドル・ラッザークの伝えているハディースでは次のようになっている

互いに嫉妬しあったり、絶交しあったり、敵対しあったりしてはならない。

アナスは預言者が次のように語ったとして伝えている

互いに嫉妬し合ったり、憎しみ合ったり、絶交し合ったりしてはいけない。
アッラーの下僕達よ、あなた方は互いに兄弟になりなさい。
シュウバは上記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えているが、次の言葉を加えている「アッラーがあなた方に命じられたように」

シャリーア（イスラーム法）で認められた理由なしに三日以上の疎遠は禁じられている

アブー・アイユーブ・アンサーリーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ムスリムは彼の兄弟を三晩以上疎遠にすることを禁じられている。

また二人が会った時に一人がこちらを向き、もう一人があちこちを向いて顔をそむけあうことも禁じられている。

二人のうちでよりよい方は一番最初に挨拶する方だ。

ズフリーが前記と同様のハディースを少し言葉を違えて伝えている。

それは「一人が一方を避け、もう一人も他方を避ける」となっている。

アブドッラー・ビン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

信者は彼の兄弟を三日以上疎遠にしてはならない。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

三日後には疎遠はあってはならない。

嫌疑とあら捜しと競売で値をつり上げることの禁止

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

嫌疑を避けなさい。なぜならば（あらぬ）嫌疑は最も重い嘘の作り話しであるからだ。
またあれこれと詮索したり、他人のあらを探してはいけない。
また互いに卑俗なことで競い合ったり嫉妬し合ってはいけない。
さらに互いに反感を抱いて敵対し合ってはいけない。
アッラーの下僕達よ、あなた方は互いに兄弟になりなさい。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

互いに口汚くののしってはいけない。また互いに敵対してはいけない。
また互いにあれこれと詮索したり他人の商売に割り込んではいけない。
アッラーの下僕達よ、あなた方は互いに兄弟になりなさい。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

互いに嫉妬し合ったり、互いに憎悪してはならない。
また他人のあら探しをしたり、あれこれと詮索したりしてはいけない。
さらに競売で値段をつり上げてはならない。
アッラーの下僕達よ、あなた方は互いに兄弟になりなさい。

アアマシュは同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。
ただしここでは次のようになっている

血縁の絆を断ち切ったり、互いに敵対し合ってはいけない。
また互いに嫌悪し合ったり嫉妬し合ってはいけない。
あなた方はアッラーが命じたように互いに兄弟になりなさい。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

互いに嫌悪したり、敵対してはいけない。
また互いに卑俗なことで競い合ってはいけない。
アッラーの下僕達よ、あなた方は互いに兄弟になりなさい。

ムスリムを虐待したり、見捨てたり、侮辱することは禁じられ、ムスリムの生命と名誉と財産は守られること

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

互いに他人を嫉妬したり、競売で値段をつり上げたりしてはいけない。
また互いに嫌悪しあったり敵対しあってはいけない。
また他人の取引に割り込んではいけない。
アッラーの下僕達よ、あなた方は互いに兄弟になりなさい。
ムスリムは他のムスリムの兄弟である。
故に彼を虐待したり、見捨てたり、侮辱したりしてはいけない。
敬神はここにこそあるのだ。
そしてそのとき彼は彼の胸を三回指さした。
そしてさらにつづけてこう言った。
人間にとっての悪とは兄弟であるムスリムを侮辱することである。
全てのムスリムは他のムスリムに対して神聖な存在であり、彼の生命、財産、名誉は全て犯すべからざるものである。

アブー・フライラは前記と同様のハディースを伝えているが、ここではそれに次のように加えている

本当にアッラーはあなた方の体や外見をご覧になるわけではなく、あなた方の心をご覧になっているのです。
そして彼は彼の指で胸を指しました。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

本当にアッラーはあなた方の外見や財産をご覧になっているわけではなく、あなた方の心と行為とをご覧になっているのです。

憎悪と恨みの禁止

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

天国の門は月曜日と木曜日に開かれる。

そしてそこへはアッラーに何ものも配さなかった信者たちの全てが入ることを許される。

ただし彼と彼の（宗教上の）兄弟の間に僧悪を持った者は例外である。

そして彼ら二人は次のように皆から言われる。

この二人が和解するまで見ていようじゃないか。

この二人が和解するまで見ていようじゃないか。

この二人が和解するまで見ていようじゃないか。

ところでスハイルは前記と同様のハディースを彼の父からマーリクの伝承者経路を経て伝えているが、ここでは「二人の恨みを抱く者を除いては」となっている。

アブー・フライラは次のハディースをマルフーウ（注）のハディースとして伝えている

全ての行為は毎木曜日と月曜日に明らかにされる。

そこでアッラーはその日に彼に何も配さなかった全ての人間をお赦しになる。

ただし宗教上の兄弟との間に憎悪を持った者は例外であり、彼は次のように言われるであろう。

二人が和解するまで放って置け、二人が和解するまで放って置け。

（注）ハディースの伝承経路が最終的に預言者にまでさかのぼれるハディースのこと

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

人々の全ての行為は一週間のうち二回即ち月曜日と木曜日に明らかにされる。

そこで全ての信者は赦される。

ただし宗教上の兄弟の間で憎悪を持った下僕は例外で、次のように言われるだろう。

これら二人が和解するまで捨て置け、あるいは待たせて置け。

アッラーゆえの愛の美徳

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

本当にアッラーは終末の日に次のように仰せられるであろう。

われの威光によって互いに愛し合っていた者はどこにいるのだ。

われの陰以外には何も日陰になるものがない日の今日こそ彼らを私の陰に隠してあげよう。

アブー・フライラは預言者から次のように伝えている

ある男が他の村にいる兄弟を訪門した。

そのとき、アッラーは道の途中に天使を座らせた。

そして彼がやって来ると天使は「どこへ行きたいのですか？」と尋ねた。

そこで彼は「この村にいる私の兄弟の所です」と答えると、天使はさらに「あなたは彼に何か良いことをしてやったことがありますか？」と尋ねた。

すると彼は「いいえ、ただ私はアッラーのために彼を愛しました（注）」と答えると、天使はこう言った。

私はあなたが彼をアッラーのために愛したようにアッラーがあなたを愛したことを伝えるためにあなたに遣わされたアッラーからの使者です。

ところでハンマード・ビン・サラマは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

（注）アラビア語では英語の like も love も同じ語を用いる

病人を見舞うことは美徳

サウバーンは次のように伝えている

病人を見舞う者は戻ってくるまでは天国の果樹園（注）にいるようなものだ。

（注）原義は二列に並んだナツメヤシの林の間道。
従ってそれは天国に至る道と考えてもよい

サウバーン（アッラーの使徒の解放奴隷）はアッラーの使徒が話したとして伝えている

病人を見舞う者は戻るまで、いまだ天国の果樹園に居る。

サウバーンは預言者が次のように語ったとして伝えている

ムスリムが病気のムスリムの兄弟を見舞うとき、彼は戻って来るまでは天国の果樹園にいるようなものだ。

サウバーン（アッラーの使徒の解放奴隷）はアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えた

病人を見舞う者は戻ってくるまでは天国の果樹園にいるようなものだ。
すると彼は「アッラーの使徒よ、天国の果樹園とは何ですか？」と尋ねられた。
そこで彼は次のように言った。
それは果物がたわわに実る場所です。

前記と同様のハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

復活の日にアッラーは次のように言うでしょう。
アダムの息子よ（注）。
私が病気になったのにそなたはなぜ私を見舞わなかったのか？
そこで彼は「主よ、どうやって私はあなたを見舞えましょうか？
あなたはこの万物世界の主であらせられるというのに」と言った。
するとアッラーは次のように言います。
そなたは私の下僕である誰其が病気であったことを知りながら彼を見舞いませんでしたね。
そなたはその時、もし彼を見舞っていれば彼のもとで私を見付けたということを知りませんでしたか？
アダムの息子よ。
私はそなたに食べ物を求めましたが、そなたはそれを与えませんでした。

すると彼は「主よ、どうして私があなたに食糧を与えることが出来ましょうか？
あなたはこの万物世界の主であらせられるというのに」と答えると、アッラーはこう言います。
私の下僕である誰其がそなたに食べ物を求めたというのに、そなたは彼に（何も）与えなかったことを知らないとでも言うのですか？
そしてそなたがもし彼に食べ物を与えていればそれと同じ物を私のもとで見付けたであろうということを知らないのですか？
アダムの息子よ、私はそなたに飲み物を求めたのに、そなたはそれを与えませんでした。
すると彼は「主よ、どうして私があなたに飲み物を与えることが出来ましょうか？
あなたはこの万物世界の主であらせられるというのに」と答える。
そこでアッラーはこう言います。
私の下僕である誰其がそなたに飲み物を求めました。
しかしそなたはそれを与えませんでした。
そなたはもし彼に飲み物を与えていれば私のもとにそれを見いだすということを知らなかったのですか？

（注）動物でも天使でもジンでもないアダムの子孫つまりアッラーの数ある被造物のうちの「人間よ」の意

信者が病に罹ったり、深い悲しみに打たれたり、あるいはそれに類する（痛みを伴う）ことで
たとえそれが刺がささったような場合であってもこれらに対しては報酬があること

マスルークはアーイシャが次のように語ったとして伝えている

　　私はアッラーの使徒より重い病気に罹った人を他に見たことはありません。

　　ところでウスマーンの伝えるハディースでは僅かな言葉の違いがある。

アアマシュは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アブドッラーは次のように伝えている

　　私はアッラーの使徒を訪ねたとき彼は高熱を出していました。

　　そこで私は手で彼に触ってみてこう言いました。

　　「アッラーの使徒よ、本当に大変な熱ですよ」

　　するとアッラーの使徒は「確かに私はあなた方二人分の熱を出すのですから」と云った。

　　それで私は「それなら、あなたには二倍の報酬がありますね」と言うと、アッラーの使徒は「はい」と言いました。

　　そして彼はつづけてこう言った。

　　ムスリムが病気その他（不幸）を蒙った場合、その代償としてアッラーは彼の小罪を落として下さる。

　　ちょうど木がその葉を落すように。

　　ところでズハイルの伝えるハディースでは「私は手で彼に触った」の部分は伝えていない。

ジャリールは前記と同様のハディースを伝えているが**アブー・ムアーウィヤ**の伝えるハディースでは次の言葉が加えられている

　　はい、私の魂をその手中にするお方に誓って、この地上にはかくかくしかじかのムスリムは一人もおりません。

アスワドは次のように伝えている

　　クライシュ族の若者達が巡礼でミナーの谷にいるアーイシャを訪ねた。

　　そのとき彼らは笑っていたが、彼女は「なにがおかしいのですか？」と尋ねた。

　　すると彼らはこう言いました。

　　誰其がテントのロープに蹴つまずいて危く首を折るか目を潰すところだったのですよ。

　　そこで彼女は「笑ってはいけません。

私はアッラーの使徒が次のように話したところを聞きました」と言った。
ムスリムはたとえ刺がささっても、あるいはそれ以上の災難を蒙ったとしても、それに対し（天国での）の上位ランクが報奨として書き加えられ、彼の小罪は抹消される。

アーイシャはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

信者に刺がささったり、あるいはそれ以上の災難が降りかかったとしてもアッラーはそのことで、その者の（来世における彼の）地位をニランク上げて下さるか、あるいは彼の小罪を一つ免じて下さる。

アーイシャはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

一個の刺が信者にささったとしても、あるいはそれより大きな災難が降りかかったにせよ、アッラーはそれに対して彼の小罪を断ち切って下さる。

ヒシャームは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アーイシャはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ムスリムに災難が降りかかってたとえそれが一個の刺がささったものであっても、彼はそのことによって小罪を赦される。

預言者の妻**アーイシャ**はアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

信者にたとえ刺一個の災難が降りかかったとしても、彼の小罪は断ち切られるか、あるいは赦される。
ところで伝承者の一人ヤジードはアルワがどちら（つまり小罪は断ち切られるのか赦されるのか）を言ったものか分からないと伝えた。

アーイシャはアッラーの使徒が次のように語ったところを聞いたとして伝えている

信者はたとえ彼に刺がささったにせよそのことによってアッラーは彼に一つの善行を書き加えるか、あるいは彼から小罪を一つ減ぜられる。

アブー・フライラと**アブー・サイード**はアッラーの使徒が次のように語ったところを聞いたとして伝えている

信者は彼の小罪が赦されずには痛みや疲労や病気や悲しみや心配に見舞われることは無い。

アブー・フライラは次のように伝えている

「誰でも悪事を行う者は、その報いを受けよう」（第 4 章 123 節）が啓示されたとき、それは非常に多くのムスリムに衝撃を与えて伝えられた。
そこでアッラーの使徒はこう言った。
極端に走らず中庸を行いなさい。
また適正な道に止どまりなさい。
なぜならムスリムに降りかかる全ての災難にはたとえけつまずいて怪我をしても、あるいは一個の刺がささったにせよ、そこには小罪の償いがあるから。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
アッラーの使徒はウンム・サーイブあるいはウンム・ムサイブを訪れた。
そこで彼はこう言った。
ウンム・ムサイブよ、あるいはウンム・サーイブよ、どうしたのですか？
そんなに震えてどうしたのですか？
すると彼女は「熱病のためです。
アッラーがそれを祝福しませんように」と言った。
そこで彼は次のように言った。
熱病を悪く言ってはいけません。
なぜならそれはちょうど（灼熱の）熔鉱炉が鉄の不純物を取り除くようにアダムの息子達（人間）の罪を消してくれるのですから。

アターウ・ビン・アブー・ラバーフはイブン・アッバースが彼に次のように語ったとして伝えている
天国の住人の中の女性がどんな人か教えてあげましようか？
そこで私が「はい」と答えると彼はこう言った。
それはこの黒人の女性です。
彼女は預言者の所にやって来るとこう言ったのです。
私は病気で倒れそうです。
そして裸になりそうです。
どうかアッラーに私の事をお祈り下さい。
すると彼（預言者）は「できれば我慢しなさい。
そうすればあなたに天国が与えられよう。
またできれば私はアッラーがあなたをお赦しになるようにお祈りします」と言った。
そこで彼女は次のように言った。
「私は我慢します。
しかし私は裸になるでしょう。
どうか私が裸にならないようにアッラーにお祈り下さい」
それで彼は彼女のために祈りました。

他人を虐待することの禁止

アブー・ザッルはアッラーが次のように命じたお言葉を預言者から聞いたとして伝えている

わが下僕よ、われは自らに虐待を禁じた。
そして汝らは互いに虐待し合ってはならない。
わが下僕よ、汝らにもそれを禁じられたものとした。
故に汝ら全ては、われが導いた者を除いて道に迷っている。
ゆえにまずわが導きを求めよ。
そうすれば汝らを導いてやろう。
わが下僕よ、汝ら全てはわれが養った者を除いて飢えておる。
ゆえにまずわれに食べ物を求めよ、そうすれば汝らに食べ物を与えてやろう。
わが下僕よ、汝ら全てはわれが衣服を着せた者を除いて素っ裸だ。
ゆえにまずわれに衣服を求めよ。
そうすれば汝らにもそれを着せてやろう。
わが下僕よ、本当に汝らは夜に昼に間違いを犯しつづけている。
我はその罪を全て赦すであろう。
ゆえにまずわれに赦しを求めよ。
そうすれば汝らを赦してやろう。
わが下僕よ、本当に汝らはどんなにわれを傷つけようとしても傷つけることは出来ない。
またどんなに我の益になろうとしてもわれを益することは出来ない。
我が下僕よ、たとえ汝らの最初の者であっても最後の者であってもまた人類であったにせよジン（精霊）であったにせよ、また彼らが皆汝らの中でも最も信仰深い心を持った一人と同じであったとしてもわれの力に何ほどのものも加えることは出来ない。
わが下僕よ、たとえ汝らの最初の者であっても最後の者であっても、また人類の全てであったにせよ、ジンの全てであったにせよ、また彼らが等しく汝らの中でも最も不埒な心を持った者と同じでも、我の力に全く及ばない。
我が下僕よ、たとえ汝らの最初の者であったにせよ最後の者であったにせよ、また人類の全てであったとしてもジンの全てであったとしても、また彼らが同じ地平に立ってわれに（ものを）乞うたとしても、我には全ての人にそれぞれの求めるものを与えよう。
たとえそうしたとしてもわれが所有するものは減ずることはない。
それはたとえてみれば海に一本の針を落とした変化にも及ばない（注）。
わが下僕達よ、それらはわれが汝らのために数え上げ、それから報酬を与えんがための汝らの諸行為である。
ゆえによき結果をそこに見つけた者はアッラーに感謝しなさい。
しかしそれ以外のものを見付けた者は自分以外のものを責めることなかれ。
ところでサイードは「かつてアブー・イドリース・ハワラーニ―がこのハディースを話すとき

には正座して話したものでした」と伝えた。
同様のハディースをサイード・ビン・アブドル・アズィーズが別の伝承者経路を経て伝えているがそのうちでマルワーンの伝えたハディースの方がより完全である。
同様のハディースをアブー・ムスヒルが別な伝承者経路を経て伝えている。

（注）アッラーの与えるものは限りあるものの中での分配とは違う。
無限大の神が無限大の慈悲の心から与えるものだから結局それは無限大となる

アブー・ザッルは預言者の主アッラーのお言葉として彼が次のように語ったとして伝えている
われは自らにそしてわが下僕たちに虐待を禁じた。
ゆえに汝らは互いに虐待し合ってはならない。
そして前記と同様のハディースを伝えた。
ところで先に述べたアブー・イドリースのハディースの方がこのハディースよりも一層完全である。

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
虐待の罪を犯すことを恐れよ、なぜならその虐待は復活の日の暗闇（注）になるからである。
また強欲を恐れよ、なぜなら強欲は汝ら以前の者どもを滅ぼす原因となったからだ。
それは彼らを扇動して彼らの血を流させ、彼らの禁止事項を無効にしてしまった。

（注）虐待（ズルム）とは同語根の単語である、光明即ち導きとは反対語である。
ここでは導きのない暗闇では救われないの意味と思われるが、この他にもっと具体的な厳しい諸罰と解釈する人もいる

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
本当に虐待は復活の日の暗闇である。

サーリムは彼の父からの伝聞としてアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えた
ムスリムは他のムスリムの兄弟である。
ゆえに彼を虐待したり、従属させてはならない。
兄弟を助けた者にはアッラーが彼を助けてくれる。
またムスリムから心配事を除いてくれる人にはアッラーが復活の日の心配事の一つを除いてくれる。
またムスリムを隠まってくれる人にはアッラーは復活の日に彼を隠まってくれる。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方は破産者とは誰か知っていますか？

そこで彼らは「破産者とはお金もなければ財産もない人です」と答えた。

すると彼は次のように言った。

わたしのウンマでは破産者とは復活の日に（現世では）礼拝や断食や喜捨を行ってからやって来るが、かつては人に悪態をついたり嘲笑したり、他人の財産をだまし取ったり、他人の血を流したり、人を撲ったりした人のことです。

なぜならば彼の善行は自らが与えた他人への損害のために帳消しにされ、また自分の善行は別の損害のために帳消しにされて遂に自分の善行分が最終判決が下る前に全部なくなって、その不足分だけの己れの罪が取り出されて己れの前に投げ出される者で、結局は火獄の中に投げ込まれる。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

復活の日、全ての権利はその本来の所有者に戻される。

それは角の無い羊が角のある羊からその権利を手に入れることにまで及ぶ。

アブー・ムーサーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アッラーは虐待者に猶予をお与えになった。

しかし一旦彼を捕えたならば決してお見逃しにならない。

そして次のクルアーンの一節を朗誦した。

「このように悪事に耽っている村々を汝の主がぐっと掴むが、その掴み方は痛烈極まりないもの」（第 11 章 102 節）

あなたの兄弟をたとえ彼が虐待者（加害者）であったにせよ、あるいは被害者であったにせよ助けることの意味

ジャービルは次のように伝えている

ムハージル（マッカからの移住者）の少年とアンサール（マディーナ土着の住民）の少年が喧嘩をした。

そこでそのムハージル、あるいは（その場にいた）ムハージル達が「ムハージルの皆の衆（加勢してくれ）」と呼びかけた。

またそのアンサールの方も「アンサールの皆の衆（加勢してくれ）」と呼びかけた。

それでアッラーの使徒が出て来てこう言った。

いったいどうしたというのだ。

ジャーヒリーヤ（イスラーム以前の無明時代）の人々のような呼びかけ（注）をして。

すると彼らは（あわてて）「アッラーの使徒よ、そうではありません。

二人の少年が喧嘩して一人が一方の臀部を打っただけです」と言った。

すると預言者は次のように言った。

よろしい、確かに人は彼の兄弟を彼が加害者であっても被害者であっても助けなければならない。

彼が加害者の場合はそれを止めさせなさい。

それこそ彼を助けることです。

また彼が被害者の場合は彼を助けてやりなさい。

（注）イスラーム以前のジャーヒリーヤの時代は部族社会以上の社会ではなく、同一部族員同士は加害者であっても被害者であっても文字通りに加勢して助け合った。

イスラームではこれをイスラームの法に照らして裁くことになった。

ここではジャーヒリーヤ時代の部族社会の掟をイスラームに照して見事な新解釈を与えている点が面白い

ジャービル・ビン・アブドッラーが伝えている

私達が預言者と一緒に遠征に出ているとき、ムハージルの一人の男がアンサールの男の臀部を打った。

そしてすぐにアンサールの方の男は「アンサールよ」と加勢を呼びかけ、またもう一方のムハージルの男も「ムハージルの皆の衆」と加勢を呼びかけた。

するとアッラーの使徒「いったいどうしたというのだ。

そんなジャーヒリーヤの呼びかけをして」と言った。

そこで彼らは（あわてて）「アッラーの使徒よムハージルの男がアンサールの男の臀部を打ったのです」と言った。

すると彼はこう言った。
放って置きなさい。
それは不快なことです。
さてこのときアブドッラー・ビン・ウバイユはそれを聞いてこう言った。
アッラーに誓って、確かに彼らはそうしたのです（ジャーヒリーヤの社会規範にのっとってそう言ったの意）。
私達はマディーナに戻ったらプライドを持つ人達がこの屈辱は晴らすでしょう。
そこでウマルは「この似非信者（アブドッラー）の首を落すことをお許し下さい」と言った。
しかし預言者はこう言った。
放って置きなさい。
人々がムハンマドは彼の教友を殺すなどと言わないためにも。

ジャービル・ビン・アブドッラーが伝えている
一人のムハージルの男がアンサールの男の臀部を打った。
そこで彼は預言者の所にやって来るとその補償について尋ねた。
すると預言者は「放って置きなさい、それは不快なことです」と言った。
ところでイブン・マンスールは彼の伝えるハディースの中で、アムルがジャービルから聞いたとして伝えている。

信者同士の慈悲と親愛と助け合いについて

アブー・ムーサーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

信者と他の信者に対する関係はそれぞれが互いに支え合っている一つの建物のようなものである。

ヌウマーン・ビン・バシールはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

互いに好意を抱きあい、慈しみ合い、思いやる関係にいる信者は一つの体のようなものだ。

もしその一部の器官が不調を訴えれば、その他の部分は不眠や高熱を引き起して応えるようなものである。

ヌウマーン・ビン・バシールは前記と同様の預言者からのハディースを伝えている。

ヌウマーン・ビン・バシールはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

信者たちは一人の人間のようなものである。彼の頭が痛みを訴えれば、その他の体の部分が高熱や不眠を喚起する。

ヌウマーン・ビン・バシールはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ムスリム達は一個の人体のようなものである。

もし彼の目が不調を訴えれば、体の金てが不調を訴える。

また彼の頭が不調を訴えれば、彼の体の全てが不調を訴える。

ヌウマーン・ビン・バシールは前記と同様のハディースを他の伝承者経路を経て伝えている。

罵りの禁止

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

互いに罵りあった場合、最初に始めた者に被害者側が限度を逸しない限り罪がある。

赦しと謙譲の勧め

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

喜捨は財産を減らすことはない。

またよく赦す者にアッラーは（人々の間で）彼の尊敬を高めて下さる。

またアッラーに従順な者をアッラーは彼の地位を上げずにはおかない。

陰口の禁止

アブー・フライラは次のように伝えている

アッラーの使徒が「あなた方は陰口とは何か知っていますか？」と尋ねた。

すると彼らは「アッラーとその使徒が最も良く知っています」と言った。

そこで彼は「あなたの兄弟が嫌っていることを敢えてあなたが言及することです」と言った。

すると彼は次のように尋ねられた。

それならもし私の兄弟に私が言う通りのもの（欠点）が実際にあった場合にはどうお考えですか？

そこで彼は次のように言った。

彼にあなたが言う通りのもの（欠点）があったとしても、あなたが彼の陰口をきいたことには変りはありません。

そしてもしその事実が無かった場合には勿論、彼を中傷したことになります。

アッラーが現世において欠点を隠した者は来世においてもそれを隠すことになるという福音

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

アッラーは復活の日に欠点を隠す者以外は現世において彼の下僕（の欠点）を隠すことはない。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

現世において他人の欠点を隠す者には復活の日にアッラーが彼の欠点を隠すであろう（注）。

（注）勿論、人生はそれほど単純ではなく、結婚相手の評判を聞き出す場合、為政者の悪事を告発する場合などは必要なことであると考えられる

咎（とが）のある恐れのある者への情け深い扱い

アーイシャは次のように伝えている

ある男が預言者に訪問の許可を求めた。
すると彼はこう言った。
彼に許可を与えなさい。
彼は彼の部族でも出来の悪い息子だ。
あるいは彼は彼の部族でも出来の悪い男だ。
そしてその男が訪れたとき預言者は彼に優しい言葉をかけた。
そこで私はこう言った。
アッラーの使徒よ、あなたは彼についてさっきはあんなことを言っていて、今は彼に優しい言葉をかけるのですか？
すると彼は次のように言った。
アーイシャよ、アッラーのもとで復活の日に最も悪いランク付けを与えられる者は彼の咎を恐れて人々は彼を見捨てたり彼から離れて行くものです。
イブン・ムンカデルは前記と同様ハディースを別の伝承者経路を経て伝えているが、ここではわずかな表現上の違いが見られる。

親切の美徳

ジャリールは預言者が次のように語ったとして伝えている

親切心を禁じられている者は即ち良きものを禁じられている。

ジャリールはアッラーの使徒が次のように語っているところを聞いたとして伝えている

親切心を禁じられている者は即ち良きものを禁じられている。

ジャリール・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

親切心を禁じられた者は良きものを禁じられてしまった。

あるいは親切心を禁じられている者は良きものを禁じられている。

預言者の妻**アーイシャ**はアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アーイシャよ、本当にアッラーは親切を愛する者の友である。

そして彼は親切(な行為)に対しては不親切に対しては与えないものをお与えになり、それ(親切)以外のものをお与えになることはない。

預言者の妻**アーイシャ**は預言者が次のように語ったとして伝えている

本当に親切は物事をより美しく飾り立てずにはおかないものである。

またそれは物事の欠点を帳消しにしないではおかないものである。

ミクダーム・ビン・シュライフ・ビン・ハーニウは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

ところで彼はそれに加えて次のように伝えている

アーイシャは人に慣れないラクダに乗ったが、彼女にはそれを乗りこなすことが難しかったので、彼女は行きつ戻りつしはじめた。

そこでアッラーの使徒は彼女に「あなたはまず優しさを見せなければいけない」と言って……以下は前記と同様のハディースを語った。

動物などを呪うことの禁止

イムラーン・ビン・フサインは伝えている

アッラーの使徒がある旅の途中でしたが、一人のアンサールの女性が雌ラクダに乗っていたところ、そのラクダが座り込んでしまいました。
そこで彼女はそれを呪いました。
それを聞いていたアッラーの使徒はこう言いました。
そのラクダの荷を解いてやりなさい。
そしてそれを自由にしてやりなさい。
なぜならそれは呪われているからです。
ところでイムラーンはつづけて次のように伝えている。
私は今でもそれ（雌ラクダ）が人々の間を歩いている様子を目の当たりに見る思いです。
そしてそれは誰一人として注意を向ける者はいませんでした。

イムラーンは次のように伝えている

私はあたかもその白毛と黒毛の混ざった雌ラクダを今眼前に見ている思いです。
またサカフィーのハディースでは「その荷を解きなさい。
そしてその背をさらしなさい。
なぜならそれは呪われているからです」とある

アブー・バルザ・アスラミーが伝えている

一人の女奴隷が雌ラクダに乗っていました。
そしてそのラクダにはその外にも人々の荷物の一部が乗せられていました。
彼女が預言者に気付いたとき、山道が狭くなっている場所にさしかかっていました。
そこで彼女は（ラクダに向って怒って）こう言いました。
先に進め、アッラーよ、このラクダを呪いたまえ。
すると預言者は「呪いのかかった雌ラクダを我々の連れにしてはならない」と言った。

スライマーン・タイミーは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。
ただしムウタミルの伝えるハディースでは次のように伝えている

いけません。
アッラーに誓って、アッラーに呪われたラクダを我々の連れにしてはならない。
あるいは前記と同様の言葉を言ったとしている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったと伝えている

スィッデーク（信心深い人）は呪いをかける者になってはならない。

アラー・ビン・アブドル・ラフマーン（中途伝承者の一人）は同様なハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

ザイド・ビン・アスラムが次のように伝えている

アブドル・マリク・ビン・マルワーン（注 1）はウンム・ダルダーウ（注 2）に彼のもとから様々な部屋の飾りを贈った。

そしてある夜アブドル・マリクが目覚めて彼の召使いを呼んだとき、あたかも召使いは遅れて入って来たようだった。

そこでアブドル・マリクは彼を呪った。

翌朝ウンム・ダルダーウは彼（アブドル・マリク）に次のように言った。

私は昨晩あなたが召使いを呼んだとき、彼を呪う声を聞きました。

私は夫のアブー・ダルダーウからアッラーの使徒が次のように語ったと聞いています。

呪いをかける者は復活の日、執り成し人にも証人にもなれないだろう。

（注 1）ウマイヤ朝第四代カリフ

（注 2）マディーナのハズラジュ族出身のアブー・ダルダーウの妻。

多分彼の二度目の若い妻で夫の死後にウマイヤ朝の創始者のムアーウィヤに結婚を申し込まれるがそれを断る。

多分こうした経緯があって彼女はウマイヤ朝の宮廷内で一定の影響力を有していたものと思われる

ザイド・ビン・アスラムは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

ウンム・ダルダーウは（夫の）アブー・ダルダーウからアッラーの使徒が次のように語ったところを聞いたとして伝えている

本当に復活の日、呪いをかける者は証人にも執り成し人にもなれないであろう。

アブー・フライラは次のように伝えている

預言者は「アッラーの使徒よ、多神教徒に呪いをかけて下さい」と云われた。

すると彼は次のように言った。

私は呪うために遣わされたのではありません。

私は慈悲をかけるために遣わされたのです。

預言者が呪ったり中傷したりする者で、しかし彼がそれに当てはまらない場合には、その者には逆に身の潔白と報償と慈悲が与えられること

アーイシャが次のように伝えている

アッラーの使徒を二人の男が訪れた。そして二人は私の知らない事について話しかけていたが、遂に彼を苛立たせた。
そこで彼は二人を呪い中傷した。
そして二人が退出すると私はこう言った。
アッラーの使徒よ、誰でも何か良いことを得て帰るのにこの二人は何も得ませんでしたね。
そこで彼は「どうしてだね？」と言ったので私は「あなたが二人を呪って中傷したからです」と言った。
すると彼はこう言った。
あなたは私が主に次のように言って条件を付けたことを知らないですか？
アッラーよ、私は人間です。
私が呪ったり、中傷したりしたムスリムには誰にでも潔白と報償をお与え下さい。

アアマシュは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。
ところでイーサーの伝えるハディースでは次のようになっている。
二人は彼と個人的な会合を持った。
そこで彼は二人を中傷し、呪った。
そして彼は二人を追い出した。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アッラーよ、私は人間です。ですから私が中傷したり、あるいは呪ったり、あるいは鞭打ったりしたムスリムには誰にでも身の潔自と慈悲をお与え下さい。

ジャービルは前記と同様のハディースを伝えているがここでは「身の潔白と報償とを……」となっている。

アアマシュは前記と同様のハディースを伝えている。

ところでイーサーの伝えたアブー・フライラのハディースでは「そして報酬を」となっており
ジャービルのハディースでは「そして慈悲を」となっている。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

アッラーよ、私はあなたが決して私に破らせることのない誓約をあなたとの間に行います。
しかし私は人間です。

私が傷つけたり、罵倒したり、呪ったり、鞭打ったムスリムには誰にでもこれに免じて祝福と身の潔白と復活の日にはあなたのおそば近くに近付けるような接近とをお与え下さい。

アブー・ジナードは前記と同様のハディースをわずかに言葉を変えて伝えている。

アブー・フライラは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったところを聞いたとして伝えている

アッラーよ、ムハンマドは人間です。
人が怒るように彼（自分）も怒ります。
そして私は確かにあなたのもとで、あなたが決して私にそれを破らせない誓約を行いました。
それで私が傷つけたり、中傷したり、鞭打ったりした信者には誰にでもそれに免じて何かの償いと復活の日にあなたのもとに近付ける接近とをお与え下さい

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語っているところを聞いたとして伝えている

アッラーよ、私が中傷した下僕の信者には誰にでもこのことに免じて復活の日にはあなたへの接近をお与え下さい。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったところを聞いたとして伝えている

アッラーよ、私はあなたの許しのもとにあなたが私にそれを決して破らせない誓約を行いました。
故に私が中傷したりまたは鞭打ったりした信者には誰でもそのことに免じて復活の日には何かの償いをお与え下さい。

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語っているところを聞いたとして伝えている

私はただの人間にすぎません。
そして私は至高にして偉大なる我が主に、私は自分が中傷したり、罵ったりしたムスリムの信者には誰にでもそのことに免じて身の潔白と報償とをお与え下さることを条件付けました。

イブン・ジュライジュは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

かつてウンム・スライム（アナスの母）のもとに一人の女の孤児がいました。
そしてアッラーの使徒がその孤児を見てこう言いました。
あなたが彼女ですか？
あなたは十分大きくなった。
もうこれ以上年をとらないように。
それからその孤児はウンム・スライムの所に泣きながら帰って来ました。
そこでウンム・スライムが「かわい娘よ、どうしたの？」と尋ねるとその女奴隷はこう言いました。
預言者が私の年をこれ以上とらないようにと呪ったのです。
それでもう私の年は永久に増えないのです。
そこでウンム・スライムは頭のかぶりものを巻いて、急いでアッラーの使徒に面会するために出かけました。
そしてアッラーの使徒が「ウンム・スライムよ、いったいどうしたのですか？」と尋ねると、彼女は「アッラーの預言者よ、あなたは私の孤児を呪ったそうですね？」と言った。
そこで彼は「ウンム・スライムよ、それは一体何ですか？」と言った。
それで彼女はこう言った。
彼女（孤児）はあなたが彼女の年が増えないように、また彼女の年令が進まないようにと呪ったと言い張っています。
するとアッラーの使徒は笑いながらこう言った。
ウンム・スライムよ、私が我が主（アッラー）に条件付けた条件をあなたは知らないのですか？
私はこう言ったのですよ。
（主よ）私は人間です。
人が喜ぶように私も喜びます。
人が怒るように私も怒ります。
故に私のウンマの中で私が呪った人がそれに該当しない時には（どうか）復活の日にその者の浄化と身の潔白とまたあなたのそばに近づける接近とをお与え下さい。
アブー・マアンはハディースの中で三箇所使われている「孤児」という言葉を「小さな孤児」と縮小形で伝えている。

イブン・アッバースは次のように伝えている

私が子供達と一緒に遊んでいると、アッラーの使徒がやって来たので私はドアの後ろに隠れました。
しかし彼は（どんどん）やって来て私の肩を軽くたたくと「行ってムアーウィア（注）を呼んできなさい」と言いました。

こうして私は行って戻って来て「彼（ムアーウィヤ）は食事中です」と言いました。
すると彼はまた私に「行ってムアーウィヤを呼んできなさい」と言いました。
そこで私は行って戻って来ると「彼は食事中です」と伝えました。
すると彼は「アッラーが彼の腹を決して満腹にしないように」と言いました。
ところでイブン・ムサンナーはさらに次のように伝えている。
私はウマイヤに「私の肩をたたいたとはどんな意味ですか？」と尋ねました。
すると彼は「私の肩を一回ぽんとたたいた」の意味だと言いました。

（注）ウマイヤ朝の創始者の若き日のムアーウィヤのことであるが、彼の父アブー・スフヤーンはマッカ側のリーダーであった。
彼は父よりも先にイスラームに入信したが、多分この頃は預言者の書記のうちの一人であったと思われる
イブン・アッバースは前記と同様のハディースを僅かに言葉を違えて伝えている。

二つの顔を持つことの罪とその使い分けの禁止

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

極悪人のうちには二つの顔を持つ者がある。

こちらで一つの顔を見せておきながらあちらでは別の顔を見せる。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語っているところを聞いたとして伝えている

極悪人とは二つの顔を持つ者である。

彼はこちらでは一つの顔を見せておきながら、あちらでは別の顔を見せる。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた達は極悪人のうちには二つの顔を持った者がいることに気付くでしょう。

彼はこちらでは一つの顔を見せておきながら、あちらでは別の顔を見せる。

嘘の禁止とそれが許される場合

フマイド・ビン・アブドル・ラフマーン・ビン・アウフは彼の母ウンム・カルスームがアッラーの使徒が次のように語っているところを聞いたとして彼に語ったことを伝えている

嘘つきにならない場合は人々の仲裁をする時と、良いことを言う時と、良いことを言い広める時である。

ところでイブン・シハーアはさらにつづけて次のように語った。

私は人々が嘘をついても許される場合は次の三つのケース以外に聞いたことはありません。

それらは戦争と、人々の間の仲裁と、夫が妻に話したり妻が夫に話す場合です。

イブン・シハーブは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えているが、ここではわずかな言葉の違いが見られる。

ズフリーは前記と同様のハディースを伝えているが、彼は「良いことを言い広める」まで伝えてその後は伝えていない。

中傷の禁止

アブドッラー・ビン・マスウードはムハンマドが次のように語ったとして伝えている

私はあなた方に中傷とは何かについて話そう。

それは人々の間に不和を作り出すものである。

そしてムハンマドはさらにつづけて次のように言った。

真実を語る者は正直者と記録されるだろうし、また嘘を付く者は嘘付きとして記録されるだろう。

嘘の醜悪さと正直の美しさとその美徳

アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

正直は善行に導き、善行は天国へと導く。
そして本当に真実を語る者は正直者として記録される。
また嘘はよこしまへと導き、よこしまは地獄へと導く。
そして本当に嘘を付く者は嘘付きとして記録される。

アブドッラー・ビン・マスウードはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

まさに真実を語ることは善行である。
そして善行は天国へと導く。
本当に真実を話そうとつとめる下僕はアッラーのもとで正直者として記録される。
また嘘を付くことは邪道である。
そして邪道は地獄へと導く。
本当に敢えて嘘を付こうとする下僕はアッラーのもとで嘘つきとして記録される。
ところでイブン・アブー・シャイバはこのハディースを預言者から直接聞いたとして伝えている。

アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなたは真実を語る義務がある。
なぜなら正直は善行へと導き、善行は天国へと導くからである。
そして真実を話しつづけまた真実を話そうとつとめるとやがてアッラーのもとで彼は正直者として記録されることになる。
しかしあなた方は嘘には気を付けなさい。
嘘を付くことは邪道へと導き、邪道は地獄へと導く。
それで嘘を付き続けたり、あえて嘘を付くようになればやがてアッラーのもとで彼は嘘付きとして記録されることになる。

アアマシュは前記と同様のハディースを別の伝承者維路を経て伝えている。
またイーサーの伝えたハディースでは「真実を話そうとつとめる」「あえて嘘をつく」の部分は述べられていない。
またイブン・ムスヒルのハディースでは「アッラーがそれを記録するようになる」となっている。

怒った時に自らを押える者の美徳と怒りは何によって押えるか？

アブドッラー・ビン・マスウードはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方はあなた方のうちで誰をラクーブと見なすのですか？

そこで私達は「子供のいない人のこと（生れても父親より早く死んでしまう人）です」と言った。

すると彼は「それはラクーブなんかではありません。

ラクーブとはむしろ自分の子供をあの世の先駆者として見い出さない人のことです（注1）。」

そうしてさらに彼は「あなた方は誰をもってスラアと見なすのですか？」と言った。

そこで私達は「人々が誰も倒せない闘士のことです」と言った。

すると彼は次のように言った。

そうではなく、怒った時に自分自身を押さえることの出来る人のことです（注 2）。

（注 1）つまり通常の意味では子供に先立たれた悲しい父親を意味しているが、この悲しみに耐えることによってあの世の報償が約束されているのだから、あの世からの逆発想すれば彼はむしろ何も失っていないことになる

（注 2）ここでは人を力と技で倒す意味ではなく、悪魔の攻撃や誘惑をうまくかわすことの出来る人の意味で用いられている

アアマシュは前記と同様なハディースを別伝承者経路を経て伝えている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

本当の強さは戦う人の力にあるのではなく怒った時に自分自身を制御出来る人にあります。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

本当の強さは戦う人の力にあるのではない。

すると彼らは「アッラーの使徒よ、いったい誰にそれがあるのですか？」と尋ねた。

すると彼はこう言った。

それは怒った時に自分自身を制御することが出来る者である。

アブー・フライラは前記と同様のハディースを他の伝承者経路を経て伝えている。

スライマーン・ビン・スラドは伝えている

預言者の前で二人の男が罵り合った。
それでその一方の者の目が血走り頸動脈が肥大した。
するとアッラーの使徒はこう言った。
もしそれを言えば怒りが静まる一言を私は知っています。
それはアウーズ・ビッラーヒ・ミナッシャイターニッラジーム（注）という言葉です。
するとその男「あなたは私が気違いだと思っているのですか？」と言った。
ところでイブン・アラーウは上記の「するとその男は…」の代りに「すると彼は……」として伝えている。

（注）この文は「私は忌わしき悪魔から逃れてアッラーに救いを求めまつる」の意味であり、イスラームの悪魔払いの決り文句

スライマーン・ビン・スラドは伝えている

二人の男が預言者の前で罵り合った。
すると一方が顔を真赤にして怒りはじめた。
そこで預言者はそれを見てこう言った。
私はそれを一言いえば怒りが静まる言葉を知っています。
それは「アウーズ・ビッラーヒ・ミナッシャイターニッラジーム」という言葉です。
そのとき預言者のこの言葉を聞いた一人の男が立ち上って、その男の所へ行ってこう言った。
あなたはアッラーの使徒が今言われたことを知っていますか？
彼はこう言ったのです。
私はそれを一言いえば怒りが静まる言葉を知っています。
それは「アウーズ・ビッラーヒ・ミナッシャイターニッラジーム」という言葉です。
するとその男は「あなたは私を気違いだと思っているのですか？」と言った。
アアマシュは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

人間は自らをコントロール出来ないように創られていること

アナスはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アッラーが天国でアダムを形作ったとき、アッラーはみ心のままにそれを放っておいた。そこでイブリース（悪魔の別称）は彼（アダム）の周りを廻りながら彼を詳しく調べた。そして彼の空虚な内側を調べたとき、彼が自らをコントロール出来ないように創られていることを知りました。

ハンマードは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

顔を撲ることは禁じられている

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方の内の誰がムスリムの兄弟と相争うときでも相手の顔は避けなさい。

アブー・ジナードは前記と同様のハディースを伝えている。

しかしここでは「あなた方の誰が撲る時でも……」と伝えている。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

あなた方の誰がムスリムの兄弟と相争う時でも相手の顔は（傷つけないように）注意しなければならない。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方の誰がムスリムの兄弟と相争った時でも相手の顔を決して平手打ちしてはならない。

アブー・フライラはアッラーの使徒が語ったとして前記と同様のハディースを伝えたがイブン・ハーテムのハディースでは預言者が次のように語ったとして伝えている

あなた方の誰がムスリムの兄弟と相争う時でも相手の顔は避けねばならない。
なぜならアッラーはアダムを彼のイメージ（注）によって創られたからです。

（注）彼即ちアッラーのイメージは彼の形姿ともとれるところである。
ただしアッラーは有限ではあり得ないのでアッラーのレプリカやコピーなどは考えられない。
しかしアッラーのイメージの記憶であるアダムのレプリカならば考えられる

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方の誰がムスリムの兄弟と相争う時でも相手の顔は避けなければならない。

不当に人を虐待する者に対する厳しい結末（脅し）の約束

ウルワは彼の父からの伝聞として次のように伝えている

ヒシャーム・ビン・ハキーム・ビン・ヒザームはシリア地方で頭からオリーブ油をかけられて炎天下に立たされている人々のそばを通りかかった。
そこで彼が「これは一体どうしたというのですか？」と尋ねると彼はこう言われた。
「彼らはハラージュ（租税）を払わないので懲らしめているところです。」
そこで彼は「私はアッラーの使徒が次のように語っているところを聞きました」と言った。
本当にアッラーは現世で人を虐待する者を来世で懲らしめる。

ヒシャームは彼の父が次のように語ったとして伝えている

ヒシャーム・ビン・ハキーム・ビン・ヒザームはシリアの農民（注）がじかに太陽のもとに立たされているそばを通りかかった。
そこで彼は「彼らは一体どうしたのですか？」と尋ねた。
すると人々は「彼らはジズヤ（人頭税）を払わないので捕らえられたのです」と言った。
そこでヒシャームは「私は確かにアッラーの使徒が次のように語っているところを聞いたと証言します」と言った。
本当にアッラーは現世で人を虐待する者を来世で懲らしめます。

（注）彼らはナバタイ人の末裔であるとされている

ヒシャームは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。
ところでジャリールの伝えるハディースでは次の言葉が加えられている。
その当時パレスチナを治めていた彼らの知事はウマイル・ビン・サアドでした。
そこで彼（ヒシャーム）は彼を訪れてその事を話しました。すると彼（知事）は部下に命じて彼らを解放しました。

ウルワ・ビン・ズバイルは伝えている

ヒシャーム・ビン・ハキームはヒムス（ホムス）の統治者である男がジズヤ（人頭税）の支払いのことでナバタイ人の一部を炎天下にさらしているところを見た。
そこで彼は「これは何だね？
私はアッラーの使徒が次のように語っているところを聞きました」と言った。
本当にアッラーは現世で人々を虐待する者をば来世で懲しめるであろう。

武器を持ってモスクやスークなどの人が集まる場所を通る者は
その刃先や矢じりが人を傷つけないように掴まえておくことが命じられている

アムルはジャービルが次のように語っているところを聞いたとして伝えている

一人の男が弓矢を持ってモスクに来た。

するとアッラーの使徒は彼に「その矢じりをつかみなさい」と言った。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

一人の男が弓矢を持ってモスクにやって来た。

そしてその弓矢がむき出しだったので彼は他のムスリムを傷つけないようにその矢尻をつかんでいるように命じられた。

ジャービルは次のように伝えている

アッラーの使徒はモスクで弓矢を喜捨として配っている男にそれを持って歩く時には必ず矢尻をつかんでいるように命じた。

ところでイブン・ルムフは僅かな言葉を変えてこのハディースを伝えている。

アブー・ムーサーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

もしあなた方の誰でも集会場やスーク（市場）を弓矢を持って入る時には矢尻をつかまえていなければならない。

それからその矢尻をつかまえていなければならない。

それからその矢尻をつかまえていなければならない。

ここでさらにアブー・ムーサーは次のように言った。

アッラーに誓って（それ以来）我々は故意に弓矢を互いの顔に射かけない限り（不注意の怪我が元で）死ぬことがなくなりました。

アブー・ムーサーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方の誰でも我々のモスクやスークに弓矢を持って入る時にはその矢尻を手の平でつかんでいなければならない。

そうすればムスリムの誰も傷つけることがないでしょう。

あるいは彼は「その矢尻を握っていなければならない」と言った。

ムスリムを武器の先で指し示すことの禁止

アブー・フライラはアブー・カーシム（預言者の別称）が次のように語ったとして伝えている

彼の兄弟を武器でもって指し示す者はたとえ彼が血を分けた実の兄弟であっても天使は（彼がそれをそらさない限り）彼を呪いつづけるだろう。

アブー・フライラは預言者から聞いたとして前記と同様のハディースを別の伝承者の経路を経て伝えている。

アブー・フライラはアッラーの使徒からの多くのハディースを伝えているが、その中からアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方は誰でも兄弟を武器で指し示たりしてはならない。
なぜならいつ悪魔が彼の手元を狂わせるかわからないからである。
そして（人を傷つけたその結果）彼は地獄の業火へ落ちることになるかも知れないからである。

道路から歩行を邪魔する物を取り除く事は美徳

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

人が道路を歩いていて刺のある木の枝を道の真ん中に見付けたとき、彼はそれを脇に除いた。

するとアッラーは彼に感謝し彼の罪をお赦しになった。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ある人が道路に落ちている木の枝のそばを通りかかった時にこう言った。

アッラーに誓って、私はこれを取りのけてムスリムがこれで怪我をしないようにしよう。

その結果、彼は天国に入ることになった。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

私は一人の男が天国で歓待を受けているところを見た。

彼はかつて通行人に危害を加えていた木を道路面から切りとった人物だった。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

かつてムスリム達に危害を加えた一本の木があった。

そこへ一人の男がやって来てそれを切ってしまった。

その結果、彼は天国に入った。

アブー・バルザは次のように伝えている

私が「アッラーの預言者よ、何か得をすることを教えて下さい」と言ったところ、彼はこう言った。

「ムスリム達の道路から障害物を取り除きなさい。」

アブー・バルザは次のように伝えている

私はアッラーの使徒に次のように言いました。

アッラーの使徒よ、もしあなたがいなくなったら、あなたの後どのように生聞いていったらよいのか分かりません。

どうかアッラーが私を役立たせることを何かお授け下さい。

するとアッラーの使徒は次のように言った。

こうしなさい。ああしなさい（途中伝承者のアブー・バクルはここまで預言者が言ったことを忘れてしまったのだが）、そして道路から障害物を取り除きなさい。

猫や人に害を与えない動物を虐待することの禁止

アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ある女性が猫の事で（来世で）罰せられた。

なぜなら彼女はそれが死ぬまで閉じ込めて置いたからである。

それで彼女は地獄に落ちたのです。

彼女は閉じ込めている間それに決して食物や飲み物をやらなかったし、またその猫が地面の昆虫すら食べられないようにそれを決して解き放さなかったのです。

イブン・ウマルの前記同様のハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。
そしてそれらの一つにアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ある女性が猫を縛った事で（来世で）罰せられた。

つまり彼女はそれに食べ物も飲み物も与えなかった。

更に地面の昆虫も自由に食べさせなかった。

アブー・フライラは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アブー・フライラはアッラーの使徒からの多くのハディースを伝えたがその中で次のハディースをアッラーの使徒が語ったとして伝えている

ある女性が彼女の雌猫あるいは牡猫のために地獄に落ちた。

つまり彼女はそれを縛って食べ物を与えなかったからであり、さらに猫が地面の昆虫でさえ食べられないように自由にもしてやらなかったからである。

尊大な態度をとることの禁止

アブー・サイード・フドリーと**アブー・フライラ**の二人はアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アッラーは次のように仰せられた。
栄光はわれの下着であり、尊厳はわれの上着である。
ゆえにわれよりそれを脱がせようとする者（注）にはわれは必ず懲罰を下す。

（注）アッラーに挑戦しようとする者の意で多神をおし立てようとする徒輩の意

至高なるアッラーの慈悲に絶望することの禁止

ジュンダブはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ある男が「アッラーに誓って、アッラーは誰其を絶対にお赦しにならない（注）と言った。
しかし至高なるアッラーはこう仰せられた。
われは誰其を赦さないとわれにかけて誓う者、その者の行為をば抹消し（逆に）誰其をば赦すであろう。

（注）来世における人の運命の判定はアッラーの権限であり、人間が勝手に判定を下したことは神に対する越権行為という大罪につながる恐れがある

弱者と虐げられている人々の徳

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

髪をボサボサにして埃まみれになっている人の多くは戸口で追い返されますが、もし彼がアッラーに誓いを立てて祈ったならば必ずその祈りは叶えられるはずである。

「その人々は滅ぼされてしまえ」という言葉は使用禁止

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

もし人が「その人々は(みじめに)滅ぼされてしまえ」と言ったときには彼自身が（みじめに）滅びたのである。

ところでアブー・イスハークは次のように述べている。

私は「彼自身が滅びたのである」と言ったのか、あるいは「われが彼らを滅ぼすであろう」と言ったのか分からない。

スハイルは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

隣人に対する親切

アーイシャはアッラーの使徒が次のように語っているところを聞いたとして伝えている

天使ジブリールは私に隣人に対して（親切にするようにと）印象付けつづけたので、とうとう私は彼が隣人に対してもきっと財産の相続をさせるつもりなのだと考えたくらいです。

アーイシャは前記と同様のハディースを他の伝承者経路を経て伝えている。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

天使ジブリールは私に隣人に対して（親切に扱うようにと）印象付けるものですから、とうとう私は彼が隣人にも相続権を与えるつもりなのだと考えるようになった位です。

アブー・ザッルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アブー・ザッルよ、あなたはスープを作る時には少し水を足しなさい。

そしてあなたの隣人にそれを分けてやりなさい。

アブー・ザッルは「私の親友（預言者）が私に次のように忠告した」として伝えている

スープを作る時には少し水を足しなさい。

そしてあなたの隣人の家族構成を確かめてから、彼らにそのスープの中から出来る限りよそってあげなさい。

人と会った時には笑顔を向けることは推奨される

アブー・ザッルはアッラーの使徒が次のように彼に語ったとして伝えている

善行の内でどんなさいなことであっても馬鹿にしてはいけない。

たとえばあなたが兄弟に出会った時に笑顔で接するといったことであっても。

イスラーム法に触れない事柄について仲介の労をとることは推奨される

アブー・ムーサーは次のように伝えている

かつてアッラーの使徒は彼の所に困って助けを求めて人がやって来ると、彼の同席者達の方を向いてこう言ったものでした。

仲介の労をとってやりなさい。

そうすれば報償が得られましょう。

だが（イスラーム法に触れる事だったら）アッラーが自ら最も望まれることを彼の預言者の口を通して裁決される。

信仰深い人々との同席と悪い仲間を遠ざけることは勧められること

アブー・ムーサーは預言者が次のように語ったとして伝えている

良い付き合いと悪い付き合いをたとえるなら、香水売りと鍛冶屋のふいごの一吹きのようなものである。

香水売りは試しにぬってくれても、あなたが彼からそれを買ったとしてもそれはあなたに良い薫りを漂わせる。

一方ふいごの一吹きはあなたの服を焦すか、さもなくば厭な匂いをかがされるだけです

娘達に対する親切の美徳

預言者の妻**アーイシャ**は次のように伝えている

私の所へ一人の女性がやって来ました。

そのとき彼女は自分の二人の娘を連れていました。

そして彼女は私に物乞いをしましたが、私はそのときタムル（乾燥ナツメヤシ）一個しか持っていませんでした。

それで私はそれを彼女にあげました。

すると彼女はそれを受け取ると二人の娘に分けてやりましたが、彼女は何も食べませんでした。

それから彼女は立ち上がり二人の娘と共に出て行きました。

それで私は預言者が私の所を訪れた折りにこの話を彼にしました。

すると預言者はこう言いました。

娘達によって試練を受けた者（注）で彼女達に対して親切にしてやった者には彼女達が彼のために火獄の火から身を守るカーテンとなるであろう（つまり地獄から彼を守ってくれるだろう）。

（注）イスラーム以前のアラブは男児が生れることを期待するあまりに女児の誕生を極端に不名誉なことと考えていた。

部族によっては女児をそのまま生き埋めにして自らの名誉を守ったとしていた。

この辺の事情が試練を受けたという表現をとっているものと思われる

アーイシャは次のように伝えている

二人の娘を抱えた貧しい女性が私の所へやって来ました。

それで私は彼女に三個のタムルを食べ物としてあげました。

すると彼女は二人の娘にそれぞれ一個ずつそれを与え残りの一個を彼女は食べようとして口に持って行きました。

そのとき二人の娘がそれを欲しがりました。

それで彼女は彼女が食べようとしていたそのタムルを二人に分け与えました。

そこで私は彼女のこの行為にひどく驚きました。

それで私は彼女の行ったことをアッラーの使徒に話しました。

すると彼はこう言いました。

本当にアッラーはそのことにより彼女を天国に入れることを決めました。

あるいはその事により彼女を火獄から解放しました。

アナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

二人の女奴隷を成人するまで正しく育てた者は復活の日には私と彼（育てた者）はこのような関係です。

そして彼は指を合わせた（二人の関係が緊密である表示）。

息子の死の不幸に際して神の意志に自らを委ねる者の美徳

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

　　ムスリムで三人の子供を死なせた者は誰でも地獄の業火に触れることはない。

　　ただし誓いを破っていれば別だが。

ズフリーは前記と同様のハディースをマーリクを通して伝えているが、スフヤーンのハディースでは「誓いを破らなければ火獄に入ることはない」となっている。

アブー・フライラはアッラーの使徒がアンサールの一部の婦人たちに次のように語ったとして伝えている

　　あなた方の内で男の子供を三人なくした人は誰でも天国に入る。

　　すると彼女達の中の一人の婦人が「アッラーの使徒よ、それがもし二人であってもですか？」と尋ねた。

　　すると彼は「たとえ二人であってもです」と言った。

アブー・サイード・フドリーは次のように伝えた

　　一人の婦人がアッラーの使徒の所にやって来てこう言った。

　　アッラーの使徒よ、男達はあなたの教訓を手にしました。

　　どうか私達にもあなたの都合の良い日に伺いますからアッラーがあなたに教えたことを教えて下さい。

　　すると彼は「それならこれこれの日にあなた達は集まりなさい」と言った。

　　そこで彼女達は集まった。

　　それでアッラーの使徒は彼女達の所へやって来ると、アッラーが彼に教えたことを彼女達に教えた。

　　それから彼はこう言った。

　　あなた方の内で三人の子供に先立たれた婦人には（来世で）彼らが地獄の業火からあなた方の身を守るベールとなるでしょう。

　　すると一人の婦人が「それで二人では、二人では、二人ではどうですか？」と言った。

　　そこでアッラーの使徒はこう言った。

　　たとえ二人でも、二人でも、二人でも。

アブー・フライラは彼（預言者）が次のように語ったとして伝えている

　　三人（の子供）は罪が記録される年令に未だ達しないうちに亡くなった子供達である。

アブー・ハッサーンは次のように伝えている

私はアブー・フライラに「私の二人の子供が死んだ。

この死別から我らの心を慰めてくれるハディースをアッラーの使徒から伝え聞いていますか？」と尋ねました。

すると彼はこう言った。

はい、小さな子供達は天国の鳥である。

彼らの一人が父親、（あるいは両親と言った）に会えば彼の服、（あるいは彼の手と言った）をつかまえてちょうど今私があなたの服の端をこのようにつかまえているように（しっかりと）つかんでアッラーが彼と彼の父親を天国に入れて下さるまで離しません。

ところでタイミーが伝えているハディースではこう言っている。

彼は「あなたはアッラーの使徒から我々の心をこの死別から慰めてくれるハディースを何か聞きましたか？」と尋ねた。

そこで彼は「はい」と言った。

アブー・フライラは次のように伝えている

ある婦人が彼女の子供を連れて預言者の所へやって来てこう言った。

アッラーの預言者よ、この子のためにアッラーに祈って下さい。

私はもう三人の子供を埋葬しました。

すると彼は「三人を埋葬したのですと？」と言った。

それで彼女が「はい」と答えると、彼は次のように言った。

もうあなたは火獄からはしっかりと守られています。

アブー・フライラは伝えている

一人の婦人が彼女の息子を連れて預言者の所へやって来てこう言った。

アッラーの使徒よ、この子は病気で苦しんでいます。

この子が心配です。私はすでに三人の子供を埋葬しています。

すると彼は「あなたはもう火獄からしっかりと守られています」と言った。

もしアッラーが下僕（注）を愛すればその者を他の下僕が愛するようにさせること

（注）これまでに何度も出てきたアッラーの下僕とは人間のことである。
創造者アッラーとは元来主人とその下僕の関係にあるべき姿としての人間を意味している

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
アッラーはある下僕を好ましいと思うと天使ジブリールを呼んでこう言います。
われは誰其を好ましいと思う。
ゆえに彼を愛しなさい。
するとジブリールは彼を愛するようになります。
それから天界では彼が次のように呼びかけます。
アッラーは誰其を愛しておられる。
ゆえにあなた方も彼を愛しなさい。
それで天界の住人は皆彼を愛するようになる。
それから地上では彼のためにその受け入れが行われる。
またアッラーがある下僕に怒った時にはジブリールを呼んでこう言います。
われは誰其に怒っている。ゆえに彼に怒りなさい。
そこでジブリールは彼を怒るようになる。
それから彼は天界の住人に「アッラーは誰其を怒っておられる。
ゆえに彼を怒りなさい」と呼びかける。
すると彼らは彼を怒るようになる。
それから地上では彼に怒りが与えられる。

スハイルは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。
しかしアラーウ・ビン・ムサイブの伝えるハディースでは「怒り」についての記述はない。

スハイル・ビン・アブー・サーリフは次のように伝えている
私達が（巡礼で）アラファアの野にいたとき巡礼のためにやって来たウマル・ビン・アブドル・アズィーズ（注）が通りかかりました。
すると人々は彼を一目見ようと一斉に立ち上がりました。
そこで私は父にこう言いました。
お父さん、私はアッラーがウマル・ビン・アブドル・アズィーズを愛していると思います。
すると彼は「それはどうしてだね？」と尋ねました。
そこで私は「なぜなら人々の心の中に彼に対する愛情があるからです」と答えました。

すると彼はこう言いました。
あなたの父を創造されたお方に誓って、私はアブー・フライラがアッラーの使徒から伝聞したハディースを聞きました。
そして彼はスハイルの伝えた前記と同様のハディースを伝えました。

（注）ウマイヤ朝第八代のカリフで敬神の念厚く、世俗的でアラブ優先主義的な同朝のカリフの中では特異な存在である。
預言者の正義と禁欲主義的イスラーム主義を貫き、次代の政敵アッバース朝の人々からも敬われ、その結果アッバース革命の際にも彼の墓だけはウマイヤ家の唯一の例外としてあばかれることはなかった。
母方の祖々父が第二代カリフ・ウマルに当るためかイスラーム史ではウマル二世と呼ばれている。
また後世の人々からは四代正統カリフにつぐ、第五代正統カリフと称せられているケースもあるが、結果として彼の一貫したイスラーム主義的諸政策はアラブ帝国内の多数住民のイスラームへの改宗を促したものの税収の激減をもたらし、そのために王朝の国庫と経済基盤を弱くして王朝の崩壊を早めたとも言われている

魂は徴兵された軍隊である

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

魂は徴兵された軍隊である。
ゆえにお互いに良く知り合えばそれより強く結ばれる事になる。
しかしお互いに反発しあえばバラバラに離れてしまうものです。

アブー・フライラは預言者からの伝聞として次のハディースを伝えている

人間は（それぞれ）金や銀のような鉱物である。
ジャーヒリーヤ時代において優れた人物は、イスーラーム時代においても、もし彼がこの宗教を理解するならやはり優れた人物である。
また魂は徴兵された軍隊である。
ゆえにお互いに良く知り合えば、それはより強く結ばれることになる。
しかしお互いに反発しあえば、バラバラに離れてしまうものです。

人は彼が愛する者と共にいる

アナス・ビン・マーリクは伝えている
一人の遊牧民がアッラーの使徒に「終末はいつですか？」と尋ねた。
するとアッラーの使徒は「あなたはそれに備えて何をしていますか？」と逆に尋ねた。
そこで彼は「アッラーの使徒への愛です」と答えた。
するとアッラーの使徒はこう言った。
それなら、あなたはあなたが愛した者と（終末の日に）一緒に居るでしょう。

アナスは次のように伝えている。
ある男が「アッラーの使徒よ、終末はいつですか？」と尋ねた。
すると彼は「あなたはそれに備えて何をしていますか？」と逆に尋ねた。
しかしその男はそれについて詳しく述べることはしなかったが「しかし、私はアッラーとその使徒を愛しています」と言った。
すると預言者は次のように言った。
それならあなたはあなたが愛している者と共にいるでしょう。
またアナス・ビン・マーリクは次のようにも伝えている。
一人の遊牧民の男がアッラーの使徒の所にやって来た。……
以下は前記と同様のハディースであるが、ここでは彼は次の一文を付け加えている。
私は終末に際して自分自身を褒める程の多くのものを準備していませんでした……。

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている
一人の男がアッラーの使徒の所にやって来て「アッラーの使徒よ、終末はいつですか？」と尋ねた。
すると彼は「あなたはそれに備えて何をしましたか？」と逆に尋ねた。
そこで遊牧民は「アッラーとその使徒を愛することです」と言った。
すると彼はこう言った。
それなら、あなたはあなたが愛する者と共に居ることになるでしょう。
ところでアナスはさらにつづけて次のように伝えている。
イスラームに入信した後で預言者のこの言葉「それなら、あなたはあなたが愛する者と共に居ることになるでしょう」ほどに私達を喜ばせたものはありません。
なぜなら私はアッラーとその使徒をまたアブー・バクルとウマルをも（含めて）愛しているからです。
そして私はたとえ彼らと同じ行動をとれなかったとしても彼らとはいつも一緒にいたいと願っていたからです。

アナス・ビン・マーリクは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。
ただしここでは「なぜなら私はアッラーとその使徒……」以下のアナスの言葉は述べられていない。

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

私と、アッラーの使徒がモスクから出て来たとき、その扉の敷居の所で一人の男に会いました。

そしてその男は「アッラーの使徒よ、終末はいつですか？」と尋ねました。

そこでアッラーの使徒は「あなたはそれに備えて何をしましたか？」と言いました。

するとその男はしばらく沈黙してからこう言いました。

アッラーの使徒よ、私はそのためにことさら多くの任意の礼拝や断食や喜捨をしませんでした。

しかし私はアッラーとその使徒を愛しています。

そこで彼（預言者）は次のように言いました。

それならあなたはあなたが愛する者と共にいることになるでしょう。

アナスは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アナスは前記と同様のハディースを様々な伝承者経路を経て伝えている。

アブドッラーは次のように伝えている

一人の男がアッラーの使徒の所にやって来て次のように尋ねました。

アッラーの使徒よ、ある男が人々を愛していますが、彼の行為や行動は人々のそれとは一致しない場合にあなたはどうお考えですか？

そこでアッラーの使徒は「人は彼が愛する者と共に居るものです」と言った。

アブドッラーは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アブー・ムーサーは次のように伝えている

一人の男が預言者の所にやって来た。

以下は前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

品行正しい人が称讃されればそれは彼にとって福音であること

アブー・ザッルは次のように伝えている

アッラーの使徒は「あなたは善行をなす男を人々が称讃することをどう思いますか？」と尋ねられた。

すると彼は次のように答えた。

それは信者に対する（来世の）福音の前ぶれです。

シュウバは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

ただしアブドッサマド以外のハディースでは「人々は彼をそのことで愛している……」と伝えている。

またアブドッサマドのハディースではハンマードが伝えているように「人々は（彼を）称讃する……」となっている。

定命の書

母の体内における人間の創造の仕方、ならびに彼の生計、寿命、行為、不幸と幸福などの彼の運命について

の間のアブドッラー・ビン・マスウードは話すことでは最も正直で啓示されたものには最も信頼の置ける人物であるアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方の誰でもそうだが、母親の体内で 40 日間でその組織が集められ、その後同様の日数で凝血となる。

それから同様にして肉塊となる。

そして天使が遣わされてそれに魂を吹き込む。

それで天使は四つの言葉（を書くこと）を命ぜられる。

それは胎児の生計と寿命と行為と幸不幸を書き留めて決定することである。

彼以外に神はないお方に誓って、あなた方の誰かが天国に今にも手が届きそうな位いの立派な行いをしながら、最後に彼の（運命の）定めが彼に先行して、遂に地獄の住人になる行為をしてしまう。

そしてそこに入ってしまうこともある。

また一方あなた方の誰かが地獄の住人になる行為をしつづけて、彼とその間が今にも手が届きそうな位になったとき、彼の（運命の）定めが彼に先行して彼は天国の住人になる行為をする。

その結果彼は天国に入ることになる。

アアマシュは前記と同様のハディースを伝えているが、ワキーウの伝えるハディースでは「あなた方の創造は母親の体内で 40 夜で結集される」とあり、またムアーズがシュウバから伝え聞いたハディースでは「40 日夜」となっている。
さらにまたジャリールとイーサーのハディースでは「40 日」となっている。

フザイファ・ビン・アシードは預言者が直接彼に次のように語ったとして伝えている

天使は精液が子宮に 40 夜あるいは 45 夜留まった後にやって来てこう言います。

主よ、この子は幸福ですかそれとも不幸ですか？

そしてこれらのことが書き留められる。

また天使は「男ですか女ですか？」と言い、そしてこのことが書き留められる。

また彼の行為やその影響や寿命や生計も同様に書き留められる。

それからそれらが書かれた紙が巻きあげられ（注）以後はそれに付け加えられることも省

略されることもない。

（注）おそらく折りたたむよりも掛け軸のような紙を巻きあげて巻き紙にする方であろう

アブドッラー・ビン・マスウードは次のように伝えている

不幸な人は母の体内で不幸を決められた者である。

また幸福な人は他人から教訓を得た者である。

そこで伝承者のうちの或る者がアッラーの使徒の教友の一人でフザイファ・ビン・アシード・ギファーリーという人の所に行ってイブン・マスウードの伝えたこのハディースを話してから次のように尋ねた。

どうして人は行為によらないで不幸になるのでしようか？

するとその男は答えて次のように言った。

あなたはそれに驚いているようだが私はアッラーの使徒が次のように語っているところを聞きました。

精液が子宮に入って 42 夜たつとアッラーはそこへ天使を遣わす。

そして外形を決め聴覚と視覚と皮膚と肉と骨格を創造する。

それから天使は「我が主よ、男性それとも女性にしますか？」と言います。

するとあなたの主は望むままに（それを）決定し、天使はそれを書き留める。

次に天使が「我が主、寿命は？」と言うと、あなたの主は望むままにそれを決定され天使はそれを書き留める。

それから天使は手に運命の書き付けをもつて出て来る。

するともう彼が命じられたこと以上のことを加えられることも減ぜられることもない。

アブドッラー・ビン・マスウードは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アブー・トゥファイルは次のように伝えている

私がアブー・サーリフ・フザイファ・ビン・アシード・ギファーリーを訪れたとき、彼こう言った。

私はアッラーの使徒が次のように語っているところを自分のこの両耳で聞きました。

精液が子宮で 40 夜留どまると、次に天使がそれに形を与える。

ただしズハイルは「私は彼がそれを創造すると言ったと思う」と伝えている。

それから天使は「我が主よ、男性ですかそれとも女性ですか？」と言う。

そこでアッラーは男性かあるいは女性にする。

それから天使は「我が主よ、手足を完全にしますかあるいは不完全にしますか？」と言います。

そこでアッラーはそれを完全かあるいは不完全にする。

それから天使は「我が主よ、彼の生計は、寿命は、性格はいかにしますか？」と言います。
そしてアッラーは彼を不幸かあるいは幸福かにする。

アブー・トゥファイルはアッラーの教友の一人のフザイファ・ビン・アシード・ギファーリーがアッラーの使徒から直接聞いた次のハディースを伝えている

アッラーは四十数夜（の間）になにかを創造しようとするとき、代理の天使を子宮に遣わす……

以下同様のハディースを伝えている。

アナス・ビン・マーリクは次のハディースを（預言者からの）直接の伝聞として伝えている

アッラーは子宮に天使を代理として遣わした。
そこで天使は「我が主よ、今は精液の状態です。
我が主よ、今は凝血の状態です。
我が主よ、今は肉塊の状態です」と言う。
そこでアッラーは人の創造を決心する。
それで天使はこう尋ねます。
「我が主よ、男にしますか女にしますか？
幸せにしますかそれとも不幸にしますか？
生計はどれほどにしますか？
寿命は？」
そして母の体内でそれらが書き留められます。

アリーは次のように伝えている

私達が葬儀の埋葬のためにガルカド墓地（注 1）にいると、アッラーの使徒が私達の所へやって来て腰を下ろしたので、私達は彼の周りに腰を下ろしました。
そのとき彼は杖を持っており頭を低く垂れると、その杖で地面に線を引きはじめました（注 2）。
それから彼はこう言いました。
あなた方の誰一人として、またいかなる魂も全てアッラーが天国と地獄にその場所を定めない者はいない。
また幸不幸の運命を定められなかった者はいない。
すると一人の男が次のように言った。
アッラーの使徒よ、我々は我々の定めに従っていることになりますが（それならば我々の行為の意味は何でしょうか？）我々は我々の行為を止めることができますか？
すると預言者は次のように言った。
彼が（もともと）幸福な人々の仲間であれば、彼は幸福な人々の行う行為に向って行くでし

ょう。
また彼が（もともと）不幸な人々の仲間であれば、彼は不幸な人々の行う行為に向かって行くでしょう。
そして彼（預言者）はつづけてさらに次のように言った。
全てあなた達のやり易いように行いなさい。
なぜならば幸福な人々にとっては彼らの行為の方がやり易いのであり、不幸な人々にとっては彼らの行為の方がやり易いからです。
それから彼（預言者）は次のクルアーンの数節を朗誦した。
「さて施しをなし、主を畏れる者、そして神の意図を固く信ずる者そういう者にはわれは至福への道のりをさらに容易にしよう。
だがけちで強欲で神の意図を嘘だと否定する者そういう者にはわれは苦難への道をばさらに容易にしてやろう（注 3）」（第 92 章 5-10 節）

（注 1）マディーナの墓地で今日ではジャンナトバキーウ墓地として知られている。
それはマディーナの南東の郊外にあり町の城壁の外にある。
ここには第三代カリフ・ウスマーンや預言者の妻達や預言者の叔父のアッバース、孫のハサンその他多くの教友達が眠っている

（注 2）砂漠の民の思索時の動作を示している。
砂漠の占い師もよくこのような動作を行う

（注 3）皮肉な表現で苦難への道が既に用意されてあり、そうした道をさらに歩ませようの意

マンスールは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。
しかしここでは彼は「アッラーの使徒は木の枝を取って……」と伝え「杖」とは言っていない。

アリーは次のように伝えている
ある日、アッラーの使徒は地面に座って手にした枝で線を引いていました。
そして彼の頭を上げるとこう言いました。
あなた方の魂の中で、天国と地獄におけるその（行きつく）場所が知られていないものは一つもありません。
すると人々は次のように尋ねました。
アッラーの使徒よ、それならなぜ私達は善行を行わなければならないのですか？
私達は全て運命に従っているのではありませんか？
すると彼（預言者）は次のように言いました。

いいえ、善行を行いなさい。
なぜなら誰しもそれが創造された目的にそって全て容易に感ずるものであるからです。
そして彼は次のクルアーンの一節を朗誦した。
「さて施しをなし、主を畏れる者、そして神の意図を固く信ずる者そういう者にはわれは至福への道のりをさらに容易にしよう。
だがけちで強欲で神の意図を嘘だと否定する者そういう者にはわれは苦難への道をばさらに容易にしてやろう」（第 92 章 5-10 節）

アリーは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

ジャービルは次のように伝えている
スラーカ・ビン・マーリク・ビン・ジュウシュムがやって来てこう言った。
アッラーの使徒よ、私達は今、創造されたばかりの状態にいる者として、私達の宗教を明らかにして下さい。
今日ただ今の（我々の）行為は筆が乾いてしまった（つまり既に天簿に書かれて定まってしまったの意）結果であり、そしてその定めは既に実行されつつある結果ですか？
それともこれらは未来に影響を及ぼすということなのでしょうか？
すると彼はこう言いました。
いいえ、筆は乾いてしまい（注）その定めはすでに実行されている結果の方です。
そこでスラーカは「それなら何のために善行をしなければならないのですか？」と言った。
ところでズハイルは次のように伝えた。
それから伝承者のアブー・ズバイルは私の理解できない何事かを話しました。
そこで私は彼が何と言ったのか尋ねました。
すると彼は次のように言った。
（善行を）行いなさい。
なぜならいずれ人は全て容易なことを行うもの。

（注）つまりアッラーのマスタープランには変更などあり得ないとの立場

ジャービル・ビン・アブドッラーは前記と同様のハディースを伝えたが、ここではアッラーの使徒は次のように語っている
行為者は誰でも自らの行動には容易さを感じるもの。

イムラーン・ビン・フサインは次のように伝えている
誰かが「アッラーの使徒よ、天国の住人と地獄の住人は前もってはっきりと区別されているのですか？」と言った。

そこで彼が「そうです」と云うと、「それならば行為者は何のために行動すればよいのですか？」と尋ねられた。
すると彼はこう言った。
行為しなさい。
なぜならばそのために創造されたことに対しては誰でも容易だと感じるものだ。

ヤジード・リシュクは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アブー・アスワド・ディアリーはこう伝えている
イムラーン・ビン・フサインは私に次のように言った。
あなたは人々が今日、行っている事や一生懸命やっていることが既に彼らに決められたことであり、以前に定められたところの運命を経過しているにすぎないと思いませんか？
あるいは彼らの預言者が伝えた教えそれに従って彼らが行動しなかったとして、彼らにとって不利な証拠が確定したという事実によって、彼らの未来の運命は決定されているとは思いませんか？
そこで私は次のように答えた。
（いいえ）でも確かにそれは彼らにとって既に決定されているし、予定されている事です。
すると彼は「そうだとすればそれは罪ではありませんか？」と言った。
それで私はその言葉にひどく怯えてこう言いました。
全てのことはアッラーの創造の所産であり、彼の手に委ねられているのです。
彼（アッラー）は自分の行うことについて尋ねられることはないが、彼らの方は尋ねられます。
すると彼（イムラーン）は私にさらに次のように言った。
アッラーがあなたを祝福なさいますように。
私は決してあなたに尋ねたようなことを望んでいた訳ではありません。
ただあなたの知識を試したかっただけです。
さてムザイナ族の二人の男がアッラーの使徒の所にやって来てこう言ったことがありました。
アッラーの使徒よ、人々が今日行っている事や、一生懸命になっていることは既に彼らに決められたことであり、以前に定められたところの運命を経過しているにすぎないと思いませんか？
あるいは彼らの預言者が伝えた教え、それに従って行動しなかったとして彼らにとっては不利な証拠が確定したという事実によって彼らの未来の運命は決定されているとは思いませんか？
そこで彼（預言者）は次のように言った。
いいえ、しかし確かにそれは彼らにとって既に決定されているし、予定されていることです。

その正しさの証明はアッラーの教典（クルアーン）の中にあります。
即ちそれは次の一節である。
「魂にかけて、またそれを創りあげたお方にかけて、そして邪悪と信心をそれ（魂）に吹き込んだお方にかけて（誓おう）」（第 91 章 7-8 節）。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
天国の住人になれる行いを長い間行ってきた男が最後の行為を地獄の住人になってしまう行為で終える。
また長い間、地獄の住人に入れられる行いをして来た男が最後に天国の住人になれる行いで彼の行為を終える（注）。

（注）人間は宿命によって悪ばかりまたは善ばかり行,うことを強制されているわけではない。
人はアッラーのマスタープランに従って善から悪へ悪から善への行動を自らの意志によって選択することがわかる

サハル・ビン・サアド・サーイディーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
天国の住人になる行為を人前で行っている人が実は地獄の住人であり、また地独の住人になる行為を人前で行っている人が実は天国の住人である。

アダムとモーゼ議論

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アダム（アーダム）とモーゼ（ムーサー）が議論をした。

まずモーゼがこう言った。

アダムよ、あなたは我々の父です。

そしてあなたは我々に損害を与えました。

あなたは我々を天国から追い出しました。

そこでアダムは彼に次のように言った。

あなたはモーゼです。アッラーが彼の言葉で（直接に話しかけて）あなたをお選びになった。

そしてアッラーはご自分の手（権能）であなたのために（聖典、トーラ）を書かれた。

それなのにあなたはアッラーが私を創造する 40 年も前に私についてお定めになった事で私を非難するのですか？

ここで預言者は次のように言った。

こうしてアダムはモーゼを言い負かした。

こうしてアダムはモーゼを言い負かした。

ところでイブン・アブー・ウマルとイブン・アブダの伝えるハディースでは一人が「綴った」と伝え、他の一人は「彼（アッラー）は彼の手であなたのためにトーラを書いた」と伝えている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アダムとモーゼは互いに議論した。

そしてアダムがモーゼを言い負かした。

さてモーゼは彼にこう言った。

あなたは人々を間違って導き、彼らを天国から追い出したではないか？

するとアダムはこう言った。

あなたはアッラーが全ての知識をお授けになった人です。

そして彼は彼の使徒としてあなたを選ばれた。

するとモーゼは「その通りだ」と言った。

そこでアダムは次のように言った。

それでもあなたは私が未だ創造される以前に私について定められたことで私を非難なさるのですか？

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アダムとモーゼは彼らの主のもとで互いに議論をした。

そしてアダムはモーゼを言い負かした。

さてモーゼはこう言った。

あなたはアッラーがご自分の手で創造されたアダムです。

そしてあなたの中に彼の魂を吹き込まれた。

そして天使をしてあなたにひれ伏させた。

そしてまたあなたを彼の天国に住まわせた。

それからあなたはあなたの過ちによって人々を地上に堕落させましたね？

するとアダムは次のように言った。

あなたこそアッラーが彼の大命とお言葉によって預言者としてお選びになったモーゼではありませんか？

またアッラーはあなたに全ての事柄が明らかにされている石板をお与えになりました。

そしてあなたを秘かにお近付けになった。

一体あなたはアッラーがトーラを書かれたのは私が創造されるどれ位い前だと思いますか？

それでモーゼは「40 年前です」と言った。

するとアダムは「あなたはその中に次の一節を見い出しませんか？」と言った。

「こうしてアダムは主に背き、過ちを犯した」(クルアーン第 20 章 121 節)

そこでモーゼは「はい」と答えると、アダムは次のように言った。

アッラーは私を創造される 40 年前に私が行うことをすでにお決めになられました。

そして私はそれを決められた通りに行ったのです。

それなのに、あなたは私を非難するのですか？

ここでアッラーの使徒はこう言った。

こうしてアダムはモーゼを言い負かした。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アダムとモーゼが議論した。

まずモーゼが彼に「あなたはあなたの過ちで天国を追放されたアダムです」と言った。

そこでアダムは彼に次のように言った。

あなたはアッラーが彼の大命とお言葉によって預言者に選ばれたモーゼではありませんか。

それでもあなたは私が創造される以前にアッラーが私についてお定めになった事で私を非難するのですか？

こうしてアダムはモーゼを言い負かした。

アブー・フライラは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アブー・フライラは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースはアッラーの使徒が次のように語っているところを聞いたとして伝えている

アッラーは天地を創造される五万年前に全ての被造物の予定を決定された。

そしてそのとき彼の王座は水の上にあった。

アブー・ハーニーは前記と同様のハディースを伝えている。

しかしここでは「そしてそのとき彼の王座は水の上にあった」という一文は伝えていない。

至高なるアッラーは人の心を自在に変える

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースはアッラーの使徒が次のように語ったところを聞いたとして伝えている

アダムの子孫の心は全て慈悲深きお方（アッラー）の二本の指の間にある一個の心（注）のようなものである。

それで彼は自在にそれを変えることが出来る。

それからアッラーの使徒は次のように言った。

アッラーよ、心を変える者よ、私達の心をあなたに従順になるように変えてください。

（注）アッラーに指があるわけがないのだが、アラビア語の語法によれば二本の指の間にあるものは自由自在にされることを意味する

全ての事柄は決められた定めによる

ターウースは次のように伝えている

私はアッラーの使徒の教友の何人かの人々が「全ての事柄は決められた定めによる」と言っていることを知りました。

また私はアブドッラー・ビン・ウマルからもアッラーの使徒が次のように語ったと聞きました。

全ての事柄は決められた定めによる。

つまりそれは無能さや才能までも、あるいはその才能や無能さまでもそうである。

アブー・フライラは次のように伝えている

クライシュ族の多神教徒たちが定命についてアッラーの使徒と議論するためにやって来た。

すると次のクルアーンの一節が啓示された。

「業火の中に顔を下にして引きずり込まれるその日、かれらは『猛火の触れ具合をとっくりと味わってみよ』(と言われよう)。

げにわれは全ての事物をきちんと定めて創造したり」(第 54 章 48-49 節)(注)。

(注)物事が存在する以前にその知識を有し、それに対する創造の意志を持ち計量を含めた定めを付帯した上で創造した意

アダムの子孫が姦通やそれに類する罪を犯す機会の定めについて

イブン・アッバースは次のように伝えている

私はアブー・フライラが次のように伝えたハディースほど小過失（注）に酷似したものは見たことがない。

さてそれでアブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている。

アッラーはアダムの子孫に姦通を行う機会を定めた。

そしてその男はそれを避けられないものと感じるであろう。

それで両目の姦通とは淫らな視線であり、舌の姦通とは卑猥な話しである。

また心はそれを欲し性交を熱望する。

そして性器はそれを実現するか、あるいは実行しないかのどちらかである。

（注）過失に大過失と小過失がある。

前者は背信行為などのとり返しのつかないものだが後者は前者を避けた者についてはアッラーが大目に見て赦して下さるとクルアーン（第 53 章 32 節）で述べられている

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

アダムの子孫には姦通を犯す割り当てが定められた。

そして当事者はそこから抜け出せないと感じているはずである。

それで両目の姦通は淫らな視線であり、両耳の姦通は猥談を聞くことである。

また舌の姦通は卑猥な話しをすることであり、手の姦通は卑猥な抱擁のために捕まえることである。

また足の姦通はそれを行う場所に行くことである。

心は欲望で一杯になり、それを熱望する。

そして性器はそれを実現するか、あるいは実行しないかのどちらかである。

「子供は全てフィトラ（本然の姿）を持って生れてくる」の意味と不信者の子供とイスラーム教徒の子供の死の意味判定について

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとしていつも言っていた

およそ子供は全てフィトラ（本然の姿）を持って生れて来ない者はない（注 1）。

しかしその両親がユダヤ教徒にしたり、キリスト教徒にしたり、マニ教徒にするのである。

それは丁度家畜が常に五体満足の家畜を生むようなものである。

あなた方はそこに何か欠陥を見い出せますか？（注 2）。

それからさらにアブー・フライラはつづいて「もしお望みなら次のクルアーンの一節を誦んでみなさい」と言った。

「アッラーが人間を創造したときのそのままの本然の姿で、アッラーの創造に変更などあろう筈がない……」（第 30 章 30 節）。

（注 1）フィトラをもって生れて来るとは本然の姿で生れて来ることで、従ってイスラーム教徒として生れてくるといったように考えられている

（注 2）つまり耳の切れた家畜など五体不満足の家畜なども生れて来た時は完全な姿であったはずだの意

ズフリーは前記と同様のハディースを伝えた。
ただし彼は「それは丁度家畜が家畜を生むようなものである」として「五体満足の」とは伝えていない。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

およそ子供は全てフィトラによらないで生れて来る者はいない。

それから彼は「次のクルアーンの一節を朗誦しなさい」と言った。

「アッラーが人間を創造したときのそのままの本然の姿で、アッラーの創造に変更なぞある筈がない。それこそまさに真っ直ぐな宗教というものだ」（第 30 章 30 節）

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

およそ子供は全てフィトラ（本然の姿）によらないで生れてくる者はいない。

しかし両親が子供をユダヤ教徒にしたり、キリスト教徒にしたり、多神教徒にしてしまうのである。

すると一人の男が「アッラーの使徒よ、もし子供がそうなる以前に死んだらどうなるのですか？」と言った。

すると彼はこう言った。
アッラーだけが彼らの行ったであろうことをよくご存知だ。

アアマシュが前記と同様のハディースを伝えている。
しかしイブン・ヌマイルのハディースでは「生まれて来る子供でイスラーム教にそっていない者はいない」となっている。
またアブー・ムアーウィヤからの伝聞としてアブー・バクルが伝えたハディースでは次のように伝えている。
その子の舌がそれを明らかに出来るようになるまでイスラーム教の本然の姿以外で生れて来ない者はいない
また他の伝承者はアブー・ムアーウィヤが次のように語ったとして伝えている。
生れて来る者でこのフィトラ（本然の姿）でない者はいない。
そしてその子はそれを自分の舌で表現するまでこの姿でとどまる

アブー・フライラはアッラーの使徒から多くのハディースを伝えているが、その中から彼はアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
生れて来る者は本然の姿をもって生れて来る。
しかし両親が子供をユダヤ教徒にしたり、キリスト教徒にしたりするのである。
たとえば雌ラクダが子供を産んだとしたら、その子に手足の欠陥がありますか？
それはあなた方が傷つけるまでは正常です。
すると人々が「アッラーの使徒よ、それなら小さくて死んだ者はどうなるのですか？」と言った。
そこで彼は次のように言った。
アッラーだけが彼らが行ったであろうことをよくご存知だ。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
人間は皆母親が本然の姿をもって生んだ者である。
しかしその後で両親がその子をユダヤ教徒にしたり、キリスト教徒にしたり、マニ教徒にしてしまうのである。
ゆえにもし二人がイスラーム教徒であればその子はムスリムのままでいる。
人間は皆、母親が彼を誕生させるとシャイターン（悪魔）が彼の両脇を拳でたたく。
ただしマリヤと彼女の子（キリスト）の場合だけは例外である。

アブー・フライラはアッラーの使徒が多神教徒の子供達について尋ねられたときに次のように答えたとして伝えている
アッラーだけが彼らの行ったであろうことをよくご存知である。

シュアイブとマアキルは前記と同様のハディースをわずかに言葉を変えて伝えている。

アブー・フライラは多神教徒の子供達の内で幼くして死んだ者についてアッラーの使徒が尋ねられて次のように答えたとして伝えている

アッラーだけが彼らが行ったであろうことをよくご存知だ。

イブン・アッバースはアッラーの使徒が多神教徒の子供達について尋ねられたとき次のように答えたとして伝えている

アッラーだけが彼らを創造したときすでに彼らの行うであろうことをよくご存知である。

ウバイユ・ビン・カアブはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ハディル（注）が殺した少年は根っからの不信者と定められていた。
たとえ彼が生聞いていたとしても彼は（信仰をもった）両親を反抗する不信者にしてしまったはずだった。

（注）前にも出てきたモーゼ（ムーサー）が同行した話しに登上する人物だが一説には預言者イリヤスの別称とも言われている

信者の母**アーイシャ**は次のように伝えている

ある少年が死んだので私は「彼は幸運です、天国の小鳥たちの一羽になるのだから」と言いました。するとアッラーの使徒はこう言った。
あなたはアッラーが天国と地獄をお創りになり、それぞれにその住人をもまたお創りになったことを知らないのですか？

信者の母**アーイシャ**は次のように伝えている

アッラーの使徒がアンサールの少年の葬儀礼拝に呼ばれました。
そこで私がこう言った。
アッラーの使徒よ、その子は幸せです。
なぜなら彼は天国の小鳥たちの一羽になるのだから。
彼は何も悪いことをしていなかったし（たとえそれを行っても）罰せられる年令にも達していなかったのですから。
すると彼は次のように言った。
アーイシャよ、あるいはそうでないかも知れないよ。
なぜならアッラーは天国のためにその住人を創造したのです。
それも彼らがまだ祖先の腰につながっているうちに彼らをその住人として創造したのです。
またアッラーは地獄のためにその住人を創造したのです。

それも彼らがまだ祖先の腰につながっているうちに彼らをその住人として創造したのです。
タルハ・ビン・ヤヒヤーは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

寿命や生計などは以前に定められたものから増えもしなければ減少することもない

アブドッラーは預言者の妻ウンム・ハビーバが次のように語ったとして伝えている

アッラーよ、私の夫であるアッラーの使徒と私の父であるアブー・スフヤーンと私の兄のムアーウィヤをして私に末永く享受せしめたまえ。
すると預言者は次のように言った。
あなたはアッラーがすでに確定された寿命と定められた日数と分配済みの恵みを更に増やすようにお願いしましたね？
しかしアッラーは物事を決してその時が来る前に早めたりその時の後に延期したりはしません。
しかしもしあなたが火獄の責め苦または墓穴の責め苦からの助けをアッラーにお願いするのなら、それはあなたにとって良い事であり、またその方がずっとよいことです。
ここでアブドッラーはさらにつづけて次のように付け加えた。
そして彼（預言者）のもとで猿のことが話題にされた。
ところで伝承者の一人ミスアルは「私は彼（アッラー）が変形した豚についても言及したと思う」と伝えた。
いずれにせよ、そこで預言者はこう言った。
アッラーは子孫に変形を行わなかった。
また猿や豚はそれ（注）以前から既に存在していた。

（注）多分安息日の掟を破って猿と豚にされたイスラエルの民の話し（第 2 章 65 節）の事件以前という意味であろう

ミスアルは前記と同様のハディースを伝えている。
ただしイブン・ビシルとワキーウの伝えたハディースでは「火獄の責め苦と墓穴の責め苦から」となっている。

アブドッラー・ビン・マスウードはウンム・ハビーバが次のように語ったとして伝えている

アッラーよ、私の夫であるアッラーの使徒と私の父であるアブー・スフヤーンと私の兄であるムアーウィヤをして私に末永く享受せしめたまえ。
すると預言者は次のように言った。
あなたはアッラーに対して既に確定された寿命と歩みの定められている足跡と分配済みのみ恵みとを更に増やすようにお願いしましたね？
しかしアッラーは決して物事をその時が来る前に早めたり、その時の後に延期したりはしません。

仮にもしあなたが地獄の責め苦と墓穴の責め苦から守ってもらうべくアッラーにお願いしたのであれば、その方があなたにとってずっと良かったですよ。
すると一人の男が「アッラーの使徒よ、猿と豚は（安息日の掟を破ったイスラエルの民が）姿を変えられた者達なのですか？」と質問した。
すると預言者はこう言った。
アッラーは（理由もなく）人々をみじめに破滅したり、または苦しめたりはしなかった。
むしろ彼らには子孫を繁栄させています。
猿と豚はそれよりも以前から存在していたのです（注）。
スフヤーンは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えているが、ここでわずかな言葉の違いが見られる。

（注）仏教的論理からみれば人間と動物の魂の等価性に基ずく輪廻転生の思想からもわかるように人間と動物は因念によって結ばれている。
しかし家畜文化と食肉文化を前提とするイスラームにあっては食う立場と食われる立場からみても両者の間は永久に断絶していなければならない

強さの勧めと弱さの放棄について、またアッラーに援助を求める事と既に定められた事についてはアッラーにお任せすること

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

強い信者は好ましく、アッラーにとって弱い信者よりも愛すべき者である。

だがしかしどちらにもそれぞれ良い点が認められる。

いずれにせよあなたにとって(来世で)有益なものを一生懸命やりなさい。

そしてアッラーに助けを求めなさい。

決して諦めてはいけません。

そしてもしあなたに何か災難がふりかかって来ても「もしあの時こうしていたらこうこうこうだったのになあ」と言ってはいけません。

むしろこう言いなさい。

「これはアッラーの定め。彼が望んだことを行ったのだ。」

なぜならばこの種の「もし」という言葉は悪魔の仕業に道を開けるからです。

知識の書

クルアーン聖句についての相違論争に関して

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、次のクルアーンの聖句をお誦みになった。
「かれこそは、この経典をあなたに下さる方で、その中のある節は決定的で、それらは経典の根幹であり、他の節は比喩的である。
そこで心のよこしまな者は、比喩的な部分にとらわれ、その隠された意味の欠陥を求めて、それに勝手に解釈を加えようとする。
だが、アッラーのほかには、その真の意味を知るものはない。
それで知識の基礎が堅固な者はいう。
『私たちは、これ（クルアーン）を信じる。
これは全て主から、賜ったものである』だが、思慮ある者のほかは、反省しない。」（第 3 章 7 節）
アーイシャによれば、み使いはこれに関連して次のように言われた。
「あなた方がそのような言葉に従う者をみた場合、同じようにしてはなりません。
彼らはアッラーがクルアーンの中で指摘し、警告なさった者たちです」

アブー・イムラーン・ジャウニーは伝えている

アブドッラー・ビン・ラバーフ・アンサーリーは、アブドッラー・ビン・アムルの言葉を次のように書いて私に知らせてくれた。
私（アブドッラー・ビン・アムル）は或る朝、アッラーのみ使いの処に行った。
その時、み使いは、二人の男がクルアーンの或る聖句に関して異った意見をのべて議論している声をきかれた。
み使いは、私たちの処に出てこれらたが、お顔に怒りの表情を示しながら、「あなた方以前の人々は、聖典の言葉について論争したために滅びたのです」と言われた。

ジュンダブ・ビン・アブドッラー・バジャリーは伝えている

アッラーのみ使いは、「あなた方が共感するかぎり、クルアーンを誦みなさい。
そして、もしも違和感をもった場合には、誦むのをやめて立ちなさい」と言われた。

ジュンダブ（イブン・アブドッラーのこと）は伝えている

アッラーのみ使いは、次のように言われた。

「あなた方の心が同調するかぎり、クルアーンを誦みなさい。

そして、もしも、なにか違和感をもった場合には（誦むのを中断して）立ち上がりなさい」

ジュンダブは私たちに次のように語った

私たちがまだ若く、クーファに住んでいた頃、アッラーのみ使いは「クルアーンを誦みなさい」と言われた。

このハディースの後半は、前記二種のハディースと同内容である。

激しい口論について

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、「アッラーの御目からみて、最もいやしむべき人々は、人と激しく論争を行なう者たちである」と言われた。

ユダヤ教徒やキリスト教徒の轍を踏むことについて

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは、「あなたたちは、ほんの僅かずつ進んでゆき、あなたたち以前の者らと同じ轍を踏むことになるであろう。

たとえば、もしも彼らがとかげの穴に入ろうとしたならば、あなたたちも彼らに従うことだろう」と言われた。

それに対し、私たちが「み使い様、以前の者らとはユダヤ教徒やキリスト教徒のことですか」というと、み使いは「彼ら以外にだれがあるのですか」と言われた。

前記と同内容のハディースは、**ザイド・ビン・アスラム**によっても伝えられている。

前記と同内容のハディースは、また、**アター・ビン・ヤサール**によっても伝えられている。

些事にこだわる者について

アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは、「些事にこうでいする者は滅びる」といわれ、三度この言葉を繰返された。

無知がはびこり騒乱が生じることについて

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは次のように話された。

「“最後の時”にみられる兆候とは、知識が消滅し、無知が世の中にはびこり、飲酒が行なわれ、姦通が盛んになることである」

カターダは伝えている

アナス・ビン・マーリクは次のように語った。

「私がアッラーのみ使いからおききしたハディースの中で、私の死後には恐らくだれも語ることのない私だけが知っているハディースを話してはいけませんか。

み使いはこういわれました。

『最後の時の兆しとは、知識が消滅し、世に無知がはびこり、姦通が盛んになり、飲酒が行なわれ、男子の数が減り、女子が不均衡に多くなり、そのため一人の男子が 50 人もの女子の面倒をみるようになることなどである』」

アナス・ビン・マーリクによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・ワーイルは伝えている

私がアブドッラーおよびアブー・ムーサーと一緒に座っている時、彼らは、アッラーのみ使いの言葉を次のように話した。

「“最後の時”が間近に迫るころには、知識は滅び、無知がはびこり、騒乱や流血の暴動が増えるだろう」

前記と同内容のハディースは、**アブドッラー・**ビン・マスウードおよび**アブー・ムーサー・**アシュアリーによっても別に二種の伝承者経路で伝えられている。

前記と同内容のハディースは**アブー・ムーサー**によって更に二種の伝承者経路で伝えられている。

アブー・ワーイルは伝えている。

私はアブドッラーおよびアブー・ムーサーが話し合っていた時、共に座っていた。

この時、アブー・ムーサーは（前記と同内容のハディースを）語った。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「“最後の時”が近づくと、知性は覆われ、災害がおこり、人々の貪欲心が強くなり、暴動が増えます」と言われた。

人々が「どんな暴動ですか」とたずねると、み使いは、「流血の暴動です」と言われた。

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

預言者はこう言われた。

「“最後の時”が近づくと、人々の知識は減少してゆくだろう」

このハディースの後半は前記と同内容である。

別の伝承者経路で伝えられた**アブー・フライラ**によるハディースには、“人々の貪欲心が強くなる”という言葉は記されていない。

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「まことにアッラーは人々から知識を取りあげて、消滅なさるのではない。

アッラーは学者らを連れ去ることで知識を取りあげてしまわれるのである。

それ故、アッラーが学者を残さなくなると、人々は無知なる者を彼らの指導者たちに選び、彼らが教えを乞うと、その指導者たちは、なんらの知識もないのに、彼らに説教を行なおうとする。

そのため人々は自ら迷い、他人をも迷わせてしまうのである」

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースによる前記と同内容のハディースは、他にも幾つかの伝承経路で伝えられているが、伝承者の一人ウマル・ビン・アリーによるハディースには次の言葉がみられる。

「私は、ある年の初め頃、アブドッラー・ビン・アムルに会い、彼に質問した。

この時、彼は、アッラーのみ使いから聞いたと言って、前記と同内容のハディースを私たちに語ってくれた」

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースによる同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

ウルワ・ビン・ズバイルは伝えている

アーイシャは私に「私の姉妹の息子よ！

アブドッラー・ビン・アムルが巡礼の途中、私たちの処を通ると聞いています。

彼は預言者から、数多くの知識を受けている人故、あなたは彼に会い、いろいろと質問しなさい」といった。

それで私は、彼に会い彼がアッラーのみ使いから聞いて話した様々なことについて質問した。

その折、彼は次のように語った。

預言者は「まことにアッラーは人々から直接知識を取り去るわけではない。

アッラーは学者たちを連れ去ることで、人々から知識を取り去り、人々の中で無知な者を指導者として残されるのである。

彼らは知識もなく、人々に説教するので人々は迷い、また、他の人々をも迷わせてしまうのである」と言われた。

私が、この話をアーイシャに告げた時、彼女は注意深く聞いた後、納得しない様子で私に対し、「彼は、あなたにその言葉を預言者がいわれるのを聞いたと話したのか」とたずねた。

次の年のことであるが、アーイシャは私に「イブン・アムルが巡礼のためやってきた。

それ故、彼に会い、昨年あなたに彼が語ったハディースについて質問しなさい」といった。

それで私は彼に会い、それについて質問したのであるが、彼は昨年と全く同じ話を私に語ってくれた。

私がこのことをアーイシャに告げると、彼女は「イブン・アムルは真実を語ったと考える以外にありません。

私が思うに彼はこの話になにもつけ加えず、また、なにも省いてはいないようです」といった。

善行や悪行を勧める者について

ジャリール・ビン・アブドッラーは伝えている

粗衣（スーフ）を着け砂漠に住むアラブ人たちが、アッラーのみ使いの処にやってきた。
み使いは彼らが困窮し、なにかを必要としている状態であることをごらんになった。
それでみ使いは人々に彼らのためサダカ（喜捨）を与えるよう説いたが、人々はなかなか同情しようとはせず、み使いのお顔にはいらだちの様子がみられた。
この時、アンサールの一人が銀貨の入った財布をもってやって来た。
そしてその後にも、他の者がやってきた。
その後も同様の人々がつづき、預言者のお顔に喜びの色がみられるようになった。
この折、アッラーのみ使いは次のように言われた。
イスラームにおいて、人々につづいてまねされるほどの善行を為した者は、それにつづいた人共々報酬を受ける。
それらはいかなる点においても軽減されることはない。
またイスラームでは他人によってまねされるような、なにか悪行を為した場合、それに従った者も同様に罪を負うことになり、いかなる点でもそれらは軽減されることはない。

ジャリールは伝えている

アッラーのみ使いは、説教の中で人々に、サダカ（喜捨）を行なうよう勧められた。

ジャリール・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは、言われた。
「他人がまねするほどの善行を為さない者は……」
以下は前記のハディースと同内容である。

ムンジルは彼の父ジャリールより聞いて前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは次のように言われた。
正道に人を導く者には、その彼に従う者共々報酬が約束される。
彼らの報酬はいかなる点でも軽減されることはない。
誤った道に人々を誘う者は、罪の重荷を、彼に従う者共々負うことになる。
彼らの罪はいかなる点においても軽減されることはない。

ズィクルの書

アッラーへの想念について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

アッラーは次のように宣言された。

「私のしもべが、私に想いを馳せれば馳せるほど、私は、しもべの近くにいるであろう。

しもべが私の名を唱えるほど、私は彼と共にいるであろう。

もしもしもべが私を想念すれば、私も心で彼を想うであろう。

もしもしもべが私を集会の場で想念すれば、私もまた、集会の場で彼をもっとよく想い出すであろう。

もしも、しもべが手の長さほどでも私に近づくならば、私は腕の長さほど彼に近づくであろう。

もしも、彼が腕の長さほど私に近づくならば、私は両手を伸ばした長さほど彼に近づくであろう。

もしも、しもべが私にむかって歩いてくるならば、私は彼の方に走ってゆくであろう」

前記と同内容のハディースは、**アアマシュ**によっても伝えられているが、表現に多少の異同がみられる。

ハンマーム・ビン・ムナッビフは語っている

これは、アブー・フライラがアッラーのみ使いから聞いて語ったハディースの一つである。

み使いは言われた。

アッラーは次のように宣言なさった。

「私のしもべが、手の長さほど私に近づくならば、私は、彼に腕の長さほど近づくであろう。

もしも、しもべが腕の長さほど私に近づくならば、私は両手をのばした長さほど彼に近づくであろう。

また、もし、しもべが私に両手をのばした長さほど近づくならば、私は、彼の処に急ぎ行くであろう」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いはマッカに至る道を進んでいた時、ジュムダーンとよばれる山をお通りになった。

この折、み使いは「進みなさい。

これはジュムダーン山です。ムファッリドゥーンは、先の方を進んでいます」と言われた。

人々が「み使い様、ムファッリドゥーンとはなんですか」と聞くと、み使いは「アッラーを多く祈念する男女のことです」と言われた。

アッラーの御名について

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。「アッラーには 99 の名前がある（注）。
それらを記憶する者は天国に入るであろう。
まことに、アッラーは奇数者であられ、奇数を好まれる」

（注）アッラフマーン（慈悲者）、アル・マリク（統治者）、アル・ハーリク（創造者）、アル・ガッファール（寛恕）、アル・マジード（栄光者）などアッラーの属性を表す 99 の名前でよばれる

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。「アッラーには 99、即ち 100 に一つ足りない御名がある。
これらの名を記憶する者は天国に入るであろう」
ハンマームは預言者から聞いてアブー・フライラが伝えたこのハディースに「アッラーは唯一であり、奇数を好まれる」という言葉を付している。

確信をもって祈願することについて

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

祈願する時には、確信をもって行なわねばならない。

「おおアッラーよ、もしあなたが望むならば、お与え下さい」と言ってはならない。

アッラーに強制できる者はいないからである。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

祈願する時、「おおアッラーよ、もし、あなたがそのように望むならば、私を許してください」と言ってはならない。

アッラーに対しては、明確な意志と願いをもって祈らねばならない。

アッラーがお与えになれないほど重要なものは、なにもないからである。

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。

あなた方は、アッラーに対して「おおアッラーよ、もしもあなたがそう願うなら私をお許し下さい」

「おおアッラーよ、もしあなたがそう願うなら私に慈悲を下さい」などと言ってはならない。

祈願は、受け入れられるという信念をもって祈られねばならない。

なぜならアッラーは、望むままになに事であれなされる御方であり、あれこれをするよう、アッラーに強制できる者はいないからである。

死への願いを禁ずることについて

アナス・ビン・マーリクは伝えている
　アッラーのみ使いは言われた。
　困難にまきこまれたからといって、死を望んで祈ってはならない。
　もしもその時他に救いがない場合次のよう祈りなさい。
　「アッラーよ、私にとって生きることがより善であるかぎり私を生かして下さい。
　また、もしも私にとって死がよりよければ私を死なしめて下さい」

アナスによる前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

ナドル・ビン・アナスは伝えている
　まだ存命だったアナスは「もしもアッラーのみ使いが、『死を望んで祈願してはならない』と言われなかったならば、私は必ずやそうしたに違いない」と語った。

カイス・ビン・アブー・ハーズィムは伝えている
　私は、腹部に七ケ所の火傷を負ったハッバーブを見舞ったが、その時、彼は「もしもアッラーのみ使いが、私たちに死を願うことを禁じなかったならば、私は死を望み祈ったであろう」と語った。

前記と同内容のハディースは**イスマイール**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

ハンマーム・ビン・ムナッビフは伝えている
　アッラーのみ使いから聞いてアブー・フライラが伝えた話に次のハディースがある。
　み使いは言われた。
　「あなた方は死を望んで祈願してはならない。
　死が訪れる前に、死を祈願してはならない。
　なぜならば、あなた方が死ねば、善行を為し得なくなるからである。
　信者の生命は善行をするため以外に延ばされることはないからである」

アッラーにまみえることについて

ウバーダ・ビン・サーミトは伝えている

アッラーの預言者は、言われた。

アッラーにまみえることを望む者にアッラーもまた会うことを望まれる。

アッラーにまみえることを嫌う者には、アッラーもまた会うことをお嫌いになる。

ウバーダ・ビン・サーミトによる前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが「アッラーに会いたいと望む者にアッラーも会うことを望まれ、アッラーに会うのを嫌う者には、アッラーも会うことを嫌われる」と話した時、

アーイシャは「アッラーの預言者様、死は忌み嫌われるものではありませんか。

私たちは皆、死ぬことは嫌です」といった。

これに対し預言者は次のように言われた。

「そういう意味ではありません。

信者が死の床に臥して、アッテーの慈悲や、アッラーの祝福、また、天国についてのよき知らせを受ける時、人はアッラーに会うことを願い、アッラーもまた彼に会うことを願うのです。

また、不信仰者がアッラーの罰や怒りについて知らされた時、彼はアッラーに会うことを嫌いアッラーもまた、彼に会うのを嫌われるのです。

前記と同内容のハディースは**カターダ**によっても同様の伝承者経路で伝えられている。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラーに会うことを願う者にアッラーもまた会いたいと願われる。

また、アッラーに会うのを嫌う者には、アッラーも会うことを嫌われる。

アッラーにまみえる以前に死は訪れるのである」

アーイシャによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられる。

シュライフ・ビン・ハーニーはこう伝えている

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いは「アッラーにまみえたいと望む者に、アッラーは会いたいと願い、アッラーにまみえたくないと願う者にアッラーも会うことを嫌われる」と言われた。

私（シュライフ・ビン・ハーニ—）は、アーイシャの処に行き、次のように言った。

「私はアブー・フライラがアッラーのみ使いの言葉を語るのを聞きましたが、もしも話の通りであるならば、私たちにとっては破滅的なことです」

それに対し、アーイシャは「み使いの言葉によって破滅する者は、当然、破滅するような運命なのでしょう。

それにしても、一体なに事ですか」と言った。

私はこの折、「み使いは『アッラーにまみえたいと望む者にアッラーも会いたいと望まれ、アッラーにまみえたくないと願う者には、アッラーも会うことを嫌われる。』と言われましたが、私たちの中には死を嫌わない者はおりません」と述べた。

アーイシャは、これに対し次のように話した。

「実際、み使いはそう言われたのですが、あなたの理解するような意味ではありません。それは、人が目に光を失い、喉をぜいぜいならし、身体に震えが起り、指が痙攣する時、即ち、死を迎える時『アッラーにまみえたいと願う者にアッラーもまた会いたいと望み、アッラーに会うのを嫌う者にアッラーも会うことを嫌われる。』と言われたのです」

前記と同内容のハディースは**ムタッリフ**によっても同内容の伝承者経路で伝えられている。

アブー・ムーサーは伝えている

預言者は「アッラーにまみえたいと願う者にアッラーは会うことを望まれ、アッラーに会うのを嫌う者にはアッラーもまた会うのを嫌われる」と言われた。

アッラーへの祈願の功徳について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

アッラーは「私は、私を想うしもべの想念の中におり、そして、また、私の名を唱えるしもべと共におるであろう」と宣言された。

アブー・フライラは伝えている

預言者は、次のように言われた。

アッラーは「私は、しもべが私の手の長さほど近づく時、彼に腕の長さほど近づき、もしも、しもべが腕の長さほど近づくならば、両手を伸ばした長さほど彼に近づくであろう。

そして、もしも、しもべが私の方に歩いてくるならば、私は彼の方に走って行くであろう。」と述べられた。

前記と同様のハディースは、別の伝承者経路で伝えられている。
ただし、それには「そして、もしもしもべが私の方に歩いてくるならば私は彼の方に走って行くであろう」は述べられていない。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

アッラーは「私は私のしもべの想念の中におり、私の名を唱えるしもべと共におる。

もしも、しもべが私を心で想うならば、私も彼を心で想うであろう。

そしてまた、もしもしもべが私の名を集会の場で想うならば、私もまた集会の場で、彼よりももっとよく、彼を想うことだろう。

もしも彼が、手の長さほどでも私に近づくならば、私は腕の長さほど彼に近づき、もしも彼が腕の長さほど私に近づく場合には、私は両手をのばした長さほど彼の方に近づくであろう。

そして、また、しもべが歩いて私の方に来るならば、私は彼に向かって走って行くであろう」と言われた。

アブー・ザッルは伝えている

アッラーのみ使いはこう言われた。

アッラーは、「善行をもって至る者には、同様の十倍、もしくは、それ以上のものが与えられる。

また、悪行をもって至る者には、同様のもの一つが与えられるか、もしくは、許しが与えられる。

私に、手の長さほど近づく者があれば、私は腕の長さほど彼に近づく。
またもし、腕の長さほども私に近づく者があれば、私は両手をのばしたほども彼に近づくであろう。
また、私に歩み近づく者に対しては、私は急ぎ近づくであろう。
また、地上を満たすほどの罪行をもって私に会う者があっても、もし彼が私を他のなにものにも比肩しないかぎり、私はそれと同じほどの広い寛恕の念をもって、彼に会うことだろう」と言われた。
前記と同内容のハディースはアアマシュによっても同じ伝承者経路で伝えられている。

現世で罪を罰するよう祈願することについて

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは或るムスリムを見舞った。

その時彼は憔悴し切って丁度雌鳥のように弱っていた。

み使いは、彼に、「なにか病気のことでアッラーに祈願しましたか」と言われた。

これに対し、彼は、「はい、私はいつも『アッラーよ、来世であなたが私にお与えになる罰の代りに、現世で私を罰して下さい』と祈願しています」と答えた。

み使いはこれに対し、「アッラーを讃美します！」と唱えてから「あなたには、（アッラーの罰の厳しさに耐え得る）力もなく、辛抱もできないでしょう。

どうしてあなたは『アッラーよ、現世でも善を、来世でも善をお与え下さい。

そして業火の責苦からお救い下さい』と祈願しないのですか」と言われた。

み使いは彼のため、アッラーに祈願なさったが、彼はそれによって快復した。

前記と同内容のハディースは、**フマイド**によっても同様の伝承者経路で伝えられているが最後の文章は述べられていない。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは教友の一人を見舞ったが、彼は雌鳥のように衰弱しきっていた。

以下は、表現に多少の異同がみられるが、前記と同内容である。

アナスによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

ズィクルの功徳について

アブー・フライラは伝えている

預言者様は次のように言われた。

「アッラーには一群の絶えず移動する天使がついており、彼らはズィクルの集会があると、それに参加するのを常としている。

天使たちは、ズィクルの集会があると人々と共に座る。

人々と天使の間は天使たちの翼で、満たされ覆われるほどになる。

ズィクルが終り人々が散会すると天使たちは天に昇る。

アッラーは、元より彼らについてご存知であるが、彼らに『どこから来たのか』改めて問われる。

それに対し、彼らは、『私たちは地上のあなたのしもべらの処から来ました。

彼らは、スブバーナッラー！と唱えてあなたを讃美し、アッラーフ・アクバル！と唱えてあなたの偉大さを讃え、ラーイラーハ・イッラッラー！と唱えて、あなたの唯一性を証言し、アルハムド・リッラー！と唱えてあなたを賞讃しています。

また、あなたに懇願もしております』と答える。

これに対し、アッラーが、『彼らはなにを私に願っているのか』と問うと、天使たちは 『彼らはあなたの天国に入ることを願っています』と答える。

アッラーは、更に『彼らは私の天国をみたのか』とおたずねになるが、天使たちは『いいえ、主よ』と答える。

アッラーは、また彼らが『もし、私の天国をみたならば、どうするのか』と言われるが、天使らは『彼らはあなたの保護を願っております』と答える。

アッラーは、更にまた、『なにに対して彼らは私の保護を願うのか』と言われるが、天使たちは『主よ、あなたの業火からです』と答える。

アッラーは『彼らは私の業火をみたのか』と言われるが、天使たちは『いいえ』と答える。

アッラーは『彼らが私の業火をみたならばどうするのか』と言われるが、天使らは、この時『彼らはあなたの許しを願っております』と答える。

アッラーは、それに対し、次のように言われる。

『私は、彼らを許し、彼らの懇願するものを与え、彼らが願っていることに対し保護を与えるであろう』

天使たちは、また、この折、『主よ、しもべらの中には、罪を隠した某もおり、彼は、たまたま集会の傍を通りかかり、人々と一緒にそこに座っただけです』と述べるが、

アッラーは、『彼に対しても私は許しを与えよう。

集会に参加した者たちと席を共にした者が不幸であってはならないからである』といわれる」

祈願の功徳について

アブドル・アズィーズ（・ビン・スハイブ）は伝えている

カターダはアナスに「預言者はどのような祈願をもっとも多くなさったのですか」とたずねた。

それに対し、アナスは「しばしばお唱えになった祈願は『おおアッラーよ！

この世においても善を、来世においても善を私たちにお与え下さい。

業火の苦しみから私たちをお守り下さい』である」と答えた。

カターダは、また、次のようにも語った。

「アナスは、祈願する時には上記の言葉を必ず唱えた。

また、他の祈願を行なう場合でも、この言葉を必ずそれに入れて唱えた」

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは、祈願の折、次の言葉を常にお唱えになった。

主よ、この世においても善を、来世においても善を私たちにお与え下さい。

業火の苦しみから私たちをお守り下さい。

タフリール、タスビーフおよびドゥアー（祈願）の功徳について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

次の言葉、即ち「アッラーの他に神はなく唯一者にして彼には比肩すべき者はいない。

主権は彼にあり、讃美すべきは彼のみ。

彼は万能な御方であられる」を毎日一日回唱える者には 10 人の奴隷を解放するに等しい報酬が約束される。

そして 100 度の善行と記録されると共に、100 の誤まちが彼に関する記録簿から消される。

また、この言葉は、その日の夜まで、シャイターン（悪魔）からのお守りとなる。

だれもこれよりよいものを、100 回以上も多く唱え善を行なってこれ以上のことをする者を除き、復活の日に持って行ける者はいない。

また「アッラーを讃美します。

賞讃すべきは、アッラーのみです！」と毎日 100 回唱える者は、たとえ海洋の泡ほどに罪が多くても、犯したその罪を抹消される」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

朝にも晩にも次の言葉、即ち、「アッラーを讃美します。

全ての賞讃はアッラーのものです」と 100 回唱える者に比較して、復活の日これ以上秀れたものをもって行く者はないであろう。

ただし、これらの言葉をもっと多く唱え、また、これ以上に秀れた言葉を唱える者は別であるが」

アムル・ビン・マイムーンは伝えている

「アッラーの他に神はない。

唯一者にして彼に比肩すべき者はいない。

主権は彼にあり、讃美すべきは彼のみ。

彼は全能者であられる」と 10 回唱える者は、始祖イスマーイールの子孫四名の奴隷を解放する者と同等にみなされる。

シャウビーによると、ラビーウ・ビン・フサイムも上記と同様のハディースを伝えている。

シャウビーはこれに関連し次のように述べている。

私はラビーウに「あなたはだれからこのハディースを聞いたのですか」とたずねた。

彼は「アムル・ビン・マイムーンから聞きました」と答えた。

それで私は、アムル・ビン・マイムーンの処に行き、「だれから、このハディースをききましたか」とたずねた。

彼が「イブン・アブー・ライラーからです」と答えたので、私はまた、イブン・アブー・ライラーの処に行って「だれからこのハディースを聞いたのですか」と質問した。
彼はこの時、「アブー・アイユーブ・アンサーリーからです。
彼はアッラーのみ使いが話されるのを聞いて私に語ってくれたのです」と答えた」

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
次の二つの言葉は舌に軽い（唱えやすい）言葉であるが、天秤にかければ重い言葉であり、慈悲深い御方への大事な言葉である。
それは「讃美すべきはアッラーであり、すべての賞讃は彼のものです。
偉大なるアッラーを讃美します」という言葉である。

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「讃美すべきはアッラーのみであり、全ての賞讃は彼のものです。
アッラー以外に神はなく、アッラーこそ最高の御方であられます」という言葉は、私にとって太陽の昇るこの世界のあらゆるものの中で最も大切な言葉です。

ムスアブ・ビン・サアドは彼の父から聞いて伝えている
アッラーのみ使いの処に砂漠に住むアラブ人が聞いて、「どうか私が唱えるべき言葉を教えてください」と頼んだ。
み使いはこの時、「“アッラー以外に神はない。
唯一者にして彼には比肩すべきものはいない。
アッラーは最高の偉大者であられる。
あらゆる称讃は彼のためにある。
諸々の世界の主アッラーに讃えあれ。
偉厳あり賢明なるアッラー以外に力や強さを持つものはおらない”と唱えなさい」と言われた。
これに対し、そのアラブ人は「それらは、主に対する言葉ですが、私自身については、どう祈ればよいのですか」といった。
み使いは、この時、「“おお、アッラーよ、私に許しを与えて下さい。
私に慈悲を与えて下さい。
そして正しい道にお導き下さい。
私に食物をお与えください”と唱えなさい」と言われた。
上記に関して、口述者の一人、ムーサーは、「み使いは、“保護を与えてください”とも教えたと思うが、確実なことはわからない」と述べている。

アブー・マーリク・アシュジャイーは彼の父に聞いて伝えている

イスラームに入信する者にアッラーのみ使いは「おお、アッラーよ、私に許しを与えて下さい。

慈悲を与えて下さい。

私を正しい道にお導き下さい。

そして私に食物をお与え下さい」と唱えるようにといつも教えられた。

アブー・マーリク・アシュジャイーは彼の父から聞いて伝えている

預言者は、イスラームに入信する者には、礼拝（サラート）の仕方について教え、つづいて次の言葉、「おお、アッラーよ、私を許して下さい。

私に慈悲をお与え下さい。

私を正しい道にお導き下さい。

私を保護して下さい。

私に食物をお与え下さい」と祈願するよういつも教えられた。

アブー・マーリクは彼の父から聞いて伝えている

彼の父は、或る男が「アッラーのみ使いよ、主に願い事をする時にはどういえばよいのですか」といった時、

預言者が「アッラーよ、私を許して下さい。

私に慈悲をお与え下さい。

私を保護して下さい。

私に食物をお与えください」と唱えるよう教え、

親指以外の指を閉じ合わせてから「これらの言葉があなたに現世でも来世でも善をもたらすのです」といわれるのを聞いた。

ムスアブ・ビン・サアドは伝えている

私の父は次のように話してくれた。

「私たちがアッラーのみ使いと一緒だった時、み使いは“あなた方の中に、毎日 1000 の善行を為すだけの力をもたない者がいますか”と言われた。

ここに座っていた者の一人が、“どうすれば、毎日 1000 の善行をすることができるのですか”とたずねると

み使いは“アッラーを讃美します！　と 100 回唱えなさい。

そうすれば 1000 の善行と記録され 1000 の悪行が抹消されます”と言われた」

クルアーン読誦とズィクル集会の功徳について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「現世の難儀に苦しむ同胞を救う者に対し、アッラーは復活の日の苦難を彼から軽減して下さるであろう。

苦しむ者たちの苦難を救う者に対してはアッラーは現世でも来世でも物事を容易にして下さるであろう。

また、ムスリムの誤まちを隠してあばかぬ者に対しては、アッラーは現世でも来世でも彼の誤まちを隠してあばくことはないであろう。

アッラーはしもべがその同胞を支え助けるかぎり、そのしもべを助け支えるであろう。

また、知識を求めて道を歩む者には、アッラーは、彼が天国に至れるようにその道を容易になさるであろう。

アッラーの館（モスク）の一つに集まり、アッラーの経典を誦み、互いに学び教え合う人たちの下には平安があり、慈悲が彼らを覆い、天使たちは彼らを取り囲むことであろう。

アッラーは、囲りにはべる者たちの前で彼らについて語ることであろう。

善行に欠ける者には、家系の良し悪しに関係なく相応の場所が与えられるであろう」

アブー・フライラによる前記のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。
しかしそれには“苦しむ者たちの苦難を救う者に対してはアッラーは現世でも末世でも物事を容易にして下さるだろう”の記述ない。

アガッル・アブー・ムスリムは語っている

「私は、アブー・フライラとアブー・サイード・フドリーの両名は、預言者が“アッラーに祈願するため、人々は天使によって囲まれ慈悲に覆われ平安に満たされる。

アッラーは近くにはべる者たちに彼らのことをお話しになる”と言われた時、その場にいたことを証言します」

前記と同内容のハディースはシュウバによっても同じ伝承者経路で伝えられている。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

ムアーウィヤはモスクで輪になって座っているグループの処に行き、「座ってなにをしているのですか」とたずねた。

彼らが「アッラーに祈願するため座っています」と答えると、彼は、「アッラーにかけて！
なんとそのためだけに座っているのですか」といった。

彼らは「アッラーに誓って！

私たちが座っているのは、その目的のためだけです」と答えた。
これに対し、彼はこう語った。
「私はあなたたちになにか異議があって誓いを求めているわではありません。
アッラーのみ使いからみて、私のような立場にある者で、私ほどみ使いについてハディースを語らない者はいないでありましょう。
ともあれ、み使いは教友らのグループの処に行き、“座ってなにをしているのか”とおたずねになったことがあります。
彼らはそれに対し、“私たちはアッラーに祈願し、アッラーを讃えるために座っているのです。
なぜならアッラーは、私たちをイスラームの道に導き、私たちに加護を与えて下さったからです”と答えました。
この時、み使いは、“アッラーにかけて、なんとあなたたちはそれだけのために座っているのですか”と言われたが、
彼らが“アッラーに誓って！
私たちが座っているのはその目的のためだけです”と答えると、“私は、あなたたちに異議があって、誓いを求めているわけではありません。
ただ、天使ジブリールが私の処にきて、アッラーは天使たちにあなたたちの素晴らしさについて語っておられると、私に知らせて下さったからです”と言われたのです」

アッラーに許しを願うことについて

教友の一人**アガッル・ムサニー**は伝えている

アッラーのみ使いは、言われた。

「まことに、私の心には、或る種の翳りがある。

私は日に 100 回もアッラーに許しを願っています」

アブー・ブルダは伝えている

私は預言者の教友アガッルがイブン・ウマルに次のように話すのをきいた。

「アッラーのみ使いは"人々よ、アッラーに対し懺悔しなさい。

まことに私は、日に 100 度も懺悔しています"と言われた」

前記と同内容のハディースは、**シュウバ**によっても同じ伝承者経路で伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「西から太陽がのぼる前(復活の目の前)に悔い改める者をアッラーはお許しになるであろう」

小声でアッラーに祈願することについて

アブー・ムーサーは伝えている

私たちが、預言者と共に旅をしていた時、人々が大声でタクビール（アッラーフ・アクバル！）を唱えだした。

預言者は、その折「人々よ、声を低めなさい。

あなたたちは、つんぼや不在者を呼んでいるわけではありません。

あなたたちの近くに一緒にいて、なんでもお聞きになる方の名をお呼びしているのです」と言われた。

私は、預言者の後におり、「アッラーほど力や強さをもつものはありません」と唱えていたが、これに対し、預言者は「アブドッラー・ビン・カイス（アブー・ムーサーの本名）よ、天国の財宝の一つをあなたに教えなくてもよいのですか」といわれ、私が「はい、是非、み使い様、教えて下さい」と答えると、「アッラーに勝る力と強さを持つものはおられません」とお唱えになった。

アースィムは、前記と同内容のハディースを同じ伝承者経路で伝えている。

アブー・ムーサーは伝えている

アッラーのみ使い共々人々は山道を登っていたが、山頂に達するたびに、だれかが「アッラーの他に神はない。アッラーは偉大なり」と叫んだ。

この時、アッラーの預言者は「あなたたちは、つんぼや不在者に対して、祈っているわけではないのです」と言われた。

預言者は、また「アブー・ムーサーよ、（または、アブドッラー・ビン・カイスよ）、天国の財宝たる次の言葉をあなたたちに教えなくてもよいのですか」と言われた。

私が「アッラーのみ使い様、それはなんですか」とたずねると、「アッラーに勝る力と強さを持つものはおられません」という言葉をお唱えになった。

アブー・ムーサーによる前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・ムーサーは伝えている

「私たちは、預言者と共に旅をしていたとき」

以下は前記と同じである。

アブー・ムーサーは伝えている

「私たちはアッラーのみ使いに従い遠征中であった。」

以下は前記の内容と同じであるが、次の言葉が付加されている。

「み使いは言われた。
“あなたたちが祈願を捧げる御方はあなたたちの乗るラクダの首よりも近くにおられる”」。
ただし、これには、“アッラーに勝る力と強さを持つものはおられません”という言葉は記されていない。

アブー・ムーサー・アシュアリーは伝えている
アッラーのみ使いは私に、「あなたに天国の財宝たる言葉を（もしくは、天国の財宝となっている或る言葉について）教えなくてもよいのですか」と言われた。
私が「はい、是非」と言うと、み使いは次のように言われた。
「アッラーに勝る力と強さを持つものはおられません」

アブー・バクルは伝えている
私はアッラーのみ使いに「サラートの時、唱えるべき祈願について教えてください」と頼んだ。
み使いはこの時、次のように言われた。
「“アッラーよ、私は、大きな誤まちを犯しております。
あなた以外にその罪を許せる方をおられません。
どうか、私にあなたの許しを賜わり、慈悲をお与えください。
あなたは寛容者、慈悲者であられます”と唱えなさい」
このハディースは、アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースから聞いたアブー・バイルによっても伝えられている。
なお、これには「アブー・バクル・シッディークはアッラーのみ使いに“み使い様、モスクでの礼拝の祈りや、家で行なう祈願について、教えてください”と頼んだ」とも記されている。

災害に対する祈りについて

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、常に、次の言葉を唱えて祈願なさった。
「アッラーよ、業火の災いからお守り下さい。
業火の苦しみからお守り下さい。
そしてまた、墓での災いや墓での苦しみからお守り下さい。
更にまた、豊かさのもたらす害悪や貧しさ故の苦しみからお守り下さい。
そしてまた、偽救世主（ダッジャール）のもたらす災害からお守り下さい。
アッラーよ、私の罪を雪や霰の水で洗い流して下さい。
私の心を、泥をおとして白衣を清めるように、罪から清めて下さい。
東と西の間を大きく分けたように、私と私の罪との間を遠ざけて下さい。
アッラーよ、私を善に対する怠惰心、老衰、罪行、借金からお守り下さい」
前記と同内容のハディースは、**ヒシャーム**によっても同じ伝承者経路で伝えられている。

無力、怠惰に対する祈願について

アナス・ビン・マーリクは伝えている。

アッラーのみ使いは、常々次のように唱えられた。
「アッラーよ、私を無力、怠惰、臆病、老衰、吝嗇にならぬようお守り下さい。
また、墓での災いから、そしてまた、生ある間と死を迎える時の苦しみからお守り下さい」

アナスの伝える前記と同内容のハディースは、表現上多少の異同がみられるが、別の伝承者経路でも伝えられる。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

預言者は“吝嗇”を含む前記の言葉を唱えてアッラーに加護を祈るのを常となさった。

アナスは伝えている

預言者は次の言葉を唱えていつも祈願なさった。
「アッラーよ、吝嗇家や怠惰者、また老いぼれの状態にならぬようお守りください。
墓での災い、生ある間および死に際しての苦しみからお守り下さい」

不幸や災害に対する祈願について

アブー・フライラは伝えている

預言者は、常々、不幸や災害にあったり、敵の嘲笑を受けるなどみじめな状態にならぬよう加護を祈った。

なお、これに関連し、アブー・スフヤーンは“私は、誤まって、この祈願に別の言葉を加えて祈っていた”と語っている。

ハウラ・ビント・ハキーム・スラミーヤは伝えている

アッラーのみ使いはこう言われた。

「どこかの場所に着いた時、“アッラーの完全なる御言葉（クルアーン）によってアッラーの創造された諸々の悪から守り給うよう加護を祈願します”と唱えたならば、その場所からまた出発するまでなんらの災いも起こらないであろう」

ハウラ・ビント・ハキーム・スラミーヤは伝えている

アッラーのみ使いは、「あなたがたがある場所に滞在した時“私はアッラーの完璧なるお言葉（クルアーン）によってアッラーの創造された諸々の悪から守り給うよう加護を祈ります”と唱えなさい。

そうすれば、そこから出発するまで、どんな災いも起こらないであろう」と言われた。

また、アブー・フライラは次のように伝えている。

或る男が、預言者の処に来て、「アッラーのみ使い様、夜、私は蠍にさされました」といった。

これに対し、み使いは「もしも、あなたが夕方、“アッラーの完全なる御言葉（クルアーン）によって、アッラーが創造された諸々の悪から守り給うよう加護を祈ります”と唱えていたならば、いかなる災いにも会わなかったであろう」と言われた。

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別にも同じ伝承者経路で伝えられている。

就寝前の祈願について

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。
「ベッドに行く前に、礼拝の時と同じウドゥーを行ないなさい。
それから、右側を下に横たわり、次のように唱えなさい。
"アッラーよ、私は、私の顔をあなたに向けます。
私の全てをあなたに委ねます。
あなたへの期待と畏怖の念をもって、あなたに私の全てをおまかせします。
いかなる頼り人も救い人もあなた以外にはおりません。
私は、あなたが啓示された聖典と、あなたが遣わされた預言者を信じます"
これらを眠る前の最後の祈りの言葉としなさい。
そうすれば、もし、夜中に死んだとしても、正しく、イスラームの信仰(フィトラ)をもって死んだことになります」
私は、これらの言葉を暗記するため繰り返した後、「あなたが遣わしたみ使いを信じます」と唱えた。
するとみ使いは、「"あなたが遣わした預言者を信じます"と唱えなさい」と言われた。
前記のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられているが、それには"(そうすれば)朝、至福な状態で起きられるであろう"との言葉もみられる。

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている

アッラーのみ使いは或る男に次のように命じた。
「あなたは、夜、ベッドに入る時、"アッラーよ、私はあなたに帰依します。
私の顔をあなたに向け、あなたに私の全てをおまかせします。
あなたへの期待と畏怖の念をもって、私を委ねます。
いかなる頼り人も救い人もあなた以外にはおりません。
私はあなたが啓示された聖典とあなたが遣わされたみ使いを信じます"と唱えなさい。」
そして、その後、み使いは「もしあなたがこの状態で死んだ場合、正しいイスラーム信仰をもって死んだことになります」と言われた。

バラーウによる前記と同内容のハディースは、別にも伝えられるが、それには、表現上多少の異同がみられる。

バラーウによる前記ハディースは、更に、別の伝承者経路でも伝えられている。

バラーウは伝えている

預言者は、就寝する時には、いつも「アッラーよ、私が生き得るのは、あなたの御名によってであり、私が死ぬるのもあなたの御名によってであります（注）」と唱え、そして、起床する時には、「私たちに死（眠り）の後、生命を与えて下さる御方、審判の日に私たちが復活して集まりゆく御方、アッラー以外に讃うべき方はおられない」と唱えられた。

（注）生きいている時にも死に際してもアッラーの名を唱えることを意味する

ハーリドは伝えている

私はアブドッラー・ビン・ハーリスがアブドッラー・ビン・ウマルの話を次のように語るのを聞いた。
アブドッラー・ビン・ウマルは、就寝しようとする或る男に次の言葉を唱えるよう命じた。
「アッラーよ、あなたは、私を創り存在させて下さいました。
あなたは復活の日に私たちを呼び集められる方です。
死も生も全てあなたによるものです。
もし、あなたが生を給うなら、私をお守り下さい。
また、もし死をもたらすならば、私に許しをお与え下さい。
アッラーよ、私はあなたに加護を祈願します」。
或る人がアブドッラー・ビン・ウマルに「この話をウマル（即ちあなたの父親）から聞いたのですか」とたずねた時、彼は、「ウマル（私の父）よりももっと秀れた人からです。
アッラーのみ使いから聞きました」と答えた。

スハイルは伝えている

アブー・サーリフは次のように、常々、私たちに命じた。
「就寝する時には、右側を下にしなさい。
そして“アッラー、諸天の主、地上の主、偉大なる玉座の主、我が主、万物の主、穀物の種やなつめヤシの核を創る方、トーラ（旧約聖書）やインジール（新約聖書）、また、クルアーンを啓示された方よ、私は、あなたに全ゆる悪からお守り下さるよう祈願します。
あなたはそれらを完全に統御なさる御方です。
アッラーよ、あなたは、最初の御方、あなた以前にはいかなるものも存在しません。
あなたは、最後の御方、あなたの後にはいかなるものも存在しません。
また、あなたは、明瞭な御方、あなたの上にはいかなるものもおりません。
あなたは、最深の御方、あなたを越えるものはありません。
私たちの借財の苦しみを取り去り、貧困から救って下さい”を唱えなさい」
アブー・サーリフは、アブー・フライラから聞いて常々この預言者の言葉を語っていた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、私たちが就寝する時、前記と同内容の言葉を唱えるようお命じになった。
更に、み使いは「あらゆる動物のもたらす悪からお守り下さい。
あなたはそれを完全に統御なさる方です」とも唱えるようにと言われた。

アブー・フライラは伝えている

預言者の娘ファーティマが預言者の処にきて、召使いを一人ほしいと頼んだ時、預言者は彼女に、次の言葉を唱えるようにと言われた。
「アッラー、七層の天階の主よ」
以下は前記と同内容である。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。
「ベッドに入る前には、腰まきのへりで、そのベッドを拭ってからアッラーの名を唱えなさい。
なぜなら、ベッドの上になにが残されているか誰にもわからないからです。
ベッドに横たわる時には、右側を下にし、次のように唱えなさい。
“アッラーよ、あなたを讃美します。
主よ、あなたの恩寵によって、私はベッド上に横たわり、また、あなたによって、私はベッドから起き上がります。
もしも、あなたが、私を死なしめる場合には、どうか許しをお与え下さい。
もしまた、生かして下さる場合には、どうか、あなたが敬度な人々をお守りするのと同じように、私をお守り下さい”」

前記と同内容のハディースは、**ウバイドッラー・ビン・ウマル**によっても同じ伝承者経路で伝えられているが、
それには、「次の言葉を唱えなさい。
“主よ、あなたの御名によって、私は脇腹を下にして臥しました。
もし、あなたが、私を生かしめ給うならば、慈悲をお与え下さい”」とも記されている。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは、ベッドに入る前、いつもこう唱えられた。
「アッラーを讃美します。
アッラーは、私たちに食物を与え、飲み水を供し、保護を賜わり、避難場所を準備なさる御方です。

私たちムスリム以外の多くの人々には、保護してくれる人も、避難場所を提供してくれる人もありません」と言われた。

悪行について

ファルワ・ビン・ナウファル・アシュジャイーは伝えている

私は、アーイシャに「アッラーのみ使いはどのような言葉でアッラーに祈願したのですか」とたずねた。

彼女は、その時「み使いは、“私の行なった悪、また、私が行なわなかった悪から、私をお守り下さい”と常にお唱えになった」と話した。

ファルワ・ビン・ナウファルは伝えている

私はアーイシャにアッラーのみ使いが唱えた祈願の言葉についてたずねた。

その折、彼女は次のように答えた。

「み使いは常に“アッラーよ、私が、行なった悪、また、行なわなかった悪から私をお守り下さい”と言われた」

前記と同内容のハディースは**ムハンマド・ジャウファル**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

ファルワ・ビン・ナウファルはアーイシャから聞いて伝えている

預言者は、祈願の折にはいつも「アッラーよ、私の行なった悪や私の行なわなかった悪から私をお守り下さい」とお唱えになった。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは常に次のように祈願の言葉をお唱えになった。

「アッラーよ、私はあなたに全てをまかせ、あなたを信じます。

また、あなたに全てを委ね、あなたに完全に従い、あなたの助けのもと、反対者と戦います。

アッラーよ、私はあなたの力におすがりします。

あなた以外に神はありません。

ジン（注）や人間とは異なり、あなたは死とは無縁の永遠に生きつづける御方です」

（注）人間と同様、神から創られた思考力のある生物。

精霊、精鬼ともいわれる

アブー・フライラは伝えている

預言者は、早朝旅立つ時にはいつも次のようにお唱えになった。

「私たちに対するアッラーのほどよい試練に感謝し、アッラーを讃美している声を聴く者は

聞き、みる者はみるでありましょう。
主よ、我々と共に旅し、私たちに恩寵をお与え下さい。
業火から私たちをお守り下さるよう加護を願っております」

アブー・ブルダ・ビン・アブー・ムーサー・アシュアリーは彼の父から聞いて伝えている
預言者は、いつも、祈願の折には次の言葉を唱えられた。
「アッラーよ、私の誤まち、無知、不作法をお許し下さい。
あなたはそれらについて、私以上にご存知の方です。
アッラーよ、私が真剣な時、ふざけた時、不注意な時、また、慎重な時に犯した誤まちをお許し下さい。
それら全ての誤まちを私は犯しました。
アッラーよ、が急いだ時、また、遅れた時犯した誤まちをお許し下さい。
私は、秘密裏に、また、公然とこれらの誤まちを犯しました。
あなたはそれについて、私よりもご存知な方です。
あなたは、最も前にいる御方、また最も後にいる御方であり、全能の御方です」

前記と同内容のハディースは**シュウバ**によっても同じ伝承者経路で伝えられている。

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは次の言葉で祈願なさるのが常であった。
「アッラーよ、私の守りとなる信仰を正しめ給え！
私の住む世間の諸事を正しめ給え！
私の行く来世を正しめ給え！
私の生活をあらゆる善で豊かにし給え！
また、私の死をあらゆる悪より守り、休息の場とし給え！」

アブドッラーは伝えている
預言者は常に次のように祈願して唱えられた。
「アッラーよ、正しい導きと悪に対する保護、更に、謙譲さと豊かさを私にお与え下さい」

前記と同内容のハディースは、**アブー・イスハーク**によっても同じ伝承者睦路で伝えられている。

ザイド・ビン・アルカムは語っている
私はアッラーのみ使いが、常にお唱えになっていたこと以外には、なにも話そうとは思わない。
み使いは、次のように唱えられた。

「アッラーよ、私が無気力、怠惰、臆病、吝嗇、耄碌などの状態にならぬよう、また墓での災いをうけぬようお守り下さい。
アッラーよ、私の魂を真摯たらしめ、清めてください。
あなたは最もよく清める御方です。
あなたは、また、魂を守る友であり、保護者でもあります。
アッラーよ、私たちが役に立たぬ知識や謙虚さを忘れた心、また、満たされない心などを持ったり、更にまた、あなたに受け入れられない祈願を行なったりすることがないよう、私たちをお守り下さい」

アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている
アッラーのみ使いは、夕刻には次のような祈願をお唱えになった。
「私たちは夕刻を迎えました。
アッラーの支配する土地全ても夕刻を迎えています。
アッラーを讃美します。
アッラーの他に神はなく、唯一者アッラーに比肩すべきものはありません」
これに関連し、ハサンは、次のように伝えている。
「ズバイドは、口述者の一人イブラヒームの語った言葉を記憶し、み使いの祈願の言葉を彼に次のように伝えた。
“アッラーこそ主権者であり、アッラーのみが讃美されるべき御方、また、全能者であられる。
アッラーよ、この夜とその後の夜々に恵みをお与え下さい。
この夜の恵、また、その後の夜々の悪からお守り下さい。
アッラーよ、私が、怠惰にならぬよう、虚栄の恵にそまらぬようお守り下さい。
アッラーよ、業火の責苦、墓での責苦からお守り下さい”」

アブドッラーは伝えている
アッラーの預言者は夕刻になると、常に次のようにお唱えになった。
「私たちは夕刻を迎えました。
そして、アッラーの支配する土地全ても夕刻を迎えています。
アッラーを讃美します。
アッラーの他に神はなく、アッラーは唯一者であられる。
アッラーに比肩すべきものはありません」
私が思うに、預言者は次の言葉も唱えられた。
「アッラーこそ主権者、アッラーこそ讃美されるべき御方、また全能者であられる。
主よ、この夜がよい夜であるよう、また、これにつづく夜々が、よい夜であるようお守り下さい。

この夜の悪、また、その後の夜々の悪からお守り下さい。
主よ、私が怠惰にならぬよう、虚栄の悪にそまらぬようお守り下さい。
主よ、業火の災い、墓中での災いからお守り下さい」
そして、朝になると預言者は、次のようにお唱えになった。
「私たちは朝を迎えました。
アッラーの支配する全ての土地も朝を迎えました」

アブドッラーは伝えている
アッラーのみ使いは、夕刻には次のように唱えられた。
「私たちは夕刻を迎えました。
アッラーの支配する土地全ても夕刻です。
アッラーこそ讃美すべき御方、アッラーの他に神はなく、唯一者であられ、アッラーに比肩すべきものはありません。
アッラーよ、この夜と、夜起こること全てに対して恩寵をお与え下さい。
この夜の悪と夜起こる全ての悪からお守り下さい。
アッラーよ、私が怠惰にならぬよう、耄碌しないよう、また虚栄の悪にそまらぬようお守り下さい。
また、現世での災いや墓中での災いからお守り下さい」
これに関連し、ズバイドは、別の伝承者経路でアブドッラーによる上記のバディースに、次の言葉を加えて伝えている。
「アッラー以外に神はなく、唯一者であられ、アッラーに比肩すべきものはおらない。
また、アッラーは主権者、讃美すべき御方、全能者であられる」

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いはいつも次のようにお唱えになった。
「アッラーの他に神はない。
アッラーは唯一者にして、軍隊に勝利の栄誉を与え、しもべらを助け、一撃で不信仰者の一味を敗走させ、根絶やしになさる御方である」

アリーは伝えている
アッラーのみ使いは私にこう言われた。
「アッラーよ、私をお導き下さい。
私を正しめて下さい、と唱えなさい。
導きを願う時には、正しい道を思い、正しさを願う時には、真直な矢を思いなさい」

前記と同内容のハディースは、**アーシム・ビン・クライブ**によっても伝えられるが表現に異同がみられ、それには、「アッラーよ、私が正義を行ない、正しい道を歩むようお導き下さい」と記されている。

朝と就寝時にタスビーフを唱えることについて

預言者の妻の一人**ジュワイリヤ**は伝えている

預言者は、朝、彼女の家から出て行かれた。
その時彼女は、家にある礼拝場所で早朝礼拝を行なっていた。
預言者は午後帰ってきたが、彼女はまだその場所に座っていた。
預言者は彼女に「私が出かけた時からずっと同じように座っていたのか」とたずね、彼女が「そうです」と答えると、次のように言われた。
「私はここを出たあと四つの言葉をそれぞれ三回唱えたが、朝からあなたが唱えていた言葉とどちらがよりよいのか比較してみなさい。
それは“アッラーこそ讃美し、賞讃すべき御方であられる。
それは創造物の数多さ故であり、彼自身の恩寵深さの故であり、玉座の威厳の故であり、また、御言葉の記録に使われるインクの故である（注）”という言葉です」

（注）クルアーン第 18 章 109 節には、これに関連し「たとえ、海が主の御言葉を記すための墨であっても、主の御言葉が尽きないうちに海は必ず使い尽くされよう。
たとえ、アッラーが別にそれと同じ海を、補充のためにもたらしたとしても」と記されている

ジュワイリヤは伝えている

「アッラーのみ使いは、彼女が早朝礼拝を行なっている時、もしくは、早朝礼拝を終えた時、たまたま、彼女の近くをお通りになった。」
以下は前記と同内容であるが、次の言葉も付加されている。
「創造物の数の多さ故にアッラーを讃美します。
ご自身の恩寵深さの故にアッラーを讃美します。
玉座の威厳さ故にアッラーを讃美します。
御言葉を記録するため使われるインクの故にアッラーを讃美します」

アリーは伝えている

ファーティマは、ひきうすから落ちた穀物を手にしなから、仕事が多いことを愚痴った。
この頃預言者の許には戦争捕虜がいたので、彼女はその中から召使いを捜してくれるよう願っていた。
そのため、彼女は預言者の家を訪ねたが、預言者は不在だった。
彼女は、アーイシャに会い、生活の困難さについて話した。
預言者が帰った時、アーイシャはファーティマが訪ねてきたことを話した。
それで、預言者は、私たち（ファーティマとその家族）の家においでになった。
私たちはベッドで横になっていたが、預言者がおいでになったので起きようとした。

預言者は、そのままベッドにいるようにといわれ私たちの間にお座りになったが、私の腹にさわった預言者の足は冷えきっていた。
その折、預言者は次のように言われた。
「あなたたちが私に訴えることよりも、よいことを教えてあげよう。
ベッドに臥した時、アッラーは偉大なり！（タクビール）を34回、アッラーを讃美します！（タスビーフ）を33回、そして、アッラーを讃え、感謝します！（タフミード）を33回唱えなさい。
その方が召使いをもつより、あなた方にとってずっとよいことです」

前記と同内容のハディースは、**シュウバ**によっても同じ伝承者経路で伝えられている。

前記と同内容のハディースは、**イブン・アブー・ライラー**によっても伝えられているが、それには次の言葉が加えられている。
「アリーは“預言者からこうお聞きして以来、私はこの言葉を唱えることを止めたことはありません”と言った。
或る人がアリーに、“スィッフィーンの戦い（注）が行なわれた夜でもですか”ときいた時、
アリーは“そうです。スィッフィーンの戦いの夜にも唱えました”と答えた」

（注）657年7月、カリフ・アリーとシリアの統督ムアーウィヤ一世との間でスィッフィーンの荒野で行なわれた戦闘のこと

アブー・フライラは伝えている
ファーティマは、彼女の父、預言者の処にきて、召使いをやとってくれるように頼み、家での仕事がきついと訴えた。
それに対し、預言者は、次のように言われた。
「お前には、我々の処から召使いを与えることはできない。
召使いを得るよりお前に役に立つことを教えてあげよう。
スブハーナッラー！（タスビーフ）を33回、アルハムドリッラー！（タフミード）を33回、そしてアッラーフ・アクバル！（タクビール）を34回ベッドに臥す前に唱えなさい」と言われた。
前記と同内容のハディースは**スハイル**によっても、同じ伝承者経路で伝えられている。

雄鳥の鳴く時の祈りについて

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。

「雄鳥が鳴く声を聞いた時、アッラーに恩寵を願って祈りなさい。

雄鳥は天使たちをみて鳴きだすからです。

またロバがいなないた時には、アッラーに悪魔からの加護を祈りなさい。

ロバは悪魔をみていななくからです」

困難な時の祈りについて

イブン・アッバースは伝えている

アッラーの預言者は困難にあわれた時には、いつも次のように唱えられた。

「アッラー以外に神はなく、アッラーは偉大者にして、寛容者であられます。

アッラー以外に神はなく、アッラーは壮大な玉座の主であられます。

アッラー以外に神はなく、アッラーは、天の主、地の主、そして高貴な玉座の主であられます」

前記と同内容のハディースは、**ヒシャーム**によっても同じ伝承者経路で伝えられている。

イブン・アッバースによる前記と同内容のハディースは、別にも伝えられるがそれには「アッラーのみ使いは、それらの言葉を常に祈願なさった。

困難な時にもお唱えになった」と記されている。

イブン・アッバースによる前記と同内容のハディースは、更に別の伝承者経路でも伝えられている。

タスビーフの功徳について

アブー・ザッルは伝えている

アッラーのみ使いは「どれが最善の言葉ですか」と聞かれた時、「アッラーが天使たちやしもべらのために選ばれたのは、“アッラーこそ讃美されるべき御方。讃えられるべき御方です”という言葉である」と答えられた。

アブー・ザッルは伝えている

アッラーのみ使いは、「アッラーが最も好む言葉について、話しませんでしたか」と言われた。

「み使い様、アッラーが最も好む言葉を教えて下さい」というと、み使いは、「まことにアッラーが最も好むのは、“アッラーこそ、讃美されるべき御方、また、讃えられるべき御方です”という言葉です」と言われた。

不在の同胞のための祈りについて

アブー・ダルダーウは伝えている。

アッラーのみ使いは言われた。

「ムスリムが不在中の同胞のため加護を祈った場合、天使は必ずや“同じくあなたにも加護が下されるだろう”と告げるであろう」

ウンム・ダルダーウは伝えている

私の夫は、アッラーのみ使いから聞いて次のように語った。

「不在中の同胞のために加護を祈る者には、その祈りを主に伝えるよう委任された天使が“アーメン、同じくあなたたちにも加護が下されるだろう”と告げるであろう」

ダルダーウの夫**サフワーン・ビン・アブドッラー・ビン・サフワーン**は伝えている

私はシリアに行き、アブー・ダルダーウの家を訪問したが、夫人のウンム・ダルダーウがいただけで、彼は不在だった。

その時、彼女は、「あなたは、今年巡礼に行きますか」とたずね、私が「そうです」と答えると、「アッラーに私たちのため恩恵があるよう祈って下さい。

なぜなら預言者は、常々、“ムスリムが不在中の彼の同胞のため祈れば、それが同胞のための恩恵への祈願であるかぎり、すぐに、祈りを託された天使はそれを受け入れるであろう。

そして、その天使は『アーメン、同じようにあなたにも恩恵が下されるでしょう』と告げることだろう”と言われたからです」と言った。

私は、マーケットに行き、そこでアブー・ダルダーウに会ったが、彼も同じように預言者から聞いたこのハディースを私に話してくれた。

サフワーン・ビン・アブドッラー・ビン・サフワーンによる前記と同内容のハディースは、同じ伝承者経路で別にも伝えられている。

飲食の後、タフミード（讃仰）を唱えることについて

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラーは、食物を口にする時、アルハムド・リッラー！（アッラーを讃え感謝します）と唱え、また、なにか飲物を飲む時も、アルハムド・リッラー！と唱えるしもべを嘉みし給う」

前記と同内容のハディースは、ザカリーヤーウによっても同じ伝承者経路で伝えられている。

祈りの功徳を性急に求めぬことについて

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「あなたたちの祈りは、"祈願したがなにも効果がない。

私は受け入れられなかった"などといって、性急に功徳を求めないかぎり、必ず受け入れられるであろう」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、次のように言われた。

「あなた方の祈りは、もしも短気になって"私は主に祈ったが、きき届けられなかった"と言わないかぎり、聞きとどけられるであろう」

アブー・フライラは伝えている

預言者は次のように言われた。

「しもべらの祈りは、もしも、罪ある行為を祈ったり、血族関係を裂くような祈りであったり、また、性急になったりしないかぎり受け入れられるであろう」

これに関連して「アッラーのみ使い様、性急になるとはどういうことですか」と質問された時、み使いは、「"私は、祈り、かつ、祈ったが、聞きとどけられたとは思えなかった"などのように言い、その結果、失望して祈りをやめてしまうことです」と言われた。

リカークの書

天国と地獄の住民について

ウサーマ・ビン・ザイドは伝えている

アッラーのみ使いはこう言われた。

私は天国の入口の間に立っていた。

ここに入るほとんどの人々は貧困であった人々であり、裕福だった者たちは入るのを止められていた。

地獄への住民たちは、地獄に入って行くよう命令されていた。

私は地獄の入口に立っていたが、ここに入る者のほとんどは女たちであった。

イブン・アッバースは伝えている

ムハンマド様は言われた。

「私は天国をみたことがあるが、そこの人々の大半は貧乏人たちであった。

そして、また、私は地獄にも行ってみたのであるが、そこの大半の人々は女たちであった」

このハディースは、**アイユーブ**によっても同じ伝承者経路で伝えられている。

イブン・アッバースによる前記と同内容のハディースは、他にも二種の伝承者経路で伝えられている。

アブー・タイヤーフは伝えている

ムッタリフ・ビン・アブドッラーには二人の妻がいた。

彼があるとき一人の妻のもとから戻ったとき、他の一人が「あちらの方のところから戻られたのですか」とたずねた。

すると、ムッタリフは「イムラーン・ビン・フサインの処から戻ったのです。

イムラーンは『ことに天国の住民の中に女たちは少ない』とアッラーのみ使いが言われたものだと話していました」と答えた。

前記と同内容のハディースは、二人の妻を持つ**ムッタリフ**によって別の伝承者経路でも伝えられている。

アブドッラー・ビン・ウマルは語っている

アッラーのみ使いは、次の言葉で祈願なさった。

「アッラーよ、あなたの恩寵が止められたり、あなたの保護が変えられたり、また、あなたの突然の怒りを被ったりすることのないよう、そしてまた、あなたのご立腹を全く受けることがないよう、私をお守り下さい」

ウサーマ・ビン・ザィドは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「私の死後も残るのは、女たちが男たちに対してひきおこす災いである」

ウサーマ・ビン・サイド・ビン・ハーリサ及び**サイード**・ビン・サイド・ビン・アムル・ビン・ヌファイルは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「私の死後も人々の間に残されるものは、女性らによってひきおこされる男性たちへの災いである」

前記と同内容のハディースは、**スライマーン**・タイミーによっても同じ伝承者経路で伝えられている。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

預言者はこう言われた。

「まことに、地上は清らかで緑多く心地よい。

アッラーは、あなた方をこの地上における彼の代理人となし、どのように行為するかをみようとなさっておられる。

それ故、地上での行為を正し、女性からの誘惑を避けなさい。

まことに、イスラーイールの人々にとって最初の災いとなったのは、女性によってひき起こされたものだったのです」

洞窟の三人の物語について

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。三人の男が旅に出たが、雨にあい、山の洞窟に雨やどりした。

しかし、洞窟の入口にその山の岩が落ち、彼らは中にとじこめられてしまった。

彼らの中の一人がこの時、「あなた方が、アッラーのために行なった善行について思い出し、それによってアッラーに祈願して下さい。

アッラーはもしかすればこの状態から救って下さるかも知れません」といった。

それで、一人が次のように話しだした。

「アッラーよ、私には老齢の両親と妻と小さな子供らがいます。

私は、山羊や羊、牛など家畜を飼って暮していますが、夕方、放牧を終えて家に戻ると、家畜のミルクをしぼり、子供たちよりも先にそのミルクを両親に飲ませます。

或る日、私は餌を求めて遠くの場所に行ったため、夕刻前に帰ることができず、家に着いた時には両親はもう眠っていました。

私はいつもの通りミルクをしぼってから両親の処にもって行き、眠りを邪魔しないよう、そっと、彼らの頭の近くに立っていました。

私は両親がミルクを飲む前に子供らにそのミルクを与えるのはよくないと思いました。

子供らは私の足元で泣いていました。

私はそのまま立ちつづけていましたが、両親は朝まで、ずっと、眠りつづけました。

アッラーよ、私がこのようにしたのはあなたに嘉みされたいためであることをお知り下さったならば、この洞窟をあけて、空がみえるようにして下さい」

アッラーは、洞窟の岩を少しばかり横にずらした。

それで、彼らは空をみることができるようになった。

次いで二番目の男が次のように語った。

「アッラーよ、私にはだれよりも愛している従妹がいます。

私は、彼女と添いたいと願いましたが、彼女は 100 ディーナールの金を払わないかぎり、いやだといって拒否しました。

100 ディーナールの金を作るために私は大変苦労しましたが、私は彼女に払いました。

そして、彼女と性交渉を行なおうとした時、彼女は、“アッラーのしもべよ、アッラーを恐れなさい。

正当な手続きを経た結婚をせずに、処女を犯さないで下さい”といったのです。

そのため私は、彼女から離れ起き上りました。

アッラーよ、私がこのようにしたのはあなたに嘉されたいためである事をご存知であるならば、この洞窟を開けて下さい」

それでアッラーは彼らのため、また少し入口の岩を横にずらした。

次いで三人目の男は次のように話した。
「私は、1 ファラク（重量単位）の米を報酬に払う約束で労働者をやといました。
彼が、仕事を終えた時、彼に約束通りの支払いをしようとしましたが、彼はそれを受け取ろうとしませんでした。
それで私はその米を種に用いて、豊かな収穫を得、その結果、牛や羊の群などもてるようになりました。
ところがその頃、彼がやってきて、私に“アッラーを恐れなさい。
私への報酬をごまかさないで下さい”と言ったのです。
それで私は、牛や羊の処に彼を連れて行き、“これらを取りなさい”といいました。
彼は、この時“アッラーを恐れなさい。
私をからかわないで下さい”と言いましたが、私は“あなたをからかっているのではありません。
これらの牛や羊を連れて行きなさい”と言いました。
それで、彼はそれらを連れて立ち去ったのです。
アッラーよ、私がこのようにしたのは、あなたに嘉みされたいためであることをご存知であるならば、私たちのため、洞窟の残りの部分も開けて下さい」
それでアッラーは、洞窟の入口全部を開けて彼らをお救いになった。

前記と同内容のハディースは、別にも幾つかの伝承者経路で伝えられているが、用語上には多少の異同がみられる。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

私は、アッラーのみ使いが、次のように言われるのを聞いた。
「あなたたち以前に在世した三人の男が、旅に出かけ、夜、洞窟で過すはめになった」
以下は前記ハディースと同内容であるが、これには「彼らの中の一人が語った。
“アッラーよ、私には年老いた両親がおります。
私は夕方、家族や召使いらのだれよりも先に、ミルクを両親に飲ませます”」とあり、
また、二番目の男に関しては、「彼女は、早魃のため苦しむまでは私を避けていたが、その頃私の処にきたので、私は彼女に 120 ディーナール与えた」と記され、
更に、第三番目の男については、「私は、彼の労賃分を投資し利益を得た。
その結果、物が豊かになった」とあり、
最後には、「彼らは、洞窟から出て歩きだした」などの言葉が記されている。

懺悔の書

懺悔の勧めについて

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラーは次のように言われた。

“私は、私を思うしもべのその思いの中にいる。

私は、私を祈念するしもべと共にいる”」

み使いは次いでこうも話された。

「アッラーに誓って。

アッラーは、あなた方の誰かが迷ったラクダを水のない砂漠でみつけ出した時の喜び以上に、しもべの懺悔を喜び給う。

アッラーは、“しもべが私に、手のひらの長さほどでも近づけば、私は腕の長さほど彼に近づき、しもべが腕の長さほど私に近づけば、私は両手をひろげた長さほどしもべに近づくであろう。

また、しもべが私の方まで歩いて近づいてくるなら、私は走ってしもべの方に近づくであろう”と言われた」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラーは、あなたたちの誰かが迷ったラクダを捜しだした時の喜び以上に、しもべの懺悔を強くお喜びになるであろう」

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

ハーリス・ビン・スワイドは伝えている

私は病気中のアブドッラーの見舞いに行った。

この時、彼は、二つの話をしたが一つは彼自身に関する話で、他はアッラーのみ使いから聞いた話であった。

彼は、み使いの話を次のように語った。

「アッラーは、信者たるしもべの懺悔を大変喜ばれる。

それは、或る男が危険な砂漠で、食物や飲み水を積んだ乗用ラクダを失い、絶望して眠り、そして後、起きだし、また、捜しに行き、喉の渇きに苦しむまで捜しまわり、その後、

“元いた場所に戻ろう。
そうして死の訪れるまで眠っていよう”と言って戻り、そこで、死を待ちながら、両手の上に頭をおいて眠ってしまうが、
起きだした時、彼の目前に、食糧類、食物、飲み物を積んだ彼の乗用ラクダが立っているのを発見するといったことを経験した場合と比較するとすれば、アッラーは食糧品を積んだ乗用ラクダをその男が発見した時の喜びよりも、更に強く、しもべの懺悔をお喜びになるのである」

前記と同内容のハディースは、**アアマシュ**によっても、別の伝承者経路で伝えられている。

ハーリス・ビン・スワイドは伝えている
アブドッラーは、二つの話を語ってくれたが、その一つは、アッラーのみ使いより聞いた話で、他は、彼自身に関する話であった。
彼は、次のように語った。
「み使いは、信者たるしもべの懺悔を大変喜ばれる。」
以下は、前記と同内容である。

シマークは伝えている
ヌウマーン・ビン・バシールは次のように話した。
「アッラーは、ラクダに食糧品を入れた袋を積んで旅した男が体験した喜び以上に、しもべの懺悔を大変お喜びになる。
その男は旅をつづけ水のない荒地にさしかかったが、眠む気におそわれ、木蔭でラクダから降りてそこで眠りこけたため、ラクダはその間に逃げてしまった。
彼は目をさますと小丘に登りラクダを捜したが、どこにも見つけることができなかった。
それで、また、他の小丘に登ったがそこでもなにもみつけられなかった。
彼は、更に、三つ目の小丘に登って周りをみわたしたが、なにもみつけることはできず、仕方なく元いた場所に戻った。
彼が落胆してそこに座っていると、なんとラクダは歩いて帰ってきて、端綱を彼の手の上にこすりつけたのであった。
アッラーは、まことに、そのような状態でラクダをみつけたこの男の喜び以上に、信仰をもつしもべの懺悔を大変喜び給うのである」
シマークは、これに関連し、「シャービーによると、ヌウマーンは、このハディースを預言者から聞いたとのことであるが、私はそのことを確かめてはいない」と語っている。

バラーウ・ビン・アージブは伝えている

アッラーのみ使いは、「食物や飲み水を積んだラクダが、食物も水もない荒れはてた土地を端綱をひきずりながら逃げだしたが、たまたま、通りかかったところの木の幹にその端綱をひっかけて止まっていたのを、このラクダを捜し歩き疲れきっていた男が、その場所でみつけた時の喜びについて、あなた方はどう思いますか」と言われた。

それに対し、私たちが、「み使い様、彼は大変喜んだでおりましょう」と答えると、み使いは、「まことに、アッラーは、このラクダをみつけた男の喜び以上に、しもべの懺悔を強くお喜びになるのです」と言われた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラーはしもべが懺悔することを大変お喜びになる。

それは、水のない荒地で、食物や水を積んだラクダに乗っていたものの、そのラクダに逃げられ、落胆して、木の傍に来てその蔭で横になってしまい、ほとんどあきらめかけていたが、そのラクダが彼の目前に立っているのをみつけ、その端綱をつかまえながら、「アッラーよ、あなたは私のしもべ、私はあなたの主です」と嬉しさのあまり、誤まって叫んだ男の喜びよりも勝るものである」

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラーは、しもべの懺悔をあなた方の一人が、起き上った時、水のない荒地で失ったラクダをみつけた場合よりもずっと強くお喜びになる」

アナスによる前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

祈願により罪が消滅することについて

アブー・スィルマは伝えている

アブー・アイユーブは、死が間近かに迫った頃、次のように語った。

「私は、アッラーのみ使いから聞いた或るハディースをあなた方にずっと隠していたが、み使いはこう言われたのです。

“あなた方が罪を犯さない場合には、アッラーは、罪を犯すに相違ない者らをお創りになり、その者たちをお許しになるだろう”」

アブー・アイユーブ・アンサーリーは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「もしも、あなたたちが罪を犯さない者らであれば、アッラーは、あなた方についてはそのことをお認めになるが、別に罪を犯すに相違ない人々を連れて来て、その人々が罪を犯した場合、それをお許しになるだろう」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは 「私の生命を手にする御方に誓って！

もしもあなた方が罪を犯すことのない者であるならば、アッラーはあなた方を消滅させ、罪を犯すに相違ない人々と取り替える。

そして、彼らがアッラーに許しを求める時には、彼らをお許しになる」と言われた。

ズィクルと来世への想いについて

アッラーのみ使いの書記の一人、**ハンザラ・ウサィイデー**は伝えている

私がアブー・バクルに会った時、彼が「ハンザラよ、どうしたのか」と言ったので、私は「ハンザラは偽善者になった」と答えた。

アブー・バクルは、「アッラーを讃美します！」と唱えてから「それはどんな意味なのか」といった。

それで、私は「私たちは、アッラーのみ使いの傍にいる時には、あたかも目前にみるように地獄や天国に想いを馳せるのであるが、み使いの傍を離れ、妻たちや子供ら、また、生活上の仕事に関わる時には、これら来世の事の大半を忘れきってしまいます」と言った。

これに対し、アブー・バクルは 「アッラーに誓って！

私も同じ経験をしている」と言った。

それで、私はアブー・バクルと一緒にみ使いの処に行き、「預言者様、ハンザラは偽信者です」と言った。

み使いが「どうしたのか」と言われたので、私は「み使い様、あなたのお傍にいる時には、目前でみるように、地獄や天国のことを想うのですが、あなたの傍を離れ、妻たちや子供ら、また、生活上の仕事に関わりだすと、それらのことを大半忘れてしまうからです」と言った。

この時、み使いは「私の生命を手にしている御方に誓って！

もしもあなたの心が、私の傍にいる時と同じ状態でつづき、いつもアッラーを想念しているならば、天使たちはあなたのベッド上で、また歩いている道で、あなたに握手することだろう。

しかし、ハンザラよ、俗事に励むための時間や祈願に勤めるための時間はそれぞれ別々であって当然なのです」と三度繰返して言われた。

ハンザラは伝えている

私たちがアッラーのみ使いのお傍にいた時、み使いは、私たちに説教をなさり、地獄について話された。

それが終ったあと、私は家に戻り、子供らと笑い興じたり、妻を抱いたりした。

その後私は外出したが、アブー・バクルに会ったので、それらのことを話した。

すると彼は、「私もあなたと同様のことをした」と語った。

それで、私たちはみ使いの処に行き、「み使い様、ハンザラは偽信者です」と言った。

その時、み使いが「なんの意味か」と言われたので、私はそれまでの話をし、アブー・バクルも「私も、彼と同じことをしました」と言った。

み使いは、これに対し「ハンザラよ、俗事に励む時間と、祈願に励む時間とがそれぞれあるものです。

もしも、あなたたちの心がいつもアッラーを祈願している状態と同じであるならば、天使たちは、あなたたちに握手し、道々では“あなた方に平安を！”といって挨拶することだろう」と言われた。

書記**ハンザラ・タミーミー・**ウサィイデーは伝えている
「私たちが、アッラーのみ使いのお傍にいた時、み使いは天国や地獄について、私たちに語った。」

以下は前記と同内容である。

怒りを凌駕する慈悲について

アブー・フライラは伝えている
アッラーが、創造物をお創りになったのは、玉座の上におられた時であったが、その折、アッラーは聖典の中に“我が慈悲は、我が怒りを凌駕するであろう”と記された」

アブー・フライラは伝えている
預言者は言われた。
「アッラーは“私の慈悲は、私の怒りよりも勝る”と述べられた」

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「アッラーが創造物をお創りになった時、彼自身のために、今もお手許に置かれている聖典の中に、“まことに、我が慈悲は、我が怒りを凌駕する”とお記しになった」

アブー・フライラは伝えている
私は、アッラーのみ使いが、次のように言われるのを聞いた。
「アッラーは“慈悲”を 100 の部分に分けてお創りになり、99 の部分をお手許に置かれ、地上には、その一つの部分だけをお下しになった。
創造物たちが互いに愛し合うのもその慈悲の一つの部分によってであり、動物たちが、足を痛めぬように、生後間もなく蹄を持つようになるのもこの慈悲のお蔭である」

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「アッラーは 100 の慈悲をお創りになったが、そのうちの一つを創造物のもとにお下しになった。
そして、この 100 のうち一つを除いた慈悲をお手許にとっておかれた」

アブー・フライラは伝えている
預言者は言われた。
「アッラーは 100 の慈悲をお持ちで、そのうちの一つを、ジン、人類、動物、昆虫類の間に下された。
それ故に、これらのものは、互いにいたわり合い、愛し合うのである。
野獣でさえもその子に愛情を注ぐのはこのためである。
アッラーは、他の 99 の慈悲は“復活の日”に、しもべらのために用いるようとっておかれた」

サルマーン・ファーリシィーは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「まことにアッラーは 100 の慈悲をお持ちになっておられる。

それらの慈悲のうちの一つの功徳によって、創造された者らは互いに愛し合うのであり、

99 の慈悲は、復活の日のためとっておかれる」

前記と同内容のハディースは、それを父から聞いたムウタミルによっても同じ伝承者線路で伝えられている。

サルマーンは伝えている。

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラーは天と地を創造されたその日に、100 の慈悲をお創りになった。

そして、これら全ての慈悲を天と地の空間に共存させられた。

アッラーはまた、これらの慈悲の中から一つを現世に下された。

そのため母親が子供に愛情を注ぐことになり、野獣や鳥類すらも互いになごみ合うようになったのである。

復活の日には、アッラーは、これらの慈悲全てをお使いになる」

ウマル・ビン・ハッターブは伝えている

アッラーのみ使いの許に捕虜が連れてこられた。

捕虜の中には女性がおり、彼女は誰かを捜し求めている様子であった。

そして後に、捕虜たちの中に一人の子供をみつけると、その子をひきとって胸に抱き、乳を飲ませた。

この時、み使いは、「あなたたちは、この女が、その子供を火の中に投げこむと思うか」と言われた。

私たちが「いいえ、アッラーに誓って！

彼女に守る力があるかぎり、子供を火中に投げることはしないでしょう」と言うと、

み使いは「アッラーは、しもべらに対し、この女が子供に示した以上の慈悲をおかけになるだろう」と言われた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラーの許に、地獄の罰があることを知る信仰者は、だれも天国に容易に入れるとは期待していない。

アッラーの許に慈悲のあることを知る不信仰者は、だれも天国に入ることをあきらめることはしない」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「いかなる善事も行なわなかった或る男は、家族の者に、彼が死んだならば、遺体を焼き、灰の半分を大地に、残りの半分を海にまくよう頼んだ。

（ともあれ）もしもアッラーが、彼を捕えたならば、アッラーは、必らずや、世界の誰にも与えなかったほどの厳しい罰を彼に科すであろう。

その男が、死んだ時、遺体は、彼が家族に頼んだ通りに処理された。

アッラーは、大地に対し、まかれた灰を集めるよう命じ、海に対してもまかれた灰を集めるようお命じになった。

そして、アッラーは復元された彼に対し“どうして、そのようにしたのか”と問われた。

彼は、その時、“主よ、あなたを恐れたからです。

あなたは、よくご存知のはずです”と答えた。

アッラーは、その男をお許しになった」

マアマルは伝えている

ズフリーは、「二つの素晴らしいハディースを聞かなかったのですか」といって、アブー・フライラがフマイド・ビン・アブドル・ラフマーンに話したハディースを語ってくれた。

預言者は次のように言われた。

「度を過ぎるほどの罪を犯した男が、死が迫った時、子供らへの遺言書の中に“私が死んだら、遺体を焼き、灰にして、風に飛ばせ。

または海に投げよ。

アッラーに誓って、もしもアッラーが私を捕えたならば、アッラーは、他の誰をも罰したことのないほど厳しい罰で、私を罰するであろう”と記した。

彼の子供らは、彼が望んだ通りに行なった。

アッラーは、大地に“おまえの得たものを返せ”と命じ、彼を元の形に復元なさった。

そしてアッラーは彼に対し“どうしてそのようにしたのか”とおたずねになった。

この時、彼は、“主よあなたに対する恐れ（または、畏敬の念）からです”と答えた。

アッラーはそう答えた彼をお許しになった」

更に、ズフリーはフマイドが、アブー・フライラからきいた他のハディースをこう語った。

アッラーのみ使いは言われた。

「或る女は猫のために業火に投げ込まれた。

彼女が、猫を紐でつなぎ、餌も与えず、地面にはう昆虫を食うよう放してもやらず、なぶり殺しにしたためである」

ズフリーは「これらの二つのハディースは、誰も、必らず、天国に入れると確信してはならないし、また、天国に入れないとあきらめてはならないことを示している」と語った。

ズフリーによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられるが、猫の物語に関連した女性についての記述はない。
なお、それには「アッラーは、その男の灰の一部をとったものの全てに対し、それを返すようにと言われた」との言葉もみられる。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

預言者は言われた。

「あなたたち以前に在世した或る男は、アッラーの加護により、財産と子供らに恵まれた。

彼は、子供らに対し、"私がお前らに命じたように行ないなさい。

さもないと、私はお前たち以外の者に、私の遺産をゆずってしまうだろう。

私が死んだならば、私の遺体を焼き灰にして風に飛ばしなさい。

私は、アッラーが喜び給うような善事を行なわなかった。

もし、アッラーが私を捕えたならば、私は罰せられることだろう"と語った。

彼は、子供らから誓約書をとったが、子供らは彼が命じた通りに行なった。

アッラーが、彼に対し"どうして、そうしたのか"と言われた時、彼は"あなたへの畏怖の念からです"と答えた。

アッラーは、彼を、なんら罰せられなかった」

アブー・サイード・フドリーによる前記のハディースは、シュウバによっても別の伝承者経路で伝えられているが、それには表現上多少の異同がみられる。

罪行者の懺悔が赦されることについて

アブー・フライラは伝えている

預言者は、主について次のように語った。

「しもべが罪を犯し“アッラーよ、私の罪をお赦し下さい”〟と祈った時、アッラーは“私のしもべは罪を犯したが、諸々の罪を赦す主の存在を知っている”と言われ、彼の罪を取り消される。

そのしもべは、その後、また、罪を犯し、そして、“王よ、私の罪をお許し下さい”と祈る。

アッラーは“私のしもべは罪を犯したが、彼は、諸々の罪を赦す主の存在を知っている”と言われ、その罪を取り消される。

そのしもべは、更にまた罪を犯し、“主よ、私の罪をお許し下さい”と祈る。

アッラーはそれに対しても“私のしもべは、罪を犯したが、彼は、諸々の罪を赦す主の存在を知っている”といわれ、その罪を取り消される。

そして、主は、“しもべよ、望むことをしなさい。

私は、お前たちに赦しを与えるであろう”と言われる」

上記に関連し、アブド・アウラーは、「“望むことをしなさい”と、三回または四回のどの回数を言われたのか、私は知らない」と述べている。

なお、これと同内容のハディースは、このアブド・アウラー・ビン・ハンマード・ナルシーによっても同じ伝承者経路で伝えられている。

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、表現上多少の異同がみられるが、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・ムーサーは伝えている

預言者は言われた。

「アッラーは、夜の間、御手を伸ばされるが、これは、日が暗くなりだしてから懺悔する人々のためである。

また、アッラーは、日中、御手を伸ばされるが、それは、夜が薄明るくなり、太陽が西から昇る前に懺悔する人々のためである」

前記と同内容のハディースは、シュウバによっても同じ伝承者経路で伝えられている。

アッラーの衿特について

アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラーほど、ご自身への讃美を好まれる御方はおられない。

アッラーが、自らを讃美なさるのは、そのためである。

また、アッラーほど、矜持の強い御方はおられない。

それ故に、アッラーは卑しい行為を禁じなさるのである」

アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラーほど矜持の強い御方はおられない。

それ故に表裏の別なく、卑しい行為をなすことを禁じられるのである。

そしてまた、アッラーほど御自身への讃美を好まれる御方はおられない」

アムル・ビン・ムッラは伝えている

私はアブー・ワーイルが、アブドッラー・ビン・マスウードから、次のハディースを聞いたと言ったので、彼に対し「アブドッラーから直接聞いたのですか」とたずねた。

彼は「そうです」と答え、以下のように語った。

「アッラーほど、矜持の強い御方はおられない。

それ故に、アッラーは、表裏のいかんに関わらず、卑しむべき行為を禁じられたのです。

また、アッラーほど、御自身への讃美を喜ばれる御方はおられない。

それ故に、また、アッラーは、自ら御自身を讃美なさるのである」

アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラーほど御自身への讃美を喜こばれる御方はおられない。

それ故にこそ、アッラーは、自ら御自身を讃美なさるのである。

また、アッラーほど、矜持の強い御方はおられない、それ故に、卑しむべき行為を禁じられるのである。

また、アッラーほど、しもべらの弁明を受け入れる御方はおられない。

それ故に、アッラーは、啓典を下し、み使いたちをお遣わしになったのである」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「まことに、アッラーは矜持の強い御方であられる。

信仰者もまた、同様である。
アッラーの矜持は、もしも信仰者が禁じられた行為をした場合、損なわれることになる」

アブー・バクルの娘**アスマーウ**は伝えている
私は、アッラーのみ使いが、「いかなるものにも、アッラーほどの矜持はみられない」と言われるのを聞いた。

アブー・サラマは、アブー・フライラから聞いて、同内容のハディースを伝えているが、それにはアスマーウが語った話はみられない。

アスマーウは伝えている
預言者は言われた。
「いかなるものも、アッラーほどの矜持は持っていない」

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「信仰者は、誰でも矜持を持っている。
だが、アッラーの矜持は特別に強烈である」
前記と同内容のハディースは、シュウバによっても、別の伝承者経路で伝えられている。

善行は悪行を駆逐することについて

アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている

或る男か、一人の女にキスした。

そして、預言者の処に来てこのことを話した。

その時、次の聖句が啓示された。

「礼拝は昼間の両端（朝方と夕方）及び夜の初めの時に行なえ。

まことに善行は悪行を破滅させる。

これは、主を念じる者に対する訓戒である。」（クルアーン第 11 章 114 節）。

それでこの男が「み使い様、この言葉は、私に対して啓示されたのですか」とたずねると、み使いは、「私のウンマ（イスラーム社会）の中で、そのような行為をした者全てに対して示されたものです」と言われた。

イブン・マスウードは伝えている

一人の男が預言者の処にきて、ある女にキス、もしくは、手でさわるなどなにか別のことを行なったと話し、償いについて質問した。

その時、アッラーは啓示を下された。

以下は前記ハディースと同内容である。

スライマーン・タイミーは伝えている

或る男が、一人の女と姦通までには至らない程度の行為を行なった。

この男がウマル・ビン・ハッターブの処に行き、そのことを告白したところ、彼は「重大な罪行である」と言った。

この男はアブー・バクルの処にも行って告白したが、彼もまた「重大な罪行である」といった。

そのあと、男は、預言者の処に行き、また、告白した。

以下のハディースは、前記と同内容である。

アブドッラーは伝えている

或る男が預言者の処にきて「アッラーのみ使い様、私は或る女とマディーナの郊外でたわむれ、姦通には至らないまでもそれに近い罪を犯しました。

私はここにおります。

どうか、これに対し、適当と考える教えをおきかせ下さい」と言った。

ウマルは、この時、「アッラーは、あなたの誤まちをお隠しになった故、あなたもそれを隠して黙っていればよい」といったが、預言者はなにもお答えにならなかった。

そのため、その男は立ち上り帰って行った。

その後、預言者は、人を送ってその男を呼び、次の啓示をお読みになった。

「礼拝は、昼間の両端及び夜の初めの時に行なえ、まことに、善行は悪行を消滅させる。これは、主を念じる者に対する訓戒である」（クルアーン第 11 章 114 節）。

この折、或る人が「アッラーの預言者様、これは、その男のため特別に啓示されたのですか」とたずねると、預言者は「いいえ、人々全てのためです」と言われた。

前記と同内容のハディースは、**アブー・アフワス**によっても伝えられるが、それには次の言葉がみられる。

「ムアーズが、“アッラーのみ使い様、この啓示はこの特例のためですか。

それとも、私たち一般のためですか”とたずねると、預言者は“あなた方一般のためです”と言われた」

アナスは伝えている

或る男が、預言者の処にきて「アッラーのみ使い様、ハッド（注）罪に相当する行為をしました。

私を罰して下さい。」といった。

その時、礼拝の時刻になったので、彼は、み使いと共に礼拝を行なった。

礼拝が終った時、この男はまた、「み使い様、私は、ハッドの罪を犯しました。

アッラーの聖典の教え通り私を罰して下さい」と言った。

預言者はこの時「あなたは、私たちと一緒に礼拝をしたか」とたずね、「そうです」と彼が答えると「あなたは、もう許されたのです」と言われた。

（注）ハッド「限界」の意味。

クルアーンに記される犯罪の種類のことで、殺人、強盗、窃盗、飲酒、姦通、中傷など六種がある

アブー・ウマーマは伝えている

私たちがモスクで、アッラーのみ使いと一緒に座っていた時、或る男がきて「み使い様、私は、ハッドに相当する罪を犯しました。

私に罰を与えて下さい」といった。

み使いは、黙っておられた。

それで、その男は再び「み使い様、私はハッドに相当する罪を犯しました。

私を罰して下さい」と言ったが、それでも、み使いは黙っておられた。

この時、礼拝の始まりを告げるイカーマが唱えられた。

礼拝が終った時、その男は、アッラーの預言者の後に従った。

私（アブー・ウマーマ）も、また、み使いがその男にどうお答えになるかをみるため、み使

いの後に従っていた。
その男は、み使いの側に行き、また、「み使い様、私は、バッド相当の罪を犯しました。
私を罰して下さい」と言った。
この時、み使いは、彼にむかい「あなたは、家を出る時、ウドゥー（礼拝前の洗浄）を正しく行ないましたか」と言われ、その男が「行ないました」と答えると、「その後で、私たちと共に礼拝をしましたか」と言われた。
その男が「行ないました」と答えると、み使いは、「まことにアッラーは、あなたのハッド相当の罪（もしくは、あなたの罪）をお許しになったのです」と言われた。

殺人者の懺悔を受け入れることについて

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーの預言者は言われた。

「あなた以前に在世した者で、99 名の人を殺した者がいたが、その彼は現世で最も知識のある人物に、どうすればその罪から救われるか、についてたずねた。

この人物が或る修道士に会うよう指示したので、彼はその修道士の所に行き「99 名の人を殺したが、懺悔すれば許されるだろうか」と質問した。

この時修道士は、「いいえ」と答えたため、彼は怒ってこの修道士を殺してしまった。

殺人の総数は 100 名になった。

彼は、その後、また、この現世で最も知識をもつ人物に頼み、或る学者を紹介してもらった。

それで、彼は、学者の処に行き、「100 名殺したが、懺悔は受け入れられるだろうか」とたずねた。

学者は「その通りです」と答え、「あなたと懺悔の間を邪魔するものはなにもありません。

しかし、しかじかの土地に行きなさい。

そこには、アッラーを信仰する人がいる故、彼らと共にアッラーを信仰しなさい。

あなたの土地に戻ってはなりません。

そこは、あなたにとってよくない処です」と言った。

そこで、彼は出発したのであるが、道中半ばにして死んでしまった。

そのため彼について、慈悲担当役の天使たちと懲罰担当役の天使たちの間で意見の対立が起った。

慈悲担当役の天使たちは「彼は、アッラーに対し許しを願う懺悔者としてやってきたのです」といい、一方、懲罰担当役の天使たちは「彼は全く善事を行なわなかった」といった。

するとそこに、彼らの間の問題を解決するため人間の形をした別の天使が来て、「彼がどちらの土地により近かったのかによって決めるため距離を測るように」と指示した。

それで、天使たちは距離を測り、彼が、目指していた国により近づいていたことを知った。

慈悲を担当する天使たちは、その結果、彼を受け入れることになった。

このハディースに関連し、カタータは、ハサンの語った話によるとして、「死が迫った時、彼は、目的とする国の方に胸を地につけはいずりながら、少しでも近づこうとした」と記している。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

預言者は言われた。

99 名の人を殺した男が、その後、「懺悔すれば、許されるか」どうかについてたずねるため、修道士の処にきて質問し、「懺悔してもそれは許されない」と聞くと怒って彼をも殺して

しまった。
その後、この男は、この件についてたずねるため村を出て、篤信者らの住む村を目指して旅していったが、その道中死んでしまった。
しかし、死の折にも彼は、うつぶせの状態で少しでも近づこうとはいずり進みながら息をひきとった。
この男に対し、慈悲担当の天使たちと懲罰担当の天使たちとの間に意見の対立が起った。
しかし、この男は、篤信者らの住む方角に、半分より、丁度手の長さほどであるが、近寄っていることがわかったため、篤信者の仲間に入れられた。

前記と同内容のハディースは、**カターダ**によっても同じ伝承者経路で伝えられているが、これには、次の言葉がみられる。
「アッラーは、彼が出てきた土地に対し、遠ざかるよう命じ、彼が行こうとしていた土地に対しては、近づくようお命じになった。

アブー・ムーサーは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「復活の日が来ると、アッラーは全てのムスリムに対し、ユダヤ教徒やキリスト教徒を一人づつひきわたし、"これが業火から、あなたを守るための身代りになる"といわれる（注）」

（注）ユダヤ教徒とキリスト教徒は、彼らの誤まった信仰故に、業火に投げ込まれる故、その分だけムスリムが天国に入る余地が多くなる意

アブー・ブルダは彼の父から聞いて語っている
預言者は言われた。
「アッラーが、ユダヤ教徒、または、キリスト教徒を身代りとして業火に投げ入れるので、ムスリムはそこで死ぬことはない」
ウマル・ビン・アブドル・アズィーズは、アブー・ブルダの父がアッラーのみ使いから聞いたこのハディースを語ったのは真実であると述べ、「彼以外に神は存在しないというその御方アッラーにかけて！」と三度繰返して唱え誓った。
前記と同内容のハディースは、アウン・ビン・ウトバによっても同じ伝承者経路で伝えられている

アブー・ブルダは、彼の父から聞いて伝えている。
預言者は言われた。
「復活の日、ムスリムの或る人たちは、山のように思い罪を背負いながらやってくるが、アッラーは彼らを許し、ユダヤ教徒やキリスト教徒を彼らの身代りになさるだろう」

これに関連し、アブー・ラウフは「誰が、このハディースの真実性について、疑問視しているのか私は知らない」と語った。

ともあれ、アブー・ブルダは、次のように述べている。

「私は、このハディースをウマル・ビン・アブドル・アズィーズに話したが、この時、彼は、“あなたの父が預言者から直接聞いて、これを伝えたのですか”と言った。

私は“そうです”と答えた」

サフワーン・ビン・ムフリズは伝えている

ある男が、イブン・ウマルに対し「アッラーのみ使いが、個人的に話したことをなにか聞きましたか」とたずねた。

それに対し、イブン・ウマルはみ使いが次のように言われるのを聞いたと語った。

「復活の日、信仰者は主の許に連れ出されるが、その時、アッラーは、ヴェールをかぶっておられる。

信仰者は罪状について聞かれ、“その罪を認めるか”と問われる。

彼が“主よ、認めます”と答えると“私は、お前に、地上では罪をかぶせたのであるが、今日、それを許すであろう”と言われ、彼の善行の記録簿をお与えになる。

不信仰者らや偽信者らは、創造物全ての前で“彼らは、アッラーについて虚偽を語った者らである”と布告される」

カウブ・ビン・マーリクとその仲間の懺悔について

イブン・シハーブは伝えている

アッラーのみ使いは、タブークに遠征なさった。
その時、ローマのキリスト教徒やシリアに住むアラブ人キリスト教徒を攻撃することを望んでおられた。
アブドル・ラフマーン・ビン・アブドッラー・ビン・カウブ・ビン・マーリクによると、彼が盲目の父カウブ・ビン・マーリクの世話をしていた時、カウブ・ビン・マーリクは、タブーク遠征の折、アッラーのみ使いについて行かなかった事情について次のように語った。
私は、タブークへの遠征及びバドルの戦い以外、み使いの行なった全ての遠征に参加した。
バドルの戦役の場合には、み使いやムスリムたちは、攻撃するためではなくクライシュ部族のキャラバンを単に待ち伏せするために出て行ったのであるから、不参加について誰も咎められることはなかった。
ともあれ、この時アッラーは、彼らの意図に反し、彼らを敵と対決させたのである。
私は、イスラームへの忠誠を誓ったアカバの夜（注）、み使いとご一緒する光栄に恵まれた。
タブーク遠征に比べて、バドルの戦いについては、しばしば、人々が話題にしているけれども、私にとって、バドルの戦役に参加することよりこのアカバの夜の方がずっと貴重な経験であった。
タブーク遠征に、私がみ使いに従って参加しなかった事情は次の通りである。
私にとってこの遠征の頃ほど、十分に財産を持ち生活が楽だったことはなかった。
アッラーに誓って！
以前にはラクダを二頭も所有する余裕はなかったのであるが、遠征に参加するためこれらを買うこともできたほどである。
み使いは、非常に暑い時期にこの遠征に出発なさった。
長くしかも水のない土地を旅し、敵の大軍と対決しなければならないため、み使いはムスリムたちに、彼らが直面する現状について説明し、その遠征のため十分に必要品をそろえるよう準備せしめた。
み使いは、また、目的地についても彼らに話した。
この時、み使いに従ったムスリムは多かったが、彼らの名をチェックするための記録簿はなかった。
ムスリムの中には、少数ながら、遠征への不参加を願い、身をかくした者らもいた。
彼らに関してアッラーが啓示を下すまで、彼らは見つけられることもなかったのである。
ともあれ、み使いがこの遠征に出発なさるのは、果物が実り牧草がよく繁茂する時期であったため、私はそれにこだわり、その手入れにかかずっていた。

この頃、み使いやムスリムたちは、遠征のための準備をしていたのである。
私は、朝出かける時にはいつも彼らのように遠征の準備をしなければならないと思いながら、(夕方には)なにもせずに戻ると言う有様であったが、自分では、いつでも準備するだけの資金はあると思い、遠征軍が出発しようとするまでぐずぐずして過した。
み使いが、ムスリムたちをひ聞いて出発したのは朝方であった。
私は、なんら準備してなかった。その日には、私も朝早く家を出たが、帰って来ても、まだ、決心がつかなかった。
私が、こんな状態でいる間に、出発した遠征軍は歩みを速め、ずっと先に進んでしまった。
私は、出発して彼らに追いつきたいとも考えた。
そうすればよかったかも知れないが、結局、私には、そうするようには定められていなかったのであろう。
み使いらが出発した後、私は、町に出てみて、私のような若い者は誰もなく、日頃、偽信者と目されていた者や身体が弱いためにアッラーに対する義務を免除された人々をみかけるだけであることに驚いた。
み使いは、タブークに着くまで私のことを思い出さなかったが、タブークで人々と一緒に座っていた或る日のこと「カウブ・ビン・マーリクはどうしたのか」と言われた。
これに対し、サラマ族出身の或る男が「み使い様、美しい外衣やこれを身につけた自分の姿にみとれ、彼は出発できなかったのでしょう」と言うと、
ムアーズ・ビン・ジャバルは、その時「なんたることを言うのか！
アッラーに誓って！
み使い様、私たちは、彼が善人であること以外なにも知りません」と言ったが、み使いは黙っておられた。
そのような状態でいた時、み使いの幻覚に白衣をつけた一人の人物が現われ、み使いは、その人物に対し「あなたは、アブー・ハイサマではないか」と言われた。
正しくその幻覚に現われた人物は、アブー・ハイサマ・アンサーリーに相違なかった。
彼は、なつめやしの実を１サーア(重量単位)サダカ(喜捨)した時、偽信者たちからあざけられた人物であった。
み使いが、タブークから帰還途上にあるとの知らせを聞いた時、私は、大変不安になった。
そして、なにか嘘偽の話を捏造しようかとも思った。
そしてまた、み使いの怒りから逃れる術はないかとあれこれ考えあぐね、家族の中の思慮深い者らと相談した。
ともあれ、み使いの到着間近になる頃には、私のこのような誤まった考えは消え、正直に話す以外私を救う道はないとの結論に達し、ありのままの事実を話すことを決心した。
み使いがマディーナに着いたのは朝方であった。
み使いは、旅から帰ると最初にモスクに行き、ニラカートの礼拝を行ない、その後、人々と一緒にお座りになる習慣であった。

み使いが、その習慣通り、お座りになると、タブークへ従軍しなかった人たちが来て、彼にいろいろと述べて弁明し、忠誠に変りないことを誓った。
その人たちの数は、80 名以上にものぼった。
み使いは、彼らの弁明や忠誠の誓いを聞き入れ、彼らへの許しをアッラーに祈られたが、彼らの本心の秘密に関しての判断は、アッラーに委ねた。
私が、み使いの前に出て挨拶した時、み使いはほほえまれたが、それには不快気な様子もみられた。
ともあれ、み使いが、私に「前に来るように」と言われたので、私は前へ行って座った。
み使いは「どうして、参加しなかったのか、乗り物がなくて参加できなかったのか」と言われた。
私は「み使い様、アッラーに誓って！
もしも私があなた以外の誰かの前に座っているならば、私は、必らずや一つ二つ口実を述べて、その人の怒りから逃れるでありましょう。
弁明する自信も持っております。
しかし、アッラーに誓って！
私は、十分、承知していますが、もしも、私が、あなたを納得させるため、なにか嘘偽の理由をあなたに申し上げたとしたら、アッラーは、必らずや私の上にあなたの怒りをむけさせなさるでありましょう。
しかし、また私が、もしも真実を話せば、あなたは私をお怒りになるに相違ありません。
私は、アッラーのよいご判定を願うばかりです。
アッラーに誓って！
私には、なんら申し上ぐべき弁明の言葉はありません。
遠征に参加しなかった頃、私は、かつてなかったほど豊かな資産を持ち、恵まれた状態にあったのです。」と言った。
み使いはこの時、「この男は正直に話した。
アッラーが、あなたの件についてはなんらかの決定を下すであろう故、立ちなさい」と言われた。
私が、立ち上った時、サラマ族の者たちが急いで私を追いかけて聞いて、次のように言った。
「アッラーに誓って！
今回の罪以外に、かつてあなたがなにか罪を犯したと言うことは聞いたことがありません。
み使いに対し、遠征不参加の人々が弁解したのに、あなたはなんら弁解しようとはしませんでした。
それだけでもあなたには、十分、罪を許される資格があります。
み使いは、アッラーにあなたのため許しを祈願することでしょう。」
彼らが、こういって私を励ましてくれたので、アッラーの判断を知りたく、私は、み使いの処

に戻りたいと願ったほど混乱した思いを抱いた。
その時私は彼らに「私と同じ目にあった人がいますか」と聞いたが、彼らは「はい二人が、あなたと同様な目にあいました。
彼らは、あなたと同じことを言い、あなたが言われたのと同じことをみ使いから言われました」と答えた。
私が「その二人は誰ですか」と聞くと、彼らは「ムラーラ・ビン・ラビーア・アーミリーとヒラール・ビン・ウマイヤ・ワーキフィです」と答えた。
彼らは、これら二人の敬虔な人物の名を告げたが、私にとってはこの二人は、バドルの戦いに参加した、いわば、理想的な人たちであった。
私は彼らからこれら二人の名を聞いてから、彼らと別れた。
み使いは、遠征に参加しなかった者のうち、我ら三名に対してのみは、対談することをムスリムたちに禁じた。
それで、人々は我々を避けるようになり、態度も変って聞いて、あたかも、我々を敵視するかのような状態が生じてきた。
実際、私は、この雰囲気に気づいており、その中でかなり長い間過したのである。
このような状態は 50 日もつづいた。
私の二人の友人らは、家にとじこもり泣き暮していた。
私は、若く元気だったので、家を出て、礼拝には出席し、マーケットの中を歩きまわったが、誰も話しかけてくれる者はいなかった。
私は、また、礼拝後、人々と一緒に座しているみ使いの処にも行ったが、私が挨拶してもみ使いの唇が動いて、私に挨拶を返してくれるかどうか自信が持てなかった。
私はみ使いの近くで礼拝し、時々、み使いの方を盗みみた。
私が礼拝に出席した或る時、み使いは私の方をごらんになったが、私がみ使いの方をみると、横をむかれたこともあった。
私に対するムスリムたちの無情な態度が、かなり長くつづいていた頃、私は出かけて、アブー・カターダの庭園の壁に登った。
アブー・カターダは、私の従兄であり、私が最も好きな人物であった。
私は彼に挨拶したが、彼はそれに対し、なんら応えようとはしなかった。
私は「アブー・カターダよ、アッラーに誓って聞きますが、私が、アッラーのみ使いを最も愛していることに気づいておりませんか」と言った。
彼は、黙ったまま、それに答えなかった。
私は、再び、彼に繰返して同じことをたずねた。
しかし、彼は黙ったままであった。
私は、更に、彼に同じことをたずねた。
するとようやく彼は「アッラーのみ使いが、最もよくご存知のはずです」と答えただけであった。

その言葉を聞いた時、私の目から涙があふれだした。
私は、壁を降りそこを立ち去った。
私が、マディーナで、マーケットを歩いていた時、マディーナに穀物を売るためシリアから来ていたナバタ人の一人が、人々に、カウブ・ビン・マーリクの処に案内してくれるようにと頼んでいるのに出会った。
人々は、私の方を指さして彼に知らせた。
すると彼は、私の処に来て、ガッサン王からの手紙を渡してくれた。
私は、書記だったので、その手紙を読めたのであるが、その中には、次のような言葉が記されてあった。
「あなたの教友（ムハンマド）が、あなたを残酷に扱っているとの知らせを聞いています。
アッラーは、適切な処を見い出せず、おちぶれさせるような場所に住ませるためにあなたをお創りになったのではありません。
それ故、私たちの処に来なさい。
私たちは、あなたの名誉にふさわしく、あなたを待遇します。」
私はこの手紙を読み終えると「これもまた、災いの種になる」といって竈に投げ入れて、それを焼き捨てた。
全体 50 日のうちの 40 日がすぎても、み使いはなんの啓示もお受けにならなかった。
この頃、み使いからの使いが来て私に「み使いは、あなたに、夫人と別居して暮らすよう命じられた」と伝えた。
私がこれに対し「彼女と離婚すべきですか。
それとも、どうすればよいのですか」とたずねると、その使いは「いや、ただ、別居し、性交渉をもたないように」と言った。
同じ知らせは、私の二人の仲間の処にももたらされた。
それで、私は妻に「お前の両親の許に行き、私に関し、アッラーの決定が下るまで、そこに留まっているように」と告げた。
ヒラール・ビン・ウマイヤの妻は、み使いの処に行き、「み使い様、夫のヒラール・ビン・ウマイヤは老齢であり、召使いもいません。
私にはそのような彼の世話をすることも許されないのですか」と訴えた。
その時、み使いは「世話をするのはよいが、性交渉をもってはならない」と言われたが、彼女はこれに対し、「夫にはもうそのような欲望はありません。
夫は、あの日以来、今日までほとんど泣き暮しています」と答えた。
私の家族の一人は、その話を聞き、私に「あなたもみ使いの所へ行き、ヒラール・ビン・ウマイヤの妻が夫の世話をする許しを得たように、あなたの妻に関し、許しを得たらいかがですか」と言ったが、
私は「み使いに許しを得ようとは思わない。
私はまだ若いし、み使いがそれに対し、どのようにお答えになるのかわからない」と言った。

このような状態で、更に 10 日も過ごし、人々からボイコットされて以来、50 日目になった。
50 日目の朝、私は、早朝礼拝を終えてから、家の屋上に座していた。
実際、そのような状態で私が座っていた時、アッラーは「世間が私にとって辛いものとなり、地上は、その広さにも関わらず、私を圧迫している」と言う言葉で、私たちについて述べられたのである。
私は、この時、サルウの山頂から、大声で「カウブ・ビン・マーリクよ、お前によい知らせがある」と叫ぶ声を聞いた。
私は思わず、平伏して礼拝した。
そして、私に対する許しの知らせが下されたことを知ったのである。
み使いは、早朝礼拝の時、人々に「アッラーが私たちの懺悔を容認なさった」と言われた。
人々は私たちにこの吉報を知らせるため出て、その何人かは、私の教友の処へ行って知らせた。
アスラマ族の或る男は、馬を走らせてやって来たが、その馬は、彼の声よりも早く私の処に着いた。
その物音で、誰か来たことがわかったのであるが、その彼が、私に吉報を伝えてくれた。
私は喜びのあまり、着ていた衣服を脱いで彼に与えた。
しかし、私はこの時、この二枚の衣服以外、他には持っていなかったので、彼にその衣服を貸してくれるように頼み、それを着てみ使いの処に向った。
その途中、出会った人々は、口々に「アッラーが、あなたの懺悔をお認めになったことをお祝いします」といって喜こんでくれた。
私が、モスクに着いた時、み使いは人々と一緒に座っておられた。
私をみたタルハ・ビン・ウバイドッラーは、すぐに立ち上がり、私の方にとんで聞いて、私の手を握り祝ってくれた。
しかし、アッラーに誓って！
彼以外にはムハージル（移住者）たちの誰一人として、立ち上って私を祝ってくれる者はいなかった。
それだけに、タルハのこの厚意を私は決して忘れないのである。
ともあれ、私は、み使いに「アッサラーム・アライクム！（あなたに平安を！）」といって、挨拶した。
その時、み使いのお顔は喜びで輝いていた。
み使いは、「今日の喜びは、あなたの母が、あなたを生んだ時の喜びにも等しいものであろう」と言われた。
私はこの時、「み使い様、懺悔が許されたのは、あなたによってですか。
それとも、アッラーによってですか」とたずねた。
み使いは「いや、アッラーによってです」と言われた。
み使いが、喜ぶ時には、お顔があたかも月の一部を見ているかのように輝やくのが普通

で、私たちはそれによって、み使いの喜びを知ることがで聞いたものであった。
私は、み使いの前に座り「み使い様、懺悔の印として、私の財産をアッラーとそのみ使いのために、喜捨（サダカ）してもよいでしょうか」と言った。
み使いは「一部は残しておくのがよいだろう」と言われた。
それで、私は「ハイバル遠征の時、私の取り分として得た財産を残しておきます」と言った。
私は、また、「み使い様、アッラーは、私が真実を話したので私をお救い下さったのです。それ故、私の懺悔は、生あるかぎり、真実以外のことを話してはならないと私に教えてくれました」と言った。
まことに、真実を話したために、アッラーによって、私以上に厳しい試練を課せられた者が、ムスリムの中にいるかどうかを私は知らない。
ともあれ、私は、み使いにこう申しあげて以来、今日まで一切嘘を言ったことはない。
このように嘘を言わぬと決心している故、私は、アッラーが、私の残った人生において、災いから私を放って下さるよう願っている。
アッラーは、次の言葉を啓示された。
「アッラーは、預言者と苦難の時に、彼に従った移住者たち（ムハージリーン）と援助者たち（アンサール）に哀れみをかけられた。
その後、彼らの一部の者の心は（その義務の履行から）ほとんど免れてしまった。
その時、アッラーは、彼らに哀れみをかけられた。
本当にアッラーは、かれら（ムスリム）に親切であり、慈悲深くあられる。
後に残った三人に対しても、（また、アッラーは、哀れみをかけられた。）
大地は、このように広いのだが、かれには狭く感じられ、また、その魂も、自分を（内面から）狭めるようになった。
そしてかれらは、アッラーにすがる他には、アッラー（の懲罰）から、免れる術がないことを悟った。
すると主は哀れみをかけられ、彼らは、悔悟して（アッラーに）返った。
本当にアッラーは、度々、赦される慈悲深い方であられる。
あなたがた信仰する者たちよ。
アッラーを恐れ、（言行の）誠実な者と一緒にいなさい。」（クルアーン第 9 章 27-29 節）
（カウブは、つづけて語った。）
アッラーが私をイスラームに導いて下さって以来、私にとってアッラーのみ使いに真実を告白したこと以上に、重要な祝福となったものはなかった。
もしも、私が嘘偽を話したとしたら、私は、かつて嘘偽故に破滅させられた者と同様に、破滅させられたであろう。
なぜなら、嘘偽をかたった者らに対して、アッラーは、他の誰にも用いなかったほどの苛酷な言葉を使って、次のように啓示されたからである。
「あなたがた（信者）が、（戦いから）帰って聞いた時、あなたがたが（責めないで）放置す

るよう、アッラーにかけて、彼らは誓うであろう。
それでは放っておけ。
彼らは本当に不浄であり、地獄が彼らの住まいである。
彼らの（悪い）行ないに対する報いである。
彼らは、あなたがたに気に入られるようにあなたがたに誓うかもしれない。
だが、もしあなたがたが彼らを気に入っても、本当にアッラーは、アッラーの掟にそむく者をお喜びになられない。」（クルアーン第 9 章 95-96 節）（カウブは、つづけて語った。）
アッラーのみ使いの前で誓い、それが容認され、アッラーの許しを祈られた人たちに比べて、私たち三人だけの件が延ばされたが、その時、み使いは、アッラーの決定が下されるよう祈願なされたのであり、そのためにこそ、アッラーは「後に残った三人に対して」と啓示され、私たちの件に関して決定を下されたのである。
ただ、アッラーが言われた「後に残った三人」は決して「遠征参加に残った三人」と言う意味ではない。
これは、アッラーに誓いを述べ弁明を為し、それを受け入れられた人々の後まで、私たちの問題は残された、と言うことを意味しているのである。
前記と同内容のハディースは、ズフリーによっても、同じ伝承者経路で伝えられている。

（注）マディーナのアンサールが、ウクバでイスラームへの帰依を誓った夜のこと

ウバイドッラー・ビン・カウブ・ビン・マーリクは伝えている
「彼は、父カウブ・ビン・マーリクが、盲目になってから身辺の世話をしていたが、或る時、アッラーのみ使いのタブーク遠征に参加しなかった時の話を聞いた。」
以下は前記と同内容であるが、次の言葉も記されている。
「アッラーのみ使いは、遠征を計画した時にはそれを公表したことはなかったが、この度の遠征についてのみ秘密にしなかった」
なお、アブー・ハイサマに関する記述はこれには記されていない。

アブドル・ラフマーン・ビン・アブドッラー・ビン. カウブ・ビン・マーリクは、小父ウバイドッラー. ビン・カウブの話を次のように伝えている
彼（ウバイドッラー）は、父カウブが視力を失った時、世話をした人物で、人々の中では最も学があり、アッラーのみ使いの教友らのハディースを多く記憶していた。
彼は、次のように語った。
「私の父カウブ・ビン・マーリクの話によると、彼は、アッラーに懺悔を受け入れられた三人の中の一人であった。
彼は、み使いが行なった遠征中、二つを除き他の全ての遠征に参加したと語った」以下は、前記ハディースと同内容であるが、別の伝承者経路で伝えられたハディースの中に

は「アッラーのみ使いは一万人以上にも及ぶ大軍をひきいて遠征に出発したため、人名表には、それだけの数は記録できなかった」と記されている。

アーイシャに対する中傷について

ズフリーは伝えている

サイード・ビン・ムサイイブ、ウルワ・ビン・ズバイル・アルカマ・ビン・ワッカース及びウバイドッラー・ビン・アブドッラー・ビン・ウトバ・ビン・マスウードらは、預言者の妻アーイシャについて、中傷者らがしかるべきことを言って彼女を批難した時、アッラーが彼女を免罪されたハディースについて物語っている。

これらの口述者が、このハディースの一部をそれぞれ語ったのであるが、記憶力のよい者たちはより多くより明確に話してくれた。

私は、彼らが語ったこのハディースを忘れないよう記憶したが、幾つかの話は共通するものであった。

ともあれ、この話の内容は、次の通りである。

預言者の妻、アーイシャは語った。

アッラーのみ使いは、旅に出る時には、いつも妻たちの間に矢を投げ、その矢が当った者を伴って行かれた。

ある遠征に出発される時、み使いが私たちの間に矢を投げ、それがたまたま私に当ったので、私は、み使いと共に出発した。

それは、ヴェール(ヒジャーブ)に関する啓示が下された頃のことであった。

私は、ラクダの輿に乗って、目的地まで運ばれた。

(ともあれ)遠征を終え、帰還の途中、私たち一行のキャラバンがマディーナに近づいた時のことであるが、み使いは夜行することを命じられた。

出発の命令が下った時、私は、起いて外に出、軍隊のキャンプ場から離れた場所で用を足して後、元の場所に戻った。

その時、胸にさわってみて、私は(イエメンの)ザファール真珠で作ったネックレスをなくしたことに気づいた。

それで私は、用を足した場所に戻ってネックレスを捜しまわり、しばらくの間、そこにとどまった。

この間、ラクダに鞍をつけ私を運ぶために、輿を積んだ人々の一行は出発してしまった。

彼らは、私が輿の内にいるものとばかり思っていたのである。

当時の女は、体重が軽く、多く食べなかったために太らなかった。

そのため、一行は、私が若く軽量だったこともあって、ラクダの輿の重さに気づかなかったのである。

彼らは、ラクダをかりたてて出発した。

私は、その軍隊が、出発したあと、ネックレスをみつけ元の場所に戻ったのであるが、そこには、呼んでも誰も応える者はいなかった。

私は、私がいないことに気づいた人たちが、捜しに戻ってくると思い、その場所で待った。

そのような状態で待つうちに、眠気におそわれ、私は眠ってしまった。
サフワーン・ビン・ムアッタル・スラミー・ザクワーニーは、たまたま、休息していたために軍隊の出発に遅れていたが、夜半近くに歩いて私の傍を通りかかり、眠っている人がいるのに気づいた。
彼は、女性がヴェールを付けるよう命じられる以前に、私をみかけたことがあり、私が誰であるか、すぐに気づいたようであった。
私は、彼の「私たちは、アッラーのためにあり、アッラーの元に帰りゆくものであります」と唱える声で起き上り、着ていた外衣で顔を隠した。
アッラーに誓って！
彼は一言も私に話しかけず、私は、ただ、彼が「私たちはアッラーのためにあり云々」と唱える言葉以外、なにも彼の声を聞かなかった。
彼が、ラクダをひざまづかせ、前脚を押えたので、私はそれに乗った。
彼は、私を乗せたラクダの手綱をとって先に歩きだし、厳しい暑さのため休息中の軍隊に追いついた。
私を疑う者らに災いあらんことを！
彼らの中でもアブドッラー・ビン・ウバイー・ビン・サルールは、最も私を疑った人物であった。
マディーナに帰った後、私は一ヵ月ほど病気だった。
その頃、私を中傷する者らの言葉は、人々の間に広まっていたが、私は全くそのことに気づいていなかった。
しかし、私は、み使いが、私に対し、私が病気になる前ほどには、親切でなくなったことに気づいていた。
み使いは、私の処に聞いて「アッサラーム・アライクム！（平安を！）」といって挨拶したあと、どんな具合かとおたずねになるだけであった。
どうしてなのかと私は不思議に思ったが、悪い噂については知らなかった。
私は、まだ、十分には回復していなかったが、或る時外出し、その折、ウンム・ミスタフも一緒で、共々、マナースウの方に歩いて行った。
マナースウにはトイレがあり、当時ここへ、私たちは夜間だけ行ったものであった。
各家の近くに、トイレが設けられる前のことであり、この状態はイスラーム以前のアラブ人の生活と同じであった。
ともあれ、私は、ウンム・ミスタフと共に歩いて行った。
彼女は、アブー・ルフム・ビン・ムッタリブ・ビン・アブド・マナーフの娘であり、彼女の母は、アブー・バクル・シッディークの小母サフル・ビント・アーミルの娘である。
彼女には、ミスタフ・ビン・ウサーサ・ビン・アッバード・ビン・ムッタリブと言う息子もいる。
用を足した私とそのアブー・ルフムの娘は、家の方に向った。
その途中、突然、ウンム・ミスタフの被り布の中に虫のようななにかが飛び込んで来、そ

のため、彼女は、思わず「ミスタフに災いあれ！」と叫んだ。
私はこの言葉を聞きとがめ、「誰に対し災いあれ！　と言ったのですか、バドルの戦いに参加した人を呪うのですか」と言った。
それに対し、彼女は、「おお、なんにも知らない女よ！
彼がなにを話しているか、知らないですか」と言った。
「彼はなにをいっているのですか」と私がたずねると、彼女は、私に中傷者たちが述べている言葉を話してくれた。
そのため私の病気は、一層悪化してしまった。
ともあれ家に戻ったところにみ使いがたずねてこられ、挨拶してから「どんな具合か」と言われた。
私は、この折「両親の家に行かせて下さい」と頼んだ。
私は両親に、その噂について確めたいと決心していた。
み使いが許してくれたので、私は、両親の家に戻り、母に対し「人々が、噂していることを知っていますか」とたずねた。
母は、この時「娘よ、心配することはありません。
もしも、夫から特に愛される美しい女がいれば、彼女の仲間の妻たちはあれこれ、（焼餅を焼いて）噂をするものです」と言った。
私は「アッラーを讃えます」といってから「人々が、それほど、噂しているのですか」と聞いた。
私は、その夜、朝まで泣き過し、一睡もせず、朝もまた、泣いていた。
このことに関する啓示が下るのが遅れていたので、み使いは、アリー・ビン・アブー・ターリブ及びウサーマ・ビン・サイドをよび、夫人たちと別れることに関し相談した。
この時、ウサーマ・ビン・サイドは、み使いの夫人たちに罪はないこと、み使い自身夫人たちに愛情を抱いていることなどを説き「み使い様、彼女らは、あなたの妻たちです。
私たちは、彼女らが、善良な人たちであることをよく知っています」と言った。
アリー・ビン・アブー・ターリブは「主はみ使いに対し、妻たちに関するいかなる不必要な重荷も課すはずはありません。
彼女と似たような女は多いのです。
もし、彼女の召使い女（バリーラ）に聞けば、彼女は正直に話すことでしょう」と言った。
それで、み使いは、バリーラを呼んで「アーイシャになにか不審な点はないか」とたずねた。
バリーラは「あなたを真理と共に送られた御方に誓って！
彼女には欠点は、なに一つありません。
ただ、彼女は若いだけに、一度だけ粉をこねているうちにうっかり眠ってしまい、小羊に食べられてしまったことがあるだけです」と答えた。
み使いは、説教壇（ミンバル）に登り、アブドッラー・ビン・ウバイー・ビン・サルールに謝罪するよう要求し、次のように言われた。

「あの男によってもたらされた私の家族を苦しめた汚名を誰がそそいでくれるのか。
アッラーに誓って！
私は、妻が敬虔な女であることを知っています。
また人々がこれに関連し、当の相手として噂している人は、私の知るかぎり誠実な人物であり、私の家には、私と一緒でないかぎり、入ろうともしない人であります」と言われた。
サウド・ビン・ムアーズ・アンサーリーはこの時、立ち上り次のように言った。
「み使い様、私が、あなたの名誉を守ります。
もし、彼がアウス族の者ならば、彼の首を切り落します。
もし、彼が、我々の同胞ハズラジュ族の者であれば、我々に命令して下さい。
それに従います。」
この時、サウド・ビン・ウハーグが立ち上った。
彼は、ハズラジュ族の部族長で、敬虔ではあったが、部族意識をまだ持っていた人物でもあった。
彼は、サウド・ビン・ムアーズに対し、「永遠の存在者アッラーに誓って！
お前は嘘偽を述べている！
お前には彼は殺せないし、彼を殺す力もない」と言った。
この時、またウサイド・ビン・フタイルは立ち上った。
彼は、サウド・ビン・ムアーズの従兄であった。
彼は、サウド・ビン・ウハーグにむかい「永遠の存在者アッラーに誓って！
あなたは嘘をついている。
我々は、彼を必らず殺すであろう。
あなたは偽信者です。そのため偽信者たちをかばっているのだろう」と言った。
かくして、アウスとハズラジュの両部族の者たちは激昂し、ほとんど戦わんばかりの状態だった。
み使いは、説教壇に立ったまま、彼らに怒りを静めるよう説得し、静かにさせた。
（アーイシャはつづけて語った）
私は、一日中、泣き暮し、夜も同様であった。
次の夜も一睡もできなかった。
私の両親は、このように泣きつづけた果てには、心臓を痛めるのではないかと案じ、私の傍に座っていた。
このような時、アンサールのある女性が見舞いに来たが、私を見ると彼女も泣き出した。
こんな状態でいるところに、み使いがこられ、挨拶してから、私の傍にお座りになった。
このような噂が立ち、しかも、それを明らかにするアッラーのお言葉が、私に関し、啓示されてなかったため、この一ヵ月ほど、み使いが私の傍らにお座りになったことはなかった。
み使いは「アッラーの他に神はなく、ムハンマドはアッラーのみ使いである」とタシャッフドをお唱えになってから「要点をのべれば、アーイシャよ、この件に関しては、私は次のよう

な結論に達している。
もし、お前が潔白であるならば、アッラーは、お前の名誉を回復し、潔白さを証明して下さるだろう。
もし、お前の方に偶発的な過失があったとしたなら、アッラーに許しを求めるがよい。
アッラーは、しもべが過失を告白すれば許して下さり、懺悔してアッラーにむかえばアッラーもその懺悔を受け入れ、慈悲を持ってその者に対処なされる」と言われた。
み使いが、こう言われた時、私の涙は渇ききり、一滴の涙も私の目にはなかった。
私は、父に向い「私に代ってみ使いに答えて下さい」と頼んだ。
父は「アッラーに誓って！
み使いに対し、私にはなんと申し上げてよいか、わかりません」と言った。
それで、私は、母に「私に代ってみ使いに答えて下さい」と頼んだ。
しかし、母もまた「アッラーに誓って！
私には、み使いに対し、なんと申し上げてよいのかわかりません」と答えた。
私は、当時、まだ年も若く、クルアーンをそれほど、度々、読んでいたわけではなかったが、次のように言った。
「アッラーに誓って！
あなたに、このことについて、いろいろとお聞きしたい。
あなたは心中では、それが事実であると思っておられるようにみえます。
それ故、もしも、私が、全く潔白です、アッラーはそれをご存知です、と言っても、あなたはお信じにはならないでしょう。
アッラーは、私が全く潔白であることをご存知であるのに、もし、私が、噂されているような過失を犯したとあなたに告白したとすれば、その場合、あなたはそれを事実と信じるでありましょう。
それ故、アッラーに誓って！
私には、どこにも選ぶべき道はありません。
預言者ユースフの父が「**（私としては）耐え忍ぶのが美徳だ。あなた方が述べることについては、ただ、アッラーにお助けをお願いする。**」（クルアーン第 12 章 18 節）と言った言葉を信ずる以外ありません」
こう述べた後、私は、ベッドに横たわり、顔を他の方にむけた。
アッラーに誓って！
私は、潔白であることを十分知っていたが、アッラーが天使ジブリールを通じ、私などのことで啓示を下さるとは期待していなかった。
そして、また、この件が、祈願の時唱えられる言葉として啓示されるほど重要なこととは、考えてもみなかった。
私はただ、アッラーが、み使いの睡眠中に、私の潔白を証する幻覚でもお示し下さればよいと願っていた。

み使いは、その座から動かず、私の家族の誰も外に出ていく者はいなかったが、この時、アッラーは、み使いに啓示をお授けになったのである。
み使いは、いつも啓示を受ける時のような圧迫感を感じだし、アッラーの言葉の重さ故に汗を流し始めた。
啓示が下る時には、み使いは、冬の季節でも、銀の玉のような汗を流されたのであった。
ともあれ、このような状態が終ったあと、み使いが笑いを浮べながら、私に最初に言われたのは、次の言葉であった。
「アーイシャよ、お前によい知らせがある。
アッラーはお前の潔白を証言された」。
私の母は、この時「起いてみ使いに感謝なさい」と言ったが、
私は「アッラーに誓って！
私は、み使いに感謝するためには起きません。
ただ、私の潔白を証言して、啓示を下さったアッラーを讃えるだけです」と言った。
（アーイシャはつづけて語った）
アッラーは、**「本当に、この虚言を広めた者は、あなたがたの中の一団である。」**（クルアーン第 24 章 11 節）
その他、10 節にも及ぶ御言葉を、私の潔白に関し啓示なさった。
アブー・バクルは、ミスタフに対し彼が親族の一員で貧困であったため援助金を与えていたが、「アッラーに誓って、今後、彼にはなにも与えてやらない」と言った。
アーイシャは、その時アッラーが**「あなたがたの中、恩恵を与えられ、裕福で能力ある者には、その親族者に喜捨しないと誓わせてはならない。」**（クルアーン第 24 章 22 節）から**「アッラーが、あなたがたを赦されることを望まないのか」**（第 24 章 22 節）までの啓示を下されたのは、これに関連してのことである」と述べた。
ヒッバーン・ビン・ムーサーは上記の啓示に関し、アブドッラー・ビン・ムバーラクが、「これは、聖典の中で、最も希望を抱かせる啓示（の御言葉）である」と語ったと伝えている。
（ともあれ）アブー・バクルは「アッラーに誓って！
アッラーが私を許されることを願います。
私は、決して、彼に援助金を与えることを中止致しません」と述べ、ミスタフに対する資金援助をつづけることにした。
（アーイシャはつづけて語った）
アッラーのみ使いは、ジャフシュの娘で妻の一人ザイナブに、私たちについて彼女が知っていることや見たことをおたずねになった。
その時、彼女は「み使い様、私は、耳で直接聞いたり、目で直接見たりすること以外なにも申せません。
私が、知っているのは、彼女が、善良な人であると言うことだけです」と述べた。
預言者の妻たちの中で私と張り合ったのはこのザイナブだけであったが、アッラーは、彼

女が誠実にふるまい偽りの申し立てをしないよう、彼女のためお計らいになったのである。
ただ、彼女の姉妹のハムナ・ビント・ジャフシュは、彼女とは反対に、中傷者たちの言葉をふれまわり、結果的には、その者たちと共々破滅してしまった。

ズフリーによる前記と同内容のハディースは、別にも幾つかの伝承者経路で伝えられるがそれぞれ、表現用語には多少の異同がみられる。
それらのうち、ウルワを口述者の一人とするハディースには「アーイシャは、ハッサーンが、彼女の前で批難されるのを嫌い、まことに、私の父の名誉、私の母の名誉、私の名誉は、全て、ムハンマド様の名誉を守ろうと願っていますと詩の中で述べたのは彼ですと常々語っていた」と記されている。
更に、ウルワは「アーイシャが『アッラーに誓って！　批難の矢をむけられた当の人物は“アッラーを讃えます。
私の生命を手にしておられる御方に誓って！
私は、かつて、いかなる女性のヴェールをも脱がせたことはありません”と述べたが、その後アッラーの殉教者として死んだ』と語った」と伝えている。

アーイシャは伝えている
知らない間に、私のことが問題となっていた頃、アッラーのみ使いは、説教のため立ち上り「アッラー以外に神はないことを証言します」と言ってタシャッフドを唱えてから、アッラーを讃え、それにふさわしい言葉を述べてアッラーを称讃なさった。
そして後、次のように言われた。
「要点を言えば、私の家族に対し嘘偽の申し立てをした者らをどうすべきか、助言をしてほしい。
アッラーに誓って！
私は私の家族の誰にも、なんらの過失があったとは思わない。
また、嘘偽の申し立てによって批難を受けた人物について言えば、私は、彼になんらの過失があるとは思わない。
彼は、私が一緒でないかぎり、私の家に入ろうともしない人物である。
私が旅に出て不在の時には、彼もまた私と共に旅して不在となる人物である」
以下の話も、前記のハディースと多少異っている。
「アッラーのみ使いは、私の家に聞いて召使い女に私に関して質問したが、それに対し彼女は“アッラーに誓って！
彼女には、批難に価するなんらの過失もありません。
ただ、強いてあると言えば、彼女がいねむりしたため羊が入って来て、練り粉を全部食べてしまったことぐらいのものです”と答えた」
「教友たちの或る者は、彼女を批難して、“アッラーのみ使いに事実を正直に話しなさい”

と言い、あれこれと問題になっていることを指摘した。
アーイシャは、“アッラーを讃えます！”と言ってから“アッラーに誓って！
純金について宝石商がよく知っているように、私も自分のことについては、十分知っています”と言った。
またこの件に関し批難されていることを知った当の人物（サフワーン）は、“アッラーを讃えます。
アッラーに誓って！
私は、いかなる女性のヴェールも脱がせたことはありません”と語った。
アーイシャは、この人物について“彼は、アッラーのため殉教者として死んだ”と語った」
このハディースには、次の言葉も付加されている。
嘘偽の申し立てをした人々は、ミスタフとハムナ及びハッサーンなどである。
偽善者アブドッラー・ビン・ウバ言いに関して言えば、彼は、偽りの情報を集めるため努力し、それを世間にまき散らした男であり、噂の捏造者であった。
ジャフシュの娘ハムナも同様であった。

み使いの奴隷女に対する姦通罪を免除された男について

アナスは伝えている

或る男が、アッラーのみ使いの奴隷女と姦通した。

み使いは、アリーに、「行って、彼の首を落すように」と命じた。

アリーがその男の家に行くと、彼は井戸につかって、身体を冷やしていた。

アリーは「出てくるように」命じ、彼の手をつかんで外にひきだしたが、その時、彼が性器を切り取ったことに気づいた。

それで、アリーは預言者の処に行き、「み使い様、彼は、切り取ってしまい性器を持っていません」と報告した。

偽信者の書

タイトルなし

ザイド・ビン・アルカムは伝えている

私たちは、アッラーのみ使いと共に旅したが、その折、多くの困難に出会った。

（この頃）アブドッラー・ビン・ウバイユは彼の友人に**「あなたの所有物を、み使いと一緒にいる者たちに、与えてはならない」**（クルアーン第63章7節）彼らは、み使いから離れるのです」と語った。

ズバイルは後に、この言葉について“み使いの周りにいる人達から”と言うべきであるのに、彼は“み使いから”と表現している、と述べたと批判している。

（ともあれ）アブドッラー・ビン・ウバイユは更に、私たちが**「マディーナに戻ったならば、この高貴な者が、卑しい者らを、必ずそこから追い出すでしょう（注1）」**（第63章8節）とも語った。

このため私（ザイド）は、預言者の処に行きそのことを話した。

み使いは、ウバイユに使いを出し、彼にそのように言ったのかとたずねたが、ウバイユは誓いを立ててそのようなことは言わなかったと述べ、「み使いに嘘偽を伝えたのはザイドである」と答えた。

ザイドはこれに関連し、「私は、私が真実を述べたことを証言する御言葉『**偽信者たちがあなたの許にやって来ると**』（クルアーン第63章1節）が啓示されるまで大変不安だった」と語っている。

預言者は、そのあと彼らを呼び、彼らのために許しをアッラーに祈られたが、彼らの頭は**「壁に寄りかかっているただの材木のようになって」**（第63章4節）なにも顧みようとしなかった。

確かに彼らは、外面的には立派にみえる者たちであったのだが（注2）。

（注1）偽信者らは、自分たちを高貴な者と称し、ムスリムたちを卑しい者と呼んでいた

（注2）クルアーン第63章4節には、**「あなたが彼ら（偽信者）を見る時、彼らの立派な風体に感心するであろう」**と記されている

ジャービルは伝えている。

預言者は、アブドッラー・ビン・ウバイユの墓に行き、穴から彼の遺体をひき出して、膝の上にのせてから唾を吐きつけ、その後、ご自分のシャツで彼の遺体を包んだ。

この意味については、アッラーのみが最もよくご存知である。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者は、アブドッラー・ビン・ウバイユが埋葬されている墓へ行かれた。

以下は、前記ハディースと同内容である。

イブン・ウマルは伝えている

アブドッラー・ビン・ウバイユ・ビン・サルールが死んだ時、息子のアブドッラー・ビン・アブドッラー・ビン・ウバイユが、アッラーのみ使いの処に聞いて、彼の父の経帳子に使うため、み使いのシャツをもらえないかと頼んだ。

み使いは、シャツをお与えになった。

彼はまた、父のため葬儀の礼拝をしてくれるよう頼んだ。

み使いがその礼拝に行くため立ち上ろうとした時、ウマルは立ち上ってみ使いの外衣をつかみ、「み使い様、あなたは、この男のため礼拝をなさるのですか。

アッラーは、このような男のため祈ることを禁じております」と言った。

それに対し、み使いは、次のように言われた。

「アッラーは、こう啓示され、私に選択の機会を与えられた。

即ち「あなたが、彼らのためにお赦しを乞おうとも、また、乞わなくても、彼らの罪は、免れられない。

あなたが、たとえ、70 回彼らのためにお赦しを乞うてもアッラーは彼らを赦されないであろう」（クルアーン第 9 章 80 節）

私は、この 70 回よりも多く祈ります」

アブドッラー・ビン・ウバイユは、偽信者であったが、み使いは、彼のため礼拝を行なわれた。

アッラーは、これに関連し、次の啓示を下された。

「彼らの中の誰かが死んでも、あなたは、決して彼のために、葬儀の礼拝を捧げてはならない。

また、その墓の側に立ってはならない」（第 9 章 84 節）

前記と同内容のハディースは、ウバイドッラーによっても別の伝承者経路で伝えられるが、それには「み使いは、この後、彼ら（偽信者ら）のための葬儀の礼拝をおやめになった」と言う言葉が付加されている。

イブン・マスウードは伝えている

家の近くに人が三人集まっていたが、彼らの二人はクライシュ族、一人はサカフ族、もしくは、二人がサカフ族、一人がクライシュ族の者であった。

彼らは、肉付きのよい体格をしていたが、かなり理解力には欠ける面があるようで、その中の一人が「アッラーは、我々の話し声をお聞きになると思うか」と言うと、

他の者は、「アッラーは、我らが大声で話せばお聞きになる。

低い声ならばお聞きにならない」と話し、

更に、別の一人は、「もし、大声で話せば、お聞きになるとしたら、低い声で話してもお聞きになるだろう」などと話していた。

アッラーはこれに関連し、次の啓示を下された。

「あなたがたは、自分の耳や目や皮膚で、あなたがたに背くような証言など出来ないと思い、自分を庇うことをしなかった」（クルアーン第 41 章 22 節）

前記と同内容のハディースは、**アブドッラー**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

ザイド・ビン・サービトは伝えている

預言者は、ウフドの戦いに出発された。

一緒に行った人々の中で何人かの者が途中から帰って来た。

預言者の教友らの間では、彼らについて意見が二つに分れ、一つのグループは「彼らを殺す」と言い、他は「いや、殺すべきではない」と言った。

この件に関し、次の啓示が下された。

「あなたがたは、偽信者たちのことで、どうして二派に分れたのか」（クルアーン第 4 章 88 節）（注）。

（注）この啓示の後半は、次の通りである。

「アッラーは、彼らの行ないのために、彼らを不信心に転落させられたではないか。

あなたがたは、アッラーが迷わせられた者を導こうと望むのか。

本当に、アッラーが迷わせられた者には、決して道を思い出せないであろう」

前記と同内容のバディースは、**シュウバ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いの在世時、偽信者たちは、預言者が遠征に出て行く時にもそれに参加せず、あとに残って、み使いの日頃の教えを無視して、（勝手な状態で）家に座っていられることを喜んだ。

そして、預言者が、帰還すると、それらの行為を弁明し、忠誠を誓った。

そして、人々に対しては、彼らがしていない行為についても称賛するよう望んだ。
これに関連し、次の啓示が下されている。
「自分が行ったことを誇る者、また、行なわないのに、称賛されるのを好む者のことなど考えてはならない。
これらの者が、懲罰を免れると考えてはならない」（クルアーン第 3 章 188 節）

フマイド・ビン・アブドル・ラフマーン・ビン・アウフは伝えている
マルワーンは、侍従ラーフ言うをイブン・アッバースの処に行かせ「もしも、自分の行なった行為を喜んだり、行なわなかった行為に対し称賛されたりすることを罰せられるとしたならば、罰を受けない者は、誰もいなくなるではないか」と質問させた。
イブン・アッバースは、これに対し、「それでは、次の御言葉をどう考えますか。
これは啓典の民に関して、啓示されたものです」と言って、
「アッラーが啓典の民と約束された時（のことを思い起せ）あなたがたは、それを人々に説明して、隠してはならない」（クルアーン第 3 章 187 節）を読み、
次いで、**「自分が行なったことを誇る者、また、行なわないのに称賛されるのを好む者のことなど考えてはならない」**（第 3 章 188 節）を唱えた。
彼は更に、次のように語った。
「預言者は、或る事について彼らに質問したが、彼らはそれを隠し、別のことを預言者に告げた。
そして、彼らは去って行ったが、預言者の彼らに対する質問にそれでごまかし得たと思い、隠しおおせたことを、彼らは喜んだのである」

アスワド・ビン・サーミルは伝えている
彼は、カイスがアブー・ナダラを通じてカーダに伝えた次のハディースをシュウバ・ビン・ハッジャージュより聞いて伝えたのである。
私（カイス）はアンマールに言った。
「アリー側に加担して行動した理由についてお聞かせ下さい。
ご自身の見解に従ったのですか。
それとも、アッラーのみ使いが、なにか話されたのですか」。
アンマールはこれに対し、「み使いが私たちになにかをして下さったわけではありません。
他のほとんどの人々に対しても同様です。
ただ、フザイファは、預言者から聞いて私にこう話してくれました。
預言者は『私の教友らの中に 12 人の偽信者がいる。
その中の八人は、天国に入ることはできないであろう。
ラクダが縫い針の穴を通るようなものでほとんど不可能である。

この八名に対する責苦には、ランプの火が用いられる』と言われた」
残りの四名については、シュウバがどう話したのか私（アスワド）は憶えていない。

カイス・ビン・ウバードは伝えている
私たちは、アンマールに「（スィッフィーンの戦いの折、アリー側に加担して）戦ったのは、あなた自身で決めたためですか。
それとも、なにか、きっかけがあったのですか。
なぜなら、誰でも誤った判断をしがちなものだからです。
それとも、アッラーのみ使いが、なにか約束されたのですか」と聞いた。
これに対し、彼は「み使いが、私たちになにかを知らせたわけではありません。
他の人々に対しても同様です」と答えた。
彼は、更に、「アッラーのみ使いは『私のウンマには、12 名の不信者がおり、彼らは天国に入ることを許されないし、彼らには、天国の香りをかぐこともできないであろう。
それは、ラクダが縫い針の穴を通ることが不可能であるのと同じである。
これら八名の罰には、ドゥバイラが用いられるが、それは、ランプの火のことで、この火は、その者らの両肩に燃え移り、胸まで広がってゆくであろう』と言われた」と語った。

アブー・トゥウファイルは伝えている
人々が集まっている処で、アカバから聞いた或る男とフザイファとの間に、次のような話が交わされた。
フザイファに対し、この男は「アッラーにかけて！
預言者がタブーク遠征を終えて帰還していた時、襲撃しようと待ち伏せしていたアカバの者たちは、何人であったのか教えて下さい」と言った。
この時、人々が、フザイファに「その質問に答えてやりなさい」勧めたので、フザイファは「14 人であると知らされたが、もし、あなたもその中の一人であれば 15 人になる。
私はアッラーに誓って証言するが、彼らのうちの 12 名は現世でも来世でも、アッラーとそのみ使いの敵である。
残りの三名は『私たちは、み使いが大声で叫んだ声（注）を聞かなかったし、また、他の人々がなにを企図としているか知らなかったのです』と弁明した」と語り、つづけて次のように言った。
「み使いは、酷暑の中を進んでいた時、『（次の水場には）水の量が少ない。
それ故、私より先に進んではならない』と言われたが、それでも先に進んで言った者らがいた。み使いは、彼らをその時批難なさった」

（注）タブーク遠征の帰途、アカバの偽信者らが待ち伏せしているのを知った預言者は、襲撃を中止し預言者の許に来るようにと大声で呼びかけたが彼らは逃散したと言われる

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは「この丘、ムラールの丘に登った者の罪は、丁度、イスラー言いルの者たちの諸々の罪が消されたように抹消される」と言われた。

そのため、ハズラジュ族の者たちが馬を駆ってこの山に最初に登り、その後を多くの人々がつづいて登って行った。

この折、み使いは、また、「赤いラクダの持主（注）以外、あなた方全ては許されるであろう」と言われた。

私たちは、その赤いラクダの持主の処に行き「あなたも一緒に来なさい。

み使いは、あなたのためにも許しを祈って下さるだろう」と話したが、彼は「アッラーに誓って！

私にとっては、失くした物を捜すことの方が、あなたがたの友人（預言者）に私のため祈ってもらうより大切です」と言って、失った物を捜すためにそこに残っていた。

（注）彼はジャド・ビン・カイスと言う名の偽信者であったと言われる

前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには、「失った物を捜していたのは、砂漠に住むアラブ人であった」と記されている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

我々の処に、ナッジャール族出身の男がいた。

彼は、クルアーンの雌牛章とイムラーン家章を（日頃）朗誦し、アッラーのみ使いの書記役も務めていた。

後にその彼は、反逆して逃亡し、他の啓典の民に加わった。

彼らは、彼を大事にし、「彼は、ムハンマドの書記役を務めた人物である」といって喜んだ。

時がたち、アッラーは、彼を死なしめた。

人々は、墓を掘り、そこに彼を埋葬したが、驚いたことに、大地は彼を地上に投げだしてしまった。

彼らはまた墓穴を掘りそこに埋葬したが、大地は、また、地上に彼を投げだした。

彼らは、更にもう一度、墓穴を掘り、そこに埋葬したが、大地は、またもや、彼を地上に投げ出してしまった。

それで、彼らは、遂に、彼の遺体を埋葬することなくそのままにしておいた。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いが、旅の帰途、マディーナに近づいた時、ラクダに乗った人々をほとんど見失わせるほどの強風が吹いた。

み使いはこの折、「この風は、恐らく、偽信者が死んだために吹いたものであろう」と言わ

れた。

帰還してからわかったのであるが、果して、悪名高い偽信者の一人が亡くなったとのことであった。

イヤースは彼の父の言葉を伝えている

私たちは、アッラーのみ使いの供をして、熱病に苦しむ或る人物を見舞った。

私は、私の手を彼に当てた時、「アッラーに誓って！

私は今日まで、この人以上に高熱になった人を知らない」と言った。

すると、アッラーの預言者は、「私は、復活の日には、これよりもっと厳しく高い熱を科せられる者がいることを話さなかったのか。

彼らは、ムスリムたちに背をむけ、ラクダに乗って去って行く二人の偽信者である」と言われた。

イブン・ウマルは伝えている

預言者は言われた。

偽信者は、二つの群の間をどちらに行くべきかわからずうろついている羊にも似ている。

羊は、時にはこの群に、時には、他の群の方に放浪するばかりである。

イブン・ウマルによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられる。

復活の日と天国と地獄についての書

タイトルなし

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「一人の太った大柄な男が、復活の日、呼び出されるが、彼はアッラーの目からみて善事に関してはぶよの羽根の重さはどすら行なったことのない男である。

このような者について、アッラーは、**「われは、審判の日に、彼らにどんな目方も与えないであろう」**（クルアーン第 18 章 105 節）と啓示なさったのである」

アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている

或る学者が、預言者の処に聞いて、次のように言った。

「ムハンマドよ（もしくは、アブー・カーシムよ）、まことにアッラーは、審判の日に、諸天を一本の指に、地上を一本の指に、山々や木々を一本の指に、海と湿った大地（沼地）を一本の指に、即ち、創造物全てを一本の指に乗せてお運びになる。

そして、彼らをゆさぶってから、我は主なり！　我は主なり！　と言われるのである」

み使いは、この学者の言葉に頷き、お笑いになった後、次の聖句をお唱えになった。

「われらは、アッラーを正しい仕方では尊崇しない。

審判の日においては、彼は、大地の全てを一握りにし、その右手に諸天を巻かれよう。

彼に讃えあれ。

彼は、彼らが配するもののはるか上に高くおられる」（クルアーン第 39 章 67 節）

前記と同内容のハディースは、マンスールによって別の伝承者経路で伝えられているが、それには次の言葉もみられる。

「或るユダヤ人学者が、アッラーのみ使いの処に来た」。

更に、「アッラーのみ使いは、臼歯がみえるほど口を開けてお笑いになり、彼の言葉に頷かれた。その後、み使いは**「彼らは、アッラーを正しい仕方では尊崇しない」**（第 39 章 67 節）をお唱えになった」

アブドッラーは語っている

啓典の民に属する或る男が、アッラーのみ使いの処に来て、次のように言った。

「アブー・カーシムよ、まことにアッラーは、諸天を一本の指、地上を一本の指、木々や湿った大地を一本の指、そして全ての創造物を一本の指の上にお取り上げになる。

そして後、我は主なり！　我は主なり！　と言われるのである」
私は、預言者が、この時（大変喜び）臼歯が見えるほどに口を開けて大笑いするのを見た。
み使いは、その後**「彼らは、アッラーを正しい仕方では尊崇しない」**（第39章67節）と聖典の御言葉をお唱えになった。

前記と同内容のハディースは、**アアマシュ**によっても、同じ伝承者経路で伝えられている。

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「アッラーは審判の日、大地をつかみ、右手で天を巻きあげてから、『我は主なり、大地の支配者たちはどこか』とおおせになる」

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「アッラーは審判の日、諸天を巻きあげ、そのあと、右手の上に置いてから『我は主なり、尊大な者はどこか、威張る者はどこか』と言われる。
そしてまた、諸大地を巻きあげ、左手の上に置いてから、『我は主なり、尊大な者はどこか、威張る者はどこか』と言われる」

アブドッラー・ビン・ミクサムは伝えている
アブドッラー・ビン・ウマルは、アッラーのみ使いが説教された時の様子を次のように語った。
アッラーのみ使いは、こう言われた。
「アッラーは、御手に諸天と大地をお取りになり、『我は、アッラーである』と言われる。
（この時み使いは、指を堅く握り締め、その後、お聞きになった）
その後、アッラーはまた、『我は主である』と言われる」
私（アブドッラー・ビン・ウマル）は説教壇が下の方からゆれ動くのに気づいた。
その時、私は「説教壇がみ使いをのせたまま倒れませんように」と祈った。

アブドッラー・ビン・ミクサムは伝えている
アブドッラー・ビン・ウマルは次のように語った。
「アッラーのみ使いは、説教壇に立ち、全能者アッラーは、諸天及び大地を手でおつかみになったと言われた」
以下は、前記ハディースと同内容である。

創造の始まりとアダムについて

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、私の手をとって、次のように言われた。

「アッラーは、土曜日に土を創り、日曜日にそれを使って山々を創り、月曜日には木々を創り、火曜日にはこまごましたものを創り、水曜日には火を創った。

そして木曜日には動物たちをそれらの中に分布した。

金曜日のアスル（夕刻）の後には、アダムを創った。

それは、この日の金曜日の最後（即ち、夕刻から夜の間）に創られた最後の創造物であった」

前記と同内容のハディースは、ハッジャージュによっても同じ伝承者経路で伝えられている。

復活の日の再生、召集、地上の様子について

サフル・ビン・サアドは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「人々は、復活の日、白パンの一塊のような、やや赤味のある白い大地に、なんの印も付けられてない状態で召集される」

アーイシャは伝えている

私は、アッラーのみ使いに、アッラーの御言葉**「大地が大地でないものに変えられ、諸天も変えられる日」**（クルアーン第 14 章 48 節）について質問し、「その時、人々は、どこにいるのですか」と言った。み使いはこれに対し、「人々は、シラート（注）にいる」と言われた。

（注）シラートとは、天国へ通ずる道の前方にある橋のこと。

この橋から落とされた者は地獄へ入ると言われる

天国の住民の食物について

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「復活の日、大地は一個のパンに変わる。

全能者アッラーは、御手で、丁度、あなたがたが旅行前にパンを作るように、大地をパンにお変えになるが、それは、天国の住民に供される食物となるのである」

ユダヤ人の或る男が聞いて、「アブー・カーシムよ、あなたに慈悲深い恩寵がありますように！

復活の日、天国の住民に供される食物について教えましょうか」と言った。

み使いが「是非に」と言うと、彼は（み使いが話されたように）「大地は、ただ一個のパンに変わる」と語った。

これを聞いたみ使いは、私たちの方をみて、臼歯がみえるほど口を開けてお笑いになった。

その男は、更に「味付けおかずに、なにを供されるか教えましょうか」と言った。

み使いが「是非に」と答えると、「おかずは、バーラームと大魚（ヌーン）です」と言った。

教友らが「それはなんですか」と聞くと、彼は「雄牛と鯨で、これらのレバー肉の量は、七万人の人数でも、十分食べられるほどです」と言った。

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。

「もしも、十人のユダヤ人学者が私に従うとすれば、この地上にイスラームに帰依しないユダヤ人は一人としていなくなるであろう」

霊魂についてのユダヤ人の質問に関して

アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている

私が預言者と一緒に耕作地を歩いた時、預言者は、なつめやしの木技を杖にしておられた。

その折、ユダヤ人の一群に出会った。

彼らは互いに、「霊魂について質問してみろ」

「どんな疑問を持っているのか」

「好ましくない返事が返ってくるかもしれない」などと、ひそひそと話し合っていた。

ともあれ、質問することになり、彼らの一人が霊魂について預言者の意見を求めたが、預言者は沈黙され、なんら返事をなさらなかった。

私は、預言者に啓示が下されだしたことを知り、その場所に立っていた。

この時、次の啓示が示された。

「彼らは、聖霊についてあなたに問うであろう。

いってやるが言い。

聖霊は、主の命令によって来る。

人々よ、あなたがたの授かった知識は、微少にすぎない」(クルアーン第 17 章 85 節)

アブドッラーは伝えている

私は預言者と一緒にマデ言いナの耕作地帯を歩いた。

以下は、前記ハディース内容とほとんど変らない。

アブドッラーは伝えている

預言者は、なつめやしの木の幹に寄りかかっておられた。

以下は、前記とほぼ同内容である。

ハッバーブは伝えている

アース・ビン・ワーイルは、私に借金していた。

私は、彼の処に行って返済を求めた。

すると、彼は「ムハンマドを裏切らないかぎり、返済しない」と言った。

私はこの時「あなたが死に、そして後、審判の日、再生される時が来ても、私は、ムハンマド様を裏切ることはしない」と言った。

これに対し、彼は「死後、再生されると言うのか、もし、本当にそうなれば、財産や子供を再生後に取り戻した時、お前の借金を返済してやろう」と言った。

口述者の一人ワキーウは「このハディースをアアマシュから聞いた」と述べた後、これに関連し、次の聖句**「あなたは、わが印を拒否した者をみたか。だが、彼は『わたしは、富と**

子孫とにきっと恵まれるであろう』と言う」（第 19 章 77 節）から**「彼は、ただ一人でわが許に来るであろう」**（第 19 章 80 節）までの啓示が下された」と語った。
ハッバーブによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには「イスラーム以前の時代、私は、鍛冶工として、アース・ビン・ワーイルの処で働いていた。
それで、賃金を払うよう彼に要求したのである」と記されている。

アッラーの言葉「あなたがいるかぎり、彼らを罰しない」について

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アブー・ジャフルは次のように言った。

アッラーよ、もしも、彼（ムハンマド）の言葉が真実であるならば、天から石の雨を我らの頭上に降らして下さい。

さもなければ、厳しい罰を我らに科して下さい。

これに関連し、次の啓示が下された。

「だが、アッラーは、あなた（ムハンマド）が、彼らの中にいる間、懲罰を彼らに下されなかった。

また、彼らがお赦しを乞うている間は、処罰されなかった。

彼らは聖なるマスジドの管理者でもないのに、アッラーのしもべをそこに入れまいと妨げたことに対して、アッラーが彼らを処罰されずにおかない。

真の管理者は主に対し義務を果たす者だけである。

だが、彼らの多くはそれが分らない」（クルアーン第 8 章 33-34 節）

人間が法外であることについて

アブー・フライラは伝えている

アブー・ジャフルは、「ムハンマドも彼らと一緒に礼拝の時、顔を地につけて、平伏するのか」とたずねた。

人々が「そうです」と答えると、彼は「ラート神とウッザ神に誓って！

もし、彼がそうしているところをみかけたならば彼の首を踏みつけてやる。

さもなければ、彼の顔を泥土で汚してやる」と言った。

彼が、たまたまアッラーのみ使いの処に来た時、み使いは礼拝をしていた。

彼は、み使いの首を踏みつけようとして近づいたが、踵を返し、何かを手で払いのけるような仕草をした。

「どうしたのか」と言われた時、彼は、「私とムハンマドの間に、火の溝やなにか恐しい物、それに翼がみえた」と語った。

アッラーのみ使いは「もし彼が私に近づいたならば、天使たちは彼の身体の節々を捕えたであろう」と言われた。

この後、アッラーは、次の御言葉を啓示された。

「いや、人間は本当に法外で、自分でなにも足りないところはないと考えている。

本当に、あなたの主に全てのものは帰されるのである。

あなたは阻止する者を見たか。

一人の下僕（ムハンマド）が礼拝を捧げる時に。

あなたは、彼（阻止する者）が正しい道に導かれていると思うのか。敬神を勧めているか。

真理を嘘であるとして背をむけたと思うのか。

彼は、アッラーが見ておられることを知らないのか。

断じてそうではない。

もし、彼がやめないならば、我は前髪で彼を捕えるであろう。

嘘付きで罪深い前髪を。

そして、彼の救助のために一味を召集させなさい。

我は看守の天使を召集するであろう。

断じてそうあるべきではない。

あなたは彼に従ってはならない」（クルアーン第 96 章 6-19 節）

ウバイドッラーは「一途にサジダして主に近づきなさい」と言う御言葉がこの後に付加されたと述べている。

マスルークは伝えている

私たちは、アブドッラーの家で座っていた。

彼は、ベッドに横たわっていたがこの折、或る男が来て、「アブー・アブドル・ラフマーンよ。

（クーファの）キングの門の処で講釈師が、クルアーンの煙霧章を引用して『ここに記される言葉通りのことが起る。
煙霧のため、不信仰者らの呼吸は困難になり、信仰者らは、風邪をひいた状態になる』と話しています」と言った。
アブドッラーは、これを聞くと起聞いて座り直し、怒り声で次のように言った。
「人々よ、アッラーを恐れなさい！
あなたたちの中で本当に知っている者だけが話すようにしなさい。
知りもしないことを話してはなりません。
その場合には、ただ「アッラーこそ最もよく知る御方、誰よりもよく知識をお持ちである」と言いなさい。
知らないことを口にするのは良くないことです。
アッラーこそ最もよく知識をお持ちの方です。
アッラーは、預言者にこう言われました。
「言ってやるがよい。
私は、このクルアーンに対し、なんの報酬もあなたがたに求めない。
また私は偽善者ではない」（クルアーン第 38 章 86 節）
（ともあれ）アッラーのみ使いは、人々が信仰に背くのをみて、「アッラーよ、預言者ユースフの場合と同じように、彼らを七度の飢饉で苦しめて下さい」と祈ったので、彼らは飢饉に苦しみ、その結果、空腹のため動物の皮や死肉まで食べなければならなくなりました。
この頃、誰もが空をみて、煙霧がただよっているのに気づいたのです。
このため、アブー・スフヤーンが来て「ムハンマドよ、あなたは、アッラーに従うこととあなたの仲間が怠った血族の結束を強くするよう命ずるために遣わされた人です。
彼らのため、アッラーに祈って下さい」と頼んだのです。
この折、アッラーは、次の聖句を啓示されました。
「待っていなさい。
天が明瞭な煙霧を起す日まで。
それは人々を包む。
（彼らは言う）
『これは痛ましい懲罰です』
『主よ、わたしたちからこの懲罰を免じて下さい。
本当に信仰致します。』
どうして再び、彼らに訓示があろう。
彼らには公明なみ使いが確かに来たのに、彼らはみ使いから背き去って『他人に入れ智恵された者、憑かれた者です』と言ったではないか。
我が暫くの間、懲罰を解除すると、あなたがたは必ず不信心に戻る」（クルアーン第 44 章 10-15 節）

これに関連し、マスルークは、この聖句に示される懲罰は、来世での懲罰の代償になるものでもあろうかと述べ、更に、**「その日、我は、最も厳しい苦難を課すであろう。まことに、我は、峻厳な懲罰者である」**（第 44 章 16 節）について、
苦難とはバドルの戦いの日を意味しており、煙霧、苦難、避けられない懲罰、ビサンチンローマのアラビア国境への侵入に伴う災害などは、今や過去のことになったと述べている。

マスルークは伝えている

或る人がアブドッラーの処に来て、「クルアーンの言葉を自己流に解釈し、説明している男をモスクに残して来ました。
その男は、**「待っていなさい。天が明瞭な煙霧を起す日まで」**（クルアーン第 44 章 10 節）と言う聖句について、煙霧は審判の日に人々の処に湧き出し、呼吸を困難にし、人々を風邪をひいた状態にして苦しめると説明していました」と話した。
これを聞いたアブドッラーは次のように語った。
「知識を持つ者は、それを語るべきであるが、知識を持たない者は、ただ『アッラーのみが最も良くご存知の方です』と言うべきです。
知らないことに関し、『アッラーのみが最も良くご存知の方です』と唱えることは、その人の聡明さを示すものです。
ともあれ、これに関する事実は次の通りです。
クラインュ族の者らが預言者に従わなかった時、預言者はアッラーに飢饉を、丁度、預言者ユースフの場合と同じように、彼らに下すよう祈ったので、その結果、彼らはひどい飢饉にみまわれたでのす。
この頃、大地と空との間にはなにか煙霧のようなものがただよっていたが、彼らは、地上で飢えに苦しみ、骨まで食べる有様になっていたのです。
（その頃）ある人物が預言者の処に聞いて、『アッラーのみ使いよ、ムダル族のため、アッラーに祈って下さい。
彼らは、破滅してしまいました』と言いました。
み使いは、これに対し『ムダル族のためにですか。
宗教上の敵に対し祈願するように頼むとは、あなたは大胆な方です』と言われたが、ともあれ彼の願いを入れ、アッラーに祈願なさいました。
この件に関しては、次の啓示が下されました。
「我が暫くの間、懲罰を解除すると、あなたがたは必ず不信心に戻る」（第 44 章 15 節）
そのうち雨が降り出し、多少なり飢饉から解放され楽になりだすと、彼らは以前と同じ状態に戻ったのです。
それに対し、アッラーは、次のように啓示されました。
「待っていなさい。天が明瞭な煙霧を起す日まで。それは人々を包む。（彼らは言う）『これ

は痛ましい懲罰です』（第 44 章 10-11 節）。**『その日、我は、最も手厳しい苦難を課すであろう。我は、峻厳な懲罰者である』**」（第 44 章 16 節）。

苦難とは、バドルの戦役を意味します」

アブドッラーは伝えている

次の五つの兆しは、過去に起り、預言者の言葉の真実なことを証明した。

それらは、煙霧に包まれたこと、バドルの戦役でマッカの人々が懲罰されたこと、ビザンチンローマの侵攻があったこと、（バドルの戦役で）マッカの人々が苦難にあったこと、月が裂けたことなどである。

前記と同内容のハディースは、**アアマシュ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

ウバイユ・ビン・カアブは語っている

アッラーのみ言葉「**われは、大きな懲罰の前に、必らず、身近な懲罰を彼らに味あわせる**」（クルアーン第 32 章 21 節）の懲罰とは、この世における様々な苦難、ビザンチンローマ軍の侵入、マッカ人の蒙った災難、それに煙霧にみまわれることを意味する。

月が裂けることについて

アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いの在世時代、月が二つに割れた。

み使いは、その時、「シャハーダ（アッラー以外に神はなく、ムハンマドはアッラーのみ使いであることを証言します）を唱えなさい」と言われた。

アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている

私たちが、ミナーで、アッラーのみ使いと一緒だった時、月が二つの部分に裂けた。

その半分は山の後側にあり、他の半分は山のこちら側にあった。

み使いはこの時、「シャハーグを唱えなさい」と言われた。

アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている

アッラーのみ使いが在世の頃、月が二つの部分に裂けた。

その半分は山にかくれ、他の半分は山の上にあった。

み使いは「アッラーに対し、シャハーダを唱えなさい」と言われた。

このハディースは、イブン・ウマルによっても別の伝承者経路で伝えられている。

前記と同内容のハディースは、更に、**シュウバ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アナスは伝えている

マッカの人々は、アッラーのみ使いに、なにか（奇蹟の）印を見せるように要求した。

み使いは、彼らに月が裂けるのを二度お見せになった。

アナスによるこのハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アナスは伝えている

月が二つの部分に裂けた。

アブー・ダーウードによる同内容のハディースには、「アッラーのみ使い在世の頃、月が裂けた」と記されている。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使い在世時代、月が二つに裂けた。

アッラーの忍耐に関して

アブー・ムーサーは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラー以上に、最も嫌悪すべき事をも忍耐強くお聞きになる方はおられない。

同格者を置かれたり、子供の父であると呼ばれても、アッラーは人々を守り、生活の糧をお与えになった。」

アブー・ムーサーによるこのハディースは、多少表現上の異同がみられるが別にも伝えられている。

アブドッラー・ビン・カイスは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラーほど最も嫌悪すべき事柄についても忍耐強くお聞きになる方はおられない。

彼らは、アッラーに拮抗者を置き、また、アッラーは子供を持つと主張しているが、アッラーは、それにも関わらず、彼らに生活の糧を与え、彼らを守り、様々な物をお与えになる」

偽信者が身の安全を願うことに関して

アナス・ビン・マーリクは伝えている

預言者は言われた。

「アッラーは、(復活の日に)最も罰の軽い地獄の住民の一人となる予定の男に『お前は、現世で持つ富と金とを賠償としても罰を逃れたいと思うか』と言われる。

その男が『はい』と答えると、アッラーは、『お前はアダムの子孫故、それよりも、もっと容易なことを命じよう。

お前は、なにものをも私に比肩してはならない』と言われる。

アッラーは更に、『私に比肩するものを拒否するかぎり、私は、お前を業火の中には入れない』と言われる」

アナス・ビン・マーリグによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

預言者は言われた。

「復活の日、不信者は、『もしも、お前が、地上を満たすほどの金を持っているとしたら、それを、賠償金として安全を得たいと願うか』と言われる。

彼が『はい』と答えると、『それより、もっと容易なことを、お前は命じられたが、少しも気にかけようとしなかったではないか』と言われる」

アナスの伝える前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには、「彼はこう言われる。

『お前は嘘をついている。お前が要求されたのは、それ(アッラーの唯一性の信仰)よりも、もっとたやすいことであったのに』」と記されている。

不信仰者が顔で歩くことについて

アナス・ビン・マーリクは伝えている

或る男が、「アッラーのみ使い様、復活の日、不信仰者らは、どのようにして顔を地につけて歩かされ、呼びだされるのですか」と言った。

み使いはこれに対し、「人を足で歩かせ給うほどの御方に、どうして復活の日、顔を地につけて歩かせる力がないのですか」と言われた。

カターダは、この時「主の偉大さに誓って！

当然なことです！」と述べた。

信仰者、不信仰者の来世での体験について

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「現世では、裕福な生活を送った地獄の住民の一人が、連れ出され、復活の日、一度だけ業火につけられる。

そしてその後、『アダムの子孫よ、心地よかったのか。なにか役に立つものが得られたか』と聞かれる。

その男は、『アッラーに誓って！ 言いえ、主よ』と答える。

次いで、現世で最も貧しい生活を送った男が、天国の住民の中から連れ出される。

そして、天国の蜜を一度だけ味わわされ、その後、『アダムの子孫よ、なにか、苦しい目に会ったか。

なにか困難なことがお前の身に起ったか』と聞かれる。

それに対し、彼は『アッラーに誓って！

いいえ、主よ！

なにも苦しい目には会いませんでしたし、なんらの困難も私自身には起りませんでした』と答える」

信者及び不信仰者への報奨について

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「まことにアッラーは、信者の善行を不公正には扱われない。

それに対しては現世では恩寵を与え、来世では報奨が与えられる。

不信仰者に対しては、現世でアッラーのため行なった善行の程度に応じて報奨されるが、来世においては、それは報奨に価する善行には数えられない」

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは、こう言われた。「不信者が、善行を為せば、現世でそのための報奨を与えられる。信者についていえば、アッラーは、彼の善行に対する報奨を来世のためにとっておかれ、現世では、アッラーへの彼の従順さに対しての恩寵を次々とお与えになる」

アナスによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

信者と不信者に類似するものに関して

アブー・フライラは語っている

アッラーのみ使いは言われた。

「信仰者は、絶えず風に吹かれてゆれ動く緑の穀物の茎にも類似し、いつも試練に立たされる。

偽信者に類似するものは糸杉の木で、それは、根こぎにされるまで動くことがない」

前記と同内容のハディースは、**ズフリー**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

カアブは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「信仰者は、畠に育つ穀物の茎にも似ている。

それは、風に吹かれて傾くが、また元の形に戻って、しっかりと立つ。

一方、不信仰者に類似するものは、糸杉の木で、それは、根を張って立ちゆるぐこともないが、一度暴風が吹くと根こぎにされてしまう」

アブドル・ラフマーン・ビン・カウブ・ビン・マーリクは、彼の父から聞いて伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「信仰者に類似するのは、畠の穀物の茎で、風が吹くとゆらぐが、また元に立直りつつ成長する。

偽信者に類似するものは糸杉の木で、なににも影響されることはないが、一度暴風が起れば根こぎにされてしまう」

アブドル・ラフマーン・ビン・カウブ・ビン・マーリクによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

イブン・カウブによる前記と同内容のハディースは、更に、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには表現上多少の異同がみられる。

信仰者がなつめやしの木に類似することについて

アブドッラー・ビン・ディーナールは伝えている

アブドッラー・ビン・ウマルは次のように語った。

アッラーのみ使いは、「木々の中には、葉が落ちないものがあり、それは、ムスリムに似ている。

それがどの木であるか考えてみなさい。」と言われた。

人々は林の木々について考えた。

私（アブドッラー）は、なつめやしの木に相違ないと思ったが、言いだせなかった。

そのうち教友らが「み使い様、どんな木のことですか」とたずねたので、み使いは「それはなつめやしの木です」と言われた。

私が、このことを父ウマルに語ったところ、ウマルは「お前がそれをなつめやしの木であると言ってくれたならば、他のどんなことよりも、その言葉は、私にとって嬉しいものだったろうに」と言った。

ムジャーヒドはイブン・ウマルの話を次のように伝えている

アッラーのみ使いは、或る日、教友たちに「信仰者に似た木はなにか言ってみなさい」と言われた。

人々は、林にあるさまざまな木の名前を言った。

イブン・ウマルはこの時のことを「私の頭、または、心にそれがなつめやしの木であると思い浮かんだ。

そのことを言おうと思ったが、私より年上の人々が多く、遠慮があって言うことができなかった」と語った。

人々が静かになった時、み使いは「それはなつめやしの木です」と言われた。

ムジャーヒドは伝えている

私は、イブン・ウマルにお供してマディーナに行った。

この折、私はアッラーのみ使いに関するハディースを一つだけ聞いた。

彼は、次のように話してくれた。

「私たちが、預言者の処にいた時、なつめやしの実が運ばれて聞いた」

以下は、前記ハディースと同内容である。

ムジャーヒドは伝えている

イブン・ウマルは語った。

「アッラーのみ使いの処に、なつめやしの実が運ばれて聞いた」

以下は、前記ハディースと同内容である。

ナーフィウは伝えている

イブン・ウマルは次のように語った。

私たちが、アッラーのみ使いの処にいた時、み使いは、「ムスリムによく似ており、葉が枯れることのない木はどれか言いなさい」と言われた。

（イマーム・ムスリムの友人イブラーヒーム・ビン・スフヤーンは、「いつも実を付けている木」と言う言葉をこれに付している）

イブン・ウマルはつづけて次のように語った。

「私の心に、それはなつめやしの木に相違ないとの思いが浮かんだが、アブーバクルやウマルが黙っているのを見て、私が話したり、なにか発言することは適当でないと思った。後に父ウマルは『お前がそう述べていたら、私にとってなによりも嬉しいことだったろうに』と言った」

悪魔（シャイターン）のもたらす災いについて

ジャービルは伝えている

預言者は言われた。

「シャイターン（悪魔）は、アラビアの地では、信仰者たちに崇拝されていないために絶望している。

ただ、彼は人々の間に、不和の種を蒔き散らすことに希望をつないでいる」

前記と同内容のハディースは**アアマシュ**によっても同じ伝承者経路で伝えられている。

ジャービルは伝えている

預言者は言われた。

悪魔（イブリース）の玉座は海の上にある。

彼は、分隊をさまざまな処に派遣し人々に災害をもたらせる。

彼にとって最も重要な者は、害悪をまき散らす者である。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「まことにイブリースは、玉座を水の上に作っており、ここから分隊を各地へ送り出している。

彼に近い階層の者は、最も多く害悪をもたらす者である。

彼らの一人が来て『私は、しかじかのことを行ないました』と言っても『お前は、なにもやっていないではないか』と言われるが、別の者か来て『私は、これこれのことをして、夫と妻との間に不和の種をまき、彼らを別れさせました』と言うと、イブリースはその者の近くに行き、『お前は、よくやった』と誉める」

これに関連し、アアマシュは更に「イブリースはそう言って、彼の肩を抱きかかえる」と付記している。

ジャービルは伝えている

預言者は言われた。

「シャイターンは、彼の分隊を派遣して人々の間に災いを起こさせる。

彼の眼から見て、最高位の者は、災いを最も多くもたらす者である」

アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている

アッラーのみ使いは、「あなたたちの中で、ジンを随行者としてもたない者はいない」と言われた。

教友らが「み使い様、あなたもですか」と聞くと、み使いはそれに対し「そうです。
ただ、アッラーは、ジンから私を守って下さる故、私は安全なのです。
ジンは私に対しては、善行以外のことは命じません」と言われた。

前記と同内容のハディースは、**マンスール**によっても別の伝承者経路で伝えられているが、それには「全ての者がジン及び天使を随行者としてもっている」と言う言葉が記されている。

ウルワは伝えている
預言者の妻の一人アーイシャはこう語っている。
或る夜、アッラーのみ使いは、私の家を出て行かれた。その時、私は嫉妬心を抱いた。
預言者は戻って来て、私の顔をごらんになり、「アーイシャよ、どうしたのか。
嫉妬しているのか」と言われた。
私は「あなたのような夫を持つ私が嫉妬を感じないでいられますか」と答えた。
この時、み使いは、「お前の処にシャイターンが来ていたのだ」と言われた。
私が「み使い様、シャイターンが私に付いていたのですか」と言うと、み使いは「その通りだ」と言われたので、私は、更に「シャイターンは、誰にでも付くのですか」とたずねた。
み使いが「その通りだ」と言われたので、私はまた「み使い様、あなたにもですか」と聞いた。
それに対し、み使いは「その通りだ。
ただ、主が私をお守り下さるので、私は安全である」と言われた。

慈悲によってのみ救われることについて

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「誰も行為だけによっては救われない」と言われた。
その時、或る男が「み使い様、あなたもですか」と聞くと、み使いは「その通りです。
ただ、アッラーは私を慈悲で包んで下さっています。
あなたたちは、なにごとにも中庸を守って行ないなさい（注）」と言われた。

（注）礼拝にも日常の仕事にも極端に偏してはならないの意

前記と同内容のハディースは**ブカイル・ビン・アシャッジュ**によっても伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

預言者は「人は誰も行為だけによっては、天国に入れない」と言われた。
「み使い様、あなたもですか」と聞かれた時、み使いは、「私も同様です。
ただ、主は慈悲で私を覆って下さいます」と言われた。

アブー・フライラは伝えている

預言者は「行為によってのみ救われる人は誰もいない」と言われた。
教友らが「み使い様、あなたもですか」と言うと、み使いは「私ですらも救われません。
しかし、アッラーは慈悲の衣で私を包み、私を許して下さいます」と言われた。
イブン・アウンは手で頭を指しながら「私ですらも救われません。
しかし、アッラーは慈悲の衣で私を包み、私を許して下さいます」と預言者の言葉を繰り返した。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いが、「行為だけによって、救われる者はいない」と言われた時、人々は、「み使い様、あなたもですか」とたずねた。
み使いは「そうです。
ただ、アッラーは慈悲で私をしっかりと捕えて下さいます」と言われた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「よき行為だけでは、誰も天国に入ることはできない」と言われた。
人々が「み使い様、あなたでも同じですか」と聞くと、み使いは「そうです。
ただ、アッラーは恩寵と慈悲で私を守って下さいます」と言われた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「行為には中庸を守りなさい。

もし、それが困難な場合でもなるべくそうあるように努力しなさい。

また、誰も行為だけでは救われないことを知っておきなさい」と言われた。

人々が 「み使い様、あなたもですか」と聞くと、み使いは「その通りです。

ただ、アッラーは、私を慈悲と恩寵で包み守って下さいます」と言われた。

前記と同内容のハディースは**ジャービル**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

前記と同内容のハディースは、**アアマシュ**によって、別にも二種の伝承者経路で伝えられている。

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには「人々に、このよき知らせを伝えなさい」と記されている。

ジャービルは伝えている

預言者は次のように言われた。

「誰もよき行為だけでは天国に入ることはできない。

また、業火から救われることもない。

私ですらも、アッラーの慈悲が下されないかぎり同様である」

預言者の妻の一人**アーイシャ**は語っている

アッラーのみ使いはこう言われた。

「なにかの行為を行なうに際しては、中庸を守りなさい。

そして、もし、それが困難な時には、中庸に近づくよう、できるかぎり努力しなさい。

喜びなさい！

人は、誰も行為の良し悪しだけで天国に入れるのではありません。」

人々が「み使い様、あなたも同様ですか」と聞くと、み使いは「そうです。

ただ、アッラーは、私を慈悲の衣で包みこんで下さいます。

アッラーに最も喜ばれる行為は、たとえ、どんな些細なことであっても、中断なく行われる行為であることを憶えておきなさい」と言われた。

前記と同内容のハディースは、**ムーサー・ビン・ウクバ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

善行と敬神に努めることについて

ムギーラ・ビン・シュウバは伝えている

預言者は、いつも長く祈願をなさるため、両足がはれあがってしまった。
或る人に「どうして、それほどまで祈願をなさるのですか。
アッラーはあなたが以前に犯した罪や、今後、犯すであろう罪を全てお許しになったでは
ありませんか」と言われた時、アッラーのみ使いは、「私がそれを非常に感謝しているしも
べであることを、祈願によって示してはいけませんか」と言われた。

ムギーラ・ビン・シュウバは伝えている

預言者は、礼拝の折、長く立ちつづけるため、両足をはらしてしまった。
人々が「アッラーは、あなたの以前の罪、今後の罪全てをお許しになったのです」と言うと、
アッラーのみ使いは「私が、それを大変感謝しているしもべであることを示してはならない
のですか」と言われた。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、礼拝なさる時には、両足を痛めるほど長くお立ちになった。
アーイシャが「み使い様、あなたは、以前の罪も今後の罪も許されているのに、そのように
なさるのですか」と言うと、み使いは、「アーイシャよ、それによって私が感謝深いしもべで
あることを証してはいけないのか」と言われた。

説教を適度に行なうことについて

シャキークは伝えている

私たちは、アブドッラー・ビン・マスウードの家の戸口に座り、彼がここに来て、説教するのを待っていた。

その時、たまたま、ヤジード・ビン・ムアーウィヤ・ナハウ言いが通りかかったので、私たちは「アブドッラー・ビン・マスウードに、私たちがここにいることを知らせてほしい」と頼んだ。

彼が家の中に入ると間もなく、アブドッラー・ビン・マスウードが出て来て、次のように言った。

「あなたがたがここにいることを知らされました。

あなたたちを長く待たせたのは、説教で退屈させはしないかと心配したからです。

かつて、アッラーのみ使いは、私たちが退屈するのを案じて、数日間、説教をなさらなかったことがあります」

シャキーク・アブー・ワーイルは伝えている

アブドッラーは、毎木曜日に私たちのために説教を行なった。

或る男が、彼に、「アブー・アブドル・ラフマーンよ、私たちはあなたの話を好きで、もっと聞きたいと望んでいます。

それ故、あなたが毎日でも説教して下さるよう心から願っています」と言った。

これに対し、アブドッラーは「私は、説教であなたたちが退屈するのではないかと心配しています。

かつて、アッラーのみ使いは、私たちが退屈するのを案じて、数日間、説教なさらなかったことがあります」と言った。

天国の書

タイトルなし

アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「天国は（それに到達するまでの人々の）"苦難"によって囲まれ、地獄はそこに落とされた人々の"欲望"によって囲まれている」

前記と同内容のハディースは、**アブー・フライラ**によっても、別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・フライラは伝えている
預言者は次のように言われた。
「アッラーは『私は敬虔なしもべのために、かつて、誰も　見たこともなく、聞いたこともなく、また人の心が思いもつかなかったものを天国に用意している』と言われた。
そのことは、アッラーの聖典に次の御言葉で記されている」
「彼らは、その行なったことの報奨として、喜ばしいものが、自分のためにひそかに用意されているのを知らない」（クルアーン第 32 章 17 節）

アブー・フライラは伝えている
預言者は言われた。
「アッラーは、敬虔なしもべらのために、目で見たこともなく、耳で聞いたこともなく、また、人の心で思いついたこともないほどの報奨を、アッラーがこれまであなたたちにお知らせになったものとは別に、準備しておられると述べられた」

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「アッラーは、『私は敬虔な信者らのために、目で見たことも耳で聞いたこともなく、また、人の心では思いも及ばない報奨を用意している。
それは、アッラーがこれまであなたがたに告げたものとは、別な報奨である』と言われた」
み使いはこのあと、**「喜ばしいものが自分のためにひそかに用意されているのを知らない」**（第 32 章 17 節）と聖句をお唱えになった。

サフル・ビン・サアド・サーイディーは伝えている

私はアッラーのみ使いの処に同席していた。

この時、み使いは、天国についてお話しになり、最後に「そこには、目で見たことも耳で聞いたこともなく、また、人の心で想像することもできない報奨が用意されている」と言われ、そのあと、次の聖句をお唱えになった。

「彼らの身体が臥所を離れると、畏れと希望とを抱いて主に祈り、かれ（主）が授けたものを施しにさし出す。かれらはその行なったことの報奨として、喜ばしいものが自分のためにひそかに用意されているのを知らない」（クルアーン第 32 章 16-17 節）

天国の樹について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「天国には、その蔭をラクダの乗り手が百年間も歩きつづけられるほどの一本の樹がある」

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは 別の伝承者経路でも伝えられている。

サフル・ビン・サアドは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「天国には、乗り手がその日蔭を百年旅しても踏破できないほどの距離を持つ一本の樹がある」

アブー・サイード・フドリーは伝えている

預言者は言われた。

「天国には、たくましくて足の速い馬の乗り手が、100 年旅しても踏破できないほどの一本の樹がある」

天国の住民に対するアッラーの喜びについて

アブー・サイード・フドリーは伝えている

預言者は次のように言われた。

「アッラーは、『天国の住民たちよ』と呼びかけられる。

彼らが『主よ、私はここにいます。あなたに奉仕致します。

善なるものは全てあなたの御手の中にあります』と答えると、主は『お前たちは、喜んでおるのか』と言われる。

これに対し、彼らは『主よ、どうして喜ばないでおられましょう。

あなたは、あなたの創造物のいずれにも与えなかったものを、私たちに給わりました』と答えるが、主は『それよりも、もっとよいものを与えてはいけないか』と言われる。

彼らが『主よ、それよりもよいものとはなんですか』とたずねると、主は『私の喜びを、お前たちに分かち与え、今後は決してお前たちを苦しませないことである』と言われる。」

天国の上層に住む人について

サフル・ビン・サアドは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「天国の住民たちは、丁度、空の星を眺めるように、天国の上層の方を眺める」

私（サフル）が、ヌウマーン・ビン・アブー・アイヤーシュにこのハディースを伝えると、彼は次のように言った。

「私はアブー・サイード・フドリーが『丁度、東や西の空に輝く星を眺めるように（天国の上層を眺める）』と話すのを聞きました」

前記と同内容のハディースは **アブー・ハーズィム**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「天国の信者は、彼らの上層に住む人々を彼らよりも秀れた人たちであるため、丁度、東や西の空の方角に輝きながら移動する星を眺めるよぅに仰ぎみる」

人々が「み使い様、あそこは預言者たちだけの住む所で、彼ら以外には行けない場所なのですか」とたずねると、

み使いは「いや、私の生命を御手にされる方に誓って！

アッラーを信仰し、その御言葉を信ずる者らは誰でもあそこに行くことができます」と言われた（注）。

（注）クルアーンには、これに関連し、次の聖句がみられる。

「アッラーと使徒に従う者は、アッラーが恩恵を施された、預言者たち、誠実な者たち、殉教者たちと正義な人々の仲間となる。

彼らはなんと立派な仲間であることよ」（第 4 章 69 節）

預言者に会いたいと望む者について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「私のウンマの中で、私が最も愛する後世の人々は、家族や財産を犠牲にしても、私に会いたいと真剣に願って努力する人たちである」

天国の市場について

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「天国には、人々が、毎金曜日に集まる市場がある。

そこでは、北風が吹いて、彼らの顔や衣服の上に芳香をまき散らし、彼らの魅力と美しきを増加させる。

このような魅力や美を増した彼らが家族の許に戻ると、家族の者たちに『アッラーに誓って！

あなたたちは、外出してから、一層、魅力的で美しくなりました』と言われるが、

彼らはそれに対し『アッラーに誓って！

留守の間にお前たちも魅力的で美しくなった』と言うことだろう」

天国に最初に入る者らの顔付きについて

ムハンマドは伝えている

或る人たちが自信ありげな様子でなにかを話していた時、別の人たちは、天国では男性、女性のうちどちらがより多いかについて議論していた。

その折、アブー・フライラは、「アブー・カーシム（預言者）から聞かなかったのか」と言って預言者の言葉を次のように伝えた。

「天国に最初に入る人々の顔は、夜の満月のように輝く。

その次に天国に入る者たちの顔は、空にきらめく星のように光っている。

天国では全ての人が二人の妻を持つが、その妻たちのすねの骨は身体の肉を通してきらきら光る。

天国には、妻を持たない者は誰もいない」

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「天国に最初に入る人々の顔は、満月の夜の月のように輝くであろう。

また、彼らにつづく人々の顔は、空に強くきらめく星の光のようであろう。

彼らは放尿も排泄もすることなく、鼻風邪もひかず、唾を吐くこともない。

彼らの櫛は金製であり、彼らの汗はじゃこうの香りを発する。

彼らの火鉢の燃料はきゃらの香木である。

彼らの妻たちは、ぱっちりした目を持つ処女である。

彼らの姿は、或る一人の人物、即ち、彼らの父、アダムとそっくりで、天国では六十腕尺の背高である（注）」

（注）アダムやその子孫は、天国ではかなりの背高になることを示している

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「私のウンマで最初に天国に入る者は、満月の夜の月に似ている。

彼らにつづく者らは、空で長も強い光を放つ星にも似ている。

彼らのあとには、別の階層の者らがつづく。

彼らは、排泄も放尿もせず、鼻風邪に苦しむこともなく、唾を吐くこともない。

彼らの櫛は金製であり、火鉢の薪はきゃらの香木である。

そして、彼らの汗はじゃこうの香りがする。

彼らの姿は、ある一人の人物、即ち、彼らの父アダムの背高にそっくりで、60 腕尺ほどである」

天国とその住民について

ハンマーム・ビン・ムナッビフは語っている。

アブー・フライラは、アッラーのみ使いから聞いて、多くのハディースを伝えているが、これもその一つである。

アッラーのみ使いは言われた。

「最初に天国に入る者たちの顔は、夜の満月のように明るく輝いている。

彼らは、唾を吐かず、鼻水にも苦しまず、排泄することもない。

彼らの用具や櫛は金・銀製で、火鉢の薪はきゃらの香木である。

彼らの汗はじゃこうの香りがする。

彼らは全て二人の妻を持つ。

彼女らは大変美しく、すねの骨髄がすき通ってみえるほどである。

彼らの間には争いはなく、憎しみもない。

彼らは、一心となって、朝に夕にアッラーを讃美している」

ジャービルは伝えている

預言者は「天国の住民も、そこでは食事をし、水を飲むが、唾を吐くことも放尿することも排泄することもなく、また、鼻風邪に苦しむこともない」と言われた。

「それでは、食べた物はどうなるのですか」と聞かれた時、預言者は「彼らのげっぷや汗が、それらを処理します。

汗はじゃこうの香りがします。

彼らは、あなたたちが呼吸するように、きわめて自然な様子で、アッラーを讃美し称えます」と言われた。

前記と同内容のハディースは、**アアマシュ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「天国の住民は、そこで食べ、かつ、飲みもするが、排泄することも鼻風邪に苦しむことも放尿することもない。

彼らの食べた物は、げっぷを通して消化される。

彼らの汗はじゃこうの香りがする。

彼らは、息をするように自然に、アッラーを讃美し称える」

ジャービルによる前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられるが、それには、表現上多少の異同がみられる。

天国の住民への恩寵について

アブー・フライラは伝えている
預言者は言われた。
「天国に入れば、困窮することも破れた衣服を着ることも、また、若さを失うこともない」

アブー・サイード・フドリーと**アブー・フライラ**は伝えている
預言者は言われた。
「天国には、告知役の者がいて、次のように知らせる。
『まことに、あなたたちには永遠の健康が与えられ、決して病気になることはない。
また、あなたたちは永遠に生きつづけ決して死ぬことはない。
更に、あなたたちは若さを保ちつづけ、決して老いることはない。
また更に、豊かな恩恵を授けられ、決して困窮することはない』
これに関し、アッラーは次のように啓示された。
「彼らは呼びかけられる。"これが楽園である。
あなたがたは正しい行ないのためにここの居住者となれたのである"」(クルアーン第 7 章 43 節)」

天国の住民の天幕について

アブー・バクル・ビン・アブドッラー・ビン・カイスは、彼の父から聞いてこう伝えている

預言者は言われた。

「天国では、信者一人づつに、穴のあいた一個の真珠によって作られた天幕が与えられるが、その広さは 60 マイルほどである。

これは、信者一人に対して与えられるもの故、他の人々が見えないほど広々としており、信者は人々を捜す時歩きまわらねばならない」

アブー・バクル・ビン・アブドッラー・ビン・カイスは　彼の父から聞いて伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「天国には、穴をあけられた真珠で作られた天幕があり、その広さは、全方角に 60 マイルほどである。

各方角には一家族が住み、他の家族が見えないほど広い。

信者は、彼らの家を捜しまわらなければならないほどである」

アブー・バクル・ビン・アブー・ムーサー・ビン・カイスは彼の父から聞いて伝えている

預言者は言われた。

「天国には真珠製の天幕があり、その高さは、天にむかって 60 マイルほどである。

その各方角には、信者の家族が住んでいるが、他人には見つけられないほど彼らの住居は遠い」

天国の河について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「サイハーン河、ジャイハーン河（注）、ユーフラテス河、ナイル河は、全て天国にある河である」

（注）サイハーン河、ジャイハーン河はそれぞれサルス河、ピラムス河の名で知られ、イスラーム領土とビザンチン領土との国境域となっていた。

なお、これらの四河川の名前は、それぞれの流域が信仰者の居住地となり、結果としてその水を利用して生活した人々の多くが天国に入ることからあげられたと言われる

天国に入る人々の心について

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。

「天国に入る人々の心は、鳥たちの心のようになる（注）」

（注）用心深いが、自由、かつ自然で、生活の糧に対しても、あくせくしなくなるの意

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラーは、ご自身の表象として六十腕尺ほどの背高のアダムをお作りになった。

その時、アッラーはアダムに『行って、あの人々に挨拶しなさい』と言われたが、それは、そこに座っていた一群の天使たちであった。

アッラーは次いで、『彼らがお前に答える言葉をよく聞いておきなさい。

なぜなら、それらは、お前やお前の子孫たちの挨拶の方法となるからです』と言われた。

アダムが彼らの処に行き、『アッサラーム・アライクム！（平安を！）』といって挨拶した時、天使たちは『あなたにも平安とアッラーの慈悲があらんことを！』といって答えた。

彼らは『アッラーの慈悲』と言う言葉を加えたのである。

（ともあれ）天国に入る者は、全て、アダムと類似し、背高が 60 腕尺もあったが、この後、人々の大きさは縮少しつづけ、今日みるような状態になった」

地獄の熱さと責苦について

アブドッラーは伝えている

「アッラーのみ使いは言われた。

その日(審判の日)には、地獄が七万の手綱をつけられ、運びこまれる。

それら全ての手綱は七万の天使たちによって引かれる」

アブー・フライラは伝えている

預言者は「アダムの子孫を焼くために使う火の量は、地獄の全業火の 70 分の一程度の火にすぎない」と言われた。

人々が「アッラーに誓って！

み使い様、通常用いる火としてはそれだけで十分ではありませんか」と言うと、み使いは「69 の余分の火は全て同じ熱さであるが、別に残されている」と言われた。

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

私たちが、アッラーのみ使いと一緒の時、なにかが落ちる音を聞いた。

預言者が「なんの音かわかりますか」と言われたので、私たちは「アッラーとそのみ使いだけが、最もよくご存知です」と言った。

み使いは、その折、「これは七十年も前に地獄に投げこまれた石の音です。

それがずっと地獄の中を落ちつづけ、今地獄の底に着いたのです」と言われた。

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられているが、それには、「石が地獄の底に着いた。

あなたたちはその落ちる音を聞いたのです」と記されている。

サムラ・ビン・ジュンダブは伝えている

アッラーの預言者は言われた。

「彼らの中には、両足くびまで火に焼かれる者、膝まで焼かれる者、腰のあたりまで焼かれる者、また、首まで焼かれる者がいる」

サムラ・ビン・ジュンダブは伝えている

預言者は言われた。「彼らの中には、火で両足くびまで焼かれる者、腰のあたりまで焼かれる者、鎖骨まで焼かれる者がいる」

前記と同内容のハディースは**サイード**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

高慢な者は地獄に、謙虚な者は天国に入ることについて

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「地獄と天国の間で論議が行なわれ、地獄は『高慢な者や、偉張る者を私の処に入れよ』と主張し、天国は『弱者や謙虚な者は、私の処に入れよ』と言った。

アッラーは、この時、地獄に対し『お前は、私に代る懲罰役である。

お前によって、私がそうしたいと思う者らは罰せられるであろう』と言われた。

また、天国に対しては、『お前は、私に代る慈悲役である。お前によって、私がそうしたいと願う者らは慈悲を与えられるであろう。

お前たち相方の場所は（そのような者たちで）満員になるであろう』と言われた」

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。

「地獄と天国が議論していた。

地獄は『高慢者や偉張る者を私は選んでいる』と言い、天国は『弱者やしいたげられた者、困窮者らのみが私の所に入ってくるが、これは一体どうしてなのか』と言った。

アッラーはこの時、天国に『お前は、私に代る慈悲役である。

お前によって、しもべらの中で、私がそうしたいと思う者らに慈悲が与えられる』と言われた。

地獄に対しては『お前は、私に代る懲罰役である。

お前によって、しもべらの中で、私がそうしたいと願う者らは罰せられる。

お前たち相方の場所は（そのような者たちで）満員となるであろう。』と言われた。

ただ、地獄は、アッラーがその御足をお入れになる時まで満月にはならない。

その時、地獄は『十分です。十分です』と言うのであるが、アッラーは一方の者たちを他方に移して地獄を満員になさるのである」

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

ハンマーム・ビン・ムナッビフは伝えている

アブー・フライラはアッラーのみ使いのハディースを数多く伝えたが、次のハディースもその一つである。

アッラーのみ使いは言われた。

「地獄と天国とが議論した。

地獄は『高慢者や、偉ぶる者を私は選ぶ』と言い、天国は『弱者や、しいたげられた者、見捨てられたみじめな者たちが私の処に入ってくるが、これは一体どうしたことなのか』と言

った。
この時、アッラーは、　天国に対し、『お前は、私に代る慈悲役である。
私が望むしもべらにはお前を通じて私よりの慈悲を与えるであろう』と言われる。
地獄に対しては、『お前は、私に代る懲罰役である。
私は、しもべの中で私がそうしたいと願う者をお前を通じて罰するであろう』と言われ、更に、『お前たち相方の場所は、（それらの者たちで）満員になるであろう』とお告げになる。
地獄は、アッラーが足を入れてみる時、『十分です。十分です。十分です』と叫ぶのであるが、アッラーにより片側の者らは他方に寄せられ満員にされるのである。
アッラーは御自身の創造物の誰をも不公正には扱われない。
アッラーは、天国に入れる　ため、また、新たに創造物をお創りになるであろう」

アブー・サイード・フドリーによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには「アッラーは、『私にとって　お前たち両方の場所を満員にすることは必要なことである』と言われた」と言う言葉も記されている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーの預言者は言われた。
「地獄は、絶えず『まだ、大勢いるのですか』とたずね、主が、そこに御足を入れると、『あなたの名誉にかけて！
もう十分です。もう十分です』と叫ぶであろう。
しかし（主は）人々の一部を別の側に移して地獄を満員になさる」

アナスによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

ムハンマド・ビン・アブドッラー・ルッズィーは伝えている
アブドル・ワッハーブ・ビン・アターウは、アッラーの御言葉、**「その日われ（アッラー）が地獄に「満員になったか」と問うと、「なお多くの入る者がおりますか」と答える」**（クルアーン第 50 章 30 節）に関連するアナス・ビン・マーリクによるハディースをこう伝えている。
預言者は言われた。
「罪人が、その中に投げ込まれる地獄は、『なお、多くの入る者がおりますか』と言いつづける。
主は、地獄に足を置かれ、その中の一部を他の側に動かされるが、その時、地獄は『あなたの名誉と寛大きに誓って！
十分です。十分です。』と叫ぶであろう。
天国にはまだ十分余地があるので、アッラーは新しく人々をお創りになり、彼らを天国のその余った場所にお住まわせになることであろう」

アナスは伝えている

預言者は言われた。

「天国には、アッラーがそう望まれたために、余分の場所が残されている。

アッラーは、そこに入れるために、別の創造物をお創りになる」

アブー・サイードは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「復活の日、死は、白色の雄羊の姿で連れて来られ、天国と地獄の間で起立させられる。

その後、天国の住民たちは、『これを知っているか』と聞かれる。

彼らは、頭をあげて、声のする方を見、『はい、これは"死"です』と答える。

その後、地獄に住む人たちも『これを知っているか』と聞かれる。

彼らは、頭をあげて、声のする方を見、『はい、これは"死"です』と答える。

その後、それを屠殺するようにとの命令が下される。

そして後、天国の住民たちは、『お前たちには永遠の生が許される。

死ぬことはない』と告げられる。

次いで、地獄の住民たちも『お前たちには、永遠の生が許される。死ぬことはない』と告げられる」

こう話した後、み使いは手でこの現世を指さしながら、次の聖句をお唱えになった。

「あなたは悔恨の日(復活の日)について、かれらに警告しなさい。

その時、事は決定されるのである。

かれらが油断し、また不信心である間に」(クルアーン第 19 章 39 節)

アブー・サイードは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「天国に住む者が天国に入れられ、地獄に住む者が地獄に入れられた時、天国に入る者らは、次のように告げられる。」

以下は前記と同内容であるが、表現上に幾つかの異同がみられる。

アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラーは天国に入るべき者らを天国に入らしめ、地獄に入るべき者らを地獄に入らしめた。

その後、告知役の者が、彼らの間に立って、『天国の住民たちよ、お前たちには"死"はない。

地獄の住民たちよ、お前たちには"死"はない。

お前たち全ての者は、そこで永遠に過すことだろう』と告げる」

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「天国に住むべき者らが天国に行き、地獄に入るべき者らが地獄に行く時、"死"が連れ出されて、天国と地獄の間に立たされるが、その後、屠殺される。

そのあと、告知役の者が、『天国の住民よ、死はない。地獄の住民よ、死はない』と知らせる。

これによって、天国の住民たちの喜びは増し、地獄の住民たちの悲しみは増すのである」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「不信仰者の臼歯、または、不信仰者の犬歯は、ウフド山のように強く固い。

また、彼の身体の皮の厚さは、三日間の旅の困苦にも耐えられるほどである（注）」

（注）不信仰者らは、それ故、地獄では長い責苦を負うことであろうの意

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「地獄では、不信仰者の両肩の幅の長さは、速足の乗り物による三日間の旅程ほどにもなるであろう（注）」

（注）それだけ長く業火に焼かれ苦しむことになるの意

ハーリサ・ビン・ワフブは伝えている

預言者は、「天国の住民について話をしてあげようか」と言われ、人々が「はい」と答えると、次のように言われた。

「謙虚であるとみられている人ら全てが、もしもアッラーの御名によって祈願するならば、アッラーは必らずやそれをお聞き入れになる。」

その後、み使いは、また「地獄の住民について話をしてあげようか」と言われ、人々が、「はい」と答えると、次のように言われた。

「彼らは全て、高慢で太った体格をしており威張り屋である」

前記と同内容のハディースは、**シュウバ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

ハーリサ・ビン・ワフブ・フザーイは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「天国の住民について、話をしましょうか。

謙虚で温和な人たちが全て、もしも、アッラーに祈願をすれば、アッラーはそれを必ず受入れるでしょう。
地獄の住民たちについて話しましょうか。
彼らは全て高慢で卑しく威張り屋です」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。
「ぎんばら髪をした者らの多くは（物乞いをしても）家々の門から追い出されるが、（彼らは敬虔である故）もし、彼らがアッラーの御名によって祈願すれば、アッラーは、それを必ず受入れて下さるであろう」

アブドッラー・ビン・ザムアは伝えている

アッラーのみ使いは、説教の折、雌ラクダのことに言及して、その膝の腱を切った男の話をなさり、聖句「**彼らの中の最も邪悪の者が（不信心のため）立ち上った時、**」（クルアーン第 91 章 12 節）をお唱えになった。
そのあと「その立ち上った男は、力はあるが悪徳者で、アブー・サムアのように有力な家系の者であった」と言われた。
み使いは、更に、女性についても説教なさり、「あなたたちの中に自分の妻を打つ者はいませんか。
夜にはベッドで彼女と添い寝すると言うのに」と言われた。
（み使いのこの言葉に関し、アブー・バクルは、「奴隷女を打つように」、アブー・クライブは「奴隷を打つように」と言う表現を付している。）
そのあと、み使いは、誰かが放屁をした時の人々の笑いに関して、「自分でもすることをどうして笑うのか」と言われた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。
「私は、バニー・カウブの父、アムル・ビン・ルハ言い・ビン・カマア・ビン・ヒンデフが、地獄で自分の腸をひきずっているのをみた」

サイード・ビン・ムサイヤブは語っている

偶像に捧げる時以外には、搾乳されないたれ耳の雌ラクダはバヒーラと呼ばれている。
人々は（今でも）これらからは、乳を絞らない。
また、サーイバと呼ばれる雌ラクダは神々に捧げられているため、自由に放置され、物を運ぶなどの労働には使役されない。
イブン・ムサイヤブは、これに関連し、アブー・フライラの語ったハディースを次のように伝

えている。
「アッラーのみ使いは、『私はアムル・ビン・アーミル・フザー言いが、地獄で彼自身の腸をひきずっているのをみた。
彼は、最初に、雌ラクダを偶像神に捧げた男であった。』と言われた」

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「地獄の住民には、二つの特徴がある。
その一つは、彼らが雄牛の尾のような鞭を持ち、それで人々に体罰を加えることである。
第二は、女たちはなにも身につけず裸身で、ラクダの瘤の様に髪を高目に結び、男を誘惑していることで、このような女たちは天国には入れない。
また、天国の香りすらも、しかじかの遠い距離までただようにも関わらず、嗅ぐことはできない」

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「もしも、なおしばらく生きながらえるならば、あなたは必ずや雄牛の尾のような鞭を手にした人々を見ることだろう。
彼らはアッラーの憤怒の下に朝を迎え、アッラーの憤怒の下に夕べを迎える者たちである」

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「もしも、もうしばらくの間、生聞いているならば、あなたは、アッラーに憤られながら朝を迎え、アッラーに呪われながら、夕方を迎える人々を見るであろう。
彼らは、雄牛の尾のようなものを手に持っているであろう」

世の破滅と復活の日の召集について

バニー・フィフルの兄弟**ムスタウリド**は伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラー誓って！

この世は、来世に比較すればとるに足りない。

それは、あたかも、誰かが指を海にひたし、それになにかがついているかを見るようなものである」

口述者の一人ヤフヤーは、このハディースを伝えた時、人差し指で示しながら話した。

なお、このハディースは、五種の異なった伝承者経路で伝えられているが、そのどれにも表現上多少の差がみられる。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、「復活の日、人々は、裸足で裸身、割礼を受けてない状態で集合させられる」と言われた。

私は、この時み使いに「その日、男も女も一緒にされ、お互いを見ることができるのですか」と聞いた。

み使いは、「アーイシャよ、この時、お互いを見ることは大変困難であろう」と言われた。

前記と同内容のハディースは、**ハーテム・ビン・アブー・サギーラ**によっても伝えられている。

イブン・アッバースは伝えている

預言者は、次のように説教なさった。

「あなたたちは、アッラーに、裸足、裸身、割礼もしてない状態で会うことになろう」

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、説教のため立ち上り、「人々よ、アッラーは、あなたたちを裸足、裸身、割礼をしてない状態のまま集合せしめる」と言われ、聖句**「われが、最初創造したように、再び繰り返す。**

これは、われの定めた約束である。

われは、必ずそれを完遂する」（クルアーン第 21 章 104 節）をお唱えになった。

そして次のように、つづけて言われた。

「みなさい！

復活の日、最初に衣服を着る者は、預言者イブラーヒームである。

そして、みなさい！

私のウンマの人たちの一部が前に出され、左側に連れて行かれる。

この時、私が、『主よ、彼らは私の教友たちです。』と言うと、主は『お前の亡きあと、彼らがどんなことをしたのか、お前は知らないだろう』と言われる。
それで、私は、誠実なしもべ（預言者イエス）が述べた言葉を次のように申しあげる。
「私が彼らの中にいた間は、私は彼らの証人でありました。
あなた（アッラー）が、私をお呼びになった後は、あなたが彼らの監視者であり、また、あなたは全てのことの立証者であられます。
あなたがたとえ彼らを罰せられても、誠に彼らはあなたのしもべです。
また、あなたが彼らを御赦しなされても、本当にあなたこそは、偉力ならびなく英明であられます」（クルアーン第5章117-118節）。
すると、アッラーは、私に対し、『彼らはお前が彼らを後に残して去って以来、ずっと、教えにそむいて聞いた者たちである』と言われるのである。」
これに関連し、ワキーウ及びムアーズは、「アッラーは、『彼らが、お前の亡きあと、どのような新しいことを作りだしたか、お前は知らないだろう』と言われた」と記している。

アブー・フライラは伝えている
預言者は言われた。
「人々は、三階層に分けて集合させられる。
天国を望む者たち、地獄を恐れる者たちは、それぞれ、ラクダに二人乗り、三人乗り、四人乗り、また、十人乗りしながら集まってくる。
地獄は、彼らに付いてまわり、彼らが泊る処に夜は泊り、彼らが昼寝をする処で昼寝し、彼らと同じ処で朝を迎え、また、同じ処で夕方を迎えるであろう」

復活の日について

イブン・ウマルは伝えている

預言者は、聖句**「その時、全ての人間が万有の主の御前に立つのではないか」**（クルアーン第 83 章 6 節）について、次のように言われた。

「この日、彼らの誰もが、両耳の半ばまで汗まみれになりながら直立するであろう」

イブン・ウマルによる前記と同内容のハディースは、別にも幾つかの伝承者経路で伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「復活の日、人々の流す汗の量は、地上で 70 腕尺にも及ぶであろう。

それらは人々の口、または、耳までも達するほどになるであろう」

ミクダード・ビン・アスワドは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「復活の日、太陽が近づき、人々との間には、1 マイルほどの距離が残されるだけになる」（これに関連し、スライム・ビン・アーミルは「私には、み使いが言われたマイルの意味が、地上の距離のことか、あるいはまた、洗眼用器具のことであるのかわからない」と述べている）

み使いは、また、「人々は、それぞれの行為の程度によって汗を流す。

或る者らは、踝まで、或る者らは膝まで、或る者らは腰までも汗を流し、更に、中には、馬ろくに達するほどまで汗を流す者がいる」と言われ、話しながら、指で口をお差しになった。

天国や地獄の住民たちの地上での行為について

イヤード・ビン・ヒマール・ムジャーシウ言いは伝えている

アッラーのみ使いは、或る日、次のように説教なさった。

「みなさい！

主は、あなたたちがまだ知らない、今日私に教示して下さったことをあなたたちに教えるよう命じ、次のように言われた。

『私が彼らに与えた財産は、許されるもの（ハラール）である。

私は、しもべらを全て敬虔であるように創ったのであるが、悪魔（シャイターン）は、彼らの処に聞いて彼らの信仰を棄てさせる。

そして、悪魔は、私が彼らに許したものを禁じられるもの（ハラーム）とし、また、なんの権威も与えられていないのに、彼らに命じて私と同格者を置かしめる。』」

このあと、み使いは、「アッラーは、地上の人々を見、アラブ人や非アラブ人らに対し特に怒りを示されたが、啓典の民の一部だけが、その怒りの対象からはずされた」と述べ、

そして更に、アッラーの御言葉「私は、お前（預言者）を試み、また、お前を通じて人々を試みるために、お前を地上に遣わした。

また、私は、水につけても消えることのない聖典をお前に送り、起聞いている時も、眠っている時もそれが唱えられるようにした」を伝えた後、次のように言われた。

「まことに、アッラーは、私にクライシュ族を（焼き）殺すようお命じになった。

私は、この時『主よ、彼らは、パンを裂くように、私の頭を砕いてしまいます』と言ったが、主は『彼らがお前を追い出したように、彼らを追い出しなさい。

私が助ける故、彼らと戦いなさい。

お前の必要とする費用は与えられるだろう。

お前が軍隊を送る時には、私はそれより五倍も多い軍隊を送るであろう。

お前に忠実な者らを率いて、お前に不服従な者たちと戦いなさい。

天国の住民には三種がある。

これらは、威厳を持ち公正で信頼でき、善行を為す者らであり、親類やムスリムに対し慈悲と親切心を持って接する者らであり、更には、大家族を養いながら謙虚な態度で生活する者らである。

地獄の住民には五種がある。

それらは悪を拒否する力を持たない弱者、善悪の区別もつかず全ゆるものを追い求める者、家族の世話や財産の管理をおろそかにする者、僅かなことについても貪欲さを隠そうとしない者、更には、お前の家族や財産をねらって、朝にも夕にもお前を裏切りだます者である。』と言われた。

アッラーは、また、吝嗇な者、虚言者、悪態をつく者、卑しい言葉を使う者らについても言及なさった」

前記と同内容のハディースは、**カターダ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

イヤード・ビン・ヒマールによる前記と同内容のハディースは、また、別の伝承者経路でも伝えられている。

バニー・ムジャーシウの兄弟、**イヤード・ビン・ヒマール**による前記と同内容のハディースは、更に、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには次の言葉が付加されている。
「アッラーは、私に啓示され、『仲間に対して、謙虚であるようにと命じ、他人になにかを誇ったり、他人を苦しめたりしてはならない』と言われた。
更に、アッラーは『お前たちの中には、家族や財産について少しも注意を払わない者がいる』と言われた」
これに関連し、カターダがアブー・アブドッラーに、「このようなことが実際にあっただろうか」とたずねたところ、
彼は「はい。アッラーに誓って！
イスラーム以前の時代に、私は、或る部族の牧畜を仕事としている男をみかけましたが、彼は、性交相手の少女一人を所有するだけでした」と答えた。

死者が天国や地獄を見ることについて

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「もしも、誰かが死ぬと、彼は来世における居場所を、朝と夜、示される。

もし、彼が天国に入る者であれば、天国の住民によってその場所は示されるし、もし、彼が地獄に入る者であれば、地獄の住民によって示される。

彼は、その時、『これが、お前の居場所である。

アッラーは、復活の日に、ここにお前を送るであろうとお告げになる』と知らされる」

イブン・ウマルは伝えている

預言者は言われた。

「人が死ぬと、彼は、朝晩、彼の座り場所を示される。

もし、彼が、天国に入る者であれば、それは天国で示され、もし彼が地獄に入る者であれば、それは、地獄で示される。

その後、彼は、『そこが、復活の日にお前が送られる場所である』と告げられる」

アブー・サイード・フドリーは伝えている

次のハディースは、サイド・ビン・サービトが預言者から聞いて私に語ったものである。

預言者が、ナッジャール族の住居地に騾馬に乗って行かれた時、私たちもご一緒した。

預言者は、坂道の処で騾馬から落ちそうになられたが、そこには、六つ、五つ、四つほど墓があった。

み使いはこの時、「誰か、これらの墓に埋葬された人々について知らないか」と言われた。

或る男が「私は知っています」と答えると、預言者は「彼らは、いつ死んだのか」と言われた。

彼が「多神教の時代に死にました」と答えると、み使いは「この人たちは墓の中で厳しい試練を受けている。

もしも、あなたたちが、墓中で行なわれる責苦を聞くのを恐れる余りに、墓中に遺体を埋めるのを中止するようなことがないならば、私は、アッラーに祈願して、あなたたちにも、私が聞いているような墓でのその責苦の様子を伝える声を聞かせたい」と言われた。

そして、この後、私たちにお顔をむけ「地獄の責苦から守ってくれるようアッラーに願いなさい」と言われた。

私たちが「我らを地獄の責苦から守るようアッラーに祈願します」と唱えると、み使いは「墓での責苦から守ってくれるようアッラーに祈願しなさい」と言われた。

それに対しても私たちは「我らを墓での責苦から守るようアッラーに祈願します」と唱えた。

更に、み使いは「アッラーに対し目に見える災い、また、目に見えない災いから守って下さ

るよう祈りなさい」と言われた。
私たちは、それにも「アッラーよ、我らを目に見える災い、また、見えない災いからお守り下さい」と祈った。
み使いは、更にまた、「アッラーにダッジャール（偽救世主）のもたらす災いから守るよう祈りなさい」と言われた。
私たちはこれにも「アッラーよ、ダッジャールのもたらす災いから我らをお守り下さい」と祈った。

アナスは伝えている
預言者は言われた。
「もしも、あなたたちが、墓に遺体を埋葬しなくなるのでなければ、あなたたちにも、墓での責苦の様子を聞かせるよう、私は、アッラーに祈願するであろう」

アブー・アイユーブは伝えている
アッラーのみ使いは、太陽が沈んだ後、外に出て行かれたが、その時或る物音を耳にされ「あれは、墓の中で責苦を受けるユダヤ人の声である」言われた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーの預言者は言われた。
「死んだしもべが墓に埋葬され、その教友らが家に帰ってしまった時、そのしもべは足音を耳にする。
そのあと、二人の天使が来てしもべを座らせ、『あの男（預言者）についてなんと呼ぶのか』とたずねる。
もし信者であれば、しもべは『彼はアッラーのしもべであり、アッラーの使徒であることを証言します』と答える。
その後、しもべは『地獄でのお前の座席を見なさい。
アッラーは、天国にもお前の座席を用意なさっておられる』と告げられる。
そのため、しもべは両方の座席を見ることになる。」
これに関連し、カターダは「信者の墓は、70 腕尺ほども拡張され緑に覆われる。
信者は復活の日まで、そこで過すことになっている」と述べている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「墓に安置され、埋葬に参列した人々がそこを去ってしまった時、死者は靴音を聞くであろう」

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーの預言者は言われた。

「しもべが、墓に安置され、教友らがそこを離れて帰って行った時。」

以下は、前記ハディースと同内容である。

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている

預言者は言われた。

「聖句『**アッラーは、堅固な（地歩に立つ）御言葉で、信仰する者たちを立たせられる**』（クルアーン第 14 章 27 節）は、墓での試練に関連して啓示されたものである。

死者は『お前の主は誰か』と問われるが、その時、彼は『アッラーが私の主であり、ムハンマドは私の預言者です』と答えることだろう。

これが『アッラーは、現世の生活においても、また、来世でも、堅固な（地歩に立つ）御言葉で、信仰する者たちを立たせられる』と言う聖句の意味である」

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている

聖句**「アッラーは現世の生活においても、また、来世でも、堅固な（地歩に立つ）御言葉で、信仰する者たちを立たせられる」**（第 14 章 27 節）は、墓での試練に関連して啓示されたものである。

アブー・フライラは伝えている

死者の魂がその肉体を離れた時、二人の天使がそれを受け取り、天に運ぶ。

（伝承口述者の一人ハンマードは、これに関連し、「その魂は、じゃこうにも似たよい香りを放つ」と述べている）

天の住人たちは、「地上の方角から敬虔な魂がやって聞いた。

アッラーが、彼の魂とそれが宿った肉体に加護を給わらんことを！」と述べる。

その魂は、主の許に連れてゆかれるが、主は、その折「最後に行き着くべき処に連れてゆくように」と言われる。

もし、不信仰者の魂（これに関してもハンマードは、「その魂は、呪われ悪臭を放つ」と述べている）が、肉体を離れると、天の住民たちは、「地上の方角から不潔な魂がやって聞いた」と述べる。

ともあれ、アッラーは「彼の魂を、最後に行き着くべき処に連れてゆくように」と言われる。

なお、アブー・フライラは、この話に関連し「み使いは、不信仰者の魂の発する悪臭について言及された時、鼻を薄い布でお覆いになった」とも伝. えている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

ウマルと一緒にマッカとマディーナの間にいた時、私たちは新月が現われるのを捜し始めた。

視力が良かったために私には新月が見えたが、私以外には誰もそれを見ることがで聞いた者はいなかった。

私は、ウマルに「見えましたか」とたずねたが、彼にはまだ見ることができなかった。

ウマルは、この時、「すぐに見えるようになるだろう」と言った。

その後、私は、ベッドに横になったが、ウマルは、その折、バドルの戦役に参加した人々について、次のように話してくれた。

「アッラーのみ使いは、実際の戦闘が行なわれる前日、このバドルの戦役に参加した人々の死に場所を我々に示し、『ここは、明日、アッラーの御意志により、某々らの死に場所となるであろう』と言われた」

ウマルは、つづいて次のように語った。

「真理を託された彼を送った御方に誓って！

み使いが示されたその場所は、実際、彼らの死に場所となったのである。

彼らの遺体は全て次々と井戸の中に入れられた。

み使いは、その後井戸の近く行き、

『おお！

誰某の息子よ！

誰某の息子の誰某よ！

あなたたちには、アッラーとその使徒の約束が正しかったことがわかりましたか。

私には、アッラーが私に約束したことが本当に真実であったとわかりました』と言われた。

ウマルが、その時、『み使い様、魂のない彼らの遺体にどうしてお話しになるのですか』と聞くと、

それに対しみ使いは『私が彼らに話したことの意味は、あなたたちには彼らほどには理解できないであろう。

ただ、彼らにはなにも答えることはできないのではあるが』と言われた」

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは、バドルで戦った不信仰者らの遺体を三日間放置させ、その後、そこに来て、遺体の側に立って彼らの名を呼び、次のように言われた。

「アブー・ジャフル・ビン・ヒン・ヒシャームよ、ウマイヤ・ビン・ハラフよ、ウトバ・ビン・ラビーアよ、シャイバ・ビン・ラビーアよ、お前たちは、主の約束が真実であることが理解で聞いたか。

私に関していえば、主の私に対する約束が全て真実であることがよく理解で聞いた」

ウマルは、預言者のこの言葉を聞き、「み使い様、彼らが、どうしてあなたの声を聞き、答

えると言うのですか。

彼らは死に腐敗してしまったと言うのに」と言った。

み使いはこの折、「私の生命を御手になさる方に誓って！

私が彼らに言った言葉の意味は、あなたでさえも、彼ら以上には理解できないでしょう。

ただ、彼らには、返事をする力はありませんが」と言われた。

その後、み使いは、彼らの遺体を引っ張って行き、バドルの井戸に埋めるようにとお命じになった。

アブー・タルハは伝えている

バドルの戦いの日、アッラーの預言者は、マッカ軍に対して勝利を得た。

この折、預言者は20名以上（別のハディースによれば、24名）のクライシュ族の不信仰者らの遺体を、バドルの井戸の一つに投げ入れるようお命じになった。

以下は、前記ハディースと同内容である。

死者が天国や地獄を見ることについて

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「もしも、誰かが死ぬと、彼は来世における居場所を、朝と夜、示される。

もし、彼が天国に入る者であれば、天国の住民によってその場所は示されるし、もし、彼が地獄に入る者であれば、地獄の住民によって示される。

彼は、その時、『これが、お前の居場所である。

アッラーは、復活の日に、ここにお前を送るであろうとお告げになる』と知らされる」

イブン・ウマルは伝えている

預言者は言われた。

「人が死ぬと、彼は、朝晩、彼の座り場所を示される。

もし、彼が、天国に入る者であれば、それは天国で示され、もし彼が地獄に入る者であれば、それは、地獄で示される。

その後、彼は、『そこが、復活の日にお前が送られる場所である』と告げられる」

アブー・サイード・フドリーは伝えている

次のハディースは、サイド・ビン・サービトが預言者から聞いて私に語ったものである。

預言者が、ナッジャール族の住居地に騾馬に乗って行かれた時、私たちもご一緒した。

預言者は、坂道の処で騾馬から落ちそうになられたが、そこには、六つ、五つ、四つほど墓があった。

み使いはこの時、「誰か、これらの墓に埋葬された人々について知らないか」と言われた。

或る男が「私は知っています」と答えると、預言者は「彼らは、いつ死んだのか」と言われた。

彼が「多神教の時代に死にました」と答えると、み使いは「この人たちは墓の中で厳しい試練を受けている。

もしも、あなたたちが、墓中で行なわれる責苦を聞くのを恐れる余りに、墓中に遺体を埋めるのを中止するようなことがないならば、私は、アッラーに祈願して、あなたたちにも、私が聞いているような墓でのその責苦の様子を伝える声を聞かせたい」と言われた。

そして、この後、私たちにお顔をむけ「地獄の責苦から守ってくれるようアッラーに願いなさい」と言われた。

私たちが「我らを地獄の責苦から守るようアッラーに祈願します」と唱えると、み使いは「墓での責苦から守ってくれるようアッラーに祈願しなさい」と言われた。

それに対しても私たちは「我らを墓での責苦から守るようアッラーに祈願します」と唱えた。

更に、み使いは「アッラーに対し目に見える災い、また、目に見えない災いから守って下さ

るよう祈りなさい」と言われた。
私たちは、それにも「アッラーよ、我らを目に見える災い、また、見えない災いからお守り下さい」と祈った。
み使いは、更にまた、「アッラーにダッジャール（偽救世主）のもたらす災いから守るよう祈りなさい」と言われた。
私たちはこれにも「アッラーよ、ダッジャールのもたらす災いから我らをお守り下さい」と祈った。

アナスは伝えている
預言者は言われた。
「もしも、あなたたちが、墓に遺体を埋葬しなくなるのでなければ、あなたたちにも、墓での責苦の様子を聞かせるよう、私は、アッラーに祈願するであろう」

アブー・アイユーブは伝えている
アッラーのみ使いは、太陽が沈んだ後、外に出て行かれたが、その時或る物音を耳にされ「あれは、墓の中で責苦を受けるユダヤ人の声である」言われた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーの預言者は言われた。
「死んだしもべが墓に埋葬され、その教友らが家に帰ってしまった時、そのしもべは足音を耳にする。
そのあと、二人の天使が来てしもべを座らせ、『あの男（預言者）についてなんと呼ぶのか』とたずねる。
もし信者であれば、しもべは『彼はアッラーのしもべであり、アッラーの使徒であることを証言します』と答える。
その後、しもべは『地獄でのお前の座席を見なさい。
アッラーは、天国にもお前の座席を用意なさっておられる』と告げられる。
そのため、しもべは両方の座席を見ることになる。」
これに関連し、カターダは「信者の墓は、70 腕尺ほども拡張され緑に覆われる。
信者は復活の日まで、そこで過すことになっている」と述べている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「墓に安置され、埋葬に参列した人々がそこを去ってしまった時、死者は靴音を聞くであろう」

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーの預言者は言われた。

「しもべが、墓に安置され、教友らがそこを離れて帰って行った時。」

以下は、前記ハディースと同内容である。

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている

預言者は言われた。

「聖句『**アッラーは、堅固な（地歩に立つ）御言葉で、信仰する者たちを立たせられる**』（クルアーン第 14 章 27 節）は、墓での試練に関連して啓示されたものである。

死者は『お前の主は誰か』と問われるが、その時、彼は『アッラーが私の主であり、ムハンマドは私の預言者です』と答えることだろう。

これが『アッラーは、現世の生活においても、また、来世でも、堅固な（地歩に立つ）御言葉で、信仰する者たちを立たせられる』と言う聖句の意味である」

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている

聖句「**アッラーは現世の生活においても、また、来世でも、堅固な（地歩に立つ）御言葉で、信仰する者たちを立たせられる**」（第 14 章 27 節）は、墓での試練に関連して啓示されたものである。

アブー・フライラは伝えている

死者の魂がその肉体を離れた時、二人の天使がそれを受け取り、天に運ぶ。

（伝承口述者の一人ハンマードは、これに関連し、「その魂は、じゃこうにも似たよい香りを放つ」と述べている）

天の住人たちは、「地上の方角から敬虔な魂がやって聞いた。

アッラーが、彼の魂とそれが宿った肉体に加護を給わらんことを！」と述べる。

その魂は、主の許に連れてゆかれるが、主は、その折「最後に行き着くべき処に連れてゆくように」と言われる。

もし、不信仰者の魂（これに関してもハンマードは、「その魂は、呪われ悪臭を放つ」と述べている）が、肉体を離れると、天の住民たちは、「地上の方角から不潔な魂がやって聞いた」と述べる。

ともあれ、アッラーは「彼の魂を、最後に行き着くべき処に連れてゆくように」と言われる。

なお、アブー・フライラは、この話に関連し「み使いは、不信仰者の魂の発する悪臭について言及された時、鼻を薄い布でお覆いになった」とも伝. えている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

ウマルと一緒にマッカとマディーナの間にいた時、私たちは新月が現われるのを捜し始めた。
視力が良かったために私には新月が見えたが、私以外には誰もそれを見ることがで聞いた者はいなかった。
私は、ウマルに「見えましたか」とたずねたが、彼にはまだ見ることができなかった。
ウマルは、この時、「すぐに見えるようになるだろう」と言った。
その後、私は、ベッドに横になったが、ウマルは、その折、バドルの戦役に参加した人々について、次のように話してくれた。
「アッラーのみ使いは、実際の戦闘が行なわれる前日、このバドルの戦役に参加した
人々の死に場所を我々に示し、『ここは、明日、アッラーの御意志により、某々らの死に場所となるであろう』と言われた」
ウマルは、つづいて次のように語った。
「真理を託された彼を送った御方に誓って！
み使いが示されたその場所は、実際、彼らの死に場所となったのである。
彼らの遺体は全て次々と井戸の中に入れられた。
み使いは、その後井戸の近く行き、
『おお！
誰某の息子よ！
誰某の息子の誰某よ！
あなたたちには、アッラーとその使徒の約束が正しかったことがわかりましたか。
私には、アッラーが私に約束したことが本当に真実であったとわかりました』と言われた。
ウマルが、その時、『み使い様、魂のない彼らの遺体にどうしてお話しになるのですか』と聞くと、
それに対しみ使いは『私が彼らに話したことの意味は、あなたたちには彼らほどには理解できないであろう。
ただ、彼らにはなにも答えることはできないのではあるが』と言われた」

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは、バドルで戦った不信仰者らの遺体を三日間放置させ、その後、そこに来て、遺体の側に立って彼らの名を呼び、次のように言われた。
「アブー・ジャフル・ビン・ヒン・ヒシャームよ、ウマイヤ・ビン・ハラフよ、ウトバ・ビン・ラビーアよ、シャイバ・ビン・ラビーアよ、お前たちは、主の約束が真実であることが理解で聞いたか。
私に関していえば、主の私に対する約束が全て真実であることがよく理解で聞いた」
ウマルは、預言者のこの言葉を聞き、「み使い様、彼らが、どうしてあなたの声を聞き、答

えると言うのですか。
彼らは死に腐敗してしまったと言うのに」と言った。
み使いはこの折、「私の生命を御手になさる方に誓って！
私が彼らに言った言葉の意味は、あなたでさえも、彼ら以上には理解できないでしょう。
ただ、彼らには、返事をする力はありませんが」と言われた。
その後、み使いは、彼らの遺体を引っ張って行き、バドルの井戸に埋めるようにとお命じになった。

アブー・タルハは伝えている
バドルの戦いの日、アッラーの預言者は、マッカ軍に対して勝利を得た。
この折、預言者は20名以上（別のハディースによれば、24名）のクライシュ族の不信仰者らの遺体を、バドルの井戸の一つに投げ入れるようお命じになった。
以下は、前記ハディースと同内容である。

死に際して善き希望をもつことについて

ジャービルは伝えている

預言者は、死の三日前に、次のように言われた。

「死に際しては、アッラーに対し、善き望みを託することが大切である」

前記と同内容のハディースは、**アアマシュ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

ジャービル・ビン・アブドッラー・アンサーリーは語っている

私はアッラーのみ使いが、死の三日前にこう言われるのを聞いた。

「誰しも死ぬ時には、アッラーから善き恵みがあると期待しっつ死ぬべきである」

ジャービルは語っている

私は、預言者が「しもべは、全て、死の時の状態のまま呼び出される」と言われるのを聞いた。

前記と同内容のハディースは、**アアマシュ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

私は、アッラーのみ使いが次のように言われるのを聞いた。

「アッラーが、人々を懲罰なさる時には、彼ら全てを一度に懲罰なさる。

その後、彼らは善悪の行為の程度に従って呼び出される」

フィタン及び最後の時の書

フィタン（試練）が近づくことについて

ザイナブ・ビント・ジャフシュの話をスフヤーンはこう伝えている

預言者は眠りからさめると、「アッラーの他に神はない！

アラビアに破滅をもたらす悪が近づいている。

ゴグとマゴグ（注）の侵入を防ぐための柵は、今日、このように破られた」と言われた。

（この時、スフヤーンは、指を使って十の形を作りその破れた穴の大きさを示した。）

私が、その折、「アッラーのみ使い様、私たちの中には、敬虔な人たちもいるのに、破滅するのですか」と聞くと、

み使いは「その通りです。しかし、それは、悪が蔓延した時のことです」と言われた。

（注）北方より起って暴威をふるう蛮族の名。

聖書にも言及されている

ザイナブ・ビント・ジャフシュによる前記と同内のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

預言者の妻の一人、**ザイナブ・ビント・ジャフシュ**は語っている

或る日、アッラーのみ使いは、興奮のため顔を赤くしながら、外に出て行かれた。

その時、み使いは、「アッラーの他に神はない！

アラビアに破滅をもたらす悪が近づいている。

ゴグとマゴグを防ぐための柵はあのように、今日、破られてしまった」と言われ、それを説明するため、親指と人指し指を丸めて輪をお示しになった。

私は、この時、「み使い様、私たちの中には敬虔な人々もいます。

それでも破滅させられるのですか」と聞いた。

み使いは「そうです。悪が蔓延した時、破滅させられます」と言われた。

前記と同内容のハディースは、**ズフリー**によっても別に幾つかの伝承者経路で伝えられている。

アブー・フライラは伝えている
　　　　預言者は言われた。
　　　「今日、マグとマゴグに対する防壁は、このように破られてしまった」
　　　　ウハイブは、それを説明するため、手で 90 の形を示した。

地中に沈む軍隊について

ウバイドッラー・ビン・キブティヤは伝えている。

ハーリス・ビン・アブー・ラビーアとアブドッラー・ビン・サフワーンは、私も同道したが、信者の母ウンム・サラマの家を訪問し、地中に沈む軍隊について質問した。

それは、イブン・ズバイルがマッカの総督をしていた時代に関係する話である。

彼女は、次のように語った。

アッラーのみ使いは、「避難場所を求める者は、聖なる神殿に逃げ込む。

軍隊が彼を殺すため派遣されるが、軍隊が、そのなにもない平地に入ると、その平地は陥没させられる」と言われた。

この時、私が「み使い様、無理に軍隊に参加させられた者はどうなりますか」とたずねると、み使いは「彼も軍隊共々沈められるが、復活の日には、彼の意図が考慮され呼び出される」と言われた。

このハディースに関連し、アブー・ジャウファルは「"平地"とはマディーナにある平坦地のことである」と述べている。

前記と同内容のハディースは、**アブドル・アズィーズ・ビン・ルファイウ**によっても同じ伝承者経路で伝えられるが、それには、「私は、アブー・ジャウファルに会った時、『彼女（ウンム・サラマ）は単に"平地"と述べたにすぎない』と言った。

アブー・ジャウファルは、それに対し、『いや、アッラーに誓って！

それはマディーナの平坦地を意味している』と述べた」と記されている。

アブドッラー・ビン・サフワーンは伝えている

ハフサは、預言者の言葉を次のように私に語った。

「軍隊が、ここに住む人々と戦うため、この神殿を攻撃する。

軍隊がこのなにもない平地に入ると、その中心部の兵たちは地中に沈められる。

先鋒隊の兵らは後衛隊に呼びかけるが、彼らも共々沈められてしまう。

そして、そのことを報告するため、逃げ帰った者以外、誰一人として残る者はいなくなる」

或る男は、これに関連し、「私は、あなたが、ハフサの言葉を正しく伝えたことを証言します。

また、ハフサが、預言者のお言葉を正しく話したことを証言します」と言った。

アブドッラー・ビン・サフワーンは伝えている

信者の母は、アッラーのみ使いの言葉を次のように語った。

「人々は、この館カーバ神殿に庇護を求めたが、なんら身を守る手段をもたず、力もなくまた武器もない。

軍隊が彼らと戦うため派遣されるが、そこの平地に入った時地中に埋没されてしまう。」
これに関連し、口述者の一人ユースフは、「それは、アブドッラー・ビン・ズバイルと戦うため、当時、マッカに進撃して聞いた（ハッジャージュのひきいる）シリアの兵たちのことであろう」と述べたが、
アブドッラー・ビン・サフワーンは、「アッラーに誓って！
その軍隊のことではない」と言った。

信者の母による前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アーイシャは伝えている
アッラーのみ使いは、就寝中、なにかに驚いたような様子を示された。
私たちが「み使い様、以前にはなさらなかった様子を睡眠中なさいました」と言うと、み使いは「不思議なことに、私のウンマの者たちが神殿に保護を求めて聞いたクライシュ族の或る人物を殺すため、神殿を攻撃して聞いたが、彼らはそこの平地に着くと埋没されてしまう夢を見た」と言われた。
「み使い様、その時、道路は、それらの人々で混雑しますか」と私たちが言うと、み使いは、「その通りです。
彼らの中には、明確な目的をもつ者、強制されて聞いた者、旅人などさまざま混っているが、彼らは、全て一度に滅ぼされてしまう。
アッラーは、彼らを（復活の日）その意図した程度に応じて、それぞれ異った状況で呼び出される」と言われた。

降雨のような災害について

ウサーマは伝えている

預言者はマディーナにある城塞の一つに登って（遠くを）見渡してから「私が、なにを見ているかわかりますか。

あなたたちの家の周囲が、降雨地のように、災害地となるのを見ているのです（注）」と言われた。

（注）注釈書によると、降雨とは“ラクダの戦い、スィッフィーンの戦闘、ハッラの戦闘、ウスマーンやフサインの殉教事件”などムスリム間での闘争や虐殺事件を意味するという

ズフリーは、前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「災害（フィタン）がまもなく起るであろう。

その時には、ひきこもって座る者が、なにかするために立ち上る者よりも安全である。

また、外に出て歩きまわる者より、この立つ者の方が安全である。

更にまた、走りまわる者より、歩く者の方が安全である。

また（災害を）見ようとする者は、かえって、それに見舞われることになる。

それ故、避難場所があるものは、それに頼って身の安全をはかるべきである」

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別にも伝えられるが、それには、アブー・バクラが伝えた次の言葉か記されている。

「日に五回の礼拝の中でも、アスル（夕方）の礼拝は、特に大切で、それを行わない者は家族や財産を損うのと同じことになる」

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。

「災害が始まると、眠る者は起きる者よりもよく、起きる者は立つ者よりよく、また、立つ者は走る者（注）よりもより安全である。

それ故、避難場所や隠れ場所がある者は、そこに身をひそめた方がよい」

（注）走る者とは、混乱にまきこまれ闘争者の仲間に入る者の意

ウスマーン・シャッハームは伝えている

私とファルカト・サブヒーは、ムスリム・ビン・アブー・バクラを訪ねた。

その時、彼は畠にいた。

彼の家に入ってから私たちは「あなたの父上は、災害についてなにか話しましたか」と聞いた。

その時、彼（ムスリム）は、次のように答えた。

「はい。父アブー・バクラによると、アッラーのみ使いはこう言われました。

『災害はまもなく起こるであろう。

心しなさい！

その災害の時には、座る者が歩く者よりより安全であり、歩く者が走る者よりもより安全である。

心しなさい！

災害がおとずれ、または、起る時、ラクダをもつ者はラクダを離さず、羊をもつ者は羊を離さず、土地を所有する者はその土地を守って手離さないことです』

或る男が「み使い様、ラクダも羊もなにももたない者は、どうなりますか」と言うと、み使いは『剣をとって、その刃先を石で研いで鋭くしてから、逃げ道を捜しなさい』と言われました。

そして、その後、み使いは『アッラーよ！　私はあなたの御言葉を人々に伝えました。

アッラーよ！　私はあなたの御言葉を人々に伝えました』と言われました。

この時また、別の男が『み使い様、もしも、私が一方の側、または、一方のグループにひきこまれ、それを嫌って逃げるところを或る男によって剣で切られるか、または、矢で射殺されるかした場合、その男はどうなるのですか』とたずねた。

み使いは 『彼は、彼自身の罪とあなたの罪を背負うことになり、地獄に落される』と言われました。」

前記と同内容のハディースは、**ワキーウ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

二人のムスリムが相戦うことについて

アフナフ・ビン・カイスは伝えている

私が、その人物（アリー）に加担しようと願って家を出た時、アブー・バクラに会った。

彼が「アフナフよ、どこに行くのか」と言ったので、私が「アッラーのみ使いの従兄弟、アリーを助けたいと願っている」と答えると、アブー・バクラはこう言った。

「アフナフよ、帰りなさい！

私はみ使いが次のように言うのを聞いたことがある。

『二人のムスリムが互いに、剣をもって戦った場合、殺した者も殺された者も地獄におちることになる』

それに対し、私か、または、誰かが『み使い様、殺した者は、地獄におとされても仕方ないでしょうが、どうして殺された者までそうなるのですか』と言うと、み使いは『彼もまた、相手を殺そうとして、戦ったからである』と言われた」

アブー・バクラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「二人のムスリムが、剣を手にして相戦った場合、殺した者も殺された者も地獄におとされる」

前記と同内容のハディースは、**ハンマード**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・バクラは伝えている

預言者は言われた。「二人のムスリムが対立し、一方が、彼の信仰上の兄弟を武器をもって襲った場合、両者共、地獄の瀬戸際におとされる。

もしも、或る人がその友人を殺した場合には、両者共地獄におちる」

ハンマーム・ビン・ムナッビフは伝えている

アブー・フライラは、預言者のハディースを多く伝えたが、これもその一つである。

アッラーのみ使いは言われた。

「“最後の時”が至る頃には、ムスリムの二大グループが相戦い、相方間に大虐殺が行なわれる。

（相方がそれぞれ正当性を主張したとしても）

相方の言い分は、同一で良し悪しはあり得ない」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「“最後の時”が迫る頃には、騒乱が多くなる」と言われた。

「どんな騒乱ですか」と聞かれた時、み使いは「殺し合い、殺し合い」と言われた。

ウンマの崩壊について

サウバーンは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「アッラーは私の方に大地をひき寄せて下さった。

それで、私は、東の端も西の端も見ることがで聞いた。

私のウンマも、私の近くにひかれて来たそれらの領域内にあった。

私は赤と白の宝物(注)を与えられた。

私は、この時、ウンマのため主に、飢饉でウンマを破壊させないように、また、彼らと同族でもない敵によって支配されぬように、更にその敵となる者たちを完全に滅ぼすようにと祈願した。

主はこれに対し、「ムハンマドよ、私は次のように決定した。

私はお前のウンマを飢饉によって破滅させることはしない。

また、ウンマの仲間でもない敵によって支配させることもしない。

その敵に、たとえ世界各地から集まって聞いた者たちが加勢するとしても、彼らを私は完全に滅ぼすであろう。

その時には、彼らは互いに殺し合い投獄し合うことだろうと言われた」

(注)異った色をした人種の者が、イスラームに入信することを意味する

サウバーンは伝えている

アッラーの預言者は言われた。

「まことにアッラーは、私の近くに大地を近づけて下さったので、私は東西の両端をみることがで聞いた。

アッラーは、また、私に赤と白の宝物を与えて下さった。」

以下のハディースは前記と同内容である。

アーミル・ビン・サアドは彼の父から聞いて次のように伝えている

アッラーのみ使いは、或る日、高台の方から下りてこられた。

そして、通りがかりのバヌー・ムアーウィヤのモスクに立寄り、中に入ってニラカートの礼拝をなさった。

私たちも一緒に礼拝したが、その時、み使いは主に対し長い祈願をなさった。

その後、私たちの処に聞いて次のように言われた。

「私は主に三つのことを祈願したが、主は、それらのうち二つだけを許され、一つは留保された。

私は、主に、飢饉で私のウンマを滅ぼさないよう祈願しそれを許された。

私はまた主に、私のウンマを（大洪水によって）沈めないよう祈願しそれを許された。

私は、更に主に、ウンマの者らが互いに殺し合うことがないよう祈願したが、アッラーはそれを許しては下さらなかった」

アーミル・ビン・サアドは彼の父から聞いて伝えている

彼は、アッラーのみ使いが、教友らの一団と共々おいでになるに出会った。

み使いは、その折、バヌー・ムアーウィヤモスクの側を通りかかった。

以下は前記ハディースと同内容である。

“最後の時”に関する預言者の話について

フザイファ・ビン・ヤマーンは伝えている

アッラーに誓って！
私の生聞いている時代から“最後の時”までの間に起ろうとしている全ゆる災難について私ほど知っている者はおらないでしょう。
といっても、アッラーのみ使いが、私だけに、内々にそれに関して話して下さり、他の誰にも話さなかったと言うわけではありません。
み使いが、その災難について話をなさった時の集会に私も出席したからです。
その時、み使いは、次のように言われました。
「“災難”には三種があり、それらから、いかなるものも免れることはできない。
それらの中には、暑い夏の熱風による災難があり、これには、大きな害をもたらすものと比較的小さいものかある」
フザイファはこの話に関連し「この集合に出席していた人々は、私を除き、もうこの世にはいない」と語った。

フザイファは語っている

アッラーのみ使いは、我々の前に立って、その場所で“最後の時”に至るまでに起る“災難”について、語るべきことを全てお話しになった。
記憶力の強い人々はその話を記憶にとどめたが、記憶できなかった者らは忘れ去ってしまった。
私の友人はそれらの話を記憶しているが、私は、それらの幾つかを忘れてしまった。
しかし、他の誰かが、それについて話してくれれば、丁度、普段には或る人の名を忘れていても顔を見れば思い出すように、私もそれらを思い出すことができる。

前記と同内容のハディースは、**アアマシュ**によっても伝えられる。

フザイファは伝えている

アッラーのみ使いは“最後の時”が近づく時に起ることに関して、私に語って下さった。
私は、それについて十分に質問したが、次のこと、即ち、“町から出て行くマディーナの人々は、どうなるのか”については、なにも質問しなかった。

前記と同内容のハディースは、**シュウバ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・ザイド（即ち、アムル・ビン・アフタブ）は伝えている

アッラーのみ使いは、私たちと共に、ファジュル（早朝）の礼拝を行なった。

その後、説教壇にのぼり、ズフル（午後）の礼拝時間がくるまで説教をなさった。

み使いは、説教壇を降り、午後の礼拝をなさったが、その後また説教壇にのぼってアスル（夕刻）の礼拝時間まで説教をなさった。

その時、み使いはまた、説教壇を降り礼拝なさったが、またつづけて説教壇にのぼり、太陽が沈むまで説教をなさった。

このようにしてみ使いは、過去に起った“災難”、また、将来起り得る“災難”についてお話しになったのであるが、私たちの中でこれらの話をよく記憶したのは、学識のある人たちであった。

災難は大波のように押し寄せることについて

シャキークは伝えている

フザイファは次のように語った。

私たちが、或る日、ウマルと一緒にいた時、ウマルは「アッラーのみ使いが言われた“災難”についてのハディースを、誰が最もよく記憶しているのか」と言った。

私が、この時「はい、私です」と答えると、ウマルは「お前は、なかなか勇気がある」とほめてから「どのように」と聞いた。

私は次のように話した。

「アッラーのみ使いは“人々に対する災難は、最初、その家族、財産、当人、子供たち、隣人たちに起る(注 1)。

ただし、それらに関連して犯した罪は、断食、礼拝、喜捨、それに善行を奨励し、非行を禁ずることなどで解消される”と言われました」

ウマルは、その時、「私が聞聞いたいのは、そのような小規模な災難についてではなく、海洋の大波のように起る災難についてである」と言った。

私は「信者の長よ、あなたは、それとは無関係です。

なぜなら、あなたとそれとの間の門が閉じられるからです」と言った。

ウマルは、この言葉に対し、「その門は、壊されるのか、それとも開かれることはないのか」と言った。

私は、「いや、門は壊されます」と答えた。

ウマルは「そうであるならば、もう、再び、閉まることはないであろう」と言った。

私たちはこの話に関連し、フザイファに「ウマルは、その門について知っていただろうか」とたずねた。

それに対し、彼は「はい、彼は知っていました。

それは、誰でも、夜の後に、朝が来るのを知っているように当然なことです。

私は、彼に、真正さに疑いようのないハディースを話したのです」と言った。

また更に、このハディースに関連し、シャキークは、次のように述べている。

「私たちは、フザイファにその門について直接には質問しなかった。

それで、マスルークに頼んで質問してもらった。

マスルークが、たずねるとフザイファは『その門はウマルのことを意味します。』と答えた。

(注 1)災害が家族と個々人のモラルの崩壊に端を発して広がって行くことを示している

(注 2)ウマルの死に寓意したハディースである。

ウマル歿後、ムスリム社会は徐々に混乱の度を深めて言った

フザイファによる前記と同内容のハディースは、別にも幾つかの伝承者経路で伝えられている。

フザイファは伝えている

ウマルは「誰か我らに“災害”に関するハディースを語ってくれる者はいないか」と言った。
以下は、前記ハディースと同内容である。

ジュンドブは伝えている

ジャラアの日（注）、私がそこへ行った時、男が一人坐っていた。
私が「今日、彼らは血を流すことだろう」と言うと、
その男は「アッラーに誓って！　そうはなるまい」と言った。
それで私は「いや、アッラーに誓って！　そうなりますよ」と言ったが、
その男は、また、「アッラーに誓って！　そうはなるまい」と繰り返した。
私はまた、それに対し「いや、アッラーに誓って！　そうなりますよ」と言ったが彼は、
更に、繰り返して「アッラーに誓って！　そうはなるまい」と言ってから、
「このことに関する、アッラーのみ使いのハディースを私は聞いたことがある」と述べた。
私は、この言葉を聞くと「あなたは、いやな同席者です。
アッラーのみ使いからハディースを聞いて、これに関して知っていながら、私があなたに朝方から反対している言葉を黙って聞いているとは！」と言った。
私は更に「それが初めから分かっていれば、苛立つことはなかったのに」と言って、彼の方にむき直り、この件について彼に質問した。
その彼は、フザイファ当人であった。

（注）ジャラアは、クーファ近郊の地名。
この日、クーファの住民はカリフ・ウスマーンに任命された知事サイード・ビン・アースに反抗して騒乱を起すところであった。
クーファの人々との合意で、アブー・ムーサー・アシュアリーが、改めて知事に任命されたため騒ぎは治まった

“最後の時”とユーフラテス河の金について

アブー・フライラは伝えている
“最後の時”は、ユーフラテス河が金の山（注）を露出しないかぎり起らない。
その金のため、人々は相戦うが、100 名のうち 99 名は殺される。
彼らは全て自分だけは助かる（そして、その金を所有できる）と語っていたのであるが。

（注）ユーフラテス河の豊かな水の利用によってもたらされる富を意味すると言われる
前記と同内容のハディースは、**スハイル**によっても別の伝承者経路で伝えられるが、それには「私の父は“もし、それ（金の山）を見ても近づいてはならない”と言った」と記されている。

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「“最後の時”はユーフラテス河が、金の宝を露出しないかぎり起ることはない。
その場所に行っても宝を取ってはならない」

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは、次のように言われた。
「ユーフラテス河は、程なく金の山を露出するであろうが、ここに行く者は、決してなにも取ってはならない」

アブドッラー・ビン・ハーリス・ビン・ナウファルは伝えている
私は、ウバイー・ビン・カウバと一緒に立止っていた。
その時彼は、「上層の人々でも、現世の目的についてはそれぞれ異っている」と言った。
私が、「当然です」と答えると、彼は、次のように語った。
「私は、アッラーのみ使いがこう言われるのを聞いたことがある。
即ち、ユーフラテス河は、程なく金の山を露出する。
人々はそれを聞くと、ここに群がり集まるが、宝を手にした者らは『もし、我々がこれを取ることを他の人々にも許すと、彼らは全部取って持って行くに相違ない』と言いだす。
結局、彼らは相戦うことになり、100 人のうち 99 人は殺される」
アブー・カーミルによるこのハディースの記述には「私とウバイー・ビン・カウブは、その時、ハッサーンの要塞の日陰のところに立っていた」との言葉がみられる。

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「イラクでは、金銭の単位に用いるディルハムや物量の単位カフィーズと言う言葉は用い

られなくなり、シリアでも同様にムッドやディーナールと言う言葉は禁じられる。
また、エジプトでもイルダブやディーナールと言う言葉は不用となる（注）。
かくして、あなたたちは、元通りになってしまう。
元通りになってしまう。
元通りになってしまう。
このことは、アブー・フライラの肉と血が証言するであろう」

（注）イラク、シリア、エジプトの人々は、イスラームに改宗するため人頭税を徴収されなくなる。
その結果金銭や物量用語は不要となるの意

コンスタンチノーブルの開城について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「“最後の時”は、ローマ人たちがアウマーク、もしくは、ダービク（注）に上陸するまで、起ることはないであろう。

その当時の地上で最良の兵から成る軍隊が彼らを迎えうつためにマディーナを出発する。

戦列を整えるとローマ人たちは、『我々と我々の中から捕虜を捕える敵（ムスリム）との間を狭めよ。

彼らと戦おう』と言う。

一方、ムスリムたちも『アッラーに誓って！

我々は決して退かずに戦う』と言う。

しかし、戦いが始まると、程なく、軍隊の三分の一の兵は逃げ去ってしまう。

このような彼らを、アッラーは決してお許しにならないであろう。

別の三分の一は戦死するが、彼らはアッラーの目からみても優れた殉教者である。

残りの三分の一は戦傷を負うこともなく勝利し、コンスタンチノーブルを占領する。

彼らが、剣をオリーブの木にかけ、戦利品を分配している時、シャイターン（悪魔）が大声をあげて「ダッジャール（偽救世主）が、お前たちの家族の住む土地をのっとったぞ」と叫ぶ。

それで、人々は彼と戦うため出発するが、すでに遅すぎ徒労に終る。

彼らがシリアに進んだ時、ダッジャールが現われるが、この時には彼らはまだ戦闘の準備中で、戦列を整えているところである。

礼拝の時がくると、マリヤムの息子イーサー（イエス）が天より下り聞いて礼拝の先導をする。

アッラーの敵はイエスを見ると、丁度、塩が水で溶けるように消え去ってしまう。

イエスが、彼をそのまま放置しておいたとしても滅び消え去るであろう。

しかし、アッラーは、彼を、イエスの手で殺させる。

イエスは槍についた彼の血を人々に示す」

（注）アウマーク、ダービク共々マディーナ近郊の地名。

別説では、シリアのアレッポ近郊の村落名とも言われる

ローマ人の数が最高となる時について

ムスタウリド・クラシィーは伝えている

彼はアムル・ビン・アースに「アッラーのみ使いは、“最後の時”はローマ人たちが最大の人口になった時起ると言われた」と話した。

アムルはこの時彼に「お前の言葉について、よく考えてみなさい」と言った。

彼が「み使いから聞いたことを述べただけです」と言うと、アムルは次のように語った。

「お前の言うことは正しいとしても、彼らは四つの特性をもっている。

彼らは災難に対して挫けずよく耐える。

困難があってもそれより立ち直るのが速い。

一旦、逃げてもまた攻撃してくる。

彼らはまた、困窮者や孤児、弱者の面倒をよくみてやる。

五番目に、彼らの優れている点は、彼らが王たちの圧政に反抗をすることである」

ムスタウリド・クラシィーは伝えている

私はアッラーのみ使いが「“最後の時”が起るのは、ローマの人口が最大になる時である」と言われるのを聞いた。

この言葉を耳にした、アムル・ビン・アースは、「お前がみ使いから聞いて人に伝えているハディースは、一体なにを意味するのか」と問い、

私が「み使いから聞いたままを伝えたのです」と答えると、

「お前の伝えたことは真実であろう。

しかし、彼らは、困難にも喜んで耐えるし、災難に対しても非常に強い人々である。

また彼らは、困窮者や弱者に対してよく面倒をみる人たちである」と言った。

ダッジャールとローマ軍との戦いについて

ユサイル・ビン・ジャービルは伝えている

赤色の（砂を伴った）嵐がターファに吹き荒れた頃、なにももたぬ身一つの男がやって聞いて「アブドッラー・ビン・マスウードよ、いよいよ“最後の時”が始まった」とだけ言った。

これに対し、彼（アブドッラー・ビン・マスウード）は、なにかに寄りかかりながら座ったまま、次のように言った。

「“最後の時”が始まるのは、人々が遺産を分配しなくなり、また、戦利品を喜ばなくなる状態（注）になった時である」

その後、彼は、シリアの方角をこのように指差しながら「敵は、イスラーム信仰者たちと戦うため力を結集し、イスラーム信仰者たちも彼らに対抗するため総力を結集する」と言った。

私がこの時、「敵とはビザンチン・ローマのことですか」と聞くと「その通り」と答えてから、また、次のように話した。

「両軍間で凄まじい戦闘が始まり、ムスリム軍は勝利なくしては帰らない決死隊を編成する。

両軍は夜になるまで戦うが、相方共、勝利を得ることなく引き上げる。

決死隊は全滅したため、ムスリム軍は、新たに、死を賭して戦い勝利なくしては帰らない分隊、つまり、決死隊をまた編成する。

戦闌は再開され夜まで続くが、どちら側も勝利を得ることなく引き上げる。

決死隊は全滅したため、ムスリム軍はまた、勝利しないかぎり帰らない決死隊を新たに編成する。

戦闘はまた、夕刻までつづけられるが、両軍共、勝利することなく引き上げる。

ムスリム軍の決死隊は全滅する。

戦いの四回目、ムスリムの残存者による新たな分隊が編成される。

ここに至ってアッラーは、ムスリム軍に、敵を徹底的に殲滅するようにと布告なさる。

そのためムスリム軍は、かつてみられなかったほど凄まじい戦闘を繰り広げる。

それは、たとえば、上空の鳥が、軍隊の両側の間を飛翔しきれず、端に達する前に疲労して逐死するほどにも広大な地で大規模に展開される戦闘である。

最後に数えると、生き残る者は 100 人に一人と言う状態になる。

このような戦争によって得た戦利品をどうして喜ぶことができようか。

また、これほどまで戦死者が多いと言うのに、どのように遺産が分配されると言うのか。

このような状態の時、人々は、これよりも更に恐ろしい災難について耳にすることになる。

それは、「ダッジャールが、彼らの子供らの住む地域を占領した」と言う叫び声である。

人々は手にしているものを投げ出したまま、これと戦うため出発する。

彼らは、10 名の騎馬斥候隊を派遣する。

アッラーのみ使いは、これら斥候隊員について『私は、彼らの名前も、彼らの先祖の名も、また、彼らが乗った馬の色も知っている。
彼らは、当時の地上における最良の騎馬兵たちである。
（もしくは、最良の騎馬兵の仲間たちである）』と言われた」

ユサイル・ビン・ジャービルは伝えている
私は、イブン・マスウードの処にいたが、その時、赤い砂嵐が吹いた。
以下は前記ハディースと同内容である。

ユサイル・ビン・ジャービルは伝えている
私は、アブドッラー・ビン・マスウードの家にいたが、その日、クーファに赤い砂嵐が吹きすさんだため、家の中はほこりだらけになった。

ダッジャール出現前の遠征について

ナーフィウ・ビン・ウトバは伝えている

我々が、アッラーのみ使いに従って遠征途上にあった時、西方からみ使いの処に羊毛製の衣服を着た人々がやって聞いて、或る岩山の近くにとどまった。

そして後、み使いの座処に来て会談した。

私はその時、み使いが、彼らに襲撃されないよう、み使いと彼らの間に立つべきであると考えた。

多分、秘密の話が行なわれているだろうとも思ったが、ともあれ、私は行って彼らとみ使いとの間に立った。

その折、私は指折り数えてみて、み使いが話した四つの言葉を記憶した。

それは「あなたたちがアラビアの地を攻撃すれば、アッラーはその征服を可能にして下さる。

その後、ペルシャを攻めれば、アッラーはそれを可能となさる。

その後、更に、ローマを攻めれば、アッラーはそれの征服も可能となさる。

そして、その後になってダッジャールを攻撃すれば、アッラーは彼を征服することを可能ならしめて下さる」と言う言葉であった。

これに関連しナーフィウは、ジャービルに「私たちは、ダッジャールの出現はローマ征服以後のことであると思った」と述べている。

“最後の時”の兆候について

フザイファァ・ビン・ウサイド・ギファーリーは伝えている

私たちが議論していた処に預言者が突然おいでになり「なにについて話しているのか」と言われた。

私たちが「“最後の時”についてです」と答えると、預言者は「それが起る前には、10 の兆候が現われる。

それらは、煙霧の発生（注 1）、ダッジャール、人に話しかける獣（注 2）の出現、太陽が西から昇ること、マリヤの息子イーサーの降臨、ゴグとマゴグの侵略、三つの地域での大地の陥没、即ち、東方での陥没、西方での陥没、更にアラビア半島での陥没、そして、最後は、イエメンで大火が発生し人々が集合場所に避難させられることである」と言われた。

（注 1）これに関連する啓示は、次の通りである。

「待っていなさい。天が、明瞭な煙霧を起す日まで」（クルアーン第 44 章 10 節）

（注 2）これに関連してクルアーンには、次の言葉がみられる。

「彼らに対し、御言葉が実現される時、われは大地から一獣を現わし、かれらに“人間たちは、本当に、わが印を信じないでいた”と語らせるであろう」（第 27 章 82 節）

フザイファァ・ビン・ウサイドは伝えている

預言者が部屋におられ、私たちがその部屋の下にいた時のことであるが、預言者は、私たちの処に下りて来て「なにを話しているのか」と聞かれた。

そして、私たちが「“最後の時”についてです」と答えると、次のように言われた。

「“最後の時”が近づくと、10 の兆候が現われる。

それは、東方での大地の陥没、西方での陥没、アラビア半島での陥没であり、煙霧の発生、ダッジャール、大地からの一獣、ゴグとマゴグなどの出現であり、太陽が西から昇ること、（イエメンの）アデンにある穴から大火が発生し、人々を（町より）しめ出すことなどである。」

これに関連し、シュウバは、次のように述べている。

「このハディースは、アブー・トゥファイルを通じアブー・サリーハによっても伝えられているが、それには、預言者が言及してない 10 番目の兆候として『マリヤの子イエス・キリストの降臨』が記され、また『大風が人々を海に吹き落す』と言う言葉も記されている」

アブー・サリーハは伝えている

アッラーのみ使いが、階上の部屋におられた時、私たちはその下で話をしていた。

以下は前記ハディースと同内容であるが、シュウバは、次の言葉を加えている。

「私は、み使いが、“その火は人々の行く処にも及び、人々が昼寝の休息をしている処に

も燃え広がる”とも言われたと思う。」

シュウバは、また、次のようにも述べている。

「このハディースは、アブー・トゥファイルが、アブー・サリーハから聞いて語ったものであるが、み使いの言葉であるかどうか確められない。

しかしながら、これら両人の中の一人は、『マリヤの子イエスキリストの降臨』を記し、別の一人は『大風が人々を海に追い落す』と記している」

アブー・サリーハは伝えている

私たちが話しをしていた時、アッラーのみ使いが、階上から私たちの方を見下ろした。

以下は前記ハディースと同内容である。

ヒジャーズの大火について

アブー・フライラは伝えている

“最後の時”が迫ると大火がヒジャーズの地に発生し、その火煙はブスラー（注）のラクダの首を照らすであろう。

（注）マディーナとダマスカスの間にあるシリアの町の名

マディーナの居住領域について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「“最後の時”が迫る頃には、マディーナの居住地城はイハーブ、または、ヤハーブ（注）まで拡大されていることだろう」

これに関連し、ズバイルがスハイルに「これらの地はマディーナからどれほど離れているのか」と聞いたところ、スハイルは「しかじかのマイルである」と答えた。

（注）両方共マディーナ近郊の地名

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「（“最後の時”が迫る前には）飢饉は、早魅によってひき起されるのではなく、雨また雨の流水によってひき起される。

そのため、地面からなにも生え出なくなる」

災害が東方から起ることについて

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、東の方に顔をむけて、こう言われた。

「みなさい！

災難はこの方角から起る。

災難はこの方角から起る。

シャイターンの角はこの方角より現われる」

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、（妻の一人）ハフサの家の門の処に立ち、東の方を指差しながらこう言われた。

「災害は、シャイターンの角が現われるこの方角から起る」

み使いは、この言葉を二度または三度繰り返された。

ウバイドッラー・ビン・サイードは、これに関連し「み使いは、アーイシャの家の門の処に立っておられた」と記している。

サーリム・ビン・アブドッラーは、彼の父から聞いて伝えている

アッラーのみ使いは、東方にむかってこう言われた。

「災害は、まことにこの方角より起る。

災害は、まことにこの方角より起る。

災害は、まことにこの方角より起る。

この方角からシャイターンの角が現われるのである」

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、アーイシャの家から出て来てこう言われた。

「不信仰者らが、頭を出すのはこの方角である。

ここからシャイターンの角が現われるのである」

この方角とは、東を意味する。

イブン・ウマルは伝えている

私は、アッラーのみ使いが、東方を指差しながら「まことに、災難はこの方角より起る。

まことに、災難はこの方角より起る」と三度繰り返し、

「この方角からシャイターンの角が現われる」と言われるのを聞いた。

イブン・フダイルは、彼の父の言葉を次のように伝えている

私（イブン・フダイルの父）は、サーリム・ビン・アブドッラー・ビン・ウマルが、次のように話すのを聞いた。

「イラクの人々よ、あなたたちは・大罪を犯しながら（注 1）、小罪についてあれこれ気にしてたずねるとは、おかしいではありませんか！

ところで、私は父、アブドッラー・ビン・ウマルから聞いたのですが、アッラーのみ使いは、東方を指差しながら、次のように言っておられます。

『まことに災難は、この方角からやってくる。

この方角からシャイターンの角が現われる。

その時には、あなたたちは（錯乱して）互の首を切り、殺し合うことだろう。

だが、モーゼがファラオの一族の者を誤まって殺した時、アッラーは、彼に次のように言われた。

“またあなたは人を殺した。

だがわれ（アッラー）は、苦悩からあなたを救い、いろいろとあなたを試みた”（クルアーン第 20 章 40 節）（注 2）』」

（注 1）預言者の孫フサイン殺害を意味すると言われる

（注 2）誤まって罪を犯しても、丁度モーゼの場合のように、アッラーはそれをお許しになるの意

最後の時とダウス族の女たちに関して

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「“最後の時”が近づくとダウス族の女たちが、ズー・バラサのまわりに行く様子が見られることだろう（注 1）」と言われた。

ズー・バラサは、タバーラ（注 2）にあり、イスラーム以前の時代、ダウス族の者らが崇拝した偶像があった。

（注 1）“最後の時”が近づくとアラブ人の一部は多神信仰に逆戻りするの意味

（注 2） タバーラは、イエメンの一地名

アーイシャは伝えている

私は、アッラーのみ使いが「夜と昼が（交互に）つづくかぎり、人々によってラート神とウッザ神が崇拝されることはない」と言われるのを聞いた。

私はこの折「み使い様、アッラーは次の御言葉、即ち**「彼こそは、導きと真理の教えをもって使徒を遣わし、たとえ、多神教徒たちが忌み嫌おうとも、全ての宗教の上にそれを表わされる方である」**（クルアーン第 9 章 33 節）を啓示された故、私は、偶像崇拝時代は終り、再び、それは起らないと思います」と言った。

すると、み使いは「アッラーの御意志次第で起り得ることです。

その時には、アッラーは香りのよい風を送り、それによって、一粒の重さほどでも心にアッラーへの信仰を持つ者は全て死に果てるが、なんらの善心をもたぬ者らだけは生き残ることになり、彼らは先祖の信仰に逆戻りするのです」と言われた。

前記と同内容のハディースは、**アブドル・ハミード・ビン・ジャウファル**によっても、別の伝承者経路で伝えられている。

墓にとどまることを願う男について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。「“最後の時”が近づくと、他人の墓の側を通りかかる男は『この場所が、私の住む家であればよいのに』と言うであろう」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「私の生命を御手にしている方に誓って！

この世が終りになる時には、墓の側を通りがかる男がその墓をなでながら『この墓に入っている人と一緒にいたいものだ』と言うであろう。

ただし、それは信仰上の理由からではなくこの世の災害から逃れるためであるが」

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。

「私の生命を御手にもつ方に誓って！

殺人者がどうして殺人を行なったのかわからず、犠牲者がなぜ犠牲になったのかを知らないほど人々の上に混乱した時代が来るであろう」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「私の生命を手にする方に誓って！

この世が終りになる頃には、殺人者には殺人の理由がわからず、殺された者にも殺された理由がわからなくなるであろう。

『どうして、そのようなことが起るのか』と聞かれるが、それに対しては『混乱のためである。殺人者も被害者も火で焼かれる』と告げられる」

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。

「カーバ神殿は、脛の小さいアビシニア（エチオピア）人によって破壊されるであろう」

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「小さな脛をもつエチオピア人らが、アッラーの館（神殿）を破壊するであろう」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「“最後の時”が迫る頃には、カフターン族の或る人物が現われ、人々を杖で駆り立てるであろう」

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。

「昼と夜が終りとなる頃には、ジャフジャーフと呼ばれる男が、玉座を占拠するであろう」

これに関連し、イマーム・ムスリムは、「ジャフジャーフとはアブドル・マジード族の四人兄弟のことで、それぞれの名は、シャリーク、ウバイドッラー、ウマイル、アブドル・カビールである」と述べている。

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。

「“最後の時”が迫る頃には、あなたたちは、打ち金付きの楯のような顔（注）をした人々と戦うことであろう。

また、“最後の時”が迫ると、あなたたちは、毛で作った靴をはいた者らと戦うことであろう」

（注）兜をつけた人の意

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「“最後の時”は、あなたたちが毛で作った靴をはき、顔付きが金具を打った楯のような人々と戦った後に起るであろう」

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。

「“最後の時”が迫る頃には、あなたたちは、毛で作った靴をはいた人々と戦うであろう。

また“最後の時”が迫る頃には、あなたたちは、目が小さく獅子鼻をした人々と戦うであろう」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「“最後の時”が間近になる頃には、ムスリムはトルコ人たちと戦うであろう。

彼らは、打ち金付きの楯のような顔をし、毛織りの衣服を着、毛で作った靴をはいて歩く

人（注）たちである」

（注）チンギスハーンやチムールの侵攻を指すとも言われる

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「“最後の時”が目前に迫る頃、あなたたちは、毛製の靴をはき、打ち金の楯のような顔付きの飲酒のため顔を赤くした目の小さい人々と戦うであろう」

アブー・ナドラは伝えている

我々がジャービル・ビン・アブドッラーの処にいた時、彼は「イラクの人々は、彼らのカフィーズやディルハム（食品や金銭の呼称基準）を送らなくなるかも知れない」と言った。

我々が「それはどうしてですか」と聞くと、彼は、「非アラブ人たちが、それを邪魔するからです」と答えた。

彼は、また「シリアの人々は、彼らのディーナールやムッド（金銭や食品の呼称基準）を送らなくなるかもしれない」と言った。

我々が「それはどうしてですか」と聞くと、彼は「ローマ人たちが、邪魔するからです」と答えた。

ジャービルは、一寸の間沈黙したが、その後、次のように話した。

「アッラーのみ使いは、“私のウンマの最後の時代に、一人のカリフ （支配者）が現われるが、彼は、人々に、数えもせずに金銭を両手一杯づつ与えるであろう”と言われた」

口述者の一人、ジュライリーは、「これに関連し、アブー・ナドラ及びアブー・アラーウに『そのカリフとは、ウマル・ビン・アブドル・アズィーズのことですか』と聞いたが、両人共、『いや、違う』と答えた」と伝えている。

前記と同内容のハディースは、**サイード**（ジュライリー）によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・サイードは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「あなたたちのカリフとして、人々に両手一杯の富を数えもせずに与えるものが現われるであろう」

アブー・サイードと**ジャービル・ビン・アブドッラー**は伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「最後の時代には、富を数えもせずに分配するカリフが現われるであろう」

アブー・サイードによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・マスラマは伝えている

私は、アブー・ナドラからアブー・サイード・フドリーが次のように語ったと聞いた。
私（アブー・サイード・フドリー）よりももっと優れた人が、次のように話してくれた。
「アッラーのみ使いは、（ハンダクの戦いの前）塹壕（ハンダク）を掘っていたアンマールが額の汗をぬぐっている時、
彼に「スマイヤの息子よ（あなたは災難にまきこまれ、その結果）叛乱グループは、あなたを殺すであろう」と言われた（注）」

（注）アンマール・ビン・ヤースィルは、スィッフィーンの戦いで、アリー側に加わり戦死した

アブー・マスラマによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。
なお、それには、「“私よりもっと優れた人物”とは、アブー・カターダのことである」と記され、み使いの言葉も「“なんと悲しいことか、スマイヤの息子よ”と言う表現である」と記されている。

ウンム・サラマは伝えている

アッラーのみ使いは、アンマールに対し、「叛乱グループがあなたを殺すであろう」と言われた。

ウンム・サラマによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

ウンム・サラマは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。「叛乱者のグループがアンマールを殺すであろう」

アブー・フライラは伝えている

預言者は、「このクライシュ族の者たちは、私のウンマの人々を殺すであろう」と言われた。
この時、教友らが「その場合、どうすべきであると我々に命令なさるのですか」と聞くと、み使いは「ウンマの人々が、彼らを避ければよいだろうに」と言われた。

前記と同内容のハディースは、**シュウバ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。
「キスラー（ペルシャの王）が死ぬと、その後、キスラーになる者はいない。
カイサル（ローマ皇帝）が死ぬと、その後、カイサルになる者はいない。

私の生命を御手にする方に誓って！
あなたたちは、彼らの宝物をアッラーの道のために用いることであろう」

前記と同内容のハディースは、**ズフリー**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

ハンマーム・ビン・ムナッビフは伝えている
これは、アブー・フライラがアッラーのみ使いより聞いて伝えた多くのハディースの中の一つである。
アッラーのみ使いは言われた。
「キスラーが滅びると、その後、キスラーは存在しなくなる。
カイサルが滅びると、その後、カイサルは存在しなくなる。
あなたたちは、彼らの宝物をアッラーの道のため分配することになるだろう」

ジャービル・ビン・サムラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
以下は、前記アブー・フライラによるハディースと同内容である。

ジャービル・ビン・サムラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「ムスリムたちのグループのため、もしくは、信仰者たちのグループのため、白い王宮（注）にあるキスラー家の宝物は開放される」

（注）マダーイン（バグダードの南）の王宮を指すと言われる

ジャービル・ビン・サムラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは、「一方は陸地で他方は海に接している町（コンスタンチノーブル）について、なにか聞いたことがあるか」と言われた。
人々が「いいえ、ありません」と答えると、み使いは「“最後の時”が近づく頃には、七万のイスラーイールの民（バヌー・イスハーク）（注）がここを攻撃する。
彼らはここに上陸すると、武器を手にして戦うことも矢を射込むこともせず、ただ、アッラーの他に神はない！
アッラーは偉大なり！
と叫ぶだけであるが、それによって町の一角はくずれ落ちるであろう」と言われた。

このハディースに関連し、口述者の一人サウルは、次のように述べている。
「私は、み使いがこう言われるのを聞いた。
『海に面した二角がくずれおちる。
次いで、彼らは二度目にアッラーの他に神はない！
アッラーは偉大なり！
と叫ぶ。
するとまた、別の一角がくずれおちる。
更に彼らは、三度目に、アッラーの他に神はない！
アッラーは偉大なり！
と叫ぶ。
するとそれによって門が開かれる。
彼らは中に入り戦利品を集めて仲間同士でそれを分配し合う。
しかし、この時、「ダッジャールが現われた」と言う叫び声を聞く。
そのため、彼らはここに全てを残したまま、ダッジャールと戦うため帰途につくのである。』」

（注）イスラーイールの民（バヌー・イスハーク）と記されるが、アラブの民（バヌー・イスマーイール）の意味であろう

前記と同内容のハディースは、**サウル・ビン・ザイド・デブリー**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

イブン・ウマルは伝えている
預言者は言われた。
「あなたたちは、ユダヤ人たちと戦い彼らを殺すが、その時には、岩石ですらも、
『ムスリムよ、きなさい！
ここに、ユダヤ人が隠れている。
殺しなさい！』言うであろう」

前記と同内容のハディースは、**ウバイドッラー**によっても別の伝承者経路で伝えられるが、これには「私の背後にユダヤ人がいる」との言葉が記されている。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「あなたたちとユダヤ人たちは相戦うが、その時には石すらも
『ムスリムよ、私の背後にユダヤ人がいる。来て殺せ！』と告げるであろう」

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「ユダヤ人たちがあなたたちと戦うが、あなたたちは勝利を得る。

その戦いの時には、石すらも『ムスリムよ！　私のうしろにはユダヤ人がいる。

彼を殺せ』と告げるであろう」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「“最後の時” は、ムスリムたちがユダヤ人たちと戦い彼らを殺した後に起る。

その戦いの折には、ユダヤ人たちは石や木の背後に隠れるが、その石や木すらも『ムスリムよ！　アッラーのしもべよ！　ユダヤ人が一人私のうしろにいる。

来て彼を殺しなさい』と告げるであろう。

ただし、ガルカドの木（注）はなにも告げない。

なぜならそれはユダヤ人の木だからである」

（注）バイト・ル・マクデス（エルサレム）近郊に自生するとげの木

ジャービル・ビン・サムラは伝えている

アッラーのみ使いは「“最後の時”が目前に迫る頃には、嘘言者が多くなる」と言われた。

これに関連し、アブー・アフワスは次のように語った。

「私は、ジャービルに『み使いから直接聞いたのですか』とたずねた。

すると、彼は『そうです』と答えた」

前記と同内容のハディースは、**シマーク**によっても別の伝承者経路で伝えられるが、それには次の言葉もシマークの言葉として付記されている。

「ジャービルは、『彼ら（ダヤ人たち）に気をつけよ』と私の兄弟に語っていた」

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。

「“最後の時”が迫る頃、30 人ほどの詐欺師（ダッジャール）や嘘つきが現われる。

そして、彼らは、それぞれ『私は、アッラーのみ使いである』と主張する」

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている

イブン・サイヤードについて

アブドッラーは伝えている

私たちがアッラーのみ使いと一緒に、たまたま、子供らの側を通りかかった時、イブン・サイヤードがその中にいた。
子供らは立ち去ったが、彼はそこに座ったままだった。
み使いは、彼が子供らと一緒にいるのを好まない様子で、この時彼に「お前の両手がほこりだらけになるように！」と言われてから「お前は、私がアッラーのみ使いであることを証言してないのか」と言われた。
これに対し彼は、「はい、していません。
それよりあなたこそ、私がアッラーのみ使いであることを証言なさるべきです」と言った。
この時、ウマル・ビン・バッターブは「み使い様、彼を殺すことをお認め下さい」と言ったが、み使いは「彼が、もしあなたが思っているような男、即ち、ダッジャールであるならば、あなたには手に負えず、彼を殺すことはできないだろう」と言われた。

アブドッラーは伝えている

私たちが預言者と共に歩いていた時、たまたま、イブン・サイヤードの側を通りかかった。
アッラーのみ使いは、その折、彼に「私は、今、心に或る事柄を思言うかべているがそれがなにか言い当てなさい」と言われた。
そして、彼が「それは、ドゥフ（注）です」と答えると、
み使いは「行きなさい！　お前の能力はその程度でしかあるまい」と言われた。
この時、ウマルが、「み使い様、彼の首を落すよう命じて下さい」と言ったが、
み使いは「ほっときなさい！　もし彼があなたたちの恐れる者、即ち、ダッジャールであるとすれば、あなたたちには彼は到底殺せない」と言われた。

（注）ドゥハーン（煙霧）のことであるが、彼は明確には言い得なかった。
なお、このイブン・サイヤードはカーヒン（呪術師）の一人とみられている

アブー・サーイドは伝えている

アッラーのみ使い及びアブー・バクルやウマルらは、マディーナの路上で、イブン・サイヤードに出会った。
この折、み使いは、「お前は私が、アッラーのみ使いであると証言するか」と言われたが、これに対し彼は「あなたは、私がアッラーのみ使いであると証言しますか」と言い返した。
み使いは、この時「私は、アッラーと天使たちと聖典を信じている。
一体、なにがお前には見えるのか」と言われた。
これに対彼が「私には、水の上の玉座がみえます。」と答えると、み使いは更に「お前に見

えるのは、海上にあるイブリース （悪魔）の玉座であろう。
他にもなにか見えるか」と言われた。
彼はこれには「正直者二人と嘘付きが一人、もしくは、嘘付きが二人と正直者一人が見えます」と答えた。
み使いは「彼はなにかを混同している。彼を去らせなさい」と言われた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーの預言者は、イブン・サーイド（注）に出会った。
その時、アブー・バクルやウマルも一緒だった。
イブン・サイードは子供らを連れていた。
以下は、前記ハディースと同内容である。

（注）イブン・サイヤードのこと。
原文では、両名前が用いられている

アブー・サイード・フドリーは伝えている

私は、イブン・サーイドをマッカに連れて行った。
この折、彼は「私をダッジャールであると思っている人々が、なんと大勢いることだろう！
アッラーのみ使いが、ダッジャールには子供ができないと言われたのを聞きませんでしたか」と言った。
私が、「聞いたことがある」と答えると、彼は「しかし、私には子供がいます。
み使いが『ダッジャールは、マッカにもマディーナにも入れない』と言われたのを聞きませんでしたか」と言った。
私は、それにも「聞いたことがある」と答えた。
すると彼は「私は、マディーナに生れました。
そして、今、こうしてマッカに行こうとしています」と言った。
しかし、こう述べていなから、彼は最後に「アッラーに誓って！　私は“ダッジャールの生誕地、住居、そして、今彼がどこにいるか知っています」と言った。
このような彼の言葉は、彼の正体を知ろうとする私の心をひどく混乱させた。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

イブン・サーイドが私に話したことは、私を困惑させた。
彼は次のように言った。
「私は、見知らぬ他人がなにを言おうと許すことはできます。
しかし、ムハンマドの教友よ！
あなたたちまで私をダッジャールと考えるとは！

一体、私とあなたたちの間になにがあったと言うのですか！
アッラーの預言者は、ダッジャールはユダヤ人だと言いませんでしたか。
私はムスリムです。
預言者はまた、ダッジャールには子供はできないと言いましたが、私には子供がいます。
更に、預言者は、アッラーはダッジャールがマッカに入ることを禁じたと言いましたが、私はマッカで巡礼を行ないました」
イブン・サーイドがこのように話した時、私はほとんど彼の言葉に同情するところであった。
しかしながら、彼は「私は、ダッジャールがどこにいるか知っているし、彼の父母についても知っている」と語り、
更に「あなたがもしダッジャールと同一人物であるとすれば、それを喜ばしいと思いますか」と言われた時、「もし、そのような言い方をされても、私は拒否はしません」とも答えたのであった。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

私たちは、巡礼（ハッジ）、または、ウムラを行なうために出発したが、その時、イブン・サーイドも一緒だった。
或る処に滞在した時、他の人々は出かけ私と彼だけが残された。
私は、その時、彼がダッジャールであると噂されているのを知り、非常な恐しさを感じた。
（ともあれ）、この時、彼はかばんをもって聞いて、私のかばんの傍に置いた。
私が「ひどい暑さだ。
そのかばんは、あの木の下に置いた方がよいのではないか」と言うと、彼はその通りにした。
私たちの処に羊の群が寄って聞いた時、彼は出て行って、ミルクの一杯入った容器をもって戻り「アブー・サイードよ、飲みなさい」と言った。
私はこの時、「非常に暑いため、ミルクも熱くなっている」と言ったが、本心では、彼の手でしぼられたミルクを飲みたくなかった。
また、彼の手からミルクを受け取るのもいやだった。
その時、彼はこう言った。
「アブー・サイードよ、私は、私について人々が噂していることに抗議するため、ロープをとって木にかけ自殺しようかとも悩みました。
アブー・サイードよ、アッラーのみ使いのハディースについて無知な者は多いが、あなたたちは違います。
アンサールの人々よ！
あなたたちはみ使いのハディースについて、最もよく知っている人々ではありませんか！
み使いは、かつて『ダッジャールは不信仰者である』と言われなかったですか。
それに対し、私はムスリムです。

み使いは、また『ダッジャールには、生殖能力がなく子供はできない』と言われなかったですか。
それに対し、私にはマディーナに残してきた子供らがいます。
更にみ使いは『ダッジャールは、マディーナにもマッカにも入ることはできない』と言われなかったですか。
それに対し、私はマディーナからきて、今、マッカに行こうとしています」
私（アブー・サイード）は、彼の弁明をほとんど納得しかけたが、彼が更に「私は。ダッジャールがどこで生れ、今、どこにいるかを知っています」と言うのを聞いた時、
彼に対し「お前は、一日中、嘆き暮し、滅んでしまえばよい！」と言った。

アブー・サイードは伝えている
アッラーのみ使いは、イブン・サーイドに「天国の土はどんなものか」と聞いた。
すると彼は「アブー・カーシムよ。それは白い、上質のじゃこうにも似た土です」と答えた。
み使いは「その通りである」と言われた。

アブー・サイードは伝えている
イブン・サイヤードは、預言者に天国の土についてたずねた。
それに対し預言者は、「真白で、純粋なじゃこうのような土である」と言われた。

ムハンマド・ビン・ムンカデルは伝えている
私が会った時、ジャービル・ビン・アブドッラーは、アッラー誓いを立て、「イブン・サーイドは、ダッジャールである」と述べていた。
私が、この時彼に「アッラーに誓ってそう言うのですか」と問うと、彼は「ウマルは預言者の前でこのようにして誓ったが、預言者はそれを否認なさらなかったと聞いている」と答えた。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている
ウマル・ビン・ハッターブは、一群の人々と共にアッラーのみ使いと一緒に、イブン・サイヤードの処へ行った。
イブン・サイヤードは、バニー・マガーラの城塞跡の近くで子供らと遊んでいたが、まだ当時は、成人期に近い若者にすぎなかった。
この時、み使いが手で彼の背中を打つまでは、み使いがそこに来ていることにも彼は気づいていなかった。
その折、み使いは彼に「お前は、私がアッラーの使徒であると証言しないのか」と言われたが、
彼はそれに対し、み使いの方をみてから、「私はあなたが文盲の使徒であることを証言し

ます」と述べ、
そして後「あなたは、私がアッラーの使徒であると証言しないのですか」と言った。
み使いは、それを拒否し、「私は、アッラーとその使徒たちを信じている」と言われ、次いで彼に「今、お前になにが見えるのか」と聞かれた。
その時、彼は「時には正直な人、また、時には嘘つきが（私の想念の中に）現われます」と答えた。
み使いは「お前（の想念）は混乱している」と述べてから「私は今、或ることを心に思いうかべているが、お前にはそれを隠している。
（それがなにか言いなさい）」と言われた。
「それは、ドゥフでしょう」と彼は答えたが、その言葉を聞いてみ使いは「行きなさい。
お前の能力は、その程度でしかあるまい！」と言われた。
ウマル・ビン・ハッターブは、この時、「み使い様、彼の首を、切り落すよう命じて下さい」と言ったが、
み使いは「もしも、彼が、“最後の時”に現われる者、即ち、ダッジャールと同一人物であるとすれば、あなたには彼に打ち勝つことはできないであろう。
また、もし彼がダッジャールでないならば、彼を殺すのはよくない」と言われた。

アブドッラー・ビン・ウマルはこのハディースに関連し、更に次のように伝えている。
その後、アッラーのみ使いとウバイー・ビン・カウブ・アンサーリーは、イブン・サイヤードがいるなつめやしの木の方に行かれた。
み使いはその木に近づくと、彼が気づく前に木の幹の背後に身を隠し、彼がなにを話すのかひそかに聞こうとなさった。
み使いは、その時、彼がベッドの上で毛布をかぶったまま横になりながら、なにかぶつぶつつぶやいているのをごらんになった。
この時、彼の母親は、み使いがなつめやしの木の幹の背後におられるのをみかけ、彼に「サーフ（イブン・サイヤードの名）よ、ムハンマド様が聞いておられる」と告げた。
そのため、彼はとび起きてしまった。
み使いは、この折、「もしも、彼女が、彼を独りにしておいたら、（彼についての様々のことが）はっきりわかったろうに！」と言われた。
アブドッラー・ビン・ウマルは更にまたこう伝えている。
アッラーのみ使いは、人々の前に立ち上り、アッラーを適切な言葉で讃美なさった。
そしてその後、ダッジャールについて言及し、つぎのように言われた。
「まことに私は、あなたたちに警告する。
ダッジャールに対してはこれまで、全ての預言者が人々に注意するよう警告して聞いた。
預言者ノアですら人々に警告したのである。
私は、しかし、あなたたちに、これまでの預言者が話さなかったことを述べたいと思う。

それは、ダッジャールが片眼であると言うことです。
それに対し、アッラーは片眼ではありません。
このことをあなたたちは十分知っておかねばなりません。」
これに関連し、イブン・シハーブは、次のように伝えている。
ウマル・ビン・サービト・アンサーリーが、アッラーのみ使いの教友らの或る人たちから聞いたところによると、アッラーのみ使いは、ダッジャールについて人々に警告した日に「ダッジャールの両眼の間には、不信仰者（カーフィル）と言う言葉が記されている。
彼の行動を嫌悪する者は誰でもそれを読むことができる。
また、信仰者全てはそれを読むであろう」と言われた。
更にまたみ使いはこの時、「あなたたちの誰一人として"死"の前に主に会える者はいないことを、よく心得ておきなさい（注）」と言われた。

（注）ダッジャールを主に比肩してはならないと言う警告である

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、教友らの一群共々お出かけになったが、その中には、ウマル・ビン・ハッターブもいた。
一同は、バニー・ムアーウィヤの城塞近くで子供らと遊んでいる、丁度、青年期に達したばかりの若いイブン・サイヤードをみかけた。
以下は、前記ハディースと同内容であるが、これには、「もしも、彼の母親が、なにかぶつぶつ述べている彼をそのまま独りにしておいてくれたならば、彼に関する様々なことがはっきりしたであろうに」と言う言葉も記されている。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、ウマル・ビン・ハッターブを含む教友らのグループ共々お出かけになったが、その折、たまたまイブン・サイヤードが、バニー・マガーラの要塞の近くで子供らと遊んでいるところを通りかかった。
その頃、イブン・サイヤードは、まだ、一介の若者にすぎなかった。
以下は、前記ハディース内容と変らない。

ナーフィウは伝えている

イブン・ウマルは、マディーナの路上で、イブン・サーイドに出会った。
この時、イブン・ウマルは、なにかを言って彼を怒らせてしまった。
彼の怒りは凄まじく、そのため道が通れなくなるほどであった。
イブン・ウマルは、預言者の妻ハフサの家行き、この事を話した。
すると彼女は、「あなたにアッラーの慈悲がありますように！

しかし、また、どうしてイブン・サーイドを刺激するようなことを言ったのですか。
『ダッジャールが姿を現わすのは怒りに駆られた時である』とアッラーのみ使いが言われたのを知らなかったのですか」と言った。

ナーフィウは伝えている

彼がイブン・サイヤードについて話していた時、イブン・ウマルは「私は、彼に二度会った。」と語り、次のように話した。
「彼と会ったのち、私（イブン・ウマル）は、彼の友人の一人に『あなたたちは、彼が、ダッジャールであると信じているのか』と聞いた。
すると彼は、『アッラーに誓って！　違う』と答えた。
それで私は『あなたは正直に話していない！
アッラーに誓って！
あなたたちの一人は私に、ダッジャールは多くの財産や子供をもつまでは死ぬことはないと述べたが、今日、彼について人々は、そのように噂しているではないか』と言った。
この時、イブン・サイヤードも私たちの話に加わったが、そのあと、私は彼の処を辞した。
その後、私はまた二度目に彼に会った。
その時、彼の片目が腫れあがっていたので、私は『目をどうかしたのか』と聞いた。
彼が『わからない』と答えたので、私が『目は頭についているのに、どうしてわからないのか』と言うと、彼はそれに対し『アッラーは、もしお望みになれば、あなたのこの杖の中にさえも、目をお創りになる方です』と言った。
そのあと、私は、彼がロバのいななくような奇妙な声を発するのを聞いた。
私の教友の一人は、その時、私は、手にしていた杖で彼をそれが折れるほど激しく打ったと述べているが、アッラーに誓って！　私は、そのことについてはなにも憶えていない。
私（イブン・ウマル）は、そのあと、信者の母（ハフサ）の家に行き、このことを話した。
すると彼女は、『あなたは彼になにを期待していたのですか。
預言者がかつて“ダッジャールが人々の処に最初に現われるのは、怒りに駆られた時である。”と言われたのを知らなかったのですか』と言った」

ダッジャールの特徴について

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、人々を前にダッジャールについて言及し次のように言われた。

「アッラーは片目のお方ではない。

しかし、みなさい！

偽キリスト（マスィーフ・ダッジャール）は片目で右の目が見えない。

彼の目は葡萄玉のようにとびだしている」

イブン・ウマルによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「ウンマの人々に対し、あの片目の嘘つきに注意するようにとかつて警告しなかった預言者はいない。

みなさい！

彼は片目です。

あなた方の主は片目ではありません。

それに彼の両目の間の額にはカーフィル（不信仰者）と書かれています」

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーの預言者は言われた。

「ダッジャールの両眼の間には、カ・フ・ル、即ち、カーフィルと言う文字が記されている」

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「ダッジャールは片目がつぶれてみえず、両眼の間にはカーフィルと記されている」

み使いはこの時、ムスリム全てが読めるよう、カ・フ・ルとお書きになった。

フザイファは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「ダッジャールは、長く濃い髪をもった左目（注 1）が見えない片目の男である。

彼は、庭園と火をもっているが、それらは、火が庭園ともなり、その庭園が火ともなり（注 2）得る類のものである」

（注 1）こ別記のハディースでは“右目がみえない”となっているが、注釈書には“両眼ともに疾患があるため、このように記された”と説明されている

（注 2）ダッジャールにとって喜ばしきものが、アッラーの怒りの元になったり、火と思われるものが、アッラーの報奨の対象とされる場合もあるの意味

フザイファは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「ダッジャールが、なにをもっているかについて話したい。

彼は二つの流れる川をもっているが、その一つは彼の片目では白い水に見え、他は、彼の片目では火が燃えさかっているように見える。

もし、誰かが水を飲みたいと願い、ダッジャールの目には火がそこに燃えているように見えた、その川に聞いて水に頭をつけて飲んでみると、その水は冷たい水であるに違いない。

ダッジャールが目をこすると、その上には、爪であらあらしくひっかいたあとがあり、両目の間にはカーフィルと書かれた文字がみえる。

信仰者ら、書記、また、書記以外の者も全てそれを読むことであろう」

フザイファは伝えている

預言者は言われた。

「ダッジャールは水と火をもっているが、その火は冷水の如き効果をもち、水は火の如き効果をもっている。

それ故、あなたたちは、それに惑わされて身を滅すようなことになってはならない」

リブウィー・ビン・ヒラーシュはウクバ・ビン・アムル・アブー・マスウード・アンサーリーとの話を次のように伝えている

私は彼（ウクバ）と共にフザイファ・ビン・ヤマーンの家に行った。

その時、ウクバは彼に、「アッラーのみ使いが、ダッジャールについて、どう言われたか話して下さい」と頼んだ。

それに対し、彼はこう語った。

「ダッジャールが現われる時、彼は水と火をたずさえてくるが、人々が水と思ってみるものは火であり燃え出す。

また、人々が火とみたものは、甘く冷たい水である。

それ故、そのことを知った後には、人々は誰でも火であると思っていたその川の中にとびこんでゆく。

実際に、それは混り気のない甘い水なのである」

これに関連し、ウクバは「私はフザイファの話を、なんらの疑念も抱くことなく聞いた」と述べている。

リブウィー・ビン・ヒラーシュは伝えている

フザイファとアブー・マスウードが会った。

この時、フザイファは、次のように話した。

「ダッジャールが伴ってくるものがなんであるのかについて、私はあなた以上に知っています。

彼が伴うものは、水の流れる川と火の燃える川です。

ただし、あなたたちが火と思って見るものは水であり、水と思って見るものは火なのです。

それ故、水を飲みたいと願うものは、火と見える川から飲まねばなりません。

実際、そこには水があるのです」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「かつて、どの預言者も人々に話さなかったダッジャールについて、私が話をしてもよいですか。

彼は片目の男であり、天国と地獄の表象のようなものを伴ってきます。

彼が天国とよんでいるものは、実際には、地獄の火です。

たぶらかされないよう気をつけなさい！

私は預言者ノアが人々に警告したように、あなたたちに警告しておきます」

ナッワース・ビン・サムアーヌは伝えている

アッラーのみ使いは、或る日の朝、ダッジャールについてお話になった。

み使いは、ダッジャールのもたらす災害は、時によっては小さくまた、時によっては大きいと言われた。

私たちは、この時、ダッジャールが、なつめやしの木の間にひそんでいるかのようにも思い恐れた。

夕方、み使いの処に行った時、み使いは、私たちの顔に恐れの表情がまだ浮んでいるのを見て「どうしたのか」と言われた。

それで、私たちは「み使い様、あなたは、朝、ダッジャールについて話をなさり、彼のもたらす災害は小さいとも言われ、また、非常に大きいとも言われました。

それを聞いて、私たちは、ダッジャールがなつめやしの木の間にひそんでいるかのように恐れを抱いたのです」と言った。

み使いはそのとき次のように言われた。

「ダッジャール以外にも、あなたたちにとって恐しいものは沢山あります

（ともあれ）もし、私が生きている間にダッジャールが現われるとしたら、私はあなたたちを守るために彼と戦います。
しかし、もし私の亡き後ダッジャールが現われるとしたら、それぞれが自分を守るため戦わねばなりません。
アッラーは、私に代って、全てのウンマを守るでありましょう。
ダッジャールは、若いよじれ髪の男で、片目は見えず、一方の目はとび出ています。
丁度、（あの不信仰者の）アブドル・ウッザ・ビン・カタンに似ています。
あなたたちの誰かが、ダッジャールを見た時には、クルアーン洞窟章の最初（注 1）の部分を読みなさい！
ダッジャールはシリアとイラクの間のハッラの地に現われ、右にも、左にも、害悪を広げていきます。
それ故、アッラーのしもべたちよ、イスラームの教えをしっかり守りなさい」
私たちは「み使い様、ダッジャールはどれほど地上にとどまるのですか」と聞いた。
み使いは「40 日間です。
彼が現われ、なにか災いが起れば、その一日は、あなたたちにとって、一年のようにも感じられ、また、一月のようにも思われ、更にまた、一週間のようにも思われることでしょう。
なにも起らなければ、あなたたちの日々に変りありません」と言われた。
この時、私たちは「み使い様、そうなると、一日の礼拝が、一年分に相当する日の礼拝となるのですか」と聞いた。
み使いは、それに対しては「いいや、あなたたちは、各礼拝間の時間に注意し、その間隔に従って礼拝しなければなりません」と言われた。
私たちは、また、「ダッジャールは地上をどのような速さで歩くのですか」と聞いた。
み使いは、次のように言われた。
「風に吹かれる雲のような速さです。
彼が聞いて説教すると、人々はそれを信仰し彼の教えに従います。
すると彼は、天に命じ地上に雨を降らせ穀物を成長させます。
夕方になると、放牧した家畜が瘤を高くし乳房をミルクで一杯にし、また、横腹をふくらまして戻ってくるようになります。
その後、ダッジャールは、別の人々の処に行説教します。
彼らが彼の言葉を拒否すると、彼は立ち去るが、そこの人々は旱魃に襲われ、一切の財産は彼らの許から失われます。
ダッジャールは、その後荒地へ行き、そこで『お前たちの財宝を出すように』と命じます。
それで財宝が提出されて、蜂の群のように彼の前に集められます。
そして後、彼は一人の若さにあふれる者を呼び出し、剣で殺して二つに切り裂き、それぞれを矢の的になる間隔で放置します。
（しかし、不思議なことに）ダッジャールが、その後、その若者を呼ぶと、彼は顔を輝かせ

笑いながら彼の前に進んできます。
このようなことをダッジャールが行なっている時、アッラーはマリヤの息子キリストを降臨させるのです。
キリストはダマスカスの東側にある白いミナレットの上に降り立ちます。
この時、キリストは、黄色く染めた衣服を身にまとい、両手を二人の天使の翼の上に置いており、彼が頭を下にむけると汗のしずくが落ち、頭をあげると真珠のようなそのしずくがとび散ります。
彼の呼吸の発する香りを嗅いだ不信仰者は全て死ぬのであるが、その呼吸の香りは、はるか果てまで及んでゆきます。
その後、キリストはダッジャールを捜し、ルッド（注 2）の門の処で彼を捕え殺します。
アッラーが守って下さった人々は、その時、マリヤの息子イエスの処に集まるが、イエスは、彼らの顔をふいておやりになり、彼らに天国での彼らの地位について知らせます。
このような状態でいるイエスに対し、アッラーは啓示して『私は、しもべらの中から、誰も戦うことができないほど強い者らを地上に遣わす。
それ故、お前はこの人々をトゥールへ安全につれて行くがよい』と言われます。
その後、アッラーは、ゴグとマゴグを遣わすのであるが、彼らは全て傾斜地を下るような勢いで、一団となって動きだします。
彼らの最初のグループは、ティベリアス湖（注 3）を通り、そこの水を飲み干してしまうため、最後のグループがそこを通る時には、彼らは『ここには、かつて、水があったのに』と話します。
アッラーの預言者イエスと彼の教友たちは、ここ（トゥール）で包囲され、100 ディーナールの金貨よりも雄牛一匹の頭の方が、貴重となるほど飢えに苦しむことになり、そのためアッラーの預言者イエスと彼の教友らはアッラーに祈願をします。
それでアッラーは、或る種の虫（ナガフ）（注 4）を送り、ダッジャール軍の者らの首に取り付かせるが、そのため朝になると、彼らはあたかも一人の人間が死んだだけであるかのように、僅かな痕跡を残し、消え去ってしまいます。
預言者イエスと教友らは、ようやく危険を脱して地上に落着きますが、しかし、その地上は、腐敗物や悪臭が満ち満ちている状態となっています。
預言者イエスとその教友らは、再び、アッラーに祈願します。
すると、アッラーは首の部分が、ふた瘤ラクダの首にも似た姿の鳥を送り、その鳥たちによって、イエスら一行は運ばれ、アッラーの望む処に降ろされます。
その後、アッラーは、いかなる粘土造りの家やラクダの毛で作った天幕をも押しっぶすほどの強烈な雨を降らせます。
その雨は、地上の一切の汚物を洗い流し、地上を滑らかにします。
大地は、果実を実らせ恩寵をよみがえらすようアッラーから命じられます。
その結果、一群の人々でも食べられ、その皮の下に日蔭を求めることができるほど大き

なざくろが実ります。
また、乳ラクダは、大勢の人々が、十分、飲めるほど多量のミルクを産出し、更に、乳牛は、一部族の人が十分飲めるほど多量のミルクを産出し、乳羊も同じく全家族が十分飲めるほどのミルクを産出するようになります。
人々がこの状態でくらしている時、アッラーは、心地よい風を送り人々の腋の下までも気持よくさせますが、この風によって、しかし、全ての信仰者、ムスリムの生命は奪われてしまいます。
そして残された者らは、非行者らばかりとなります。
彼らはロバのように姦通を行ないますか、これらの者の上に“最後の時”はおとずれるのです」

（注 1）洞窟章の最初には、善行者への報奨と非行者に対する警告の言葉か記されている
（注 2）ルッドは現在のイスラエル領リッダのこと

（注 3）原名タバリーヤ。
ヨルダンの湖水の名。
エルサレムより 50 マイルほどの地点にある

（注 4）ナガフはなつめやしの粒や羊の鼻孔に巣くう虫の名
前記と同内容のハディースは**アブドル・ラフマーン**・ビン・ヤズィード・ビン・ジャービルによっても伝えられるが、それには次の言葉が付加されている。
「ゴグとマゴグは、歩いてハマル山に到着する。
ここはエルサレムの山である。
彼らは、ここで『我らは、地上に住む者たちを殺した。
これより天に住む者たちを殺すことにする。』と言って、矢を天にむけて放つ。
アッラーはその矢を血で汚してから、彼らの方にお返しになる」。
また、アッラーの言葉として「私は、私のしもべら（ゴグとマゴグ）を地上に送ったが、誰も彼らと戦えるものはいないであろう」とも記されている。

ダッジャールの性格、行動について

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは、或る日、ダッジャールについて詳しくお話しになった。

次はその話の内容である。

ダッジャールが現われるが、彼はマディーナへの山道に入ることは禁じられている。

そのため、彼はマディーナ近くの荒地にとどまる。

その彼の処に、人々の中でも最良の人物もしくは、最良の人物の一人がやって聞いて、「私は、あなたが、アッラーのみ使いが話しておられた、ダッジャールであることを証言します」と述べる。

この時、ダッジャールは「私が、もしこの男を殺し、すぐその後で生き返らせるとすれば、どう思うか。

それでもお前たちは、そのことを疑うのか」と言う。

人々が「いいえ」と答えると、彼はその男を殺し、その後、生き返らせる。

その男は生き返ると、「アッラーに誓って！

今見たこと以上に、あなたがダッジャールであることを証明するものは、ありません」と述べる。

そのため、ダッジャールは再びその男を殺し、その後、生き返らせてみせようとするが、それは不可能となる。

この話に関連し、アブー・イスハークは「この人物は聖人ハディルである」と述べている。

前記と同内容のハディースは、**ズフリー**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「ダッジャールが現われると、信仰深い或る人物が、彼に会いに出かける。

ダッジャール配下の武装した男たちが彼に出会い『どこに行くつもりか』と問う。

彼は、それに対し、『私は、最近現われた男の処に行こうとしている』と答える。

彼らが『お前は、我らの主（ダッジャール）を信じていないのか』と聞くと、彼は『我らの主アッラーについては、なにも不明なことはありません（そうであるのにどうして、ダッジャールを主などと呼んで崇められますか）』と言う。

すると彼らは『殺してしまえ』と叫ぶが、彼らの中の一人が『お前たちの主は、彼の同意もなく、誰かを殺すのを禁じなかったのか』と言って注意する。

それで彼らは、彼をダッジャールの前につれてゆく。

その信仰者は、ダッジャールを見ると、『人々よ、アッラーのみ使いが教えて下さったダッジャールは彼です！』と言う。

ダッジャールは、彼の頭を割るように命じ、次のように言う。
『彼を捕えて頭をたたき割れ』。
彼は背中や腹までも切られる。
その後、ダッジャールは彼に『我を信じないのか』と聞くが、彼は『あなたは偽救世主だ』と答える。
そのため、ダッジャールは、鋸で彼の頭の髪の分け目から両足まで切り裂くよう命じる。
その後、ダッジャールは、切り裂かれて二つになった彼の身体の間を歩き、彼に『立て』と命じる。
彼が立ち上るとダッジャールは『お前は私を信じるか』とまたたずねる。
彼は、この時、『このようなことは、あなたがダッジャールであることを私の目に一層確信させただけだ』と答える。
そして『人々よ、ダッジャールは、私のあと、このようなことは誰に対しても行なえないだろう』と述べる。
ダッジャールは、彼を再び殺そうとして捕える。
しかし、彼の首と鎖骨の間は銅板に変えられたため、ダッジャールには彼を殺す手段がなくなる。
ダッジャールはそのため、彼の両手と両足をつかみ空中に投げすてる。
人々は、彼が地獄に投げ込まれたと思うだろうが、実際には、彼は天国に投げ込まれるのである」
この話のあと、み使いは、「この人物は、万有の主アッラーの御目からみて最も偉大な殉教者である」と言われた。

ダッジャールが卑小な存在であることについて

ムギーラ・ビン・シュウバは伝えている

私ほど、預言者に、ダッジャールについて多く質問した者はいなかった。

預言者は「ダッジャールについて心配することはない。

あなたになにも害を及ぼさないからです」と言われたが、

私がこれに対し「み使い様、人々はダッジャールが、豊かな食糧と水を伴ってくると話しています」と言うと、

み使いは「そうであるにしても、ダッジャールは、アッラーから見れば、とるに足りない者でしかありません」と言われた。

カイスは伝えている

ムギーラ・ビン・シュウバは、「ダッジャールに関して、預言者に私ほど数多く質問した者はいなかった」と語っていた。

或る人が彼に「なにを質問したのか」と聞いた時、彼は次のように言った。

「私は、『ダッジャールが、パンと肉の山、それに、水の流れる川を伴ってくると人々が噂しています』と話した。

すると預言者は『たとえ、そうであるとしても、アッラーの御目から見れば、ダッジャールはとるに足りない者でしかない』と言われた」

前記と同内容のハディースは、**イスマーイール**によっても、五種の異った伝承者経路で伝えられている。

“最後の時”の近接の様相に関して

アブドッラー・ビン・アムルは伝えている

或る男が彼（アブドッラー）の処に聞いて、「あなたが、『“最後の時”はしかじかの時に起るだろう』と語ったハディースの意味はどう言うことですか」とたずねた。

これに対し、彼は次のように話した。

「アッラーを讃美します！

アッラーの他に神は存在しません！

（または、これらと同内容の言葉を唱えた。）

私は今、誰にもなにも語るまいと決心しています。

しかし、ただ、近い将来に、重大な出来事が起るとだけ言っておきます。

その時には、カーバ神殿は焼けてしまいます。

その事件は、必らず起り、間違いなく現実となります」

この後、彼は、アッラーのみ使いは次のように言われたと語った。

「ダッジャールは、私のウンマの居住地にも現われ、40 の間ー私はみ使いが 40 日、40 ヵ月、それとも 40 年のどれを言われたのかわからないー地上にとどまる。

アッラーは、そのあと、マリヤの息子イエスを地上に遣わすが、彼は、ウルワ・ビン・マスウードに似た人物である。

イエスは、ダッジャールを追跡し殺す。

それ故、戦いの時代は終り、人々は平安にその後の七年間を過す。

そのあと、アッラーは、シリア方面から冷風を送る。

そのため、心に一粒の重さほどでも善良さ、または、信仰をもつ者は、地上に生き残ることなく死に果てる。

その時には、たとえ、誰かが山中深く入り隠れたとしても、風はそこにも及び彼を死に至らしめる」

彼は、アッラーのみ使いは、更に、次のようにも言われたと語った。

「ただ、邪悪な者らだけは生き残る。

彼らは非行に対する反応が鈍く、その様子は、鳥類や肉食獣の餌に対する動きにも似ている。

（ともあれ）彼らは善行を知らず、非行を批難することのない者たちである。

そのような彼らの処に、シャイターン（悪魔）が人間の姿をして現われ、彼らに『お前たちは応じないのか』と言う。

彼らが『なにを命じるのですか』と聞くと、彼は偶像崇拝を彼らに命ずる。

そして、その代りに、彼らは多くの食糧品を与えられ、快適な生活を送れるようになる。

このあと、トランペットが吹きならされる。

その時には、誰もが首を一方に傾けたり、他方から首を上にあげたりしてその昔を聞く。

そのトランペットの音を最初に聞く者は、ラクダに水を飲ませるため飼葉おけを直していた男であるが、彼は、その音を聞くとすぐ卒倒してしまう、他の人々も次々と卒倒する。

その後、アッラーは、雨を送り降らせる。

それは露玉のような雨であるが、その露から人々の身体が生え出てくる。

そのあと、二度目のトランペットが吹かれると、彼らは立ち上り、あたりを見回し始める。

彼らは、『人々よ、お前たちの主の許に行け！』と告げられる。

そして、そこでは起立させられ、様々に尋問される。

それが終ると『地獄に送られる者を連れ出せ』と命令が下される。

『どれほどの者ですか』と聞かれると『1000 人のうち 999 名である』と告げられる。

その日には、恐しさのため、子供たちすら老け込んでしまう。

この日は、まことに、クルアーン啓示に示される「**脛があらわにされる日**」（第 68 章 42 節）（注）である」（注）困難に遭遇した時に口にするアラブ人の慣用句でもある。

ここでは「ひどい苦悩の日、即ち“復活、最後の審判の日”」のことを示す

ヤクーブ・ビン・アースィム・ビン・ウルワ・ビン・マスウードは伝えている

或る男が、アブドッラー・ビン・アムルに「あなたは“最後の時”はしかじかの時に起ると言っているが、それはどう言うことですか」と聞いた。

彼は、その時「私は、誰にもこれに関して話さない決心でいます。

ただ、あなたたちは、間もなく、非常に重要な事件に出会うだろうとだけ言っておきます。

たとえば、カアバ神殿が焼けることなどです」と言った。

このあと、アブドッラー・ビン・アムルはつづけて、「アッラーのみ使いは『ダッジャールは私のウンマの処に現われる』と言われた」と話した。

これに関連し、口述者の一人ムアーズの伝えるハディースには「心に一粒の重さほどでも信仰を持つ者は、誰も生き残れず死に果てる」と記されている。

なお、ムハンマド・ビン・ジャウファルは、シュウバかこのハディースを度々彼に話し、彼もまた度々シュウバの前でこの話を反復して正確に暗記するよう努めたと語っている。

アブドッラー・ビン・アムルは伝えている

私はアッラーのみ使いのハディースを暗記し、それを忘れなかった。

み使いは次のように言われた。

「ダッジャール出現に関する最初の兆しは、太陽が西から昇り、地中から一獣が人々の処に夕刻現われることである。

この一獣の出現は、最初に太陽の昇ったあとでみられる」

アブー・ズルアは伝えている

ムスリム三人が、マデ言いナでマルワーン・ビン・ハカムの前に座って、彼の語る“最後の時”の兆しについて聞いた。

その最初はダッジャールの出現についての話であった。

アブドッラー・ビン・アムルは、これに関連し次のように語った。

「マルワーンは、この時特別なことはなにも言わなかった。

しかしながら、私は、アッラーのみ使いから、ダッジャールに関して聞いたハディースを忘れていない」そのあと、彼は前記と同内容の話を伝えた。

アブー・ズルアは伝えている

マルワーンのいる処で“最後の時”に関する話が行なわれた。

この時、アブドッラー・ビン・アムルは、前記と同内容のハディースを語った。

ダッジャールの間諜について

ハムダーン出身のアミール・ビン・シャラーヒール・シャウビーは伝えている

彼は、カイスの娘でダッハーク・ビン・カイスの姉妹に当り、かつ、最初の女性ムハージリーン（移住者）の一人ファーティマに「アッラーのみ使いから直接聞いたハディースを語って下さい」と頼んだ。

彼女はこの時、「もし、あなたが希望するならお話ししよう」と答えたので、彼は「はい、どうかお願いします」と言った。

彼女は次のように語った。「私は、イブン・ムギーラと結婚した。

彼は、当時、クライシュ族の若者の中では選ばれた者の一人であったが、アッラーのみ使いと共に最初の戦い（ジハード）に出陣し、殉教した。

私が未亡人になると、み使いの教友の一人、アブドル・ラフマーン・ビン・アウフが、私に結婚を申し込んだ。

この時、アッラーのみ使いも、彼が解放した奴隷ウサーマ・ビン・ザイドと娶らせるために、私に結婚話を申し出てこられた。

その折、私は、み使いが「私を愛する者は、ウサーマをも愛する者である」と言われたと聞かされた。

み使いがこの件について話された時、私は、「私のことはあなたの御手に委ねます。

あなたのお考え通りにことを運んで下さい」と答えたが、その折、み使いは「ウンム・シャリークの家に移りなさい」と言われた。

ウンム・シャリークは、アッラーのため多額の支出を惜しまぬアンサールの非常に裕福な女性であり、彼女の家には客が多かった。

私が「そう致します」と答えると、み使いは、更に、次のように言われた。

「ウンム・シャリークの家には客が大勢集まるが、その時、あなたのヴェールが落ちたり、衣服から両足があらわれたりして、あなたが隠すべきところを人が見るようなことがあってはなりません。

それ故、あなたは、あなたの従兄のアブドッラー・ビン・アムル・ビン・ウンム・マクトゥームの家に移った方がいい」

マクトゥームは、クライシュ族の一氏族バヌー・フィヒルの一員であった。

私（ファーティマ）もその氏族に属していた。

そのため、私は彼の家に移った。

待婚期間（イッダ）が終った時、み使いの許で告知役をつとめる者が、モスクで礼拝が始まると叫ぶ声を聞いた私は、モスクに行きみ使いと共に礼拝を行なった。

私は、女性の列に並んだが、それは男子の列の近くであった。

この折、み使いは、礼拝を終えると説教壇（ミンバル）に座って微笑しながら、「皆、それぞれ礼拝した処に座るように」と命じたあと、「どうして、私があなたたちをここに集めたのか

わかりますか」と言われた。
これに対し、人々が「アッラーとそのみ使いのみが、最もよくご存知です」と答えると次のように言われた。
「あなたたちを集めたのは、訓戒するためでも、警告するためでもありません。
私があなたたちを集めたのは、タミーム・ダーリーと言う元キリスト教徒で、ここに聞いて誓言いスラームに改宗した人物が、私がかつてあなたたちにダッジャールについて話したのと同じことを私に話してくれたからです。
彼は次のように話しました。
彼は、バヌー・ラフム及びバヌー・ジュザームの者ら30名共々一隻の船で航海に出たが、船は一ヵ月も波に翻弄されたあげく、太陽の沈む頃、海上の或る島の近くに打ち寄せられた。
彼らは、小船に乗り移りその島に上陸した。
そして、そこで、長く厚い髪の毛をもった生き物に出会ったが、その生き物は、濃い毛のために前後の区別がつかないほどであった。
彼らが、『お前に災いあらんことを！
お前は一体なに者なのか』と聞くと、
その生き物は『私はジャッサーサ（間諜）です』と答えた。
彼らが、『ジャッサーサとはなにか』と言うと、その生き物は『人々よ、修道院にいる人の処に行きなさい。
彼は、あなたたちのことを非常に知りたがっています』と言った。
（以下はタミームの言葉による。）
その生き物が、その人のことを口にした時、私たちは、シャイターン（悪魔）ではないかと恐れた。
ともあれ、私たちは急いでその修道院に行った。
すると、そこには、体格のよい人物が、両手を厳重に首にしぼりつけられ、両足にはかかとまで及ぶ鉄の足枷をつけられた格好で立っていた。
私たちは彼をみた時、「あなたに災いあらんことを！
あなたは一体なに者ですか」と聞いた。
するとその人物は、「私のことはすぐにわかります。
それよりも、あなたたちについて教えて下さい」と言った。
それで「私たちは、アラビアからきた者であるが、海に乗り出したところ船は波に一ヵ月近くも翻弄され、この島の近くに打ち寄せられた。
それで、小舟に乗り移り、この島にきたのである。
ここでは、長く濃い毛におおわれた生き物に出会ったが、あまりの毛の多きに、その生き物は前後の区別もつけられないほどであった。
『お前に災いあれ！

お前はなに者なのか』と聞くと、
その生き物は『私は、ジャッサーサです』と答えた。
私たちが『ジャッサーサとはなにか』と言うと、その生き物は『修道院にいる人の処に行きなさい。
彼はあなたたちについて非常に知りたがっています』と言った。
それで私たちは、シャイターンではないかと恐れながら、あなたの処に急いできたのである」と言った。
すると、その人物は「(シリアの)バイサーンのなつめやしについて話して下さい」と言った。
私たちが「どんなことを知りたいのか」と聞くと彼は「これらの木が実をつけるのかどうか、知りたいのです」と言った。
私たちは、これに対し「実をつける」と答えた。
すると、彼は「私はこれらの木は実をつけないと思う」と言ってから「タバリーヤ湖について話して下さい」と言った。
私たちが「どんなことを知りたいのか」と聞くと、彼は「湖には、水がありますか」と言った。
私たちが「水は豊富にある」と答えると彼は「その水は間もなくなくなるでしょう」と言った。
彼は、更に「(シリアの町の)ズガルの井戸について教えて下さい」と言った。
彼らが「どんなことを知りたいのか」と聞くと、彼は「井戸に水はありますか。
また、その水を人々が耕作に役立てていますか」と言った。
私たちは、それに対し「その通り水は沢山ある。また人々はその水を使って耕作している」と答えた。
このあと、また彼は「文盲の預言者がなにを行なったのか知りたい」と言った。
私たちがそれに対し「彼は、マッカより出て、ヤスリブ(マディーナ)に居住している」と答えると、彼は「アラブ人たちは、彼と戦うのか」と言った。
私たちが「その通りである」と答えると、彼は、更に「どのように、彼らを扱うのか」と言った。
私たちはそれに対し、預言者が、近隣のアラブ族に打ち勝ったこと、彼らが預言者に服従していることを話した。
すると彼は「本当に、そのようなことが、起ったのですか」と言った。
私たちが「その通り」と答えると、彼は次のように言った。
「もしそうであるならば、人々が彼に従うのはよいことです。
あなたたちに私のことを打ち明けるが、私は救世主(ダッジャール)です。
間もなく、許されてここから出てゆけるので、その時には各地を旅行し、いかなる村においても、40 日間づつ滞在することにしたい。
ただし、マッカとマディーナ(タイバ)の二ヶ所は、私には禁じられています。
剣を手にした天使が立ちはだかり、道をふさいでいるのです。
両市に至る全ゆる道筋では、天使たちが監視している故、私はこれら両市のどちらにも入りたいとは願いません」

このように話したあと、み使いは、杖の端で説教壇をたたきながら、「ここがタイバです。
ここがタイバです。
ここがタイバです」と繰り返して言われた。
タイバとはマディーナを意味しています。
その後、み使いは「私は、ダッジャールについて、これと同じような話をしませんでしたか」と言われ、人々が「はい、なさいました」と答えると、
更に「タミーム・ダーリーの語ったこの話がダッジャールやマディーナ及びマッカに関して私があなたたちに話した事柄と一致していることに、私自身、驚いています。
みなさい！
ダッジャールはシリアの海（地中海）、もしくは、イエメンの海（アラビア海）に現われ、その後移動して、今や、東方に聞いています！
彼は東方に聞いています！
彼は東方に聞いています！」と言われた。
み使いは、この時、手で東方をお指しになった。
ファーティマ・ビント・カイスは「私は、以上のように、み使いの話を記憶しています」と語った。

シャウビーは伝えている

私たちは、ファーティマ・ビント・カイスの家を訪問した。
この時、私たちは、イブン・タープのルタブと呼ばれる新鮮ななつめやしの実や薄皮付き大麦などで接待された。
私は、この折、彼女に「三度の離婚宣言された女性の待婚期間はどれほどですか」と質問した。
彼女はこれに対し「私の夫は、三度の離婚宣言をして私を離婚したが、この折、預言者は、私に、待婚期間中実家で過すことを許して下さった。
この期間中のことであるが、人々は、モスクで礼拝が行なわれると知らされた。
それで私も人々に従ってモスクに出かけた。
私は女性側の最前列に並んだが、それは男性の最後列に接していた。この折、預言者は、説教壇に座り、次のようにお話しになった。
『タミーム・ダーリーの従兄が航海に出た』」
以下は、前記ハディース内容と変らない。
ただ、これには、ファーティマの言葉として「私には、預言者が杖で地面を指しながら“ここがタイバ（即ち、マディーナ）である。”と言われたお姿が目にみえるような思いがする」と記されている。

ファーティマ・ビント・カイスは伝えている

アッラーのみ使いの所にタミーム・ダーリーが来て、次のように話した。

「私は、航海に出たが、船は方角を失い、そのため、或る島に上陸した。

そして島の中を水を捜して歩きまわった。

その時、長い髪をひっぱるように歩いている一人の人物に出会った。

（以下は、前記と同内容故、中略する）」

ダッジャールは「もしも私が出てゆくことを許されたならば、タイバを除く、全土を歩きまわるだろう」と言った。

アッラーのみ使いは、タミーム・デーリーを人々の前につれてゆかれた。

そして、人々に、話をなさり「これがタイバです。

あれがダッジャールです」と言われた。

ファーティマ・ビント・カイスは伝えている

アッラーのみ使いは説教壇に座り、次のように言われた。

「人々よ、タミーム・ダーリーの話によると、彼の部族の何人かの人々は、航海中、船がひっくり返り沈んだため、船の板きれに乗ってただよい、海上の孤島に上陸した」

以下は前記と同内容である。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「マッカとマディーナ以外に、ダッジャールが足跡を印さない国はないであろう。

両聖地に至る道筋は全て、列をなした天使たちによって守られる。

ダッジャールはマディーナ近くの荒地に現われるが、彼のためにマディーナは、三度にわたって地震にゆすぶられる。

不信仰者や偽信者らは全て、マディーナから彼の処に出て行く」

アナスによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには以下の言葉も記されている。

「ダッジャールは現われ聞いてジュルフ荒地に天幕を張る。

そこには、偽信者らの男女が全て集まってくる」

ダッジャールについての様々な話に関して

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「ダッジャールはイスファハーンの七万人のユダヤ人を伴って現われる。

彼らは（ペルシャ製の）ショールを肩にかけている」

ウンム・シャリークは伝えている

預言者は言われた。

「人々は、ダッジャールを恐れて、山々に逃げ込む」

ウンム・シャリークは、この折、「アッラーのみ使い様、アラブ人たちは、その時、どこにいるのですか」と言った。

それに対し、み使いは「彼らは少数しかいない」と言われた。

前記と同内容のハディースは、**イブン・ジュライジュ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・ダフマーウ及び**アブー・カターダ**を含む一団の人々は伝えている

私たちは、イムラーン・ビン・フサインの家に行く時、いつもヒシャーム・ビン・アーミルの家の前を通った。

或る日、ヒシャームは次のように言った。

「あなたたちは、誰かの家に行く度に私の家の前を通るが、今、生きている者の中で、私以上にアッラーのみ使いとご一緒した者はいない。

それ故、私よりもハディースを多く知っている者もいない。

ともあれ、アッラーのみ使いは、こう言われたことがある。

『アダムが創造されてから“最後の時”が起る間に、ダッジャールほど大きな災害をもたらす創造物はいない』」

アブー・カターダを含む一団の人々による前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「以下の六種の事件が起る前に善行を急ぎなさい！

それらは、太陽が西から昇ること、煙霧の発生、ダッジャールの出現、一獣の出来、個々人に起る災い、全般にわたる大規模な災いなどである」

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。

「六つのことが起る前に、善事を急いで行ないなさい。

それらは、ダッジャールの出現、煙霧の発生、地中の一獣の出来、太陽の西からの昇天、大規模な災害及び個々人に起る災いなどである」

前記と同内容のハディースは、**カターダ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

災害時の信仰について

マアキル・ビン・ヤサールは伝えている

預言者は言われた。

「災害の時には、信仰者たちは私の許に、まるで移住者（注）のようにやってくる」

このハディースは、ハンマードにより別の伝承者経路でも伝えられている。

（注）アッラーへの許しの祈願を依頼するため集まるの意

“最後の時”の接近に関して

アブドッラーは伝えている

預言者は言われた。

「“最後の時”は、邪悪な者たちの上には最も厳しく起る」

サフル・ビン・サアドは伝えている

預言者は、親指の隣り、即ち、人指し指と中指を合せ、一本にして示しながら「私と“最後の時”はこのように密接に結びついている（注）」と言われた。

（注）復活の日まで別の新しい預言者は現われないの意

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「私と“最後の時”は、このように結合したものとして遣わされた」

これに関連しシュウバは、次のように述べている。

「カターダは、両者のうち一方が、他方よりも優っているとも話したが、それが、アナスの言葉であるのか、それとも、カターダ自身の言葉であるのか、私にはわからない」

シュウバは伝えている

私は、カターダとアブー・タイヤーフがアナスから聞いて、アッラーのみ使いの言葉を次のように語るのを聞いた。

「私と“最後の時”はこのように遣わされた」

こう話しながら、シュウバは人指し指と中指をつけ合せた。

前記と同内容のハディースは、**アナス**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アナスによる前記と同内容のハディースは、更に、別の伝承者経路でも伝えられている。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは「私と“最後の時”は、丁度、このように遣わされた」と言われ、その時、人指し指と中指をおつけになった。

アーイシャは伝えている

砂漠に住むアラビア人たちは、アッラーのみ使いの処に聞いて“最後の時”について質問し、「いつそれが起るのですか」と聞いた。

み使いは、その時、彼らの中で最も若い者の方を見ながら「もし彼が生きるとしても、（非常な）老人となることはあるまい。
あなたたちの上に“最後の時”が起るからである」と言われた。

アナスは伝えている
或る人がアッラーのみ使いに「いつ“最後の時”はやってくるのですか」と質問した。
その人の前には、ムハンマドと言う名のアンサールの少年がいた。
み使いは、この時「もしその少年が生きたとしても、多分、非常な老人になることはあるまい。
その前に“最後の時”が始まるからである」

アナス・ビン・マーリクは伝えている
或る男が預言者に「“最後の時”が始まるのはいつですか」とたずねた。
アッラーのみ使いは一寸の間黙っておられたが、目の前にいるアズド・シャヌーワ族の少年をごらんになってから「もしこの少年が年をとっても、（非常な）老人となる前に“最後の時”は始まるであろう」と言われた。
これに関連し、アナスは「この少年は、当時、我々と同じ年齢であった」と述べている。

アナスは伝えている
私と同年齢のムギーラ・ビン・シュウバ家の少年が、たまたま、預言者の側を通った。
この時、預言者は「もしこの少年が長く生きるとしても、それほど高年齢にはならないだろう。
その前に“最後の時”が始まるからである」と言われた。
預言者は言われた。
「“最後の時”は、雌ラクダの乳をしぼっている男が、容器のへりまでそのミルクをまだしぼり切らない状態の時突然始まる。
また、衣類の売買をしている二人の男が、その商談を終えないうちに“最後の時”は始まる。
更にまた、水桶をそろえている男が、まだその仕事を終えないうちに、“最後の時”は始まる」

二度目のトランペットが吹かれるまでの間について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「二度目のトランペットが吹かれるまでの間隔は、40 である」

これに関連し、人々が「アブー・フライラよ、これは 40 日のことか」と聞いた時、彼は「私には、なんともいえない」と答えた。

人々は「40 ヵ月のことか」とも聞いたが、これにも彼は「私には、なんともいえない」と答えた。

人々は更に「40 年のことか」ともたずねたが、彼は、それにも「私には、なんともいえない」と言った。

み使いは、つづいて次のように言われた。

「その後、アッラーは天から水を降らせる。

人々は、草木が芽を出すように発生してくる。

人間の身体で腐朽しないのは、一本の骨、脊髄だけであるが、これによって、復活の日、身体の全てが再構成されるのである」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「土はアダムの子孫全てを消滅させてしまうが、脊髄だけは残り、ここから人の身体は復活の日に再構成される」

ハンマーム・ビン・ムナッビフは伝えている

アブー・フライラは、アッラーのみ使いの数多くのハディースを語ったが、次もその一つである。

アッラーのみ使いは言われた。

「人間の身体の中には、土によって決して腐朽されない一本の骨がある。

そして、この骨によって、復活の日、新しい身体が再構成される」

この折、人々が「み使い様、それほどの骨ですか」と質問すると、み使いは「それは脊髄である」と言われた。

ズフド及びラカーイクの書

タイトルなし

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「現世は、信仰者の牢獄、不信仰者の天国である」（往）。

（注）信者には、不信仰者とは異なり、信仰上様々な規則や義務が謙せられることを意味する

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
アッラーのみ使いは、アーリヤ（注）側から入って市場をお通りになった。
人々が、彼の両側に従っていた。
み使いは、その折、耳の短い小羊の死体をみつけ、その耳を手にとってから、「これを一ディルハムで買いたい者はいないか」と言われた。
彼らは「金を払ってまでそれを買いたいと思いません。
それはなんの役にも立ちません」と言った。
み使いは、更に「無料ならばほしいか」と言われたが、
人々は「アッラーに誓って！
たとえ生きているとしてもほしいとは思いません。
欠陥があり、耳が短いからです。
まして、今は死んでいます」と言った。
この時、み使いは、次のように言われた。
「この世は、アッラーの御目からみれば、あなたたちがこの小羊の死体について思う以上に、なんら価値のない処なのです」

（注）マディーナ近くの、やや、高台にある村の名

ジャービルによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

ムタッリフは、彼の父から聞いて伝えている
私（ムタッリフの父）が預言者の処に行った時、預言者は、聖句**「あなたがたは、（財産や息子などの）多いことを張り合って、うつつをぬかす」**（クルアーン第 102 章 1 節）を読み、

その後、次のように言われた。
「アダムの子孫は、“私の財産を！　私の財産を！”と言いたてる。
アダムの子よ、食べて消耗するもの、着てすり切れるもの、喜捨としてもって行かれるもの以外に、あなたになんの財産が必要だと言うのですか」

ムタッリフの父による前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「しもべは、“私の財産、私の財産”と言いたてるが、彼の財産のうち、次の三種だけが、本当に彼にとって必要なものといえる。
それらは、身体を維持するための食物、すり切れるまで着る衣服、来世のための功徳としての喜捨である。
これ以上のものは、もっていても役に立たない。
なぜなら、あなたは現世を去りゆく者（ザーヒブ）であり、それは他の人々のため残るばかりとなるからである」

前記と同内容のハディースは、**アラーウ・ビン・アブドル・ラフマーン**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「（葬儀の時）遺体の棺台には次の三種がつき従い、その中、二つは戻り、一つだけが遺体と共に残される。
それらは家族、財産それに彼の行為である。
家族と財産は戻ってくるが、彼の行為は遺体と共に残されるのである」

アムル・ビン・アウフは伝えている
彼（アムル）は、バヌー・アーミル・ビン・ルワイーの同盟者で、バドルの戦役には、アッラーのみ使いに従い、参加した人物である。
み使いは、アブー・ウバイダ・ビン・ジャッラーフをバハレーンにジズヤ（人頭税）を徴収するため派遣した。
み使いはバハレーンの人々と協定を結び、アラーウ・ビン・ハドラミーをこの役目を果すよう任命していた。
アブー・ウバイタは、バハレーンから財源をもって帰った。
アブー・ウバイタの帰還を知ったアンサールたちは、み使いと共に早朝礼拝を行ない、み

使いがその礼拝を終えると、その近くに集まった。
み使いは、彼らをみてほほえみながら「あなたたちは、アブー・ウバイタが、バハレーンから品物をもって帰ったことを聞いていると思う」と言われた。
彼らが、「み使い様、その通りです」と答えると、み使いは、次のように言われた。
「あなたたちの楽しみとなるものを喜び期待するがよい！
アッラーに誓って！
私があなたたちに関して恐れるのは、貧困の問題ではありません。
むしろ、世間的に豊かになることで、以前の人々にもたらされたと同じ状態があなたたちの上にもひき起されることを恐れています。
富をめぐってあなたたちが互いに、かつての人々がそうしたように、張り合うことになれば、その結果、かつて人々がそうであったように、あなたたちも身を滅ぼしてしまうからです」

前記と同様のハディースは、**ズフリー**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「ペルシャやローマが征服された時、あなたたちは、どんな人々になるであろうか」
これに対し、アブドル・ラフマーン・ビン・アウフは「その時には、アッラーが命じたように、アッラーを讃美し、アッラーに感謝します」と答えた。
この時、み使いは「それだけですか。
あなたたちは実際にそうなると、競争し合い、嫉妬し合い、互いに疎遠になり、そのあと、憎しみ合うか、または、それに近い状態になります。
その後、あなたたちは、貧乏な移住者たちの処に行き、誰かを人々の支配者に任じます。
（そして、それによって、自分の勢力を伸ばそうとします）」と言われた。

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「あなたたちは、富や体格において優れている者を（羨ましく思いながら）見る時には、その優れている人に比較して、より劣っている人々のことをも思うべきである」

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「あなたたちよりも、より下の程度の者を見るようにしなさい。

あなたたちより、上の程度の者を見てはなりません。
このことはアッラーの恩恵を受ける元になります。軽んじてはならないことです」

アブー・フライラは伝えている
預言者は言われた。
「イスラーイール族の三名はそれぞれ、らい病者、はげ顔、それに、盲人であった。
アッラーは、彼らを試みたいと願い、天使を彼らの処に遣わした。
天使は、最初にらい病者の処に来て『なにを最も望むか』とたずねた。
彼は、『美しい顔色、きれいな皮膚です。
それに人が汚いと思うものを私から除去してもらうことです』と言った。
天使が彼の身体を拭くと、彼の病は癒え美しい顔色ときれいな皮膚に変えられた。
天使は、更に『どんな財産をもちたいと思うか』と聞き、彼が『ラクダです（伝承者の一人は“牛”と言ったのかもしれないと伝えている）』と答えると、
臨月近い雌ラクダを与え、『アッラーが、これらの物であなたを祝福されんことを！』と言った。
（ともあれ、らい病者か、もしくは、はげ頭の男のいずれかは『ラクダ』と答え、他は 『牛』と答えたのである）
その後、天使は、はげ頭の男の処に聞いて『なにを最も望むか』と聞いた。
彼が『美しい髪の毛です。
それと人々が嫌うこのはげを除去してくれることです。』と言った。
天使が彼の身体を拭くと、それによって、彼の病は癒え、美しい髪の毛を与えられた。
天使は、彼に、どんな財産をもちたいかと思うか』と聞き、彼が『牛です』と答えると、仔を孕んだ雌牛を与え、『アッラーが、これによって、あなたを祝福し給わんことを！』と言った。
その後、天使は、盲目の男の処に行き、『なにを最も望んでいるのか』とたずねた。
彼は、それに対し、『アッラーが私の視力を回復して下さることです。
そうなれば、人々の顔をみることができます』と言った。
天使は彼の身体をなで、それによってアッラーは、彼の視力を回復せしめた。
その後、天使は、彼に『どんな財産を最もほしいか』と聞き、彼が『羊です』と答えると親羊を与えたが、その羊はすぐ仔を生んだ。
そのような事情で、あちこちの谷で、ラクダや雌牛や羊が飼われて増えつづけた。
その後天使は、かつてのらい病者の処に、らい病者の姿かたちをしてやって聞いて『私は貧乏人です。
旅の途中食糧もつ聞いてしまいました。
アッラーの助けとあなたの親切なくしては、目的地に着けません。
あなたに美しい顔色ときれいな皮膚、そして財産を与えた御方の名によって申しますが、旅中、私を運んでくれるラクダをいただけませんか』と言った。

それに対し、彼は、『私にはやらねばならぬことが多いのです。』と言って断った。
それで天使は、彼に『私は、あなたを知っていると思うが、かつてあなたは、人々が嫌っていたらい病者ではなかったのですか。
貧乏だったのでアッラーが財を与えたのではなかったのですか』と言った。
その時、彼は『これらの富は、先祖代々受けついだものです』と答えた。
それに対し、天使は『もし、あなたが嘘をついているならば、アッラーは、あなたを以前の状態に戻されるであろう』と言った。
天使は、その後、はげ頭だった男の処に、彼の元の姿、即ち、はげ頭の姿かたちをしてやって聞いた。
そしてらい病だった男に述べたのと同じ言葉を述べた。
これに対し、この男もあの男と同じように答えた。
それで、天使は『もしも、あなたが嘘をついているならば、アッラーは、あなたを以前通りの状態に戻すであろう』と言った。
その後、天使は、盲目者の処に、彼の元の状態、つまり、盲目者の姿をしてやって聞いて『私は貧乏な旅人です。
旅中食糧かつきてしまいました。
アッラーの助けとあなたの親切なくしては、目的地に行けません。
あなたの視力を回復した御方の名によって、私の旅中の食糧となる羊をいただきたいのです』と言った。
これに対し、彼は次のように言った。
『私は盲目でしたが、アッラーが私の視力を回復して下さいました。
あなたは好きなものをとりなさい。
そして、好きな時に出発しなさい。
アッラーに誓って！
あなたがアッラーの御名によって取ったものに対し、私は、今日、なんら惜しみはしません』と言った。
それに対し、天使は、『あなたの財産を大事にしておきなさい。
あなたたちは試されただけです。
アッラーは、あなたの態度をお喜びになり、あなたの友人たちの態度をお怒りになっておられます』と言った。」

アーミル・ビン・サアドは伝えている

サアド・ビン・アブー・ワッカースがラクダに乗っていた時、息子のウマルがやってきた。
サアドは彼をみた時、「あの騎乗者（注）の犯した誤まちから、アッラーが、私をお守り下さるように」と唱えた。
そして、ラクダから降りると彼に、「お前は、ラクダや羊の世話にかまけて、領土を取り合う

ため争う人々をみすてているのか」と言った。
そして、彼の胸をたたいてからこう言った。
「静かに聞きなさい！
私は、アッラーのみ使いが、『アッラーは、敬虔で、自ら足れりとし、かつ、目立とうとせぬしもべらを愛される』と言われたのを聞いたことがある」

（注）ウマルは、預言者の孫フサインとカルバラーで戦い、彼を殉教せしめた者たちの一員であった

サアド・ビン・アブー・ワッカースは語っている
「アッラーに誓って！
私はアッラーの道のために、最初に矢を放って戦ったアラブ人である。
私たちは、アッラーのみ使いに従って或る遠征に参加したが、その時には、食うべき食物は砂漠に生えるフブラの葉やこのサムラの木以外になく、それを食べたため山羊の排泄物と全く同じものを、私たちの中の一人は、排泄するようになったこともある。
（そのようにイスラームのため尽してきた）
私に対して（奇妙なことに）アサド族の人々は、信仰について、今更私に教えようとしている。
もし私が信仰について、それほど無知であったとしたら、私のこれまでの仕事は誤ったものになったに相違ない（注）」

（注）サアド・ビン・アブー・ワッカースは、対ペルシャ戦では、司令官を勤めた功労者である。
預言者生前から篤信な教友として来世での天国を約束された10名の中の一人に数えられた人物でもあった。
彼は、ムスリム社会が二つに分裂し争った時、それを嫌って引退したが、イブン・ズバイルと同族のアサド族の者らは彼を説いて味方に引き入れようとし、彼の引退生活を批判した。

上記のハディースは、その間の事情を物語るものである

前記と同内容のハディースは、**イスマーイール・ビン・バーリド**によっても、別の伝承者経路で伝えられるが、それには、「我々の一人は、山羊の排泄物と全く同じものを排泄していた」と言う言葉がみられる。

ハーリド・ビン・ウマイル・アダウ言いは伝えている

ウトバ・ビン・ガズワーンは、我々に説教した時、先ず、アッラーを讃美し賞揚してから次のように語った。

「まことに、世界は近々終焉すると知らされた。

その時には、持主が、飲み残した水の容器が残されるだけであるとも告げられた。

あなたたちは、広大な場所に移ってゆくが、その時には、あなたたちが、この世で行なった善事をたずさえてゆくことになる。

私たちは、石を地獄の一端から投げると、70 年落ちつづけても底には届かないとも告げられている。

しかしながら、アッラーに誓って！

その広大な場所も人々で満員になるのである！

あなたたちは驚きませんか！

天国の領域は、端から端まで歩くのに、40 年かかるほどの距離があると言われています。

これらの領域が満員になり、混雑する日がやってくるのです。

あなたたちは、私が、アッラーのみ使いに従って遠征した七人の中の七番目の男であったのを知っているでしょう。

あの折には、食べるものは木の葉以外になく、それを食べたために、口のまわりを傷つけたものでした。

また、その折には、一枚の外套をみつけ、二つに裂いて、私とサアド・ビン・マーリク（サアド・ビン・アブー・ワッカースのこと）とで分け合い、私は、その半分を使って腰巻きとし、サウドもこれと同様に用いたものでした。

今日、その当時の我々の仲間たちは全て、それぞれの地域で知事となっています。

私は、アッラーの目からみれば、とるに足りない自分が、そのような重大な責任をつつがなく果せるようアッラーに祈願しています。

預言者時代の制度は廃れ、その後、王制に変わるだろうが、我々のあとにくるこれらの支配者たちが、どのような者たちであるかについては、あなたたちは、間もなく、知りかつ経験することになるでありましょう」

ハーリド・ビン・ウマイルはイスラーム以前の時代も経験した人物であり次のように伝えている

バスラの知事ウトバ・ビン・ガズワーンは次のように説教した。

以下は、前記ハディースと同内容である。

ハーリド・ビン・ウマイルは伝えている

ウドバ・ビン・ガズワーンは、次のように語った。

「私は、自分をアッラーのみ使いと共に従軍した七人の中の七番目の者であると思っている。

その折には、私たちにはなにも食物がなく、野生のフブラの木の葉を食べて。
口のまわりを傷つけた」

アブー・フライラは伝えている
人々が「アッラーのみ使い様、審判の日に、私たちは主に会うことができますか」と聞くと、み使いは「雲のない日中、太陽をみることは難しいですか」と言われ、人々が「言いえ」と答えると、更に「雲のない夜の満月をみることは難しいですか」と言われた。
彼らが「いいえ」と答えると、み使いは次のように話された。
「私の生命を、御手にする方に誓って！
アッラーに会うことは、あなたたちが誰かに会うのと同じで、なにも難しいことではない。
アッラーは、審判のためしもべに会い『某よ、私はお前に名誉を与え、人々の主人とし、配偶者を与え、馬やラクダを使わせるようにした。
更に、お前を人々の支配者とし、相応の利益を得るよう地位を与えたのではなかったのか』と言われる。
彼が、『はい、その通りです』と答えると、アッラーは更に、『お前はこのように、お前の主に会えるとは思わなかったのか』と言われ、
彼が『思いませんでした』と答えると、『それでは、お前が私を忘れたように、私もお前を忘れよう。
（お前が私の教えに従わなかったように、私もお前に慈悲を与えることをやめるの意）』と言われる。
その後、二番目の男が審判にひき出される。
アッラーは、彼に『某よ、私は、お前に名誉を与え、お前を主人にし、連れ合いをもたせ、馬やラクダを使わせ、そしてまた、支配者として相応の利益を受けるようにしてはやらなかったのか』と言われる。
彼が『はい、主よ』と答えると、『お前は、このように、お前の主と会合することを考えてはみなかったのか』と言われ、彼が『はい、考えませんでした』と言うと、
『それでは、お前が私を忘れたように、今、私もお前を忘れることにする』と言われる。
その後、三番目の男がひき出される。
アッラーは、前と同じことを彼に対して言われる。
すると、この男は『主よ、私は、あなたとあなたの啓典及びあなたのみ使いを信じていました。
私は、礼拝し、断食を守り、喜捨を行ないました』と言い、その他にもでき得るかぎり善行についてをあれこれと申し上げる。
アッラーは、これに対し、『よろしい。お前のその言葉の証言者を呼ぶことにする』と言われる。
その男は、この時心中で『誰が、私のため証言するのだろうか』と思うが、彼の口はそれ

以後封じられる。
そして彼の両腿、肉、骨が話すよう命をじられる。
そのため、彼の両腿、肉、骨は、彼の行為について証言する。
このような次第故、彼は、それに対するいかなる弁解もすることはできないのである。
ともあれ、この場合その男は偽信者であったので、アッラーはお怒りになられる」

アナス・ビン・マーリクは伝えている
私たちがアッラーのみ使いと一緒の折、み使いはお笑いになってから「どうして、私が笑ったのかわかりますか」と言われた。
私たちが「アッラーと、そのみ使いのみが最もよくご存知です」と答えると、み使いは、「それは、審判の日、しもべが主に対して話す言葉を思い出したからです」と言われ、次のように話された。
「そのしもべは『主よ、あなたは私を不公正な証言に対し、守って下さらないのですか』と聞き、主が『その通りである』と言われると、『私は、私自身以外には誰も私に関する証言者として適当とは思いません』と言う。
主は『それでは、お前とお前の行為を書き記すよう命じられた二人の天使の記録に対する証言者は、お前自身だけで十分であるとしよう』と言われる。
この後、彼の口は封じられる。
そして彼の手足が話すよう命じられ、それらは彼の行為について話すことになる。
この後、彼は、口がきけるようにされるとその手足にむかって、『遠くに行ってしまえ！お前たちを救うために、アッラーに対し、あのように主張したのに（罪を告白するとは、なんたることか！）』と怒るのである」

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「アッラーよ、ムハンマドの家族に対し、僅かでも、生活の糧をお与え下さい」

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには「アッラーよ、生活の糧を与え給え！」と言う言葉がみられる。
また、更に別伝承には「アッラーよ、糧を与え給え！」と記されている。

ウマーラ・ビン・カウカーウも前記と同内容のハディースを伝えているが、それには「十分な生活の糧をお与え下さい」と記されている。

アーイシャは伝えている

預言者ムハンマドの家族は、マディーナに移って以来彼が逝去するまでの間に、三日つづけて小麦による食物を存分に食べたことはなかった。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、イスラームの道に殉じて逝去するまでの間、三日つづけて、小麦作りのパンを満腹するまでお食べになったことはなかった。

アーイシャは伝えている

ムハンマドの家族は、大麦作りのパンをアッラーのみ使いが逝去するまで、二日つづけて十分に食べたことはなかった。

アーイシャは伝えている

ムハンマドの家族は、小麦のパンを三日以上つづけて十分に食べるほどの余裕をもったことはなかった。

アーイシャは伝えている

ムハンマドの家族は、彼が道に殉じて世を去るまでに、三日間つづけて小麦のパンを十分に食べたことはなかった。

アーイシャは伝えている

ムハンマドの家族は、小麦のパンを二日つづけて食べる余裕はなかった。
二日に一度は、なつめやしの実を食べたのである。

アーイシャは伝えている

私たちムハンマドの家族の者は、一ヵ月間も、（料理するための）火を燃やすことなく過すことが多かった。
私たちは、なつめやしの実と水だけで食事をしたのである。

前記と同内容のハディースは、**イブン・ヌマイル**によっても伝えられるが、それには、「肉が少々でももたらされた時以外には、料理のための火を用いることはなかった」と言う記述がみられる。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが亡くなった時、人の食べる物といえば、棚の中に大麦が少々入っている以外、なにもなかった。

私は、それをかなり長く食いつないだが、或る時調べてみるとほとんどなくなりかけていた。

ウルワは伝えている

アーイシャは、常々、私（ウルワ）にこう話した。

「アッラーに誓って！

私の甥子よ！

私たちがいつも新月のあとにまた新月を見、更にまた新月を見るまで、即ち、二ヵ月間に三回新月を見る間、アッラーのみ使いの家族の住む家々には（料理するための）火が燃やされたことはなかった」

私が「小母上！

それではどうやって暮したのですか」と聞くと、彼女は「黒いなつめやしの実と水だけで暮らしたのです。

ただ、アッラーのみ使いにはアンサールの隣人たちがおり、彼らは家畜を飼っていたので、み使いの処にそれらのミルクをいつも送っており、み使いは、それを私たちに分けて下さったのです。」と答えた。

預言者の妻の一人**アーイシャ**は伝えている

アッラーのみ使いは、逝去なされた。

み使いは、オリーブ油付きのパンを日に二度すらも、十分食べる余裕をお持ちになったことはなかった。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが亡くなられた頃の人々の食物は、なつめやしの実と水であった。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが、逝去された頃、私たちの食物は、水となつめやしの実の二つだけであった。

前記と同内容のハディースは、**スフヤーン**によっても伝えられるが、それには「私たちは、この二つ即ち、なつめやしの実と水すらも、十分には飲み食いできなかった」と記されている。

アブー・フライラは伝えている

私の生命を御手にされる方に誓って！

（または、アブー・フライラの生命を御手にされる方に誓って！）

アッラーのみ使いは、この世を去るまでに、三日間つづけて彼の家族の者たちに、十分に小麦のパンを与えることは、おできにならなかった。

アブー・ハージムは伝えている

私は、アブー・フライラが何度も指差しながら次のように言うのを聞いた。

「アブー・フライラの生命を御手にする方に誓って！

アッラーの預言者及び彼の家族の者は、小麦のパンを三日間もつづけて食べることができたことはなかった。

この状態はみ使いが世を去るまで変わらなかった」

シマークは伝えている

ヌウマーン・ビン・バシ言いルは次のように話した。

「あなたたちは、思いのままに、食べたり、飲んだりしないのですか。

私は、かつて、あなたたちの預言者が、腹を満たすために食べるべき、なつめやしの質の悪い実すらも入手できなかったのを見たことがあります」

シマークによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには「あなたたちは、なつめやしの実とバターの質に満足してない（ようであるが）」と記されている。

シマーク・ビン・ハルブは伝えている

私はヌウマーンが次のように語るのを聞いた。

「ウマルは、この世で人々が、どのような運命をたどるかについて言及し、そのあと、『私は、アッラーのみ使いが、空腹を満たすため食べるべきなつめやしの粗末な実すらもなく、一日中身をよじるようにしてお過しになるのを見たことがあります』と言った」

アブー・アブドル・ラフマーン・ビン・フブリーは伝えている

或る男が、アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースに「我々は、（マッカから）移住してきた貧困者の仲間ではありませんか」と言った。

アブドッラーは、この時、彼に「一緒に暮している伴侶がおられるか」ときき、彼が「はい」と答えると、更に、「住む場所をお持ちか」ときいた。

彼が、これにも「はい」と答えると、アブドッラーは「それでは、あなたは富裕者の一人です」と言った。

彼が、また「私には召使いもいます」と言うと、アブドッラーは「それでは、あなたは王候なみです」と言った。

そしてまたアブー・アブドル・ラフマーンは、語っている。

私が、アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースの処にいた時、三人の男がやって聞いて
「アブー・ムハンマドよ、アッラーに誓って！
我々には生活の糧も乗用家畜も財産もなく、なにもできない」と訴えた。
それに対し、彼は次のように言った。
「あなたたちが望む通りにしてあげます。
私たちの処にくれば、アッラーがあなたたちに役立て給うものをさし上げます。
もし望むならば、あなたたちのことを支配者に話して援助するよう取りはからいます。
ただ、あなたたちは、もし望むならば忍耐強さを示すことも可能です。
と言うのは、アッラーのみ使いがかつて『移住してきた貧困者たちは、復活の日、裕福な
者たちよりも 40 年も先に天国に入ることができる』と言われたのを聞いたからです。」
すると、彼らは、「それならば、我々は忍耐して、なにも要求しないことにします」と言った。

非道を行なった者らの居住地に関して

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、ヒジュル（注）の人々に関し次のように言われた。

「アッラーによって罰せられたこれらの人々の居住地には、涙を流し泣きながら入らねばならない。

もし泣く気になれない場合には、そこに入ってはならない。

そうすれば、彼らがおち言ったような災いを受けることはない」

（注）タブーク遠征と関連する事件が起った処と言われる

イブン・シハーブは伝えている

彼は、ヒジュル、即ち、サムード族の石の多い居住地について言及し次のように話した。

サーリム・ビン・アブドッラーは、アブドッラー・ビン・ウマルの話を次のように語っている。

「我々は、アッラーのみ使いと共に、ヒジュルの居住地を通りかかった。

この時、み使いは、『自分たち同士で非道を行なったこれらの者らの居住地には、涙を流して泣かないかぎり、入ってはならない。

彼らを襲った同じ災いに襲われぬよう注意しなさい』と言われた。

み使いは、その後、ラクダを急がせ、早々に、その場所を去って行かれた」

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

人々は、アッラーのみ使いと共々、ヒジュル、即ち、サムード族の居住地に野営した。

人々は、そこにある井戸で喉の渇きを癒し、その水を使って粉を練った。

すると、アッラーのみ使いは、その井戸から汲んだ水をまき散らし、練り粉をラクダに食べさせるようにと命じた。

そして、雌ラクダが水を飲むために、度々、やってくる別の井戸から飲み水を汲むよう指示なさった。

前記と同内容のハディースは、**ウバイドッラー**によっても別の伝承者経路で伝えられるが、それには「他の井戸から水をくみ、それで粉を練りなさい」と記されている。

寡婦、貧者、孤児への善行について

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。

「寡婦や貧窮者らに与えるために稼ぐ努力をする者は、アッラーのため努力する者である」

私が思うに、み使いは、こうも言われた。

「そのような者は、礼拝のため立ちつづける者、そして、断食を中断なくつづける者と同じである」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「孤児の面倒を、彼が親族の一員であるなしに関わらずよくみてやる者は、私と共に、このように、天国に住むであろう」

口述者の一人、マーリクは、人差し指と中指とを合わせてその様子を示した。

モスク建造の功徳について

ウバイドッラー・ハウラーニーは伝えている

ウスマーン・ビン・アッファーンはアッラーのみ使いのモスクを再建した時、人々が、あれこれと噂するのを聞いた。

その折、ウスマーンは次のように語った。

「あなたたちは、なにかと多く噂しているが、私は、アッラーのみ使いが『（アッラーに嘉せられんことを願って）モスクを造った者に対し、アッラーは、天国でそれと同じものを彼のためお造りになる』と言われたのを聞いたことがある」

これに関連し、口述者の一人ハールーンは、「アッラーは、彼のため、天国に一軒の家をお造りになる」と記している。

マフムード・ビン・ラビードは伝えている

ウスマーン・ビン・アッファーンは（マディーナの預言者）モスクの再建を決心したが、人々はこれを嫌い、元のままの形にしておきたいと望んだ。

ウスマーンは、この折、「私は、アッラーのみ使いが『アッラーのモスクを造る者のために、アッラーは、それと同じものを天国でお造りになる』と言われるのを聞いた」と語った。

前記と同内容のハディースは、**ジャウファル**によっても伝えられるが、これには、「アッラーは、彼のため、天国に一軒の家をお建てになる」と記されている。

貧困者への喜捨について

アブー・フライラは伝えている

或る人が、たまたま荒地にいた時、雲の間から「なにがしの庭園に濯漑を行なえ」と命ずる声を聞いた。

その後、雲は動きを変え、その石ころの多い大地に雨を降り注ぎ、そこの土地の水路の一つを降水で満たした。

彼が、その水路に従って進んでいくと、一人の男が庭園で鋤を手にして水の流れを変える仕事をしていた。

彼はその男に「アッラーのしもべよ、あなたの名を聞かせて下さい」と言った。

その男は、「なにがしです」と答えたが、それは雲の間から彼が聞いた名前と同じであった。

この時、その男が、彼に 「アッラーのしもべよ、どうして私の名前を聞くのですか」と言ったので、彼は「雲の中から、その水について、あなたの名前と同じの『なにがしの庭園を濯漑しなさい』と言う声を聞いたのです。

このアッラーからの恩恵に対し、あなたは、どうなさるつもりですか」と言った。

すると、その男は「もしあなたの言う通りであるならば、私は大地からの収穫物の様子をみてから、その三分の一を喜捨し、三分の一を私と私の家族で食べ、残りの三分の一を大地に戻して次の収穫の種に使います」と答えた。

前記と同内容のハディースは、**ワフブ・ビン・カイサーン**によっても別の伝承者経路で伝えられるが、それには「私は、三分の一を貧者や困窮者及び旅行者のために役立てます」と言う言葉がみられる。

アッラー以外を尊崇する者及び誇示する者に関して

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。
「アッラーはこう言われた。
私は、唯一の存在であり、いかなる同格者も必要としない。
私に他のなにものかを同格者として配する者があれば、私は、その者及び同格者として配された者をみすてるであろう」

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。
「もし（自分の行為を）宣伝する者があれば、アッラーは、彼の欠陥を公表なさる。
また、もしなにかを誇示する者があれば、アッラーは彼の欠陥を暴露なさる。」

ジュンドゥブ・アラキーは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。
「自らの行為を宣伝したいと願う者に関し、アッラーは、彼の欠陥を公表なさる。
また、自らを誇示したいと願う者に開し、アッラーは、彼の欠陥を暴露なさる」

前記と同内容のハディースは、**スフヤーン**によってもても別の伝承者経路で伝えられるが、これには、「私は、アッラーのみ使いの言葉を、彼（ジュンドゥブ）以外の誰からも聞かなかった」と記されている。

サラマ・ビン・クハイルは伝えている

私は、ジュンドゥブが「私は、アッラーのみ使いがこう言われるのを聞いた」として語ったハディースを彼以外の誰からも聞かなかった。
前記と同内容のハディースは、**サドゥーク・**アーミンや**ワリード・**ビン・ハルブらによっても別の伝承者経路で伝えられている。

言葉に注意することについて

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「しもべは、その話した言葉によっては、その距離が東と西の間よりも、更に遠い地獄におとされる」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「しもべは、その話す言葉によっては、たとえそれがどんな影響をもつか知らなかったとしても、東西間よりももっと遠い距離にある地獄におちることになる」

自ら善を行わない者に関して

シャキークは伝えている

ウサーマ・ビン・ザイドは、「どうしてウスマーンを訪ね、彼と話し合わないのですか」と言われた時、次のように語った。

「私があなたに報告してない故に、私が彼と話し合ってないと思っているのですか。

アッラーに誓って！

私は、私と彼に関係する事柄について話し合いました。

しかし、私が、率先してやらねばならなかったことを話し合いたくはなかったのです。

また、私は、私の支配者である彼に対し、『あなたは、最良の方です』と言う気にはなれませんでした。

それにしても、私はアッラーのみ使いがかつて次のように言われた話を今更に思い出します。

即ち『復活の日、或る男が連れ出され業火の中におとされる。

そして、自らの腸をひきずりながら、丁度、ロバが、石臼のまわりをまわるように、地獄をまわることになる。

その時、地獄の住民らが彼の傍に集まり、“某よ、どうしたのか、お前は私たちに善を行なえと命じ、悪を禁じたのではなかったのか”と言うと、

その男は“その通りです。

私は人々にいつも善を行なうよう命じたが、私自身ではそれを行なわなかったのです。

人々には悪を禁じたが、私自身がそれを行なったのです”と答えることだろう』と」

アブー・ワーイルは伝えている

私が、ウサーマ・ビン・サイドの処にいた時、或る男が来て、「どうしてウスマーンを訪ねて、彼の行為について話し合わないのですか」と言った。

以下は前記ハディースと同内容である。

罪を公表することについて

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「私のウンマの者は、全て、犯した罪を許されるが、しかし、それを公表した者らは除かれる。

それらの者は、夜行なったことを朝になって人々にしかじかのことを昨日行なったと、アッラーが隠しておかれたにも関らず、公表するしもべらであり、また、昼間行なったことを夜になってから人々に、アッラーが隠しておかれたにも関らず、公表するしもべらである」

くしゃみと欠伸に関して

アナス・ビン・マーリクは伝えている

二人の男が預言者の前でくしゃみをした。
その時、預言者は、一人に対しては、「アッラーが、あなに祝福を与えますように」と言われたが、別の一人に対しては何も言われなかった。
それでこの時、祈ってもらえなかった男は「某が、くしゃみをした時には、あなたはアッラーの祝福を彼のため祈ったのに、私のためには祈って下さいませんでした」と言った。
すると、預言者は、「あの男は、くしゃみをした時、"アッラーを讃えます！"と唱えたが、あなたは、アッラーを讃えなかったからです」と言われた。

アナスによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・ブルダは伝えている

私は、アブー・ムーサーを訪ねたが、彼はその時、ファドル・ビン・アッバースの娘の家にいた。
その折、私はくしゃみをしたが、彼はなにも言わず、彼女がくしゃみをした時「アッラーの祝福がありますように！」と唱えた。
私は家に戻ってから、母にこのことを話した。
その後、彼が母の家を訪ねてきた時、母は彼に「あなたの処で、私の息子がくしゃみをした時、あなたはなにも唱えず、彼女がくしゃみをした時だけ"アッラーの祝福がありますように！"と唱えたのはどうしてですか」と聞いた。
それに対し、彼は、次のように答えた。「あなたの息子はくしゃみをした時、アッラーを讃えませんでした。
それで、私はなにも言わなかったのです。
彼女は、くしゃみをするとすぐに『アルハムドリッラー！（アッラーを讃えます！）』と唱えたので、私はあの言葉を言ったのです。
アッラーのみ使いは『くしゃみをした時にはアッラーを讃える言葉を唱え、それに対し、他の人々は"アッラーの祝福があらんことを！"と言いなさい。
もしも、アッラーを讃える言葉を言わない場合、アッラーの祝福をその人のため祈願する必要はありません』と言われました」

イヤース・ビン・サラマ・ビン・アクワウは、彼の父から聞いて伝えている

或る男が、預言者の処で、くしゃみをした時、預言者は「アッラーが祝福されんことを！（ヤルハムカッラー！）」と言われた。
その男が、またくしゃみをすると、アッラーのみ使いは、「彼は、風邪をひいている」と言わ

れた。
（この折には、なにもをお唱えにならなかった）

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「欠伸は悪魔（シャイターン）によって起こされる。
それ故、欠伸が出そうになった場合には、できるかぎりそれを押えるようにしなさい」

スハイル・ビン・アブー・サーリハは伝えている
アブー・サイード・フドリーの息子は、彼の父から聞いて、私の父にアッラーのみ使いの言葉をこう語った。
「欠伸をする時には、手で口を押えなさい。
なぜなら、悪魔が口の中に入り込むからです」

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・サイードは、彼の父から聞いて伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「欠伸が出そうな場合には、手で口を押えなさい。
そうしないと、シャイターン（悪魔）がそこに入りこみます」

アブー・サイード・フドリーの息子は、彼の父から聞いて伝えている
アッラーのみ使いは言われた。
「礼拝の折、欠伸が出そうになった時には、できるかぎり、押えてがまんしなさい。
そうしないとシャイターンが入り込みます。」
アブー・サイードによる前記と同内容のハディースは他の伝承者経路でも伝えられている。

有名なハディースに関して

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「天使は光から創られ、ジンは炎から創られ、アダムはクルアーンに記述されている方法で創られる（即ち、粘土から創られる）」

ねずみに変態することについて

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「イスラーイール族の或るグループが消えた。

なにが起ったのか私にはわからないが、ねずみに変態したと思う。

ラクダのミルクがねずみの前に置かれても、ねずみはそれを飲まないが、山羊のミルクが置かれると、それを飲むのを見ませんでしたか」

これに関連しアブー・フライラは、次のように述べている。

「私はこのハディースをカウブに話した。

すると彼は、『あなたは、それをみ使いから直接聞いたのですか』と言い、私が『はい』と答えると、彼は何度もこの言葉を繰り返した。

それで、私は彼に、『私がトーラ（旧約聖書）を読んだとでも思っているのですか（注）』と言った」

（注）アブー・フライラは、彼の知識がみ使いの言葉によるもので、トーラから得られたものでないことを強調している。

なお、イスラーイール族にはラクダのミルクと肉の飲食は禁じられている

アブー・フライラは伝えている

「ねずみは、バヌー・イスラーイールの或るグループの変態である。

その証拠は、羊のミルクがねずみの前に置かれると、ねずみはそれを飲むが、ラクダのミルクが前に置かれても、ねずみはそれを全くなめようともしない」

カウブが、彼に、「これを、アッラーのみ使いからきいたのですか」ときいた時、彼は、「トーラが、私に啓示されたとでも思うのですか」と言った。

二度と欺かれないことに関して

アブー・フライラは伝えている

預言者は言われた。

「信仰者は、同じ落とし穴に二度と落ちてはならない。

（同じ奸計に二度と欺かれてはならない）」

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

信仰者の行為が祝福されることについて

スハイブは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「信仰とは、まことに不思議なものである！

なぜなら、信仰者の全てに祝福がみられるからである。

それらは、実際、信仰者以外には誰にもみられることではない。

たとえば、なにか喜ばしいことがあってアッラーに感謝すれば、そのことで良いことが生じ、

また、困難があっても忍耐すれば、そのことで良いことが生ずるのである」

人を過度にほめないことについて

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクラは、彼の父から聞いて伝えている

或る人が預言者の前で、他の男のことをほめそやした。

その時、預言者は、「気をつけなさい！

あなたは、その友人の首の骨を折ることになりますよ！

その友人の首の骨を折ることになりますよ！」と繰り返して言われ、

「もしも友人を絶対にほめねばならない時には、次のように言いなさい。

『私は某はこうだと思います。

アッラーがよくご存知であります。

私にはしかじかにみえますけれど、アッラー以上に純粋に人を判断することはできません』」

アブドル・ラフマーン・ビン・アブーバクラは、彼の父より聞いて伝えている

預言者のいる処で或る人物のことが話題になり、一人の男が「アッラーのみ使い様、あなたを除き、あの人以上にこれこれの点で優れた人はいません」と言った。

すると、預言者は、「気をつけなさい！

そのようなことを言うと、友人の首の骨を折ることになります」と言われ、この言葉を何度も繰り返された。

そして後、み使いは、次のように言われた。

「もしあなたたちが、兄弟をどうしてもほめねばならない時には、『彼は、しかじかであると私は思います』と言いなさい。

更にまた、このように言う場合でも『私には、アッラーほど純粋に人を判断することはできません』と言いなさい」

前記と同内容のハディースは、**シュウバ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・ムーサーは伝えている

預言者は、或る男が、他の男をほめ、度が過ぎるほど賞揚しているのをごらんになった。

その折、預言者は、「そのような言葉を使うと、人を殺すことになる。

または、人の背中を裂くことになる」と言われた。

アブー・マアマルは伝えている

或る男が、立ち上がって支配者の一人を賞讃した。

すると、ミクダードは、彼に土を投げつけ始めた。

そして後、「アッラーのみ使いは、私たちに、『過度に、人をほめたたえる者の顔に、土を投げつけよ』と命令なさった」と言った。

ハンマーム・ビン・ハーリスは伝えている

或る男がウスマーンを讃美した時、ミクダードは近づいていって、太ったその男の膝の上に座り、小石を彼の顔に投げつけ始めた。

その様子をみたウスマーンが「どうしたのか」と聞くと、ミクダードは「アッラーのみ使いは、『他人をほめたたえる者らを見た時には、彼らの顔に土くれを投げつけよ』と言われた」と答えた。

前記と同内容のハディースは、**ミクダード**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

年長者を優先することについて

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「私は次のような夢をみた。

私がミスワークの小枝で歯をみがいていた時、二人の男が、そのミスワークを得るため互いに争った。

その中の一人は、他よりも年長者だった。

私は、若い方の男にそのミスワークをわたした。

しかし、その時、『年長者の方に与えよ』と告げられたので、私はそれを年長者に与えた」

明瞭に話すこと及びハディースを書き記さないことについて

ヒシャームは、彼の父から聞いて伝えている

アブー・フライラは、アーイシャが礼拝をしている時でも、しばしば、「部屋の主人よ、私の話を聞いて下さい！

部屋の主人よ、私の話を聞いて下さい！」と言って声を掛けていたものである。

ある時、彼女は礼拝を終えるとウルワに「彼の言葉を聞きましたか。

彼の話し方は、アッラーのみ使いの話し方に似ています。

み使いは、誰かが言葉の数を数えようとすればそれが可能なほど、一つ一つの言葉を明瞭に発音されました」と語った。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは言われた。

「私の話す言葉を書き記してはならない。

クルアーン啓示以外に、私が話した言葉を書き記した者はそれを消去しなさい（注）。

私の話した言葉は、人々に伝えなさい。

そのことはなんら構いません。

また、私の言葉に

（ハンマームは「み使いは、“意図的に”と言われたと思う」と述べている。）

嘘をまじえて語る者は、実際、地獄に住む場所を得ることになります」

（注〉クルアーン啓示と預言者の言葉が混同されぬよう注意したのである

溝にとび込む人々、魔術師、修道士、少年の物語について

スハイブは伝えている

アッラーのみ使いは、次のように話された。

「あなたたちの時代以前に、一人の王がおり、宮廷魔術師をかかえていた。

その魔術師は老齢となったので、王に『私は年をとりました。

それ故、少年一人をよこして下されば、私の魔術を伝授します』と言った。

それで王は、少年一人を送り、魔術の訓練をうけさせることにした。

魔術師の許に行く途中、その少年は、一人の修道士が道端に座っているのを見た。

少年は、その修道士の話を聞き感銘を受けた。

それで少年は、魔術師の許に通う途中いつもその修道士の傍に座って話を聞くようになった。

そのため、魔術師の処には、遅れて着くようになった。

魔術師は、少年が遅刻する度に怒り、少年をなぐった。

その少年は、このことを修道士に告げ愚痴った。

すると修道士は少年に、『もし、魔術師を恐れるならば、“私の家族がひきとめたため遅れたのです”と言いわけをしなさい。

また、家族の者に怒られるのが心配であれば、“魔術師がひきとめたのです”と言いなさい』と教えた。

このような状態がつづいた或る日のこと、一匹の大きな野獣が路上に現われた。

そのため、人々は通行できなくなった。

少年は、『今日こそ、私は、魔術師がより秀れているのか、それとも、修道士がより秀れているのかを知りたいと思う』と言って石をひろい、

『アッラーよ、もしも修道士の行ないを魔術師の行ないよりも好まれるのであれば、人々が道路を自由に通れるよう、この動物を私の手で殺させて下さい』と言ってからその石をそれにむけて投げつけた。

その動物は死んだ。

このお蔭で人々は、道を自由に通りはじめた。

少年は、修道士の処に行きこのことを話した。

すると修道士は『少年よ、お前は、今日、私よりも優れた者になった！

お前は私のみるところ、様々な試練を受ける時期に達したと思う。

もし試練を受けることになっても、私のことを誰にもしゃべってはならない』と言った。

その少年は、盲人やらい病者たちのために尽すようになり、実際、人々を全ゆる病気から回復せしめるようになった。

王の盲目の侍従の一人は、彼の噂を聞き、多くの贈物をたずさえて彼の処に行き、『もしも、あなたが私を治してくれたならば、これらの物を全てあなたに差しあげます』と言った。

少年は、これに対し、『私自身は、誰をも治すことはできません。
アッラーが治療なさるのです。
それ故、もしもあなたが、アッラーに対する信仰をもつのであれば、あなたが治るよう私からもアッラーに祈願します』と言った。
それで、侍従は、アッラーを信仰することになり、アッラーは彼の病を快復せしめた。
その侍従は、王の許に行き、以前と同じように、王の近くに座った。
王は、『誰がお前の視力を回復したのか』とたずねた。
彼が『私の主です』と答えると、王は、『それは、私が信ずる主とは異なり、お前には別の主がいるという意味か』とたずねた。
それに対し、彼は、『私の主とあなたの主は、アッラーです』と答えた。
そのため、王は、彼を捕え拷問に付した。
その時、彼は、少年のことを白状した。
その少年は、王に呼び出された。
王は、『少年よ、お前は、魔術に大層上達し、盲人やらい病者を治し、別にもこれこれのことをしていると私は聞いている！』と言った。
少年は、この時『私は、誰をも治してはいません。
アッラーが治療なさるのです』と答えた。
王は、少年を捕らえ拷問を加えた。
そのため、少年は、修道士のことを白状した。
それで、修道士が呼び出された。
そして『お前の宗教をすてよ』と命じられたが、彼は拒否した。
王は、鋸を持ってくるように命じ、それを彼の頭の真中に当て、そこから胴体まで切り裂いて倒した。
その後、王の侍従が呼ばれ、『お前の信仰をすてよ』と命じられたが、彼もそれを拒否したため、鋸を頭の真中に当てられ、胴体まで二つの部分に切り裂かれて倒れた。
そのあと、少年が呼ばれ、『お前の信仰をすてよ』と命じられたが、彼がそれを拒否したので、王は家来にその少年をひきわたした。
王は、この時、彼らに、この少年をしかじかの山につれて行き、その山に登らせ山頂に着いた時、信仰をすてるよう命じ、もしそれを拒否した場合にはその山から投げ落せ』と命じた。
それで、彼らは、その少年をつれて行き山に登らせた。
少年はこの時、『アッラーよ、もしあなたがそうお望みならば、私を助けて下さい！』と祈った。
すると、山が震動し始め、彼らは全員、その山から落ちて死んでしまった。
その少年だけは生き残り、王の許に歩いて帰った。
王が『お前と一緒に行った者らは、どうしたのか』と聞いた時、少年は『アッラーが私を、彼

らから救って下さった』と告げた。
王は再び、少年を家来たちにひきわたし、『彼をつれて行き、小舟にのせて海の中ほどに着いたならば、信仰をすてるよう命じ、もしそれを拒否した場合には、海中に投げこめ』と命じた。
彼らは少年をつれて舟にのせた。
その時、少年は『アッラーよ、もしあなたがそう望むならば、彼らから私を助けて下さい』と祈った。
すると、その舟は転覆し、彼らは全員おぼれ死んだ。
それで、少年はまた歩いて王の処に行った。
王は、少年に『お前と一緒に行った者らはどうしたのか』と聞いたが、少年は『アッラーが、彼らから私を救って下さった』と告げた。
そのあと少年は、王に『私が命ずる通りにしないかぎり、あなたには私を殺すことはできない』と言った。
王が『それはなにか』と聞くと、少年は『人々を一つの台地に集めた後、私を木の幹につるし、矢立から一本の矢をとり“少年の主、アッラーの御名によって！”と唱えてから矢を放ちなさい。
そうすれば、私を殺すことができます』と言った。
それで、王は、人々を一つの台地に集め木の幹に彼をしばりつけた後、矢立から一本の矢をとり出して、その矢を弓に合わせた。
そして後、『少年の主、アッラーの御名によって！』と唱えながら矢を放った。
その矢は、少年のこめかみに当った。
少年は矢の当ったそのこめかみに手を当てながら死んだ。
それをみた人々は、『私たちは、この少年の主を信じます！
私たちは、この少年の主を信じます！』と言った。
家来たちは、王の処に来て、『あなたが警戒していたことがどうなったのか、ごらんになりましたか。
アッラーに誓って！
アッラーはあなたが警戒し、恐れていることをなさったのです。
人々は主を信仰しています』と告げた。
王は、主要な道路の出口に、溝を掘るよう命じた。
その溝が掘られた時、その中に火がつけられた。
その後、人々は、『あの少年と同じ信仰をすてない者は、火の中に投げ込まれるであろう。（もしくは、火の中にとび込め）』と告げられた。
人々は、信仰をすてるよりは死を選んだ。
子連れの或る女性は、火中にとび込むのを恐れ躊躇していたが、その子供に『母よ、試

練に耐えなさい！
あなたは正しいのです』と励まされた」

ジャービルの長いハディースとアブー・ヤサルの物語について

ウバーダ・ビン・ワリード・ビン・ウバーダ・ビン・サーミトは伝えている

私と父は、或るアンサールの部族の処へ、預言者の教友たちが世を去る前にハディースの知識を得たいと願って、訪問の旅に出た。
私たちが、最初に会った人は、アッラーのみ使いの教友の一人アブー・ヤサルであった。
その時、彼と一緒に、一人の召使いの少年がおり、書類の束をもっていた。
アブー・ヤサルは、この折、マアーフィル部族によって作られた外套を着ていたが、彼の召使いの少年も同様であった。
私の父は彼に「小父上、怒ったような顔をしていますがどうしたのですか」と聞いた。
すると彼は次のように話した。
「その通りです。
ハラーム族の某の息子の某が私に借金しているので、私は彼の家族の家に行き、挨拶してから、『彼は、どこにいるのか』と聞いたのだが、『彼はいません』と彼らは答えたのです。
ところが、そのあと、まだ少年になりかけの彼の息子が出てきたので、私がまた『お前の父上はどこか』と聞いてみると、その少年は『あなたの声を聞くと、父はすぐ母の寝台の後に隠れました』と言ったのです。
それで私は『出て行きなさい。
どこにいるのかわかっています』と叫んだのです。
それで彼が出て来たので、私は『どうして私から隠れようとするのか』と言いました。
彼はそれに対し、『アッラーに誓って！
私はあなたに嘘をつきたくなかったのです。
アッラーに誓って！
また、嘘をつかねばならなくなるのを恐れていたのです。
あなたがアッラーのみ使いの教友の一人だというのに、そのあなたに約束したことを破らねばならなかったからです。
アッラーに誓って！
私には金がないのです』と言ったのです。
私がそれに対し『アッラーにかけて、それは事実ですか』と言うと、彼は『アッラーにかけて、事実です』と答えました。
私が更に、『アッラーにかけて、事実ですか』というと、彼はまた『アッラーにかけて、事実です』と言いました。
また、更に、私は『アッラーにかけて、事実ですか』と聞き、彼はそれにも「アッラーにかけて、事実です」と答えました。
（アブー・ヤサルはつづけて語った）
私はその時、支払いを約束した書類をもっていたので、その借金の記録を手で消去した。

そして、そのあと次のように言いました。
『支払いができるようになったら私に払いなさい。
できなければ返済しなくてもよい。
私のこの両目が見、ーこの時、アブー・ヤサルは、両目の上に指を置いたー私のこの二つの耳が聞き、そして、私の心が記憶して、ーこの時、彼は心臓の方を指差したーアッラーのみ使いの次の言葉に対し、私の行為を証言するでありましょう。
み使いは、“金に困っている者に対し、返済の期限を延ばしてやる者、または、借金を帳消しにしてやる者を、アッラーはその日蔭で覆って下さるであろう”と言われました』」

私は、その折、彼に、「小父上、もしあなたが、あなたの召使いの少年の外套をとり、彼にあなたの二枚のマアーフィル製の衣類を与えるか、または、彼の二枚のマアーフィル製の衣類をとって、その代りにあなたの外套を彼に与えれば、あなたも彼も上下一式の衣服をもつことになりませんか」と言った。
すると小父は、私の頭をなでてから次のように言った。
「アッラーよ！
私の兄弟の息子を祝福し給え！
甥子よ、私のこの両目が見、私のこの両耳が聞き、私のこの心がそのことを記憶しているが、ーこの時、彼は、心臓の方を指差したーアッラーのみ使いは『あなたたちが食べるものと同じものを彼（召使い）らに食べさせなさい。
あなたたちの着るものと同じものを彼らに着せなさい』と言われた。
もし、私が、召使いに現世の品々を与えることが、私の善行の一つとして、復活の日、取りあげられるとしたら、私にとってこれほどたやすいことはありません」

その後、私たちは先を進み、ジャービル・ビン・アブドッラーを彼のモスクに訪ねた。
その時、彼は、一枚の衣を身体にまとっただけの姿で、礼拝をしていた。
私は、人々の間を通って前に出、彼とキブラ（礼拝の方角）を示す壁との間に座った。
そして、「アッラーが、あなたに慈悲を給わられんことを！」と言ってから、「あなたは外套を横に置き、衣服一枚のままで礼拝なさるのですか」と聞いた。
すると、彼は、手で私の胸の方を、丁度、このように指差してから、その指を広げて弓の形に曲げてみせた。
そして後次のように語った。
「私は、お前のような何も知らない者は、私の処に来て、私のやり方を見、それを真似すればよいのにと願っている。
アッラーのみ使いは、この私たちのモスクにおいでになった。
その時、手には、なつめやしの木の枝をもっておられた。
み使いは、モスクのキブラの方角に唾の粘液がついているのをみつけ、小枝でそれを取

り除かれた。
その後、私たちの処に聞いて、『あなたたちのうち、アッラーに顔をそむけられてもよい者がいるか』と言われた。
私たちはこの言葉を聞いた時、恐れを感じた。
み使いはまた、『あなたたちのうち、アッラーに、顔をそむけられてもよい者がいるか』と言われた。
み使いは更にまた、繰り返して『あなたたちのうち、アッラーに顔をそむけられてもよいと思う者がいるか』と言われた。
我々は、この折、『み使い様、私たちのうち、誰もそうは思いません』と答えた。
み使いは次のように言われた。
『あなたたちの誰かが、礼拝のため起立する時には、アッラーが、彼の前におられるのであるから、前方及び右側に唾をはいてはならない。
唾を吐く時には左側の足元に吐きなさい。
また、突然、そうせざるを得なくなった時には、このように布の中に唾を吐きなさい』
そう言いってみ使いはその布を折りたたんだ。
み使いは、その後、『ザフラーン入り香料をもってきなさい』と言われた。
私たちの部族の若者が、急いで家族の処に行き、手のひらにその香料を入れてもってきた。
み使いはそれをとり、なつめやしの小枝の先にそれをつけてから、唾の粘液がついていた場所をその小枝でなでつけお清めになった。」
これに関連し、ジャービルは「モスクで香料を使うのは、このためである」と述べている。

「私たちは、アッラーのみ使いと共にバトヌ・ブワート山に遠征した。
マジュデー・ビン・アムル・ジュハンニーを追跡するためであった。
（装備が貧弱で）私たちには、五人、六人または七人に一頭の割りで乗れるラクダしかなかった。
私たちは、順番にそれに乗って進んだ。
アンサールの或る男がラクダに乗る番となった時、彼はラクダをひざまづかせて乗り、その後、立ち上がらせようとしたが、ラクダは、言う事を聞こうとしなかった。
その男は、舌打ちし『アッラーに呪われてしまえ！』と言った。
これを聞いたみ使いは、『ラクダを呪った者は誰か』と言われ、その男が 『み使い様、私です』と答えると、『ラクダから降りなさい。
呪いをかけるような者を我々の仲間にはしたくない。
自分自身と自分たちの子供、また、身内の者や所有物などを呪ってはいけない。
アッラーが、あなたたちの願ったものを与えようとし、また、祈願に答えようとなさっている時と、あなたたちの呪いをかけた時とが同時になる可能性があるからです』と言われた。」

（ジャービルはつづけて語った）

「我々は、アッラーのみ使いに同行し、夕方にアラビアに古くからある貯水池の近くにきた。
この時、み使いは、『誰か先行して、貯水場を修理し、水を飲んでから、それを我々にも飲ませてくれる者はいないか』と言われた。
私は、この時、立ち上がり『み使い様、私が、それを準備します』と言った。
すると、み使いは『ジャービルと一緒に行く者はいないか』と言われた。
それで、ジャッバール・ビン・サフルが立ち上がった。
その後、我々は、その井戸に行き、水場に容器で一～二杯水を注いでから、粘土で固めて補修した。
そして水をくみはじめて縁まで一杯にした。
我々の前に、最初に見えたのは、アッラーのみ使いであった。
み使いが「水を飲んでもよろしいか」と言われたので、私は、「はい、み使い様」と答えた。
み使いは、ラクダをひっぱって来て水を飲ませた。
そのあと手綱をひいて、後にさがらせたが、ラクダはこの時、足を広げて放尿しはじめた。
み使いは、ラクダを横の方につれてゆき、別の場所にひざまづかせて休ませてから、水場に来てウドゥーをなさった。
私も、また、立ち上がって、み使いと同じように、ウドゥーを行なった。
ジャッバール・ビン・サフルは、トイレのため出て行った。
み使いは、礼拝のため立ち上がった。
私は、この時、外套を着ていたが、それは両端を合わせても短かすぎて、私の身体を覆うほどの長さではなかった。
ともあれ、その外套には、縁飾りがついていたので、外套を裏返しにして、両端を合わせ、首の処で結んだ。
そのような恰好で私はみ使いの左側に立ったが、み使いは、私の手をつかみ、後まわりに私を右側に立たしめた。
その時、ジャッバール・ビン・サフルも来て、ウドゥーを行ない、その後、み使いの左側に立った。
するとみ使いは、私たち二人の手をつかみ、後方に押しやってみ使いの背後に立たせた。
み使いは、その後、私をじっとごらんになったが、私は、初め、それに気づかなかった。
そして、私が気づいた時、手で『こうしろ』と合図なさった。
それは、腰巻きをきつくしばるようにとの合図であった。
み使いは、礼拝を終えると『ジャービルよ』とよばれ、私が『み使い様、お側におります』と答えると、『もしも、衣服が大きすぎたなら、両端を結んできつくしめるようにしなさい。
もし短かすぎた場合には、下半身だけでもきちんと覆うようにしなさい』と言われた。」

（ジャービルはつづけて語った）

「我々は、アッラーのみ使いに従って遠征したが、我々全員のための食物は、一日一ケのなつめやしの実にすぎなかった。
我々は、それをしゃぶり、そのあと、服の中にしまいこんだ。
それとは別に、我々は弓を使って木の葉をたたき落として食べもしたが、そのため口のまわりが傷ついた。
或る日、一人の男が、うっかり見落とされて、なつめやしの実を与えられなかったことがあった。
その折、我々は、すっかり消耗して弱っている彼をつれてゆき、彼がまだ受け取ってないことを証言したが、その証言によって彼はようやく、立ち上がってそれを受け取ることができたのであった。」

（ジャービルはつづけて語った）

「我々は、アッラーのみ使いに従って、遠征し、或る広い谷間でラクダから降りた。
ここで、み使いは、トイレのため出て行かれた。
私は、水を一杯入れた容器をもってついて行った。
み使いは、あたりをみまわし、谷のはずれの二本の木以外にトイレのため身をかくす処がないのを知り、その一方の木の処に行って、小枝の一本をとり、『アッラーのお許しのもと、私に従いなさい』と言われた。
すると、その木は、ラクダが鼻綱をとられて乗り手に御せられるように、み使いに従った。
み使いは、更に、別の木の処に来て、木枝の一本をとり『アッラーのお許しのもと、私に従いなさい』と言われた。
すると、その木も同様にみ使いに従った。
み使いは、両木の真中頃にきた時、二本の小枝を合わせてから『アッラーのお許しのもと、並んで立ちなさい』と言われた。
そのため二本の木は、隣り合って並び立った。
私は、この時、アッラーのみ使いが私が近くにいることに気づき、更に遠くに行かれるのではないかと一人で心配しながら座っていた。
そして、しばらくしてから、あたりをなに気なくみまわすと、み使いがなんと目の前に立っておられるのに気づいた。
二本の木は、元通りの場所に離れて立っていた。
み使いは立ったままで頭をこのように、かたむけておられた。
（口述者の一人アブー・イスマーイールは、彼の頭を右、左にむけた。）
そのあと、ふり返って、私の処においでになり、『ジャービルよ、お前は、私が立っていた

場所を見たか』と言われ、私が『はい、み使い様』と答えると、『それでは、あの二本の木の処に行き、それぞれから小枝を切りとって、私が立っていた場所にもって行き、そこに立って、右と左に一本づつその小枝を植えなさい』と言われた。」

（ジャービルは語った）

「それで、私は石をとって割り先を鋭くしてから、二本の木の処に行き、それぞれの小枝を切り取った。
そして、それらをひきずって、み使いが立った場所まで運び、その場所の右側と左側に一本づつ小枝を植えた。
そのあと、み使いに会い、『み使い様、言われた通りにしました。
しかし、どうか、その理由を説明して下さい』と言った。
み使いは、それに対し、『私は、二つの墓の傍を通ったが、その墓の主は、今、罰を受けている。
私は、彼らがこれら二本の小枝が枯れることなく生えつづけるかぎり、その罰から解放されるよう、取りなしをしたいと思う』と言われた。」

（ジャービルはつづけて語った）

「私たちは、軍の天幕に帰った。
この時、アッラーのみ使いは『ジャービルよ、人々に、ウドーゥ行うように知らせなさい』と言われた。
私は『来て、ウドゥーを行なえ！
来て、ウドゥーを行なえ！
来て、ウドゥーを行なえ！』と叫んだ。
そして後『み使い様、軍営には、一滴の水もありません』と言った。
たまたま、み使いのために水を小枝につるした水袋に入れて冷やしていたアンサールがいた。
それで、み使いは私に、『しかじかのアンサールの処に行き、その水袋に水があるかどうかみてくるように』と言われた。
私は、その人の処に行き、水袋の中を見たが、中にはなにもなく、その水袋の口のまわりに一滴の水がついているだけであった。
しかも、もし私が水袋を動かせば、水袋の渇き切っている部分がその水滴を吸いとってしまいかねない状態であった。
私は、み使いの許に戻り『水袋の口についている水滴以外、中には水は全くありません。
その水滴にしても、動かせばすぐに吸いとられてしまいます』と言った。

み使いは、この時『行って、それを私の処にもってきなさい』と言われた。
私は、水袋をもってきた。
み使いはそれを手にとり、なにか私にはわからないことを話し始めた。
そして後、手でそれを押してから、私に渡し『ジャービルよ、盥を持って来るよう知らせなさい』と言われた。
私は、軍で使用する盥を持って来るよう皆に知らせた。
それが、運ばれて来た時、私はみ使いの前に置いた。
み使いは、両手をその盥の中に、このようにしてお入れになった。
即ち、み使いは、指を広げ、そのまま盥の底にその指をおつけになった。
そして後、『ジャービルよ、水袋をとり、ビスミッラー！（アッラーの御名によって！）と唱えながら私の手の上に、それを注ぎなさい』と言われた。
それで、私は水を注ぎながら、ビスミッラー！　と唱えた。
すると、アッラーのみ使いの指の間から、水がわきだしてくるのがみられた。
その盥は水をふき出し、すぐに一杯になった。
この時、み使いは、『ジャービルよ、水を必要とする者は、これからくむようにと皆に知らせなさい』と言われた。
そこで、人々は聞いてそれぞれ十分なほど水をくみとった。
私はこの時『まだ、水を欲しい人は残っていませんか』と言った。
み使いは、盥から手をひき出したが、水はまだ十分残っていた。」

（ジャービルはつづけて語った）

「人々は、アッラーのみ使いに、空腹を訴えた。
そのため、み使いは『アッラーが、あなたたちに食物を与えられんことを！』と祈った。
我々が海岸にやってきた時、海は盛り上がり、一頭の巨大な動物を投げあげた。
それで、我々は火を燃やし、その動物の一部を切り取り火に焼いて料理し、満腹するまで十分に食べた。
私と、某々ら五名は、その動物の眼窩に入ってみたが、奥行が深く、出てくるまで、誰も我々を外から見ることはできなかったほどであった。
また、我々は、それの肋骨の一本をとり、半円状に折りまげてから軍隊の中で最も背の高い者を呼んで、軍隊中最大のラクダに大きな鞍をつけて乗らせ、その半円の下を通らせてみた。
しかし、そのラクダに乗った者でも、頭を傾けることなくその下を通りぬけるほど、それは巨大なものであった」

預言者のヒジュラ（聖遷）について

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている

アブー・バクル・シッデークは、私の父の家に来て、鞍を一つ買った。
そして、父に、「あなたの息子にこれを私の家まで運ばせなさい」と言った。
父が、私に運ぶよう命じたので、私はそれを運んだ。
その時、アブー・バクルと一緒に私の父もその代金を払ってもらうため同道した。
この折、父（アーズィブ）は、「アブー・バクルよ、あなたがアッラーのみ使いと共に旅に出た夜、二人がなにをしたのか話して下さい」と言った。
アブー・バクルは「はい」と答えてから、次のように語った。
私たちは、夜の間に出発して、その後、ずっと正午近くまで歩きつづけた。
道には誰も見えず、誰一人として通る人はいなかった。
歩みを進めていると、前方に大きな岩山が見えてき、それには日がさし込まないほど奥行のある窪みがあった。
私たちは、そこでラクダから降りた。
私はそのあと岩の処に行き、手で下の土を平らにして、そこの日蔭で預言者が休めるよう場所を作り、その上に毛布を敷いた。
そして「み使い様、お休み下さい。
私がまわりを見張っています」と言った。
み使いが眠っていたので、私は周囲の見回りに出た。
すると近くに羊を追いながら岩にむかってやってくる羊飼いを見かけた。
彼は、私たちと同じように、この岩かげで休息したいと願っていたのである。
私は、彼に会い「若者よ、どこの地域の者か」と聞いた。
彼は、その時、「私は、マディーナから来た者です」と答えた。
次いで私は「お前の家畜からミルクをしぼれるか」と聞いた。
彼が「はい」と答えたので、私は、ミルクをしぼってくれるよう頼んだ。
彼は承知し、一匹の山羊をつかまえた。
私は、その時「毛やほこりやなにか汚いものがつかないよう乳房をよくふくように」と言った。
バラーウは、こう話しながら、手でどのようにして、汚れをとったかを示すため、軽く他の人に触れる仕草をした。
（ともあれ）彼は、山羊の乳を私のため、彼のもっていた木製のコップの中に少々しぼってくれた。
私も預言者のための飲み水とウドゥー用の水の入った皮袋をもっていた。
私は、その後、預言者の処に戻った。
眠りをさまさないよう気をつけたが、み使いは、たまたまその時、目をさまされた。
それで私は、ミルクに水を加えて冷やしてから、「み使い様、このミルクを飲んで下さい」と

言って差し出した。
み使いが、それを全部お飲みになったので、私は喜んだ。
み使いが、そのあと「もう出発する時間ではないのか」と言われたので、私は「そうです」と答えた。
私たちは、太陽がまだ照りつづける中を歩みつづけた。
スラーカ・ビン・マーリクが、私たちを追跡してきた。
それは、私たちが柔かくて平らな土地を歩いていた時であった。
私は、この折、み使いに、「み使い様、私たちは追いつかれそうです」と言ったが、み使いはそれに対し、「心配することはない。
アッラーは我らと共におられる」と言われた。
み使いは、このあと、スラーカを罰するよう祈られた。
すると、スラーカの乗馬は地面にはまりこんでしまった。
その時、私が思うにスラーカは「私には、あなたたちが、私に罰が下るよう祈ったことはわかっています。
それ放、私を許すよう祈って下さい。
アッラーに誓って！
あなたたちを捜しまわっている者たちを、あなたたちから引き離しますから」と言った。
それで、み使いは、アッラーに祈願なさり、彼は、救われた。彼は、ひき返して行き、その途中で出会った者ら全てに「この方面は私が徹底的に捜した」と告げた。
そのため、彼が出会った者たちは皆ひき返して行った。
彼は、こうして私たちとの約束を守ったのであった。

バラーウは伝えている。
アブー・バクルは、私の父から、鞍を 13 ディルハムで買い求めた。
以下は前記ハディースと同内容であるが、口述者の一人ウスマーン・ビン・ウマルの伝えたハディースには、次の言葉が記されている。
「スラーカ・ビン・マーリグが近づいた時、アッラーのみ使いは、彼に罰を与えるよう祈った。
すると、彼の馬は腹部まで地面に沈みこんでしまった。
スラーカは、馬からとびおり、次のように言った。
「ムハンマドよ、あなたがたがこのようにしたことは、私には十分わかっています。
アッラーに、私をこの落ちこんだ所から助けて下さるよう祈って下さい。
私は、あなたのことを、私のあとから捜しにやってくる者らに秘密にしてもらさないことを誓います。
これは、私の矢筒です。
ここから、矢を一本とってもって行って下さい。
そして、しかじかの場所に私のラクダや奴隷がいますから、そこを通る時、この矢を見せ

て必要なだけそれらを取って行って下さい」と言った。
それに対しみ使いは、「私には、お前のラクダは必要でない」と言われた。
私たちは、夜、マディーナに着いた。
人々は、どこにみ使いが滞在なさるべきかについて言い争ったが、み使いは、祖父アブドル・ムッタリブの母方に関係あるナッジャール族の処に滞在することにして、彼らに名誉をお与えになった。
その折には、男たちも女たちも家々の屋根に登り、また、少年たちや召使いたちは道々に散らばって「ムハンマドよ！　アッラーのみ使いよ！　ムハンマドよ！アッラーのみ使いよ！」と口々に叫んで歓迎した。

注釈の書

タイトルなし

ハンマーム・ビン・ムナッビフは伝えている

アブー・フライラはアッラーのみ使いのハディースを数多く伝えているが、次もその一つである。

アッラーのみ使いは言われた。

「イスラーイール族の者らは『この門で拝礼しながら入り、“罪をお許し下さい（ヒッタ（注））”と唱えよ！

そうすればお前たちの罪は許されよう』と告げられたが、彼らはその言葉を言い換え、尻をひきずるようにもたもた進みながら、“髪の毛の中の穀粒（ハッバ）”と言いながら、その門に入ることだろう」

（注）ヒッタには“救済、救助”、ハッバには“穀粒”の意味がある

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーは、アッラーのみ使いの死の直前から死に至る間に啓示をつづけてお下しになった。

み使いが、逝去された日には、特に多くの啓示が下された。

ターリク・ビン・シハーブは伝えている

或るユダヤ人が、ウマルに「あなたたちが、読んでいる御言葉が我々に関連して啓示された御言葉であるならば、我々は、それが啓示された日を祝日としたい」と言った。

この折、ウマルは、次のように言った。

「私は、その御言葉が啓示された場所、啓示された日、啓示された時アッラーのみ使いがどこにおられたかなどを知っている。

その御言葉はアラファートの日（ズール・ヒッジャ月九日）に啓示されたのである。

み使いが、アラファートにおられた時である」

スフヤーンは、これに関連し、「その日が金曜日であったのかどうか疑問である。

なお、その御言葉とは**「今日われはあなたがたのために、あなたがたの宗教を完成し、またあなたがたに対するわれの恩恵を全うした」**（クルアーン第 5 章 3 節）である」と述べている。

ターリク・ビン・シハーブは伝えている

或るユダヤ人がウマルに次のようにいった。

「もしも我々ユダヤ人のために、この御言葉、即ち、**「今日われはあなたがたのために、あなたがたの宗教を完成し、またあなたがたに対するわれの恩恵を全うし、あなたがたのための教えとして、イスラームを選んだのである」**（クルアーン第５章３節）が啓示されたのであれば、その日を祝日としたい」と言った。

これに対しウマルは、「私は、この御言葉が啓示された日や啓示された時間、更に啓示された時、アッラーのみ使いがおられた場所を知っている。

それが啓示されたのは金曜日の夜のことで、私たちはその時、み使いと共にアラファートに滞在していた」と述べた。

ターリク・ビン・シハーブは伝えている

或るユダヤ人が、ウマルを訪ねてきて、「信者の長よ！

あなたたちが読む聖典の或る御言葉が、我々ユダヤの民に関連して啓示されたのであれば、その啓示された日を我々は祝日としたい」と言った。

ウマルが、「どの御言葉のことですか」と聞くと、彼は「**「今日われはあなたがたのために、あなたがたの宗教を完成し、あなたがたに対するわれの恩恵を全うし、あなたがたのための教えとして、イスラームを選んだのである」**（クルアーン第５章３節）という啓示です」と答えた。

ウマルは、その時、「私は、この御言葉が啓示された日や啓示された場所を知っています。

これは、アッラーのみ使いに、金曜日にアラファートで啓示されたのです」と言った。

ウルワ・ビン・ズハイルは伝えている

私はアーイシャにアッラーの御言葉、即ち、**「あなたがたがもし孤児の女たちに対し、公正にしてやれそうにもないならば、あなたがたがよいと思う二人、三人または四人の女を娶れ」**（クルアーン第４章３節）について質問した。

これに対し、彼女は次のように答えた。

「私の姉妹の息子よ、孤児の女とは、親権者の保護下にある者のことです。

彼女が親権者と財産を共有しており、その彼女分の財産や彼女の美しさが親権者の魅力となっているため、親権者が、彼女に正当な財産の分け前を与えようとせず、また、当然、支払うべきものをも支払おうとせずに、彼女を結婚させようとしている場合、アッラーは、そのような状態下にある孤児の女たちと結婚することを禁じられたのです。

ただし、彼女らのために財産の正当な分割が行なわれ、婚資も十分に準備される場合は別です。

アッラーは、このような状態下にある孤児の女以外の女性らと、それぞれ好みに応じて結婚するようお命じになったのです」

（アーイシャはつづけて語った）

「人々は、孤児の女についての御言葉が下されたあと、アッラーのみ使いに訓示を求めだしたが、そのアッラーの御言葉とは「かれらは女のことで、あなたに訓示を求める。

言ってやるがよい。

アッラーは、彼女らに関しあなたがたに告げられる。

また啓典の中でも、**「あたながたが所定のものを与えず、娶ろうと欲する女の孤児に関し、あなたたちに読みきかせておられる」**第 4 章 127 節）という啓示です。

アッラーの御言葉、「啓典の中でも読みきかせておられる」という意味はアッラーの最初の部分の御言葉**「あなたがたがもし孤児の女たちに対し、公正にしてやれそうにもないならば、あなたがたがよいと思う二人、三人または四人の女を娶れ」**（第 4 章 3 節）を意味します。

また、アッラーの他の御言葉、即ち**「娶ろうと欲する女の孤児」**（第 4 章 127 節）とは、親権者の保護下にあり、僅かな財産しかなく、美しさの点でも落ちる孤児のことです。

これらの孤児の女との結婚は、彼女らの財産、美しさのどれを望んだものであったにしろ、彼女らには、男性側の欲望に対して不利な面があるだけに、公正でないかぎり禁じられるのです」

ウルワは伝えている

彼は、アーイシャに、アッラーの御言葉、**「あなたがたがもし孤児の女たちに対し、公正にしてやれそうにもないならば」**（クルアーン第 4 章 3 節）について質問した。

以下は、前記ハディースと同内容であるが、これには「彼女らは、財産面でも美しきの面でも欠けるところがあるため、男性側の欲望に対しては不利である」という言葉がみられる。

アーイシャは語っている

アッラーの御言葉、**「あなたたちがもし孤児の女たちに対し、公正にしてやれそうにもないならば」**（クルアーン第4章3節）は、或る孤児の少女を世話し、彼女の親権者及び彼女の遺産相続人となっている男に関連して啓示された。

その彼女は、財産はあったが彼女自身以外に財産管理について、相談できる者は誰もいなかった。

彼女の親権者は、彼女のその財産故に彼女を結婚させず、しかも彼女を打ち、虐待していた。

この彼女に関連し、アッラーは**「あなたがたがもし孤児の女たちに対し、公正にしてやれそうにもないならば、あなたがたがよいと思う二人、三人または四人の女を娶れ」**（第 4 章 3 節）と啓示され、「このようなことをあなたたちのため合法としてやった。

それ放、あなたたちは、女たちを打つようなことをしてはならない」と言われたのである。

アーイシャは語っている

アッラーの御言葉、**「また啓典の中でも、あなたがたが所定のものを与えず、娶ろうと欲する女の孤児に関し、あなたたちに読みきかせておられる」**(クルアーン第 4 章 127 節)は、一人の孤児の女に関して啓示されたものである。

彼女は、或る男の保護下にあり、その男と財産を共有していたが、その男は彼女との結婚を望んでおらず、また、彼女が他の男と結婚することも嫌っていた。

それは、彼女の夫になる者と財産を共有することになるのを恐れたからで、そのため彼女の結婚を禁じていたのである。

そのような次第で、彼は自分では彼女と結婚しようとはせず、また、彼女を他の男とも結婚させようともしなかったのである。

アーイシャは語っている

アッラーの御言葉、「かれらは、女のことで、あなたに訓示を求める。言ってやるがよい。**「アッラーは、かの女らに関しあなたがたに告げられる」**(クルアーン第 4 章 127 節)は、或る男の保護下にある一人の孤児の女に関して啓示されたものである。

彼女は、その男と財産をなつめやしの木の一本に至るまで共有していた。

その男は、彼女が結婚すると財産が彼女の夫との共有になることを恐れて、彼女を結婚させようとしなかった。

そのために、彼女は結婚もできない状態であった。

アーイシャは語っている

アッラーの御言葉、**「また、貧乏ならば(後見のために)適切に使いなさい」**(クルアーン第 4 章 6 節)は、孤児の財産の後見人に関して啓示されたものである。

後見人は、孤児に対し責任をもち面倒をみなければならないが、もし貧困者であれば、孤児の財産の一部を使うことは許される。

アーイシャは語っている

アッラーの御言葉、**「(後見者が)金持ならば抑制してこれに手を触れてはならない。また貧乏なら(後見のために)適切に使いなさい」**(クルアーン第 4 章 6 節)は、孤児の後見人に関連して啓示されたものである。

後見人が貧乏である場合、孤児の財産を、その程度に応じて、適切に使うことは許される。

前記と同内容のハディースは、**ヒシャーム**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アーイシャは伝えている

アッラーの御言葉、**「見るが言い。かれらは、あなたがたの上からまた下から襲ってきた。その時目はかすみ、心臓は喉もとまで届いた」**（クルアーン第 33 章 10 節）は、ハンダク（塹壕）の戦いの日に関連して啓示されたものである。

アーイシャは語っている

「もし女が、その夫から虐待され、忌避される心配があるとき」（クルアーン第 4 章 128 節）は、或る男のもとで伴侶として長く暮した女に関連して啓示された。
その女性の夫が彼女を離婚しようとした時、彼女は夫に、「私を離婚しないで下さい。
家に置いて下さい。
あなたは、私に構わず自由になにをなさっても構いませんから」と言った。
この御言葉は、この折、啓示されたのである。

アーイシャは語っている

アッラーの御言葉、**「もし女が、その夫から虐待され、忌避される心配があるとき」**（クルアーン第 4 章 128 節）は、或る男と暮していた女に関連して啓示された。
その男は、恐らく、彼女との関係をつづけることを願っていないが、彼女は、その男を伴侶とし子供までいるため離婚を嫌い、そのため彼に「あなたは、私のことは、気にしなくても結構です。
（即ち、あなたが、別の女を妻にすることを認めます）」と述べた。

ヒシャームは、彼の父（ウルワ）から聞いて伝えている

アーイシャは私（ウルワ）に「私の姉妹の息子よ、信者たちは、預言者の教友（注）に許しを求めるよう命じられているのに、かえって、彼を非難している」

（注）カリフ・ウスマーンに対するエジプトの叛徒たちの言動を耳にした時、アーイシャが述べた言葉と言われる

ヒシャームによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

サイード・ビン・ジュバイルは伝えている

クーファの人々の間には、次の聖句**「だが信者を故意に殺害した者に対する応報は地獄である」**（クルアーン第 4 章 93 節）に関して意見の対立がみられた。
それ故、私はイブン・アッバースを訪ねて、この問題について質問した。
その折、彼は「その件に関して、他に啓示された御言葉はない。
それ故、この御言葉の通りであり変更はない」と語った。

前記と同内容のハディースは、**シュウバ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

サイード・ビン・ジュバイルは伝えている

アブドル・ラフマーン・ビン・アブザーは、私に、次の二つの聖句について、イブン・アッバースに意見を聞くよう命じた。

それで、この中の一つ「**だが信者を故意に殺害した者は、その応報は地獄で、かれは永遠にその中に住むであろう**」（クルアーン第 4 章 93 節）に関して私が質問すると、イブン・アッバースは「なにも廃棄されていない。（御言葉は有効である）」と答えた。

二つ日の聖句「**アッラーとならべて、ほかのどんな神にも祈らない者、正当な理由がないかぎり、アッラーが禁じられた殺生を犯さない者（これら以外の者らは、懲罰される）**」（第 25 章 68 節）についての質問に対しては、彼は「これは多神教徒らに関連して啓示された」と語った。

イブン・アッバースは伝えている

次の御言葉、即ち「**（慈悲深き御方のしもべたちは）アッラーとならべて、ほかのどんな神も祈らない者、正当な理由がないかぎり、アッラーが禁じられた殺生を犯すことなく、また、姦淫しない者である。**

だがおよそそんなことをする者は、懲罰される。

復活の日には懲罰は（罪に応じ）倍加され、その（地獄で）屈辱のうちに永遠に住むであろう」（クルアーン第 25 章 68-69 節）はマッカで啓示された。

この時、多神教徒らは、「イスラームは、我々の助けにはならない。

なぜなら、我々はアッラーと同等者をおいて崇めているし、アッラーが禁じる殺人罪を犯し、また、放蕩堕落している」と言った。

この折、アッラーは、次の啓示を下された。

「悔悟して信仰し、善行に励む考は別である。

アッラーはこれらの者の、いろいろな非行を変えて善行にされる。

アッラーは寛容にして慈悲深くあられる」（第 25 章 70 節）イブン・アッバースは、これに関連し、「イスラームに改宗しその教えを理解した者が、殺人罪を犯した場合には、悔悟しても許されない」と語った。

サイード・ビン・ジュバイルは語っている

私は、イブン・アッバースに「信仰者を意図的に殺害した者の懺悔は、受け入れられますか」と聞いた。

彼が「いや、受け入れられない」と答えたので、私は、彼のためにクルアーン識別章の次の聖句、即ち、「**（慈悲深さ御方のしもべたちは）アッラーとならべて、ほかのどんな神にも祈らない者、正当な理由がないかぎり、アッラーが禁じられた殺生を犯すことなく、また、**

姦淫しない者である。
だがおよそそんなことをする者は、懲罰される」（第 25 章 68 節）を読んだ。
すると彼は「それは、マッカで啓示された聖句である。
後にマディーナで啓示された聖句、即ち**「だが信者を故意に殺害した者は、その応報は地獄で、かれは永遠にその中に住むであろう」**（第 4 章 93 節）によって廃棄された」と語った。
口述者の一人イブン・ハーシムによるハディースには「私（サイード）は、彼のためクルアーン識別章の次の聖句、即ち**「悔悟して信仰し、善行に励む者は別である。**
アッラーはこれらの者の、いろいろな非行を変えて善行にされる。
アッラーは寛容にして慈悲深くあられる」（第 25 章 70 節）を読んだ」と記されている。

ウバイドッラー・ビン・アブドッラー・ビン・ウトバは伝えている
イブン・アッバースは、私に「クルアーン全体の中で、最後に啓示された聖句について知っていますか。
（もしくは、どれかわかりますか）」と言った。
私がそれに対し、「はい、それは**「アッラーの援助と勝利がきて、人々が群れをなしてアッラーの教えに入るのをみたら、あなたの主の栄光をはめたたえ、また、御赦しを請え。**
本当にかれは、度々赦される御方である」（第 110 章 1-3 節）です」と答えると、彼は「その通りです」と言った。
なお口述者の一人イブン・アブー・シャイバの伝えるハディースには、「最後に啓示された聖句について」という言葉は見られない。

前記と同内容のハディースは、**アブー・ウマイス**によっても別の伝承者経路で伝えられるが表現上二、三異同が見られる。

イブン・アッバースは伝えている
或るムスリムたちは、僅かばかりの羊の群をつれた一人の男に出会った。
彼は「アッサラーム・アライクム（あなたたちに平安を！）」と挨拶したのであるが、ムスリムたちは彼を捕えて殺害し、彼の羊たちを横領した。
これに関連して、次の聖句**「あなたがたに挨拶する者にむかって「あなたがたは、信者ではない」といってはならない」**（クルアーン第 4 章 94 節）が啓示された。

アブー・イスハークは伝えている
私は、バラーウが次のように語るのを聞いた。
「アンサールの者たちは、巡礼を終えて帰ると、家には裏口から入った。
アンサールの或る男は表門から入ろうとした時、そのことを注意された。

これに関連し、次の聖句**「また、あなたがたが、自分の家の裏口から入るのは善行ではない」**（クルアーン第 2 章 189 節）は啓示された」

クルアーン鉄章 16 節について

イブン・マスウードは伝えている

私たちは、イスラームを受け入れ信仰しているが、アッラーは、次の聖句で私たちにその苛立ちを示しておられる。

それは**「本当に信仰するならば、アッラーの教訓に、また、啓示された真理に、心を虚しくして順奉する時が、まだやってこないのか。**

以前に啓典を授かっていながら、(寛容の時が)延ばされて、心が頑固になった者のようであってはならないのではないか。

かれらの多くは、アッラーの掟に背く者たちである」(クルアーン第 57 章 16 節)という御言葉であるが、これが啓示されたのは入信後四年もたってからである。

クルアーン高壁章 31 節について

イブン・アッバースは伝えている

イスラーム以前の時代、女たちはカーバ神殿まわりを裸身のままでタワーフ(巡回)した。

そして「カーバ神殿をタワーフする時秘所を覆うための衣服を提供してくれる者はいませんか」と言い、そのあと「今日も、身体の一部または全部を露出することになるが、そのように　露出するのは許されることではありません」と言った。

このことに関連し、次の聖句**「どこのモスクでも清潔な衣服を身体につけなさい」**(クルアーン第 7 章 31 節)が啓示された。

クルアーン御光章 33 節について

ジャービルは伝えている

アブドッラー・ビン・ウバイー・ビン・サルールは、常々、彼の奴隷女に「行って売春を行ない、なにかを稼いでこい」と命じていた。

アッラーは、これに関連して、次の聖句**「奴隷の娘たちが、貞操を守るよう願うならば、現世のはかない利徳を求めて醜業を強制してはならない。**

かの女らが、もしも誰かに強制されたなら、アッラーはやさしく罪を赦し、いたわって下さろう」（クルアーン第 24 章 33 節）を啓示なさった。

ジャービルは伝えている

アブドッラー・ビン・ウバイー・ビン・サルールは、二人の奴隷女を所有していた。

その中の一人は、ムサイカとよばれ、別の一人は、ウマイマという名前だった。

彼は、彼女ら二人に売春を強制していた。

二人は、そのことを預言者に訴えた。

これに関連して、次の聖句**「奴隷の娘たちが、貞操を守るよう願うならば、現世のはかない利徳を求めて醜業を強制してはならない。**

かの女らが、もしも誰かに強制されたならば、アッラーはやさしく罪を赦し、いたわって下さろう」（クルアーン第 24 章 33 節）が啓示された。

クルアーン夜の旅章 57 節について

アブー・マアマルは伝えている

アブドッラー・ビン・マスウードは聖句**「かれらの祈っている者たちは、主に接近することを願っている。**
たとえ主の間近にいる者でも、主の慈悲を待望してその懲罰を恐れている」（クルアーン第 17 章 57 節）について、次のように語った。
「ジン（精霊）の或るグループがイスラームに改宗した。
しかし、彼らは以前から人々に崇拝されていたが、その彼らがイスラームに改宗した後でも、人々は彼らを崇拝しつづけていた」

アブー・マアマルは伝えている

アブドッラー・ビン・マスウードは、聖句**「かれらの祈っている者たちは、主に接近することを願っている」**（クルアーン第 17 章 57 節）について、次のように語った。
「或る人々は、かつて、二群のジンを崇拝していたが、そのジンたちは、イスラームに改宗した。
しかし、人々は彼らへの崇拝を以前と同じようにつづけた。
そのため、聖句**「かれらの祈っている者たちは、主に接近することを願っている」**（第 17 章 57 節）が啓示されたのである。

前記と同内容のハディースは、**スライマーン**によっても、別の伝承者経路で伝えられている

アブドッラー・ビン・ウトウバは伝えている。

アブドッラー・ビン・マスウードは、聖句**「かれらの祈っている者たちは、主に接近することを願っている」**（クルアーン第 17 章 57 節）に関し、次のように語った。
「これは、ジンの一群を崇拝していたアラブの或る人々に関連して啓示された。
ジンたちは、イスラームに改宗したが、彼らを崇拝していた人々は、アッラーこそ唯一の崇拝さるべき御方であることに気づいてなかった。
そのために**「かれらの祈っている者たちは、主に接近することを願っている」**（第 17 章 57 節）が啓示されたのである」

クルアーン悔悟章、戦利品童、集合章について

サイード・ビン・ジュバイルは伝えている

私は、イブン・アッバースに悔悟章の意味にいて質問した。

彼は「悔悟章ですが、それは、不信仰者や偽信者の面目を失わせ、自尊心を傷つけるための章です。

ここには“彼らの（ミンフム）、彼らの（ミンフム）”という、それが、彼らの状態であることを示す言葉が、繰り返し啓示されています。

実際、その中では、誤まちを批難されてない者は、誰もいないとさえ思われるほどです」と言った。

私は、また、「戦利品章についてはどう思いますか」と聞いた。

彼はそれに対し、「あれは、バドルの戦役に関しての章です」と言い、私が更に「集合章」について聞くと、「それは、ナディール族に関して啓示されたものです」と答えた。

酒を禁ずることに関して

イブン・ウマルは伝えている

ウマルはアッラーのみ使いが用いた説教壇（ミンバル）で説教を行ない、先ず、アッラーを讃美し賞揚してから次のように語った。

「さて注意しなさい！

酒の禁止についての命令が啓示された当時、酒は次の五種の物、即ち、小麦、大麦、なつめやしの実、干しぶどう、蜂蜜から作られていました。

酒は、知性を曇らせるものです。

次の三つの件については、人々よ、私はアッラーのみ使いが、より詳しく知識を与えて下さればと願っていました。

それらは、祖父の遺産相続及び全く身寄りがなく子供のない者の遺産相続の問題、更に、利子に関する或る種の問題などです」

イブン・ウマルは伝えている

私は、ウマル・ビン・バッターブがアッラーのみ使いのミンバル（説教壇）に登り、次のように説教するのを聞いた。

「さて、人々よ、酒の禁止に関し啓示が下されたが、酒は、当時、次の五種の物から作られていた。

即ち、ぶどうなつめやしの実、蜂蜜、小麦、大麦などである。

酒は人の知識を曇らせるものです。

人々よ、次の三種に関しては、アッラーのみ使いが、より詳しく、私たちに説明して下さることを願っていました。

それは、祖父の遺産相続及び身寄りや子供を一切残さず死んだ者たちの遺産相続の問題、それに利子に関連する或る種の問題についてです」

前記と同内容のハディースは、**アブー・ハイヤーン**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

クルアーン巡礼章 19 節について

カイス・ビン・ウバードは語っている

私は、アブー・ザッルが誓言して、聖句**「これら両者は、かれらの主について論争する敵手である」**（クルアーン第 22 章 19 節）は、バドルの戦いの日に参加した人々に関連して啓示されたと述べるのをきいた。

それらの人々は、ムスリム側では、ハムザ、アリー、ウバイダ・ビン・ハーリスなどであり、マッカの不信仰者側では、ラビーアの二人の息子ウトゥバ及びシャイバ、ワリード・ビン・ウトゥバなどであった。

カイス・ビン・ウバードによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

第３巻　目次

統治の書

狩猟、屠殺動物食用動物についての書

犠牲の書

飲み物の書

衣服と装飾に関する書

礼儀の書

挨拶の書

正しい言葉使いの書

詩の書

夢の書

功徳の書

教友達の美徳の書

善行と親戚縁者関係と行儀の書

定命の書

知識の書

ズィクルの書

天国の書

フィタン及び最後の時の書

ズフド及びラカーイクの書

注釈の書